富士市埋蔵文化財調査報告　第 59 集

静岡県　富士市

伝法 中原古墳群

2016 年 3 月

富士市教育委員会

中原第 4 号墳　出土遺物集合

巻頭図版　2

中原第４号墳　石室床面遺物出土状況（南から）

中原第４号墳　周溝・石室検出状況（南から）

中原第４号墳　石室右（西）側壁（南から）

中原第 4 号墳　出土遺物集合（武器）

中原第４号墳出土　大刀（418）　銀象嵌鍔

中原第４号墳出土　剣（421）　銀象嵌鍔

中原第４号墳　石室床面中央から奥壁側（A・B・C エリア）遺物出土状況（南から）

巻頭図版　6

中原第 4 号墳出土　鉄鏃束（568）

中原第 4 号墳出土　鉄鏃束（569）

中原第 4 号墳　石室床面奥壁前左隅（A エリア）遺物出土状況（南から）

中原第４号墳　出土遺物集合（馬具）

中原第４号墳　石室床面奥壁前（A エリア）遺物出土状況（南から）

中原第 4 号墳　石室床面中央やや奥壁寄り（B エリア）大刀（418）、玉類出土状況（南から）

中原第４号墳　出土遺物集合（装身具）

中原第４号墳　石室床面中央より開口部側（D・E・F エリア）遺物出土状況（北から）

中原第４号墳　石室床面中央やや開口部寄り（D エリア）遺物出土状況（西から）

中原第４号墳　石室床面中央より開口部側（D・E・F エリア）遺物出土状況（須恵器横瓶 655 除去後）

中原第４号墳　出土遺物集合（農工具、鍛冶具・生産用具等）

中原第４号墳　出土遺物集合（土器）

中原第３号墳　石室第１次床面（南から）

中原第 3 号墳　出土遺物集合

中原第 5 号墳　石室第 1 次床面全景（南から）

例　言

1　本書は静岡県富士市伝法字中原 470-2 外 15 筆において実施した中原第 3 号墳、中原第 4 号墳の発掘調査および、富士市伝法字中原 517 外 8 筆において実施した中原第 5 号墳、中原第 6 号墳の発掘調査にかかわる報告書である。

2　調査は、倉庫及び事務所の建設工事（中原第 3 号墳、中原第 4 号墳）、広見公園駐車場整備および調整池造成工事（中原第 5 号墳、中原第 6 号墳）に伴い、富士市教育委員会が実施した。

3　現地調査は以下の体制で行われた。

中原第 3 号墳、中原第 4 号墳

（確 認 調 査）　期間：平成 4 年（1992）4 月 14 日～ 4 月 28 日

（本発掘調査）　期間：平成 4 年（1992）5 月 25 日～ 7 月 31 日

担当：中尾 欣司（文化振興課指導主事）、前田 勝己（同主事）

中原第 5 号墳、中原第 6 号墳

（確 認 調 査）　期間：平成 5 年（1993）5 月 25 日～ 6 月 10 日

担当：佐野 誠一（文化振興課係長）、前嶋 秀張（同指導主事）

（本発掘調査）　期間：平成 6 年（1994）5 月 16 日～ 7 月 12 日

担当：渡井 義彦（文化振興課主査）、前田 勝己（同主事）、久保田 伸彦（同主事）

4　本報告書刊行のための整理作業は平成 25 年（2013）に開始した。佐藤 祐樹（文化振興課上席主事）が担当し、平成 28 年（2016）3 月 31 日、本書の刊行をもって終了した。

5　本書の編集は佐藤が担当し、若林 美希（文化振興課臨時職員）が補佐した。

執筆は、第 1 章、第 3 章、第 5 章を佐藤が、第 2 章を若林が担当した。

また、第 4 章では、藤村 翔（富士市立博物館：第 2 節）、田村 隆太郎（静岡県埋蔵文化財センター：第 3 節）、田村 朋美（奈良文化財研究所:第 4 節）、戸根 比呂子（加賀市教育委員会:第 5 節）、大谷 宏治（静岡県埋蔵文化財センター:第 6 節）、菊池 吉修（静岡県教育委員会:第 7 節）、鈴木 一有（浜松市文化財課:第 8 節）、和田 達也（浜松市文化財課:第 9 節）の各氏に玉稿を賜り、第 1 節、第 10 節は佐藤が執筆した。

6　現地調査における記録写真は、各調査担当者が撮影した。

整理作業における遺物写真は、杉本 和樹（西大寺フォト）、佐藤が撮影した。また、玉類のマイクロスコープ写真は、田村 朋美の撮影による。撮影分担については図版目次に記す。

7　調査の記録、出土遺物は富士市教育委員会（市民部文化振興課）が保管している。今後、出土遺物は富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）に移管し、展示・公開する予定でいる。

8　発掘調査および本書の作成にあたり、次の方々にご協力とご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

井口 智博、井鍋 誉之、岩原　剛、植松 章八、植山 英史、大森 信宏、大谷 宏治、川西 啓喜
菊池 吉修、草野 潤平、佐々木 憲一、鈴木 一有、田村 朋美、田村 隆太郎、坪井 理恵
戸根 比呂子、土生田 純之、濱崎 範子、宮代 栄一、和田 達也、渡井 英誉　　（五十音順、敬称略）

凡　例

1　座標は、任意座標を使用した調査であるが、全体図等は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、世界測地系（平成14年4月施行）を使用している。

2　古墳に関わる外部施設、埋葬施設である横穴式石室の各部位は、大谷宏治2010「例言」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第231集　富士山・愛鷹山麓の古墳群』、大谷宏治2003「第1章第3節　用語と須恵器の編年」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会に準拠した。なお、計測位置については下図のとおりとした。

3　石室について、中原第3号墳では2面、中原第5号墳では3面の床面が確認された。本報告では、最下面から順に第1次床面、第2次床面、第3次床面と呼称する。

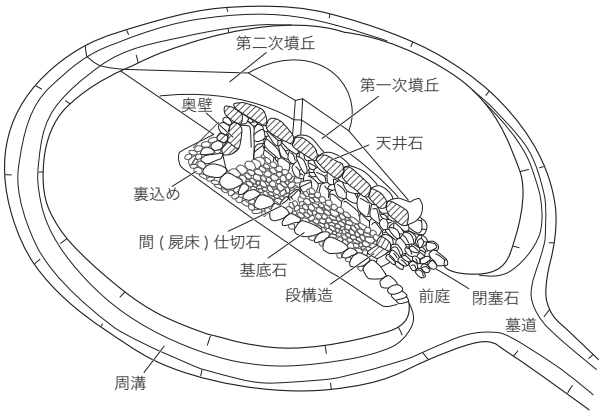
4　土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。

5　須恵器の年代については、主として次の文献に基づいて検討した。

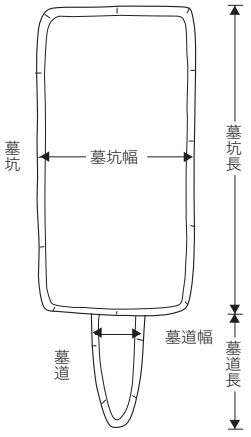
鈴木 敏則　1998「第1章第4節　律令時代土器編年の概要」『梶子北遺跡』遺物編（本文）（財）浜松市文化協会

鈴木 敏則　2004「第5章第2節　静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

・横穴式石室

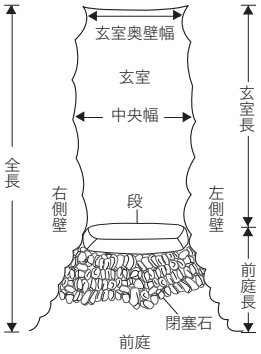


・墓坑の形態



竪穴構造

・石室の形態



有段無袖形

目　次

巻頭図版

例　言
凡　例
目　次

第１章　調査経緯と経過
第１節　発掘調査の経緯と経過 …… 1
第２節　整理作業の経緯と経過 …… 8

第２章　立地と環境
第１節　地理的環境 …… 11
第２節　歴史的環境 …… 12
第３節　伝法古墳群のひろがり …… 14

第３章　調 査 成 果
第１節　中原第３号墳 …… 21
第２節　中原第４号墳 …… 41
第３節　中原第５号墳 …… 117
第４節　中原第６号墳 …… 123

第４章　考　察
第１節　伝法古墳群の展開と地域社会の成立　（佐藤 祐樹）…… 131
第２節　中原４号墳の横穴式石室とその歴史的意義　（藤村　翔）…… 149
第３節　中原４号墳の埋葬と儀礼　（田村 隆太郎）…… 161
第４節　中原４号墳出土ガラス小玉の自然科学的調査　（田村 朋美）…… 175
第５節　中原４号墳出土の玉　（戸根 比呂子）…… 183
第６節　中原４号墳出土刀剣類・馬具の特徴と被葬者の性格　（大谷 宏治）…… 193
第７節　中原４号墳出土鉄鏃について　（菊池 吉修）…… 209
第８節　中原４号墳から出土した生産用具が提起する問題　（鈴木 一有）…… 221
第９節　中原４号墳出土須恵器の様相　（和田 達也）…… 249
第10節　中原４号墳出土土師器の様相　（佐藤 祐樹）…… 255

第５章　総　括 …… 260

出土遺物観察表
写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1章　調査に至る経緯と経過

第1節　発掘調査の経緯と経過

第1図　現地説明会の様子 …… 1
第2図　富士市の位置 …… 1
第3図　調査地位置図 …… 3
第4図　中原第3・4号墳　調査地遠景 …… 4
第5図　中原第3・4号墳　確認トレンチ・本調査区配置図 …… 4
第6図　中原第3・4号墳　本調査区全体図 …… 5
第7図　中原第5・6号墳　確認トレンチ・本調査区配置図 …… 6
第8図　中原第5・6号墳　本調査区全体図 …… 7

第2節　整理作業の経緯と経過

第9図　調査指導の様子（1） …… 9
第10図　調査指導の様子（2） …… 9
第11図　研究会の様子（1） …… 9
第12図　研究会の様子（2） …… 9
第13図　遺物写真撮影の様子 …… 10

第2章　立地と環境

第1節　地理的環境

第14図　駿河湾上空から富士市を望む …… 11
第15図　周辺地形図 …… 11

第2節　歴史的環境

第16図　東駿河の古墳群分布図 …… 12
第17図　潤井川東岸遺跡分布図 …… 13

第3節　伝法古墳群のひろがり

第18図　伝法古墳群航空写真 …… 16
第19図　伝法古墳群分布図 …… 17

第3章　調査成果

第1節　中原第3号墳

第20図　測量図 …… 21
第21図　周溝平面図・断面図 …… 22
第22図　周溝内遺物出土状況図 …… 22
第23図　周溝内出土遺物実測図 …… 23
第24図　石室展開図 …… 25
第25図　石室平面図・断面図 …… 26
第26図　石室基底石・基底石据え方・墓坑実測図 …… 27
第27図　石室遺物出土状況図（第2次床面） …… 28
第28図　石室遺物出土状況図（第1次床面） …… 28
第29図　第1次床面の遺物出土状況 …… 29
第30図　石室エリア区分図 …… 29
第31図　遺物出土状況図・出土遺物一覧図（Aエリア） …… 30
第32図　遺物出土状況図・出土遺物一覧図（Cエリア） …… 31
第33図　Cエリアの遺物出土状況 …… 31
第34図　Dエリアの遺物出土状況 …… 31
第35図　遺物出土状況図・出土遺物一覧図（Dエリア） …… 32
第36図　遺物出土状況図・出土遺物一覧図（Eエリア） …… 33
第37図　出土した遺物 …… 34
第38図　石室出土遺物一覧図 …… 34
第39図　耳環実測図 …… 35
第40図　大刀実測図 …… 36
第41図　小刀実測図 …… 37
第42図　大刀（9） …… 37
第43図　鉄鏃実測図1 …… 38
第44図　鉄鏃実測図2 …… 39
第45図　刀子実測図 …… 40
第46図　須恵器実測図 …… 40

第2節　中原第4号墳

第47図　検出時の状況 …… 41
第48図　測量図 …… 42
第49図　周溝平面図・断面図 …… 43
第50図　周溝内出土遺物実測図 …… 43
第51図　石室の段構造部分（北から） …… 44
第52図　石室断面図 …… 44
第53図　石室平面図・断面図 …… 45
第54図　石室展開図 …… 46
第55図　石室前壁平面図・断面図 …… 47
第56図　石室基底石・基底石据え方・墓坑実測図 …… 48
第57図　石室基底石と墓坑（南から） …… 49
第58図　石室エリア区分図 …… 50
第59図　石室床面の遺物出土状況 …… 50
第60図　石室遺物出土状況図 …… 52
第61図　遺物出土状況図・出土遺物一覧図（Aエリア） …… 53
第62図　遺物出土状況図（B・Cエリア） …… 54
第63図　出土遺物一覧図（B・Cエリア） …… 55
第64図　遺物出土状況図（D・E・Fエリア） …… 56
第65図　出土遺物一覧図（D・E・Fエリア） …… 57
第66図　骨粉・歯出土状況図 …… 59
第67図　石室北側の遺物出土状況 …… 60
第68図　装身具出土状況図・一覧図 …… 61
第69図　装身具出土状況詳細図（Bエリア） …… 62
第70図　装身具出土状況詳細図（Bエリア・種類別） …… 63
第71図　武器出土状況図・一覧図 …… 64
第72図　農工具出土状況図・一覧図 …… 65
第73図　石室奥壁付近の遺物出土状況 …… 66
第74図　石室左側壁付近の遺物出土状況 …… 66
第75図　石室中央の遺物出土状況 …… 66
第76図　鍛冶具・生産用具等出土状況図・一覧図 …… 67
第77図　馬具出土状況図・一覧図 …… 68
第78図　土器出土状況図・一覧図（坏類） …… 70
第79図　土器出土状況図・一覧図（坏類以外） …… 71
第80図　出土土器接合関係図1 …… 72
第81図　出土土器接合関係図2 …… 73
第82図　出土土器接合関係図3 …… 74
第83図　出土土器接合関係図4 …… 75
第84図　出土土器接合関係図5 …… 76
第85図　出土した遺物 …… 77
第86図　石室出土遺物一覧図 …… 79
第87図　勾玉実測図1 …… 81
第88図　勾玉実測図2 …… 82
第89図　管玉実測図 …… 83
第90図　切子玉・棗玉・臼玉実測図 …… 84
第91図　丸玉実測図 …… 85
第92図　小玉実測図1 …… 86
第93図　小玉実測図2 …… 87
第94図　大刀実測図 …… 88
第95図　剣実測図 …… 89
第96図　鉄鏃実測図1 …… 90
第97図　鉄鏃実測図2 …… 91
第98図　鉄鏃実測図3 …… 92
第99図　鉄鏃実測図4 …… 93
第100図　鉄鏃実測図5 …… 94
第101図　鉄鏃実測図6 …… 95
第102図　鉄鏃実測図7 …… 96
第103図　鉄鏃実測図8 …… 97
第104図　砥石・鎌実測図 …… 98
第105図　鍬鋤先実測図1 …… 100
第106図　鍬鋤先実測図2 …… 101
第107図　刀子実測図 …… 102
第108図　鉄斧実測図 …… 103
第109図　鉇・鑿実測図 …… 104
第110図　鉄鉗（605） …… 105

第 111 図　針（607）……105
第 112 図　鉄鉗・鑷子・針実測図 ……105
第 113 図　轡実測図 1 ……106
第 114 図　轡実測図 2 ……107
第 115 図　鐙吊金具実測図 1 ……108
第 116 図　鐙吊金具（613）……109
第 117 図　鐙吊金具（613）……109
第 118 図　鐙吊金具実測図 2 ……109
第 119 図　鐙吊金具復元図 ……110
第 120 図　帯金具・鉸具実測図 ……111
第 121 図　須恵器実測図 ……113
第 122 図　須恵器・土師器実測図 ……115
第 123 図　丸玉実測図 ……116
第 3 節　中原第 5 号墳
第 124 図　測量図 ……117
第 125 図　石室展開図（第 1 次床面）……118
第 126 図　石室平面図・断面図（第 2 次床面）……119
第 127 図　石室平面図・断面図（第 3 次床面）……120
第 128 図　刀子（1）の出土状況……121
第 129 図　石室基底石・基底石据え方・墓坑実測図 ……121
第 130 図　石室遺物出土状況図 ……122
第 131 図　刀子・鉄鏃・須恵器・土師器実測図 ……122
第 4 節　中原第 6 号墳
第 132 図　周溝完掘状況 ……123
第 133 図　石室の残存状況 ……123
第 134 図　測量図 ……124
第 135 図　周溝平面図・断面図 ……125
第 136 図　周溝内出土遺物実測図 ……125
第 137 図　石室平面図・断面図 ……126
第 138 図　石室遺物出土状況図 ……127
第 139 図　馬具（85）の出土状況 ……128
第 140 図　出土遺物一覧図 ……128
第 141 図　大刀実測図 ……128
第 142 図　鉄鏃実測図 ……129
第 143 図　刀子実測図 ……130
第 144 図　帯金具・鉸具実測図 ……130
第 145 図　須恵器実測図 ……130

第 4 章　考察
第 1 節　伝法古墳群の展開と地域社会の成立
第 146 図　伝法古墳群周辺遺跡分布図 ……131
第 147 図　伊勢塚古墳　墳丘実測図・出土遺物実測図 ……132
第 148 図　中村上 1 号墳　石室実測図・出土遺物実測図 ……133
第 149 図　西平 1 号墳　石室実測図・出土遺物実測図 ……134
第 150 図　東平 1 号墳　石室実測図・出土遺物実測図 ……135
第 151 図　国久保古墳　石室実測図・出土遺物実測図 ……136
第 152 図　中原 4 号墳　石室実測図・出土遺物実測図 ……137
第 153 図　横沢古墳　石室実測図・出土遺物実測図 ……138
第 154 図　土手内 1 号墳　石室実測図・出土遺物実測図 ……139
第 155 図　片倉 1 号墳　石室実測図・出土遺物実測図 ……139
第 156 図　高徳坊遺跡・沢東 A 遺跡・沢東 B 遺跡・川窪遺跡 ……141
第 157 図　中桁・中ノ坪遺跡 ……142
第 158 図　東平遺跡・三日市廃寺跡 ……143
第 159 図　古墳と集落の消長 ……145
第 2 節　中原 4 号墳の横穴式石室とその歴史的意義
第 160 図　本書報告の横穴式石室 ……149
第 161 図　閉塞方法の検討（4 号墳）……150
第 162 図　閉塞方法の検討（3 号墳）……151
第 163 図　閉塞方法の類例 ……152
第 164 図　4 号墳構築過程の復元 ……153
第 165 図　伝法古墳群の横穴式石室 ……155
第 166 図　富士山南麓～愛鷹山南西麓の大型石室と中型石室 ……157
第 167 図　6 世紀後葉を中心とした無袖石室の展開 ……158
第 3 節　中原 4 号墳の埋葬と儀礼
第 168 図　石室内の状況と呼称 ……161
第 169 図　埋葬等の復元 ……163
第 170 図　静岡県の切先を奥に向ける刀剣副葬例 ……165
第 171 図　中原 4 号墳の副葬土器群 ……167
第 172 図　駿河の比較例（近い時期・階層の古墳）……169
第 173 図　廻を多く含む副葬土器群（近畿地方の事例）……170
第 174 図　廻を多用する葬送儀礼の土器群 ……171
第 4 節　中原 4 号墳出土ガラス小玉の自然科学的調査
第 175 図　CR 法……176
第 176 図　AR 法……177
第 5 節　中原 4 号墳出土の玉
第 177 図　中原 4 号墳玉類出土状況図 ……183
第 178 図　瑪瑙製勾玉の法量 ……184
第 179 図　碧玉製管玉の法量 ……184
第 180 図　水晶製切子玉の法量 ……184
第 181 図　土製丸玉の法量 ……184
第 182 図　ガラス製小玉の法量 ……184
第 183 図　丸玉・臼玉の地域別材質組成 ……188
第 184 図　ガラス製小玉の地域別材質組成 ……184
第 6 節　中原 4 号墳出土刀剣類・馬具の特徴と被葬者の性格
第 185 図　中原 4 号墳刀剣・馬具出土状況図 ……193
第 186 図　波状 C 字文象嵌鍔の編年的位置と拵えの特徴 ……195
第 187 図　刀剣・馬具の編年的位置 ……196
第 188 図　被葬者と副葬刀剣・馬具との関係 ……197
第 189 図　古墳時代後期～終末期の剣分類 ……200
第 190 図　A ～ C セット馬装の復原 ……202
第 191 図　東駿河における円環轡の種類別出土数 ……203
第 192 図　円環轡の種類別出土数 ……203
第 7 節　中原 4 号墳出土出土鉄鏃について
第 193 図　鉄鏃出土状況 ……209
第 194 図　鉄鏃名称・各部位 ……210
第 195 図　A・B 群出土鉄鏃（初葬鏃）……211
第 196 図　C 群出土鉄鏃（追葬鏃）……212
第 197 図　E・F 群出土鉄鏃（初葬・追葬混在）……212
第 198 図　古墳時代後期前半　鉄鏃の地域色（東海・甲信）……213
第 199 図　方頭と圭頭鏃 ……214
第 200 図　鉄鏃時期 ……215
第 201 図　東駿河・伊豆における鉄鏃出土数 ……217
第 202 図　地域区分 ……217
第 203 図　鉄鏃出土古墳・横穴の埋葬施設面積 ……218
第 204 図　埋葬施設の規模と出土鉄鏃数 ……218
第 205 図　船津寺ノ上 1・谷津原 17 号墳出土鏃の規格性……219
第 8 節　中原 4 号墳から出土した生産用具が提起する問題
第 206 図　生産用具等出土状況図 ……221
第 207 図　鉄鉗の全長比較 ……225
第 208 図　鍛冶具の組成（奈良県五條猫塚古墳例）……226
第 209 図　鍛冶具の分布 ……227
第 210 図　日本列島から出土した鉄鉗の諸例 ……228
第 211 図　朝鮮半島南部から出土した鉄鉗の諸例 ……230
第 212 図　針の諸例 ……232
第 213 図　針の全長比較 ……233
第 214 図　針の分布 ……236
第 215 図　近畿地方中央部における針出土古墳の分布 ……237
第 216 図　針の副葬形態 ……237
第 217 図　藤ノ木古墳から出土した農工具等 ……238
第 218 図　後期古墳における農工具組成 ……239
第 9 節　中原 4 号墳出土須恵器の様相
第 219 図　石室内の須恵器出土状況と呼称 ……249

第 220 図　中原 4 号墳出土須恵器の生産時期 ……250
第 221 図　須恵器（坏以外）の出土高 ……251
第 222 図　胎土の分類とその特徴 ……252
第 223 図　静岡県内出土の把手付碗 ……253
第 10 節　中原 4 号墳出土土師器の様相
第 224 図　中原 4 号墳土師器出土状況図 ……255
第 225 図　潤井川流域の遺跡 ……256
第 226 図　潤井川流域における坏の変遷 ……257
第 227 図　潤井川流域の土器様相 ……258

第 5 章　考察
第 228 図　東駿河における古墳の様相と古代郷里 ……260
第 229 図　東駿河・伊豆における古墳の変遷 ……261

挿表目次

第 2 章　立地と環境
第 3 節　伝法古墳群のひろがり
第 1 表　古墳群名一覧表 …… 15
第 2 表　伝法古墳群一覧表 …… 18

第 3 章　調査成果
第 1 節　中原第 3 号墳
第 3 表　石室遺物出土状況一覧表（第 1 次床面、エリア別）…… 29
第 4 表　石室出土遺物一覧表（種類別）…… 34
第 2 節　中原第 4 号墳
第 5 表　石室エリア別遺物一覧表 …… 51
第 6 表　石室出土遺物一覧表（種類別）…… 78

第 4 章　考察
第 1 節　伝法古墳群の展開と地域社会の成立
第 7 表　時期別にみた竪穴建物数の推移 …… 144
第 8 表　竪穴建物跡の時期一覧 …… 146
第 3 節　中原 4 号墳の埋葬と儀礼
第 9 表　静岡県の切先を奥に向ける刀剣副葬例 …… 165
第 10 表　駿河の 7 世紀初頭以前における馬具副葬古墳の土器群　168
第 4 節　中原 4 号墳出土ガラス小玉の自然科学的調査
第 11 表　蛍光 X 線分析結果一覧 …… 180
第 5 節　中原 4 号墳出土の玉
第 12 表　中原 4 号墳出土の玉 …… 183
第 13 表　ガラス製小玉の分類別数量一覧 …… 187
第 6 節　中原 4 号墳出土刀剣類・馬具の特徴と被葬者の性格
第 14 表　波状 C 字文象嵌鍔の出土古墳一覧 …… 194
第 15 表　古墳時代後期～終末期の剣出土古墳一覧 …… 199
第 7 節　中原 4 号墳出土出土鉄鏃について
第 16 表　東駿河・伊豆の鉄鏃出土古墳 …… 216
第 17 表　鉄鏃多量出土古墳における規格性 …… 219
第 8 節　中原 4 号墳から出土した生産用具が提起する問題
第 18 表　日本列島における鍛冶具出土古墳 …… 229
第 19 表　朝鮮半島南部における鍛冶具出土古墳 …… 231
第 20 表　針出土古墳（1）…… 234
第 21 表　針出土古墳（2）…… 235
第 22 表　後期古墳の副葬農工具と関連資料 …… 240
第 9 節　中原 4 号墳出土須恵器の様相
第 23 表　富士市内の古墳における須恵器の器種組成 …… 254

巻頭図版目次

※［ ］は遺物写真撮影者

巻頭図版　1
中原第 4 号墳　出土遺物集合　［杉本］
巻頭図版　2
中原第 4 号墳　石室床面遺物出土状況（南から）
巻頭図版　3
中原第 4 号墳　周溝・石室検出状況（南から）
中原第 4 号墳　石室右（西）側壁（南から）
巻頭図版　4
中原第 4 号墳　出土遺物集合(武器)　［杉本］
巻頭図版　5
中原第 4 号墳出土　大刀 (418)　銀象嵌鍔　［杉本］
中原第 4 号墳出土　剣 (421)　銀象嵌鍔　［杉本］
中原第 4 号墳　石室床面中央から奥壁側（A・B・C エリア）
遺物出土状況（南から）
巻頭図版　6
中原第 4 号墳出土　鉄鏃束 (568)　［杉本］
中原第 4 号墳出土　鉄鏃束 (569)　［杉本］
中原第 4 号墳　石室床面奥壁前左隅（A エリア）遺物出土状況（南から）
巻頭図版　7
中原第 4 号墳　出土遺物集合(馬具)　［杉本］
中原第 4 号墳　石室床面奥壁前（A エリア）遺物出土状況（南から）
巻頭図版　8
中原第 4 号墳　石室床面中央やや奥壁寄り（B エリア）
大刀（418)、玉類出土状況（南から）
巻頭図版　9
中原第 4 号墳　出土遺物集合(装身具)　［杉本］
巻頭図版　10
中原第 4 号墳　石室床面中央より開口部側（D・E・F エリア）
遺物出土状況（北から）
巻頭図版　11
中原第 4 号墳　石室床面中央やや開口部寄り（D エリア）
遺物出土状況（西から）
中原第 4 号墳　石室床面中央より開口部側（D・E・F エリア）
遺物出土状況（須恵器横瓶 655 除去後）
巻頭図版　12
中原第 4 号墳　出土遺物集合(農工具､鍛冶具･生産用具等)　［杉本］
巻頭図版　13
中原第 4 号墳　出土遺物集合(土器)　［杉本］
巻頭図版　14
中原第 3 号墳　石室第 1 次床面（南から）
巻頭図版　15
中原第 3 号墳　出土遺物集合　［杉本］
巻頭図版　16
中原第 5 号墳　石室第 1 次床面全景（南から）

写真図版目次

※［ ］は遺物写真撮影者

PL.1　中原第３号墳　調査
1．石室第２次床面全景（南から）
PL.2　中原第３号墳　調査
1．調査地全景（調査前、北から）
2．検出状況（北から）
3．第２次床面鉄製品（23・25・81・107）出土状況
4．第２次床面鉄製品（13）出土状況
5．周溝・石室検出状況（南から）
PL.3　中原第３号墳　調査
1．石室封鎖部（北から）
2．石室封鎖部
PL.4　中原第３号墳　調査
1．第１次床面（南から）
PL.5　中原第３号墳　調査
1．第１次床面中央右側壁寄り（C エリア）
大刀（9）他遺物出土状況
2．第１次床面中央左側壁寄り（D エリア）
小刀（10）、提瓶（108）他遺物出土状況
PL.6　中原第３号墳　調査
1．石室左（東）側壁（南から）
2．石室右（西）側壁（南から）
PL.7　中原第３号墳　調査
1．基底石
2．奥壁（南西から）
3．前壁（北から）
4．周溝と墓坑（南から）
PL.8 ～ 12　中原第３号墳　遺物
PL.8　1・2・108［杉本］ 3 ～ 6［佐藤］
PL.9　7・8［佐藤］ 9・10［杉本］
PL.10・12［佐藤］
PL.13　中原第４号墳　調査
1．確認調査の様子（5Tr、東から）
2．石室検出状況（5Tr、東から）
3．確認調査　須恵器出土状況
4．本調査風景（北から）
5．周溝・石室検出状況（南から）
PL.14　中原第４号墳　調査
1．石室床面遺物出土状況（南から）
PL.15　中原第４号墳　調査
1．石室床面中央から奥壁側（A・B・C エリア）遺物出土状況（南から）
2．石室床面奥壁前（A エリア）遺物出土状況（南から）
PL.16　中原第４号墳　調査
1．石室床面中央やや奥壁寄り（B エリア）
大刀（418）、玉類出土状況（南から）
2．石室床面中央右側壁寄り（C エリア）
大刀（419）、剣（421）他遺物出土状況（東から）
PL.17　中原第４号墳　調査
1．石室床面中央より開口部側（D・E・F エリア）
遺物出土状況（須恵器横瓶 655 除去後）
2．石室床面中央やや開口部寄り（D エリア）遺物出土状況（西から）
PL.18　中原第４号墳　調査
1．石室床面開口部左側壁寄り（E エリア）遺物出土状況（西から）
2．石室床面開口部右側壁寄り（F エリア）
須恵器横瓶（655）出土状況
PL.19　中原第４号墳　調査
1．床面全景（遺物取り上げ後、南から）
PL.20　中原第４号墳　調査
1．石室右（西）側壁（南から）
2．石室左（東）側壁（南から）
PL.21　中原第４号墳　調査
1．石室封鎖部（上から）
2．石室封鎖部（石室内から）
3．石室全景（床石・封鎖石除去後、南から）
4．前壁（3 段、石室内から）
5．前壁（2 段、上から）
6．前壁（1 段、上から）
7．奥壁（南から）
PL.22　中原第４号墳　調査
1．基底石（南から）
2．周溝東側土層 D － D’（北から）
3．石室開口部部分掘り方（東から）
4．完掘全景（南から）
PL.23 ～ 58　中原第４号墳　遺物
PL.23・24［佐藤］
PL.25 ～ 29［田村］
PL.30　382 ～ 417［田村］ 657 ～ 661［佐藤］
PL.31［杉本］
PL.32　418［杉本］ 419・420［佐藤］
PL.33　421［杉本］ 422 ～ 426［佐藤］
PL.34・36・38・40［佐藤］
PL.41　568（上）［杉本］ 568（下）［佐藤］
PL.42［杉本］
PL.43［佐藤］
PL.44［杉本］
PL.46・48・49［佐藤］
PL.50 ～ 52［杉本］
PL.53 ～ 55［佐藤］
PL.56 ～ 58［杉本］
PL.59　中原第５号墳　調査・遺物
1．検出状況（南から）
2．石室第２次床面全景（南から）
3．石室第３次床面全景（南から）
4．周溝・墓坑完掘状況（南から）
出土遺物［佐藤］
PL.60　中原第６号墳　調査
1．検出状況遠景（西から）
2．検出状況（南から）
3．石室残存状況（南から）
4．石室床面馬具（85）出土状況
5．周溝・墓坑完掘状況（南から）
6．墓坑（南から）
7．中原第５・６号墳　完掘全景（南から）
PL.61 ～ 62　中原第６号墳　遺物
出土遺物［佐藤］

第１章　調査経緯と経過

第１節　発掘調査の経緯と経過

(1) 中原第３・４号墳

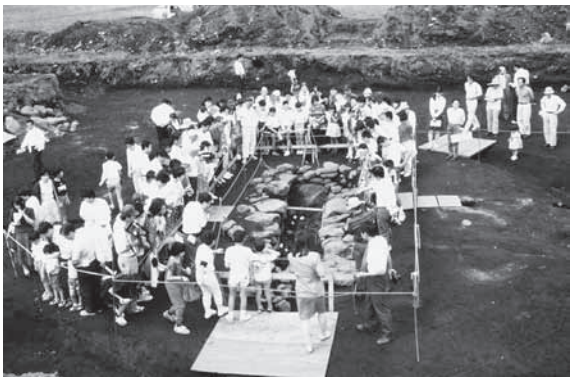
調査経緯

平成３年、株式会社睦合木材（代表取締役　若尾企叶、以下、事業者とする。）は、静岡県富士市伝法字中原 470-2 外 15 筆において倉庫及び事務所の建設工事を計画した。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「中原遺跡」に該当することから、平成３年 12 月９日、文化財保護法第 57 条の２第１項の規定に基づき、文化庁長官に「埋蔵文化財発掘の届出について」を提出した。平成３年 12 月 21 日、富士市教育委員会（以下、市教委とする。）では、届出を静岡県教育委員会教育長（以下、県教委とする。）に進達し、平成４年１月 14 日、県教委より事業者に対して市教委と協議し、工事着手前に発掘調査を実施するように通知があった。

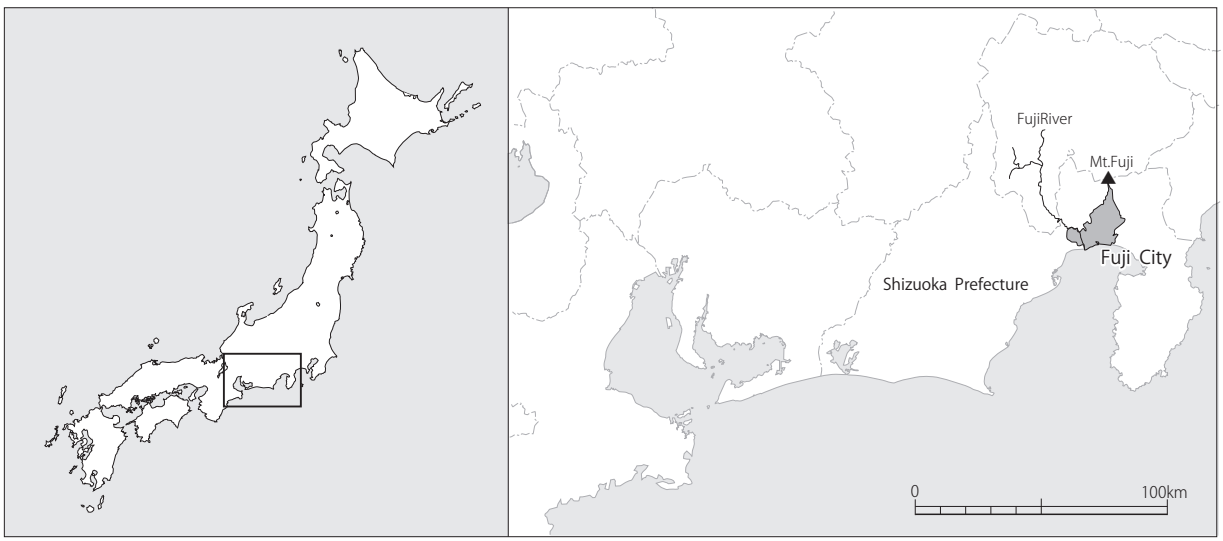
確認調査は平成４年４月に行われることとなったが、同じ時期に隣接する箇所（伝法字中原 458 外 15 筆）において大規模流通倉庫の建設工事があったため、両方の土地の確認調査を同時に行うこととなった。市教委は平成４年４月７日、文化財保護法第 98 条の２第１項の規定に基づき、県教委に「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出し、確認調査を実施した。

確認調査は平成４年４月 14 日から４月 28 日まで実施した。調査の結果、伝法字中原 470-2、474-1 外において未発見の古墳２基を検出した。その後、市教委と事業者による協議の結果、遺跡の保護は困難なことから、市教委が事業者から発掘調査を受託し、本発掘調査を実施することとなった。

本発掘調査は、平成４年５月 25 日から平成４年７月 31 日まで実施し、古墳２基（中原第３号墳、第４号墳）を完掘した。６月 20 日には市民向けの現地説明会を開催し、約 200 名の見学者があった。



第１図　現地説明会の様子



第２図　富士市の位置

調査体制

本発掘調査は以下の体制で実施した。

【平成４年度】

調査主体者　富士市教育委員会　教育長　山本　厚
教育次長　小山　哲雄
文化振興課　課長　小長谷秀夫
課長補佐　若林　富彦
文化財係　係長　佐野　誠一
指導主事　中尾　欣司
主事　久松　義昭
主事　前田　勝己
主事　影山　英之

調査経過

本発掘調査は平成４年５月25日から平成４年７月31日まで実施した。前述の通り、６月20日には市民むけの現地説明会を開催した。調査終了後、造成工事が開始され遺跡は消滅した。以下、調査員前田勝己による調査日誌の抄録を記載する。

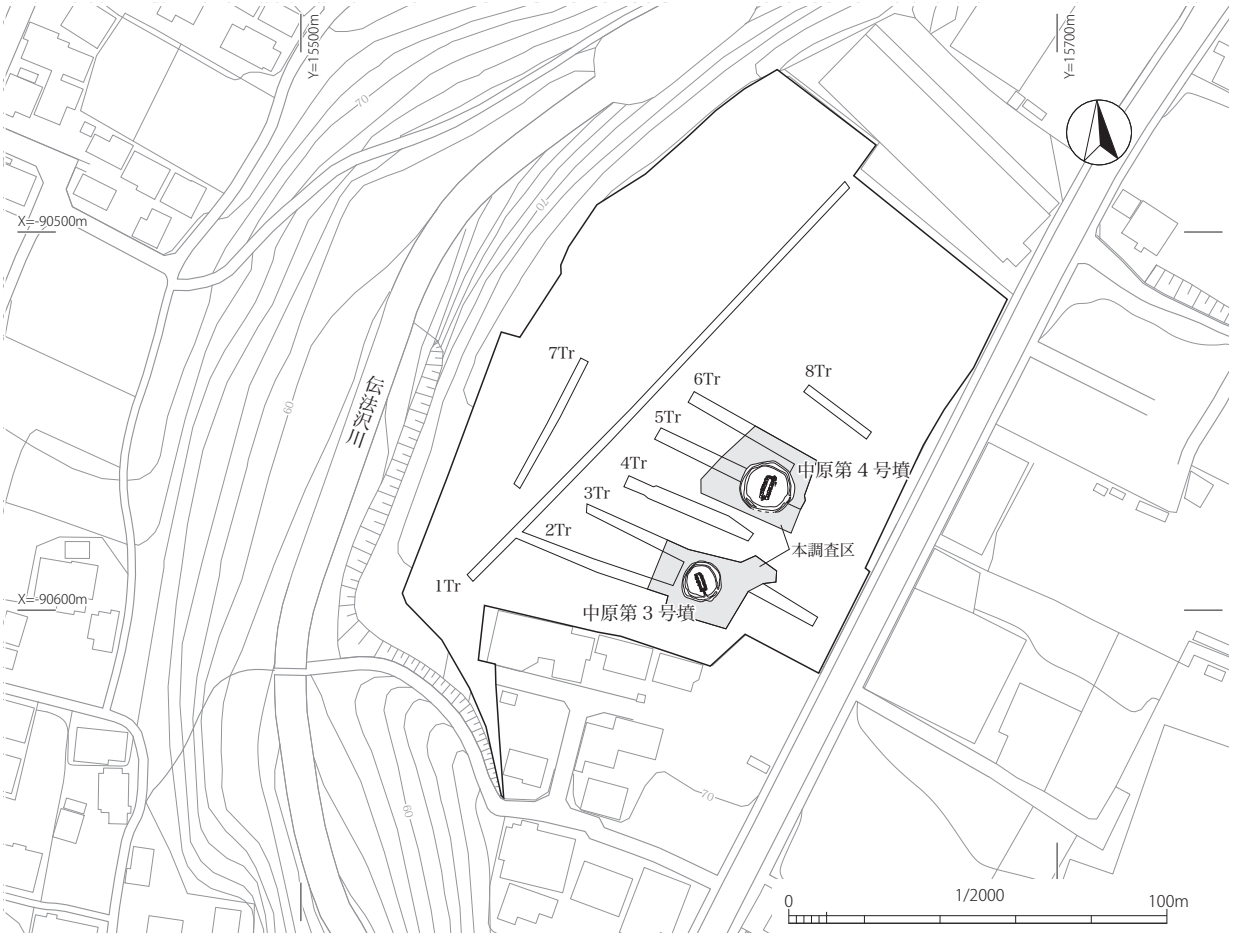
5月25日（月）古墳供養。器材運搬。４号墳から重機掘削開始。
5月26日（火）３号墳　石室掘削。
5月27日（水）３号墳　最終床面一部検出。周溝出土遺物図面作成。
４号墳　周辺重機拡張。周溝南側遺物集中。
6月1日（月）３号墳　周溝内から須恵器模倣土師器出土。７世紀初頭か。
6月2日（火）３号墳　石室平面実測。
４号墳　鋤簾がけ。
6月3日（水）３号墳　封鎖石実測後、除去。前壁？が３段検出される。掘り方のすぼまるところに立石が検出される。
6月4日（木）３号墳　床面実測。掘り方検出。
４号墳　上面精査、検出状況写真。
6月5日（金）３号墳　封鎖部、床面実測。
４号墳　トレンチ掘削。
6月8日（月）３号墳　床面レベリング。
6月9日（火）３号墳　第２床面全面検出。大刀、鉄鏃出土。４号墳　石室内掘削。前壁付近を中心に掘削。須恵器、鉄鏃多数出土。
6月10日（水）３号墳　床面個別写真。
４号墳　石室内掘削。側壁のずれた石を重機で撤去。
6月11日（木）作業中止。
6月12日（金）３号墳　床面実測。遺物取上げ。
４号墳　石室内掘削。奥壁付近より提瓶、鏃、轡出土。
6月15日（月）作業中止。
6月16日（火）３号墳　床面実測。遺物取上げ。
４号墳　床面検出。遺物量が極めて多く特に鏃の出土数に注目。調査方法や遺構・遺物についての検討会を実施する。メンバーは文化振興課職員のほかに他部署にいる考古学専門職員。
参加者　平林、志村、渡井、佐野、久松、前田、影山、小島、上野
6月17日（水）３号墳　床面実測、遺物取上げ
４号墳　床面検出作業。新たに大刀、勾玉など装身具、鍬鋤先出土。
6月18日（木）４号墳　遺物実測、写真撮影。勾玉、切子玉などの集中地点やその左（東側のことか）は元位置を保っていると考えられる。
6月19日（金）３号墳　第２床面実測。
４号墳　遺物出土写真撮影。第１床面？礫除去、鍬鋤先２点出土、合計４点。勾玉集中地点より南に管玉を中心とする玉群あり。
6月20日（土）現地説明会実施。約200人の参加。本日より夜間の警備委託を開始する。
6月22日（月）３号墳　床面実測。４号墳　遺物検出、実測。入り口部分（前壁北部分）には全く礫が検出されない。
6月23日（火）４号墳　床面遺物写真。遺物取上げ、B72塗布。
6月24日（水）４号墳　遺物取上げ、写真。鉄斧、ヤリガンナの存在確認。農工具の数に注目。大刀（剣）の取上げ後、富士市立博物館において銀象嵌確認。
6月25日（木）４号墳　遺物取上げ。鑿の存在確認。
6月26日（金）４号墳　奥壁付近の遺物取上げ。奥壁付近に赤色顔料あり。

Y=15500m
Y=16000m
X=-90000m
X=-90500m
X=-91000m
横沢古墳
土手内第２号墳
土手内第27号墳
土手内第26号墳
土手内・中原２古墳群
土手内・中原１古墳群
中原第６号墳
中原第５号墳
中原第１号墳
中原第２号墳
土手内第１号墳
中原第４号墳
中原第３号墳
伝法沢川
現存する古墳（推定含む）
消滅した古墳
0
1/6000
200m

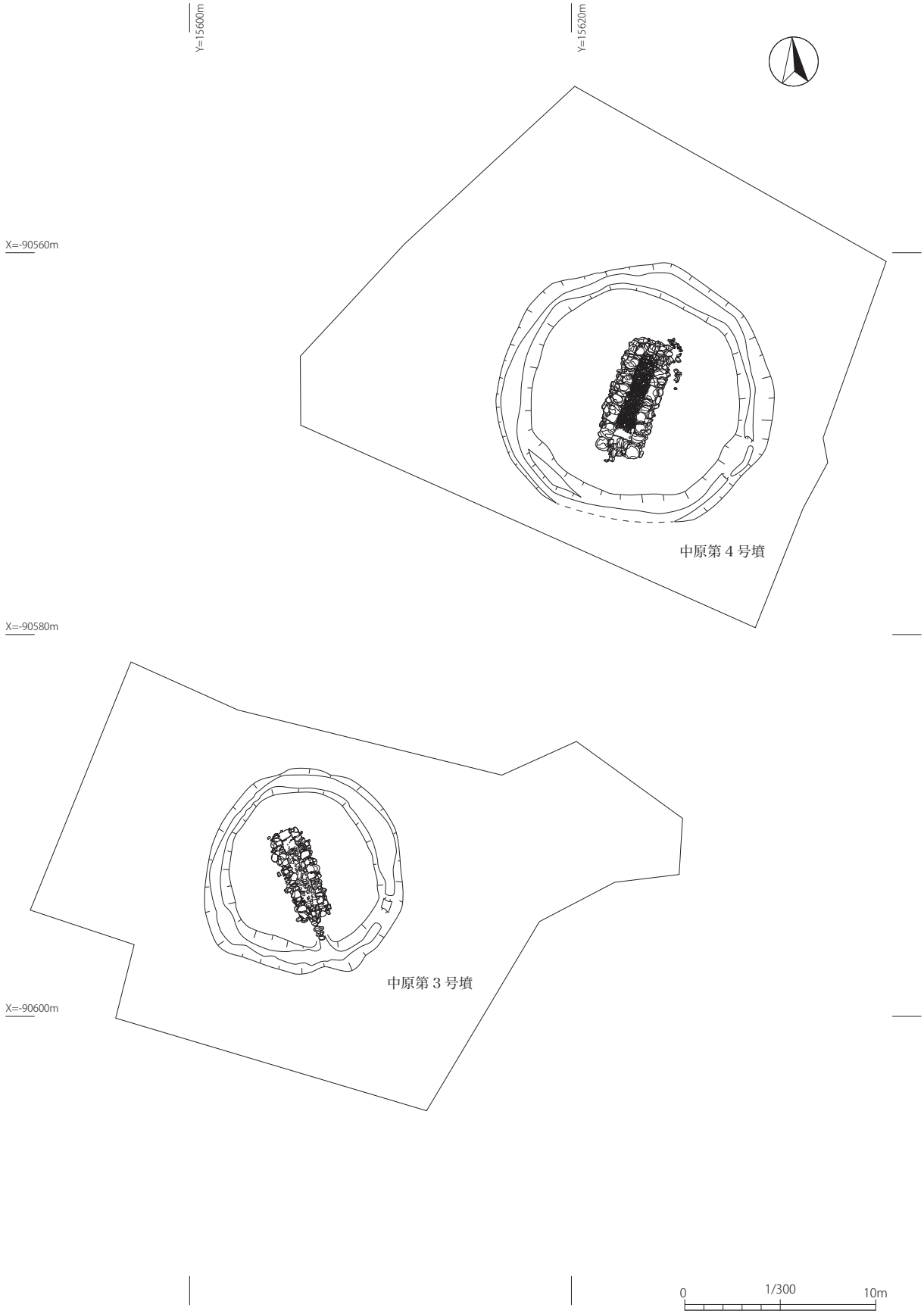
第３図　調査地位置図

6月29日（月）　3号墳　床面、石室展開図実測。
　　4号墳　床面実測。
6月30日（火）　雨天中止
7月　1日（水）　3号墳　床面実測。
　　4号墳　床面実測。以後、石室実測。
7月10日（金）　3号墳　側壁撤去、掘り方検出。
　　4号墳　石室実測。
7月13日（月）　3号墳　側壁除去、掘り方検出。
　　4号墳　石室実測。以後、17日まで石室実測。
7月20日（月）　3号墳　根石写真、実測。
　　4号墳　床石除去、側壁など写真撮影。
7月21日（火）　4号墳　側壁除去、図面補足。
7月22日（水）　3号墳　根石除去。
　　4号墳　側壁除去、根石検出。周溝掘削。
7月23日（木）　3号墳　完掘。
　　4号墳　前壁平面図作成。根石実測。
7月24日（金）　4号墳　周溝掘削、土層写真、実測。石室根石実測。
7月27日（月）　4号墳　根石写真。
7月28日（火）　4号墳　根石除去、完掘写真。周溝掘削。
7月29日（水）　4号墳　周溝完掘。全体写真。器材撤収開始。
7月30日（木）　4号墳　完掘平面図（コンター）作成。
7月31日（金）　事業者に調査終了の引渡し式実施。

第４図　中原第３・４号墳　調査地遠景



第５図　中原第３・４号墳　確認トレンチ・本調査区配置図



第６図　中原第３・４号墳　本調査区全体図

(2) 中原第５・６号墳

調査経緯

平成５年、富士市役所都市整備部みどりの課（市長鈴木清見、以下、富士市とする。）は、富士市伝法字中原 517 外８筆において広見公園整備工事（駐車場及び調整池造成）を計画した。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「中原遺跡」に該当することから、平成５年４月 22 日、文化財保護法第 57 条の３第１項の規定に基づき、文化庁長官に「埋蔵文化財発掘の通知について」を提出した。平成５年４月 30 日､富士市教育委員会（以下、市教委とする。）では、通知を静岡県教育委員会教育長（以下、県教委とする。）に進達し、平成５年５月 27 日、県教委より富士市に対して市教委と協議し、工事着手前に発掘調査を実施するように通知があった。

市教委は平成５年５月 25 日、文化財保護法第 98 条の２第１項の規定に基づき、県教委に「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出し、確認調査を実施した。

確認調査は平成５年５月 25 日から６月 10 日まで実施した。トレンチ 25 本を設定、掘削し、未発見の古墳２基を検出した。その後、協議の結果、遺跡の保護は困難なことから、市教委が本発掘調査を実施することとなった。

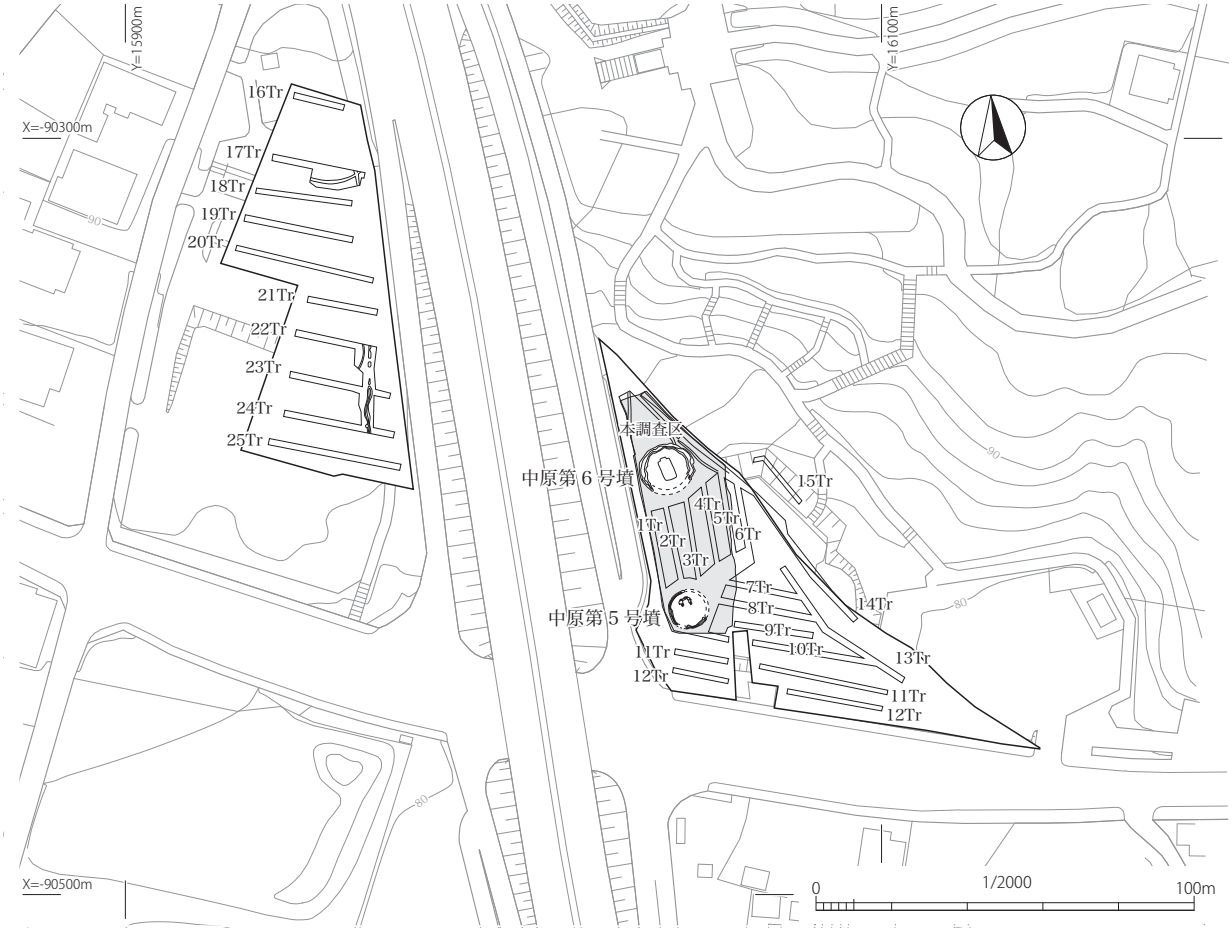
本発掘調査は、平成６年５月 16 日から平成６年７月 12 日まで実施し、古墳２基（中原第５号墳、第６号墳）を完掘した。

調査体制

本発掘調査は以下の体制で実施した。

【平成６年度】

調査主体者	富士市教育委員会	教育長	山本　厚
		教育次長	影島　英三
	文化振興課	課　長	立田　守彦
		課長補佐	若林　富彦
	文化財係	係　長	池田　晴夫
		主　査	渡井　義彦
		指導主事	前嶋　秀張
		上席主事	木ノ内義昭
		主　事	前田　勝己
		主　事	久保田伸彦



第７図　中原第５・６号墳　確認トレンチ・本調査区配置図

※ 等高線については、調査当時の測量値から計算上復元したものである。

第8図　中原第5・6号墳　本調査区全体図

調査経過

本発掘調査は平成6年5月16日から平成6年7月12日まで実施した。調査終了後、造成工事が開始され遺跡は消滅した。以下、調査員前田勝己による調査日誌の抄録を記載する。

5月16日（月）　お払い。器材搬入後、石室周辺精査。
5月17日（火）　石室遣り方設置。
5月18日（水）　5号墳　側壁､奥壁検出。一部床面検出。
　　6号墳　床面検出。石室前後で床石の違いあり。
5月19日（木）　5号墳　側壁、奥壁実測。遺物はほんどない。
　　6号墳　掘り方実測、床面検出。
5月20日（金）　5号墳　平面実測､床面検出､写真撮影。
　　6号墳　床面検出、写真撮影。
5月23日（月）　5号墳　床面写真、実測。
　　6号墳　床面実測。
5月24日（火）　5号墳　床面が上下2面あることが確定。
　　6号墳　床面実測。
5月25日（水）　5号墳　床面実測、展開図作成。
　　6号墳　床面実測。
5月26日（木）　31日まで第二東名建設に伴う分布調査のため作業中断。
6月1日（水）　3日まで5号墳､6号墳ともに石室実測。
6月6日（月）　5号墳　床面実測。
　　6号墳　遺物取上げ。
6月7日（火）　23日まで5号墳、6号墳ともに石室実測。
6月24日（金）　5号墳　掘り方検出。裏込め除去。
6月27日（月）　5号墳　床石除去､根石写真撮影､除去。
　　6号墳　実測
6月28日（火）　5号墳　掘り方実測、写真撮影。
6月29日（水）　5号墳　掘り方実測、レベリング。
6月30日（木）　5号墳　周溝実測。
　　6号墳　周溝実測。
7月1日（金）　全体写真撮影、実測、撤収。

第2節　整理作業の経緯と経過

(1) 基礎整理作業

中原第3・4号墳の発掘調査終了後、報告書（概要報告）作成作業に伴い、平成5年度、市教委は、事業者から整理作業を受託した。基礎整理作業では、遺物の洗浄、注記、台帳作成や図面整理を行った。また、鉄製品の一部は財団法人山梨文化財研究所に委託し、保存処理を行った。加えて、出土遺物の写真撮影を楠華堂楠本真紀子氏に依頼した。これらの成果をまとめ、平成6年3月、『中原第3号墳・第4号墳発掘調査概要報告書』を刊行した。

また、中原第5・6号墳出土遺物については、調査終了後、遺物の洗浄、注記、台帳作成や図面整理を行い、平成6年度中に鉄製品の一部の保存処理を財団法人山梨文化財研究所に委託した。

(2) 報告書作成事業

事業の発端

平成6年の概要報告書刊行以降、県内外の研究者から正式な発掘調査報告書の刊行が待たれていた。しかし、開発行為に伴う発掘調査件数の多さから、当時の富士市では、報告書刊行にいたる整理作業が追いつかない状況であった。調査から16年経った平成20年には、静岡県考古学会シンポジウムにおいて中原第4号墳の発表（前田2008）がなされ、その重要性が改めて学界に認識されるに至った。そのため、その重要性を鑑みていち早く報告書を刊行することとし、平成25年度から作業を開始することとした。

さらに、中原第4号墳の資料的価値の高さとその遺物の重要性を鑑み、報告書刊行までを経験・実績ともに豊かな県内外の有識者に指導を受け、さらに執筆を依頼することとなった。

平成25年10月7日、今後の方針を検討する打ち合わせを行った。参加者は鈴木一有、和田達也（浜松市文化財課)、大谷宏治、田村隆太郎（静岡県埋蔵文化財センター)、藤村　翔（富士市立博物館）である。

事業方針と体制

平成25年10月の打ち合わせにおいて、執筆者を中心とした研究会を定期的にすることや、考察における執筆分担や、研究会とは別に遺物の観察や図化などに対する調査指導も研究会メンバーを中心に行うこととなった。

整理作業、報告書刊行事業は以下の体制で実施した。

【平成 25・26 年度】

事業主体者　富士市教育委員会　教 育 長　山田　幸男
教育次長　鈴木　清二
文化振興課　課　長　渡井　義彦
文化財担当　主　幹※ 前田　勝己
主　査　石川　武男
上席主事　佐藤　祐樹

※平成 26 年度統括主幹

【平成 27 年度】

事業主体者　富士市市民部　部　長　加納　孝則
文化振興課　課　長　町田しげ美
文化財担当　統括主幹　前田　勝己
専 門 員　渡井　義彦
主　査　石川　武男
上席主事　佐藤　祐樹

中原古墳群研究会

鈴木一有、井口智博、和田達也、川西啓喜、坪井理恵（以上、浜松市文化財課）、大谷宏治、田村隆太郎（以上、静岡県埋蔵文化財センター）、菊池吉修（静岡県教育委員会）、戸根比呂子（加賀市教育委員会）、濱崎範子（立命館大学研修生）、藤村　翔（富士市立博物館）、石川武男、佐藤祐樹（以上、富士市文化振興課）

調査指導

平成 25 年 12 月 18 日
出土遺物（須恵器）についての検討
和田、石川、佐藤

平成 26 年 1 月 6 日
出土遺物（装身具）についての検討
鈴木、戸根、石川

平成 26 年 2 月 18 日
出土遺物（鉄製品）、出土状況についての検討
鈴木、大谷、田村、菊池、石川、佐藤、藤村

平成 27 年 6 月 16 日
副葬品出土状況の検討　田村、石川、佐藤

第 9 図　調査指導の様子（1）

第 10 図　調査指導の様子（2）

第 11 図　研究会の様子（1）

第 12 図　研究会の様子（2）

研究会の開催

第1回（平成26年2月15日）
「伝法中原古墳群の概要と整理作業の進捗」（藤村・石川）
「肉眼による産地同定の方法」（和田）
会　場　掛川市22世紀の丘公園「たまり〜な」
参加者　鈴木、井口、和田、川西、坪井、大谷、田村、菊池、戸根、濱崎、石川、佐藤、藤村、佐々木憲一（明治大学）

第2回（平成26年6月1日）
「駿河東部における無袖石室の意義」（鈴木）
「中原4号墳の埋葬と儀礼の復元について」（田村）
会　場　掛川市22世紀の丘公園「たまり〜な」
参加者　鈴木、井口、和田、川西、坪井、大谷、田村、菊池、戸根、石川、佐藤、藤村

第3回（平成26年10月25日）
「潤井川流域における6・7世紀の土器様相」（佐藤）
会　場　沼津市文化財センター
参加者　鈴木、和田、坪井、大谷、田村、石川、佐藤、小崎　晋（沼津市）、木村　聡（沼津市）

第4回（平成27年2月1日）
「中原4号墳出土の玉」（戸根）
「中原古墳群出土の鉄鏃について」（菊池）
会　場　掛川市22世紀の丘公園「たまり〜な」
参加者　鈴木、井口、和田、川西、坪井、大谷、田村、菊池、戸根、濱崎、石川、佐藤、藤村

第5回（平成27年4月25日）
「中原4号墳の馬具と装飾付大刀について」（大谷）
会　場　掛川市22世紀の丘公園「たまり〜な」
参加者　鈴木、井口、和田、大谷、田村、菊池、石川、佐藤

第6回（平成27年10月14日）
「中原4号墳の埋葬と年代についての検討」
参加者　鈴木、大谷、田村、菊池、佐藤

金属製品再保存処理

金属製品については発掘調査終了後の平成5・6年度に保存処理を行っていたが、改めて処理を行う必要があると考え、『平成25年度国宝重要文化財等保存整備費補助金』の交付を受け、静岡文化財研究所（代表　西尾太加二）に委託し、再保存処理を行った。また、X線撮影については、静岡県埋蔵文化財センター（担当　大森信宏）に依頼した。

自然科学的調査

中原第3号墳出土の耳環2点および4号墳出土のガラス小玉232点については、奈良文化財研究所田村朋美氏に、コンピューテッドラジオグラフィ法、オートラジオグラフィ法、蛍光X線分析法による調査を依頼した。また、分析結果を執筆いただき本書に収録した（第4章第4節）。

写真撮影

金属製品の保存処理や遺物挿図プレートが確定した後、出土遺物の集合写真の撮影や個別写真の撮影を行った。集合写真、3、4号墳の主要個別写真については西大寺フォト杉本和樹氏に撮影を委託し、ガラス小玉のマイクロスコープ写真は田村朋美氏に依頼し、その他の遺物は佐藤が撮影した。

第13図　遺物写真撮影の様子

参考文献

前田 勝己　2008「富士市中原第4号墳」『東国に伝う横穴式石室－駿河東部の無袖式石室を中心に－』静岡県考古学会

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境

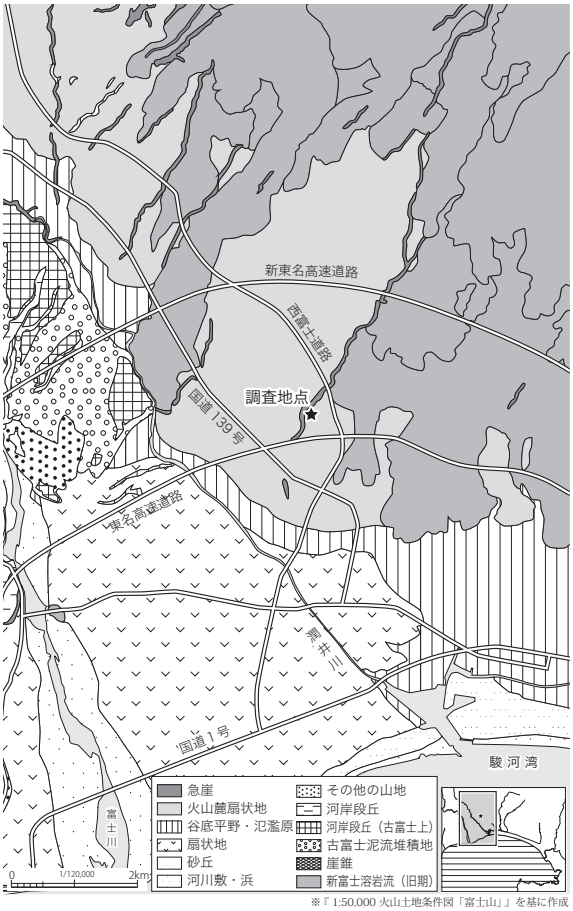
中原第３～６号墳が所在する富士市は、静岡県の東部に位置する。その地理的環境を概観すると、駿河湾を南に臨み、北には富士山がそびえ、山裾を南西に広げている。西には岩本山を有する星山丘陵と岩淵火山地が、東には既に火山としての活動を停止している愛鷹山が存在する。西方には北から流下する富士川と富士山西麓を源とする潤井川が駿河湾に注ぎ、東方には愛鷹山に源流をもつ須津川や赤淵川、浮島ヶ原低湿地を西流する沼川など、多数の河川が流れる。

こうした環境にある富士市域の地形は、富士山や愛鷹山の火山活動により形成された丘陵地、富士川や潤井川が運搬した土砂の堆積により形成された沖積平野、河川の放出砂礫が駿河湾の沿岸流や波浪によって運搬され形成された田子浦砂丘、砂丘の内側につくられた湖沼に沖積層が堆積して発達した浮島ヶ原低湿地など、変化に富んだ様相をみせている。

地形の基盤のひとつである富士山の噴火活動は、小御岳火山の噴火（数十万年前）に始まり、古富士火山（8万年～１万６千年前）、新富士火山(１万４千年前～現在)と大きく３期に分けられる。不透水性の古富士泥流の上に、透水性の新富士火山溶岩流が広がるため、新富士火山溶岩流の末端には数多くの湧水地が存在する。また、浮島ヶ原低湿地は、内湾交通に適した土地であった。

中原第３～６号墳を包含する土手内・中原古墳群は、富士山南麓に広がる大淵扇状地の緩斜面～丘陵上の標高約 70 ～ 100 mに位置し、東西約 800 m、南北約 650 mの範囲に、現在 24 基の古墳が認識されている。古墳群の西には伝法沢川が南流し、南端で潤井川から分岐した小潤井川に合流している。中原第３・４号墳は、伝法沢川の東岸に近接して築造されており、中原第５・６号墳を含む大多数の古墳は、現在広見公園として整備されている東西 650 m、南北 300 mほどの範囲に集中して立地している。

第 14 図　駿河湾上空から富士市を望む



※『 1:50,000 火山土地条件図「富士山」』を基に作成

第 15 図　周辺地形図

第２節　歴史的環境

駿河東部の古墳

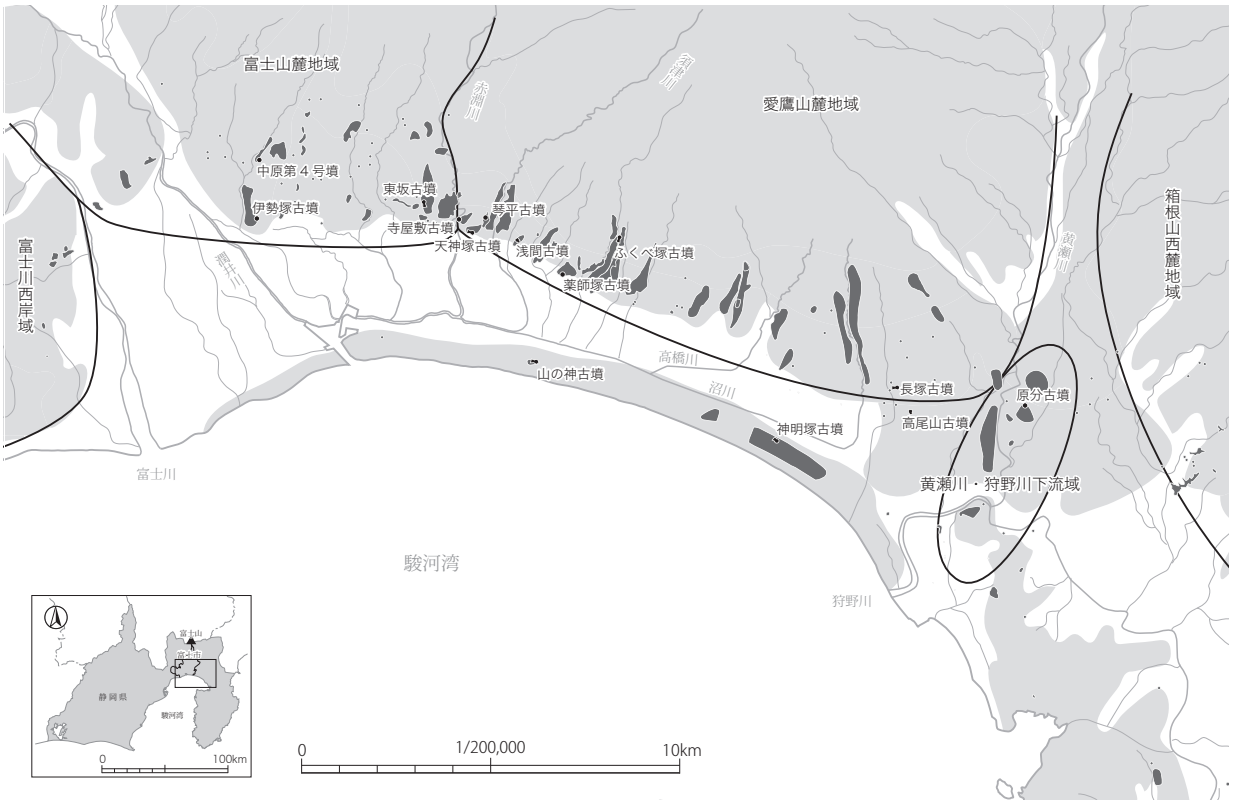
駿河東部（富士川流域以東、黄瀬川以西）に最初に築かれたとされる古墳は、愛鷹山南東麓に位置する高尾山古墳である。高尾山古墳は、古墳時代初頭に築かれたとみられる前方後方墳であり、東海西部系・北陸系・近江系などの外来系の土器が出土していることから、東日本の諸地域との交流を基盤とする首長墓と位置づけられている。高尾山古墳に続く前期古墳としては、田子浦砂丘上の神明塚古墳（前方後円墳）、富士市域の愛鷹山南西麓に位置する浅間古墳（前方後方墳）、東坂古墳（前方後円墳）など、大型の首長墓が築かれている。

中期には、愛鷹山南西麓で琴平古墳（円墳）、薬師塚古墳（円墳）、ふくべ塚古墳（前方後円墳）などが首長墓として築かれたようだが、その実態は不明瞭である。

後期に入ると、愛鷹山南西麓には天神塚古墳（TK47 ～ MT15 併行、前方後円墳？）が築かれ、それに続く首長墓とみられる寺屋敷古墳（前方後円墳？）では埴輪が採用されるようになる。愛鷹山南東麓の長塚古墳（前方後円墳）、田子浦砂丘上の山の神古墳（前方後円墳）でも埴輪が確認されており、同時期に位置づけられる。

また、富士山南麓の潤井川流域が新たに古墳の造営地となり、その初めとして伊勢塚古墳（TK47 併行、円墳？）が築かれる。伊勢塚古墳は、沢東 A 遺跡に認められる潤井川流域の本格的な開発をおこない、倭王権との関連を有する集団の首長墓と位置づけられている。

後期後半以降の駿河東部では、古墳の埋葬施設として、竪穴状の墓坑をもち、石室床面が周囲の地面より低くなるために開口部に段をもつ、無袖の横穴式石室がつくられるようになる。この有段無袖石室は、潤井川流域につくられた中原第４号墳を初現とし、被葬者の階層を問わず、7 世紀を通じて構築し続けられる。石室の特徴からは、倭王権との直接的関連は想定し難いが、原分古墳のように、装飾大刀や馬具など、質・量ともに豊富な副葬品を有する古墳も多く、当地域と王権とが深い関わりを有していたと考えられる。



第 16 図　東駿河の古墳群分布図

潤井川流域の遺跡

土手内・中原古墳群が位置する潤井川北東岸の大淵扇状地上では、旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺跡はほとんど確認されていない。

古墳時代については、沢東A遺跡第3次調査地点や川窪遺跡第1地区において前期（大廓式期）の遺物が確認されているが、確実な集落跡（建物跡）は沢東A遺跡で認められる中期後半（TK208型式併行期）からである。沢東A遺跡は古墳時代後期から7世紀にかけて大規模に発展し、9世紀初頭ごろまで集落が営まれ続ける。

沢東A遺跡から約850m南東に位置する中桁・中ノ坪遺跡でも、中期から集落の形成がみとめられ、8世紀代に空白期をおくものの、10世紀前葉（O-53窯式期）頃まで継続する。

中桁･中ノ坪遺跡から400mほど東に、東西1000m、南北1000mほどの範囲に広がる東平遺跡においては、古墳時代後期から集落がみとめられる。沢東A遺跡や中桁・中ノ坪遺跡と相対するように、8世紀から富士郡衙の中枢とみられる大規模集落と寺院（三日市廃寺跡）が営まれるが、10世紀初頭には衰退するようである。

沢東A遺跡の東に位置する沢東B遺跡では奈良時代の集落跡が確認されている。

先述の通り、この地域に古墳が築かれ始めるのは、古墳時代後期初頭（6世紀初頭）頃からである。まず、伝法沢川と小潤井川が合流する地点の北東約450mに、径54mを測る首長墓級の伊勢塚古墳（TK47～MT15）が築造される。これ以降、中原第4号墳（TK43）、横沢古墳（TK209）、中原第3号墳（TK209）、中村上第1号墳（TK209～飛鳥Ⅰ）といった6世紀～7世紀初頭の古墳が伝法沢川流域に築かれる。しかし、東平第1号墳や西平第1～6号墳、国久保古墳、片倉第1号墳など、7世紀～8世紀前葉に位置付けられる古墳は、伝法沢川東岸の伝法・石坂地区に広く分布して築かれるようになる。

第17図　潤井川東岸遺跡分布図

第３節　伝法古墳群のひろがり

古墳群の範囲と名称には、昭和 33 年に刊行された『吉原市の古墳』での区分をはじめとし、昭和 63 年に富士市教育委員会が刊行した『富士市の埋蔵文化財(古墳編)』での区分、「周知の埋蔵文化財包蔵地」として現在登録されている包蔵地範囲など、これまでにいくつかの捉え方があるため、ここで一度、第１表に整理する。

『吉原市の古墳』「第五　吉原市域の古墳　－スルガのクニ西部地域古墳群－」では、富士川流域から富士市の東隣にある沼津市一帯にかけての地域を、古代における「スルガのクニ」とし、旧吉原市域（現富士市域の内、おおむね潤井川以東）の古墳について、全体を「スルガのクニ西部古墳群」と捉えた。そのうえで、そこに認められる「古墳の群れ」を「古墳支群」として、西方から順にＡ～Ｍの 13 支群に分けている。以下に概略を記す。

まず、旧伝法村域にある古墳を、Ａ～Ｃの３つの小群に分け、「伝法古墳支群」（Ａ群・Ｂ群）、「石坂古墳支群」（Ｃ群）としている。伝法古墳支群は、ゆるやかな傾斜で南にひろがる富士山麓の端部に占地するもので、伊勢塚古墳を中心とするＡ群と、Ａ群より 600 ｍほど東に位置するＢ群とに分けられる。石坂古墳支群は、大淵から石坂にかけて南北に延びる丘陵上と国久保の谷部につくられた古墳で構成される。

続いて、富士山南麓の丘陵上の一色から末端の原田まで、南北に長い範囲に占地する古墳を「一色古墳支群」（Ｄ群）としている。

同じく富士山麓の旧吉永村に属する地域の古墳は、その分布状況から４つの小群にわけられる。赤淵川に沿った鵜無ヶ淵・間門に占地する「鵜無ヶ淵・間門支群」（Ｅ群）、赤淵川東岸の丘陵上と西岸の台地上、花川戸・前之原に占地する「富士岡支群」（Ｆ群）、その西側の比奈にひろがる丘陵上の「比奈支群」（Ｇ群）、原田の「瀧川支群」（Ｈ群）である。

赤淵川の東、愛鷹山東南麓に位置する旧須津村域に占地する古墳は「須津古墳支群」とし、愛鷹山麓の丘陵上に所在する浅間古墳を含む増川の「増川群」（Ｉ群）、愛鷹山から流下する須津川の左岸に分布する神谷の「神谷群」（Ｊ群）、右岸に分布する中里の「中里群」（Ｋ群）、と３つの小群にわけられた。

愛鷹山南麓を流下する春山川流域の丘陵斜面上に分布する古墳を「船津古墳支群」（Ｌ群）とし、愛鷹山麓の南にひろがる浮島ヶ原低湿地のさらに南、海岸沿いに東西に延びる東田子浦砂丘上に群在する古墳を「東田子浦砂丘古墳支群」（Ｍ群）としている。

各支群を構成する古墳には、支群名と記号、番号で古墳名が付与された。例えば、「船津古墳支群」（Ｌ群）の古墳は「船津Ｌ－第○号墳」となる。ただし、番号は各支群で１から始まるわけではなく、富士山南麓のＡ～Ｄ群、旧吉永村のＥ～Ｈ群、旧須津村のＩ～Ｋ群、船津のＬ群、東田子浦砂丘上のＭ群の５系統がある。「伝法Ａ－第１～５号墳」に続けて、「伝法Ｂ－第６～ 10 号墳」という形である。そのため、各支群の最大番号がそのまま古墳数を示すものではない。

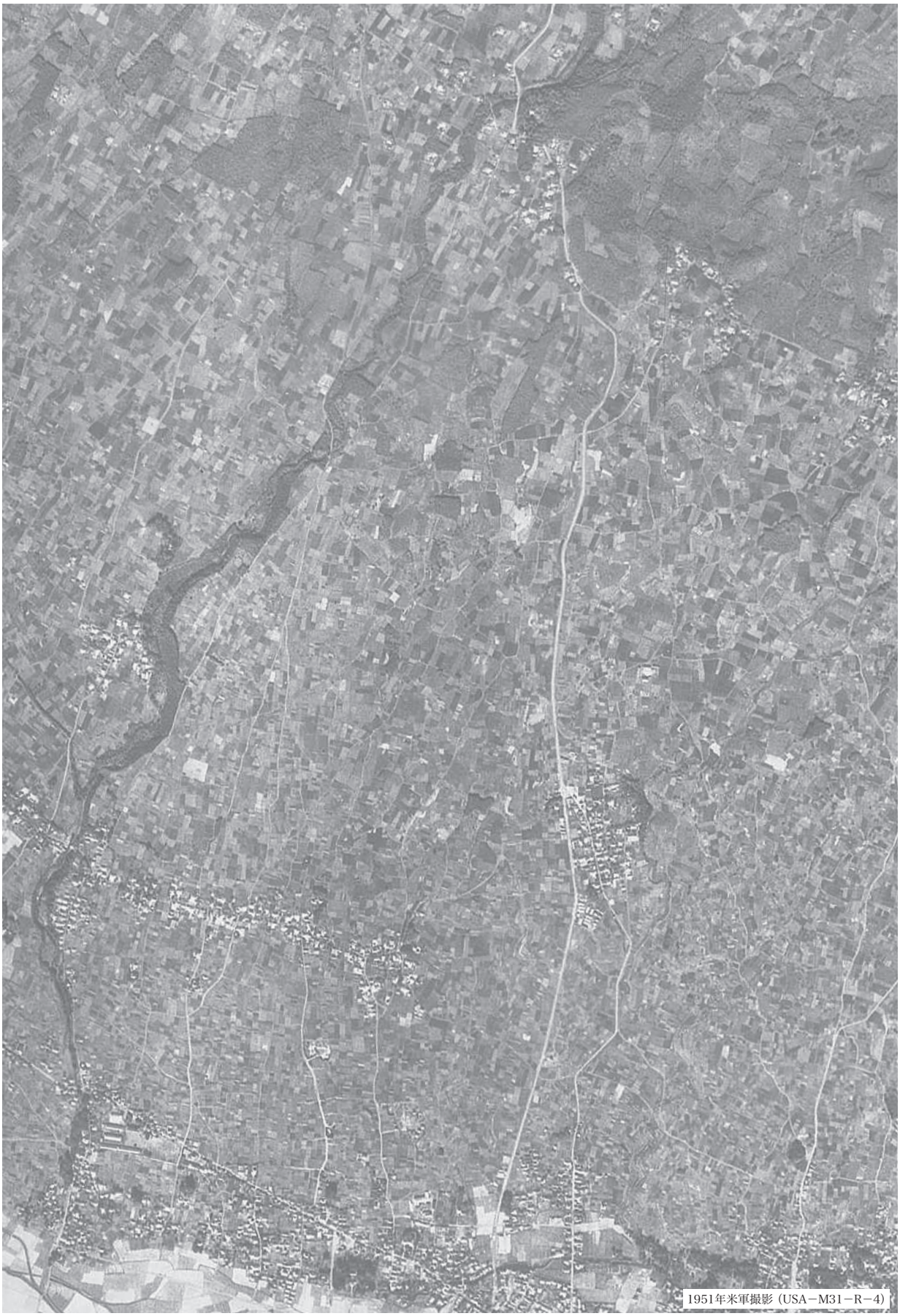
本書でいう「伝法古墳群」とは「潤井川の北東岸に位置し、富士山南麓に広がる大淵扇状地の低丘陵上からその裾野の緩斜面にかけて築かれた古墳群の総称」（藤村 2011）である。この「伝法古墳群」の範囲には、「周知の埋蔵文化財包蔵地」として登録されている「伝法１～３古墳群」「土手内・中原１・２古墳群」「石坂１～ 12 古墳群」「片倉１～３古墳群」「今泉古墳群」「国久保古墳」の 21 群 72 基が包括されている。しかし、この包蔵地範囲は「あくまで行政的に埋蔵文化財包蔵地を認識するための線引きという色合いが濃厚であり、古墳と古墳文化を考える上での境界とは言い難い」（藤村 2011）ことから、前述の通り本書では、古墳の立地状況に基づき、ひとつの「伝法古墳群」として捉えていくこととする。

本書で報告する中原第３～６号墳が属する「土手内・中原１・２古墳群」は、昭和 50 年代前半に新たに確認された古墳群である。当時は地区名をとって「広見古墳群」と呼ばれ、古墳名は横沢・土手内・中原といった小字名に基づいて、「横沢古墳」「中原第１号墳」「土手内第１号墳」のように付与された。それらは「伝法古墳群」における「支群」として位置づけることができる。本書では現在の名称を尊重し、中原第１～６号墳を便宜的に「伝法 中原古墳群」と呼称し報告するが、包蔵地名ではないことを改めて記す。

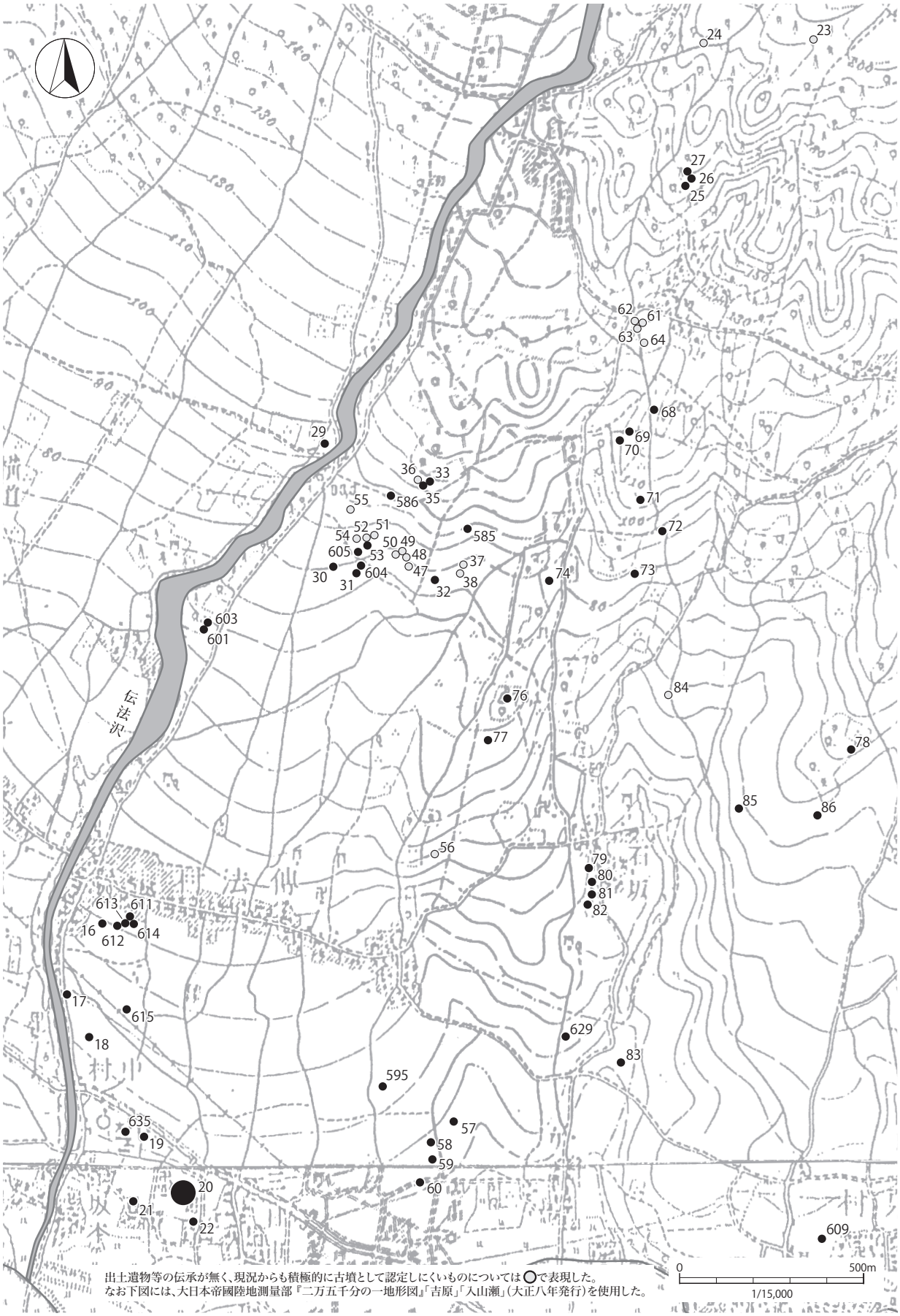
第１表　古墳群名一覧表

地形区分	旧行政区	『吉原市の古墳』（1958）		『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』（1988）	包蔵地名（2013）	所在地	主な古墳	備考
富士山南麓	旧吉原市	A	伝法古墳支群	伝法古墳群A	伝法１古墳群	伝法	伊勢塚古墳、西平第１～６号墳、中村上第１号墳	本書でいう「伝法古墳群」
		B		伝法古墳群B	伝法３古墳群	伝法		
		－			伝法２古墳群	伝法	東平第１号墳	
					国久保古墳	国久保	国久保古墳	
		C	石坂古墳支群	石坂古墳群	石坂２古墳群	石坂	二タ子塚第１～２号墳	
					石坂３古墳群	石坂		
					石坂４古墳群	石坂		
					石坂５古墳群	伝法		
					石坂７古墳群	今泉		
					石坂10古墳群	石坂		
					石坂12古墳群	国久保		
		－		八ヶ窪古墳群	石坂１古墳群	大淵		
				桑原古墳	石坂６古墳群	石坂		
				荒久古墳	石坂８古墳群	今泉		
				汁谷古墳	石坂９古墳群	今泉		
				広見古墳群	石坂11古墳群	伝法		
					土手内・中原１古墳群	伝法	横沢古墳、中原第３・４号墳	
					土手内・中原２古墳群	伝法	中原第１・２・５・６号墳、土手内第１号墳	
				片倉古墳群	片倉１古墳群	中野		
					片倉２古墳群	大淵		
					片倉３古墳群	中野	片倉第１～３号墳	
		－			今泉古墳群	今泉	今泉６丁目第１号墳	
					高山古墳群	今泉		
					傘木古墳群	伝法		
		－		糀窪古墳	一色１古墳群	大淵		
		D	一色古墳支群	一色古墳群	一色２古墳群	一色		
					一色３古墳群	一色		
					一色４古墳群	一色		
					一色５古墳群	三ッ沢		
					一色６古墳群	今泉		
					一色７古墳群	三ッ沢	実円寺西第１号墳	
					一色８古墳群	原田		
					一色９古墳群	今泉		
		H	瀧川古墳支群	滝川古墳群	滝川１古墳群	原田		
					滝川２古墳群	原田		
					滝川３古墳群	原田		
					滝川４古墳群	原田		
		G	比奈古墳支群	比奈古墳群	比奈１古墳群	比奈	東坂古墳、大坂上古墳	
					比奈２古墳群	原田		
					比奈３古墳群	比奈	赫夜姫古墳	
					比奈４古墳群	比奈		
					比奈５古墳群	比奈		
					比奈６古墳群	比奈		
		－		神戸古墳群	神戸１古墳群	神戸		
					神戸２古墳群	神戸		
					神戸４古墳群	神戸		
		E	鵜無ヶ淵・間門古墳支群	鵜無ヶ淵・間門古墳群	神戸３古墳群	神戸		
					鵜無ヶ渕古墳群	鵜無ヶ淵		
					間門古墳群	間門	上ノ山第１号墳	
					間門松沢第１号墳	間門		
		F	富士岡古墳支群	富士岡古墳群	比奈７古墳群	比奈		
					富士岡１古墳群	富士岡	花川戸第１～４号墳	
					富士岡２古墳群	富士岡		
					富士岡３古墳群	比奈		
					富士岡４古墳群	富士岡		
		－		辻畑古墳				抹消
				萩ヶ原古墳群				
				摺文字古墳群				
愛鷹山西南麓		K	須津古墳支群（中里群）	中里古墳群	中里１古墳群	中里		
					中里２古墳群	中里	天神塚古墳	
					中里３古墳群	中里	琴平古墳	
					中里４古墳群	中里		
		J	須津古墳支群（神谷群）	須津（神谷）古墳群	神谷古墳群	神谷	千人塚古墳	
		I	須津古墳支群（増川群）	増川古墳群	増川古墳群	神谷	浅間古墳	
		－			平椎古墳群	増川		
		L	船津古墳支群	船津古墳群	船津１古墳群	江尾		
					船津２古墳群	江尾		
					船津３古墳群	船津		
					船津４古墳群	境		
					船津５古墳群	船津		
					船津６古墳群	船津		
					船津７古墳群	船津	稲荷塚古墳、船津Ｌ第62・206・207号墳	
					船津８古墳群	船津		
田子浦砂丘		M	東田子浦砂丘古墳支群	東田子浦砂丘古墳群	東田子浦砂丘１古墳群	東柏原新田	庚申塚古墳、山ノ神古墳	
					東田子浦砂丘２古墳群	鈴川東町		
岩本丘陵	旧富士市			上井奈古墳群	上井奈古墳群	岩本		
				鎌研古墳群	鎌研古墳群	岩本		
				滝戸原古墳群	滝戸原古墳群	岩本		
富士山南麓	旧鷹岡町			東下天間古墳	東下天間古墳群	天間		
				天間溝古墳	溝古墳群	厚原		
				道下古墳	道下古墳群	厚原		
				横道下古墳	横道下古墳群	厚原		
				溝上古墳	溝上古墳群	厚原		
富士川以西	旧富士川町				小山古墳群	岩淵		
					妙見古墳群	岩淵		
					室野坂古墳群	岩淵		
					谷津原古墳群	岩淵		
					小池丸山古墳	中之郷		
					四十九古墳群	中之郷		

※「－」は、その当時認識されていなかった事を示す。



第 18 図　伝法古墳群航空写真



第19図　伝法古墳群分布図

第２表　伝法古墳群一覧表

古墳番号	古墳名	現状	標高(m)	墳形	墳長(m)	内部主体	開口方向	築造年代	主な出土遺物	備考	参考文献
16	伝法 A- 第 35 号墳 西平第 1 号墳	存在	37	-	-	横穴式石室、段構造？ (残存長 3.2m、 幅 1.3m、床面 1 面)	南南東	8c 前葉	蕨手刀 1・直刀 1・金銅製方頭柄頭 1・鉄製喰出鍔 2・足金具 3・責金具 1・金銅製鞘口金具 1・鉄製切羽 1・銅製銙帯金具（巡方 4・丸鞆 4・鉈尾 1）・須恵器（甕 2・長頸瓶 1・坏身 1）		8 11 12 18
17	伝法 A- 第 34 号墳 西ノ平古墳	消滅	29	-	-	(無袖形横穴式石室)	-	-	直刀・直刀装具・鉄鏃・金環		3 12
18	伝法 A- 第 5 号墳 兜塚	消滅	26	-	-	-	-	-	(伝) 大刀身・甲冑残片・須恵器片		2 12
19	伝法 A- 第 2 号墳 コンニャク稲荷塚	存在	20	円墳	15	(横穴式石室 ・組合式箱形石棺)	-	(6c 後半 ～ 7c 前半)	刀子・銀環・須恵器片（横瓶）		2 12
20	伝法 A- 第 1 号墳 伊勢塚古墳	存在	15	円墳 (二段)	54	-	-	(6c 初頭)	円筒埴輪片	盾形周溝？ (幅 7-8m、 東側で確認) 上段下段とも 斜面に葺石 県指定史跡 (S33.9.2)	1 9 11 12
21	伝法 A- 第 3 号墳 九郎林塚	消滅	14	円墳	-	(竪穴式石室、 長 3m、幅 1m)	-	-	大刀身・鍍金轡・鍍金鏡板・須恵器（坩）		2 12
22	伝法 A- 第 4 号墳 鏡塚	消滅	13	円墳	-	-	-	-	(伝) 鏡 1		2 12
23	片倉第 4 号墳	存在	195	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
24	片倉第 5 号墳	存在	190	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
25	片倉第 1 号墳	存在	170	-	-	無袖形横穴式石室、段構造 (残存長 4.5m、幅 1.3m、 高さ 1.7m)	南南東	7c 後葉	土師器（てづくね坏数点）		10 11 12
26	片倉第 2 号墳	存在	170	-	-	-	-	-			12
27	片倉第 3 号墳	存在	170	-	-	-	-	-	須恵器片（甕）		12
29	横沢古墳	消滅	97	円墳	16	無袖形横穴式石室、段構造 (改修あり) 第Ⅰ期：全長 8.7 m、幅 2.3 m、床面 1 面（第 3） 第Ⅱ期：全長 7.8 m、幅 2.3 m、床面 2 面（第 1・第 2）	南南東	6c 後半	第Ⅰ期周溝：須恵器片（坏身） 第Ⅰ期前庭部：須恵器（坏身・坏蓋・無蓋高坏・有蓋高坏） 第Ⅱ期周溝：須恵器（大甕）・鉄鏃 第Ⅱ期前庭部：土師器（坏）・須恵器（坏身・坏蓋・長頸壺） 第 1 床面：骨片 第 2 床面：須恵器（坏身蓋 6 セット）・直刀・鉄鏃・刀子 第 3 床面：須恵器（提瓶・甕）・鉄鏃・直刀・刀子・鉸具・矩形立聞式轡・金銅製鈴 5 点・金銅製花形飾鋲・木製金箔製品	周溝 2 本（第Ⅰ期・第Ⅱ期、開口部を除く 2/3 周） 葺石	6 11 12
30	中原第 1 号墳	消滅	83	(円墳)	-	無袖形横穴式石室、段構造 (残存長 3 m、幅 0.95 m)	南南東	(8c 前葉)	玉類（瑪瑙製勾玉・石英製勾玉・碧玉製管玉・琥珀製棗玉・水晶製切子玉・蛇紋岩製臼玉・翡翠製臼玉・ガラス製丸玉・蛇紋岩製丸玉・ガラス製小玉・蛇紋岩製小玉）・刀子・須恵器片（大甕・平瓶）		4 11 12
31	中原第 2 号墳	消滅	78	-	-	無袖形横穴式石室、段構造 (残存長 2.8 m、幅 1.2 m)	南南東	(8c 前葉)	須恵器片（平瓶）		5 11 12
32	土手内第 1 号墳	消滅	80	-	-	無袖形横穴式石室、段構造（全長 6.0 m、幅 1.3 m、床面 2 面）	南南東	7c 末 ～ 8c 初頭	追葬時床面：鉄鏃 6 築造時床面：須恵器（長頸瓶 1・長頸壺 1・甕 1）・土師器（坏 3）・ガラス製小玉 109・鉄鏃 4		7 11 12
33	土手内第 2 号墳	存在	104	-	(6)	無袖形横穴式石室、段構造 (全長 5.4 m、幅 1.0 m)	南南東	-			12
35	土手内第 4 号墳	存在	104		(9.5)	(横穴式石室)	(南南東)	-			12
36	土手内第 5 号墳	存在	105	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
37	土手内第 6 号墳	存在	82	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
38	土手内第 7 号墳	存在	80	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
47	土手内第 16 号墳	存在	84	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
48	土手内第 17 号墳	存在	86	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
49	土手内第 18 号墳	存在	89	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
50	土手内第 19 号墳	存在	87	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
51	土手内第 20 号墳	存在	91	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
52	土手内第 21 号墳	存在	88	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
53	土手内第 22 号墳	存在	84	-	-	横穴式石室（内法長 3 ～ 4 m、幅 1 m）	南南東				12
54	土手内第 23 号墳	存在	88	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
55	土手内第 24 号墳	存在	94	-	-	墳丘状の地膨らみ	-	-			12
56	土手内第 25 号墳	存在	50	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
57	伝法 B- 第 7 号墳	消滅	18	円墳	20	(横穴式石室)	-	(7c 末 ～ 8c 中葉)	須恵器片		2 12
58	伝法 B- 第 8 号墳	消滅	22	円墳	-	(箱形石棺墳)	-	(7c 末 ～ 8c 中葉)	須恵器片 (伝) 大刀身		2 12
59	伝法 B- 第 9 号墳	消滅	17	円墳	-	(箱形石棺墳)	-	(7c 末 ～ 8c 中葉)	(伝) 直刀残片・須恵器片		2 12
60	伝法 B- 第 10 号墳	消滅	15	円墳	-	(箱形石棺墳)	-	(7c 末 ～ 8c 中葉)	(伝) 直刀残片・須恵器片		2 12
61	八ヶ窪第 1 号墳	存在	129	-	-	溶岩の自然石露出	-	-	-		12
62	八ヶ窪第 2 号墳	存在	131	-	-	溶岩の自然石露出	-	-	-		12
63	八ヶ窪第 3 号墳	存在	130	-	-	溶岩の自然石露出	-	-	-		12
64	八ヶ窪第 4 号墳	存在	124	-	-	溶岩の自然石露出	-	-	-		12

古墳番号	古墳名	現状	標高(m)	墳形	墳長(m)	内部主体	開口方向	築造年代	主な出土遺物	備考	参考文献
68	石坂 C- 第 11 号墳	消滅	110	円墳	8	(横穴式石室)	-	-	-		2.12
69	石坂 C- 第 25 号墳 二タ子塚第 1 号墳	存在	110	円墳	(13)	無袖形横穴式石室 (全長 7.1m、幅 1.4m)	南南東	(7c 中葉)	-		12
70	石坂 C- 第 26 号墳 二タ子塚第 2 号墳	存在	108	円墳	(14)	無袖形横穴式石室 (全長 9.0m、幅 1.4m)	南南東	(7c 前半)	須恵器片 (坏・大甕)	周溝 (幅 6 m、北側で確認)	12 24
71	石坂 C- 第 12 号墳	消滅	102	円墳	-	(横穴式石室、組合式箱形石棺)	-	-	(伝) 大刀身残片・須恵器片		2 12
72	石坂 C- 第 13 号墳	消滅	92	円墳	-	(横穴式石室)	-	-	(伝) 須恵器片		2.12
73	石坂 C- 第 14 号墳	消滅	78	円墳	-	(横穴式石室)	-	-	(伝) 須恵器片		2.12
74	石坂 C- 第 15 号墳	消滅	84	円墳	10	-	-	-			2.12
76	石坂 C- 第 16 号墳 カネ山塚	存在	73	円墳	-	(横穴式石室)	-	-	灰釉陶器片 (伝) 直刀・須恵器 (坩)	『吉原市の古墳』では石坂 C- 第 17 号墳	2 12
77	石坂 C- 第 17 号墳	消滅	65	-	-	-	-	-	灰釉陶器片	『吉原市の古墳』では石坂 C- 第 16 号墳	2 12
78	石坂 C- 第 23 号墳	消滅	76	円墳	-	(無袖形横穴式石室)	-	-	(伝) かわらけ (須恵器か土師器 ?)		2.12
79	石坂 C- 第 18 号墳	消滅	41	-	-	-	-	-	須恵器片		2.12
80	石坂 C- 第 19 号墳	消滅	39	-	-	-	-	-	須恵器片		2.12
81	石坂 C- 第 20 号墳	消滅	39	-	-	-	-	-	須恵器片		2.12
82	石坂 C- 第 21 号墳	消滅	39	-	-	-	-	-	須恵器片		2.12
83	石坂 C- 第 22 号墳	消滅	20	円墳	-	-	-	-	(伝) 直刀残片・須恵器片		2.12
84	桑原古墳	存在	60	-	-	一部露出	-	-			12
85	汁谷古墳	消滅	66	-	-	-	-	-	須恵器		12
86	荒久古墳	消滅	68	-	-	無袖形横穴式石室 (全長 6.2m、幅 1.8m)	南南東	(6c 末 ～ 7c 中葉)	須恵器片 (坏身・坏蓋・甕・長頸坩 ?)・土師器破片 (甕)・刀子・鉄片		12 14
585	土手内第 26 号墳	存在	92	-	(10)	良好に残存	南南東	-	須恵器片		12
586	土手内第 27 号墳	存在	101	-	-	側壁 2 段残存(全長 4.7 m、幅 1.0 m)	南東	-	須恵器片 (甕・坏蓋)・土師器片 (てづくね坏)		12
595	東平第 1 号墳	消滅	25	円墳	13	無袖形横穴式石室、段構造 (全長 5.2 m、幅 1.5m、床面 2 面)	南南東	(7c 前葉)	第 1 (上部) 床面：銅製杓子型壺鐙 1 対・鉄製鋏具・金銅製飾金具 4・鉄製方形鏡板付轡 1・矩形立聞式環状鏡板付轡 1・銀象嵌八窓透鍔付大刀 2・大刀 1・丁字型利器 1・鉄鏃・刀子 1 第 2 (下部) 床面：金銅製飾金具 6・鉄鏃・鉄製円頭柄頭 1・刀子 2 周溝：須恵器片 (坏身・大甕・長頸壺・廇)	周溝 (幅 2.2 ~3.2m、南側以外で確認)	13 17
601	中原第 3 号墳	消滅	72	円墳	7.5	無袖形横穴式石室、段構造 (全長 4.5m、幅 0.75m、床面 2 面)	南	(6c 末 ～ 7c 初頭)	耳環 2、武器 (大刀 1・小刀 1・鉄鏃 31 以上)、農工具 (刀子 4 以上)、須恵器 (提瓶 1)	周溝 (幅 1.5 ～ 2m、全周)	15 本書
603	中原第 4 号墳	消滅	73	円墳	11	無袖形横穴式石室、段構造 (全長 5.6 m、幅 1.1 m)	南南西	6c 後半	玉 (勾玉 12・管玉 22・切子玉 24・棗玉 6・臼玉 8・丸玉 115・小玉 232)、武器 (大刀 2・剣 1・鉄鏃 131 以上)、農工具 (砥石 2・鎌 3 以上・鍬鋤先 4・刀子 10 以上・斧 3・鉇 5・鑿 1)、鍛冶具・生産用具等 (鉄鉗 1・鑷子 1・針 14)、馬具 (轡 3・鐙吊金具 2・帯飾金具 6・鋲留金具 2・雲珠？ 1・鋲具 4)、須恵器 (坏蓋 3・坏身 9・廇 6・短頸壺 3・把手付碗 1・提瓶 5・横瓶 2)、土師器 (坏 1)	周溝 (幅 1.5 ～ 1.7m、全周)	15 21 本書
604	中原第 5 号墳	消滅	81	円墳	9	横穴式石室(残存長 2.0 m、幅 1.3 m)	南南東	-	武器 (鉄鏃 1)、農工具 (刀子 1)、須恵器 (壺 1・坏蓋 1)、土師器 (坏 1)		本書
605	中原第 6 号墳	消滅	83	円墳	10	無袖形横穴式石室、段構造 (全長 5 m、幅 1.2 m)	南南東	-	武器 (大刀身片・鏃・鉄鏃 11 以上)、農工具 (刀子 2 以上)、馬具(帯飾金具 2・鉸具 1)、須恵器(壺 1)	周溝 (幅 2 m、南側除く)	本書
609	今泉 6 丁目第 1 号墳	消滅	609	-	-	無袖形横穴式石室、段構造 (推定全長 4.4 m以上、幅 1.4 m)	南南東	7c ？	耳環・須恵器		16
611	西平第 2 号墳	存在	38	-	-	無袖形横穴式石室 (残存長 2.2m、幅 0.65m、床面 1 面)	南	(8c 前半)	-		20
612	西平第 3 号墳	消滅	37	-	-	無袖形横穴式石室 (残存長 1.5m、幅 0.6m、床面 1 面)	南東	(8c 前半)	-		20
613	西平第 4 号墳	消滅	37	-	-	無袖形横穴式石室 (残存長 4m、幅 0.7m、床面 1 面)	南東	(8c 前半)	須恵器片 (長頸瓶・坏身・甕)		20
614	西平第 5 号墳	消滅	38	-	-	無袖形横穴式石室 (推定長 2m、幅 0.6m、床面 1 面)	南南東	(8c 前半)	-		20
615	西平第 6 号墳	消滅	28	-	-	無袖形横穴式石室 (残存長 3.2m、幅 0.9m、床面 1 面)	南南東	(7c 後半 ～末)	-		19
629	国久保古墳	存在	25	円墳	(8)	無袖形横穴式石室、段構造 (全長 4.7m、幅 1.2m)	南東	7c 前葉 ～中葉	銀装大刀柄頭片・鵐目金具 2・鉄製八窓鍔 1・大刀身茎部片・鉄鏃・鉸具造立聞式環状鏡板付轡 1・玉類 (ガラス製雁木玉 1・水晶製切子玉 2・珪化木製丸玉 2・ガラス製丸玉 26)・耳環 1・鉄鐸 1・須恵器片 (坏)	周溝 (幅 1.2m)	23
635	中村上第 1 号墳	消滅	18	-	-	無袖形横穴式石室、段構造 (残存長 4.8m 、幅 1.3m、床面 1 面)	南南西	7c 前葉 ～中葉	須恵器 (フラスコ形長頸瓶 1・提瓶 1)・鉄鏃 3・鉄製刀子 3・銅製耳環 1		22

参考文献

藤村　翔　2011「伝法古墳群の概要」『平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会

第 2 表の参考文献

1　後藤 守一ほか　1958「第四　伊勢塚古墳」『吉原市の古墳』吉原市教育委員会
2　中野 国雄　1958「第五　吉原市域の古墳」『吉原市の古墳』吉原市教育委員会
3　中野 国男　1972「第一章第四節（4）伝法・石坂古墳群」『吉原市史　上巻』 富士市
4　及川　司　1981「古墳時代の調査　第 2 章　中原 1 号墳」『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　横沢古墳・中原 1 号墳　伝法遺跡群（伝法Ａ～Ｅ地区）　天間地区』 富士市教育委員会
5　及川　司　1981「Ⅵ -2　中原第 2 号墳」『左富士臨港線埋蔵文化財発掘調査報告　土手内古墳・中原第 2 号墳・中原遺跡』富士市教育委員会
6　志村　博　1981「古墳時代の調査　第 1 章　横沢古墳」『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　横沢古墳・中原 1 号墳　伝法遺跡群（伝法Ａ～Ｅ地区）　天間地区』 富士市教育委員会
7　志村　博　1981「Ⅵ -1　土手内古墳」『左富士臨港線埋蔵文化財発掘調査報告　土手内古墳・中原第 2 号墳・中原遺跡』富士市教育委員会
8　志村　博　1983「西平第 1 号墳緊急発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』 富士市教育委員会
9　志村　博　1983「伊勢塚古墳周溝緊急発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』 富士市教育委員会
10　志村　博　1983「大渕片倉第 1 号墳石室実測調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』 富士市教育委員会
11　渡井 義彦　1984『第 10 回企画展　富士の古墳文化』 富士市立博物館
12　渡井 義彦　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』 富士市教育委員会
13　久松 義昭　1990『東平第 1 号墳発掘調査概報』 富士市教育委員会
14　久松 義明　1991「荒久古墳発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書 - 第 2 集 -』 富士市教育委員会
15　富士市教育委員会　1994『中原第 3 号墳・第 4 号墳　発掘調査概要報告書』
16　富士市教育委員会　1996『舟久保遺跡　第 20・21・33・34 地区発掘調査報告書』
17　富士市教育委員会　2001 『富士市の文化財』
18　志村　博　2003「第Ⅱ章第 1 節　第 4 地区の調査」『東平遺跡発掘調査報告書』 富士市教育委員会
19　志村　博　2003「第Ⅱ章第 3 節　第 24 地区の調査」『東平遺跡発掘調査報告書』 富士市教育委員会
20　前田 勝己　2003「第Ⅱ章第 2 節　第 23 地区の調査」『東平遺跡発掘調査報告書』 富士市教育委員会
21　前田 勝己　2008「駿河東部の事例報告　富士市中原 4 号墳」『静岡県考古学会 2007 年度シンポジウム　東国に伝う横穴式石室 - 駿河東部の無袖式石室を中心に -』 静岡県考古学会
22　藤村　翔　2010「第Ⅲ章第 1 節－ 1　中村上 1 号墳」『東平遺跡　第 15 地区』 富士市教育委員会
23　藤村　翔　2011「第 3 章　伝法 国久保古墳の調査」『平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
24　富士市教育委員会　2015「第 3 章　石坂 2 古墳群の調査」『富士市内遺跡発掘調査報告書　－平成 24・25 年度－』

第３章　調査成果

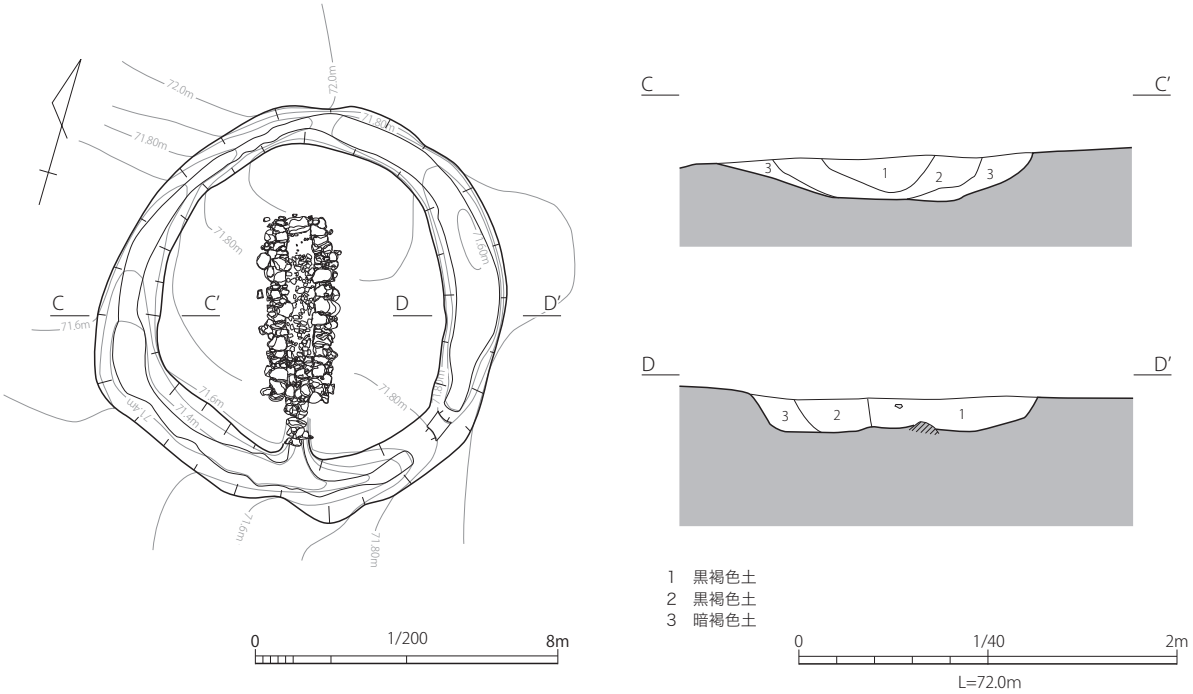
第１節　中原第３号墳

1．現況

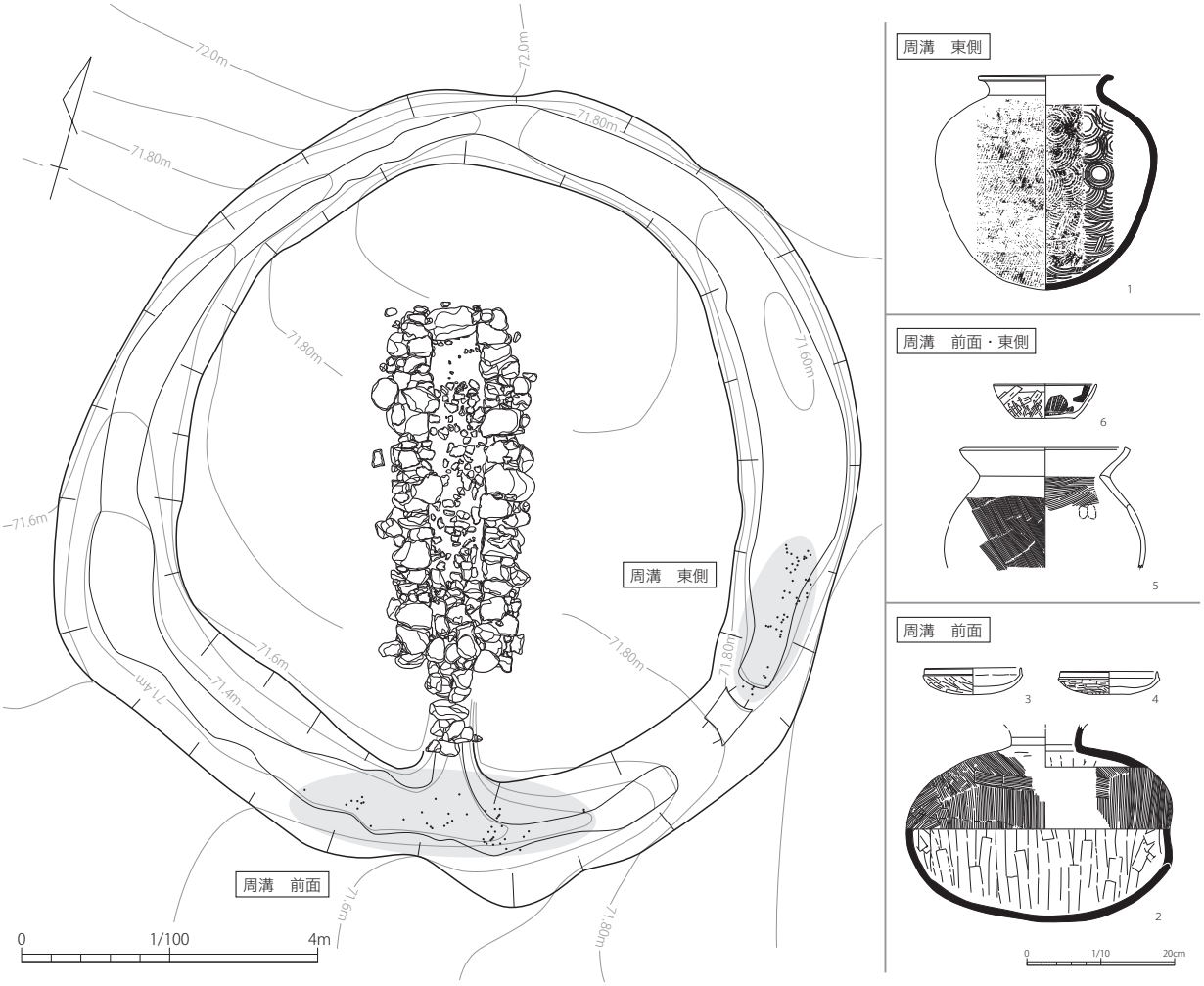
中原第３号墳は、調査以前はその存在が確認されず、高まりなどは認識されていなかった。これは、後世の土地改変の影響もあるが、横穴式石室の大部分が墓坑内部に構築される地下式構造をなしており、墳丘完成時点でも、あまり高まりを認識できなかった可能性もある。

古墳は大淵扇状地上の緩斜面、標高 71.6m 付近（遺構検出高）に築造される。北東に位置する第４号墳との直線距離は約 20m である。

第 20 図　測量図



第 21 図　周溝平面図・断面図



第 22 図　周溝内遺物出土状況図

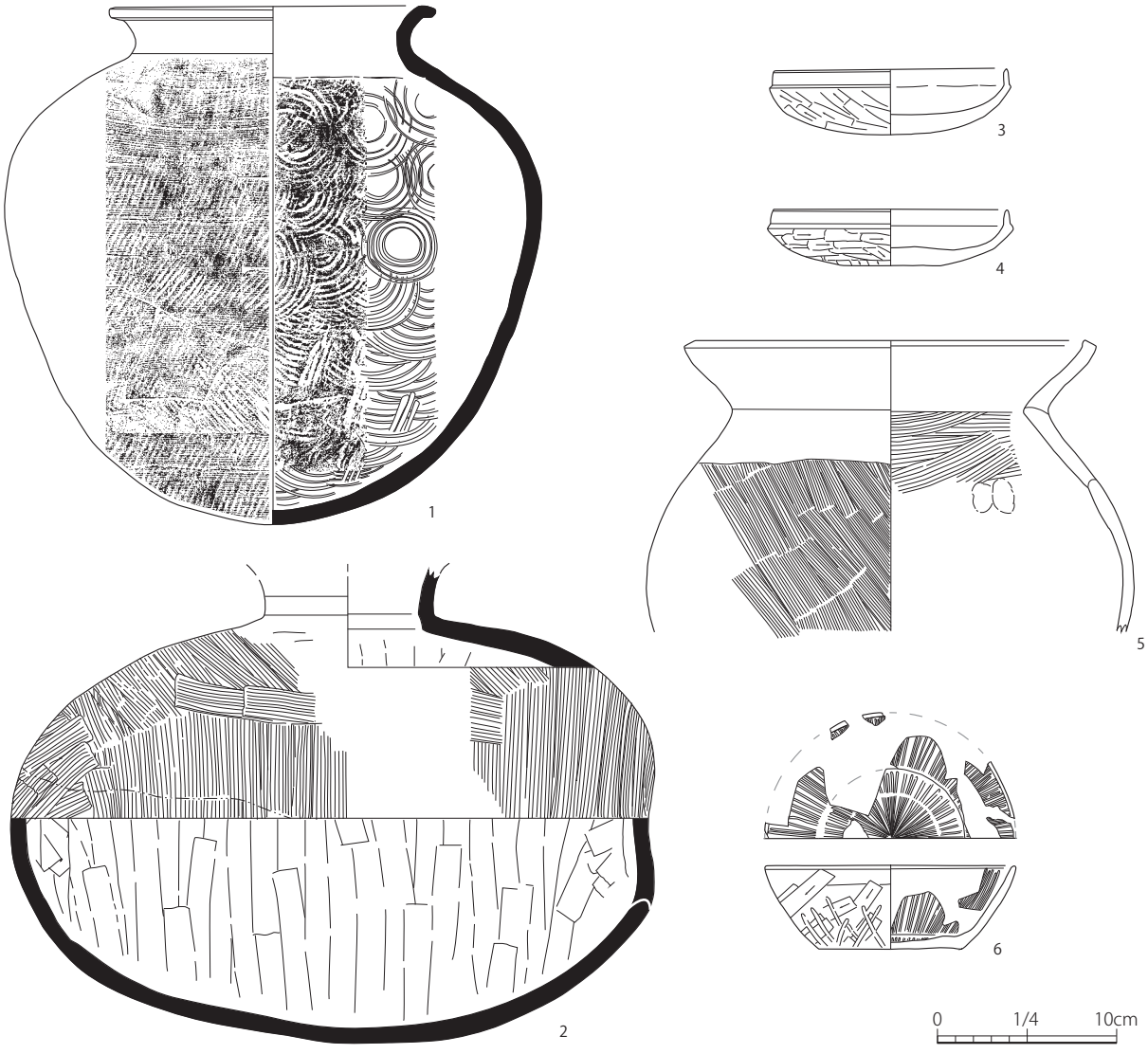
2. 墳丘の構造

墳丘　墳丘盛土は、近世の土地改変、削平により大部分が失われており、一部、横穴式石室の裏込め埋土が残存するのみであった。

周溝　周溝は、歪な形ながら円形を呈し、全周する。所々に平面的に直線を呈する部分がある。周溝断面は浅い台形を呈する。上面は削平を受けているものと考えられるが、西側の周溝上端幅は 1.67m、下端幅 0.64m、東側は上端幅 1.51m、下端幅 1.00m を測る。周溝の深さは最大で 25cm を測る。なお、自然地形の影響から周溝底の高さは周溝南側が北側に比べ 40cm 程度低い。墳丘規模は、周溝内側では東西 7.54m、南北 8.39m、周溝を含めた総長は東西で 10.76m、南北 10.67m を測る。墳丘の中心点は、石室の中心にほぼ一致している。

周溝出土遺物　周溝からは、須恵器 2 点、土師器 4 点が出土している（第 23 図）。須恵器は大甕 1（1）、横瓶 1（2）、土師器は坏 3 点（3・4・6）、甕 1 点（5）であるが、土師器坏の 6 は、明らかに古墳の築造年代とは異なる。いずれの土器も出土状況の詳細な記録がない為、検討を行う事が出来ないが、周溝の東側から須恵器甕（1）が出土し、石室前面の周溝内より須恵器横瓶（2）、土師器坏（3・4）が出土している。土師器甕（5）、坏（6）は、それぞれのまとまりから破片が出土している。

須恵器　1 は須恵器の甕。破片で出土したものの全体のパーツの 9 割程度が残存する。やや肩の張る扁平な胴部に、短く太い口頸部がつく。内面は同心円状の当て具痕が明瞭で、外面のタタキは格子目ではなく線状のタタキで、キザミが深いのが特徴と言える。胴中位よりやや



第 23 図　周溝内出土遺物実測図

下から頸部にいたるまでタタキを消すようにカキメが施される。カキメは 1cm あたり 11 から 12 本程度と細かい。口縁部は強く外反し、口唇部でさらに強く反る。口径 17.5cm、器高 28.9cm、胴部最大径 30.0cm を測る。

2 は俵形の胴部に太い頸部をもつ横瓶で、口縁部が欠損する。口縁部を接続するための穴を開けるまで、胴部の長軸を垂直方向に立てながら成形・調整していることが観察される。外面は、自然釉の影響で調整が観察しにくいが、タタキ後にほぼ全面にカキメが施される。一方、内面調整には当て具痕は確認されず、板状工具によるナデ調整のみである。俵形胴頂部の一方の外面が大きく凹んでいる現象は、粘土を積み上げた際の口部分にあたるためと考えられる。外面にカキメを施した後、口縁部接合のために側面に穴をあけ、別作りした口縁部を接合している。胴部径 36.0cm、残存高 26.5cm を測る。

土師器　3、4 は須恵器坏蓋模倣の土師器坏である。ともに底部の器壁が 1cm 以上と厚い。口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。内面はナデ調整、外面は口縁部以外はナデ調整の後、ケズリ調整を施す。底部外面は同一方向でケズリ、立ち上がった部分については手持ちで回転させながら削っている。3 は、口径 12.9cm、器高 3.7cm、4 は口径 13.0cm、器高 3.1cm を測る。

5 は胴下半部を欠損する甕である。肩はあまり張らず、頸部が緩やかに屈曲し口縁部にいたる。口唇端部上面は平坦に調整され、その際に、内面端部を意識的に内側に若干突出させている。この技法は、8 世紀にこの地域で広くみられる「駿東甕」にみられる技法であり、その萌芽と評価できる。外面は斜め方向の細かいハケ目調整を施し、頸部付近より上方は回転ナデ調整。胴部内面はハケ目を消すようにナデが施されるが、頸部内面についてはハケ目が残る。胎土にはカワゴ平パミスの可能性が考えられる白色粒子を多量に含む。図化した部分で 4 割程度の破片が残存する。口径 21.7cm、器高（残存）16.3cm を測る。

6 は平安時代の坏である。外面はヘラケズリの後、ヘラミガキ調整を施す。内外面ともに入念にヘラミガキが施され、光沢をもつ。特に内面、見込み部のミガキは丁寧である。口径 13.9cm、底部径 8.4cm、器高 5.3cm を測る。周溝から出土しているが、古墳築造との間に 200 年以上の時間差が存在する。墓前祭祀に伴うのか、古墳に伴わない遺物なのか明らかでない。

3. 埋葬施設の構造

埋葬施設は、南南東に開口する段構造（框石）を有する無袖形横穴式石室（有段無袖形石室）である。墓坑上面の削平に伴い、天井石および側壁の一部が失われているものの、築造当初の形状を比較的良好に留めている。

墓坑　墓坑は竪穴構造の隅丸方形で側壁側のみ 2 段、奥壁側、入り口側は 1 段に掘削されていた。すべての石材が墓坑の内側に設置されている。

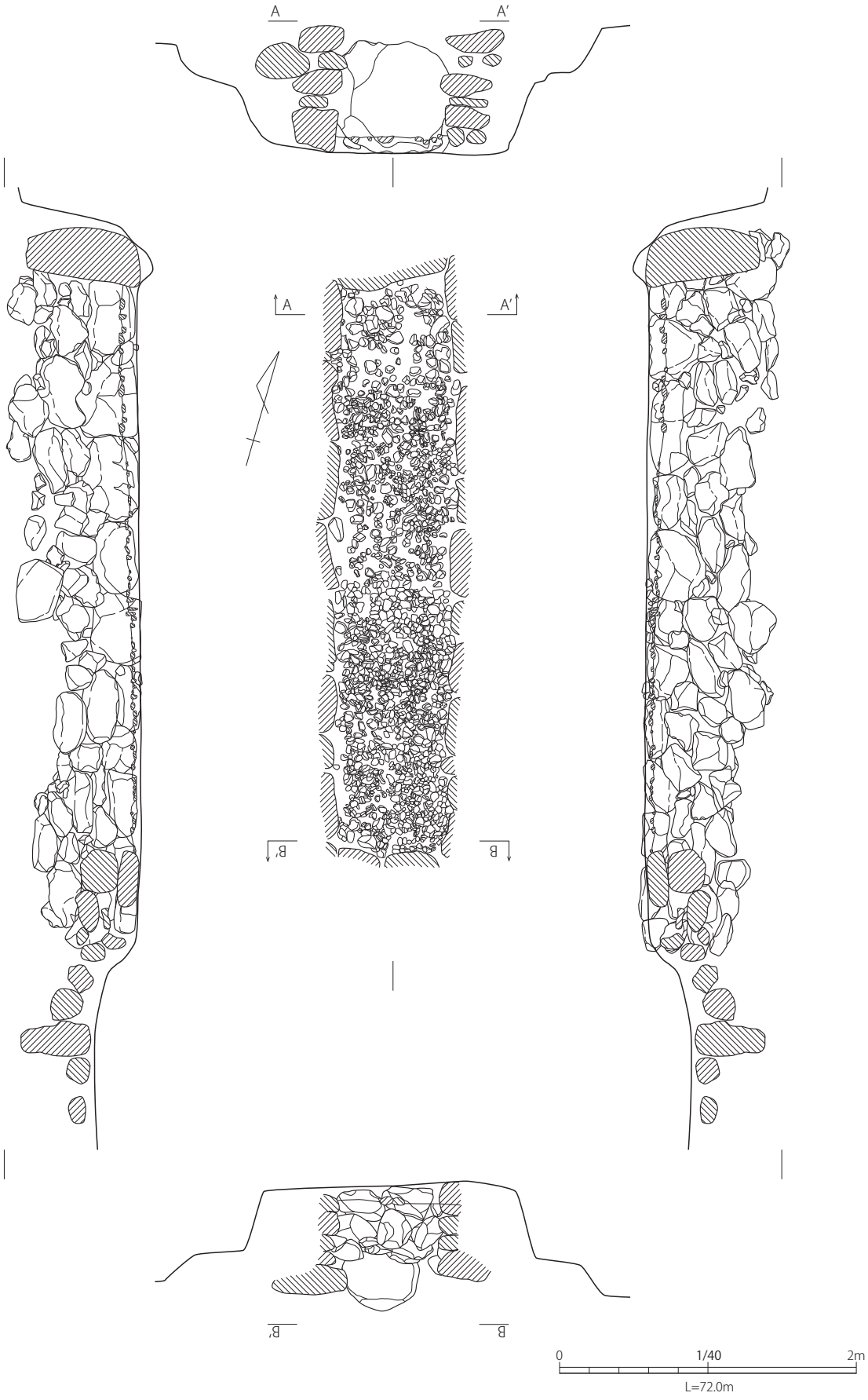
規模は、1 段目（外側）で幅 3.07m、長さ 5.40m、2 段目（内側）で幅 2.15m で長さは 1 段目と同じである。また、深さは 1 段目から床面までが 72cm、2 段掘り込み面から床面までが 45cm を測る。石室石材は、墓坑の内部におさまるものと考えられる事から、地下式構造と言える。

閉塞部・墓道　墓坑の南側には、幅 0.70m、長さ 0.93m の墓道の様な掘り込みが認められる。後述するように段構造（框石）は 2 段分存在したとする調査所見がある。墓道中央に立石のようにある石は閉塞石を留める役割を持っていたと考えられる。しかし、調査時に段構造（框石）と閉塞石をどこまで明確に区分していたのか明らかではない。次章の藤村論考（第 4 章 2 節）にて検討するように、段構造の考え方に修正を加えなければならない可能性もあるが、ここでは調査時の所見を尊重しておくこととする。

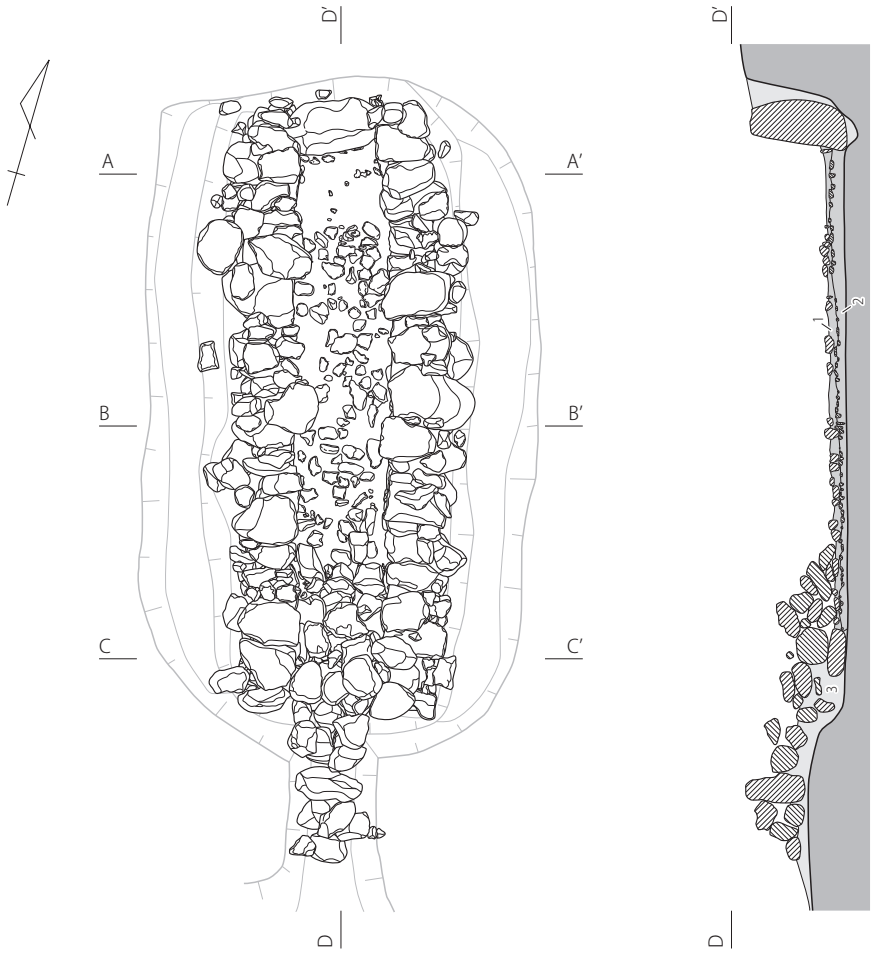
石室　玄室平面形は長方形で胴張りなどは認められない。主軸方位は N－164°－E、石室全長 4.57m、玄室長 3.85m、玄室幅 0.83m（中央）、0.67m（奥壁）、0.75m（玄門幅）を測る。

奥壁・側壁　奥壁には高さよりも幅をもつ大型の石材を使用する。側壁の基底石は、右側壁が石材の長手面を石室内側に向ける平積みなのに対して、左側壁は小口積みの部分が目立つ。

左側壁（東側壁）、右側壁（西側壁）ともに 3 段分ないし 4 段分が残存する。奥壁・基底石の設置後、3 段分積んだところに横目地が見え、この高さが奥壁上端高とほぼ一致する事から、この高さで一度水平面を作り出す工程が存在した可能性が高い。ただし、基底石上面の高さをそろえる為に、部分的に 2 段積む事で、基底石の段階で高さを整える造作も見出す事が出来る。この基底石の高さが段構造の框石の上端レベルに一致する事からも、奥壁上端高よりも前に、基底石で高さをそろえていると考えられる。



第 24 図　石室展開図



1　暗茶褐色砂礫土
　　しまり・粘性弱。径１㎝前後の礫を多量含む。
　　第１床面構築土
2　濁茶褐色土
　　しまり強、粘性やや強。地山の黄茶褐色土が多く混ざる。
　　発泡スコリア粒をやや多量、赤色粒・白色粒を微量含む。
　　第２床面構築土
3　濁暗黒褐色土
　　しまり・粘性やや強。地山の黄茶褐色土が混ざる。
　　発泡スコリア粒・溶岩角礫をやや多量含む。
　　石室前面構築土
4　暗褐色砂質土　石室構築土
5　黄色砂質土　　石室構築土
6　暗褐色砂質土　石室構築土
7　暗褐色砂質土　石室構築土
8　黄褐色砂質土　石室構築土

0　1/60　2m
L=72.0m

第 25 図　石室平面図・断面図

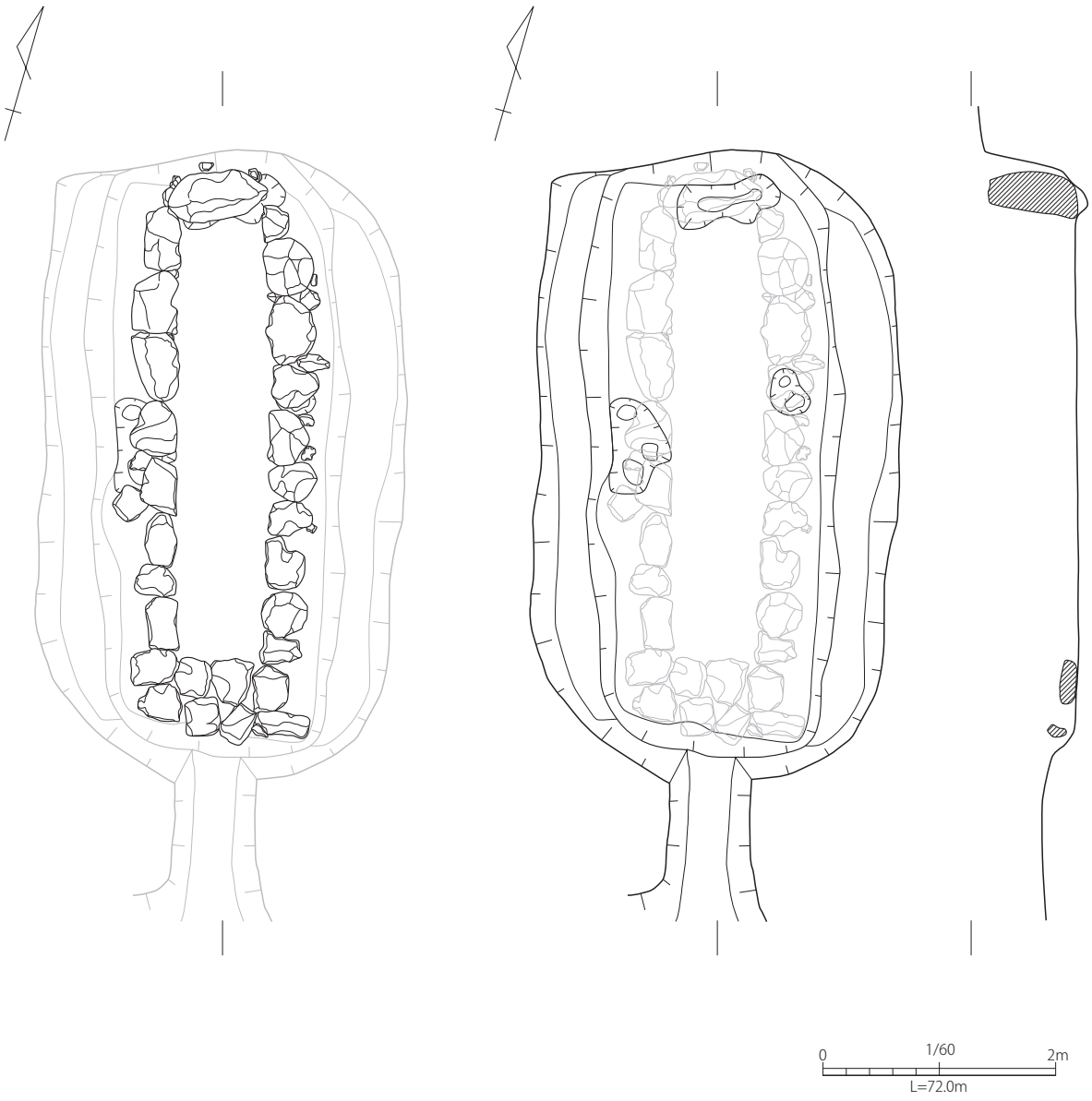
また、左側壁の基底石で奥壁から 10 石目、右側壁で 8 石目、この石を境に前面の側壁は框石により隠れる事で前庭側壁としてとらえられる様になるが、この石を基点に斜め方向に目地が観察される。その事から側壁を奥壁上端高まで積んだ後に、前庭部側壁を積み上げた可能性が考えられる。

段構造（框石）　石室の入り口部分には、墓坑 2 段目の南壁に沿うように、前後左右 2 列ずつ、上下 2 段分の石積みが認められる。

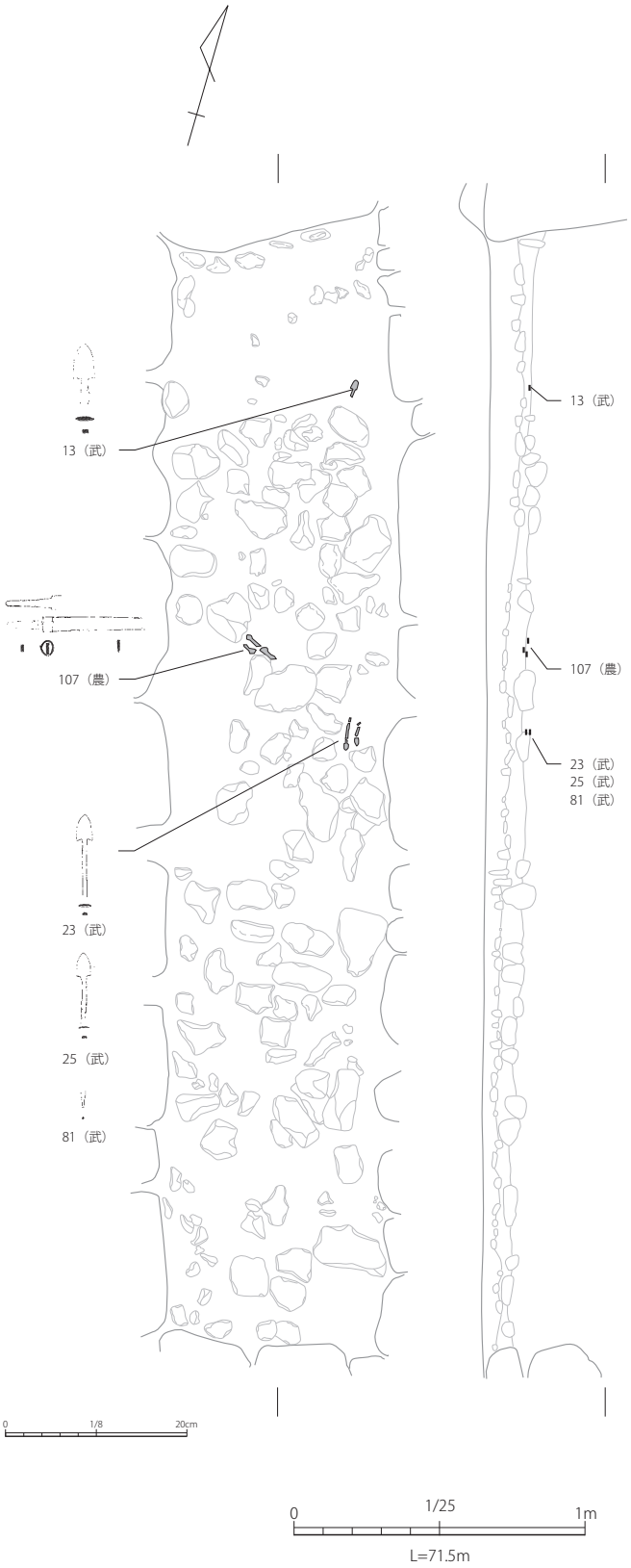
これらの石積みは、埋土とともに石室側壁の積み上げと同時に行われているものと考えられる。基底石で観察すると、前述の奥壁より 10 石目の左側壁と 8 石目の右側壁の前面を結ぶと石室主軸に直交せずに曲がっている。その結果、追加される前庭部側壁 2 石分の前面にも影響を与え、玄室側壁の前面が斜めであることに合わせて框石の内側も斜めになっている。段構造部分の高さは、床面より 40cm を測る。

床石　床面は 2 面認められる。以下では、上面を第 2 次床面、下面を第 1 次床面と呼称する。

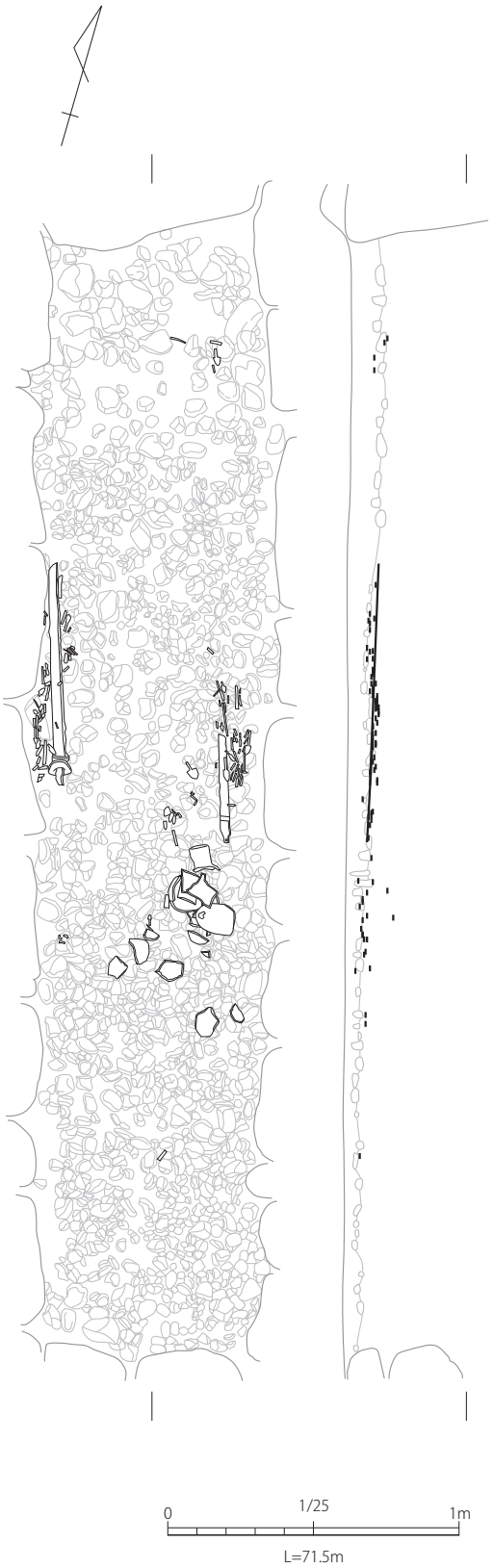
第 2 次床面は石室掘り方より 13cm 上層にあり、直径 10cm 程度の石がまばらに敷かれている。第 1 次床面は第 2 次床面と異なり、直径 5cm 程度の小さな石がほぼ全面に敷かれている。いずれの面にも屍床仕切石など玄室を空間的に区分する造作は認められない。



第 26 図　石室基底石・基底石据え方・墓坑実測図



第 27 図　石室遺物出土状況図（第 2 次床面）



第 28 図　石室遺物出土状況図（第 1 次床面）

第 29 図　第 1 次床面の遺物出土状況

4. 副葬品出土状況

床面は、2 面に区別し調査を進めた。その為、それぞれ分けて記述することとする。なお､上面を第 2 次床面、下面を第 1 次床面として記載する。

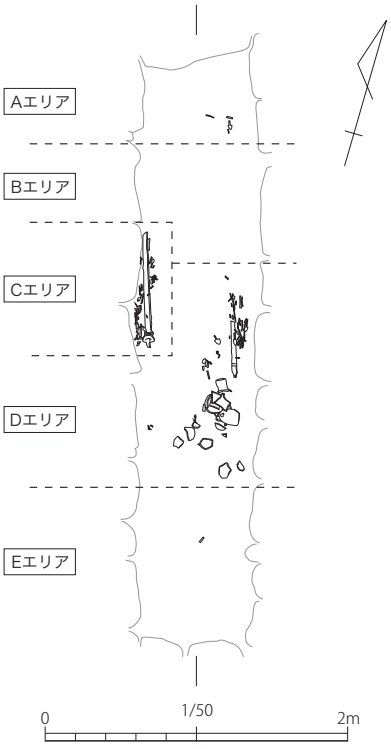
第 2 次床面（上面）　第 2 次床面出土とされたものは、鉄鏃 4 点（13・23・25・81）、刀子 1 点（107）である。

鉄鏃 13 は奥壁より 50cm 入り口側で､やや左側壁（東側壁）によった場所で鏃身先端を奥壁側に向けるように出土した。また、23・25 の鉄鏃は奥壁より 1.65m の付近で、やはり中央よりやや左側壁に寄った場所で鏃身部を入り口側に向けて 2 本が並ぶように出土した。

一方、刀子（107）は、奥壁より 1.3m 付近での単独の出土である。

以上のように、第 2 次床面の遺物は少数であり、まとまりがないことから原位置を保っている遺物はないものと考えられる。

第 1 次床面（下面）　第 1 次床面からは図化しただけで総数 97 点の遺物が出土している。位置別の出土状況を示す上で、石室内における遺物のまとまりや遺物が出土しない範囲からＡ～Ｅの 5 つの空間的グルーピングを行った。



第 30 図　石室エリア区分図

第 3 表　石室遺物出土状況一覧表（第 1 次床面、エリア別）

	装身具	2	武器			74	農工具	2	馬具	0	土器			1
			大刀・小刀	2	鉄鏃	72					須恵器	1	土師器	0
A	総点数	0	総点数	0	総点数	3	総点数	0	総点数	0		0		0
					【尖長三】20.21	2								
					【不明】97	1								
B	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0
C	総点数	0	総点数	1	総点数	22	総点数	1	総点数	0	総点数	0	総点数	0
			【大刀】9	1	【尖三】24	1	【刀子】105	1						
					【尖片】35.39	2								
					【不明】44.45.48	19								
					49.51.52									
					58.61.66									
					68～70									
					77～79.91									
					96.101.102									
D	総点数	2	総点数	1	総点数	47	総点数	0	総点数	0	総点数	1	総点数	0
	【耳環】7.8	2	【小刀】10	1	【平腸柳】11.12	2					【提瓶】108	1		
					【平三】14.15	2								
					【尖柳】17～19	3								
					【尖長三】22	1								
					【尖三】27.28	2								
					【尖片】29～34	9								
					36～38									
					【不明】26.42.46.50	28								
					54～57.59									
					60.62.64.65									
					67.71.72									
					74～76									
					83～86									
					92～95.100									
E	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	1	総点数	0	総点数	0	総点数	0
							【刀子】104	1						

※ 【　】内の略号は以下の種別・形式を示す。
鉄鏃 【平腸柳】平根腸抉柳葉式 【平三】平根長三角形式
【尖三】尖根三角形式 【尖長三】尖根長三角形式 【尖柳】尖根柳葉式
【尖片】尖根片刃箭式 【不明】形式不明（頸部・茎部など）

Aエリア：奥壁周辺エリア

Bエリア：玄室中央よりやや奥のエリア（遺物なし）

Cエリア：玄室中央の右側壁（西側壁）エリア

Dエリア：玄室中央エリア

Eエリア：玄室入り口部分

以下、このA～Eのエリア区分を基に記述していくこととする。

Aエリア（奥壁周辺エリア）

奥壁の前面約50cm程度のエリアである。

このエリアからは、鉄鏃3点（20・21・97）が出土するのみである。20･21は尖根長三角形式鉄鏃で､97は、茎部である。いずれも主軸より左側壁側（東側壁）から出土しているが、まとまりがない。

Bエリア（玄室中央やや奥）

このエリアからは､1点の遺物の出土も確認されない。

仮に第2次床面の遺物が第1次床面の遺物の混入だとしても、このエリアからは遺物は出土していない為、このエリアは副葬品を置くエリアとしては認識されていなかったと言える。

Cエリア（玄室中央右側壁エリア）

このエリアは南北90cm、東西20cm程度の範囲を指すが、この範囲から、大刀1点（9）、鉄鏃22点（24・35・39・44・45・48・49・51・52・58・61・66・68・69・70・77・78・79・91・96・101・102）、 刀子1点（105）が出土している。

大刀（9）は鍔が装着された状態で、切先を奥壁側に向け､刃部を右側壁方向から床面に向ける様に出土した。

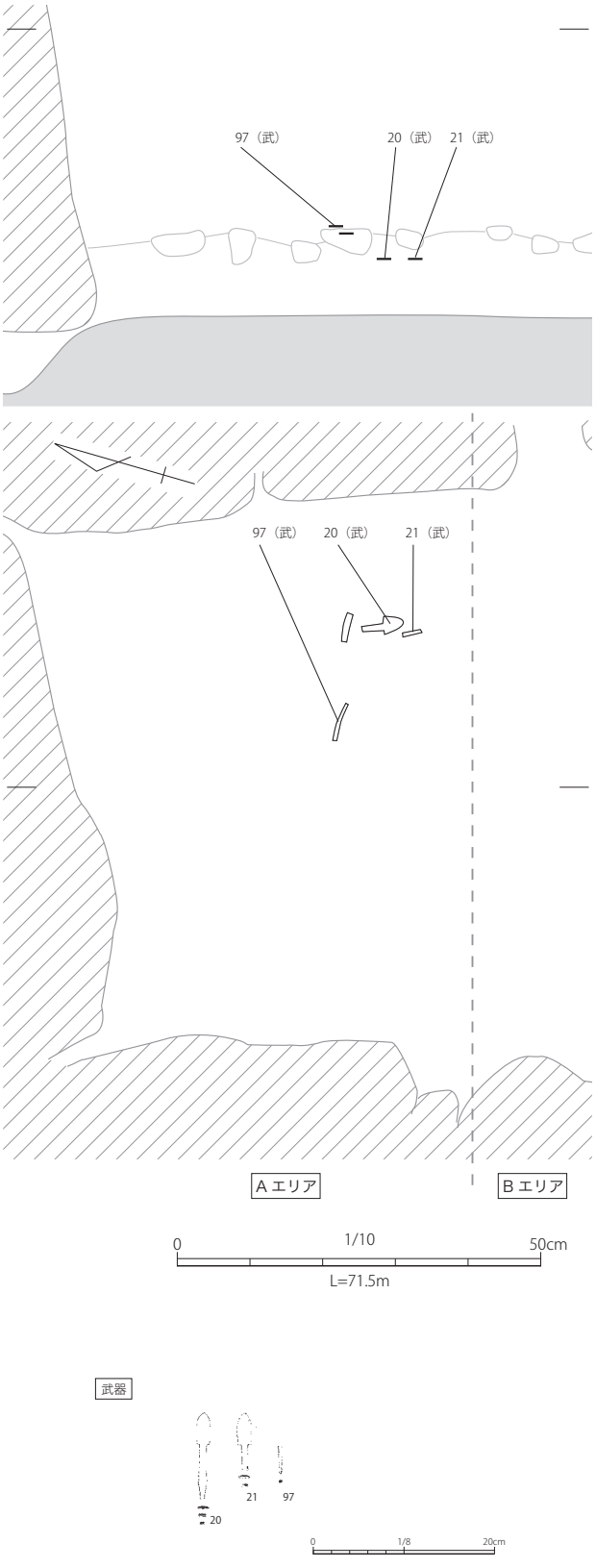
鉄鏃は、大刀の鍔付近では右側壁と大刀の間から、大刀の切先付近では大刀の東側から出土している。24は尖根三角形式、35・39は尖根片刃箭式、他の19本は形式不明だが、尖根式と考えられる。

唯一の農工具である刀子（105）は大刀の切先付近において切先をそろえる様に出土しており、鉄鏃・刀子ともに大刀の配置を意識した配置と言える。工具として捉えるよりも被葬者佩用品として区分する必要もあるが、以下では農工具としておく。

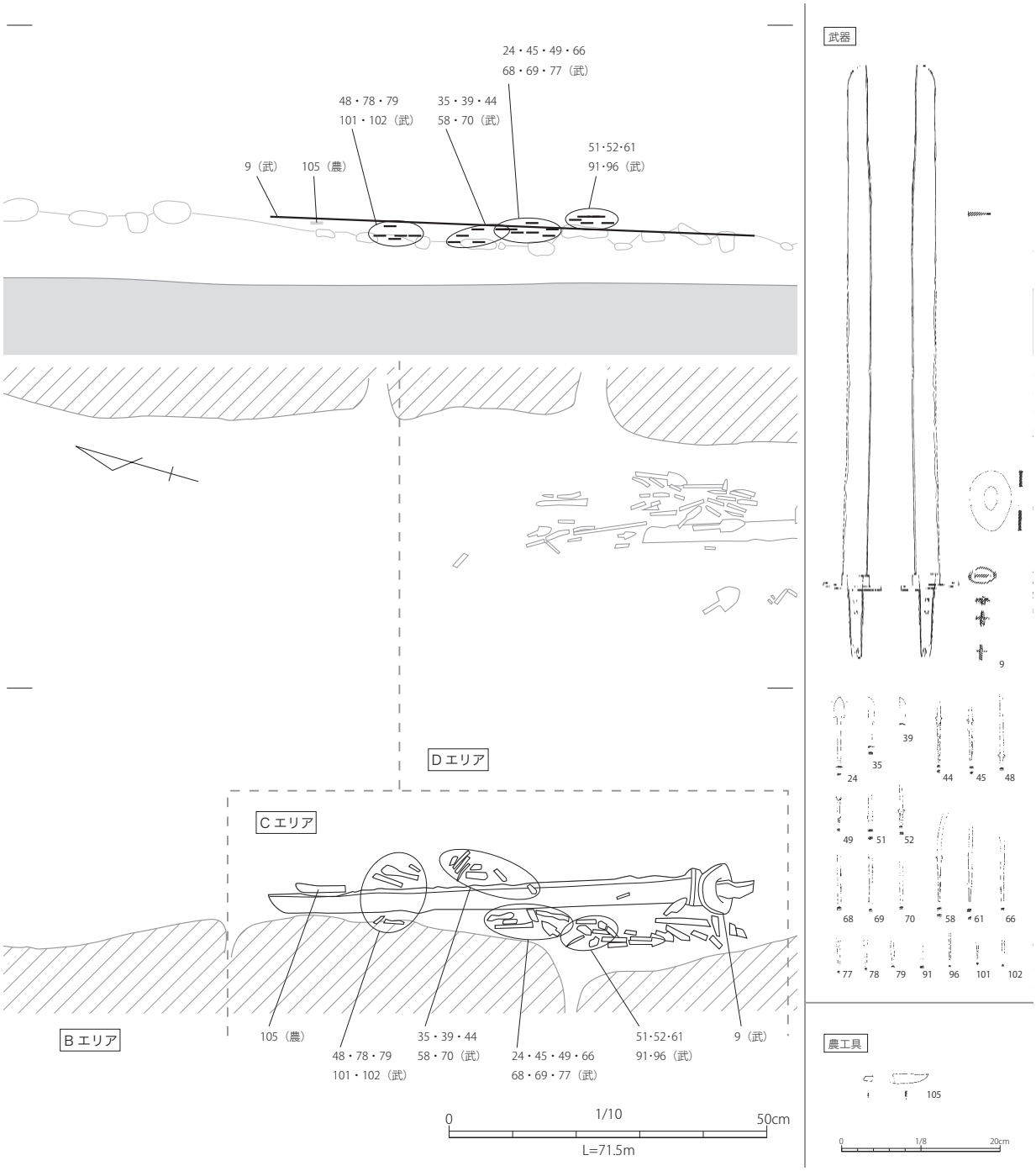
Dエリア（玄室中央エリア）

最も遺物がまとまって出土したエリアである。

このエリアからは､耳環2点（7･8)､小刀1点（10)､鉄鏃47点（実測点数)､須恵器提瓶1点（108）が出土している。



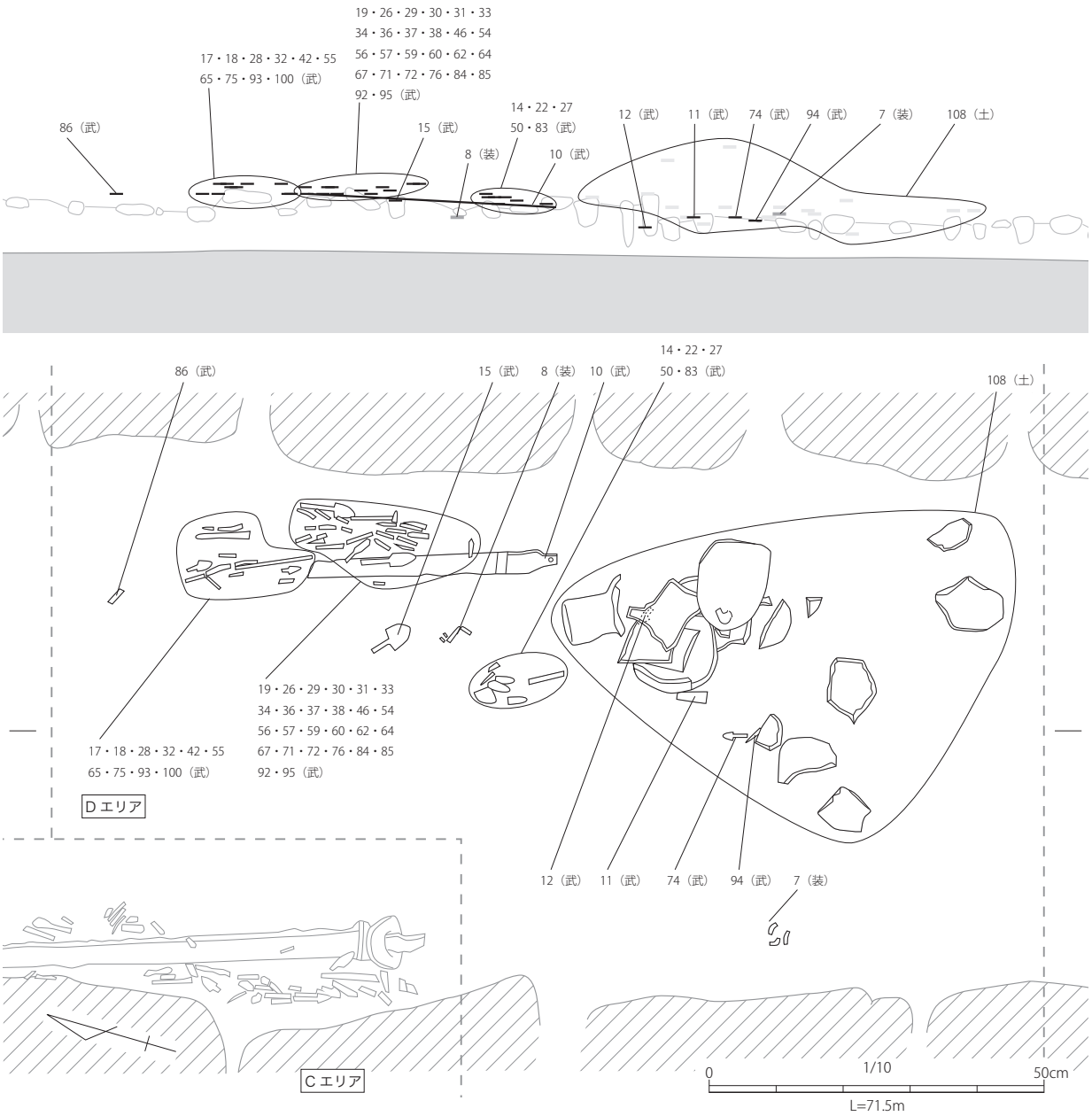
第31図　遺物出土状況図・出土遺物一覧図（Aエリア）

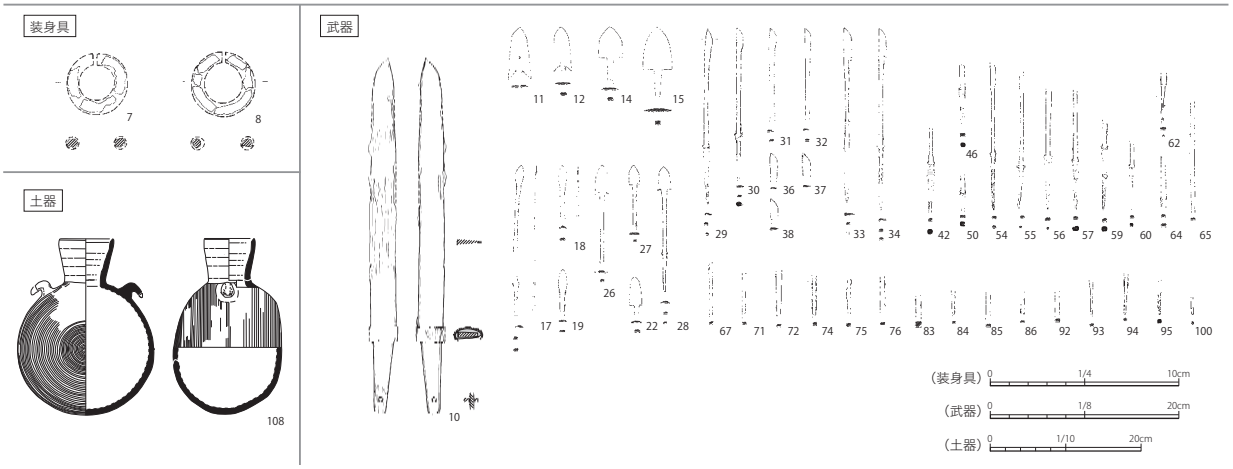


第 32 図　遺物出土状況図・出土遺物一覧図（C エリア）

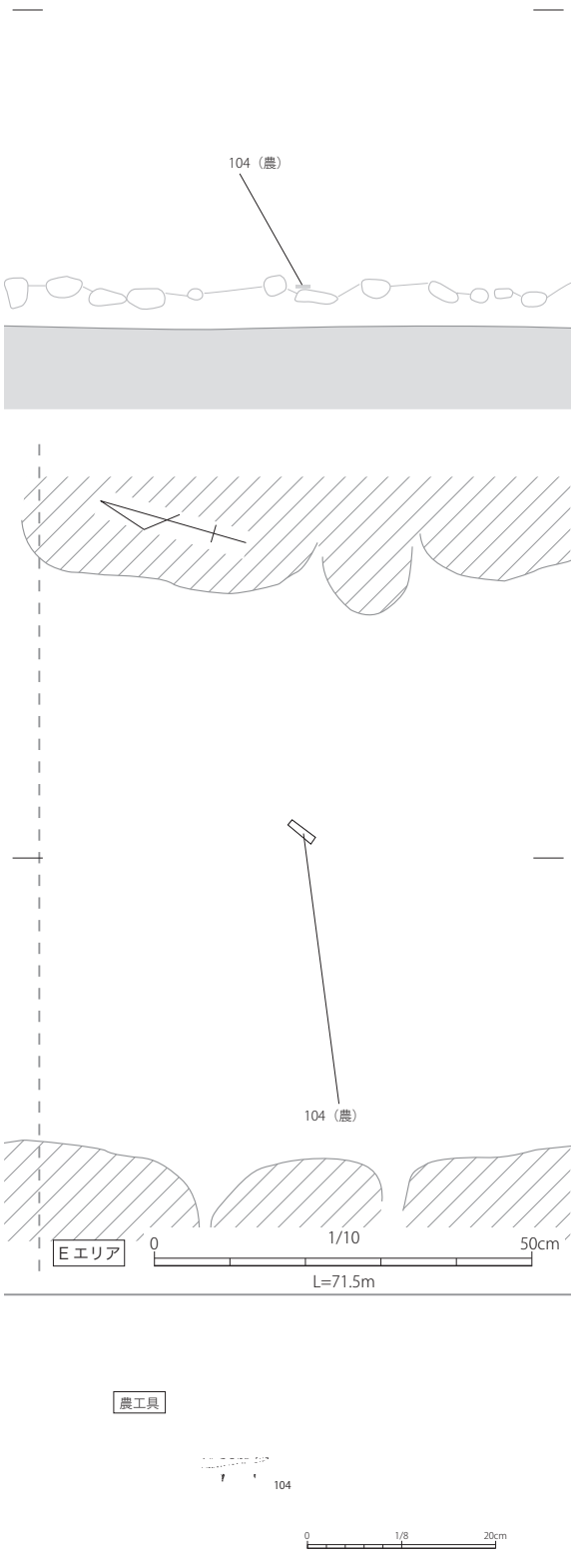
第 33 図　Cエリアの遺物出土状況

第 34 図　Dエリアの遺物出土状況





第 35 図　遺物出土状況図・出土遺物一覧図（D エリア）



第 36 図　遺物出土状況図・出土遺物一覧図（E エリア）

耳環 2 点（7・8）は 60cm 程度離れて出土している。8 はDエリアのほぼ中央の主軸よりやや東側から出土し、7 は他の遺物のまとまりから離れた右側壁付近からの出土である。2 点ともスズ製という特殊なつくりの耳環である。大刀（10）の側から出土している 8 は原位置の可能性が高いが、7 の耳環は追葬時などに移動された可能性が高い。

小刀（10）には鍔が装着されていない。主軸よりやや東側において大刀同様、切先を奥壁側に向けて出土した。

鉄鏃の出土位置は大きく分けて、小刀付近とそれ以外と区別する事が出来る。平根式の 4 点（11・12・14・15）はいずれも小刀周辺ではなく、後述する提瓶（108）周辺や耳環（8）周辺から出土している。一方、尖根式の鉄鏃については、片刃箭式鉄鏃の 32 を除く 8 点（29 ～ 31・33・34・36 ～ 38）は小刀中央付近において比較的まとまって出土しており、遺物の移動がないという前提で言えば、副葬時に意識されて配置された可能性が高い。

石室内唯一の須恵器提瓶（108）は割れた状態でDエリアの南側から出土した。平面的なまとまりは南北約 65cm、東西約 50cm の範囲からの出土である。破片数は 16 片を数え、残存率は 90％である。口頸部の破片は、小刀の茎部南側において口を奥壁側に向けて出土している。ほとんどの破片は床面もしくは若干浮いた高さから出土しているものの、2 点だけ、他の破片から 10cm ほど高い場所から出土している。しかし、大部分の破片がまとまって出土していること、破片の残存率が高いことなどから埋葬位置からさほど移動されていないが、追葬時などに割れたものと推測される。土器が割れた原因が人為的なのか、土圧によるものなのかについては出土状況からは明らかではない。

Eエリア（玄室入り口付近）

このエリアからは、刀子片 1 点（104）のみが出土している。床面付近からの出土ではあるが、1 点のみの出土であり、原位置を留めていない可能性が高い。

以上のように耳環の 1 点や大刀、小刀、須恵器提瓶が副葬時の原位置を保っているのであれば、これらは初葬時の遺物と判断され、さらに被葬者は大刀と小刀の間の石室中央に頭位を南側にして埋葬されたことが想定される。

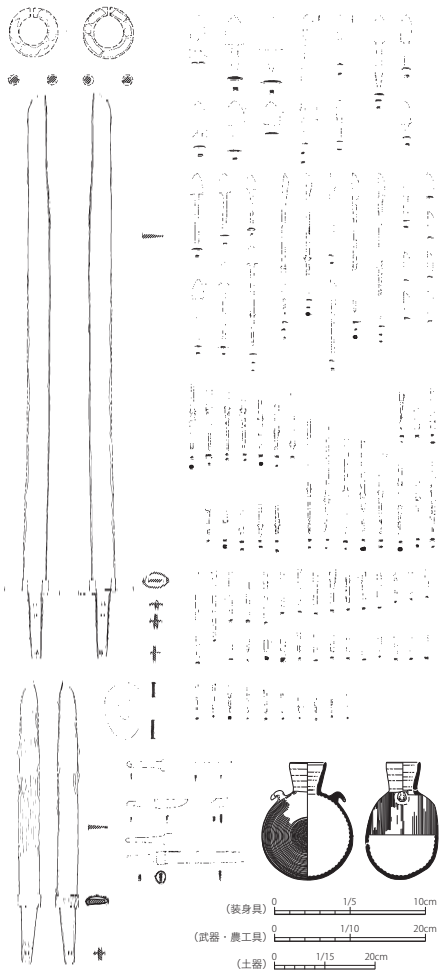
第 37 図　出土した遺物

5. 副葬品

構成　中原第 3 号墳では床面が 2 面確認されている。ただし、第 2 次床面（上面）出土の遺物は点数が少なく、第 1 次床面の遺物の移動の可能性もある。そのため、一括して扱うこととする。

副葬品は装身具（耳環）2、大刀 1、小刀 1、鉄鏃最低 31、農工具（刀子）最低 4、土器（須恵器提瓶）1 で構成される。鉄鏃は平根式 6、尖根式 25 である。刀子は関の数から最低 4 個体存在する。

年代　須恵器の提瓶は遠江編年Ⅲ期に見られる器種で吊り手も比較的丁寧に仕上げられており、Ⅲ期後葉（TK209 型式併行）に位置づけられる。また、鉄鏃は関のほとんどが棘関で台形関が数点しか認められていない。棘関の出現が TK43 型式であることと須恵器の年代は矛盾しない。また、周溝出土の土師器坏（3・4）の年代とも一致する。以上のことから、中原第 3 号墳の副葬品は 7 世紀初頭（TK209 型式期）に位置づけられる。

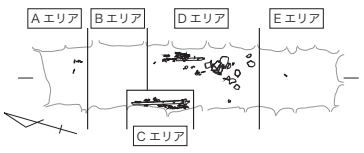


第 38 図　石室出土遺物一覧図

第 4 表　石室出土遺物一覧表（種類別）

遺物の種類	出土点数	遺物			出土状況					
		報告番号	挿図	図版	出土エリア					
装身具	**2**							**D**		
耳環	2	7・8	第 39 図	PL.9				●		
武器（刀剣）	**2**				**A**		**C**	**D**		**2 次**
大刀	1	9	第 40 図	PL.9			●			
小刀	1	10	第 41 図	PL.9				●		
武器（鉄鏃）	**31 ＋**									
平根式	6 ＋									
・腸抉柳葉式	2	11・12	第 43 図	PL.10・11				●		
・三角形式	4	(13) 14 ～ 16	第 43 図	PL.10・11				◎		○
尖根式	25 ＋									
・柳葉式	3	17 ～ 19	第 43 図	PL.10・11				●		
・長三角形式	3	20 ～ 22	第 43 図	PL.10・11	◎			○		
・三角形式	6	(23・25) 24・26 ～ 28	第 43 図	PL.10・11			○	◎		○
・片刃箭式	13	29 ～ 41	第 43 図	PL.10・11			○	●		
農工具	**4 ＋**						**C**		**E**	**2 次**
刀子	4 ＋	103 ～ 106 (107)	第 45 図	PL.12			○		○	○
土器	**1**							**D**		
須恵器	1									
・提瓶	1	108	第 46 図	PL.8				●		

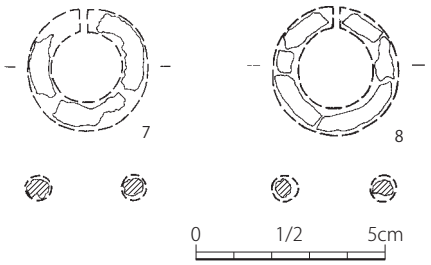
※ 報告番号の（）は第 2 次床面出土遺物であり、それ以外は第 1 次床面出土遺物である。
※ 石室内第 1 次床面においては遺物のまとまりからＡ～Ｅの 5 つの空間的グルーピングを行った。
　Ａエリア：奥壁周辺エリア
　Ｂエリア：玄室中央よりやや奥のエリア（遺物なし）
　Ｃエリア：玄室中央の右側壁エリア
　Ｄエリア：玄室中央エリア
　Ｅエリア：玄室の入り口部分
※ 出土状況の凡例
　●…80%以上
　◎…50 ～ 79%
　○…49%以下



装身具

耳環（第 39 図 7・8）

2 点の耳環が出土している。ただし遺存状態が悪く推定復元の図しか提示できない。外径 3.2cm、内径 1.9cm 程度に復元される。蛍光X線分析によりスズ製であることが明らかとなっている。分析では少量の鉄も検出されたが、不純物なのか表面の汚染（土壌成分）かは明らかではない。



第 39 図　耳環実測図

武器

大刀（第 40 図 9）

反りのない直刀で、鍔、鏃が装着された状態で出土した。ふくらの張る切先で、関は両関角関である。茎はやや細くなりながらも直線的に茎尻に向かう。茎尻は一文字尻である。茎には 3 箇所の目釘孔が確認され、いずれも鉄製目釘が残存する。現状では、身には木質は確認できない。

全長 74.5cm、刀身部長 64.0cm、刀身幅 3.0cm、棟厚 0.6cm、茎部長 10.5cm、茎幅最大 1.7cm（茎尻付近 1.2cm）、茎厚 0.5cm を測る。

鍔は無窓鍔で、平面形は倒卵形で先端がやや尖る。何らかの要因で片側が若干反りあがっている。内孔もほぼ同じ形で先端部がややとがる形態を示す。縁部断面はT字形を呈している。

長軸 7.5cm、短軸（幅）5.3cm、内孔長軸 2.95cm、内孔短軸（幅）1.7cm を測る。

鏃は関部分に装着される。断面倒卵形で長さ 1.3cm、断面の長軸 3.5cm、幅 2.0cm を測る。

小刀（第 41 図 10）

ほぼ反りがなく幅の広い直刀で、鏃が装着されている。棟部分の切先が細く、ややふくらが張る。関は両関角関である。茎はやや細くなりながらも直線的に茎尻に向かう。茎尻は一文字尻である。茎には 1 箇所の目釘孔が確認され、鉄製目釘が残存する。刃部、茎部ともに木質が残存する。

全長 37.0cm、刀身部長 27.9cm、刀身幅 2.7cm、棟厚 0.6cm、茎部長 9.1cm、茎幅最大 2.0cm（茎尻付近 1.4cm）、茎厚 0.5cm を測る。

鏃は関部分に装着される。断面倒卵形で長さ 1.6cm、断面の長軸 3.0cm、幅 1.6cm を測る。鍔は見つかっていない。

鉄鏃

・平根腸抉柳葉式（第 43 図 11・12）

平根柳葉式鉄鏃は 2 点出土しているが、いずれも全体は残存しない。

11 は刃部がややふくらが張る形態を示し、鏃身部の腸抉は一部しか残存しないが明瞭である。鏃身中央に直径 2mm の穿孔を有する。

12 も刃部がややふくらが張る形態を示し、木質が確認される。鏃身部の腸抉は一部しか残存しない。

いずれも両丸造りである。

・平根三角形式（第 43 図 13 ～ 16）

平根三角形式鉄鏃は 4 点出土している。

13 は刃部がややふくらが張る形態で、緩やかにカーブを描きながら鏃身部関にいたる。両丸造り。鏃身部長は 3.9cm を測る。幅 0.7cm の頸部には木質が遺存する。

14 は五角形式に近い形態を示すが刃部が緩やかなカーブを描くため、三角形式とした。鏃身部長 3.2cm、幅 2.4cm と幅広い形態である。

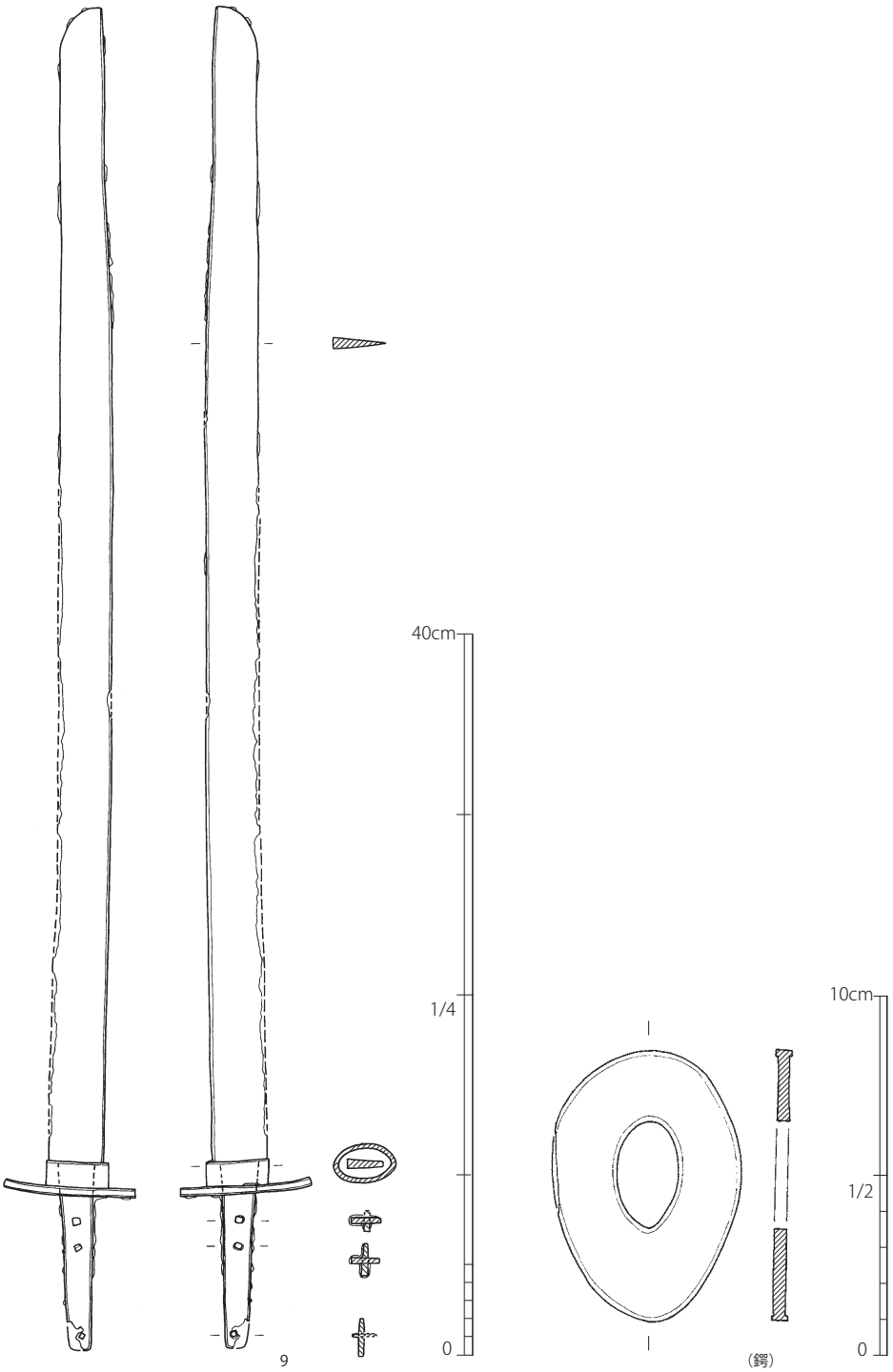
15 は 13 をやや大きくしたような形態で鏃身部長 4.2cm［復元値 4.5cm］、幅 2.9cm をはかる。頸部は先細りしている。14 は鏃身部のみが残存する。

・尖根柳葉式（第 43 図 17 ～ 19）

尖根柳葉式鉄鏃は 3 点出土している。鏃身部はいずれもふくらが張り鏃身中央部がもっとも幅広くなる。17、18 は鏑が確認されるが、19 は不明瞭。17 は全体の形状がよく残っており、残存長 15.5cm、鏃身長 1.9cm、頸部長 10.6cm を測る。茎関は棘関で茎部に木質が残る。

・尖根長三角形式（第 43 図 20 ～ 22）

尖根長三角形式鉄鏃は 3 点出土している。20 のみが茎関まで遺存している。鏃身先端部から緩やかな弧を描き、さらに直線的に鏃身部関にいたる。



第 40 図　大刀実測図

頸部は中央がややくびれる形態のため、茎関が台形関の形態となる。残存長 9.5cm、鏃身部長 3.4cm、鏃身部幅 1.4cm、頸部長 4.5cm を測る。20、21 は鏃身部が両丸造りだが、22 は片丸造りの可能性が高い。

・尖根三角形式（第 43 図 23 ～ 28）

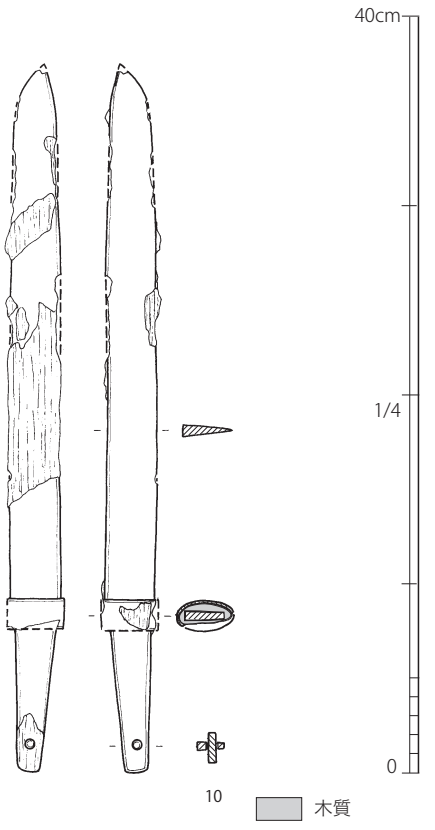
尖根三角形式鉄鏃は推定も含めて 6 点出土している。

23 から 25 はいずれも鏃身先端部から緩やかな弧を描き内湾しながら、鏃身部関にいたる。鏃身部長 2.6 から 2.8cm、幅 1.4 から 1.7cm と形態的に酷似しており、断面から両丸造と判断される。

一方、27、28 はやや直線的に鏃身部関にいたる形状で、片丸造である。

27 は全長 6.5cm、鏃身部長 2.1cm、鏃身部幅 1.0cm、頸部長 4.4cm、頸部幅 0.4cm を測る。

28 は全体が残存しており、全長 13.2cm、鏃身部長 2.4cm、鏃身部幅 1.35cm、頸部長 6.8cm、頸部幅 0.4cm、茎部長 4.0cm、茎部幅 0.35cm を測る。



第 41 図　小刀実測図

・尖根片刃箭式（第 43 図 29 ～ 41）

尖根片刃箭式鉄鏃は推定も含めて 13 点出土している。鏃身部の逆刺はほとんど見られない。

29 は長い刃部を有し、幅を減じながら頸部にいたる。頸部は中央部分が最も幅が狭く、茎関にむかいやや広がる。茎関は棘関である。茎部には木質が遺存しており、その上に樺巻きの痕跡が明瞭に残る。全長 18.5cm、鏃身部長 2.1cm、鏃身部幅 0.75cm、頸部長 10.3cm、頸部幅 0.4cm、茎部長 6.0cm、茎部幅 0.2cm を測る。

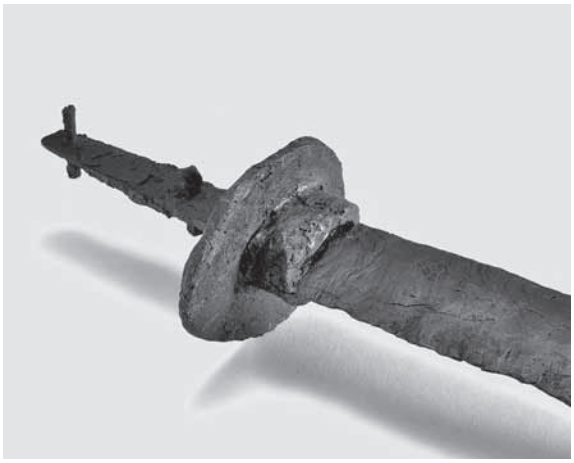
33・34・35 は浅いながらも逆刺が存在する。鏃身部は反りがなく直線的で、丁寧に作られている。鏃身部と頸部の境も明瞭で中央部でやや幅を減じるものの直線的に茎関に至る。茎関は棘関で茎部にはいずれも木質が遺存し、樺巻きの痕跡を残す。

33 は全長 18.5cm、鏃身部長 3.4cm、鏃身部幅 0.8cm、頸部長 9.5cm、頸部幅 0.35cm、茎部長 5.5cm、茎部幅 0.3cm を測る。34 は全長 19.2cm、鏃身部長 3.1cm、鏃身部幅 0.75cm、頸部長 9.3cm、頸部幅 0.4cm、茎部長 6.6cm、茎部幅 0.4cm を測る。

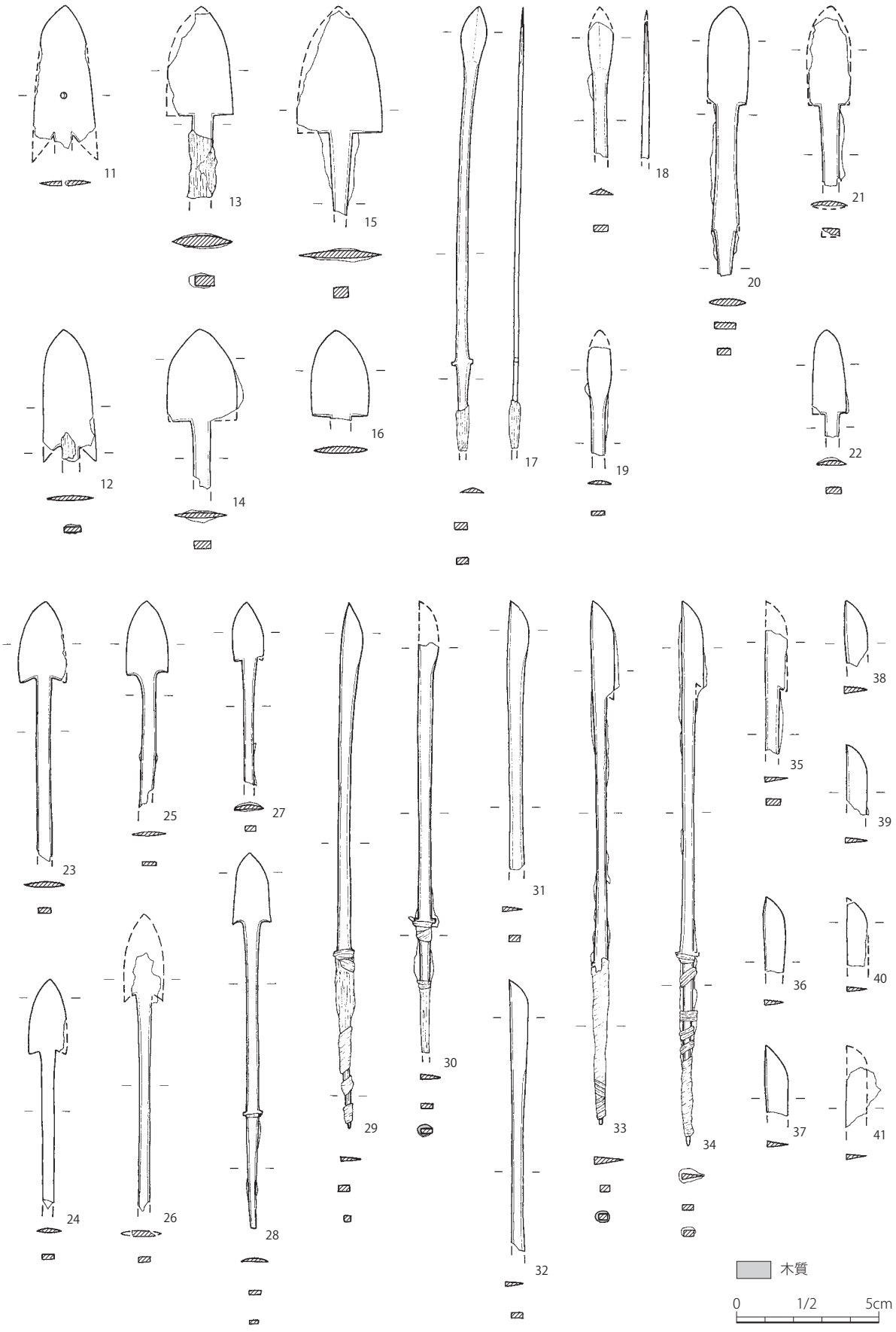
36 から 41 は小破片のため、逆刺の有無は明らかではない。

・頸部・茎部（第 44 図）

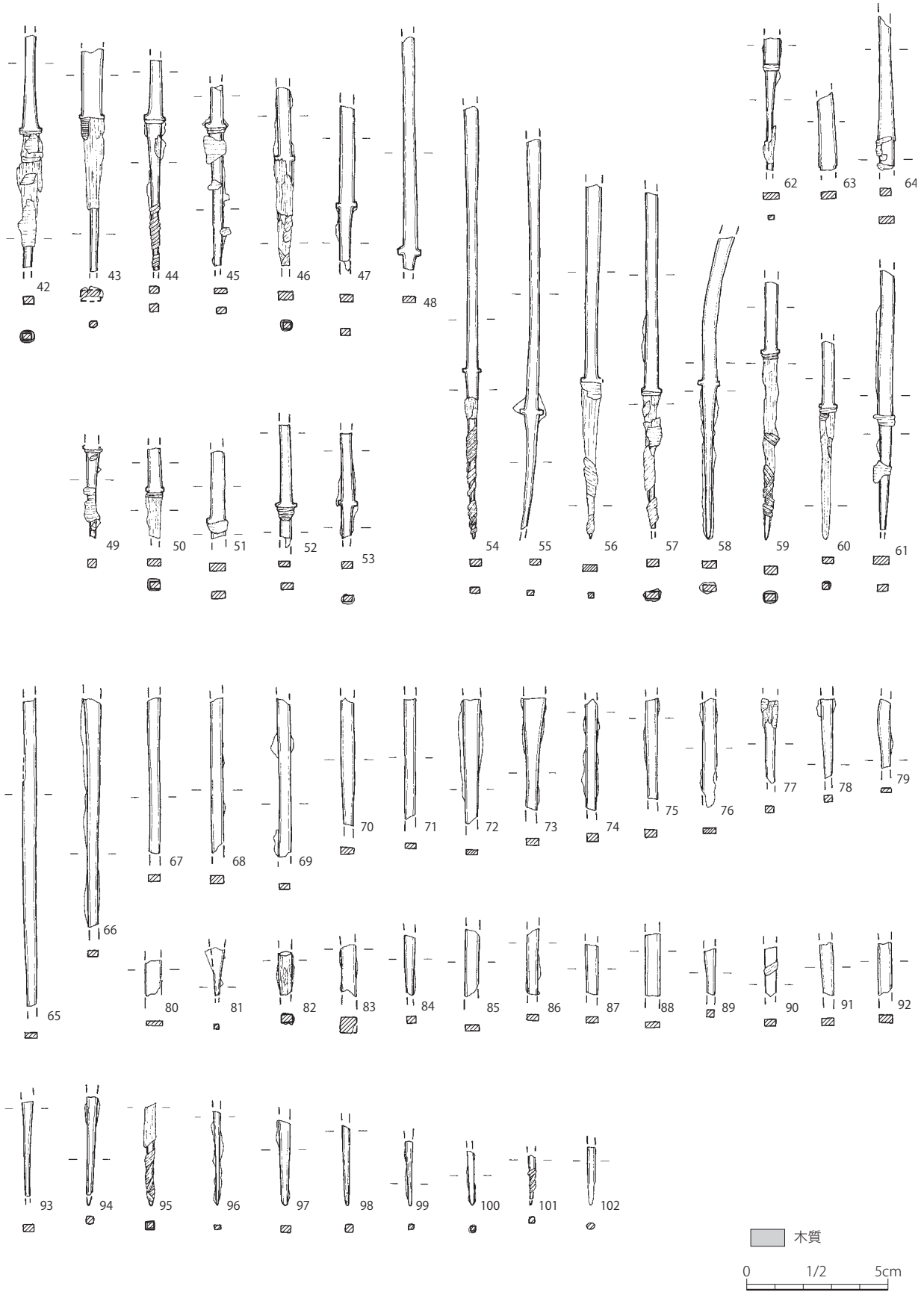
棘関と判断されるもの 19 点（42 ～ 60）、台形関と判断されるもの 4 点（61 ～ 64）でほかは頸部のみもしくは茎部のみの破片である。これら破片の多くは尖根式の破片と考えられる。茎部に木質を残すものが多く、44、46、54、56、57、59 には樺巻き（口巻き）を施して仕上げていたことが分かる。



第 42 図　大刀（9）


11
13
15
18
20
21
12
14
16
17
19
22
23
25
27
29
30
31
33
34
35
38
24
26
28
32
36
37
39
40
41
木質
0
1/2
5cm

第 43 図　鉄鏃実測図 1


42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
木質
0
1/2
5cm

第 44 図　鉄鏃実測図 2

農工具

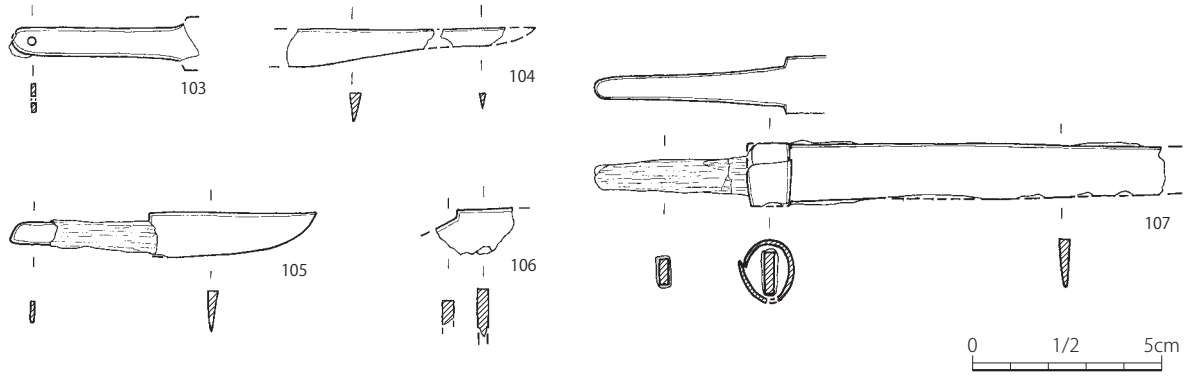
刀子（第 45 図 103 ～ 107）

103 と 104 が同一個体の可能性があり、関の数から最低 4 個体分と推測される刀子が出土している。103 は茎尻付近に直径 2mm 程度の目釘孔を有する。105 は全体が遺存している。関は直角両関で茎部には木質が遺存している。切先は研ぎ減りによりかなり短くなっている。107 は柄縁金具（鏨）が装着されている刀子で切先が欠損する。残存長 14.9cm、関幅 1.5cm、茎部長 4.95cm、茎部幅 1.0cm を測る。関は直角両関で、直線的に丸い茎尻に至る。茎部には木質が遺存する。柄の太さは長軸 1.7cm、短軸（幅）1.3cm 程度に復元できる。

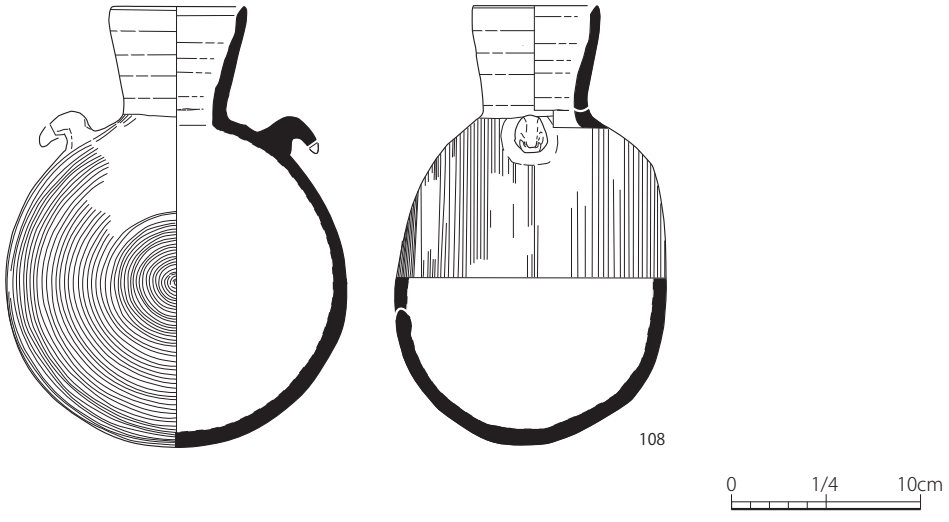
土器

須恵器（第 46 図 108）

提瓶（108）は体部の一側面は平坦に、もう一面には丸みをもっている。体部の丸みをもった面の内側には 7cm 程度の穴を粘土板でふさいだ痕跡が確認できる。一方、平坦な面も粘土板から粘土の積み上げが開始されている。カキメは 1cm あたり 9 本程度。肩部には鉤状吊り手を取り付けている。口頸部は外反せず直線的に立ち上がり、口唇部付近は内湾する。口縁部外面には、沈線は認められない。胎土には直径 0.5mm から 2.0mm 程度の白色粒子を多く含む。口径 7.0cm、器高 23.4cm、胴部最大径 18.1cm を測る。



第 45 図　刀子実測図



第 46 図　須恵器実測図

第２節　中原第４号墳

1．現況

中原第４号墳は、調査以前はその存在が確認されず、高まりなどは認識されていなかった。

古墳は大淵扇状地上の緩斜面、標高 73m 付近（遺構検出高）に築造される。第３号墳との直線距離は約 20m である。

2．墳丘の構造

墳丘　墳丘盛土は、大部分が失われており、一部横穴式石室の裏込め埋土が残存するのみであった。

周溝　周溝は南側の一部を除いて全周している事が確認された。周溝の内側（石室側）の立ち上がりは、比較的急であるのに対して、外側は緩やかに立ち上がっている。上面は削平されているが、西側の周溝上端幅は 1.68m、下端幅 1.01m、東側は 1.75m、1.11m を測る。

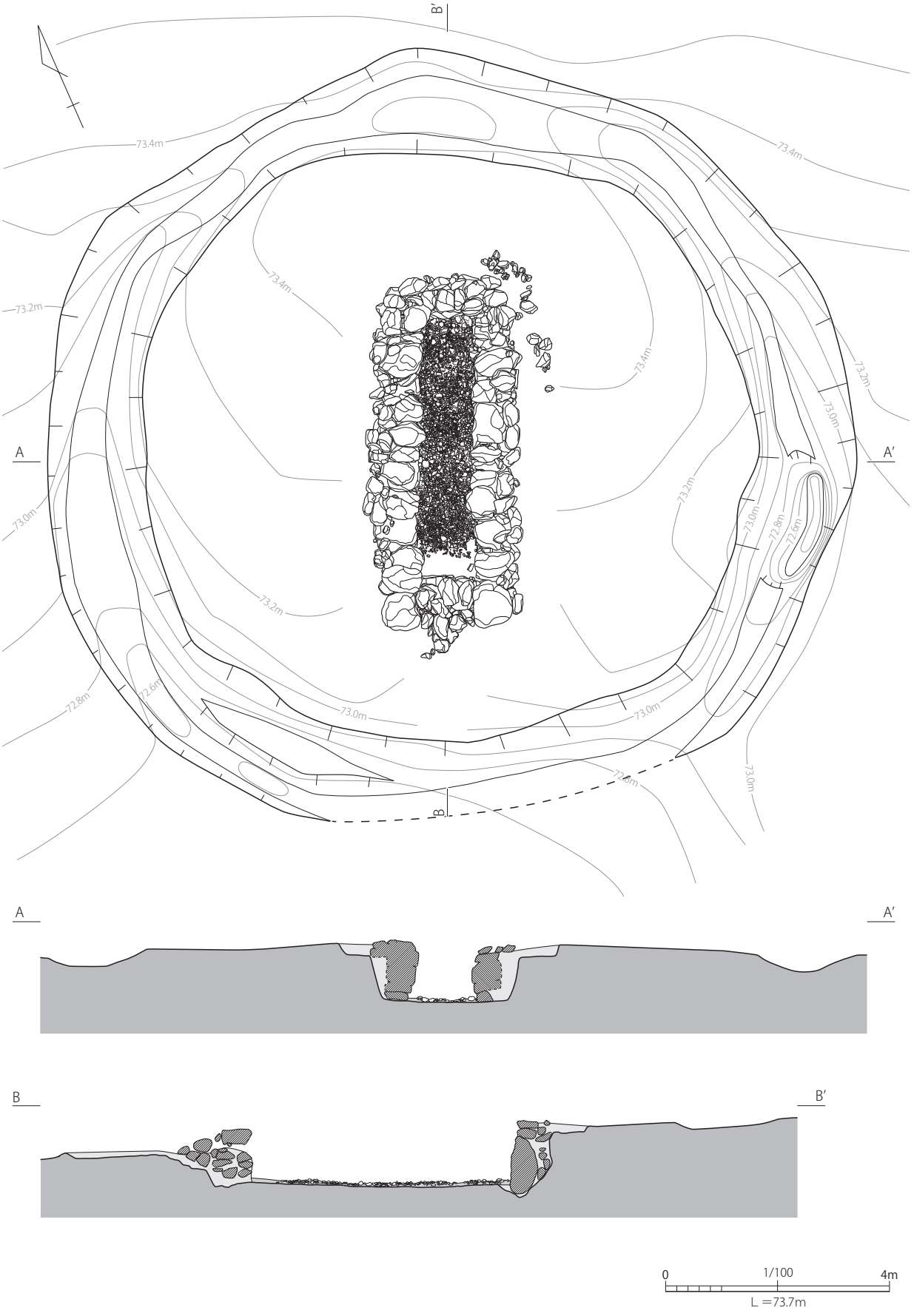
墳丘規模は、周溝内側では東西 10.88m、南北 10.46m、周溝を含めた総長は東西 14.47m、南北 13.77m を測る。墳丘の中心点は、石室の中心にほぼ一致している。

周溝出土土器　周溝からは土師器３点が出土している（第 50 図）。1 は須恵器坏蓋模倣の土師器坏でやや小型品である。底部は丸底に仕上げられ、直立する口縁部がつく。受け部はあまりシャープではないもののケズリにより作り出されている。底部もケズリで整形された後、内外面ともに入念にヘラミガキが施され、光沢をもつ。

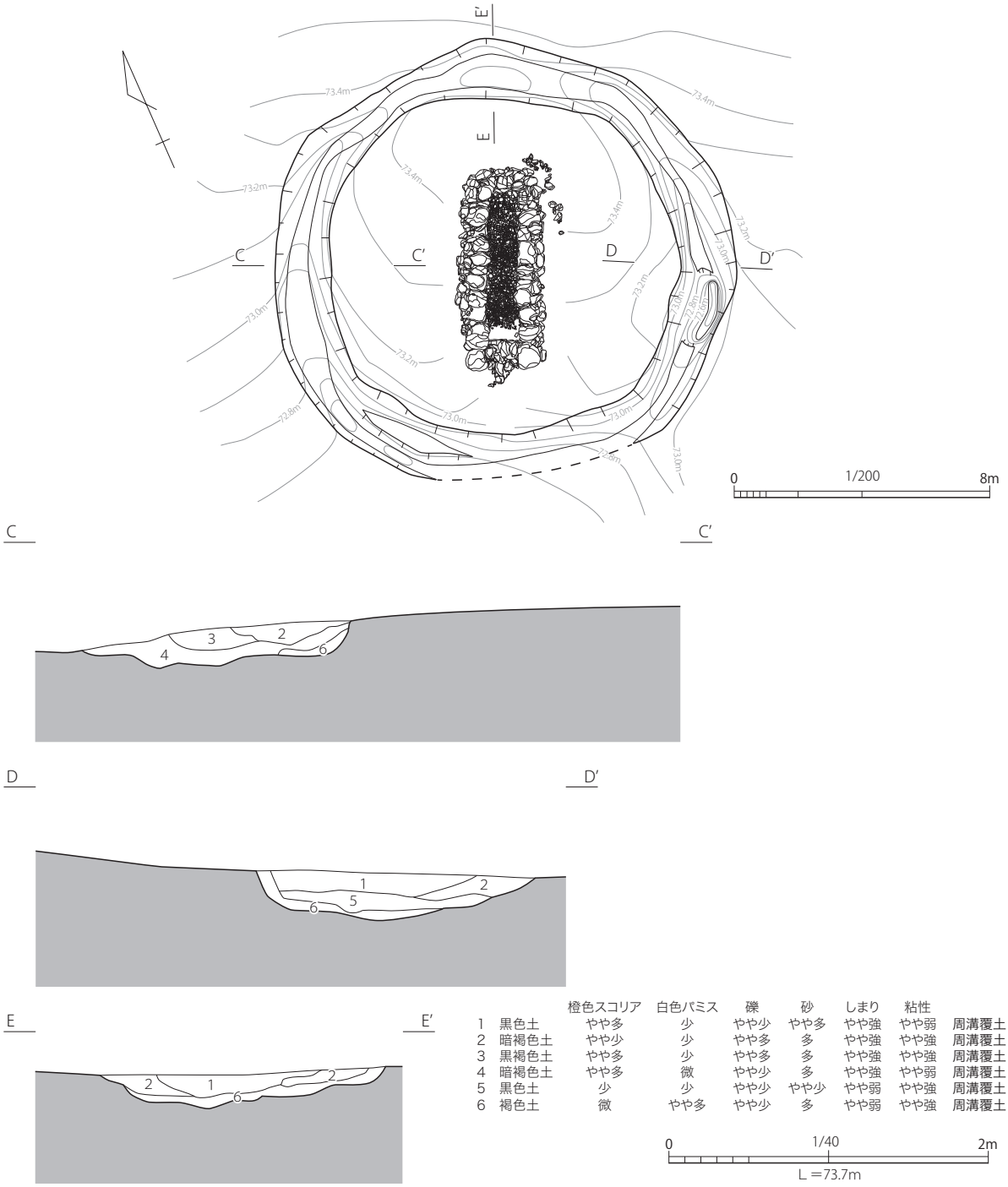
２は球形の胴部に内湾する口縁部がつく壺である。胴部の器壁が厚く約 1cm ある。ヘラケズリの後、ヘラミガキで調整されているものの器面に凹凸が目立つ。しかし、全体としては入念なヘラミガキで表面に光沢をもつ。頸部には受け部状の段差をもつ。口縁部は２段階に立ち上がり、２段目の段差部分に直径 3.5mm 程度の穿孔を３箇所もつ。欠損部を含めると本来４箇所あった可能性もある。

３はやや扁平で肩の張った胴部をもつ壺で、底部はやや上げ底に作られている。肩部はやや内湾させ、頸部にいたる。口縁部は直立し、口唇部のみ外反させている。内外面ともに入念にヘラミガキされており表面に光沢をもつ。

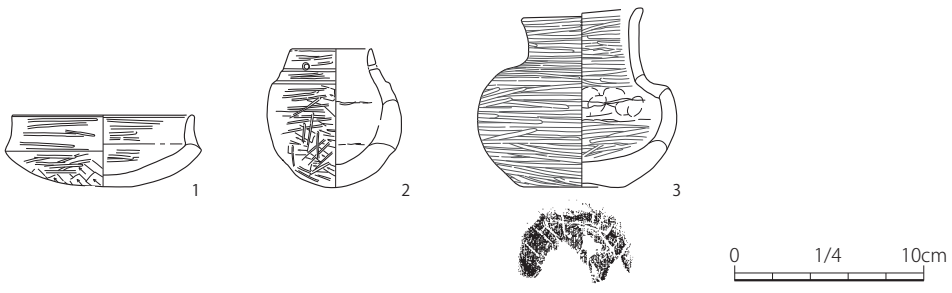
第 47 図　検出時の状況


B′
73.4m
73.4m
73.4m
73.2m
73.4m
73.2m
73.0m
A
A′
73.0m
73.2m
73.2m
73.0m
72.8m
72.6m
72.8m
72.6m
73.0m
73.0m
73.0m
B
A
A′
B
B′
0
1/100
4m
L＝73.7m

第 48 図　測量図



第 49 図　周溝平面図・断面図



第 50 図　周溝内出土遺物実測図

3. 埋葬施設の構造

埋葬施設は南南西に向かって開口する段構造（框石）を有する無袖形横穴式石室（有段無袖形石室）である。墓坑上面が若干削平を受けているものの、築造当初の形状を留めており、石室が発見された際は、天井石の一部と考えられる石材が残存した。

次章の藤村論考（第４章第２節）にて検討するように段構造の考え方に修正を加えなければならない可能性もあるがここでは調査時の所見を尊重しておくこととする。

墓坑　墓坑は竪穴構造の隅丸方形で２段に掘削されていた。検出された墓坑上部には、墳丘盛土が存在しなかった（もしくは検出不能だった）ことから、少なからず、削平を受けているものと考えられる。すべての石材が墓坑の内側の段の内部に設置されていた。

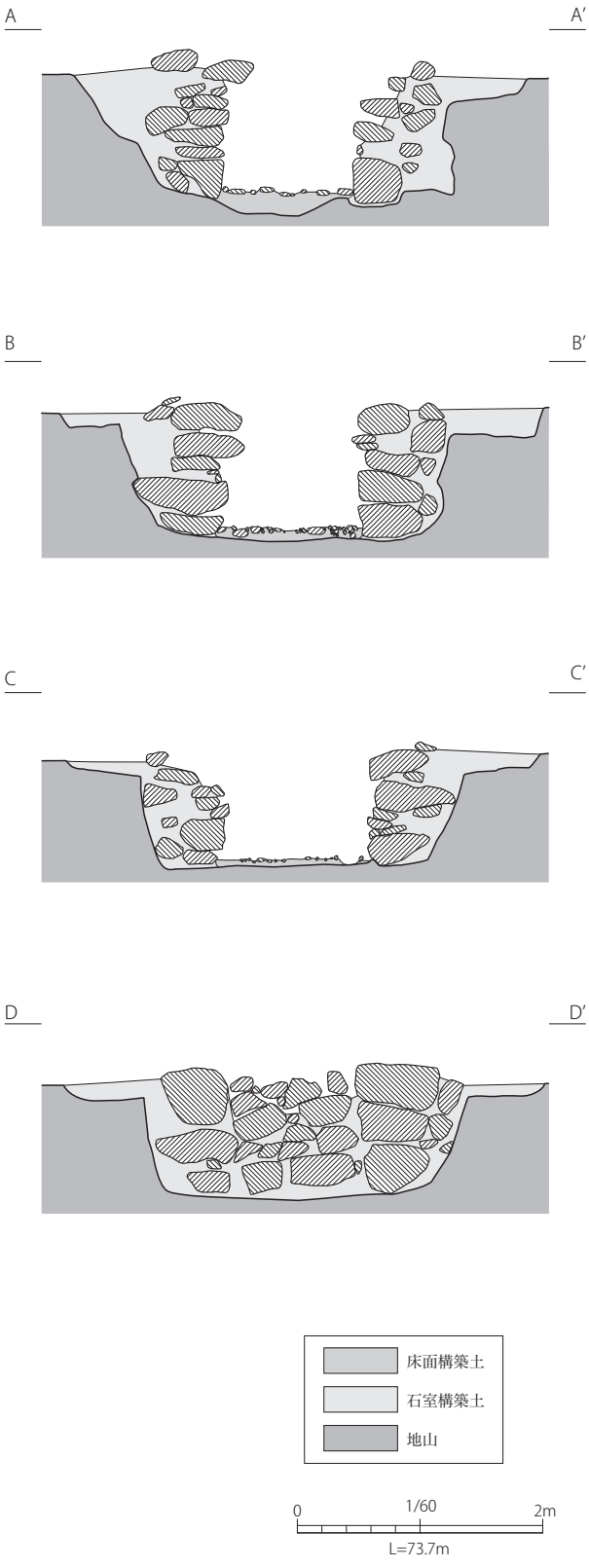
規模は、外側の段で幅 3.92m、長さ 7.40m、深さ 1.05m、内側の段で幅 2.77m、長さ 0.24m を測る。

石室石材は、墓坑の内部にほぼおさまるものと考えられることから、地下式構造と言える。墓坑の南側には、幅 1.85m、長さ 1.88m の墓道の様な掘り込みが認められるが、これは地山を掘削した後に、人為的に埋め戻されていたと考えられ、埋土が石室の段構造（框石）部分の裏込めの役割を果たしている。

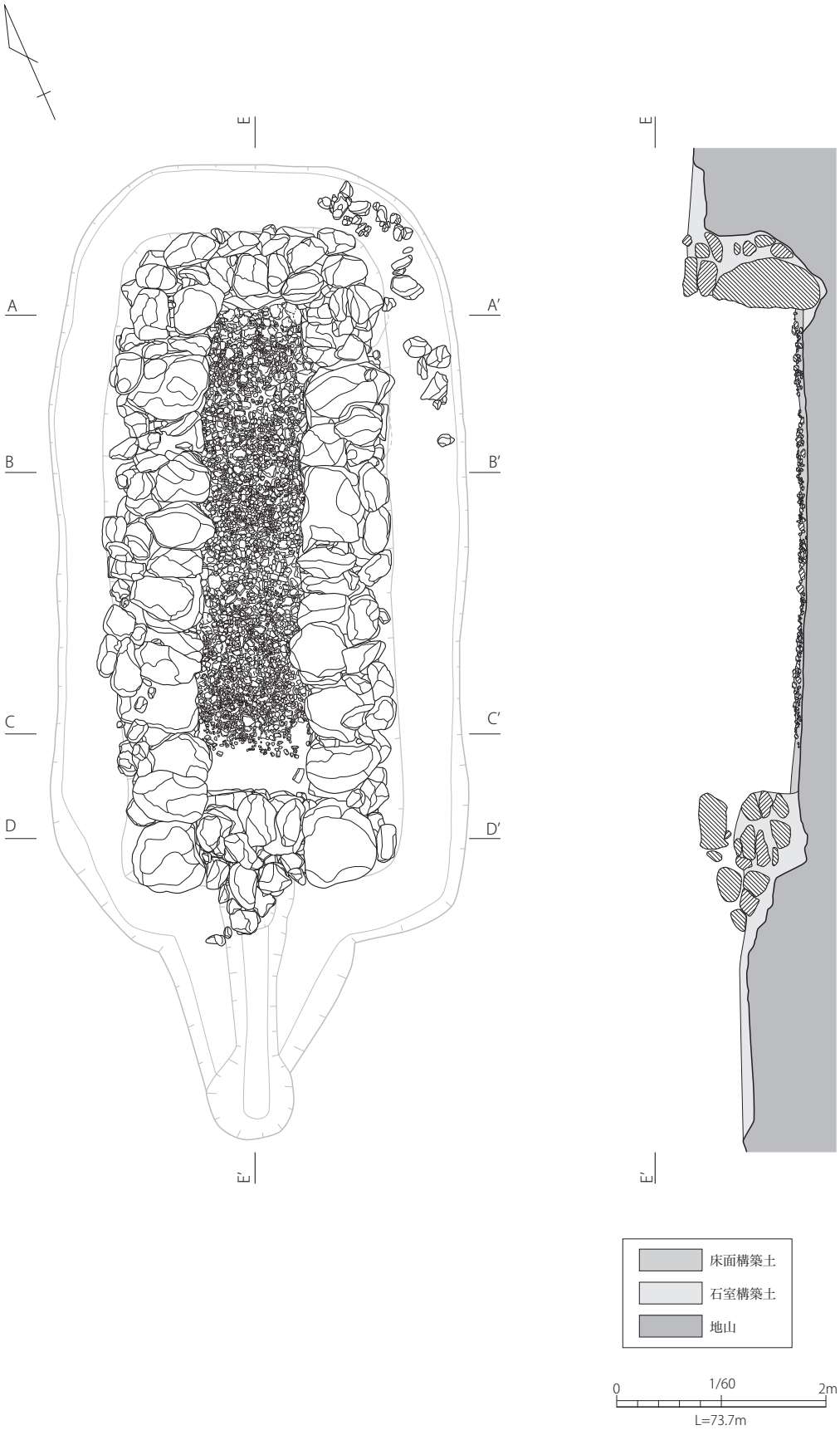
石室　玄室平面形は長方形で、胴張りなどは認められない。主軸方位 N － 156° － W、石室全長 5.52m、玄室長 4.59m、玄室幅 1.13m（中央）、1.07m（奥壁）、1.16m（玄門幅）。

奥壁・側壁　奥壁は大型の石材を鏡石として樹立する。側壁の基底石は、奥壁側の２石が、石材の長手面を石室内側に向ける平積みであるが、その他の大部分は、小口積みである。

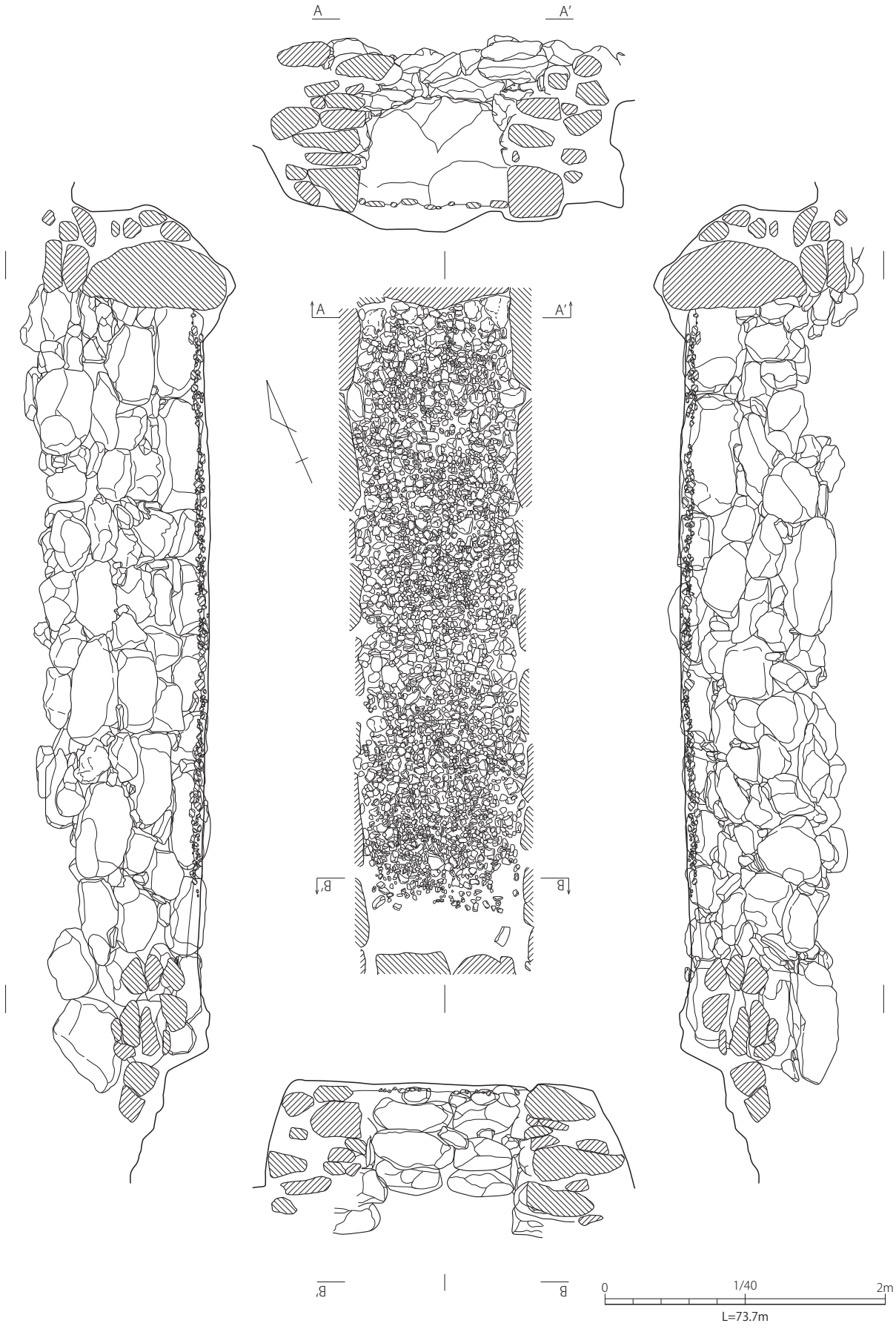
第 51 図　石室の段構造部分（北から）



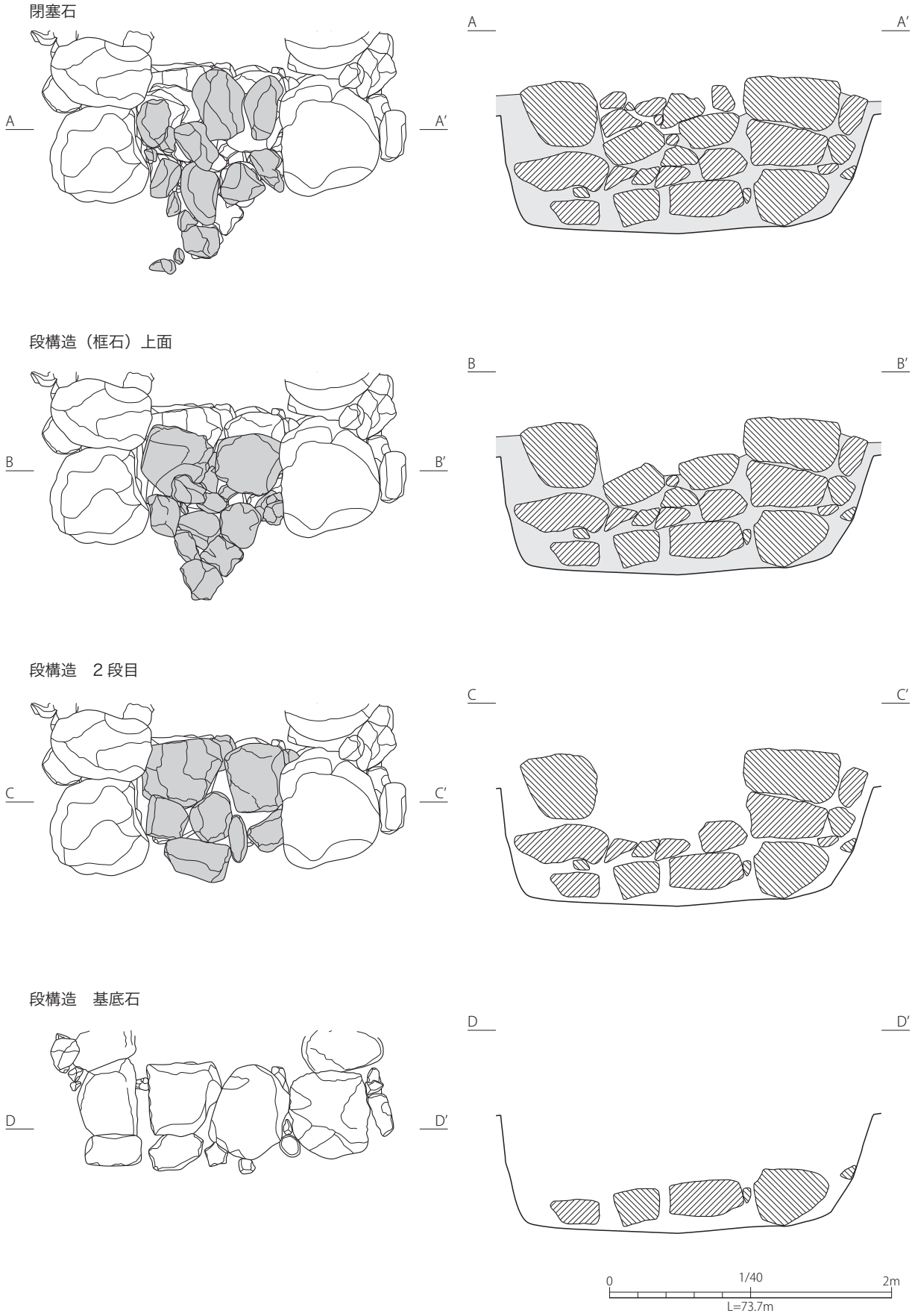
第 52 図　石室断面図



第 53 図　石室平面図・断面図



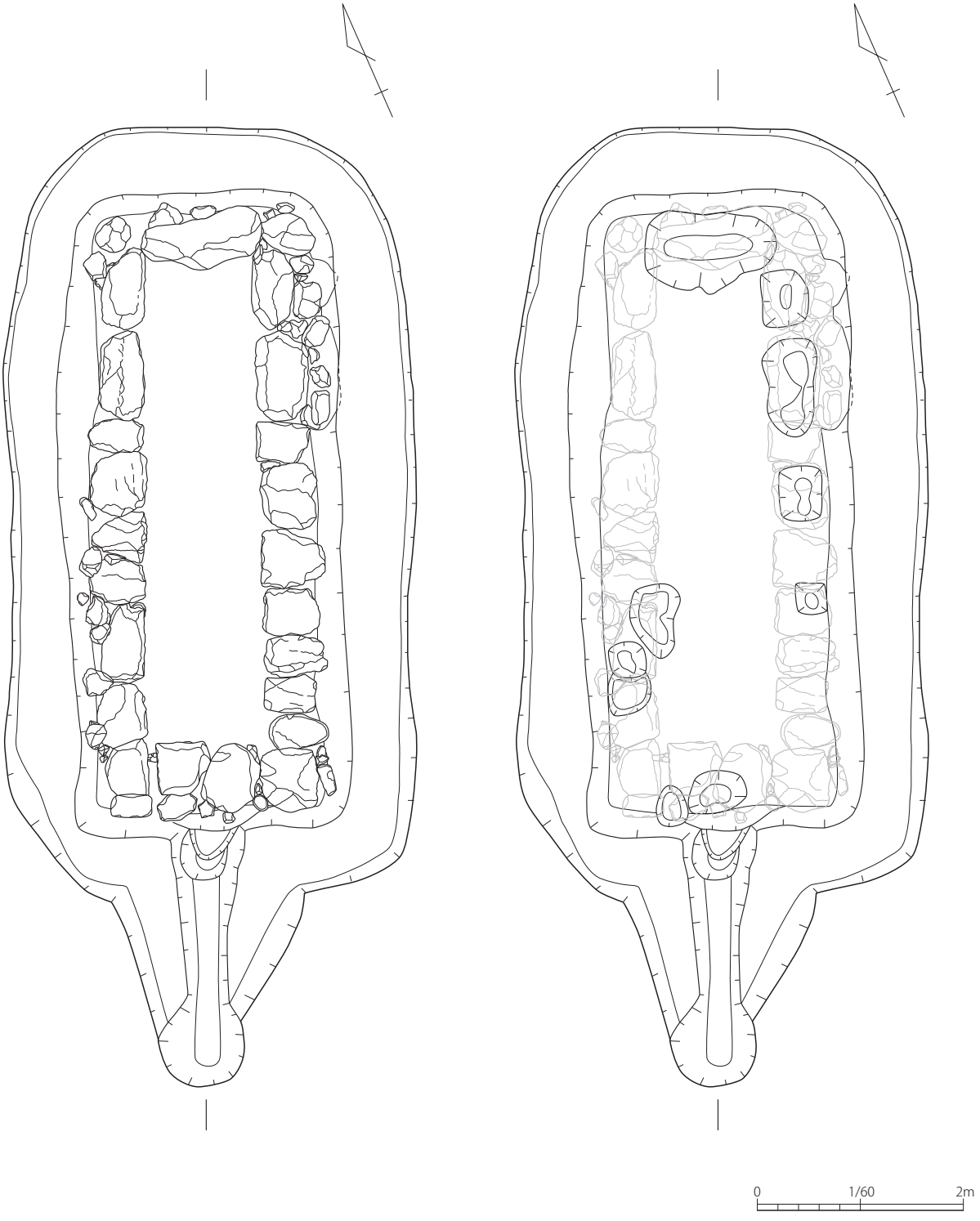
第 54 図　石室展開図



第 55 図　石室前壁平面図・断面図

左側壁（東側壁）、右側壁（西側壁）ともに４段分程度が残存する。奥壁・基底石の設置後、３段分積んだところに横目地が見え、この高さが、奥壁上端と一致する事から、この高さで一度水平面を作り出す工程が存在した可能性が高い。なお、この高さは、２段掘りとなっている墓坑の内側の掘り込み面とも一致している。

また、奥側から基底石７石目、距離にして3.97mの部分を基点にして、斜方向の目地が認められる。前述の通り、基底石の多くは小口積みであるが、右側壁の石基点となるこの石は平積みであり、また左右の側壁の南端がそろっており、この部分より開口部側の側壁は、奥壁側の側壁が奥壁上端まで積まれた後に、積み始められて



第56図　石室基底石・基底石据え方・墓坑実測図

いる可能性が高い。さらにこの部分を境に、開口部側には床石が敷かれない事から、玄室内の空間利用の違いが石室構築工程に表れているとも言える。

鏡石として樹立された奥壁の上部には、2段の石が認められるが、現存する側壁もこの上端の水平面を意識している様に観察され、また、上端レベルが墓坑の1段目の掘り込み面とほぼ一致している。

段構造（框石）とも関係してくるが、この石室には、3段積み上げた框石が存在するが、この部分の左右にも側壁が存在する。この部分は、前庭側壁として玄室側壁と区別して見ると、縦方向の目地が左右ともに観察されることから、この部分の側壁は、玄室側壁より後の工程で構築されたと考える事が出来る。

段構造（框石）　石室の入り口部分には、墓坑2段目の南壁に沿う様に、前後左右2列ずつ、上下3段分の石積みが認められる。これらの石積みは、閉塞石ではなく埋土とともに、両側の前庭側壁にはさまれる様に、動かない様に設置されている。前庭側壁との前後関係については明らかではないが、それぞれの基底石でみると、左側の框石は前庭側壁とかみあっており、ほぼ同時に構築されたと見てよいだろう。段構造部分の高さは、床面より47cmを測る。

第57図　石室基底石と墓坑（南から）

床面　前述の通り、床面には入り口側30cm部分を除いて、敷石が設置される。床石は上下2面に分けられる可能性も残るが、現状では、確実な面として捉えられるのは1面である。明確な屍床仕切石は存在しないが、奥壁より2.46mの部分にやや大きめの石が帯状に敷設されているとも見える事から、この部分を境に奥壁側が埋葬空間として区別されていた可能性が高い。

石室の構築　これまでの記述をまとめると、石室の構築について以下の様に整理する事が出来る。

①奥壁、基底石の設置

奥壁と基底石を7石分(奥壁より3.97m分)設置する。

②側壁の積み上げ

奥壁の上端レベル、言い換えれば墓坑2段目の上端レベルを目指して、4段分側壁を積み上げながら裏込め埋土を入れる。

③側壁、入り口側の構築

②で積み上げた側壁の前面（入口側）に側壁を積み上げる。上端はやはり奥壁の上端レベルに一致させる。

④前庭側壁、框石の設置

前庭側壁と框石をほぼ同時に設置する。

框石は墓坑南端に沿わせて、土を入れながら設置する。

⑤奥壁・側壁の積み上げ

①から④までの工程により、奥壁上端レベルにそろえられた側壁にさらに、奥壁2段、側壁も2段程度石を積み上げる。この段階で上端レベルを墓坑の1段目の掘り込み面にほぼ一致させるものと考えられる。

⑥天井石の架構

その後、若干の調整のための石が設置され、天井石が架下されたものと考えられ、 その結果、天井石のみが墓坑上面から上部に出ている可能性が考えられる。

その為、石室の構築と墳丘の構築は、同時ではなく、石室構築後、それらを隠す様に上部から墳丘盛土が施工されたと考えられよう。

4. 副葬品出土状況

石室内からは、図化しただけで総数 661 点の遺物が出土した。出土状況や土器の完形率の高さなどから盗掘を受けていない横穴式石室と考えられる。

本項では、出土位置別および、器種別の出土状況を示したい。

・出土位置のグルーピング

位置別の出土状況を示す上で、石室内における遺物のまとまりから、A ～ F の 6 つの空間的グルーピングを行った。

A エリア：奥壁周辺エリア

B エリア：玄室奥の大刀・玉類の出土するエリア

C エリア：B エリアの西側、玄室右側壁で大刀・剣が出土するエリア

D エリア：玄室中央部分

E エリア：玄室の入り口部分の東側（左側壁）

F エリア：玄室の入り口部分の西側（右側壁）

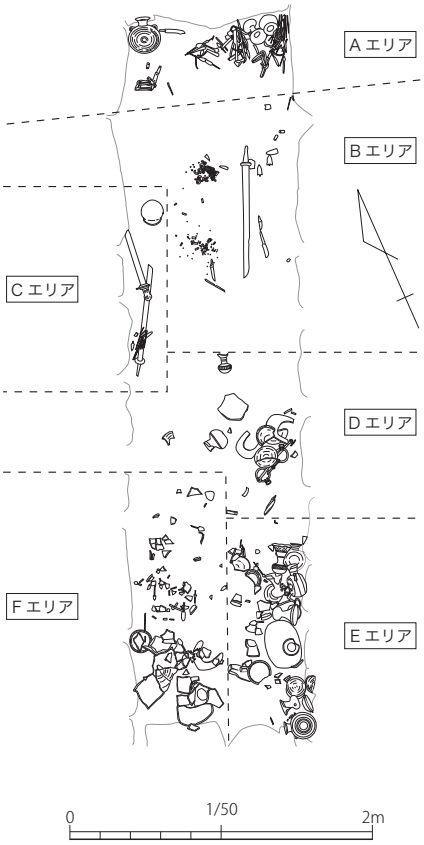
以下、この A ～ F のエリア区分を基に記述していくこととする。

・A エリア（奥壁付近）

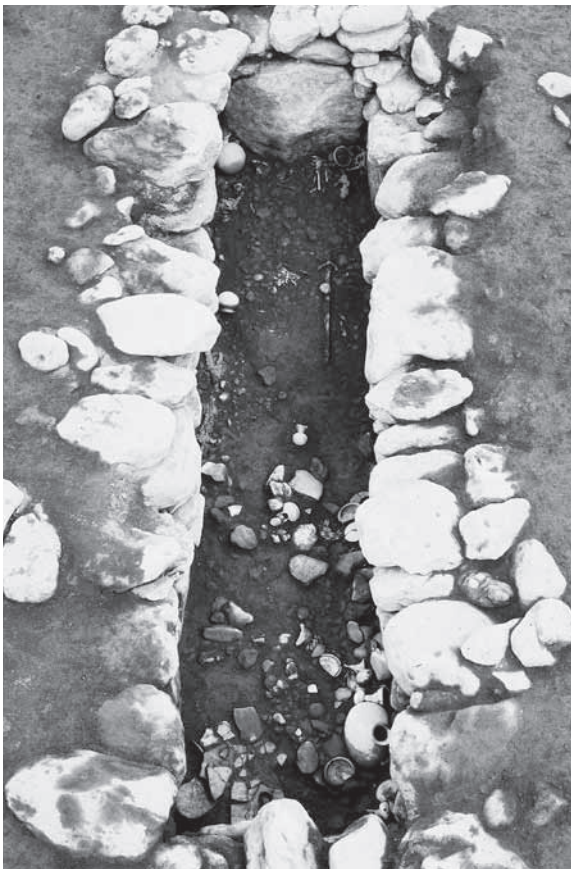
奥壁の前面約 50cm 程度のエリアである。

このエリアは、他のエリアと比べて鉄鏃・農工具・馬具の金属製品の出土数が多く、実測数ではあるが、鉄鏃 124 点、農工具 18 点、馬具 7 点を数える。しかも鉄鏃のうち 3 点（568 ～ 570）は、尖根片刃箭式でそれぞれ 13 点、3 点、4 点が束となったまま出土しており、568 については最低平根長三角形式 8 本、尖根鑿箭式 2 本が束となっている。また農工具では、鎌や刀子、鉄斧、鉇、鑿、鍛冶具・生産用具では鉄鉗、鑷子、針など、副葬品の中でも、特徴的な遺物が出土している。また、馬具は、轡、鐙など 1 セットとしてとらえられそうな一群が出土していることや、このエリアから丸玉 110 点が出土している事も注目される。

奥壁と右側壁のコーナー付近には、提瓶（649）が隅側に斜めに立てかけられる様に出土しており、その脇には、刀子（585）が見られる。その前面は、鐙の吊金具（613）が出土しているが、これは、A エリア左側壁付近で出土している別の吊金具（612）とセットをなすものである。



第 58 図　石室エリア区分図



第 59 図　石室床面の遺物出土状況

第５表　石室エリア別遺物一覧表

	装身具	419	武器			212	農工具	33	鍛冶具・生産用具等	16	馬具	18	土器			30	その他	1
			刀剣	3	鉄鏃	209							須恵器	29	土師器	1		
A	総点数	117	総点数	0	総点数	139	総点数	15	総点数	15	総点数	7	総点数	3	総点数	0	総点数	0
	【棗】65.66 【丸】76～185 657～661	2 115			【平三】428～430. 432 435.439.440 *568*（8） 【平五】*571*（1） 【平撫三】450.451 【平圭】452.454 【平方】455 【尖柳】465 【尖片】466～479. *568*(13) *569*（3）. *570*（4） 【尖鏃】480.484. *568*（2） 【不明】458.491.*497*（2） 492.498～500.502 504～506.510.516 521.524～529 531～542 544～547.553 556.559～567 *568*（14＋） *569*（6）. *570*（4） *571*（4）. *572*（3）	15 1 2 2 1 1 34 4 79	【砥石】574 【鎌】*575*（2） 576 【刀子】585.587 591.593 【鉄斧】597 【鉇】599～603 【鑿】604	1 3 4 1 5 1	【鉄鉗】605 【鏃子】606 【針大】 *607*（1） 【針小】 *607*（12）	1 1 1 12	【轡】610 【鏡】612.613 【帯】616 【雲】622 【鉸】623.624	1 2 1 1 2	【廻】641 【壺】645 【提】649	1 1 1				
B 北東	総点数	2	総点数	1	総点数	5	総点数	7	総点数	1	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	1
	【管】16.17	2	【大刀】 418	1	【平腸柳】422.425 【平三】441.442 【不明】493	2 2 1	【鎌】577 【刀子】582.583 589.590 594.595	1 6	【針】608	1							420	1
B 北	総点数	68																
	【勾】4～14 【管】18.19 【切】38～60 【棗】63.64 【小】387～417	11 2 23 2 30																
B 南	総点数	232																
	【勾】15 【管】20～37 【切】61 【棗】62.67 【臼】68～75 【小】186～386 415	1 18 1 2 8 202																
C	総点数	0	総点数	2	総点数	19	総点数	1	総点数	0	総点数	0	総点数	1	総点数	0	総点数	0
			【大刀】 419 【剣】 421	1 1	【尖柳】463.464 【尖鏃】483.485～488 【不明】495.507～509 513.517～520 548.549.558	2 5 12	【刀子】586	1					【壺】646	1				
D	総点数	0	総点数	0	総点数	2	総点数	5	総点数	0	総点数	1	総点数	3	総点数	0	総点数	0
					【不明】555.557	2	【砥石】573 【鍬鋤】578.581 【刀子】584.588	1 2 2			【轡】609	1	【身】636 【廻】643 【壺】647	1 1 1				
E	総点数	0	総点数	0	総点数	12	総点数	3	総点数	0	総点数	10	総点数	12	総点数	0	総点数	0
					【平三】431.437.438 【平撫三】449 【尖柳】462 【尖鏃】482 【不明】511.512.543 550.551.554	3 1 1 1 6	【刀子】592 【鉄斧】596.598	1 2			【轡】611 【帯】614.615 617～619 【鋲】620.621 【鉸】625.626	1 5 2 2	【蓋】628 【身】635.637 【廻】639.640 642.644 【提】 650～653 【横】654	1 2 4 4 1				
F	総点数	0	総点数	0	総点数	29	総点数	2	総点数	0	総点数	0	総点数	1	総点数	0	総点数	0
					【平腸柳】423.424.426 【平三】427.433.434 436.443～445 【平腸三】446 【平五】447.448 【平圭】453 【尖柳】459～461 【尖鏃】481.490 【不明】456.457.494 496.501.503 514.522.523.552	3 7 1 2 1 3 2 10	【鍬鋤】579.580	2					【身】634	1				
D・E・F	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	1	総点数	0	総点数	0
													【碗】648	1				
D・F	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	3	総点数	0	総点数	0
													【蓋】627 【身】633 【横】655	1 1 1				
E・F	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	5	総点数	1	総点数	0
													【蓋】629 【身】630.631 632.638	1 4	【坏】656	1		
封鎖部	総点数	0	総点数	0	総点数	3	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0
					【尖鏃】489 【不明】515.530	1 2												

※　【　】内の略号は以下の種別・形式を示す。
装身具・供献具　【勾】勾玉　【管】管玉　【切】切子玉　【棗】棗玉　【臼】臼玉　【丸】丸玉　【小】小玉
鉄鏃　【平腸柳】平根腸抉柳葉式　【平三】平根長三角形式　【平腸三】平根腸抉長三角形式　【平五】平根五角形式　【平撫三】平根撫関三角形式
【平圭】平根圭頭式　【平方】平根方頭式　【尖柳】尖根柳葉式　【尖片】尖根片刃箭式　【尖鏃】尖根鏃箭式　【不明】形式不明（頸部・茎部など）
農工具　【針大】大型の針　【針小】小型の針　【鍬鋤】鍬鋤先
馬具　【鏡】鏡吊金具　【帯】帯飾金具　【鋲】鋲留金具　【雲】雲珠？　【鉸】鉸具
須恵器　【蓋】坏蓋　【身】坏身　【壺】短頸壺　【碗】把手碗　【提】提瓶　【横】横瓶
※　斜字の報告番号は複数の個体が束をなしているものであり、(数) は束内で確認された点数である。
※　表中に示す数は「実測点数」であり、「確認される最低個体数」とは異なる。

第 60 図　石室遺物出土状況図

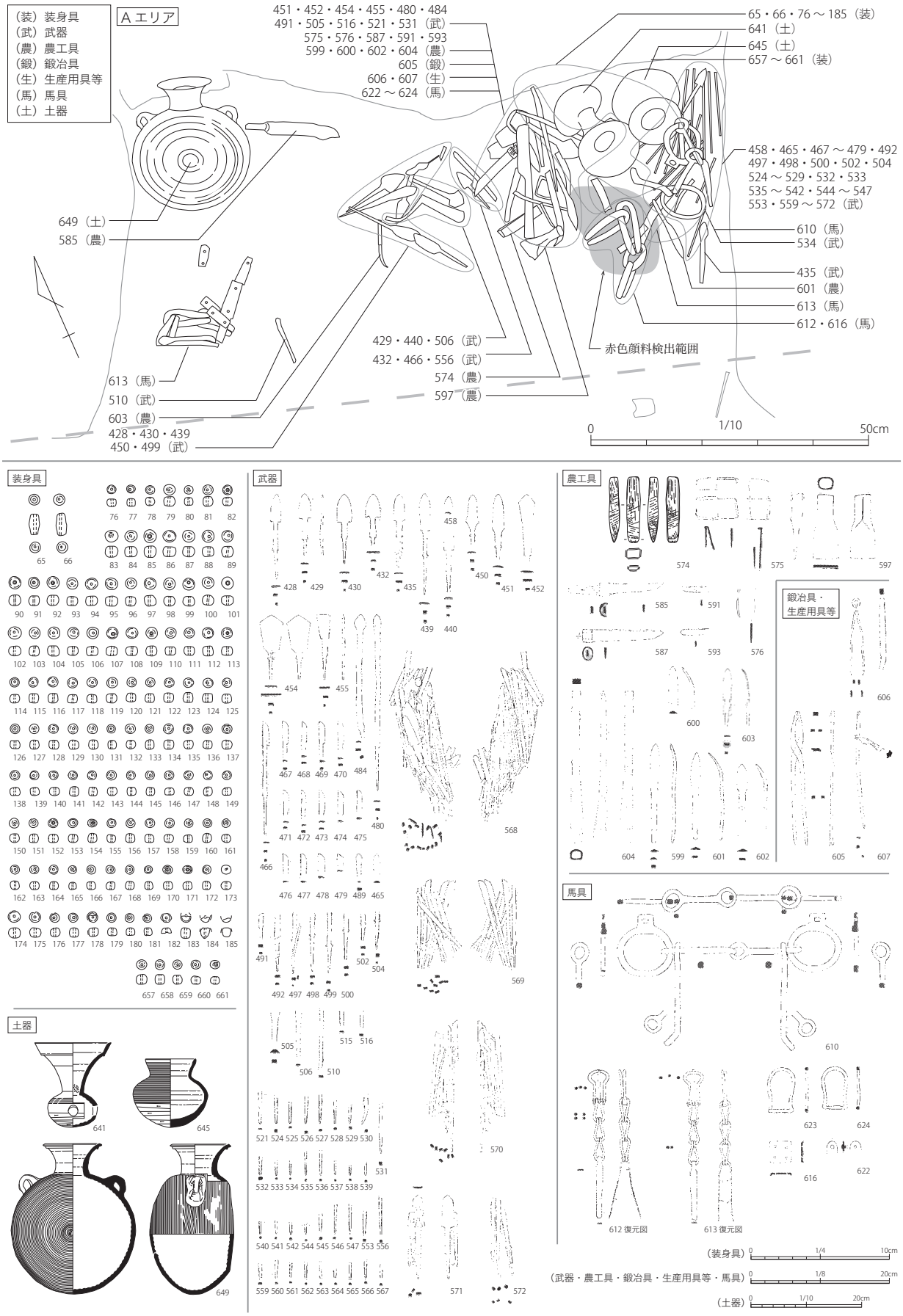
一方、左コーナー付近には多種多様な副葬品が見られる。鉄鏃では尖根式の鉄鏃が多くみとめられ、前述の鉄鏃束（568 ～ 572）もここから出土している。その西側には、須恵器𤭯（641）、短頸壺（645）が口を南側に向けて斜めに出土している。その周囲には丸玉が直径 30cm 程の範囲にまかれる様に認められ、一部（657 ～ 661）は短頸壺（645）の中に入り込んでいた。

前述の鉄鏃の上部には、短頸壺と左側壁にのせるように轡（610）が出土している。右側壁付近出土の鐙吊金具（613）とセットをなす吊金具（612）は、𤭯（641）の南側において赤色顔料とともに出土した。𤭯と赤色顔料の西側、石室の中央ライン付近には農工具がまとまってみとめられ、さらに平根式を中心とした鉄鏃が出土している。鉄鏃は平根式に限った出土ではなく、466 の尖根片刃箭式鉄鏃の様な比較的古い形態の遺物が出土している事は注目される。

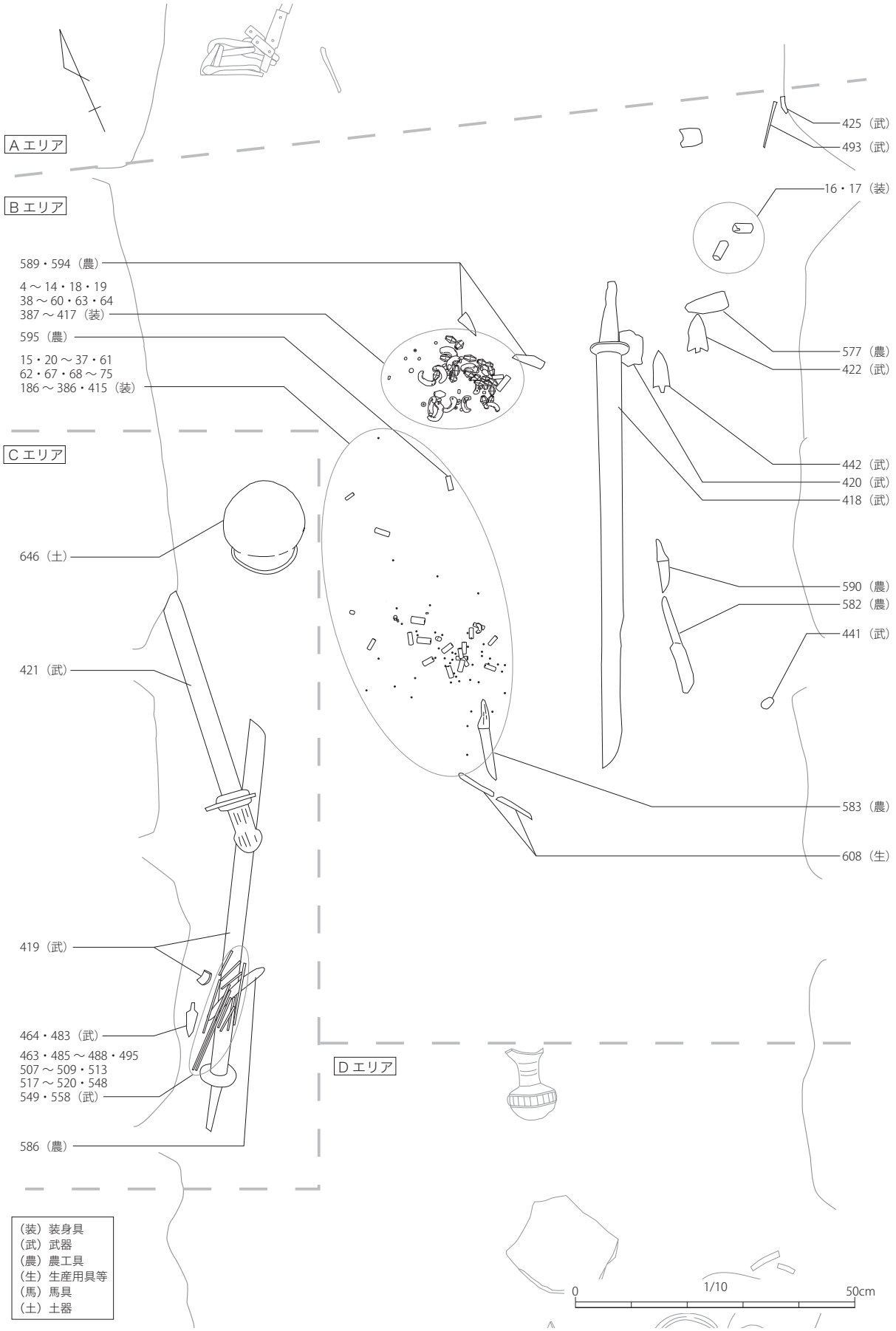
・B エリア

玄室の奥側、A エリアの南側の範囲である。このエリアを特徴付けるのは、総数 302 点もの玉類と、大刀 1 振（418）である。

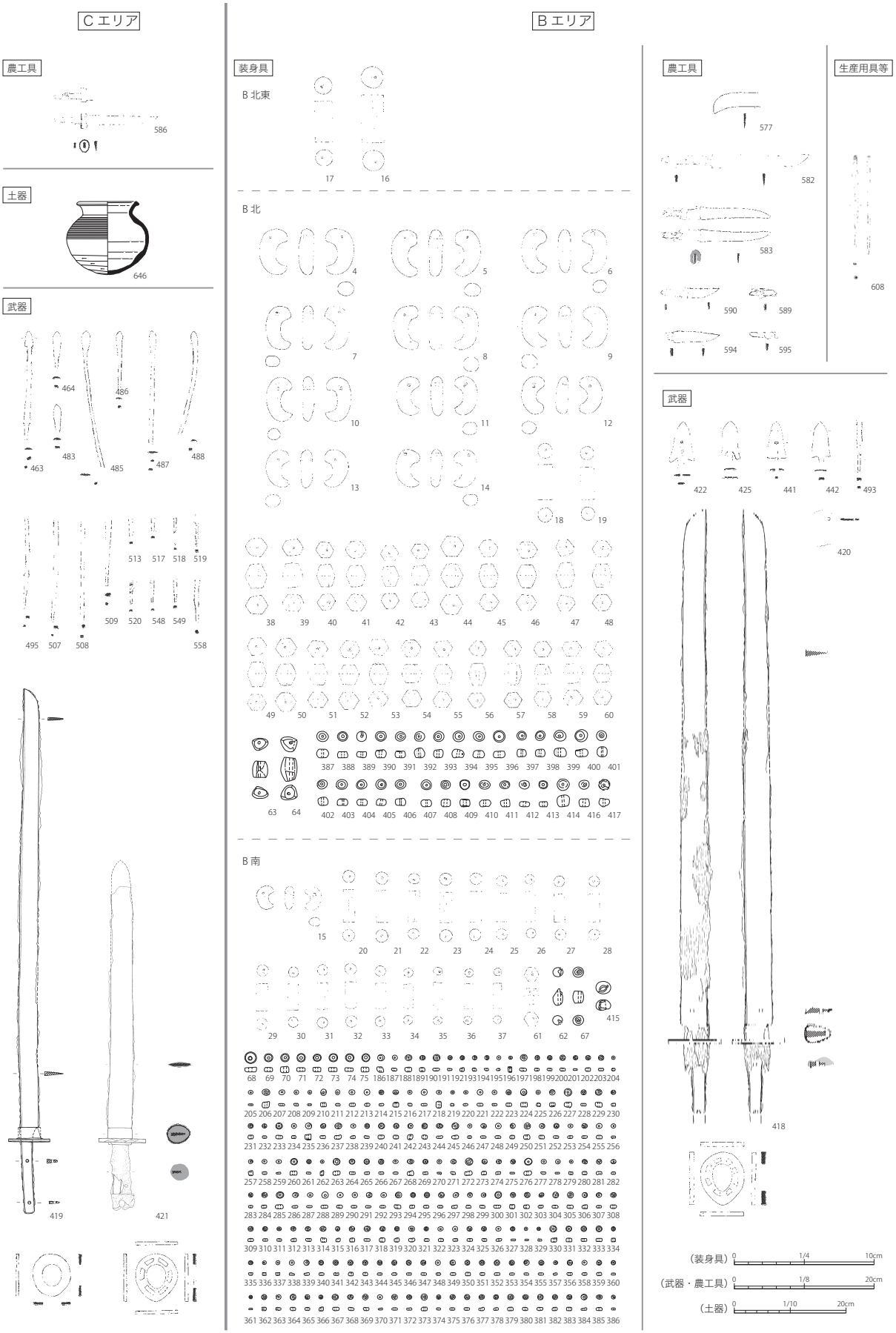
玉類はさらに 3 箇所のエリアに細分することができ、北東エリア 2 点の管玉（16・17）、北エリア 68 点（勾玉 11 点（4 ～ 14）、管玉 2 点（18・19）、切子玉 23 点（38 ～ 60）、棗玉 2 点（63・64）、小玉 30 点（387 ～ 417））、南エリア 232 点（勾玉 1 点（15）、管玉 18 点（20 ～ 37）、切子玉 1 点（61）、棗玉 2 点（62・67）、臼玉 8 点（68 ～ 75）、小玉 202 点（186 ～ 386・415））である。北東エリアの 2 点はともかく、北エリア 68 点と、南エリア 232 点はまとまって出土していることや、北エリアは、勾玉、切子玉が多く、一方で南エリアは、管玉、小玉が多いという、明らかな違いを見せている事から、原位置を保ったまま出土した可能性が高い。また北エリア・南エリアの玉類の東側には、切先を南側、刃部を東上方にした大刀（418）が鍔を装着したまま出土している。また、鍔の下には、小破片ながら大刀もしくは平根式鉄鏃の可能性がある破片（420）が出土しているが、明確ではない。その他、玉類の南エリア周辺に、刀子（583）や針（608）が、大刀の東側、左側壁との間に鉄鏃や刀子などが出土しているものの、いずれもまとまりがなく、小破片の個体が目立つ。



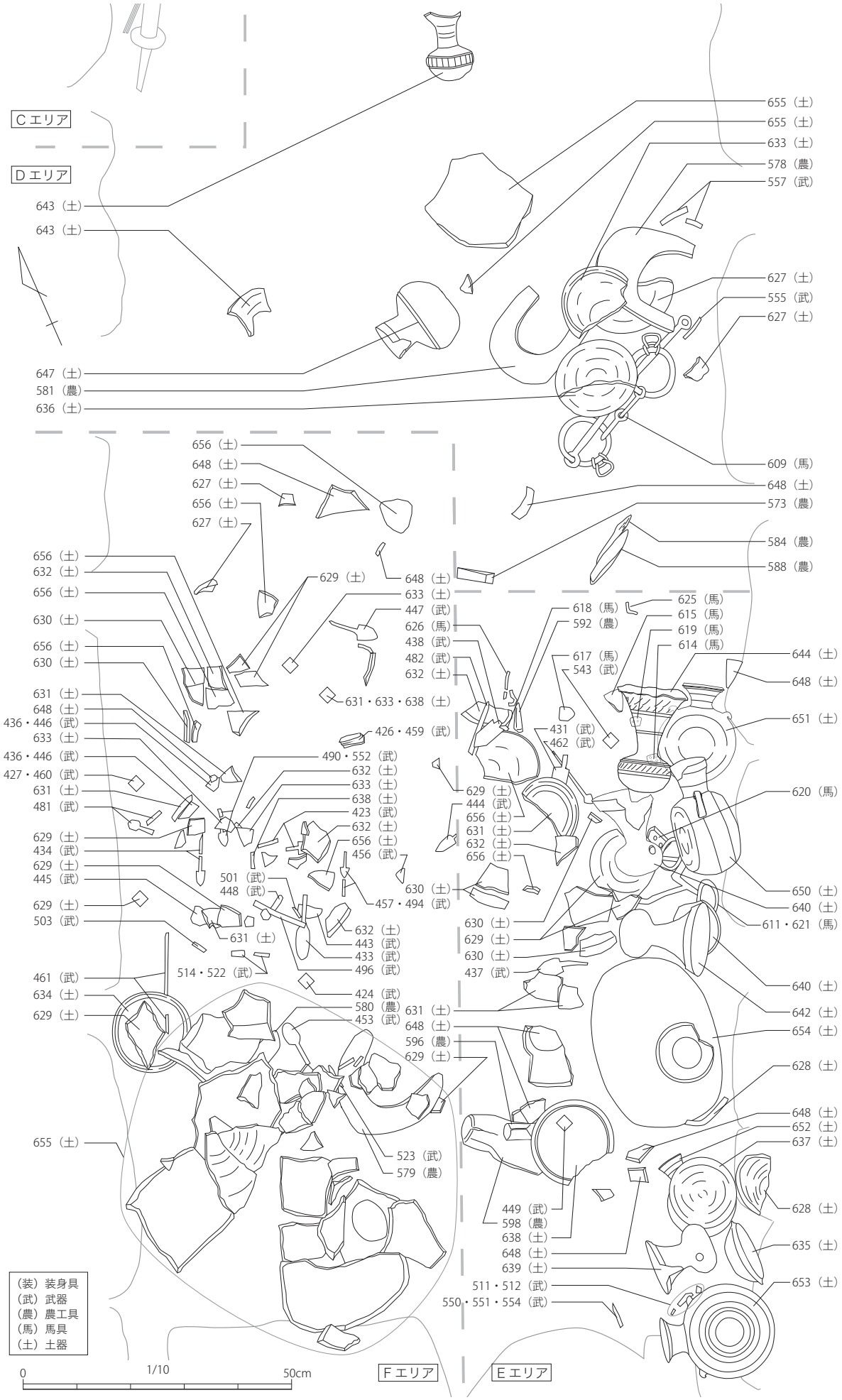
第61図　遺物出土状況図・出土遺物一覧図（Aエリア）



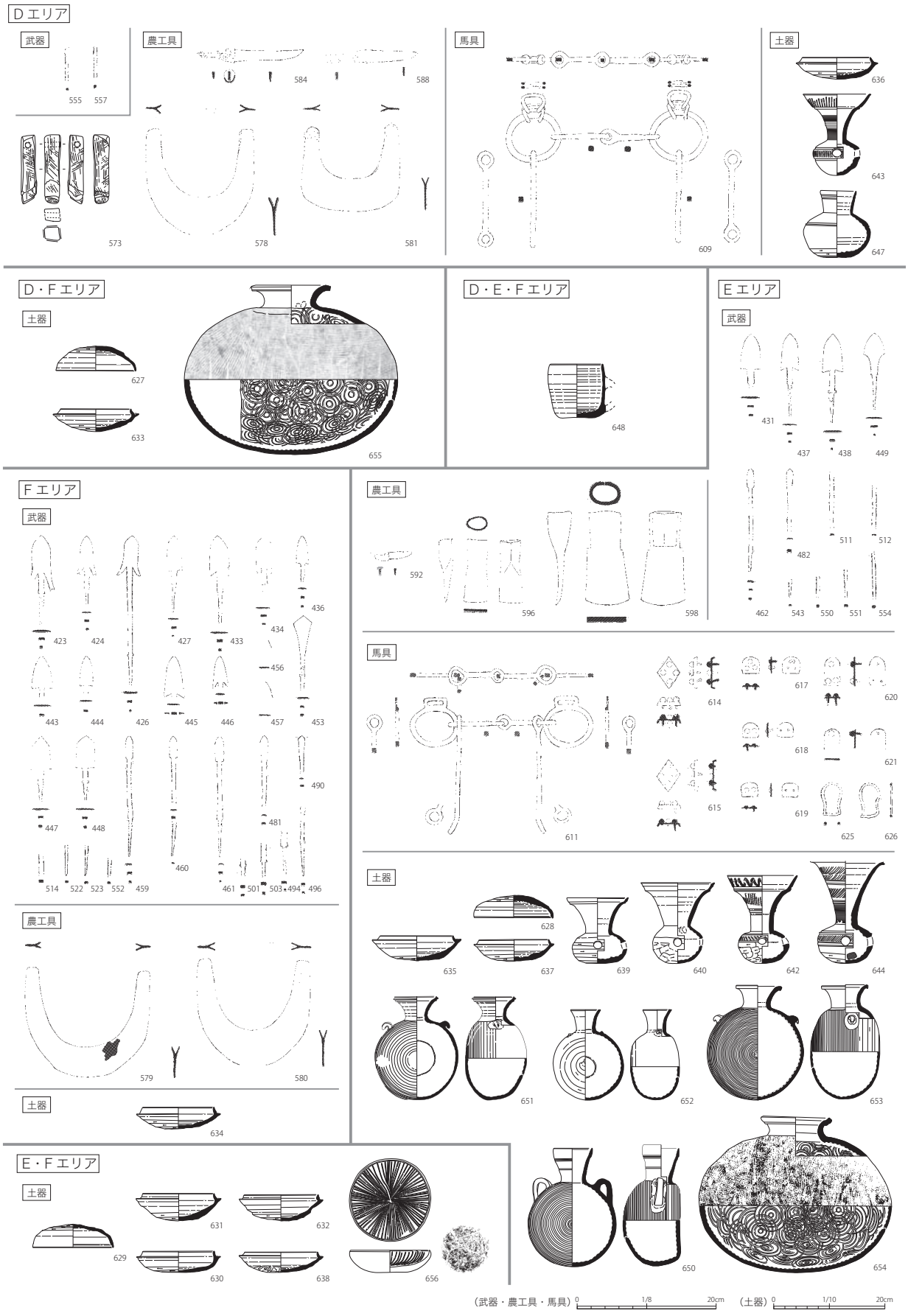
第 62 図　遺物出土状況図（B・C エリア）



第63図　出土遺物一覧図（B・Cエリア）



第64図　遺物出土状況図（D・E・Fエリア）



第 65 図　出土遺物一覧図（D・E・F エリア）

・Cエリア

玄室やや奥壁より、Bエリアの西側の右側壁付近の狭い範囲である。このエリアからは大刀1(419)、剣1(421)が注目される。特に剣（421）の鍔の側面には銀象嵌が認められ、注目される。

大刀（419）は切先を奥壁方向に向け、鍔を装着した状態で出土し、その切先付近に、剣（421）が同じく切先を奥壁側に向けて出土している。さらにその北側（奥壁側）には、須恵器の短頸壺（646）が1点だけ、口を下に向け伏せた状態で出土している。また大刀の周囲には尖根式鉄鏃（463・464・483・485～488）のみが比較的まとまって出土している。

・Dエリア

玄室のほぼ中央部分に位置するエリアである。A～Cエリアでは、須恵器の出土はAエリア3点（641・645・649)、Bエリア0点、Cエリア1点（646）であったが、Dエリアでは7点（坏身3点（627・633・636)、壺1点（647)、甕1点（643)、碗1点（648)、横瓶の破片1点（655））が見られる。

ただし、本来このエリアに副葬されたものとは考えられない遺物が多く、坏身の627・633、横瓶（655）はFエリア出土破片と接合関係があり、さらに言えば、横瓶の大部分の破片は、Fエリアからまとまって出土している。また、636の坏身の下に轡（609）が、633の坏身の下にU字形鍬鋤先（578・581）が出土している。

・Eエリア

玄室の東側（左側壁）の入り口部分。このエリアからは須恵器の出土が多い。石室内からは39個体の須恵器が出土しているが、そのうちの半数近い（他エリアとの接合関係含む）18点がEエリアから出土している。

その内訳は、坏蓋2点（628･629)、坏身6点（630･631・632・635・637・638)、 甕4点（639・640・642・644)、碗1点（648)、提瓶4点（650～653)、横瓶1点（654）である。

また轡(611)をはじめとした馬具(帯金具5点(614･615・617～619)、鋲留金具2点（620・621)、鉸具2点（625・626))も認められる。

Eエリアで特にその存在感を示しているのが、横瓶(654）である。この須恵器は床面から出土していること、この部分まで床石が敷かれている事から、意識的にこの場所に据え置かれた可能性が高く、原位置を留めていると考えられる。この横瓶にもたれ掛かるように甕(642)、さらに提瓶（650･651)、坏蓋（629)、甕（640･644）も一箇所に集められたかのように出土している。

また、これらの須恵器の下からは轡（611）をはじめとした馬具一式が比較的まとまって出土している。

また横瓶（654）の南側、框石と左側壁のコーナーの隙間におしこめられる様に、提瓶（653）が出土し、さらに横瓶（654）との間に、提瓶（652)、坏蓋（628)、坏身（635・637)、甕（639）が伏せられたり、垂直に立ったりして出土している。

Eエリアの中でも、左側壁に寄せられて出土したこれらの須恵器は、その残存率が高く、ほぼ完形品で出土している事が特徴と言える。

その一方で、Eエリアの西側、石室中軸ライン付近から出土する須恵器は、破片である個体が多く、Fエリアとの接合関係を持つものが多い傾向にある。さらにこれらの須恵器の破片に一部の下から鉄斧（596・598）や鉄鏃が出土している。

また石室内、唯一の土師器坏（656）の破片もEエリアから出土しているが、Fエリアからも、その破片が出土している。

・Fエリア

玄室の西側（右側壁）の入り口部分。

このエリアからは、Aエリアに次ぐ30点の鉄鏃が出土している。また、Eエリア同様、比較的多くの須恵器10点（坏蓋2点（627・629)、坏身6点（630～634・638)、碗1点（648)、横瓶1点（655））が出土している。ただし、634の坏身以外は、すべてDエリア、Eエリアから出土した破片と接合関係を有しており、原位置を留めているものは、ほとんどないと推測される。

そのなかで特徴的な出土状態を示すのが、横瓶（655）である。この個体は破片数が多いにもかかわらず、1点がDエリアから出土したものの、そのほとんどの破片がまとまってこのエリアから出土している。出土したのは、Fエリアの中でも最も南側の入り口部分で、床石の敷かれない範囲で、ほとんどの破片が土器内面を上に向けて出土している。さらに口頸部も、上下倒立の状態で出土している。Eエリアの横瓶（654）が、正位置で出土したのとは対照的な出土状態を示す。他の遺物よりも出土高がやや高い事から、追葬等に伴い破壊されてしまった（意識的か偶然かは区別できないが）横瓶を入り

口部分に移動したと考える事も出来る。

また横瓶の下からはＵ字形鍬鋤先（579・580）が出土している。さらにＦエリア全体的に言える事だが、多くの遺物が散漫な状態で出土しており、Ｅエリアの主軸よりの部分と似た様相と言え、Ｆエリア北側とＥエリア西側出土の須恵器は接合関係を持つものが多い。

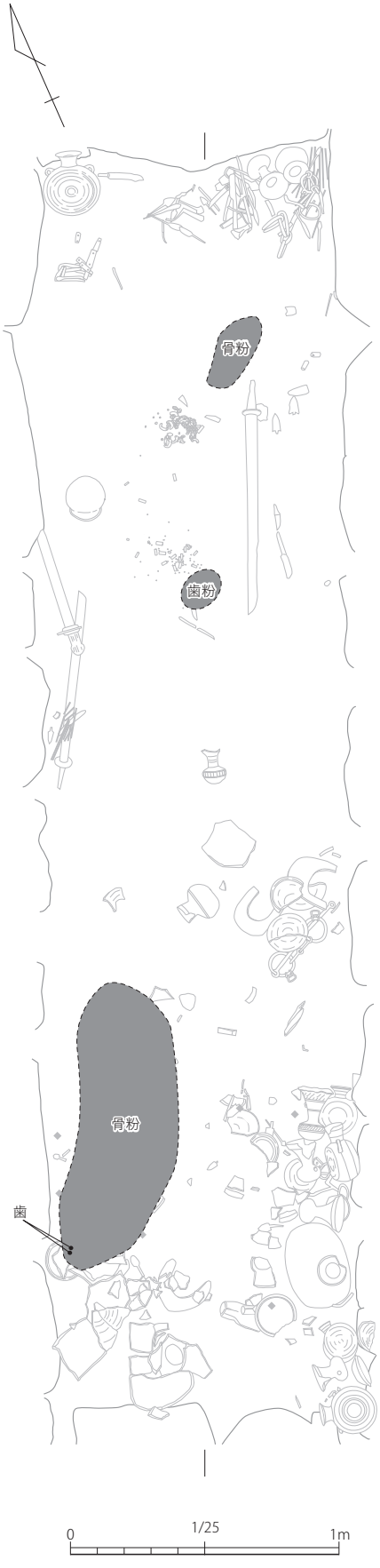
人骨検出エリアと埋葬について　石室内において、3箇所に骨粉、歯、または歯粉が検出された。それぞれの詳細な分析は今回の報告書の中ではなされておらず、今後の課題ともなるが、ここで埋葬数を考えるまで整理しておきたい。

まず1箇所目は､Ａエリアとｂエリアの境の大刀(418)の把柄付近で、東西 13cm、南北 31cm の範囲に骨粉が検出された。また、同じ大刀の切先付近、Ｂエリアの南側玉類付近において歯の粉と推定される白い粉が検出された範囲が直径 12cm 程度みとめられる。調査時の記録には、これら２箇所の検出高についての記載がなく、出土した遺物との関係は明らかでない。

また石室内において最も広い範囲に骨粉が認められたのが、玄室入り口部分西側のＦエリアである。東西 50cm、南北約 1m 程度の範囲に骨粉、および南端付近には歯が検出された。これらの骨粉は、散漫な出土状態を示す須恵器よりも高い位置で検出された。加えて奥壁左コーナー付近から出土した短頸壺（645）の内部からカルシウム分と考えられる白い粉が検出されたが、人骨とは断定できていない。

これまでの遺物出土状態や、骨粉等の状況から埋葬数を考えると、３回と推定される。それぞれの前後関係は田村論考（第４章第３節）にゆずるが、以下の３箇所での埋葬行為があったと推測される。

① Ｂエリアの切先を南に向けた大刀（418）の西側で、骨粉や、原位置と考えられる玉類がまとまって出土した箇所。
② Ｃエリアの切先を北側に向けた大刀、剣の東側の箇所。
③ Ｆエリアの意識的に南側に移動されたと推測出来る横瓶（655）の北側の骨粉が広い範囲で検出された箇所。



第 66 図　骨粉・歯出土状況図

器種別遺物出土状況

装身具（第 68 ～ 70 図）

装身具はすべて玉類で、耳環等は出土していない。出土エリアは、A エリア北東隅（左側壁コーナー付近）と B エリアに限られている。B エリアではさらに、3 つのまとまりとして区分され、北東、北、南と細別した。

前述した通り、それぞれの出土エリアによって装身具の種別が異なる事が特徴である。

まず、A エリアでは、丸玉（土製）が 110 点出土しており、他のエリアからは出土していない。この丸玉が、原位置を留めておらず、追葬などにより移動されたものと考えると、1 点のもれもなく移動したことになり、少々考えづらい。それよりは、土玉の下からは豊富な金属製品の副葬品が出土しており、これらの副葬品が追葬時に移動されているのであれば、追葬時に、何らかの祭祀行為に伴い丸玉がこの場所にまかれたと考えるほうが自然であろう。645 の須恵器短頸壺の中から出土した 5 つの丸玉（657 ～ 661）も、そのような行為の過程で、中に入り込んだものと考えられる。

次に B エリアについて見ていく事とする。B エリアの北東から 2 点のみ管玉（16・17）が出土しているが、これは B 北もしくは B 南にあったものが移動された可能性も考えられる。なかでも B 南のほうが管玉の出土が顕著で、さらに B 南のほうが管玉を含めて全体的に玉類が散乱している事から、B 南にあったと推測できる。

また、B 北と B 南の器種組成が大きく異なる点が注目される。これは、副葬時の状況を比較的そのまま残している可能性が高く、若干の移動以外は、原位置を留めていると考えられる。

第 67 図　石室北側の遺物出土状況

武器（第 71 図）

大刀・剣

大刀は確実なもので 2 振（418･419）、剣は 1 本（421）が出土している。420 は鏃元孔をもつ大刀の可能性もあるが、不明遺物としておく。

八窓鍔象嵌大刀（418）は B エリアの中央よりやや東側（左側壁側）から出土している。鍔が装着されたままで切先は南側の入り口側を向け、刃部は側壁を向いている。

もう 1 振の大刀（419）は C エリアの右側壁沿いにおいて切先が奥壁を向いて出土している。鍔が装着されたままで、刃部は石室の内側を向いている。

剣（421）は 419 の大刀に一部のる様に出土している。やはり切先は奥壁を向いている。

鉄鏃

鉄鏃はすべてのエリアから出土しているが、出土には、大きな偏りがある。

最も多くの鉄鏃が出土しているのは A エリアで、実測点数 124 点を数える。その内 568 ～ 572 は束となって出土している為、刃部が確認できるものは、平根式 21 点、尖根式 39 点である。

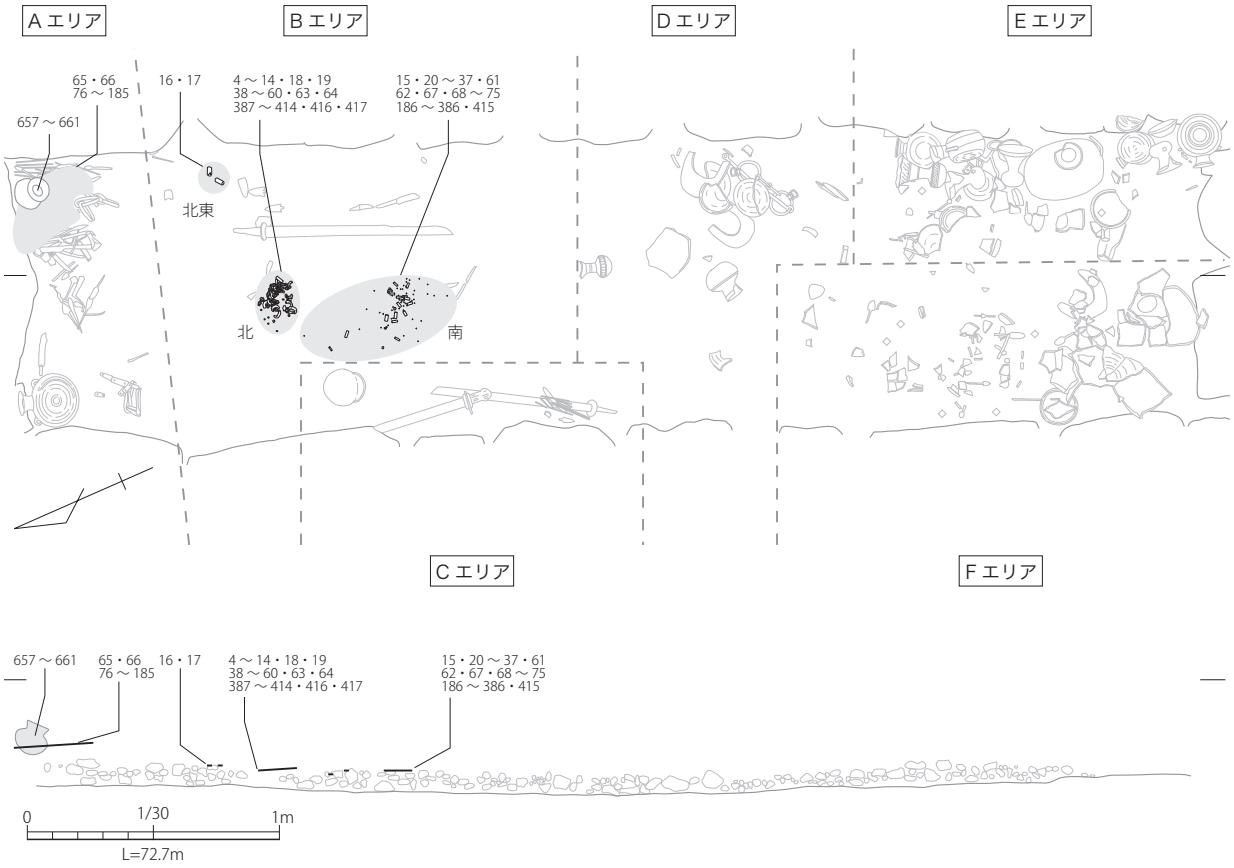
B エリアからは 5 点（422・425・441・442・493）が出土しており、刃部が判明しているものは、いずれも平根式のものである。出土場所がバラバラである事から、大部分が、移動された残りのものと考えられる。

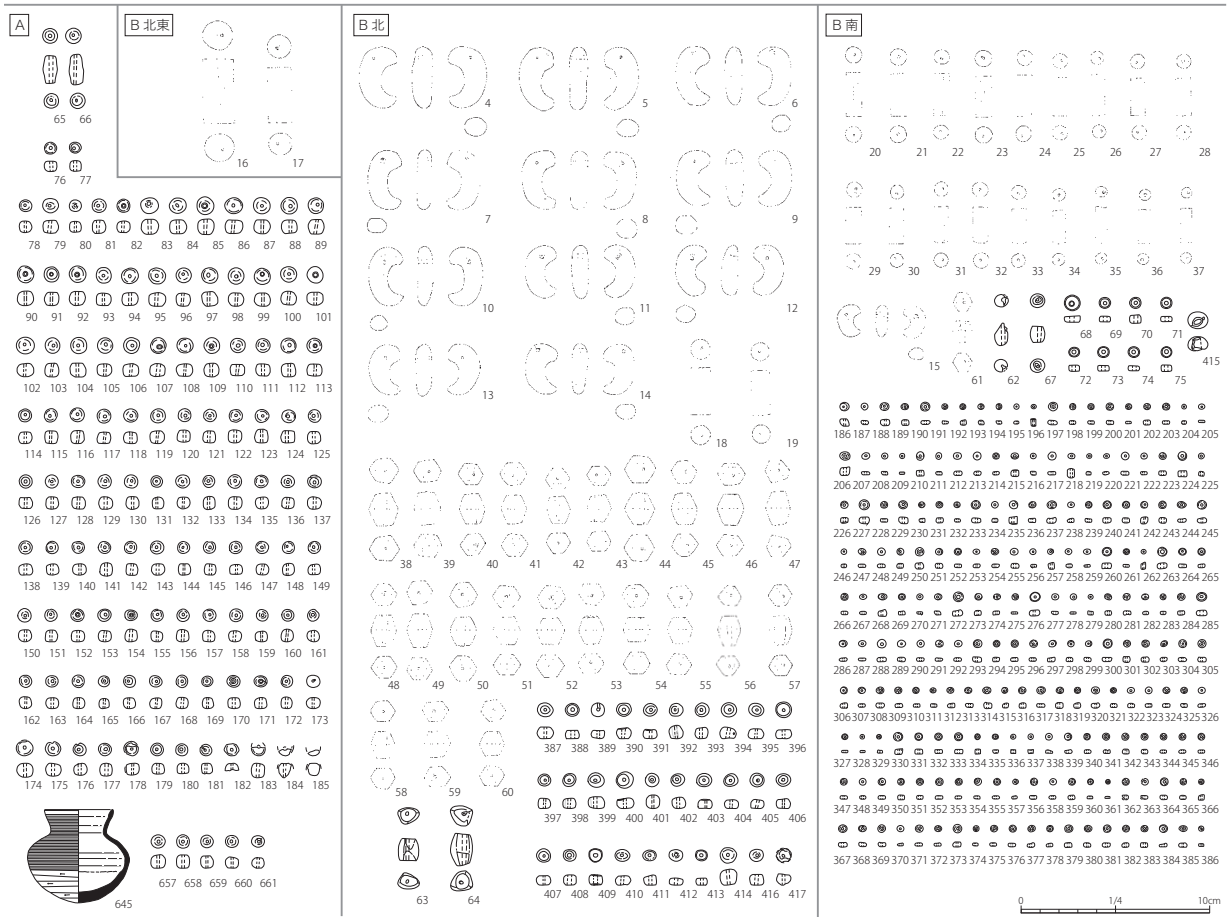
C エリアからは 19 点の鉄鏃が出土している。大部分は大刀（419）の上にのる様に出土している。419 の大刀が原位置を留めているのならば、これらの鉄鏃もほぼ原位置と推定できる。

D エリアからは、頸部もしくは茎部の破片 2 点（555･557）が出土しているのみである。この出土状況からは、D エリアに鉄鏃が副葬されたとは考えられない。

E エリアからは、12 点（431・437・438・449・462・482・551・552・543・550・551・554）の鉄鏃が出土している。左側壁の須恵器が出土している場所には鉄鏃は見られず、石室中央付近や左側壁と框石とのコーナー付近に散乱して出土している。

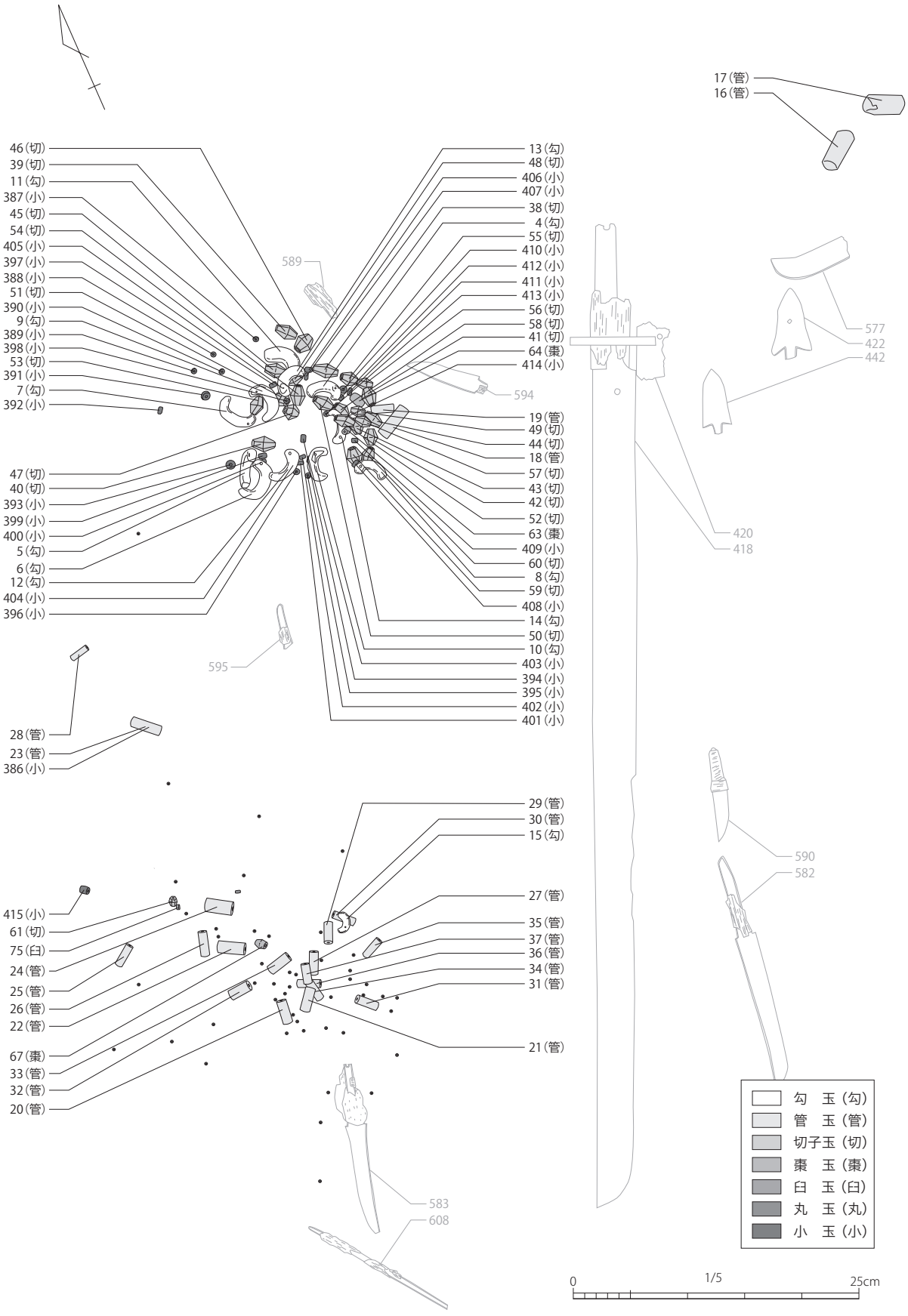
F エリアは、E エリアでの出土状況に近く、全体的に散乱した状態である。29 点のうち、鏃身部形態の判明しているものに限ると、平根式 14 点、尖根式 6 点と、平根式の割合が高い。



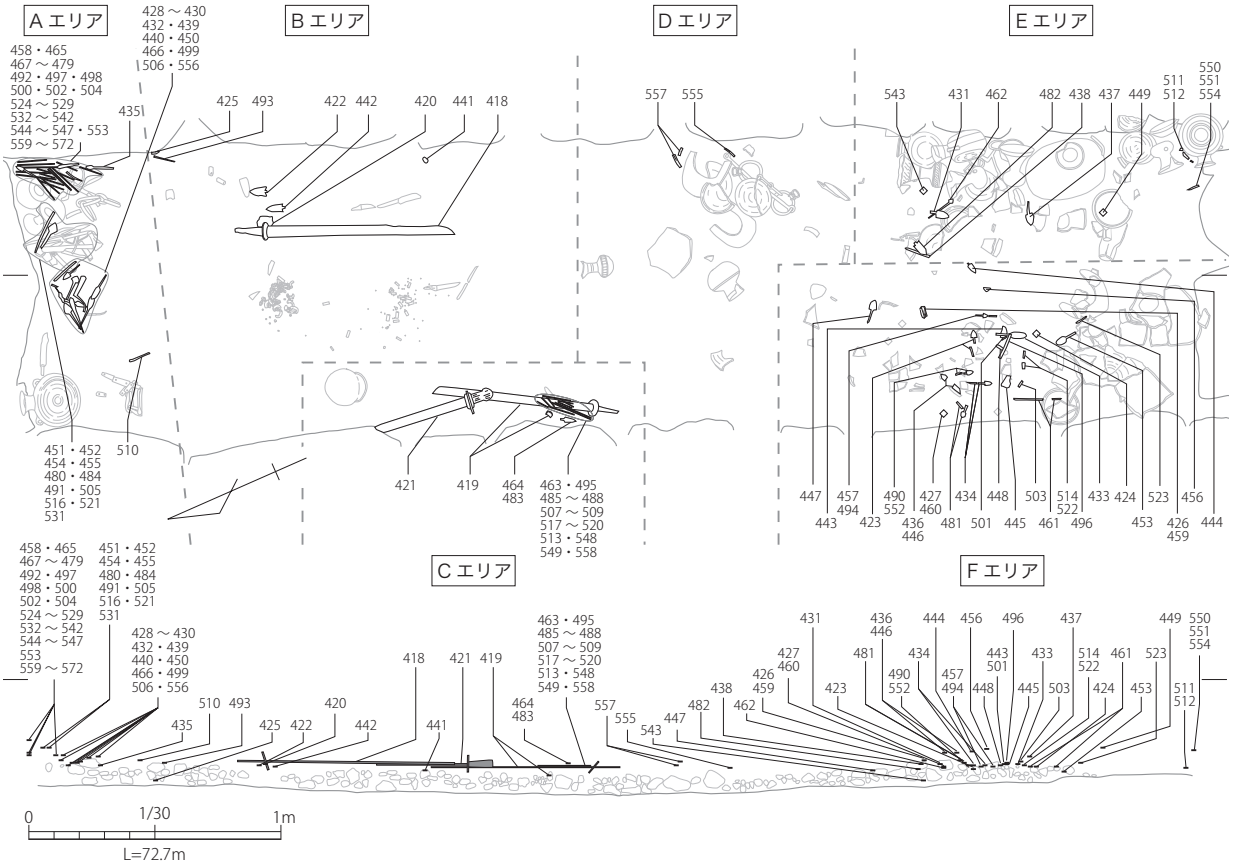


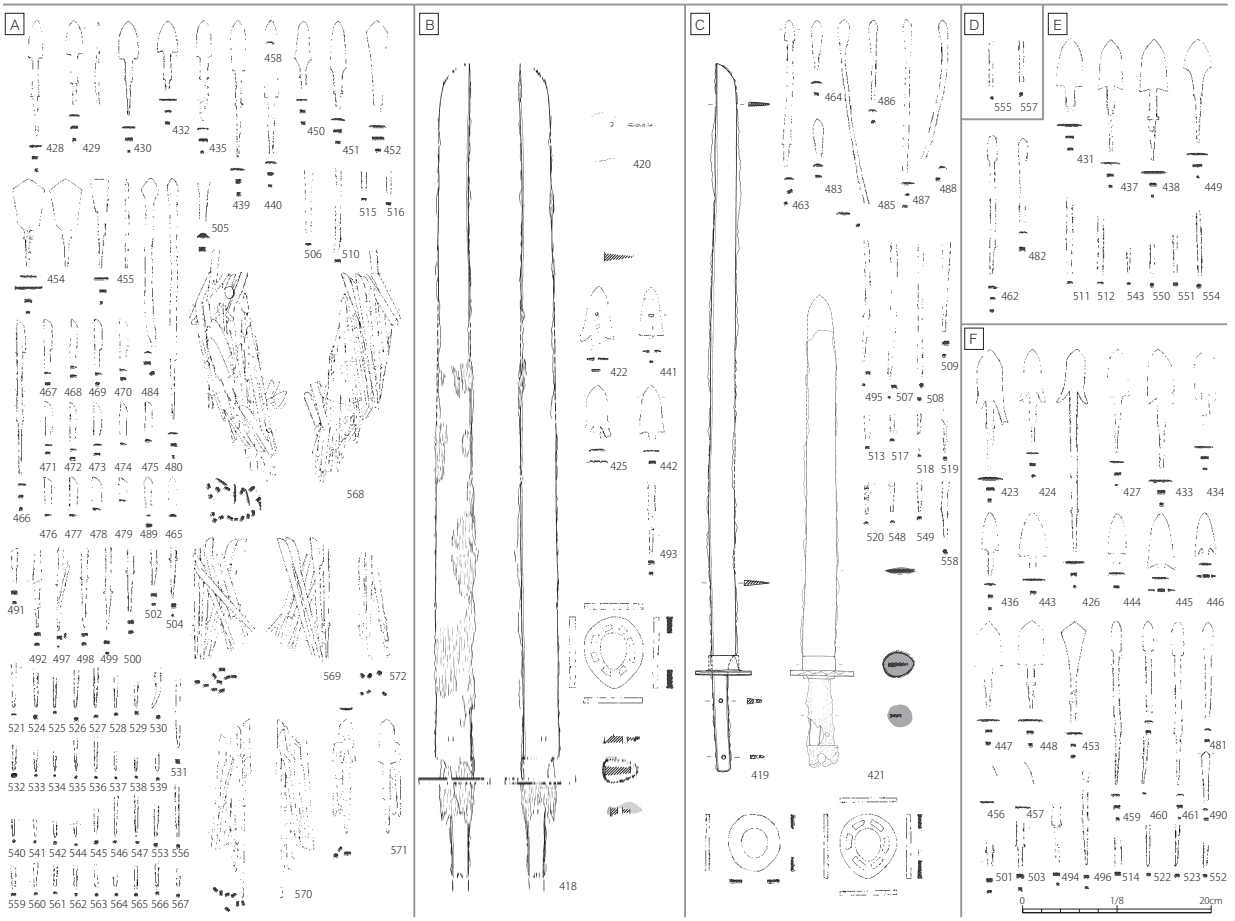
第68図　装身具出土状況図・一覧図

第 69 図　装身具出土状況詳細図（B エリア）

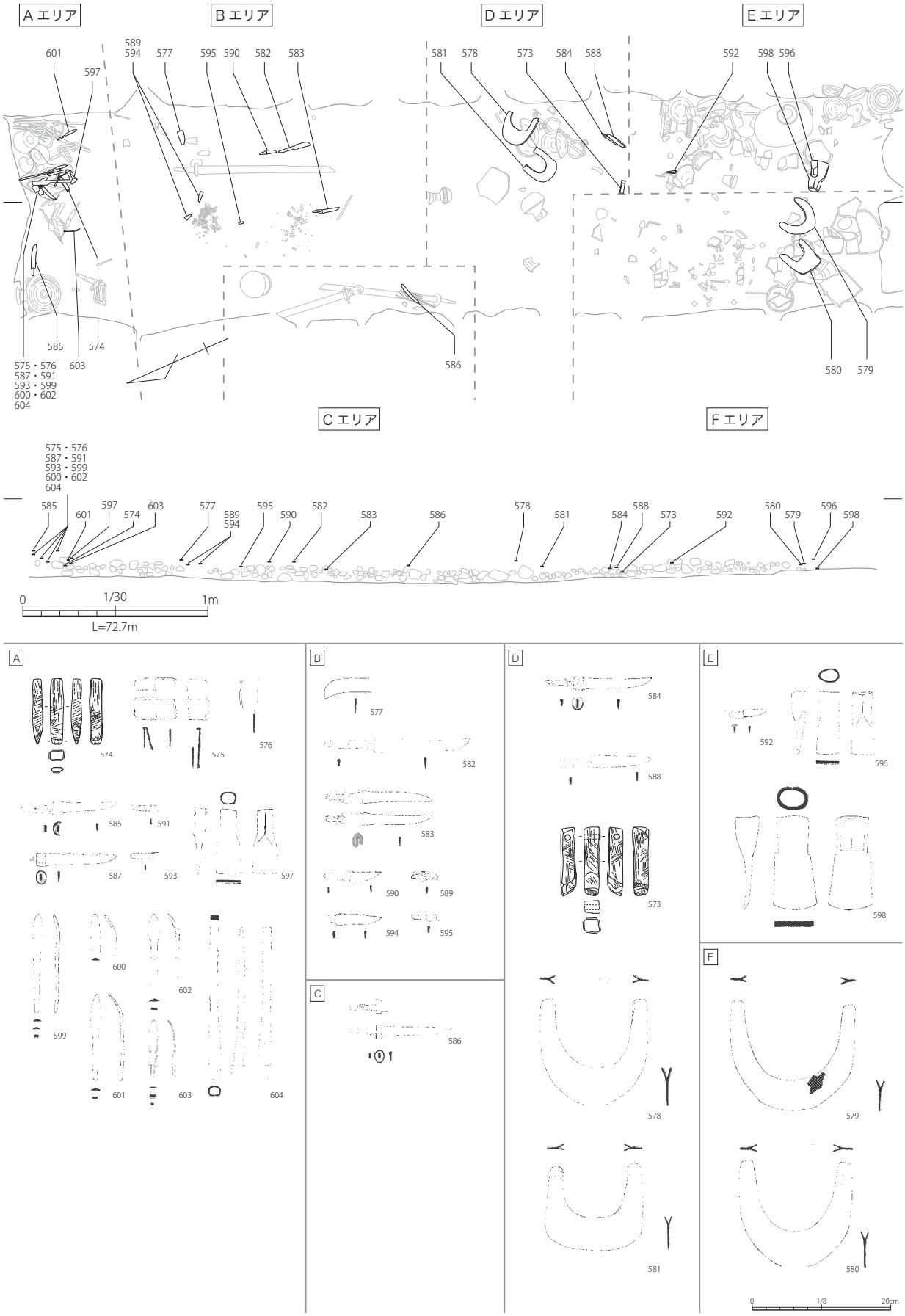


第70図　装身具出土状況詳細図（Bエリア・種類別）





第 71 図　武器出土状況図・一覧図



第72図　農工具出土状況図・一覧図

農工具（第 72 図）

農工具はすべてのエリアから出土している。

A エリアからは最も多くの農工具 14 点が出土している。内訳は、砥石 1（574）、鎌 2（575・576）、刀子 4（585・587・591・593）、斧 1（597）、鉇 5（599 ～ 603）、鑿 1（604）である。A エリアの大部分の農工具が、中央付近にまとまって出土している。しかも鉄鏃が 2 本ほど混ざるのみで、その上下には他の遺物は見られない。原位置を留めているか、もしくは、他の場所から移動されまとめられたと考えられる。

B エリアからは、鎌 1（577）、刀子 6（582・583・589・590・594・595）が出土している。大刀と左側壁との間に、鎌、刀子 2（590・582）が出土し、その他は大刀の西側､装身具のまとまりの側で出土している。B 北の装身具が頭もしくは首飾りの原位置だとすると、589 や 594 などは原位置とは考えられず、また、583・595 も同じく原位置を留めているとは考えられない。

C エリアからは、刀子 1（586）が大刀、鉄鏃などと重なる様に出土しているのみである。

D エリアからは、砥石 1（573）、刀子 2（584・588）、U 字形鍬鋤先 2（578・581）が出土している。U 字形鍬鋤先は、須恵器坏身、坏蓋と重なる様に出土しており、重なりは、下から須恵器坏蓋（627）、U 字形鍬鋤先（578･581）､一番上に須恵器坏身（633）である。このうち、いずれの須恵器も F エリアから出土する破片との接合関係があり、これらにはさまれた 2 つの U 字形鍬鋤先は、移動された遺物と考える事が出来る。

E エリアからは刀子 1（592）、鉄斧 2（596・598）が出土している。2 つの鉄斧は重なるように出土しているが、さらに上には鉄鏃（449）や須恵器坏身（638）も重なる様に出土している。この須恵器坏身（638）は F エリア出土の破片との接合関係を有し、原位置から移動されていると考えられる。原位置を留めている鉄斧の上に須恵器や鉄鏃を移動したのか、須恵器などとともに鉄斧も移動したのかは判断できないが、鉄斧が出土した部分は床石が敷かれない場所であり、当初からこの場所に副葬されたと考えるよりは、須恵器などとともに移動された可能性が高い。

F エリアからは U 字形鍬鋤先 2 点（579・580）が出土している。いずれも、散乱した須恵器横瓶（655）の破片の下より出土している。刃の向きはいずれも南西を向いている。木部が残存しておらず、着柄された状態であったのかは判断できない。579 のわきには E エリアや F エリア内で散乱する須恵器坏蓋（629）が出土しているが、明確な上下関係はなく、他の遺物からこれらの U 字形鍬鋤先が原位置を留めているのか移動されたのかは明らかでない。ただし、E エリアの鉄斧（596・598）同様、床石の敷かれていない部分にあたる事から、移動された可能性も残る。

第 73 図　石室奥壁付近の遺物出土状況

第 74 図　石室左側壁付近の遺物出土状況

第 75 図　石室中央の遺物出土状況

第 76 図　鍛冶具・生産用具等出土状況図・一覧図

鍛冶具・生産用具等（第 76 図）

鉄鉗 1（605）、鑷子 1（606）、針 2（607・608）のうち、針（608）はBエリアから、それ以外はAエリアから出土している。

Aエリアでは奥壁の前面部分から鎌（575・576）や刀子（587・591・593）、斧（597）、鉇（599・600・602）、鑿（604）などの農工具とともにまとまって出土しており、1 箇所に集められたかのようである。また、上面からは鉄鏃の破片（451 など）が出土している。

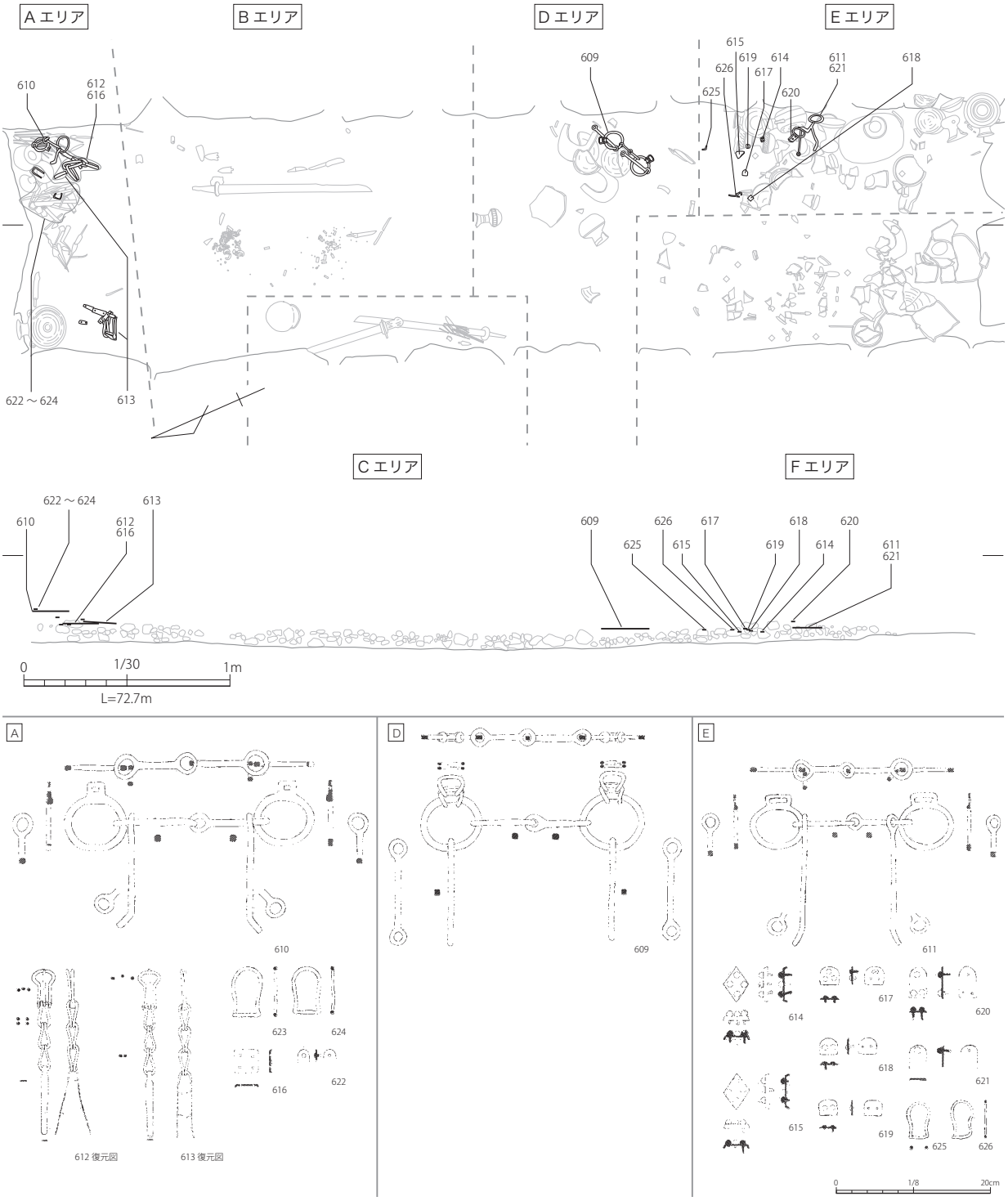
一方、608 の針はBエリアにおいて主軸付近で単独で出土している。装身具のまとまりのすぐ南からの出土している。原位置をとどめているのであれば、被葬者の携行品の可能性も想定される。

馬具（第 77 図）

轡はA（610）、D（609）、E（611）エリアからそれぞれ 1 点ずつ出土している。612・613 の鐙吊金具 2 点はAエリアから出土している。小形矩形立聞環状鏡板付轡（610）は、左側壁と奥壁のコーナー付近において、須恵器短頸壺（645）の上で、出土している。

また、轡（610）の隣から 612 の鐙吊金具、616 の帯金具がまとまって出土している。612 と対をなす 613 の吊金具は西側の右側壁付近から大部分が出土しているが、一部、612・616 付近から出土した破片との接合関係を有する。

Dエリアからは兵庫鎖轡（609）が出土している。轡の上には須恵器坏身（636）が重なるように出土している。



第 77 図　馬具出土状況図・一覧図

Eエリアからは大形矩形立聞環状鏡板付轡1点(611)、帯金具5（614・615・617～619)、鋲留金具2（620・621)、鉸具2（625・626）と、最も多くの馬具が出土している。

轡（611)、鋲留金具2（620・621）が横瓶（654）の北側においてまとまって出土しており、その上部に多数の須恵器（640・642・629・620・650）が重なる様に出土している。また、帯金具3点（614・615・619）の上部にも須恵器甕（644）が重なっている。618の帯金具の上部にも土師器坏（656）の破片が重なっており、馬具の破片がすべての遺物の最下位から出土しており、移動されていない可能性が高い。

土器（第 78 ～ 84 図）

・須恵器

須恵器は 28 個体出土しているが、その多くは入り口部分のＥ・Ｆエリアからの出土である。

【坏身・坏蓋】 坏身、坏蓋はＤ・Ｅ・Ｆエリアから出土している。多くは破片での出土で、他エリアとの接合の結果、ほぼ完形品になっている。

ほぼ完形品のまま出土したのは、Ｄエリアの 636、Ｅエリアの 635･637、Ｆエリアの 634 である。しかし 4 点とも床面から浮いた状態で出土しており、635・637 は 15cm 程度浮いている。

以下、接合関係を確認していくこととする。

627 の坏蓋は、Ｄエリアから破片が 2 点、Ｆエリアから 2 点出土しており、最大接合距離は 95cm である。出土高の差は 4.5cm である。

628 の坏蓋は､Ｅエリアから破片 2 点が出土している。小さい破片は横瓶に接しており、大きな破片は左側壁に乗るように出土しており、小さな破片よりも 7cm 上からの出土である。2 点間の距離は 10cm を測る。

629 の坏蓋は、Ｅエリアから 2 点、Ｆエリアから 8 点の破片が出土している。Ｆエリアの破片のほうが床面に近く出土しており、Ｅ･Ｆエリアでの出土高の差は 2.5cm を測り、遺物の最大接合距離は 80cm を測る。

630 の坏身はＥエリアより 4 点、Ｆエリアより 3 点出土した 7 点からなる。Ｆエリアの遺物はＥエリアより低く､その差は 7.5cm ある。接合距離は 85cm を測る。

631 の坏身は、Ｅ・Ｆエリアから出土した 6 点の破片からなっているが、大きな破片はＥエリアから出土しており、小破片 3 点がＦエリアから出土している。

破片の高低差は最大 0.7cm で、接合距離は最大 25cm を測り、629・630 同様、Ｆエリアの方が低く出土している。

632 の坏身はＥ・Ｆエリアから出土した 6 点の破片からなっている。破片の大小に出土エリアの差はあまりない。破片の高低差は最大 4.5cm を測り、接合距離は 70cm を測る。

633 の坏身は、Ｄ・Ｆエリアから出土した 5 点の破片からなっており、大きな破片はＤエリアから出土し、小破片のみＦエリアからの出土である。Ｄエリア出土の大きな破片が一番高いところから出土しており、接合距離は 110cm を測る。

638 の坏身は、Ｅ・Ｆエリアから出土した 3 点の破片からなっており、大きな破片はＥエリアの横瓶の西側で正位で出土した。高低差 1.2cm を測り、接合距離は 90cm を測る。

【甕】 甕は 6 点出土しており､Ａエリアから 1 点（641）、Ｄエリアから 1 点（643）、Ｅエリアから 4 点（639・640・642・644）である。

Ａエリアの 641、Ｅエリアの 639・642・644 の 4 点は接合関係を持たず、ほぼ完形品での出土である。

641 が口を上に向けて出土している以外は、いずれの個体も横に倒れた状態で出土している。641・644 が床面近くから出土している一方で、他の 4 点は床面より浮いた状態で出土している。

特に 639 は、土砂流入後に移動したのか、まわりの須恵器とともに床面より 12cm 程度浮いて出土している。

640 はＥエリアからの出土で、口縁部の破片の一部が同じ甕である 642 の下から出土している。また、体部の大部分はＥ・Ｆ間で接合関係を有する坏蓋（629）の上から出土しており、移動された可能性が高い。2 つの破片の出土高はほぼ等しい。

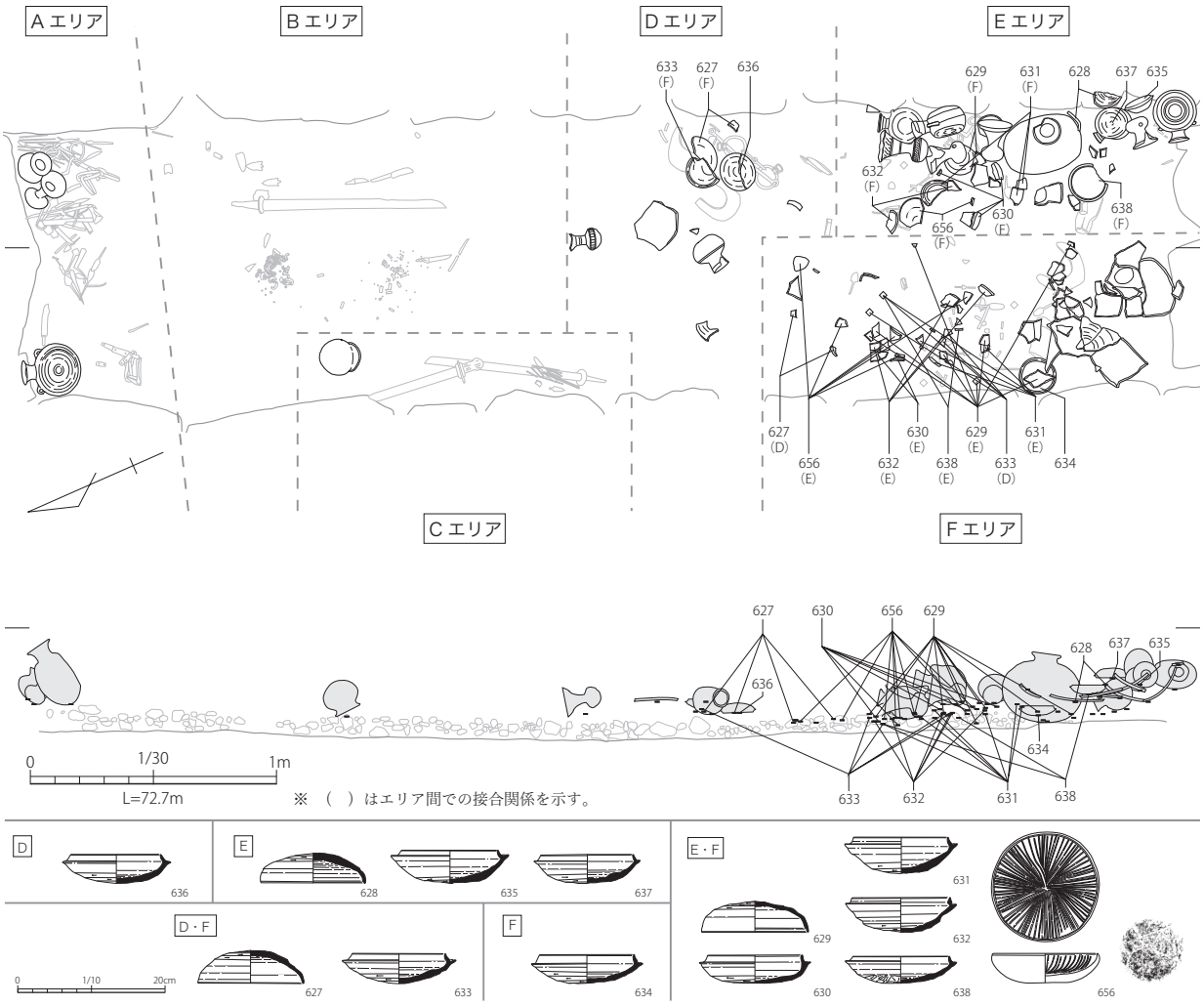
643 はＤエリアからの出土で、640 同様、2 つの破片が接合している。やはり体部と口縁部の破片で構成され、口縁部の破片の方が 2cm 高く出土しており、平面的距離は 50cm を測る。

【短頸壺】 3 点（645 ～ 647）出土しているが、それぞれＡエリア（645）、Ｃエリア（646）、Ｄエリア（647）からの出土である。それぞれ接合関係がなく、完形品として出土している。

645 はＡエリアのコーナーで、甕（641）に接して出土している。646 はＣエリアにおいて、大刀（419）・剣（421）の切先方向において、口縁部を床面に接地させる様に倒立した状態で出土した。

647 はＤエリアの主軸付近において、口縁部を南西に向けて横に倒れた状態で出土している。床面から若干、浮いている様にも思われる。

【把手付碗】 1 点（648）のみの出土である。12 点の破片で構成されているが、出土位置の判明している 10 点で言うとＤエリアから 1 点、Ｅエリアから 6 点、Ｆエリアから 3 点出土している。接合距離間の最大は 135cm を測るが､出土高の差は最大で 2.5cm しかない。



第 78 図　土器出土状況図・一覧図（坏類）

【提瓶】 提瓶は 5 点（649 ～ 653）出土している。

すべて接合関係はもたず、ほぼ完形品として出土している。

A エリアから出土しているのが 649 の提瓶である。奥壁と右側壁コーナー付近に口縁部を奥壁に立てかける様にして出土している。他の 4 点は E エリアの左側壁付近から出土している。650･651 が横瓶（654）の北側、652・653 が南側からの出土である。

650・651 は口縁部を奥壁側に向けるように倒れて出土し、652 も同じように北西方向を向けている。

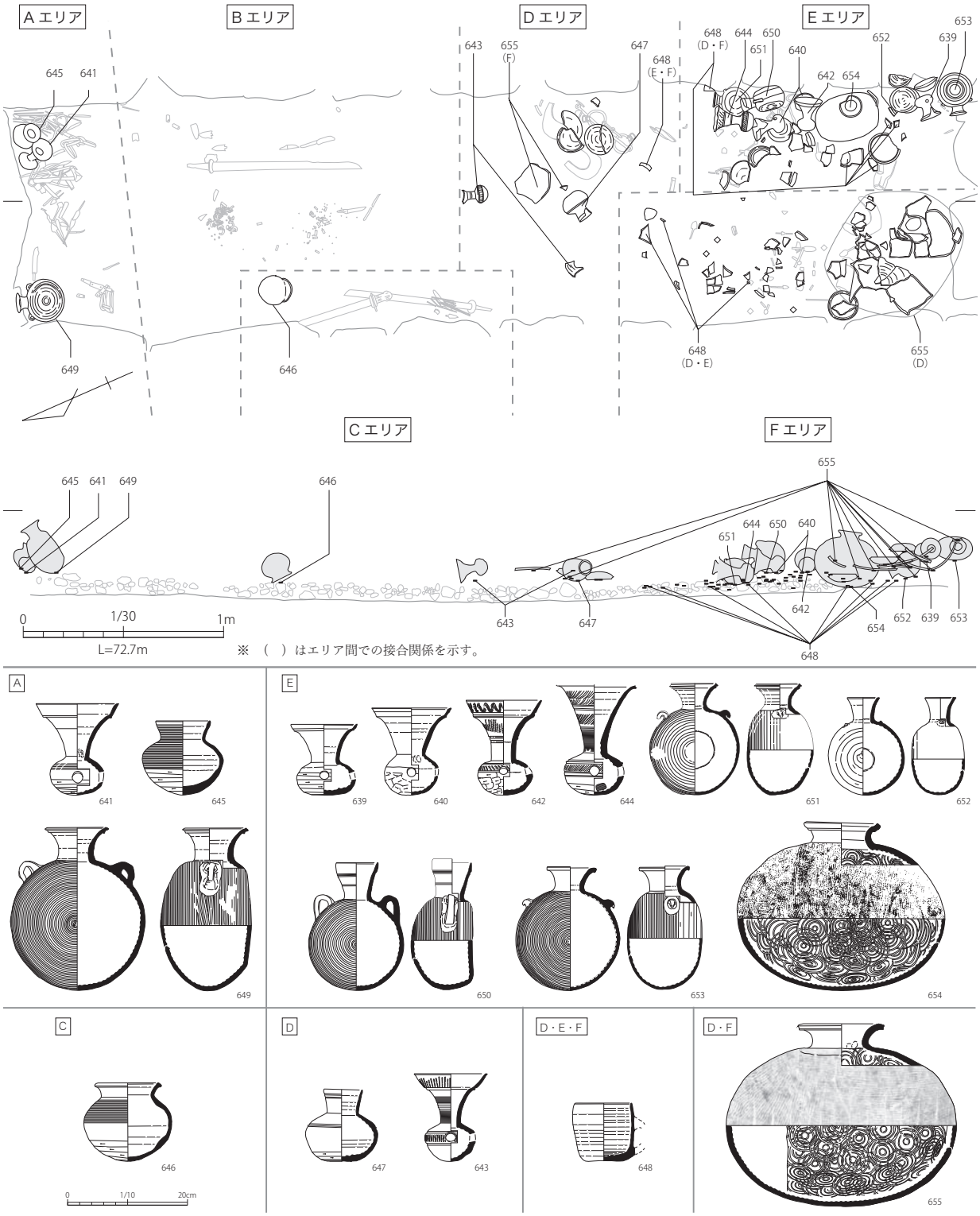
一方、653 は、左側壁と框石とのコーナー付近において、口縁部を西側に向けながら側壁にのるように出土しており、他の提瓶よりも 10cm 程度高い位置から出土している。

【横瓶】 横瓶は 2 点（654・655）出土しているが、その出土状況は対照的である。

654 の横瓶は、E エリアの左側壁付近に据え置かれる様に正位で出土している。体部の長軸を石室主軸に平行させる様に出土している。ほぼ完形品である。

一方、655 は破片数 54 点を数え、2 片だけが D エリアの中央部分から出土している他は、大部分が F エリアから出土している。

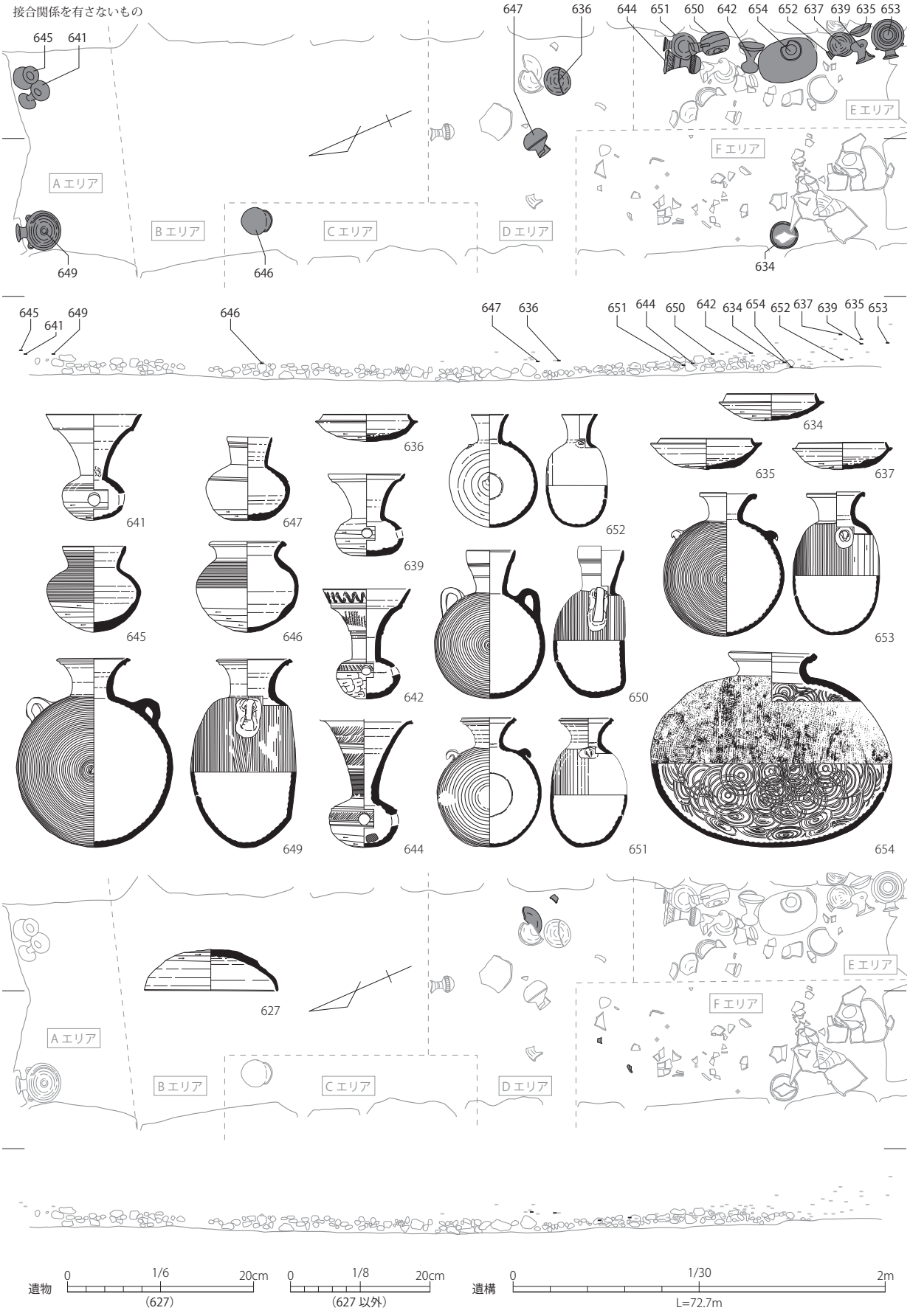
いずれの破片も床面レベルから浮いて出土しており、前述の 654 の下端レベルと比べると最大 23cm の差がある。いくつかの破片を除いて多くの破片が内面が上を向くように出土しており、口縁部も倒立して出土している。破片間の距離は最大 200cm を測る。



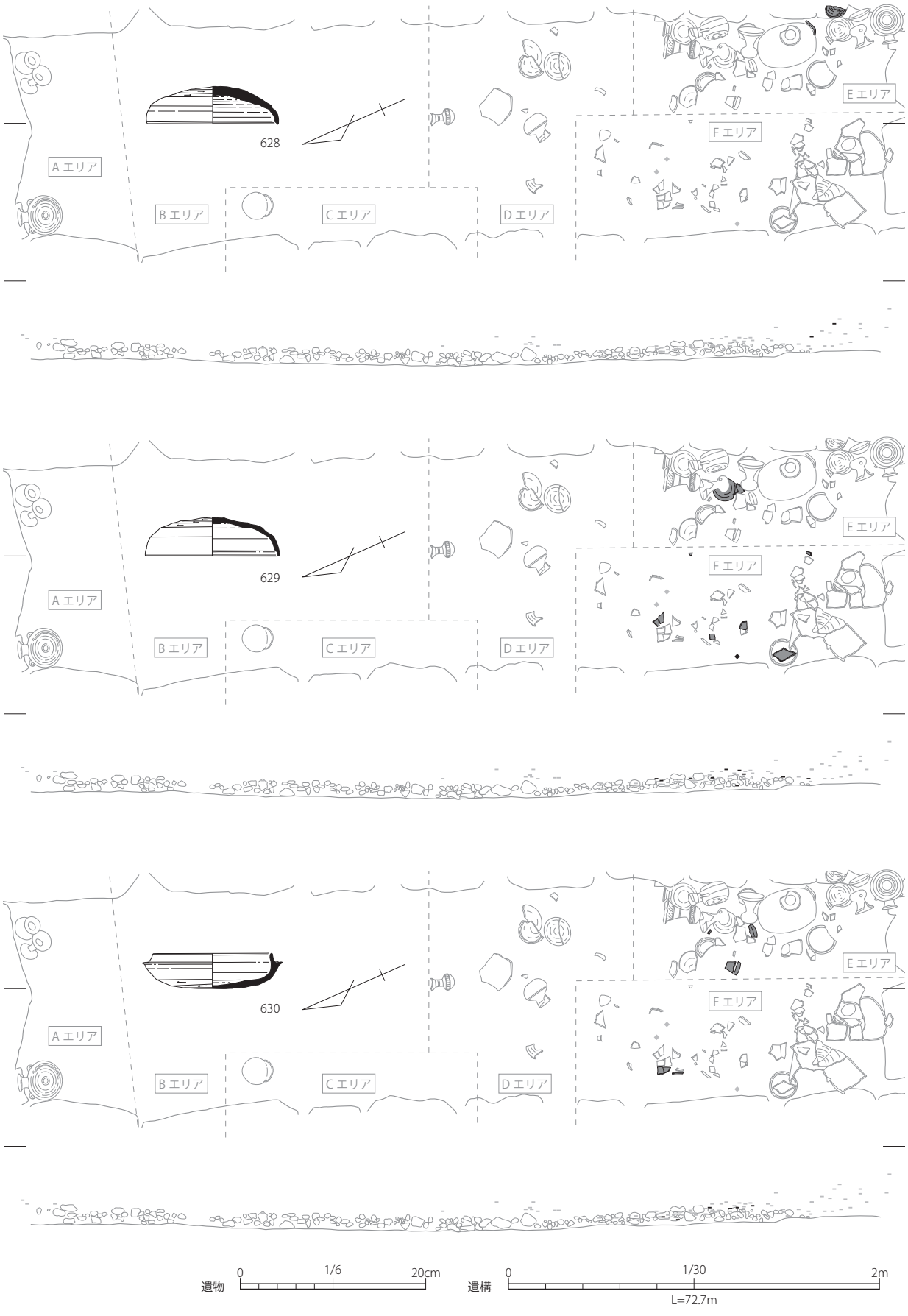
第 79 図　土器出土状況図・一覧図（坏類以外）

・土師器

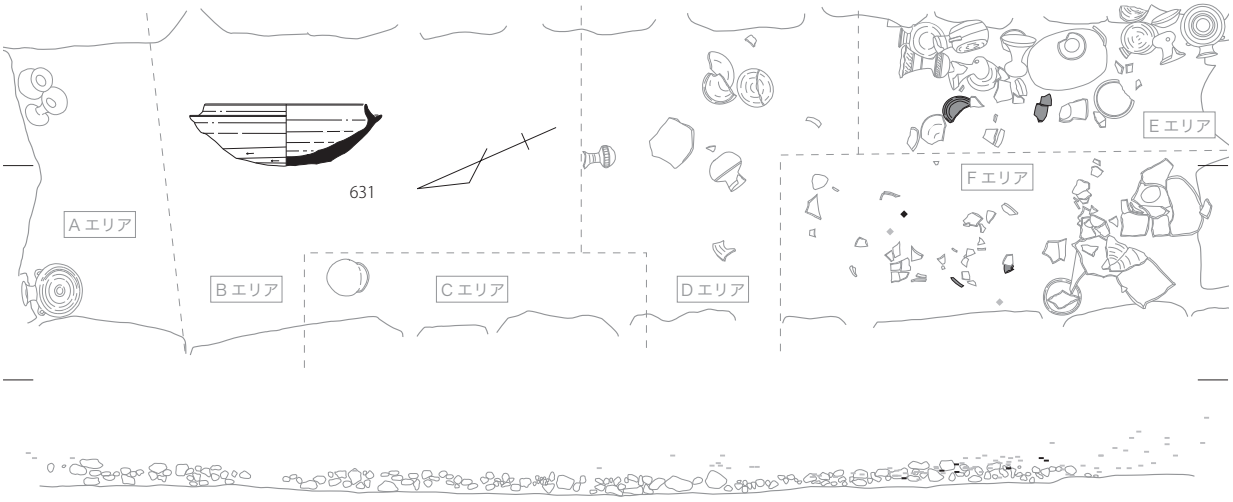
坏（656）が石室内から出土した唯一の土師器である。破片数 13 点を数えるが、大きな破片がＥエリアの主軸付近より出土している一方で、小破片はＦエリアに多く散乱している。破片間の高低差は最大 5.5cm、接合距離は最大で 52cm を測る。

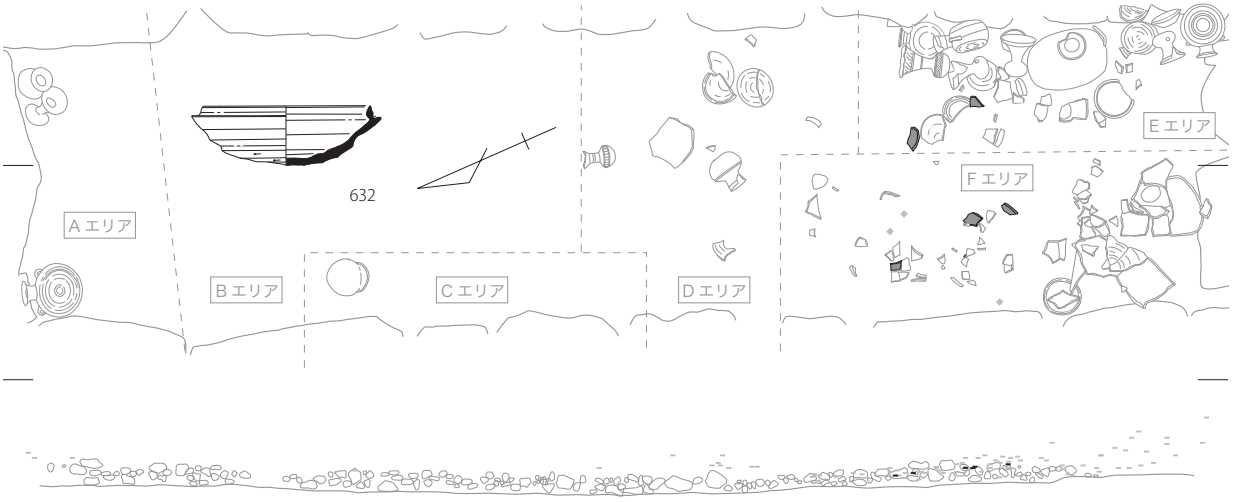


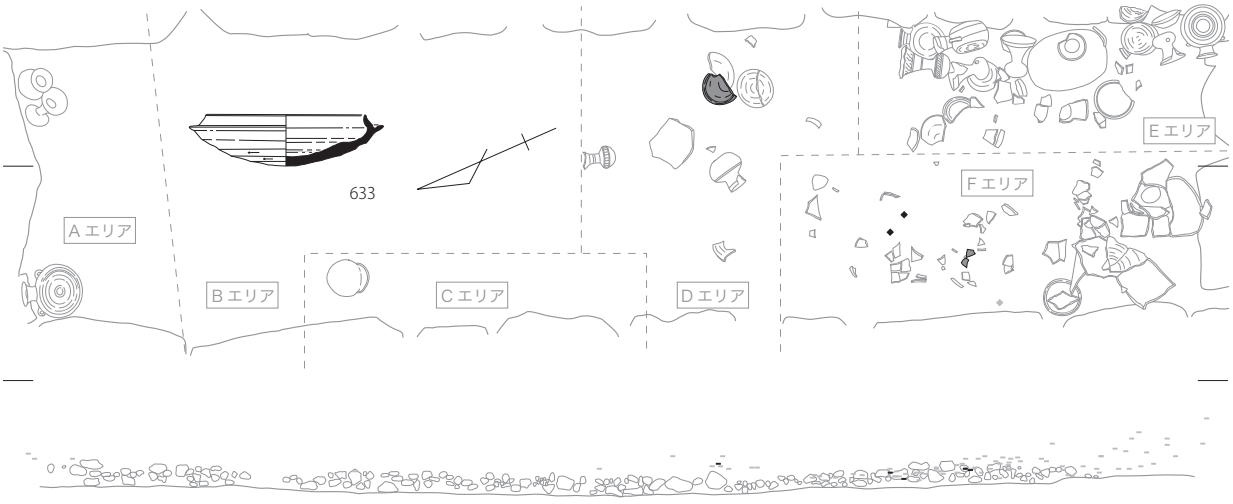
第 80 図　出土土器接合関係図 1



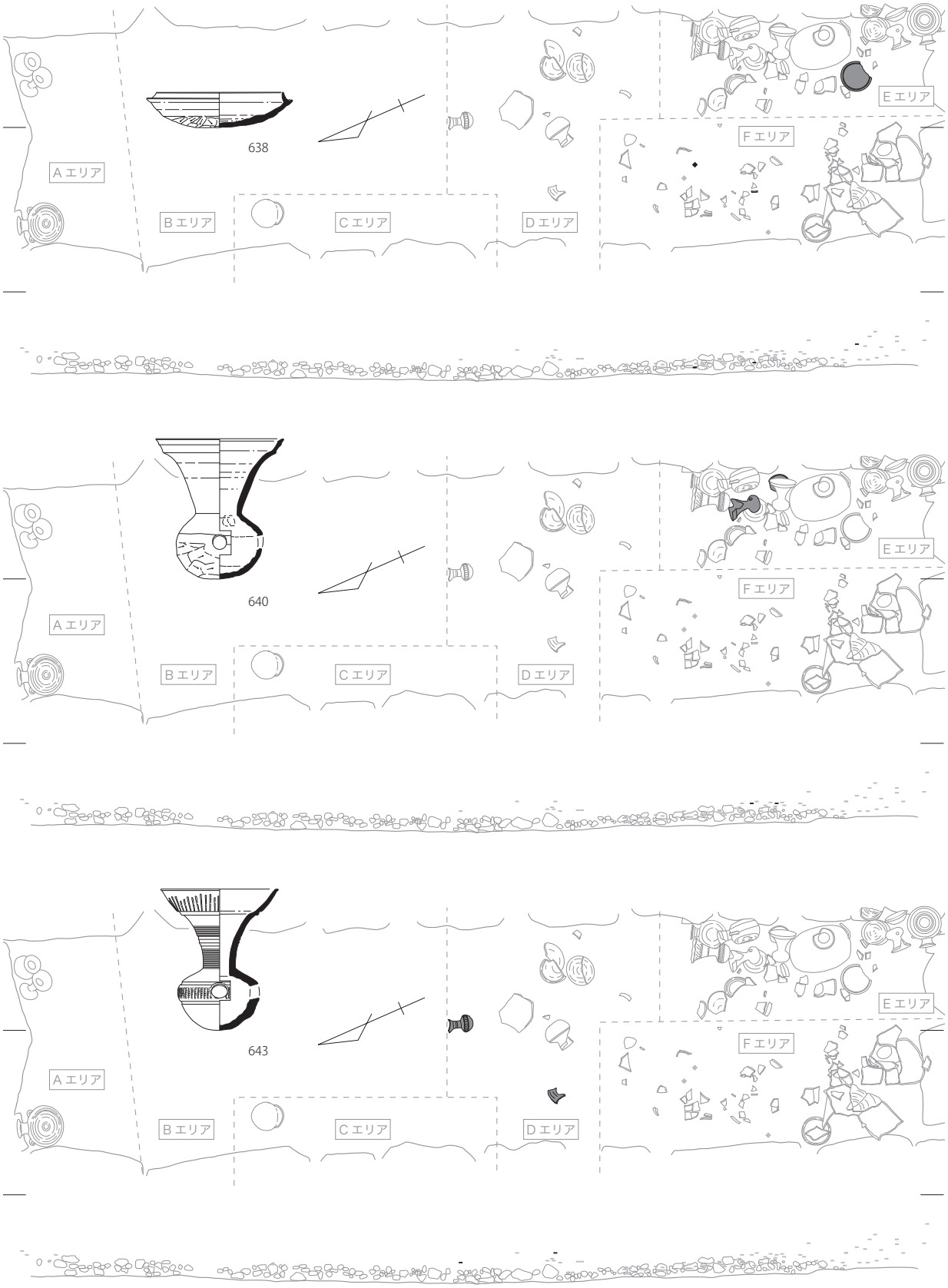
第 81 図　出土土器接合関係図 2



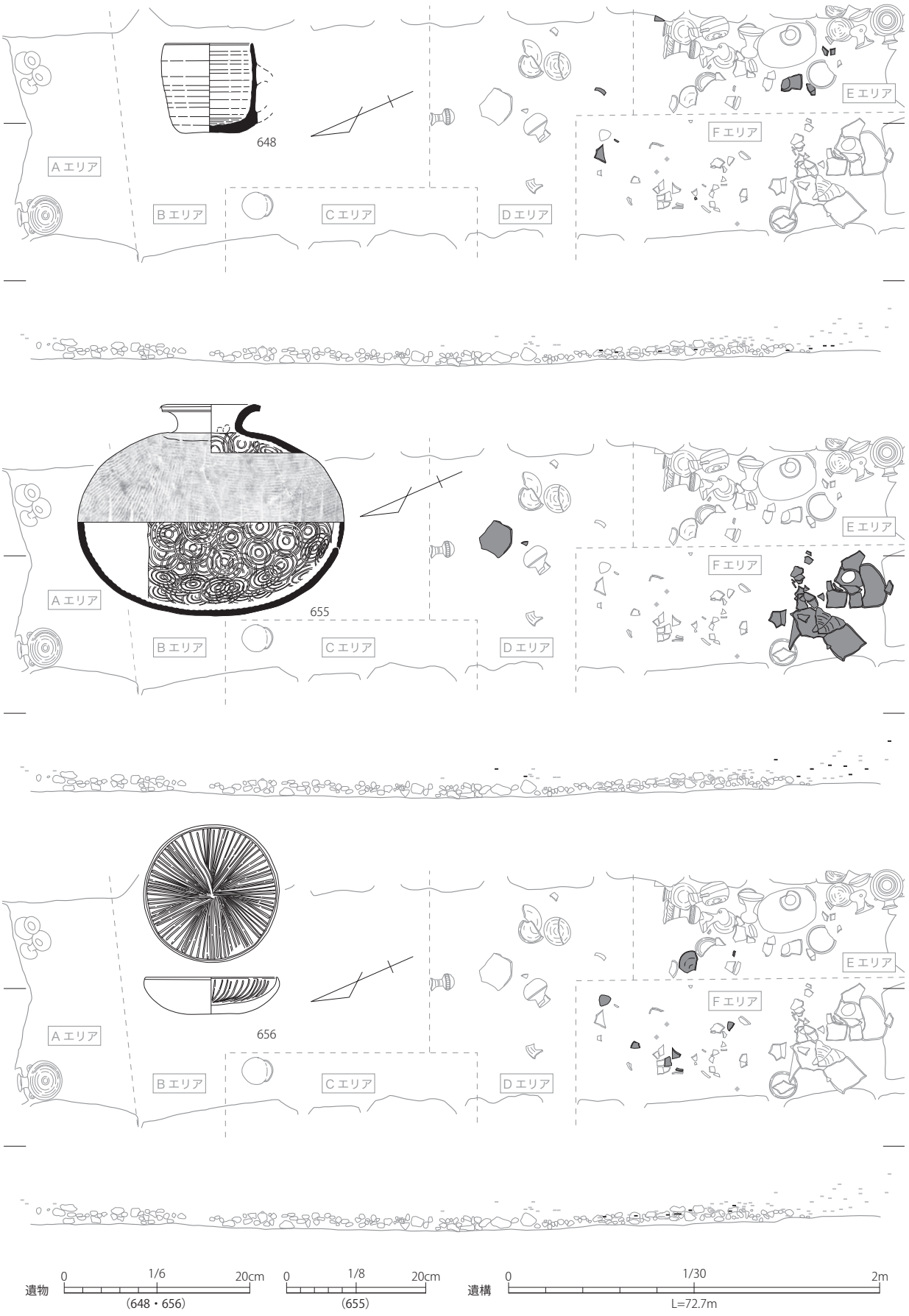




第 82 図　出土土器接合関係図 3



第 83 図　出土土器接合関係図 4



第 84 図　出土土器接合関係図 5

5. 副葬品

構成　中原第４号墳は未盗掘の横穴式石室と考えられ、それゆえに副葬品の残存率が高く、また、埋葬時の状況をそのまま残していると考えられる。

埋葬は合計３回行われたと考えられる。ただし、次章の田村論考（第４章第４節）にもあるように３回目の埋葬時にともなう副葬品はほとんどないものと推定される。その前提に立つのであれば、出土した副葬品は初葬時のもの、および１回目の追葬に伴うものとすることができる。大刀や剣、馬具など初葬時の遺物と追葬の遺物を区分することができるものもあるが、どちらとも断定できない遺物も多数存在する。そのため､以下では、遺物総体としての構成を確認しておくこととする。

【装身具】 すべて玉類である。勾玉 12、管玉 22、切子玉 24、棗玉 6、臼玉 8、丸玉（土製のもの）115、小玉(ガラス製のもの)232 が認められる。玉類はまとまって出土しており、副葬時の状況を良好に残していることから、耳環はもとから副葬されなかった可能性が高い。

出土位置にまとまりがみられ、元位置を保っていると考えられるＢエリアのふたつのまとまりはそれぞれ、首飾り（あるいは頭飾り)、腰飾り（あるいは首飾り）という用途が想定される（第４章第５節)。

【刀剣類】 大刀 2、剣 1 が認められる。大刀は銀象嵌装八窓鍔付大刀と無窓鍔付大刀、剣は鹿角装銀象嵌装六窓鍔付剣である（第４章第６節)。

【鉄鏃】 束となって出土したもの（568 ～ 572）を除いて、鏃身の形態が明らかなものは 69 本である。それに束となって出土したもののを合計すると 131 本となることから、131 本を最低出土本数とした。全体で鏃身形態からみた構成は､平根式 43 本､尖根式 54 本になる。古墳時代をとおして、駿河・伊豆では、１基あたりの最多出土量である（第４章第７節)。

【農工具】 砥石 2、鍬鋤先 4、斧 3、鉇 5、鑿 1 が認められる。また、鎌は基部数から推定される副葬数は３点以上、刀子は刀部数から 10 点が副葬されたと考えられる。ただし、次章の鈴木論考（第４章第８節）にあるように刀子 10 点のうち被葬者佩用品６点と工具４点に区別することもできる。

【鍛冶具】 鉄鉗が１点出土している。東海地方での出土例としては唯一であり、被葬者像を考える上で注目される（第４章第８節)。

第 85 図　出土した遺物

【生産用具等】 鑷子（じょうし）1、針 14 がある。鑷子は化粧用具（毛抜き）など属人性の強い佩用品もしくは、皮革の毛を抜いたりする道具の可能性が考えられている（第４章第８節)。

また、針は 15cm 前後が２本と 3.5 ～ 4.0cm の小型のものが束になったものとがあり、その束に最低 12 本（推定 17 本）認められる。

【馬具】 轡 3、鐙吊金具 2、帯飾金具 6、鋲留金具 2、鉸具４のほかに雲珠の可能性がある破片が１点出土している。轡は、兵庫鎖立聞環状鏡板付轡 1、小型矩形立聞環状鏡板付轡 1、大型矩形立聞環状鏡板付轡１が出土している。鐙吊金具は擬似鋲表現のあるもので対をなすものである（第４章第６節)。

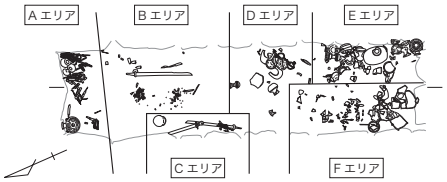
【土器】 須恵器 29 のほか、土師器坏 1 が出土している。須恵器の内訳は、坏蓋 3、坏身 9、甕 6、短頸壺 3、把手付碗 1、提瓶 5、横瓶２である。甕の出土数の多さと渡来系の可能性がある把手付碗が注目される。

第６表　石室出土遺物一覧表（種類別）

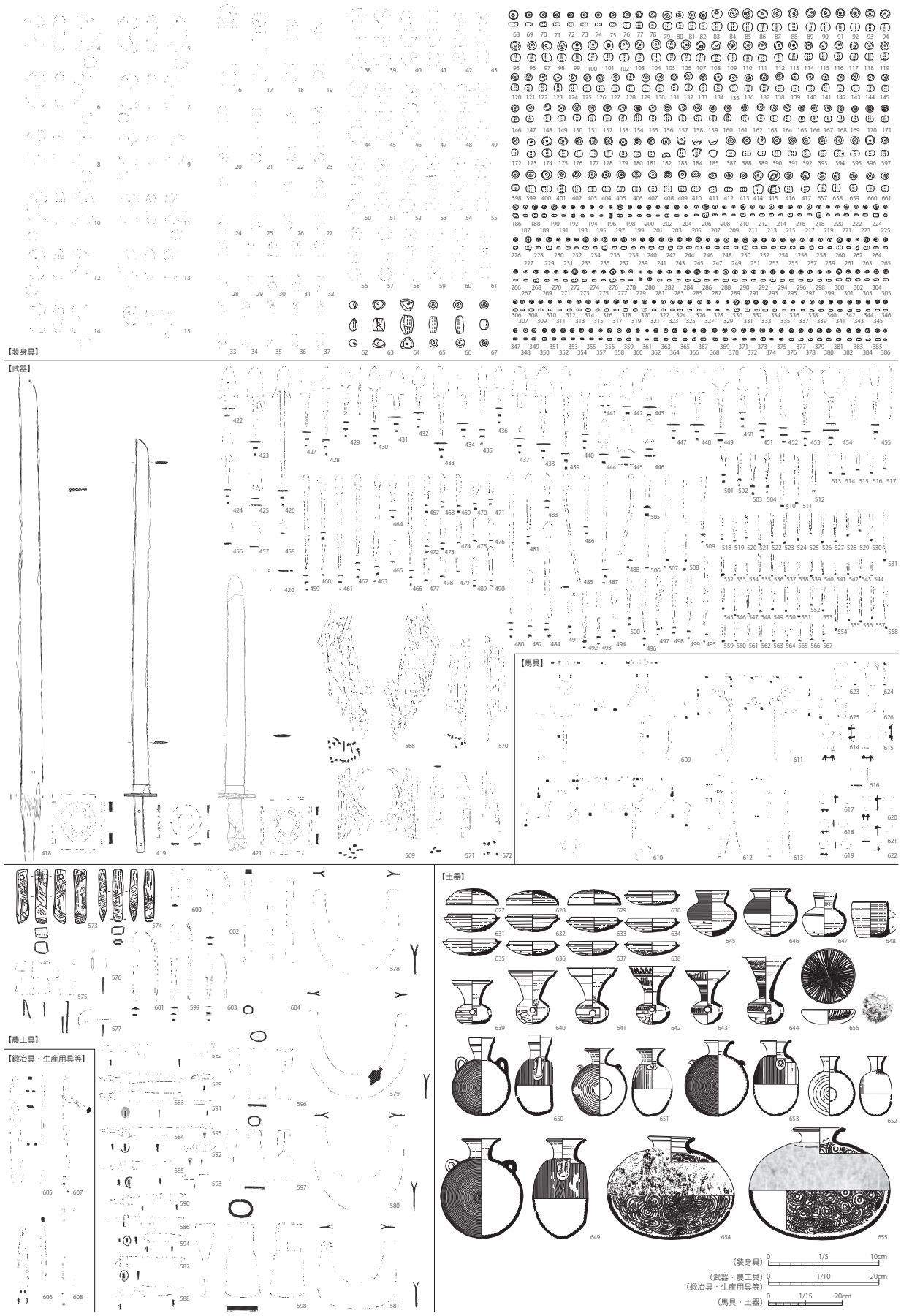
遺物の種類	出土点数	遺物			出土状況						
		報告番号※	挿図	図版	出土エリア※						挿図
装身具	**419**				A	B					**第 68 ～ 70 図**
勾玉	12	4 ～ 15	第 87・88 図	PL.23		●					
管玉	22	16 ～ 37	第 89 図	PL.24		●					
切子玉	24	38 ～ 61	第 90 図	PL.24		●					
棗玉	6	62 ～ 67	第 90 図	PL.24	○	◎					
臼玉	8	68 ～ 75	第 90 図	PL.24		●					
丸玉	115	76 ～ 185・657 ～ 661	第 91・123 図	PL.30	●						
小玉	232	186 ～ 417	第 92・93 図	PL.25 ～ 30		●					
武器（刀剣）	**3**				A	B	C		E	F	**第 71 図**
大刀	2	418・419	第 94 図	PL.31・32		◎	◎				
剣	1	421	第 95 図	PL.31・33			●				
武器（鉄鏃）	**131 ＋**										
平根式	43										
・腸抉柳葉式	5	422 ～ 426	第 96 図	PL.33		○				◎	
・長三角形式	27	427 ～ 445・*568*（8）	第 97・102 図	PL.34・35・41	◎	○			○	○	
・腸抉三角形式	1	446	第 97 図	PL.34・35						●	
・五角形式	3	447・448・*571*（1）	第 98・103 図	PL.36・37・43	○					◎	
・撫関三角形式	3	449 ～ 451	第 98 図	PL.36・37	◎				○		
・圭頭式	3	452 ～ 454	第 98 図	PL.36・37	◎					○	
・方頭式	1	455	第 98 図	PL.36・37	●						
尖根式	54										
・柳葉式	7	459 ～ 465	第 99 図	PL.36・37	○		○		○	◎	
・片刃箭式	34	466 ～ 479・*568*（13） *569*（3）・*570*（4）	第 99・102・103 図	PL.38・39・41 ～ 43	●						
・鏃箭式	13	480 ～ 490・*568*（2）	第 100・102 図	PL.38・39・41	○		○		○	○	
農工具	**33**				A	B	C	D	E	F	**第 72 図**
砥石	2	573・574	第 104 図	PL.49	◎			◎			
鎌	3 ＋	575 ～ 577	第 104 図	PL.46・47	◎	○					
鍬鋤先	4	578 ～ 581	第 105・106 図	PL.44・45				◎		◎	
刀子	10 ＋	582 ～ 595	第 107 図	PL.46・47	○	○	○	○	○		
斧	3	596 ～ 598	第 108 図	PL.48	○				◎		
鉇	5	599 ～ 603	第 109 図	PL.48	●						
鑿	1	604	第 109 図	PL.48	●						
鍛冶具・生産用具等	**16**				A	B					**第 76 図**
鉄鉗	1	605	第 112 図	PL.49	●						
鑷子	1	606	第 112 図	PL.49	●						
針	14	607・608	第 112 図	PL.49	●	○					
馬具	**18**				A			D	E		**第 77 図**
轡	3	609 ～ 611	第 113・114 図	PL.50 ～ 52	○			○	○		
鐙吊金具	2	612・613	第 115・118・119 図	PL.53	●						
帯飾金具	6	614 ～ 619	第 120 図	PL.54	○				●		
鋲留金具	2	620・621	第 120 図	PL.54					●		
雲珠？	1	622	第 120 図	PL.54	●						
鈹具	4	623 ～ 626	第 120 図	PL.54	◎				◎		
土器	**30**				A		C	D	E	F	**第 78 ～ 84 図**
須恵器	29										
・坏蓋	3	627 ～ 629	第 121 図	PL.55				○	○	○	
・坏身	9	630 ～ 638	第 121 図	PL.55				○	○	○	
・甕	6	639 ～ 644	第 121 図	PL.56	○			○	◎		
・短頸壺	3	645 ～ 647	第 121 図	PL.57	○		○	○			
・把手付碗	1	648	第 121 図	PL.57				○	○	○	
・提瓶	5	649 ～ 653	第 121・122 図	PL.57・58	○				○		
・横瓶	2	654・655	第 122 図	PL.58				○	●	◎	
土師器	1										
・坏	1	656	第 122 図	PL.58					○	○	
その他	**1**					B					**第 71 図**
不明鉄製品	1	420	第 95 図	PL.32		○					

※ 報告番号の斜字は複数点が束をなしているもので、束内でその型式と確認される点数を（）に示した。

※ 石室内における遺物のまとまりから、
A～Fの６つの空間的グルーピングを行った。
Aエリア：奥壁周辺エリア
Bエリア：玄室奥の大刀・玉類の出土するエリア
Cエリア：Bエリアの西側、玄室右側壁で大刀・剣が出土するエリア
Dエリア：玄室中央部分
Eエリア：玄室の入り口部分の東側（左側壁）
Fエリア：玄室の入り口部分の西側（右側壁）



※ 出土状況の凡例
●…80%以上
◎…50 ～ 79%
○…49%以下



第 86 図　石室出土遺物一覧図

年代　出土遺物の年代については第４章において詳細に検討されているが、ここではそれらを引用しながら、また、埋葬状況の確認をしながら副葬年代についてまとめておくこととする。

【装身具】（第４章第５節）

瑪瑙製勾玉（4 ～ 15）は製作技法から典型的な山陰系の玉と判断されるが、平面形と「全長／幅」の指数から「後Ⅱ期」（大賀 2002b）、MT15 型式期以降と判断した。

碧玉製管玉（16 ～ 37）も山陰系の玉と判断され、全長と径の比率が３：１であることや一部を除いて片面穿孔であることから、後Ⅰ（TK23・TK47 型式期）～Ⅱ期（MT15 型式期）ないしそれ以降と判断した。

水晶製切子玉（38 ～ 61）も典型的な山陰系の玉で、長さから琥珀製棗玉（62 ～ 67）も合わせて、後Ⅱ～Ⅲ期（TK43 型式期）ないしそれ以降と判断した。

以上の考えを総合し、後Ⅱ期後半以降で後Ⅲ期までに収まる年代を想定した。

【刀剣類】（第４章第６節）

八窓鍔付大刀（418）は TK209 型式期に近いものの TK43 型式期まで遡ると考えた。剣（421）は出土位置から追葬時に伴うことや六窓鍔であることから TK209 型式期とし、合わせて一部剣と重なって出土した無窓鍔付大刀（419）も TK209 型式期に位置づけた。

【鉄鏃】（第４章第７節）

平根式では角関の圭頭式（452）は TK43 型式以前、棘関の圭頭式（453･454）は TK43 ～ TK209 型式期に、撫関三角型式は鏃身部が三角形のもの（449）が TK43 型式期、長三角形のもの（450・451）が TK43 ～ 209 型式期に、五角形式（447・448）は TK43 ～ 209 型式期に位置づけた。

尖根式では柳葉式（459 ～ 465）は TK43 ～ TK209 型式期以前、片刃箭式（466 ～ 479）は 466 のみが MT15 ～ TK10 型式期もしくはそれ以前と考えられるが、主体は TK43 型式期以降、鑿箭式（480 ～ 490）は TK43 ～ 209 型式期以前のものと位置づけられる。

【農工具】【鍛冶具】【生産用具】（第４章第８節）

各遺物の詳細な年代について迫ることは難しいが、その豊富なバリエーションからは TK209 型式期以降とは考えられず、その遺物との年代とも矛盾しない。

【馬具】（第４章第６節）

まず轡では、小型矩形立聞円環轡（610）は鏡板の大きさなどから、また兵庫鎖立聞素環円環轡（609）は兵庫鎖の数から TK43 型式期に位置づけられる。一方、大型矩形立聞円環轡（611）は TK209 型式期に位置づけられる。鐙（612・613）は吊金具の兵庫鎖から TK43 型式期に位置づけられる。

【須恵器】（第４章第９節）

出土した須恵器は、時期からⅠからⅣの４つに分類して考えることができる。Ⅰは把手付碗（648）で TK73 型式期、Ⅱは蹴（639、640）、提瓶（649）で TK10 型式期、Ⅳは 647、650、652 で TK209 型式期、そのほか大部分の須恵器を TK43 型式期とした。

出土状況などの成果も合わせて、Ⅰ「長期にわたる伝世」、Ⅱ「伝世」、Ⅲ「初葬」、Ⅳ「追葬」と想定した。

【土師器】（第４章第 10 節）

土師器坏は周辺の集落遺跡出土資料との比較検討から、TK43 型式期と位置付けられる。

【埋葬年代】

中原第４号墳では、合計３回の埋葬があったと考えられている。すなわち、石室やや奥よりの玉類の副葬が見られる範囲に左側の大刀（418）を伴う埋葬（埋葬①）と右側壁の刀剣（419・421）を伴う埋葬（埋葬②）、石室前半部右半（Ｆエリア）に骨片の分布が確認されている箇所の埋葬（埋葬③）である（第４章第３節）。

初葬と考えられる埋葬①に伴う副葬品として確定できるのは、石室中央の大刀（418）、奥壁付近に片付けられている鉄鏃、馬具、土器、農工具ほか生産用具や石室前半部の須恵器などである。大刀や馬具の小型矩形立聞円環轡（610）、鐙（612・613）、須恵器の大部分が TK43 型式期であることから６世紀後葉の埋葬と結論付けられる。

１回目の追葬である埋葬②に伴う副葬品として確定できるのは、右側壁の刀剣（419･421）である。大刀（419）、剣（421）ともに TK209 型式期に位置づけられることから６世紀末葉に追葬があったものと考えられる。そのように考えると、石室前半部左側壁周辺から出土した Tk209 型式期の鉄鏃や大型矩形立聞円環轡（611）なども追葬時の遺物に位置づけられる。

石室前半部右半の埋葬③に伴う副葬品として確定できるものはなく、実際、ほとんど副葬品がなかった可能性が高い。遺物から年代を決定することはできないため、ここでは７世紀代の埋葬として捉えておく。

装身具

勾玉 12、管玉 22、切子玉 24、棗玉 6、臼玉 8、丸玉 110、小玉 232 が出土している。

勾玉（第 87・88 図 4 ～ 15） すべて瑪瑙製である。長さ 30mm 前後の大型（4、5、7、8、9、10、12）と 26mm 前後の中型（6、11、13、14）、16mm 前後の小型（15）に分けられる。

管玉（第 89 図 16 ～ 37） 円筒形でやや青みを帯びた緑色をしている。全長は 18mm から 34mm ですべて碧玉製である。16、17 がやや大きいがサイズにより明確な区分はできない。21、36 のみが両面穿孔で、他は片側からの穿孔である。

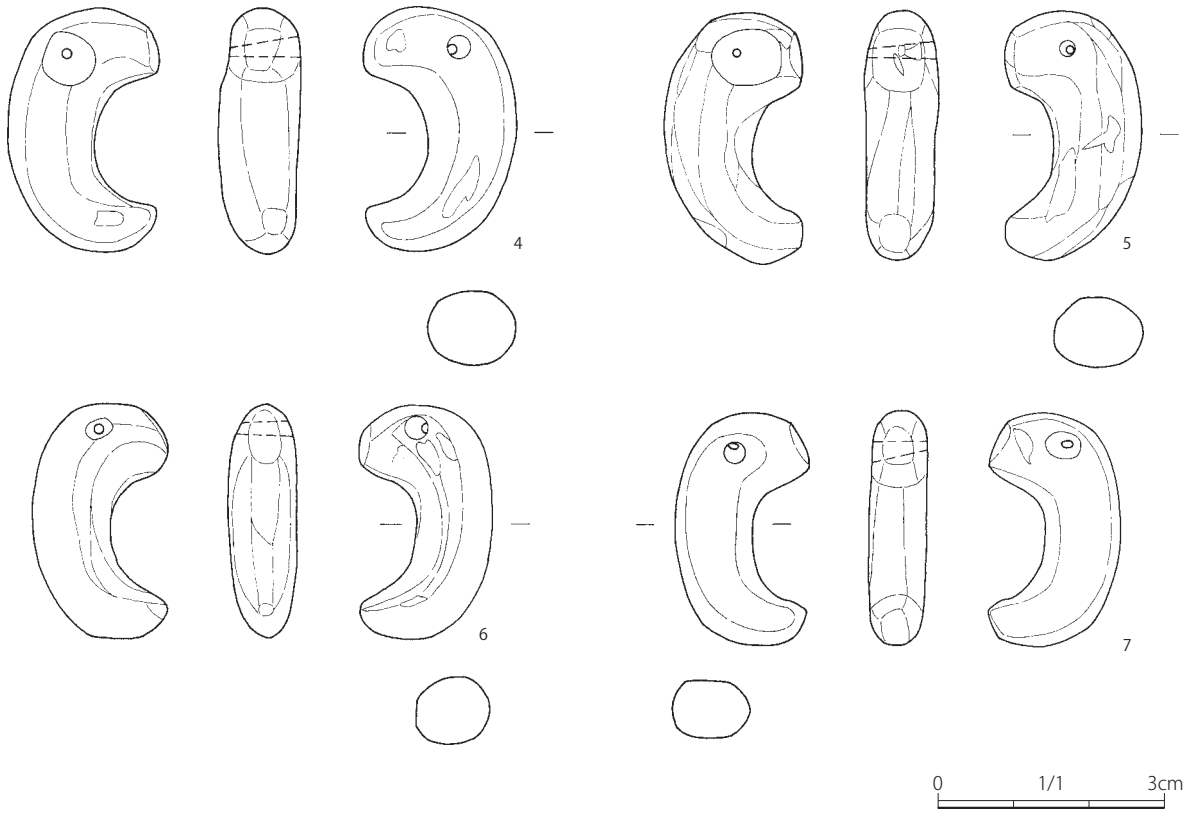
切子玉（第 90 図 38 ～ 61） すべて水晶製である。比較的整った 12 面体を呈している。全長 15mm 前後に大きさのピークがありそうだが、まとまりはない。いずれも片側からの穿孔である。

棗玉（第 90 図 62 ～ 67） 琥珀製（62、63、64）と土製（65、66）、翡翠製（67）に分けられる。

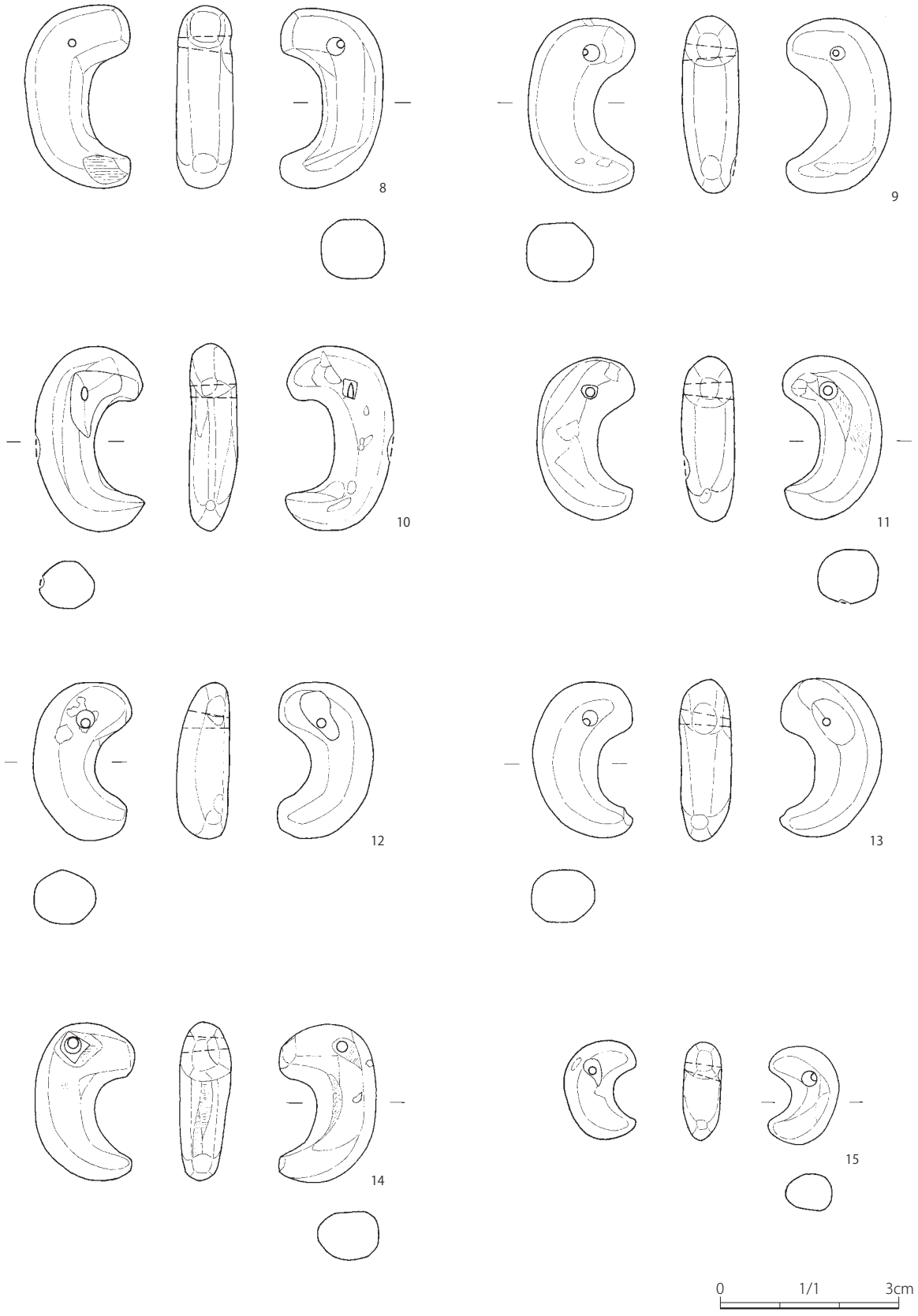
臼玉（第 90 図 68 ～ 75） 68 は碧玉製の可能性が高く、他は滑石製である。68 のみが径 8.3mm と大きいが、他は 5.8 から 6.1mm とまとまっている。いずれも石製針を用いた両面穿孔と考えられる。

丸玉（第 91 図 76 ～ 185） 土製のものを丸玉として報告する。直径 5 ～ 5.9mm が 3 個（3%）、6 ～ 6.9mm が 57 個（51%）、7 ～ 7.9mm が 20 個（18%）、8 ～ 8.9mm が 26 個（24%）、計測不能 4 個である。

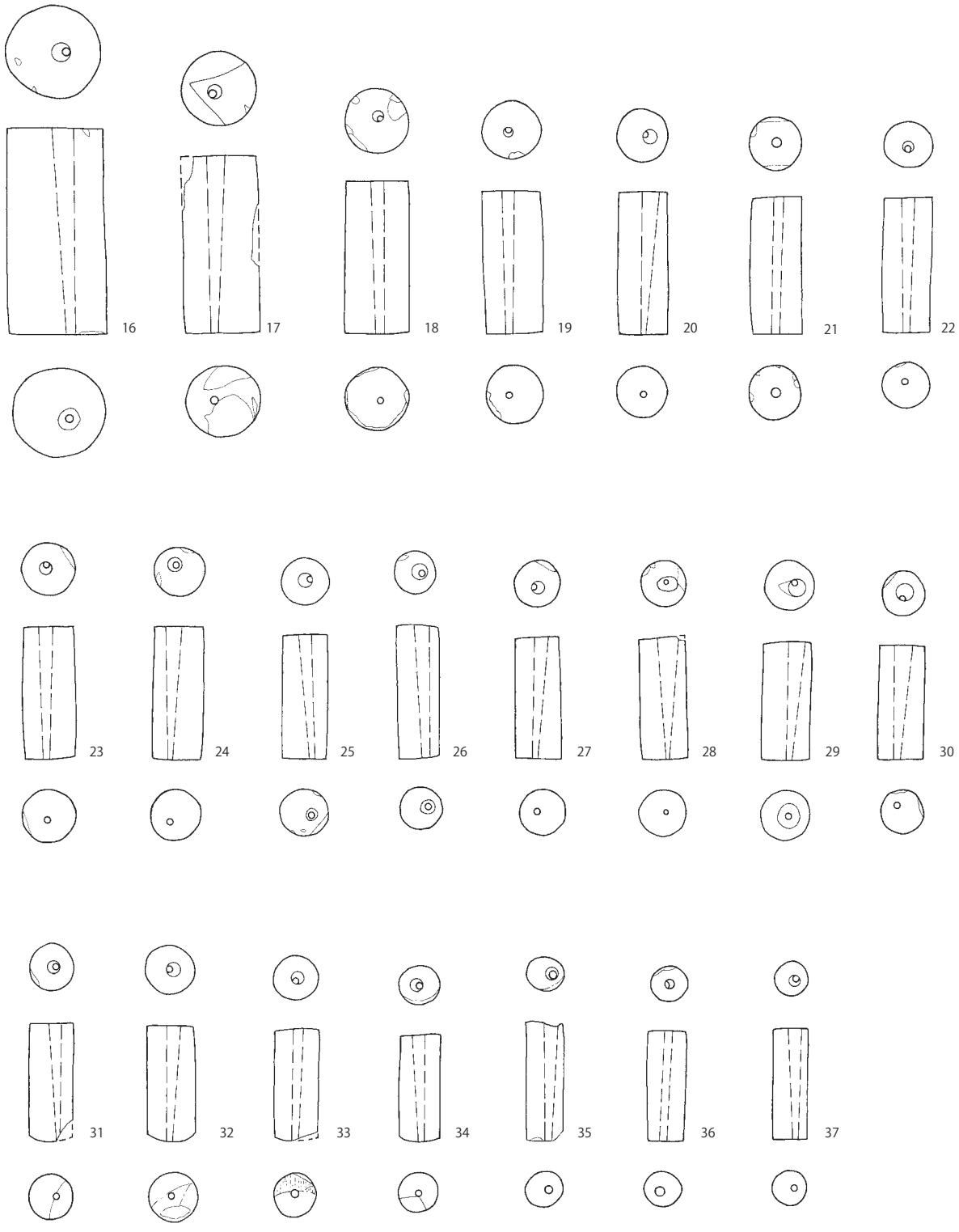
小玉（第 92・93 図 186 ～ 417） ガラス製のものを小玉として報告する。サイズは 6mm を境に小さいもの 201 個（186 ～ 386）と大きなもの 31 個（387 ～ 417）に分かれる。製作技法でみると引き伸ばしのもの 83%（191 個）、鋳型のもの 17%（40 個）。材質面ではソーダガラス 96%（183 個）、カリガラス 4%（9 個）である。着色材は全体の 80%にあたる 187 個で判明しており、銅＋マンガン 45%（85 個）、コバルト 32%（60 個）、銅 18%（34 個）、錫酸鉛 3%（5 個）、銅＋錫酸鉛 1%（2 個）、鉄 1%（1 個）に分けられる。特に錫酸鉛で着色した「黄色不透明」を呈する 5 点（186 ～ 190）は注目される。



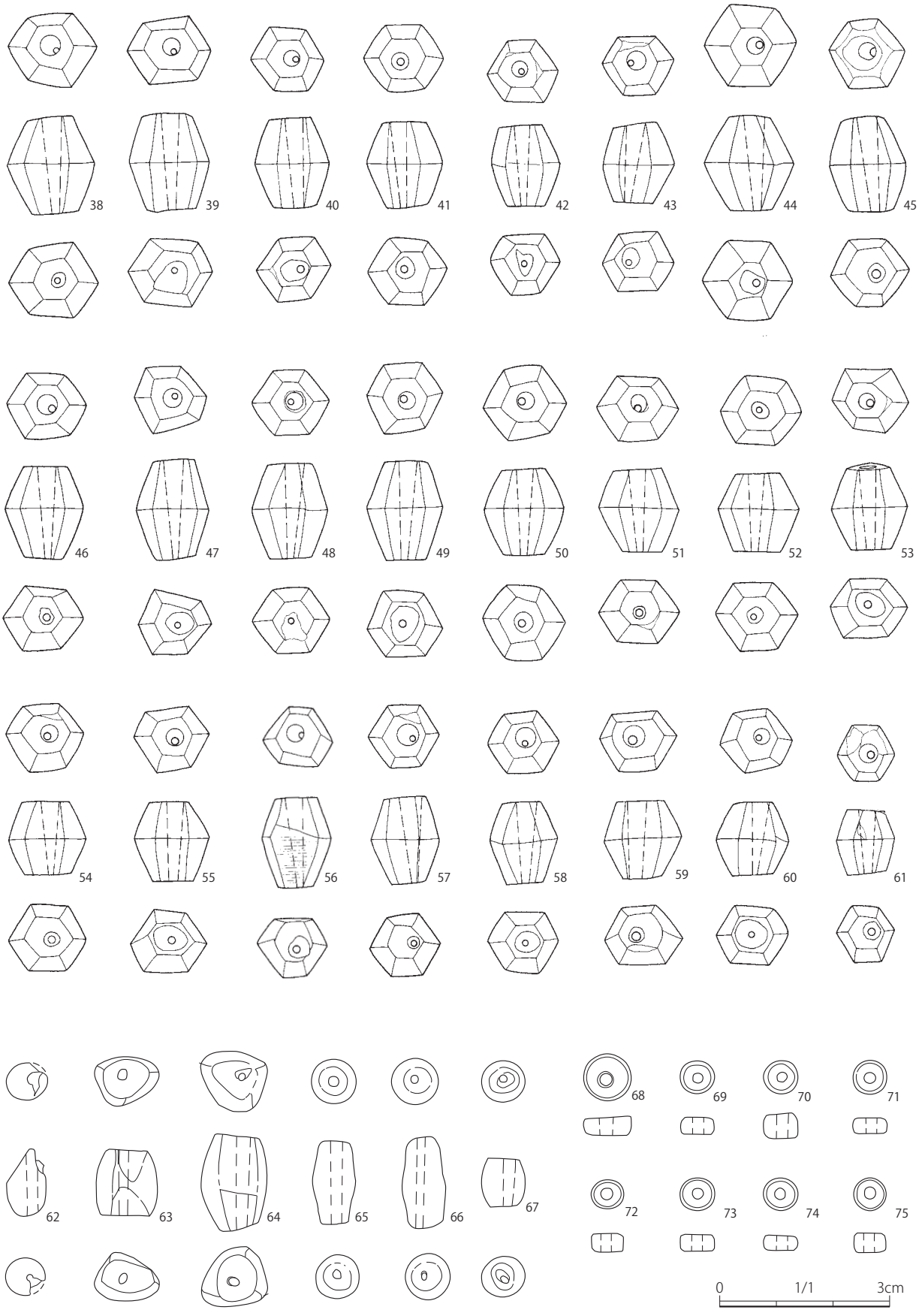
第 87 図　勾玉実測図 1



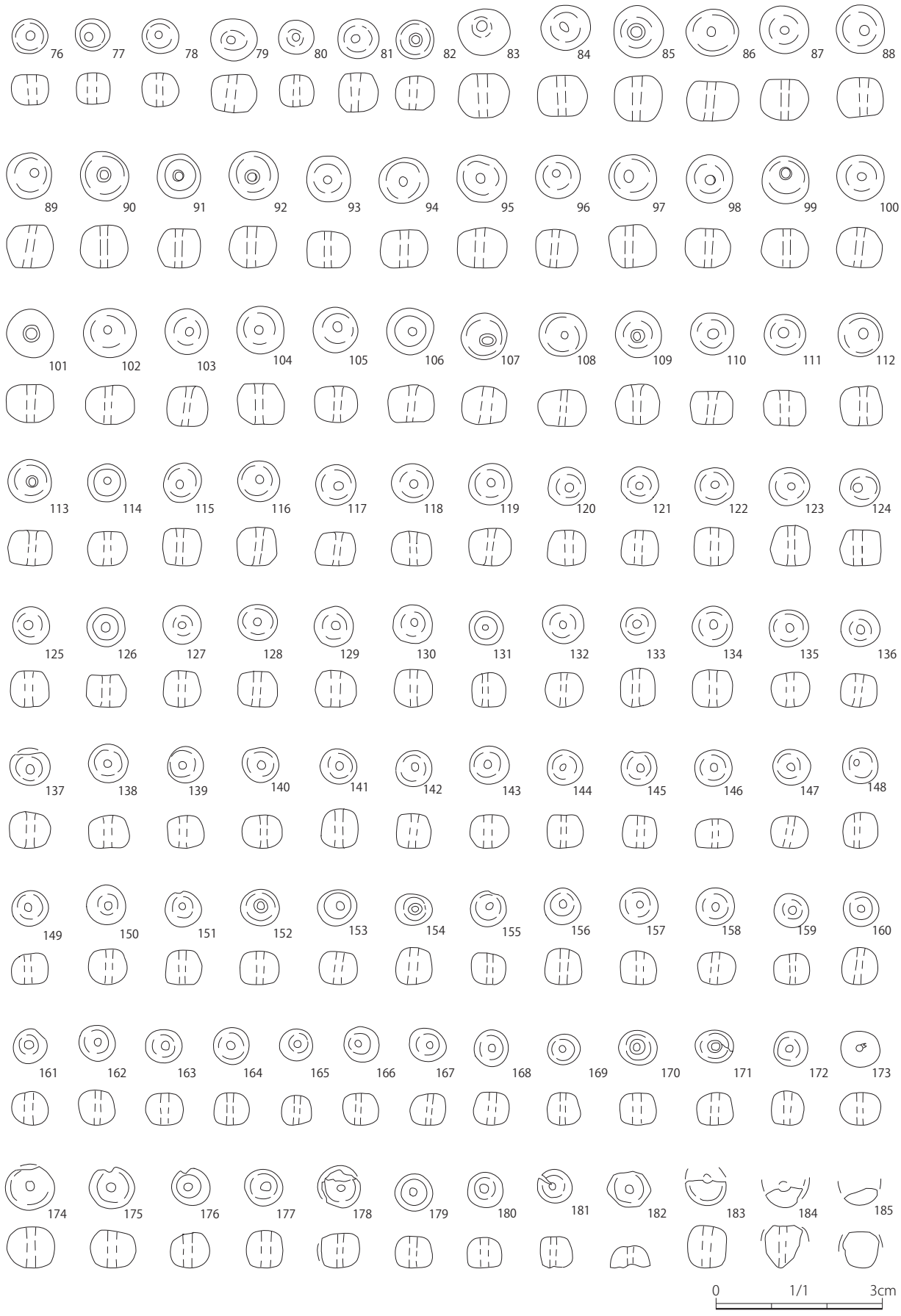
第 88 図　勾玉実測図 2


16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0 1/1 3cm

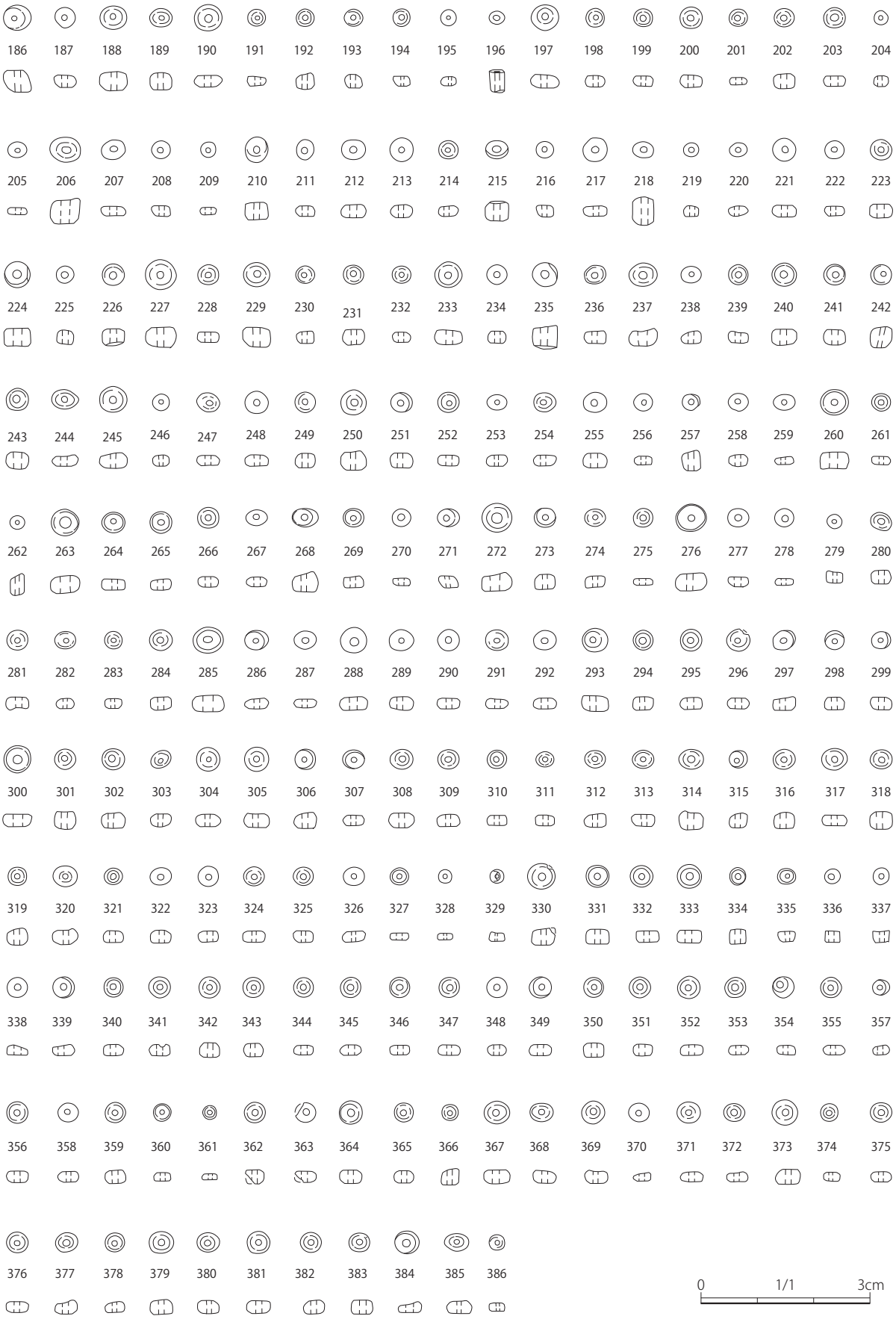
第 89 図　管玉実測図



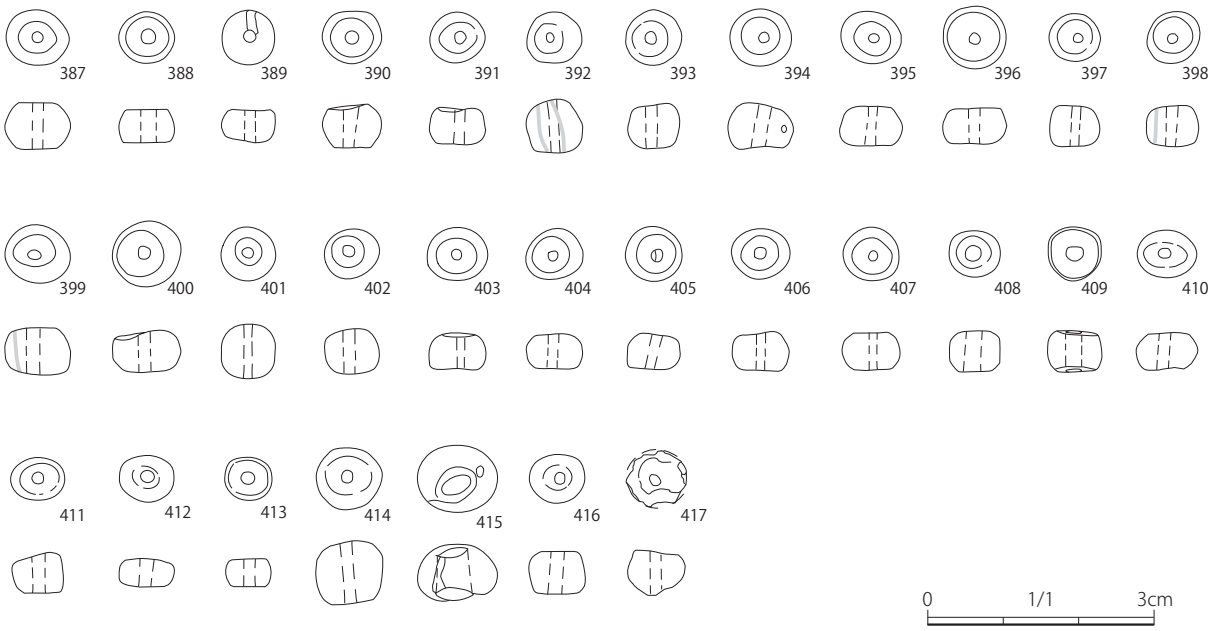
第 90 図　切子玉・棗玉・臼玉実測図


76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
0
1/1
3cm

第 91 図　丸玉実測図


186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204
205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223
224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242
243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261
262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280
281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299
300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318
319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337
338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 357
356 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375
376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386
0 1/1 3cm

第 92 図　小玉実測図 1



第 93 図　小玉実測図 2

武器

大刀（第 94・95 図 418 ～ 420）

418 は銀象嵌装八窓鍔付大刀で、反りのない直刀である。ふくらの張る切先で、関は片関でナデ関である。茎はやや細くなりながらも直線的に茎尻に向かうが、欠損している。茎には 6.2cm 離れて 2 箇所の目釘孔が確認される。また、関より切先に向かい 1.5cm の箇所にも直径 5mm 程度の鎺元孔が認められる。身には木質が遺存していることから木製鞘に収められた状態で副葬されたことが分かる。残存長 85.9cm、刀身部長 73.0cm、刀身幅 4.9cm、棟厚 0.8cm、茎残存長 12.9cm、茎幅最大 2.6cm（茎尻付近 1.7cm）、茎厚 1.0cm を測る。

鍔は八窓鍔で耳に銀象嵌で波状Ｃ字文が装飾されている。象嵌は全周して存在したと考えられる。平面形は丸みのある倒卵形で先端はやや尖る。内孔もほぼ同じ形になると考えられる。方形もしくは台形の透窓が 8 箇所、片側 4 箇所ずつ均等に配置される。縁部断面はＴ字形を呈している。長軸 7.5cm、短軸（幅）6.15cm、内孔長軸 3.8cm、内孔短軸（幅）2.75cm を測る。

419 は無窓鍔付大刀で、反りのない直刀である。ふくらの張る切先で、関は片関でナデ関である。茎は幅をほぼ狭めることなく直線的に茎尻に向かう。茎尻はやや丸みのある一文字尻である。茎には 5.5cm 離れて 2 箇所の目釘孔が確認される。

茎、身ともに木質は確認されない。全長 74.6cm、刀身部長 62.3cm、刀身幅 2.5cm、棟厚 0.5cm、茎長 12.3cm、茎幅 1.5cm、茎厚 0.5cm を測る。

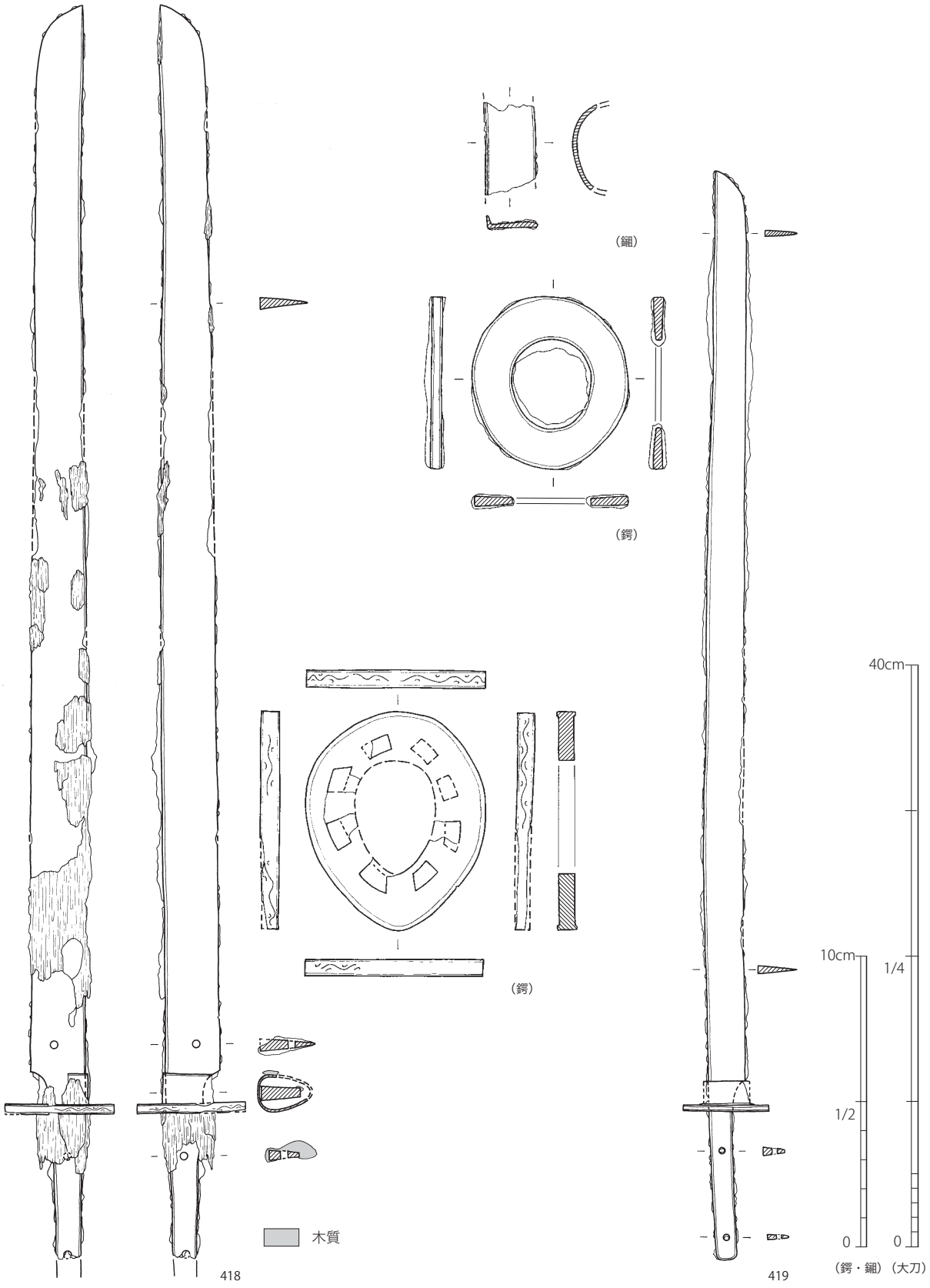
鍔は無窓鍔で平面はやや細長い円形で、断面は長方形をなす。内孔もほぼ同じ形になると考えられる。長軸 5.9cm、短軸（幅）5.35cm、内孔長軸 3.05cm、内孔短軸（幅）2.7cm を測る。また、鎺も装着されている。

420 は大刀もしくは鉄鏃の可能性が考えられる破片である。身部と考えられ、直径 4mm の孔の存在から鎺元孔の可能性もある。

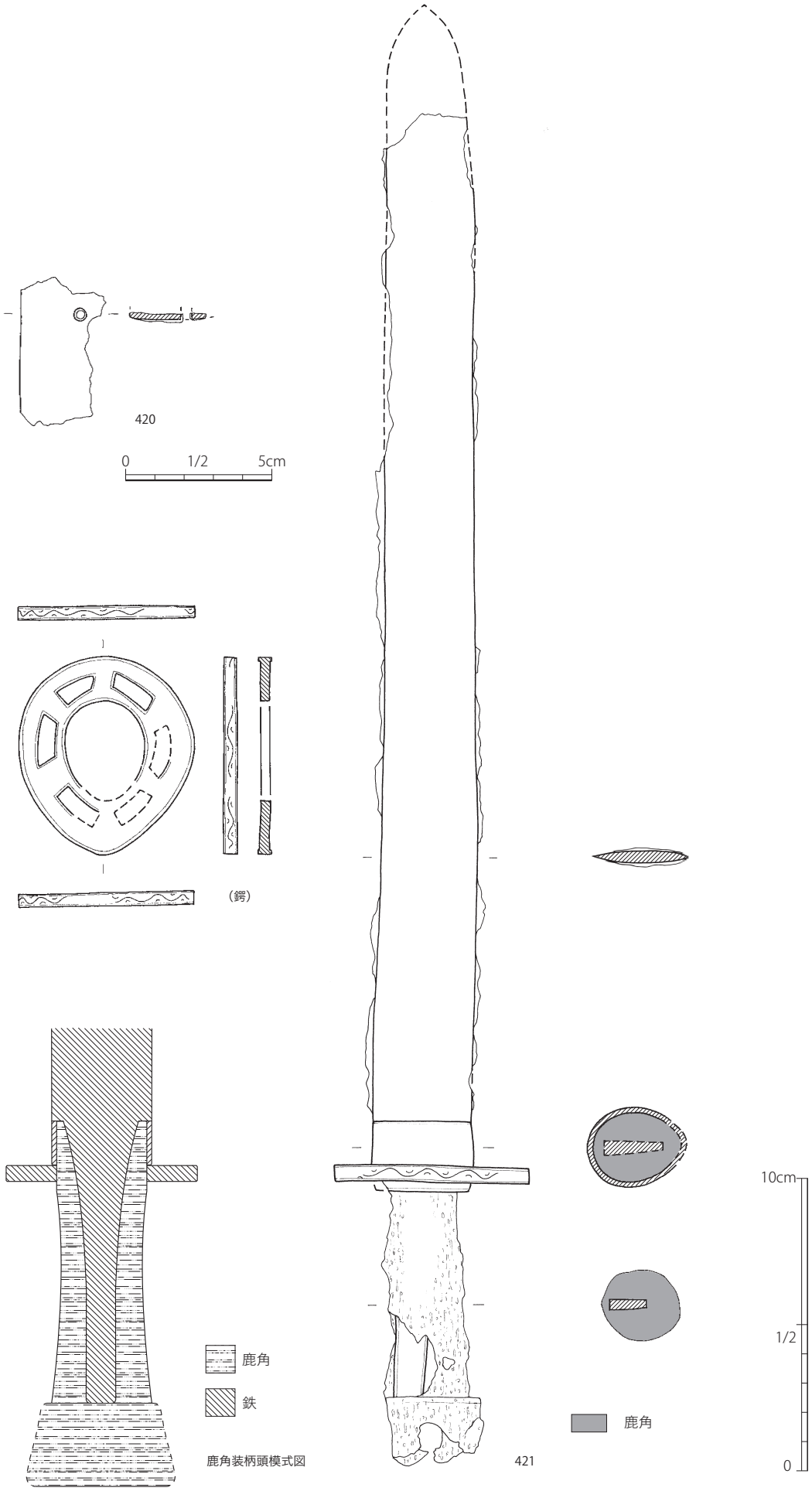
剣（第 95 図 421）

421 は銀象嵌装六窓鍔付剣である。先端が欠損し、残存する剣身に鎬は確認できず、両丸造である。関は両関でナデ関と推測されるが明確でない。茎は茎尻に向かいやや幅を狭めるもので、やや丸みのある一文字尻である。茎には鹿角が良好に遺存しているものの、柄頭の形状は明らかではない。鹿角部分を含めた残存部長 46.3cm、剣身残存長 34.4cm、身幅 3.4cm、茎部長 9.6cm、茎幅 1.7cm を測る。

鍔は六窓鍔で耳に銀象嵌で波状Ｃ字文が装飾されている。象嵌は全周して存在したと考えられる。平面形は丸みのある倒卵形で先端がやや尖る。内孔もほぼ同じ形になると考えられる。長方形もしくは台形の透窓が 6 箇所、片側 3 箇所ずつ均等に配置される。縁部断面はＴ字形を呈している。長軸 6.7cm、短軸（幅）5.95cm、内孔長軸 3.4cm、内孔短軸（幅）2.7cm を測る。



第 94 図　大刀実測図



第 95 図　剣実測図

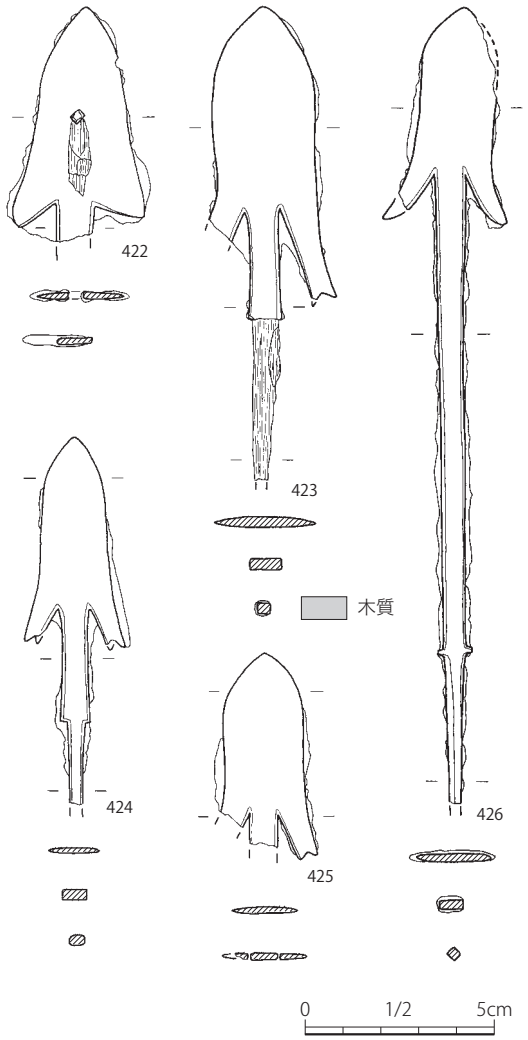
鉄鏃

・平根腸抉柳葉式鉄鏃（第 96 図 422 ～ 426）

平根腸抉柳葉式鉄鏃は 5 点出土している。422 は刃部がややふくらが張る形態を示し、鏃身部の腸抉は明瞭である。鏃身中央に一辺 2mm の方形の穿孔を有する。穿孔部分に木質が確認される。

423 から 425 はいずれも重抉の柳葉式鉄鏃である。刃部はふくらが張り、鏃身先端部から緩やかな弧を描きさらに鏃身関へと至る形態を示す。鏃身の断面形状は平造りである。頸部の残存する 423、424 の茎関は角関である。423 には矢柄の木質が一部付着する。

426 は長頸の腸抉柳葉式鉄鏃である。刃部は 423 から 425 同様、ふくらが張り鏃身先端部から緩やかな弧を描きさらに外反しながら鏃身部関へと至る形態を呈する。頸部の長さは 12.8cm、茎関は棘関である。茎部が欠損するものの全長 21.0cm を残す。



第 96 図　鉄鏃実測図 1

・平根長三角形式鉄鏃（第 97 図 427 ～ 445）

427 は刃部がややふくらが張り、さらに鏃身関に向かって外反しながら広がる形態を示す。鏃身関は直角関である。鏃身部 5.0cm に対して、頸部は 1.9cm と短く、茎部は 4.0cm を測る。茎関は角関である。

428、429 は刃部がややふくらが張りながら、鏃身先端部から緩やかな弧を描いて鏃身関へと至る。鏃身部長は 428 が 4.0cm、429 が 3.5cm である。

430 から 432 も似た形態を示す。刃部はややふくらが張り、浅い腸抉を有する。頸部長は 430 が 2.4cm、432 が 3.2cm でいずれも茎関は台形ないし角関である。433、434 は鏃身部がやや五角形に近い形態を示す。刃部は直線的というよりは僅かに弧を描いたのちに直線的に鏃身関に至る。腸抉が深いのが特徴である。鏃身部長は 433 が 5.7cm、434 が 5.0cm を測る。頸部は、433 が直角関、434 はやや台形関に近い形態である。

435、436 は刃部のふくらの張りが 427 や 429 よりも強く、鏃身関は直角関からやや腸抉を有する。茎関はいずれも棘関である。444 も同様の形態と考えられる。435 は樺巻きが確認できる。

437、438 は鏃身部が 430 や 432 に比べて五角形に近い形態を示す。外反しながら鏃身関に至り腸抉が比較的深い。鏃身長は 437 が 5.3cm、438 は 5.4cm と近い数値だが頸部は 438 が長い。

439 は鏃身部が細長い形態を示す。刃部は鏃身先端部より緩やかな弧を描きながら鏃身関へと至る。鏃身部幅は狭い。鏃身は片丸造りであり、茎関は棘関である。440 も鏃身関の形態や断面形態などが酷似する。441 は 427 に似た形態と考えられるが鏃身先端部が欠損している。鏃身部中央に 2mm×5mm の方形の穿孔を有する。

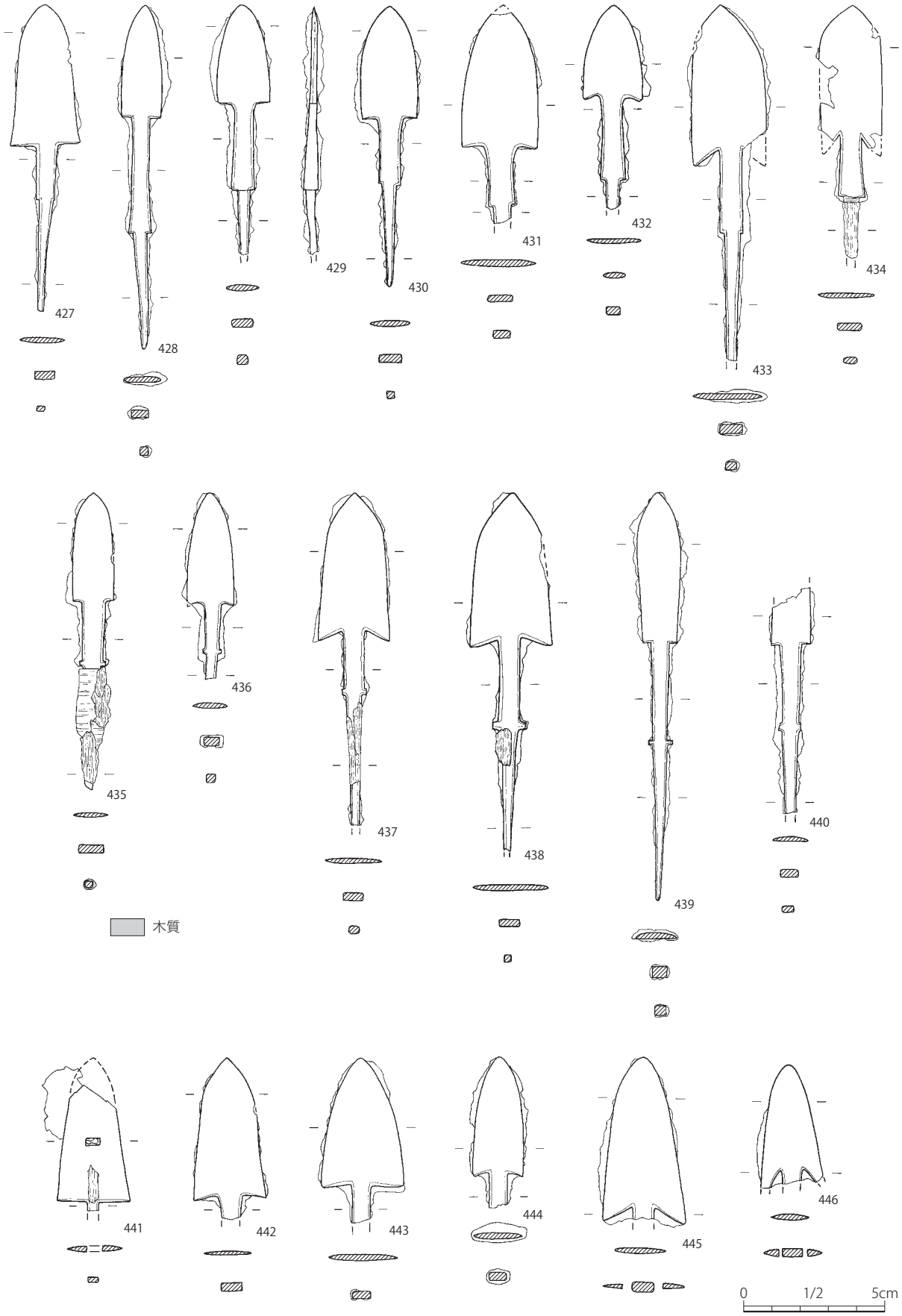
442、445 は 430 から 432 に似て刃部にふくらが張り、やや緩やかな弧を描きながら鏃身関に至る。

・平根腸抉長三角形鉄鏃（第 97 図 466）

446 は腸抉が深く三角形より柳葉式の 426 と同じに分類することも可能である。

・平根式五角形式鉄鏃（第 98 図 447・448）

447 は、各辺が鋭利であるが 448 は若干丸みを帯びる。両方とも両丸造である。頸部はいずれも短いが、茎関は 447 が角関からやや台形関、448 が棘関を呈する。


427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
木質
0 1/2 5cm

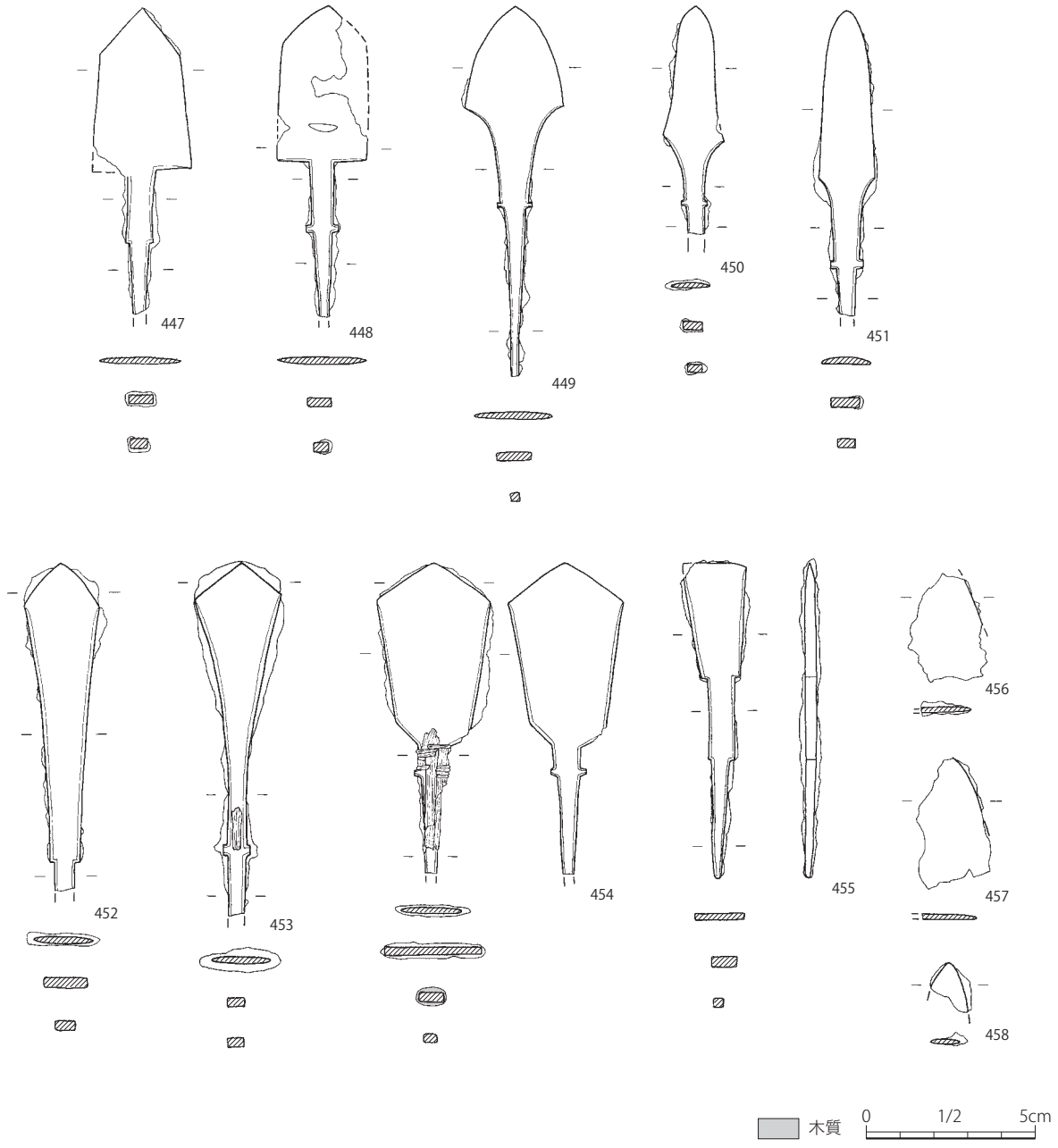
第97図　鉄鏃実測図2

・平根撫関三角形式鉄鏃（第 98 図 449 ～ 451）

449 は鏃身部長と鏃身部幅がほぼ等しいタイプ、450、451 は鏃身部長が長いタイプである。449 は平造、450、451 は片丸造である。頸部長は鏃身部幅の影響からか 449 は鏃身部長とほぼ等しい一方で、450、451 は鏃身部長の約半分程度である。茎関はいずれも棘関である。

・平根圭頭式鉄鏃（第 98 図 452 ～ 454）

452 から 454 は圭頭式に分類される鉄鏃だが、それぞれ異なった形態を示す。452 は鏃身部幅 2.2cm に対して鏃身部長 8.8cm と細長い。453 はさらに細長い形態で最も幅の狭い部分で 2.5cm を測る。茎関は棘関である。一方、454 は幅が広く六角形を細長くした形態を呈する。刃部はややふくらが張りながら鏃身先端部から鈍角に屈曲し、さらに直線的に鏃身関部に至るが、ここでも直角に屈曲せず撫関を呈し、120° 程度屈曲し頸部に至る。頸部は 1.0cm と非常に短く、茎関は棘関を呈する。茎部から頸部、一部鏃身部にも木質が残り、樺巻きの痕跡も観察される。



第 98 図　鉄鏃実測図 3

・平根方頭式鉄鏃（第 98 図 455）

455 は方頭式の鉄鏃である。刃部は直線的で幅 1.8cm を測る。鏃身部先端からやや幅を狭めながら鏃身部関に至る。茎関は角関から台形関である。鏃身部長、頸部長、茎部長がほぼ等しい。

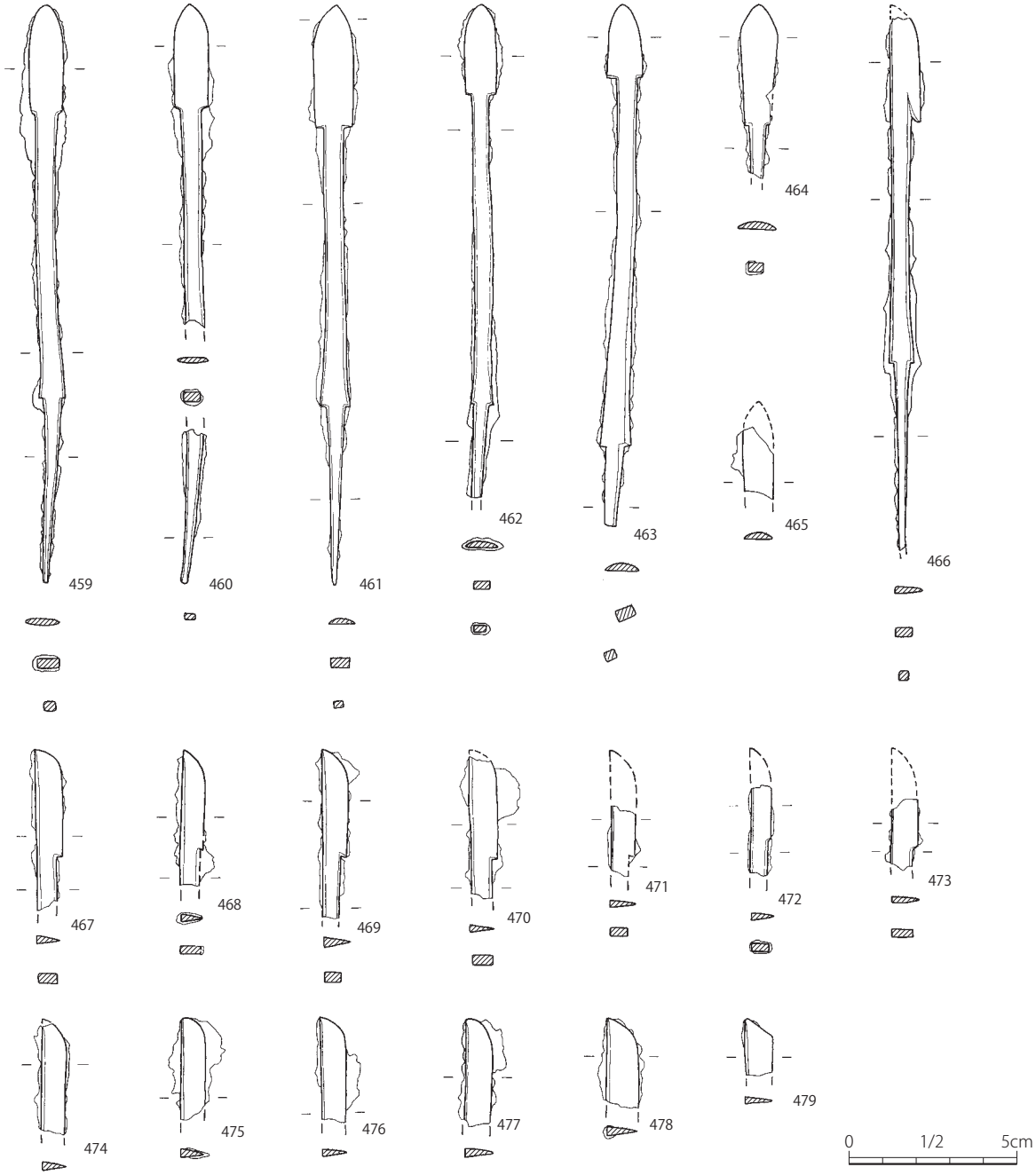
・その他の部位（第 98 図 456 ～ 458）

456 から 458 も鏃身部と推定される破片であるが、欠損部が多く明確ではない。456・457 は平根式鉄鏃の鏃身部と考えられるが、458 については尖根式の可能性もある。

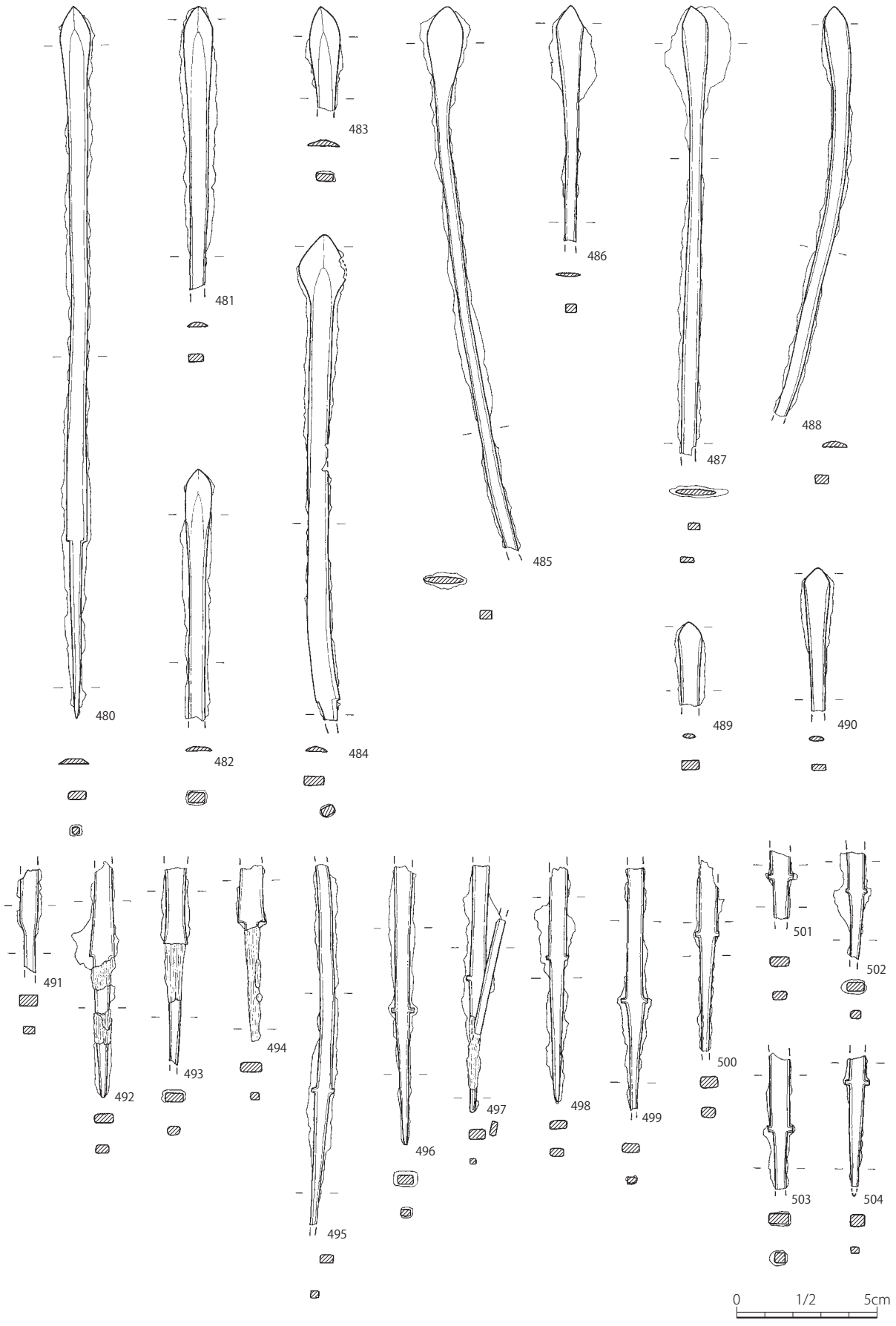
・尖根柳葉式鉄鏃（第 99 図 459 ～ 465）

459 から 465 は尖根柳葉式の鉄鏃である。鏃身部長にばらつきがあるが、各部の特徴が共通している一群である。

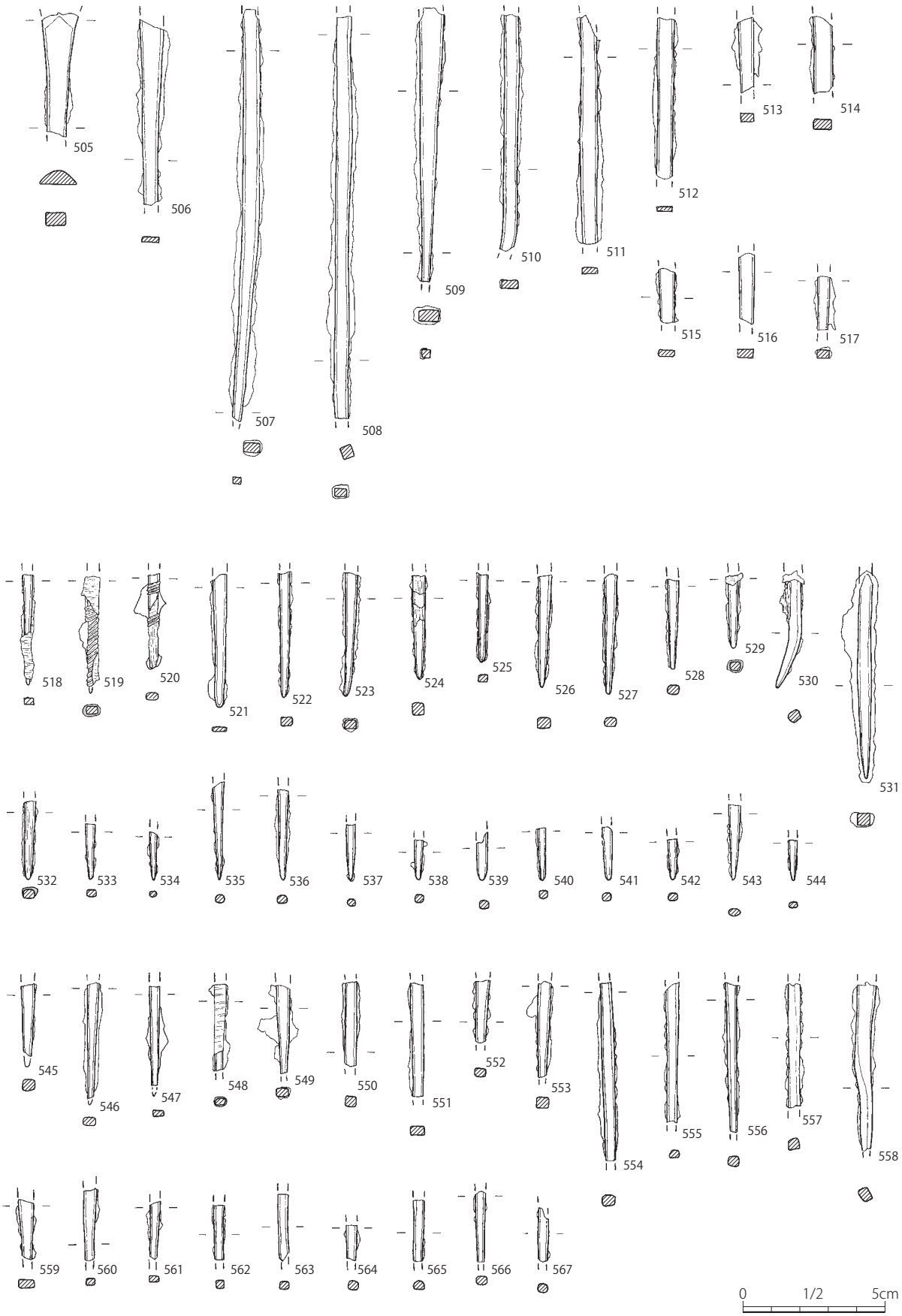
鏃身部の最も長いものは 461、464、次に 459、460 が続く。463 が最も短く 2.2cm を測る。鏃身部関はいずれも角関で 459、460 は両丸造、461 から 465 は片丸造である。茎関は残存するものはすべて台形関である。459、461 は欠損がなく、鏃身部長：頸部長：茎部長は 459 が 2：5：3、461 が 2：4：3 である。



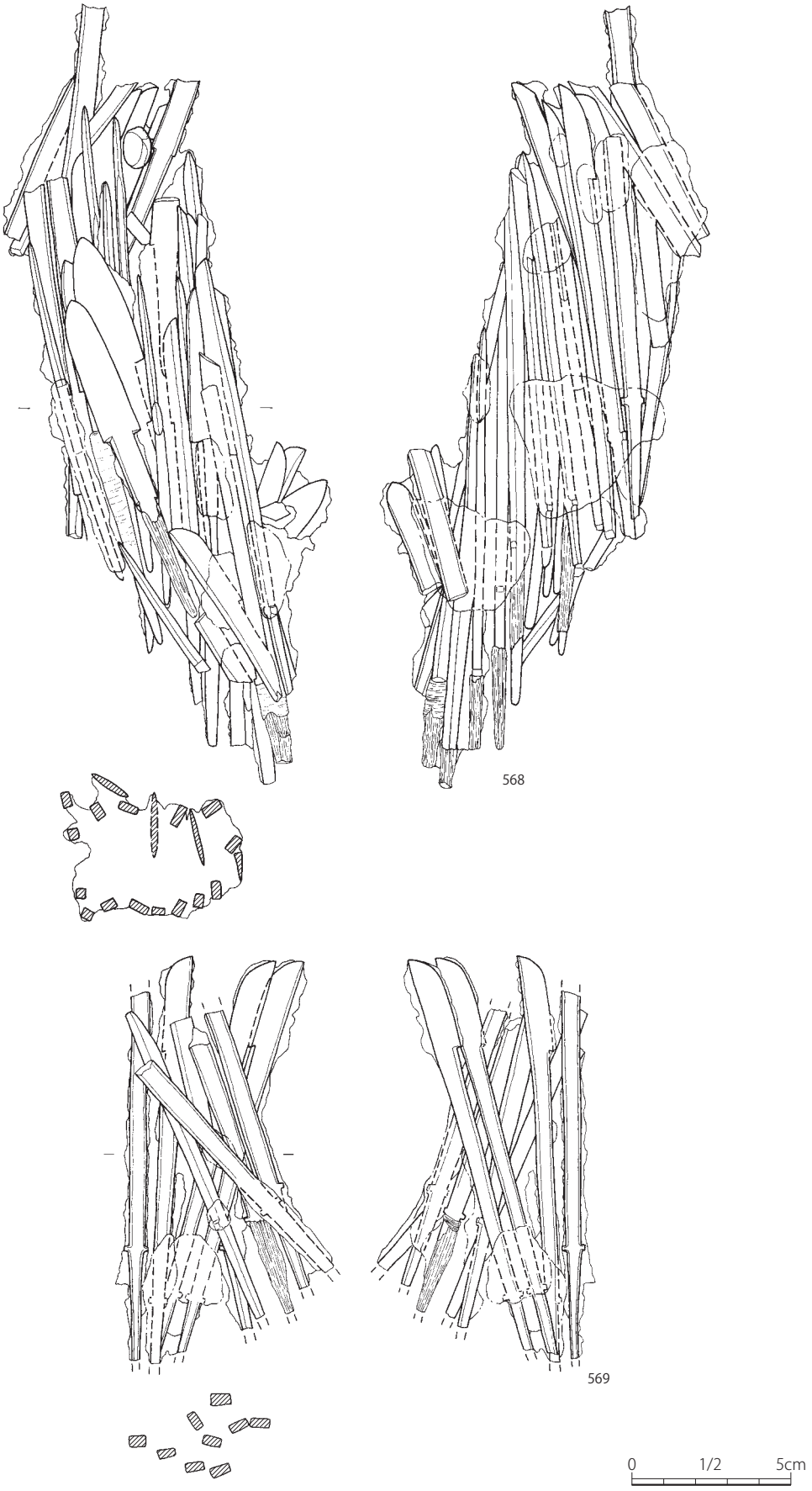
第 99 図　鉄鏃実測図 4



第 100 図　鉄鏃実測図 5



第 101 図　鉄鏃実測図 6



第 102 図　鉄鏃実測図 7

・尖根片刃箭式鉄鏃（第 99 図 466 ～ 479）

466 から 479 は片刃箭式である。466 は刃部先端が欠損しているものの全体がよく残存する。他の破片より逆刺が深く、製作された時期を含めて注目される。頸部は鏃身部関（逆刺）からやや幅を広げながら台形の茎関に至る。残存長 15.9cm を測る。467 から 473 にも逆刺が確認されるが 466 に比べて明らかに浅い。

・尖根鑿箭式鉄鏃（第 100 図 480 ～ 490）

480 から 490 は尖根鑿箭式の鉄鏃である。480 から 484 は片鏑造、485 から 487、489、490 は両丸造、488 は片丸造である。480 から 484 は、鏃身部と頸部に明瞭な関がなく、幅をあまりかえることのない長い頸部をもつ。茎関は角関である。480 は全体が残存する鉄鏃で全長 25.3cm、鏃身部長 2.2cm、幅 1.0cm、頸部長 16.8cm、茎部長 6.3cm を測る。481 から 483 は鏃身部のみの残存であるが形態的に 480 と酷似する。484 は鏃身部がやや横に広がる形態を示す。485 は 484 同様、やや幅の広い鏃身部を有するが錆もあり、鏑は現状では確認されない。頸部が細い。486 から 490 は刃部が三角形に近い形態を有する。いずれも鏃身部関は認められない。

・その他の部位（第 100・101 図 491 ～ 567）

491 から 567 は頸部もしくは茎部のみが残存する破片である。尖根式の破片と思われる。

・鉄鏃束（第 102・103 図 568 ～ 572）

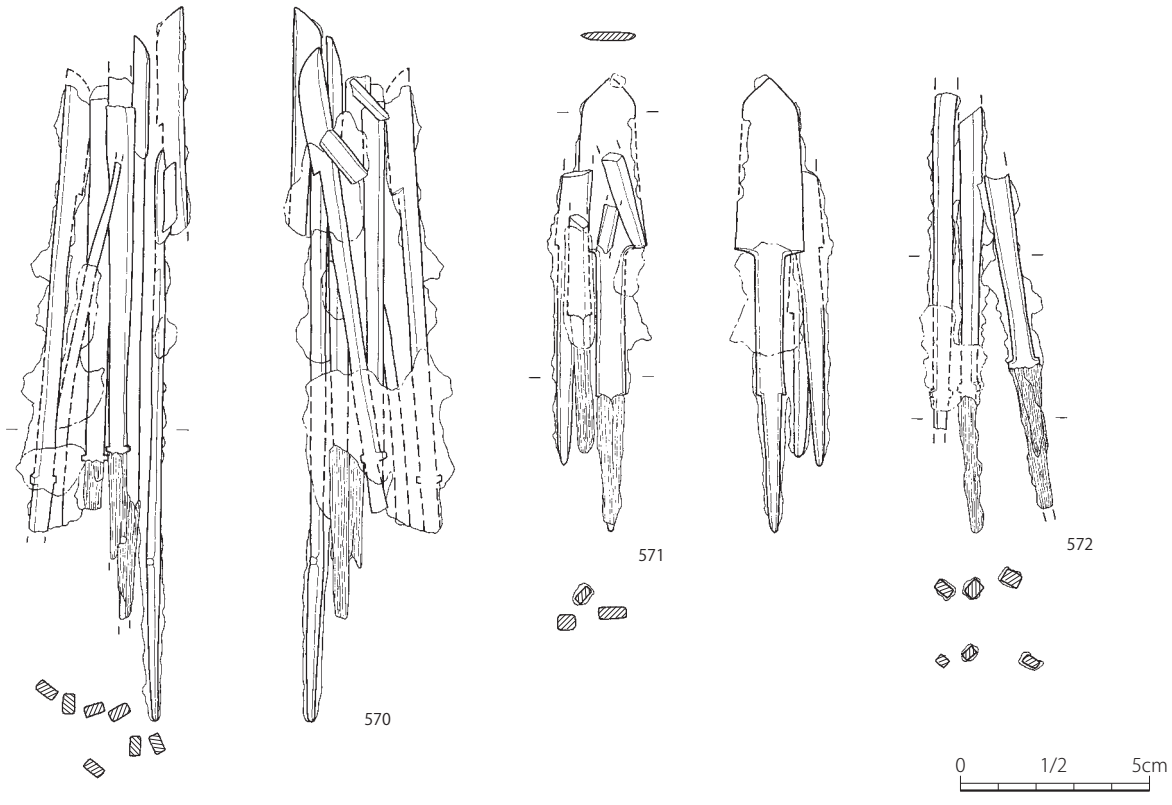
568 は最低 37 本以上の鉄鏃が束のまま出土したものである。形式が明らかなもので平根長三角形式 8 本、尖根片刃箭式 13 本、尖根鑿箭式 2 本である。平根長三角形式のものは形態的に 439 に酷似する。尖根片刃箭式ものは逆刺が浅く 467 から 473 に近い。尖根鑿箭式のものは現状では錆の影響もあり鏑は観察されないが、486 から 490 と同様の形態を示す。

569 は 9 本の鉄鏃が束となっている。尖根片刃箭式とされる 3 本を除いて他の 6 本は頸部から茎部のみが残存する。

570 は尖根片刃箭式 4 本、頸部から茎部、茎部のみ 4 本の合計 8 本の鉄鏃からなる。

571 は 5 本認められる。鏃身部形態が明らかな 1 本は、平根五角形としたが、長三角形とすることもできる。似た形態を示すものがない。

572 は頸部から茎部の 3 本が束となっているのみで、鏃身部は認められない。



第 103 図　鉄鏃実測図 8

農工具

砥石（第 104 図 573・574）

573・574 はいずれも凝灰岩製の砥石である。

573 は平面長方形で全長 9.9cm、幅 2.3cm、重量 38.80g を測る。側面をなす 4 面すべてに多くのスリが認められる。側面には直径 0.7cm から 0.8cm の垂下用の孔があることから、提砥として使用されたものと想定される。

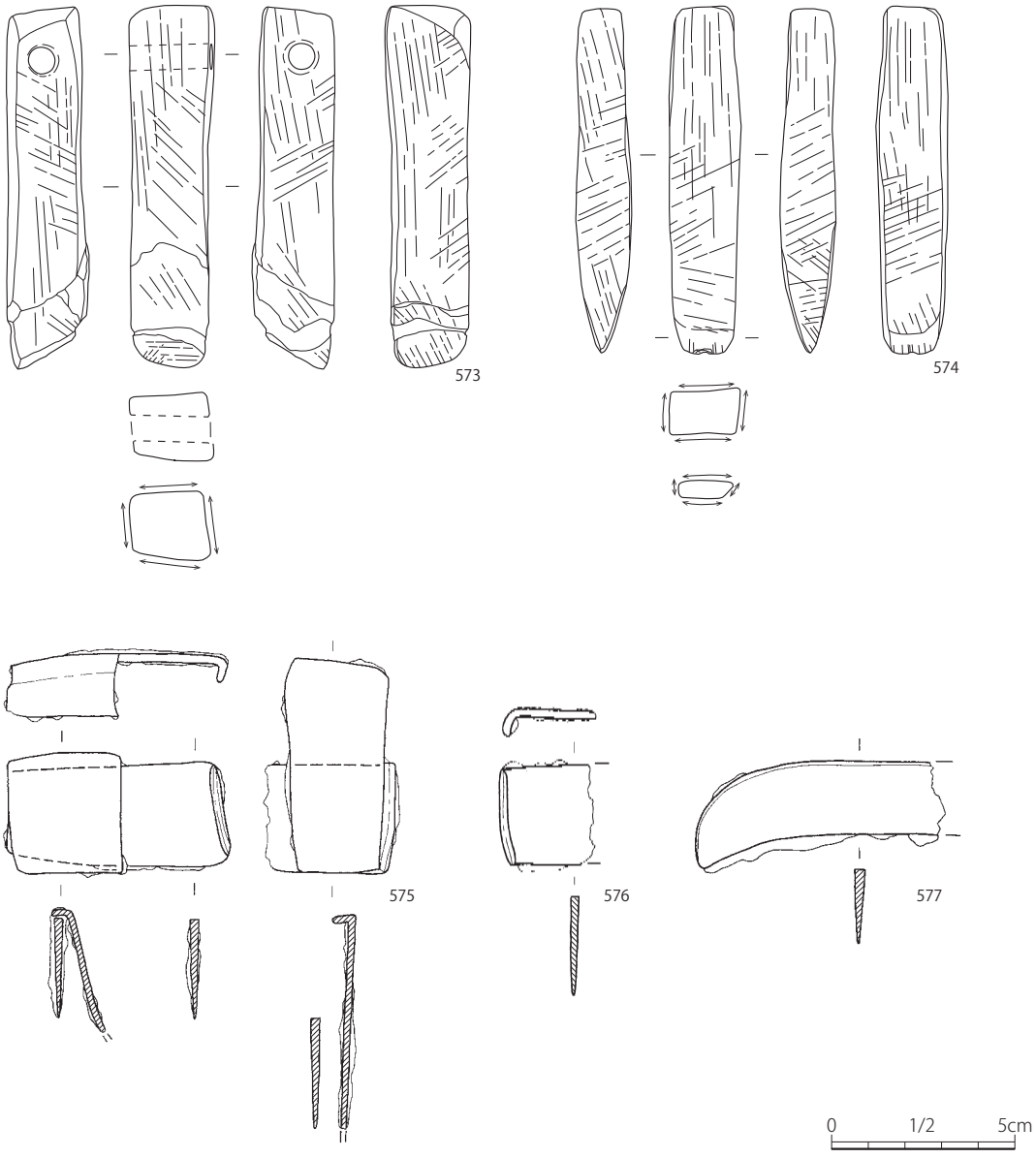
574 も砥石（凝灰岩製）で、先端が尖る形態で全長 9.4cm、幅 1.95cm、重量 37.10g を測る。573 同様、側面をなす 4 面すべてに多くのスリが認められる。

鎌（第 104 図 575 ～ 577）

575 から 577 は鎌である。575 は 2 個体の鎌がサビで付着して束となり出土している。いずれも直刃鎌の基部部分であり、基部端の辺全体を折り返す（辺折り返し）タイプである。幅は 2.9cm から 3.0cm を測る。

576 も直刃鎌の基部とされる部分だが、折り返しを表に向けたときに鋒が右を向く「折り返し乙技法」とされるものである。幅は 2.7cm を測る。

577 は曲刃鎌で刃部中央までは直線をなし、先端だけが曲がる形態である。基部は残存しない。



第 104 図　砥石・鎌実測図

鍬鋤先（第 105・106 図 578 ～ 581）

578 から 581 はＵ字形鍬鋤先とされるものである。

578 から 580 は平面形がＵ字形すなわち刃両端角がない。柄部Ｖ字溝のある側（内縁）の形態は、直線的に落ちるというよりは緩やかに傾き、外縁は内縁よりも直線的となっている。579 の刃部には布のようなものが付着している。578 は全長 15.3cm、耳部長 9.8cm、刃部長 5.5cm、基部幅 15.3cm、耳幅 2.0cm、Ｖ字溝の深さ 1.4cm を測る。579 は全長 15.1cm、耳部長 11.3cm、刃部長 3.8cm、基部幅 17.8cm、耳幅 1.7cm、Ｖ字溝の深さ 1.1cm を測る。580 は全長 15.2cm、耳部長 10.2cm、刃部長 5.0cm、基部幅 15.0cm、耳幅 1.8cm、Ｖ字溝の深さ 1.2cm を測る。

581 は平面形がどちらかといえば凹字形で刃両端角を有する。外縁は両側が刃両端角まで直線的で刃部は緩やかに弧を描く。全長 12.35m、耳部長 7.6cm、刃部長 4.75cm、基部幅 13.8cm、耳幅 2.0cm、Ｖ字溝の深さ 1.0cm を測る。

刀子（第 107 図 582 ～ 595）

破片を含めて 14 点出土している。

582 は完形で全長 21.0cm、関幅 1.85cm、茎部長 7.2cm、茎部幅 1.0cm を測る。関は直角両関で茎は直線的に茎尻に向かう。茎尻は隅切りの形態を示す。茎には木質が遺存しており、木柄に装着された状態で副葬されている。身部はやや反りながら切先にいたる。

583 は切先の先端と茎尻の一部が欠損する。関は直角両関で鹿角が遺存している。鹿角の内側には木質も一部確認される。茎尻が欠損するが目釘孔が観察される。柄の太さは長軸 2.1cm、短軸（幅）1.5cm 程度に復元できる。身部は棟側が大きく反りながら切先に至る。

584 は柄縁金具（鏃）が装着されている刀子で完形である。全長 15.1cm、関幅 1.8cm、茎部長 5.3cm、茎部幅 1.0cm を測る。関は直角両関と推測され、直線的に丸い茎尻に至る。茎部には木質が遺存する。柄の太さは長軸 1.9cm、短軸（幅）1.6cm 程度に復元できる。身部は棟側が反り切先付近で刃部が急激に尖る。

585 から 587 も同様の構造をもつ刀子であるが 586 は柄縁金具（鏃）の幅が他よりせまく 0.7cm を測る。586 の茎部には紐状の木皮が巻かれているのが観察される。また、592 には断片ながらも鹿角が遺存している。

鉄斧（第 108 図 596 ～ 598）

596 は袋状鉄斧（無肩鉄斧）とされるもので、袋部と刃部幅がほぼ等しく、中央部分に括れをもつ。袋部基部の断面は楕円形を呈する。折り返し部はハの字に開く。刃部はほぼ直線的である。全長 9.0cm、袋部長 4.6cm、袋部幅 2.8cm、刃部長 4.4cm、幅 3.2cm を測る。

597 は 596 に比べて袋部の幅が狭く、刃部幅が広い。袋部基部の断面はやや方形を呈する。刃部はほぼ直線的である。全長 9.3cm、袋部長 4.5cm、幅 2.2cm、刃部長 3.5cm、幅 3.55cm を測る。

598 は有肩鉄斧とされるものである。平面は細長い長方形であまり肩の張り出さないタイプである。刃部はゆるやかなカーブをもつ。全長 13.45cm、袋部長 5.1cm、袋部幅 4.4cm、刃部長 8.35cm、幅 6.2cm を測る。また、身が厚く 0.7cm を測る。

鉇（第 109 図 599 ～ 604）

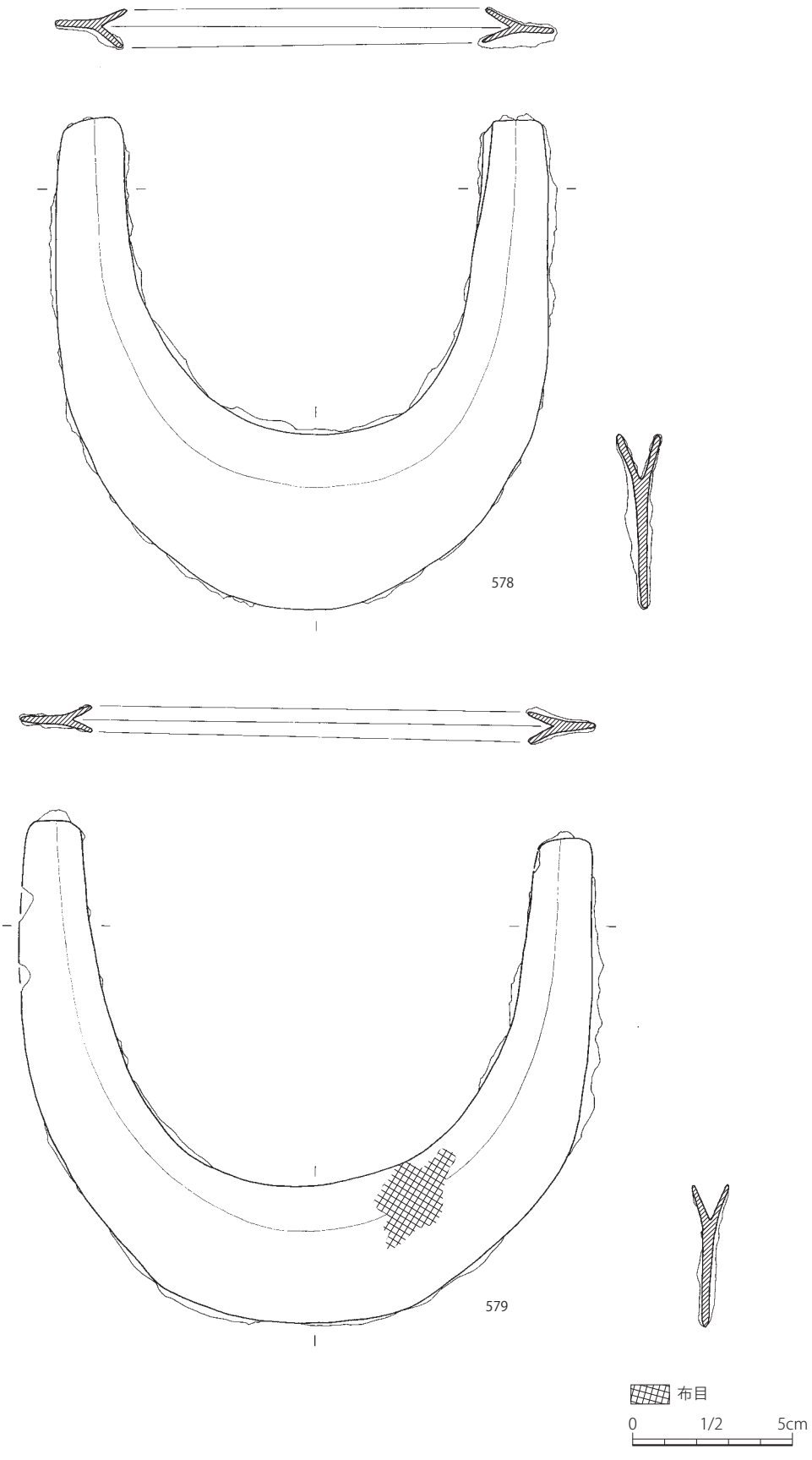
599 はほぼ完形で、全長 14.2cm、刃部長 6.4cm、茎部長 7.8cm、厚さ 0.3 から 0.35cm を測る。茎部幅は刃部付近で 0.9cm、基部で 0.6cm とその幅を減じている。刃部は緩やかに外反し、切先に向かい幅 1.3cm とやや広がる。刃部には鎬が明瞭に認められ、断面三角形で 0.3cm を測る。木質の付着は認められない。

600 は刃部のみ残存し、茎部を欠損する。刃部はやや角度をもって直線的に外方に延びる。幅は 1.2cm を測る。刃部には鎬が明瞭に認められ、断面三角形で 0.4cm を測る。木質の付着は認められない。

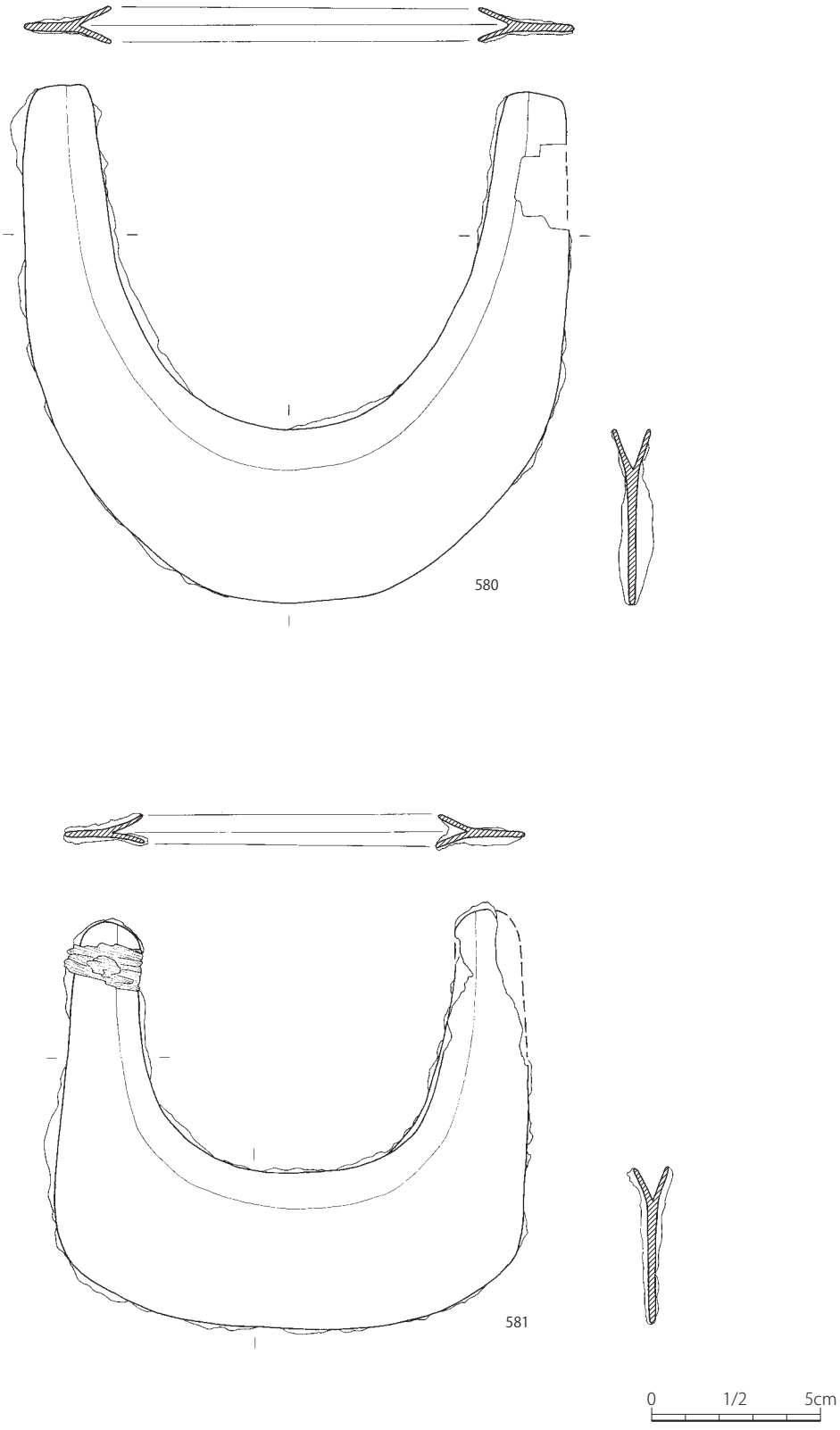
601 はほぼ完形で、全長 12.5cm、刃部長 4.8cm、茎部長 7.7cm、厚さ 0.3cm を測る。茎部幅は刃部付近でその幅を減じている。基部は半円形をなす。刃部は緩やかに外反し、幅 1.4cm とやや広がり、幅を減じながら切先に至る。刃部には鎬が明瞭に認められ、断面三角形で 0.3cm を測る。木質の付着は認められない。

602 はほぼ完形で、全長 11.1cm、刃部長 3.6cm、茎部長 7.4cm、厚さ 0.3cm を測る。関は撫関を呈する。刃部は厚みをもちながら緩やかに外反し、幅 1.5cm とやや広がる。刃部には鎬が明瞭に認められ、断面三角形で 0.4cm を測る。茎部に木質の付着が認められる。

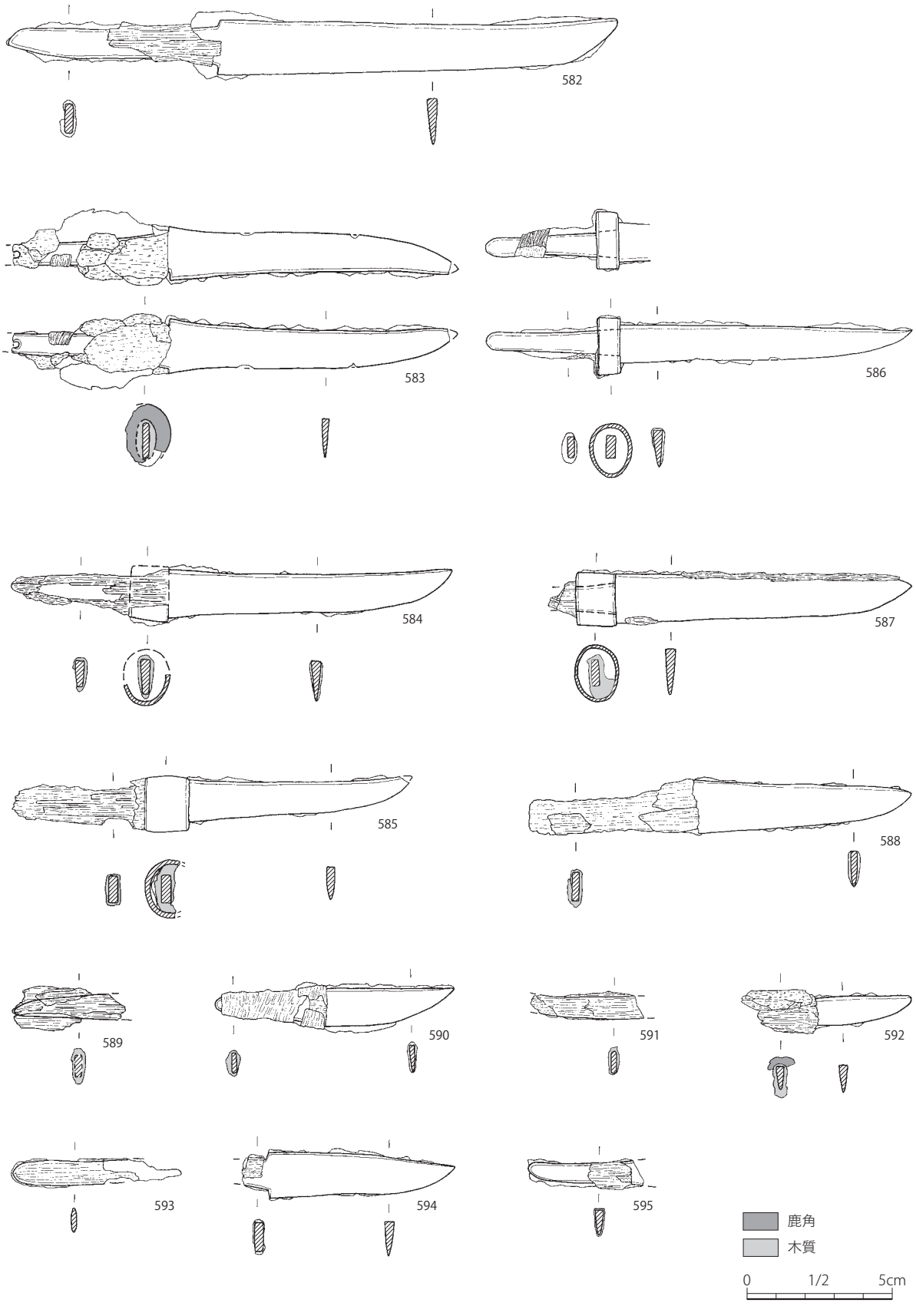
603 は基部を欠損し、残存長 8.3cm、刃部長 4.5cm を測る。形態から平根式長三角形式鉄鏃の可能性も考えられるが、刃部が外反することから鉇とした。



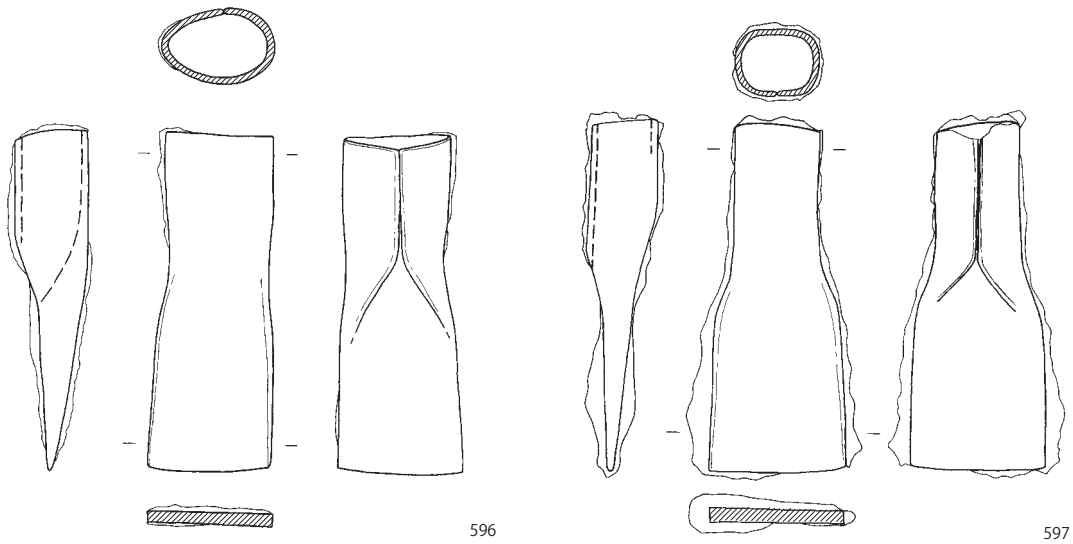
第 105 図　鍬鋤先実測図 1

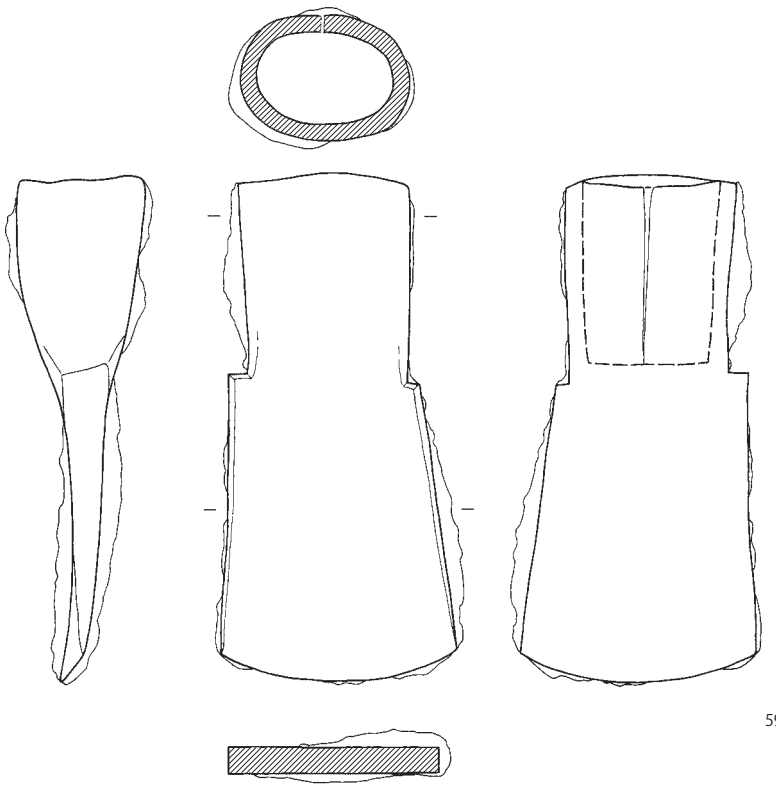


第 106 図　鍬鋤先実測図 2


582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
鹿角
木質
0
1/2
5cm

第 107 図　刀子実測図





0 1/2 5cm

第 108 図　鉄斧実測図

鑿（第 109 図 604）

604 は平鑿で途中、欠損する部分もあるが、復元全長 19.8cm を測り、無肩で全体的に厚手で頑丈なつくりである。

刃部は断面長方形で幅 1.2cm を測り、先端に近づくほど厚みを減じている。軸部中央付近より刃部とは反対側に向かい徐々に幅を広げ、端部で 1.8cm を測る。

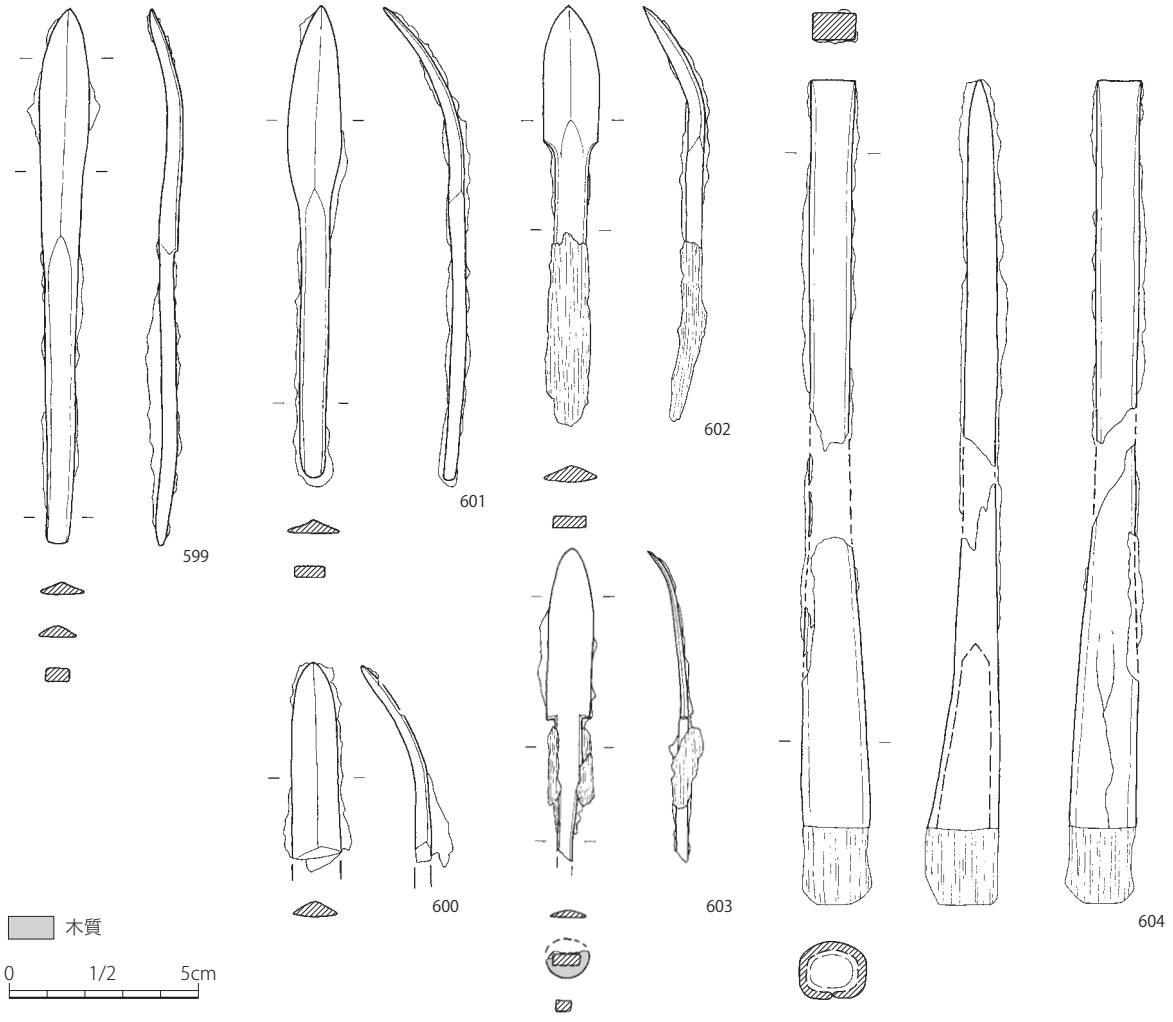
基部には袋部が長さ 4.7cm 認められ、本来、柄をソケット状に挿入していたことが、袋部内面に残る木質から判断できる。木質部分を含めた全長は 21.8cm に復元される。

袋部断面は円形に近い隅丸方形で端部では直径 1.4cm、袋部奥では直径 0.7cm を測る。軸部の端が幅を広げているのはこの袋部を作り出すためと考えられる。

鍛冶具・生産用具等

鉄鉗（第 112 図 605）

605 の鉄鉗は持ち手部分の先端が一部欠損するもののほぼ完形である。全長 19.3cm を測り、部位により丁寧に厚みの調整された 2 本の鉄板を要部分で交差させ接合している。持ち手部分は幅 0.45cm、厚さ 0.3cm の横断面長方形で、そこから先端に向かい厚みが薄くなり幅を広げ、要部分では幅 1.1cm、厚さ 0.2cm となる。この部分に直径 0.25cm、長さ 0.4cm の円形の鉄棒を打ち込みジョイント部分としている。さらに先端部分に近づくと、幅を狭くしながら厚みが増し、かみ合わせの先端部分では幅 0.3cm、厚さ 0.5cm となる。先端部分の接触部に幅は持たせていない。要部分が特に丈夫に作られているのは、この部分に一番負荷がかかるためと考えられる。



第 109 図　鉋・鑿実測図

鑷子（第 112 図 606）

606 は先端部分が欠損する鑷子である。残存長 9.9cm を測り、11cm 程度に復元できる。環状に折り曲げた重ね合わせ部分の外径幅 1.1cm、長さ 1.5cm 程度で、そこからやや内湾しながら持ち手部をへて先端部に至る。

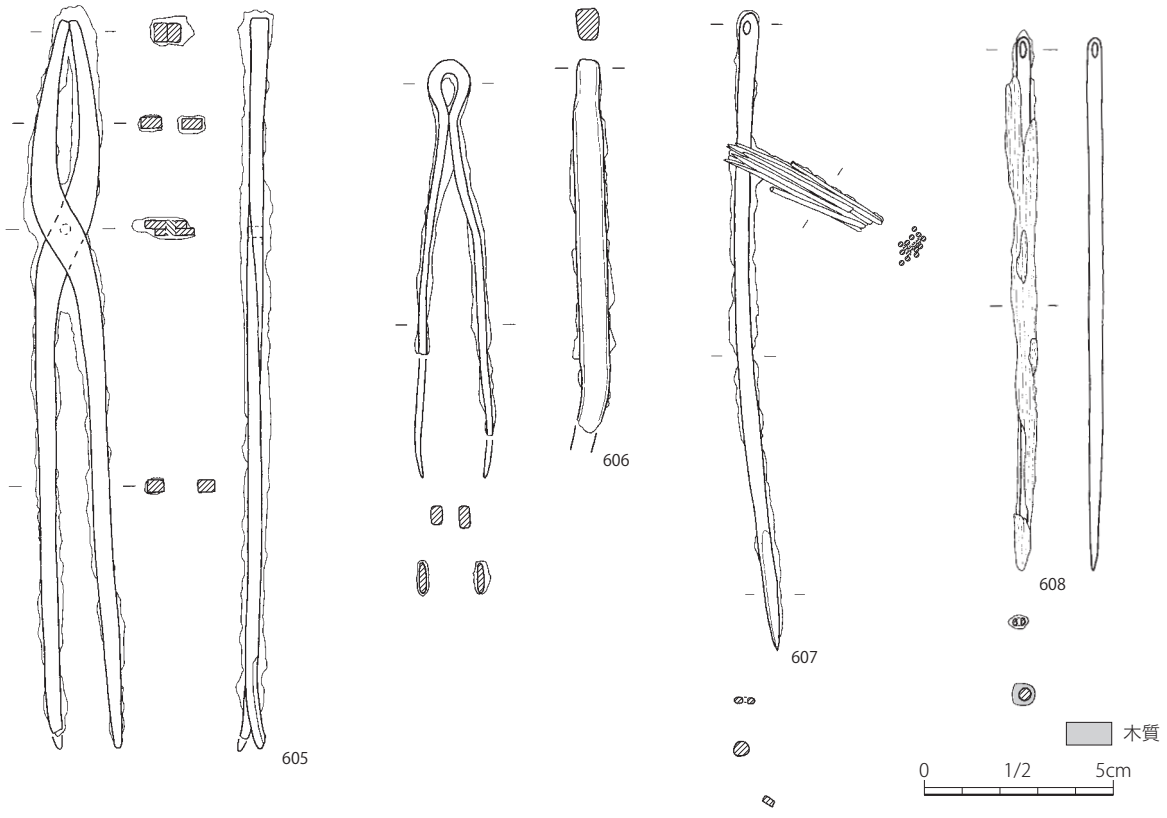
針（第 112 図 607・608）

607 は全長 17.0cm、断面直径 0.4cm を測る針で、針束が付着している。針頭は丸く、断面円形で、先端から 3.2cm の部分のみ断面方形となる。針頭には糸を通すための針孔が確認できる。針孔は長さ 0.35cm、幅 0.2cm 程度の楕円形をなす。針頭から 3.6 から 4.2cm の範囲には針先をむけた状態で針束が付着する。針束は現状で 12 本を数えるが、束の内部を入れると 17 本程度に復元される。針束の針は断面が直径 0.1cm 程度の円形で、長さ 3.5 から 4.0cm 程度のものが束となっている。現状では針孔の有無は判断できない。

608 は全長 14.1cm、断面直径 0.35cm を測る針である。針頭には糸を通すための針孔が確認できる。針孔は長さ 0.4cm、幅 0.2cm 程度の楕円形をなす。全面に木質が遺存している。

第 110 図　鉄鉗（605）

第 111 図　針（607）



第 112 図　鉄鉗・鑷子・針実測図

馬具

轡（第 113・114 図 609 ～ 611）

609 は兵庫鎖立聞環状鏡板付轡である。鏡板、引手、銜の接合方法は鏡板に銜と引手が装着される「鏡板介在型」（大谷 2008）の連結である。鏡板には 2 連の兵庫鎖立聞が付く。銜は二連銜で、銜先環はＣ字形である。引手は一条線引手で捩じりは確認されない。

法量は鏡板で環高（右）7.5cm（左）7.1cm、環幅（右）8.3cm（左）7.8cm、兵庫鎖の高さは鏡板に連接するものが（右）2.8cm（左）2.7cm、2 連目が（右）2.7cm（左）2.8cm で、連結したときの高さは（右）4.35cm（左）4.1cm である。

銜は左右で 15.5cm である。右側は長さ 8.45cm、銜先端環の外法直径 2.05cm、喞金外法直径 2.2cm である。左側は長さ 8.4cm、銜先端環の外法直径 2.4cm、喞金外法直径 2.2cm である。銜の断面は隅丸方形で一辺 0.6 から 0.9cm である。

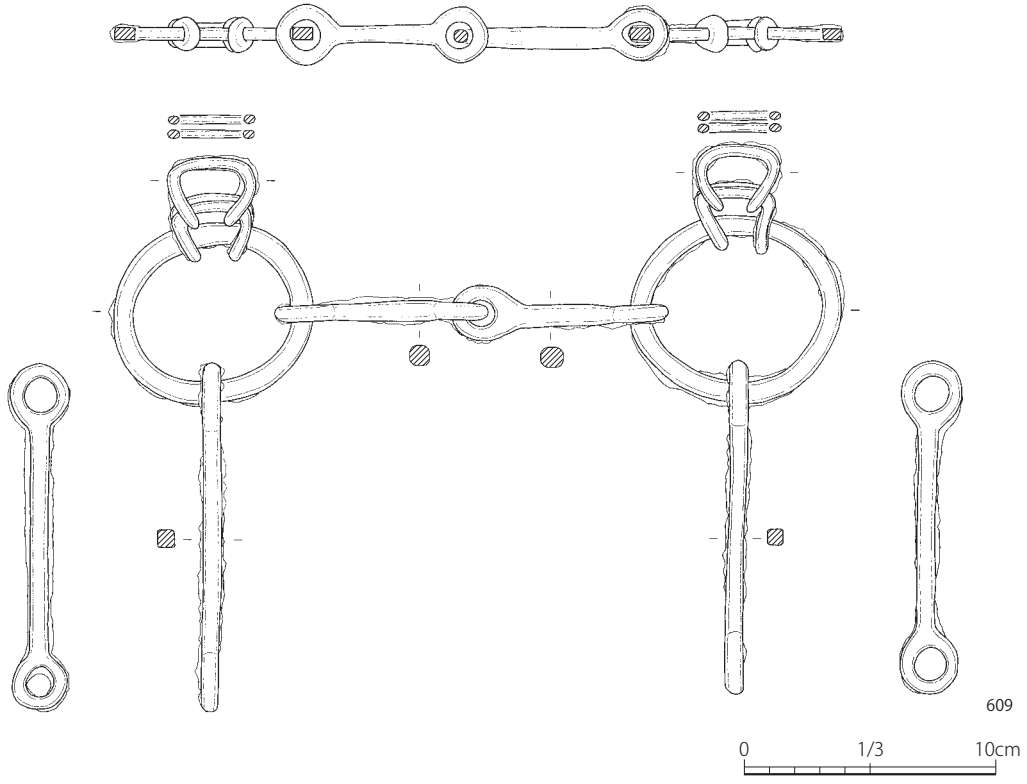
引手は右側で 13.3cm、鏡板側の環 2.35cm、引手壺の長さ 2.7cm、幅 2.3cm である。左側で 13.8cm、鏡板側の環 2.3cm、引手壺の長さ 2.2cm、幅 2.1cm である。左右ともに引手の断面は方形で一辺 0.7cm である。

610 は小型矩形立聞環状鏡板付轡である。鏡板、引手、銜の接合方法は銜先環に引手と鏡板が装着される「銜介在型」（大谷 2008）の連結である。鏡板は小型矩形（回字形）の立聞が扁平な楕円形の環に鍛接されている。銜は二連銜で、銜先環はＣ字形である。引手は一条線引手、く字形引手壺で捩じりは確認されない。

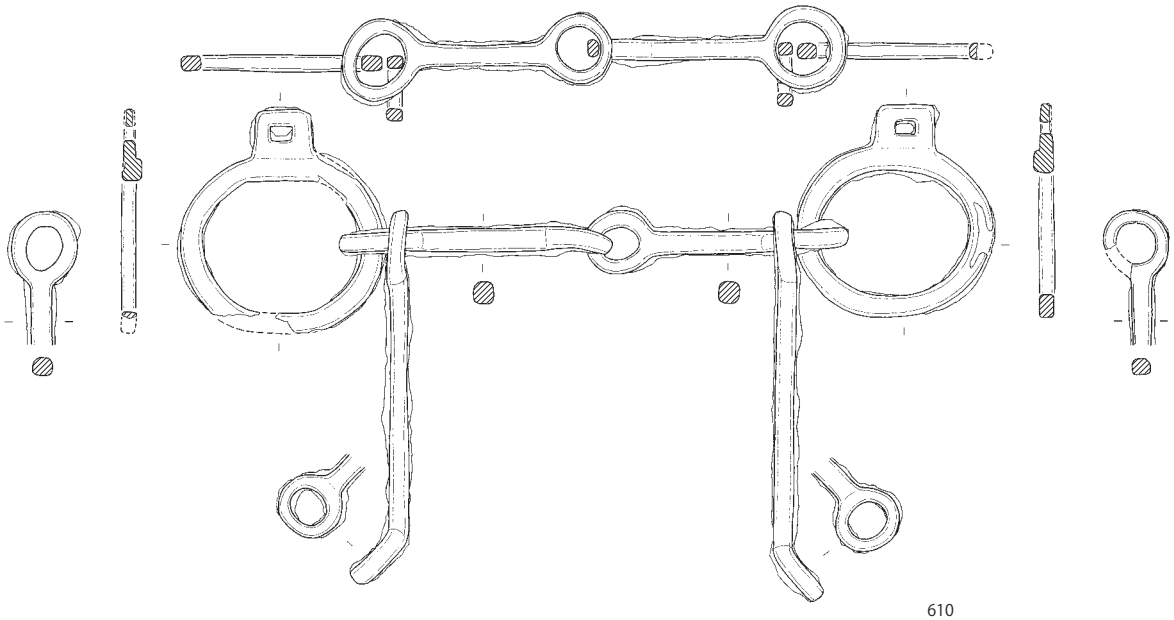
法量は鏡板で全高（右）8.4cm（左）8.9cm、環高（右）6.7cm（左）6.9cm、環幅（右）7.7cm（左）7.9cm、立聞幅（右）2.3cm（左）2.4cm、立聞高（右）1.75cm（左）2.0cm、立聞孔長辺（右）0.8cm（左）0.9cm、短辺（右）0.5cm（左）0.6cm である。

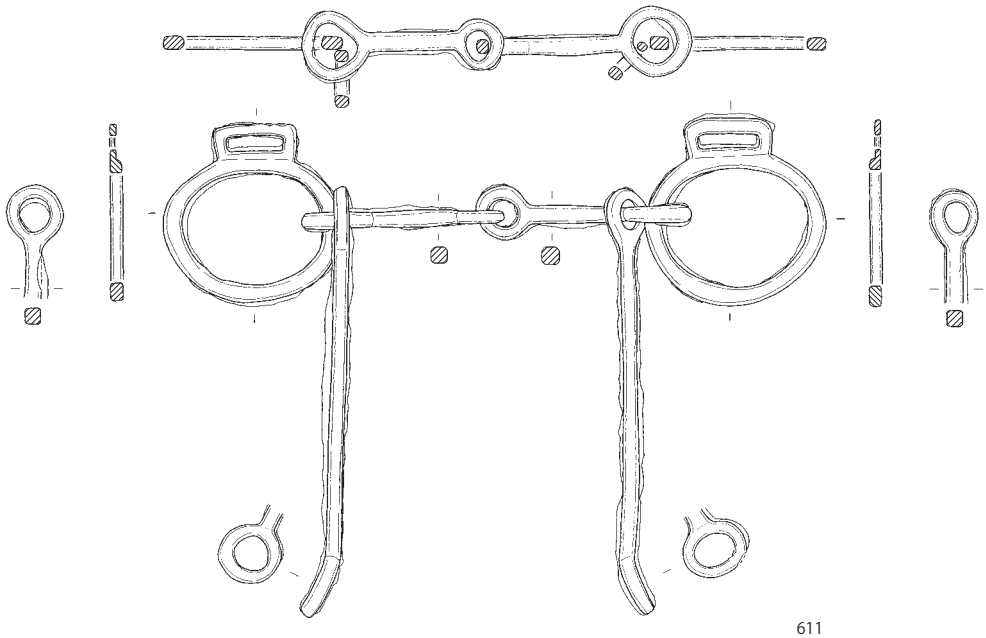
銜は左右で 20.1cm である。右側は長さ 10.4cm、銜先端環の外法直径 3.3cm、喞金外法直径 2.5cm である。左側は長さ 10.8m、銜先端環の外法直径 3.3cm、喞金外法直径 2.8cm である。銜の断面は隅丸方形で一辺 0.8 から 0.9cm である。

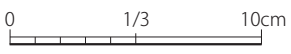
引手は右側で 15.6cm、鏡板側の環 2.6cm、引手壺の長さ 2.4cm、幅 2.6cm である。左側で 14.9cm、鏡板側の環 2.55cm、引手壺の長さ 2.4cm、幅 2.5cm である。左右ともに引手の断面は方形で一辺 0.7 から 0.8cm である。



第 113 図　轡実測図 1







第 114 図　轡実測図 2

611 は大型矩形立聞環状鏡板付轡である。610 と立聞の大きさ以外は同じ製作技法であるため、法量のみ記載する。

法量は鏡板で全高（右）7.4cm（左）7.05cm、環高（右）5.9cm（左）5.6cm、環幅（右）7.05cm（左）7.0cm、立聞幅（右）3.4cm（左）3.2cm、立聞高（右）1.5cm（左）1.4cm、立聞孔長辺（右）2.4cm（左）2.2cm、短辺（右）0.6cm（左）0.6cm である。

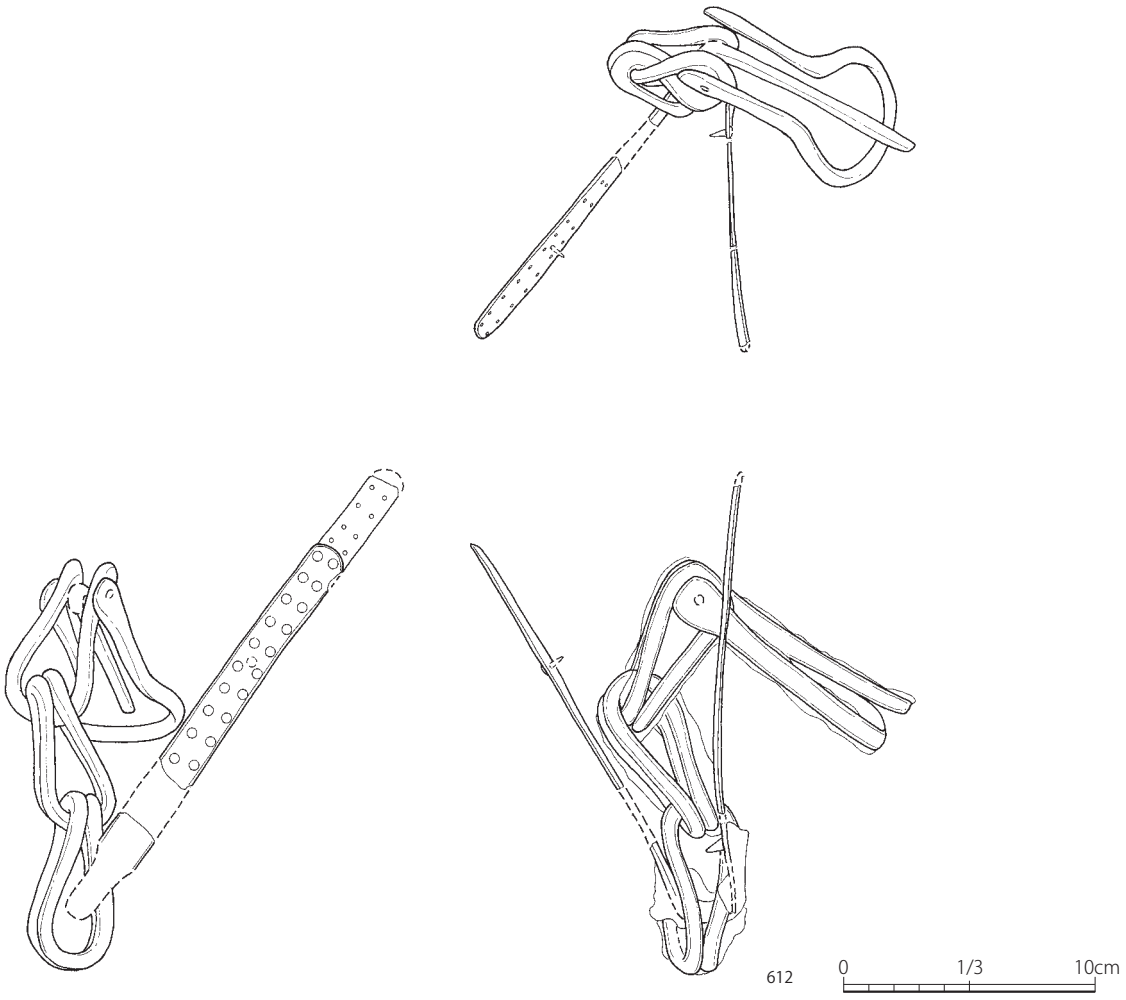
銜は左右で 15.45cm である。右側は長さ 8.5cm、銜先端環の外法直径 2.7cm、啣金外法直径 2.15cm である。左側は長さ 8.0m、銜先端環の外法直径 2.7m、啣金外法直径 2.0cm である。銜の断面は隅丸方形で一辺 0.6 から 0.7cm である。

引手は右側で 16.9cm、鏡板側の環 1.8cm、引手壺の長さ 2.2cm、幅 2.5cm である。左側で 17.1cm、鏡板側の環 2.2cm、引手壺の長さ 2.4cm、幅 2.2cm である。左右ともに引手の断面は方形で一辺 0.6cm である。

鐙吊金具（第 115・118・119 図 612・613）

612･613 は鐙吊金具である。1 対をなすもので、鉸具、兵庫鎖、U字形金具からなる。

U字形金具は板を曲げた部分（吊り部）と、それを偏平に打ち伸ばし木製鐙を固定する部分（固定部）からなる。固定部の先端は半円形を呈する。固定部の鋲は 3 列あるように見えるが、外側の 2 列は固定部の内側から直径 0.4cm の円形に打ち出された擬似鋲表現であり、中心列のみが外側から打たれた本物の鋲である。鋲の位置は、612 が先端から 5.6cm、613 が 6.2cm にひとつ目の鋲があり、さらに 5.2cm の場所にふたつ目の鋲があることから片側 2 つずつの鋲が存在したことが分かる。さらに鋲の先端には木質が遺存しており、木製鐙が実際に装着されていたことがうかがえる。固定部長は 612 が 17.8cm、613 が 17.3cm に復原され、幅は 1.85 から 2.0cm を測る。



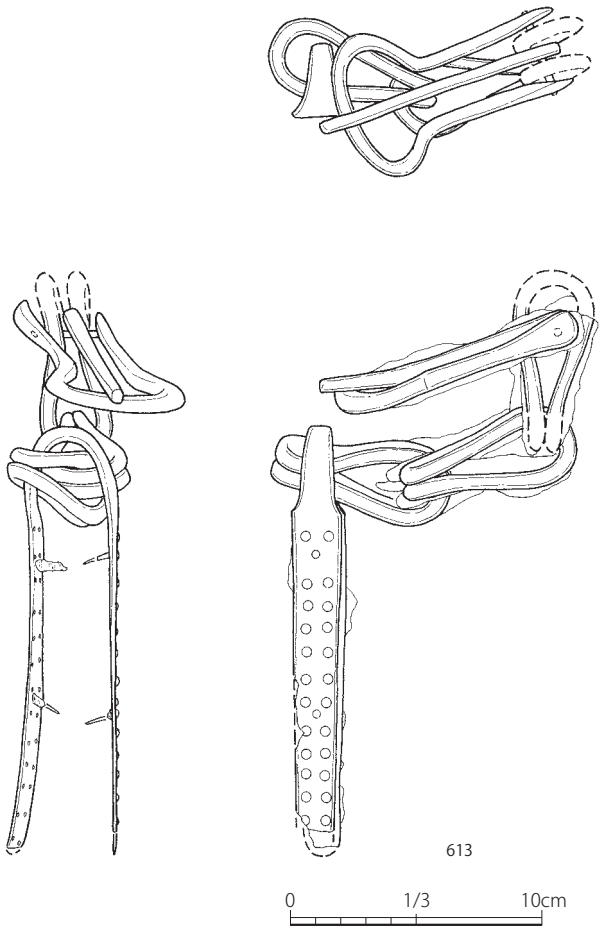
第 115 図　鐙吊金具実測図 1

兵庫鎖は３連式で 612・613 ともに長さがすべて 7.0 から 7.1cm に統一して作られている。３連繋げたときの長さは 18.2cm になる。断面は円形で直径 0.75cm を測る。差金により鉸具と兵庫鎖が連結されている。

鉸具は鉸具尻が円形に拡張された鍵穴形で、断面は直径 0.7cm の円形である。612 は鉸具長 10.0cm、基部幅 2.9cm、尻幅 5.9cm、613 は鉸具長 10.6cm、基部幅 3.1cm、尻幅 5.75cm を測る。

第 116 図　鐙吊金具（613）

第 117 図　鐙吊金具（613）



第 118 図　鐙吊金具実測図２

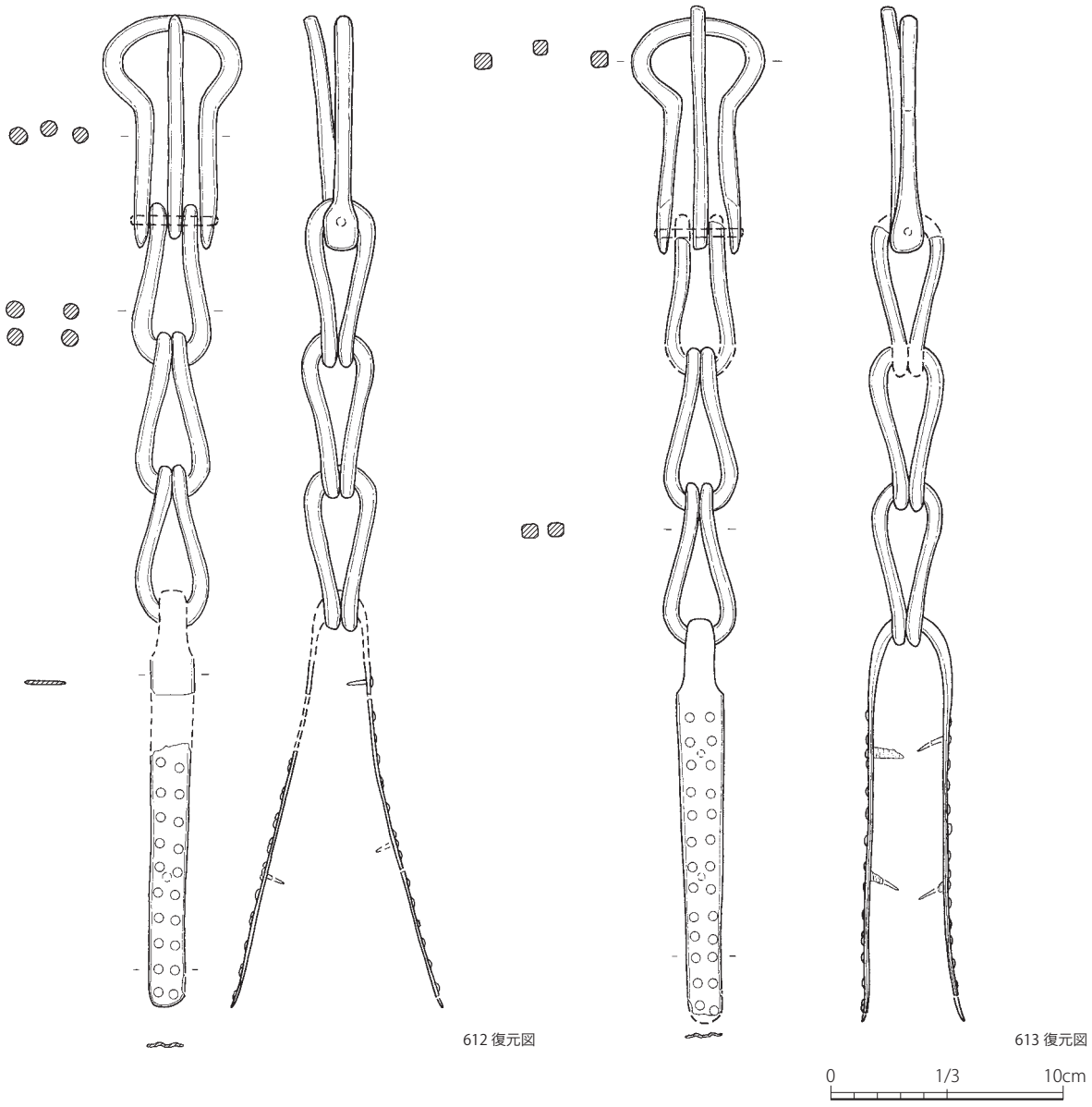
帯金具（第 120 図 614 ～ 622）

614・615 は平面菱形の帯金具である。614 は鉄地金銅張であることが明瞭で、615 も金銅が観察されないものの金銅張であった可能性が高い。円形の大きく突出する鋲が4箇所打たれている。鋲頭径0.8cm、鋲頭高0.6cmを測る。金具の端部が約 120 度曲げられており、3mm 程度の空間を作り出している。614 の鋲脚のひとつは折り曲げられて爪形をなしている。

法量は 614 が長さ 4.6cm、幅 3.2cm、615 は長さ 4.5cm、幅 3.3cm であり、セットをなすものと考えられる。

616 は平面正方形の帯金具である。鋲は欠損しているが、4 箇所の孔が認められる。金具の端部は曲げられている。長さ 3.0cm、幅 3.0cm、孔径 0.3cm を測る。

617・618・619 は平面爪形の帯金具である。617 は 3 箇所、618・619 は 2 個所の鋲が認められる。617 は錆の状態からスズ鍍金の可能性があり、3 個体の鋲のうち平面円形の部分に打たれた鋲は折り曲げられている。617 は長さ 2.35cm、幅 2.5cm、鋲頭径 0.65cm、鋲頭高 0.25cm、618 は長さ 2.1cm、幅 2.3cm、鋲頭径 0.7cm、鋲頭高 0.2cm、619 は長さ 2.0cm、幅 2.3cm、鋲頭径 0.65cm、鋲頭高 0.2cm を測る。



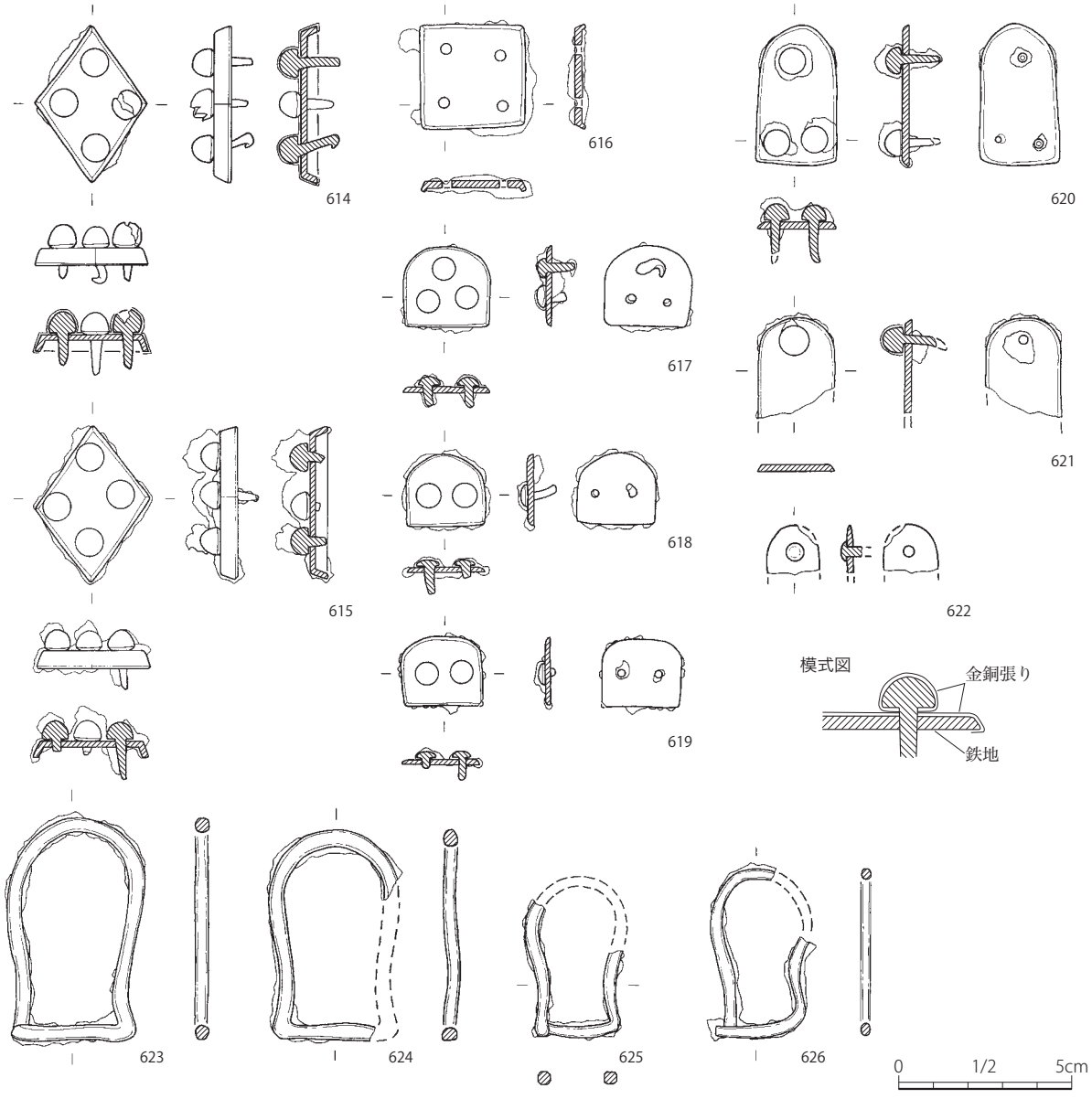
第 119 図　鐙吊金具復元図

620・621 は平面爪形で 617 などより細長い形態である。620 には 3 箇所の鋲が認められるが 621 は破片のため 1 箇所しか残存しない。金銅張りについては、620 の裏面に金銅板の折り返しを被せたような痕跡が認められるが明確ではない。一方、621 は鋲頭には金銅が確認されるものの他の部分には認められない。遺存していないだけなのか、ほかの部位は鉄地のままだったのかは明らかではない。620 の法量は長さ 4.05cm、幅 2.3cm。鋲頭径 0.7cm、鋲頭高 0.5cm を測る。

622 は帯金具もしくは雲珠の脚部の可能性が考えられるが、どちらとも判断できない。

鉸具（第 120 図 623 ～ 626）

4 点が出土している。623 以外は一部が欠損しているが、大きさから 623・624 と 625・626 に区別することが出来る。いずれも鉸具尻が円形に拡張された鍵穴形で、断面は直径 0.3 から 0.4cm の円形である。623 は鉸具長 6.5cm、基部幅 3.5cm、尻幅 3.9cm を測る。



第 120 図　帯金具・鉸具実測図

土器

須恵器

・坏蓋（第 121 図 627 ～ 629）

3 点（627・628・629）出土している。天井部にヘラケズリが認められる。627・629 は内面の凹凸が比較的少なく滑らかな一方で、628 はノタメが目立つ。また、端部は 627 が丸みをもっているのに対して、628・629 は端部にくぼみが認められる。いずれも胎土には直径 0.5mm から 2mm 程度の白色粒子を多く含んでいる。

・坏身（第 121 図 630 ～ 638）

9 点（630 ～ 638）出土している。全体的に回転ヘラケズリ時の稜線やノタメ痕の凹凸が目立つ。631 のみ胎土に白色粒子を含まないが、他は直径 0.5mm から 2mm 程度の白色粒子を多く含んでいる。

630 の底部の器壁が薄くやや平らな形態を呈し、受け部は外方に反る。立ち上がり部は滑らかに垂直方向に立ち上がり、受け部と立ち上がり部の間に凹みがまわる。

631 の底部は平底よりやや丸底というべき形態である。全体的に器壁が厚い。立ち上がり部は口唇部付近で斜め方向から垂直方向に立ち上がる。

632 は丸底で器高が深い形態である。ヘラケズリの痕跡が明瞭で凹凸が目立つ。立ち上がり部は厚く短い。

633 はヘラケズリの範囲が広く、器壁が厚い。立ち上がり部の内面は滑らかに立ち上がり、受け部と立ち上がり部の間に凹みがまわる。

634 は底部の器壁が比較的薄く仕上げられている。立ち上がり部の調整も丁寧に仕上げられている。

635 はヘラケズリの範囲が狭く、それにより平底を作り出している。立ち上がり部の内側は、稜を作り出すほど直角に貼り付けられている。一方、外側は立ち上がり部の間に凹みがまわる。

636 はヘラケズリの範囲は比較的広いが、それに伴う凹凸は弱い。受け部は外方に大きく反り、その端部近くに立ち上がり部が乗る。

637 はヘラケズリの範囲は狭く、ほかの坏とは異なる方向に削られている。底部内面の凹凸が激しいが受け部、立ち上がり部の調整は丁寧で、器壁も薄い。受け部と立ち上がり部の間に凹みがまわる。

638 は坏身のなかで唯一、手持ちヘラケズリが施されている。受け部と立ち上がり部の間に凹みがまわる。

・蓋（第 121 図 639 ～ 644）

6 点（639 ～ 644）出土している。642・643 のみ胎土に白色粒子を含まず、他は直径 0.5mm から 2mm 程度の白色粒子を多く含んでいる。

639 は扁平な球形をした胴部に、太く短い頸部がつく。底部から胴部中位までヘラケズリが認められる。胴部中位よりやや上に直径 1.4cm の注口部を有する。頸部は太く緩やかに外方に広がる。口縁部は明瞭な稜と沈線をもち、やや内湾しながら立ち上がる。稜は滑らかでシャープではなく、口唇部の調整もさほど丁寧ではない。

640 は球形の胴部に、やや太く短い頸部がつく。手持ちヘラケズリが施されるが、器面調整が雑なため、凹凸が目立つ。胴部の中位付近に直径 1.4cm の注口部を有する。頸部は厚い器壁のまま直線的に広がる。ただし、口縁部は薄く、特に内面の段や稜は、比較的丁寧に仕上げられている。

641 は球形の胴部に、640 よりはやや細い頸部がつく。胴部下半は回転ヘラケズリにより比較的直線的に整形される。胴部中位には直径 1.7cm 程度の注口部を有する。頸部は外反しながら口縁部に至る。頸部中位でゆるい段差が認められる。口縁部は直線的に立ち上がり、頸部との境にやや垂下する稜と一条の沈線を有する。口唇部は丸くおさめられる。

642 はやや扁平で器壁の厚い胴部を有し、他とは比べられない重量を感じる。また、色調も他と異なり灰白色を呈する。胴部下半は手持ちヘラケズリ調整で、中位よりやや上方に直径 1.4cm の注口部を有する。胴部に二条の沈線が認められ、そのうちの下一本は注口部にかかる。二条の沈線の間には櫛状刺突（列点）が認められる。沈線区画後に刺突が施されるものと考えられる。胴部にほぼ直立する筒状の厚い頸部がつく。頸部と胴部との接合に伴い、胴部肩が若干凹む。頸部中位には二条の沈線が認められ頸部二段となっており、内面観察から、この部分で粘土が足されているのが分かる。外形もこの沈線を境に外方に広がるようになる。頸部の上段には胴部より幅の広い櫛状刺突が施される。口縁部はやや外方に直線的に広がる。頸部と口縁部との境は滑らかに丸みをもって調整され、一条の沈線が施される。沈線の上方には 5 本の櫛描波状文が施される。

第 121 図　須恵器実測図

643 は算盤玉形の胴部に外方へ広がる頸部をもつ。内外面の観察から以下のように製作順序を復元することが出来る。胴中位より粘土紐により底部の開いた状態で積み上げられ、絞りながら肩部を閉じ、回転台から離脱。その後、底部を丸底にしながら粘土を絞っていき、胴部を完全に閉塞する。乾燥後、胴の天井部に穴をあけ別に作っておいた頸部・口縁部と合体させる。底部外面はケズリではなくナデ調整で仕上げられている。胴部には二条の沈線があり、その間に丁寧な櫛状刺突がある。注口部は最後に作り出す。頸部は滑らかに外方へ広がる。頸部には丁寧なカキメが施され、中位には二条の沈線が認められる。頸部と口縁部との境にはやや垂下する稜と一条の沈線を有する。稜はシャープに仕上げられている。口縁部外面にはカキメ状のナデの後、幅 0.5mm 程度の沈線が縦位に細かく施されている。

644 は算盤玉形の胴部に大きく外反する頸部をもつ。口縁端部は欠損する。胴部下半は板状工具の小口などを利用し、粘土を削り取っている。胴部の一番張り出す部分には下二条、上一条の沈線があり、沈線間には鋭利なナイフ状の工具によりキザミが入れられている。頸部は比較的細くそこから大きく外反する。頸部には二条一単位の沈線が頸部の屈曲箇所より 4.0cm、7.5cm の箇所に施され、頸部を三段に区画している。下から二段目と、三段目の区画内には、ナイフ状の鋭利な工具により斜め方向のキザミが施される。特に最上段のそれは上下二段に施されている。なお、胴部の内面には、注口部分を穿孔した際の粘土塊が残されており、それが自由に可動する結果、揺らすと鈴のように音がなる。

・短頸壺（第 121 図 645 ～ 647）

3 点（645 ～ 647）出土している。いずれも胎土には直径 0.5mm から 2mm 程度の白色粒子を多く含む。

645 は胴部上半から肩部がやや張り、頸部は直立気味に立ち上がった後、口縁部中位よりやや内湾した形態を示す。底部は器壁が厚く、重量感がある。外面は回転ヘラケズリにより、丸底に仕上げられている。胴中位より口唇部下までカキメが認められる。口唇部をやや肥厚させている。土器の中には、カルシウム分と推測される白い粉が認められた。また、肩部外面と口縁部内外面の一部にサビなどによる赤化した部分が認められる。なお、内部から丸玉（657 ～ 661）が出土した。

646 は胴部上半から肩部がやや張り、口唇端部を肥厚させた短い口縁部がつく。底部は回転ヘラケズリにより調整されている。その際に板状工具の端部が器面にあたった結果、渦巻状の沈線を生み出している。胴中位より頸部下端にかけてカキメが認められる。口唇部は全体的に丸く仕上げられている。

647 は扁平気味の胴部に直線的な口縁部がつく。底部は回転ヘラケズリにより平底に仕上げられており、肩部がやや張る。肩の張った部分に二条の沈線が認められる。直線的に立ち上がる口縁部にも同じく二条の沈線が認められる。

・把手付碗（第 121 図 648）

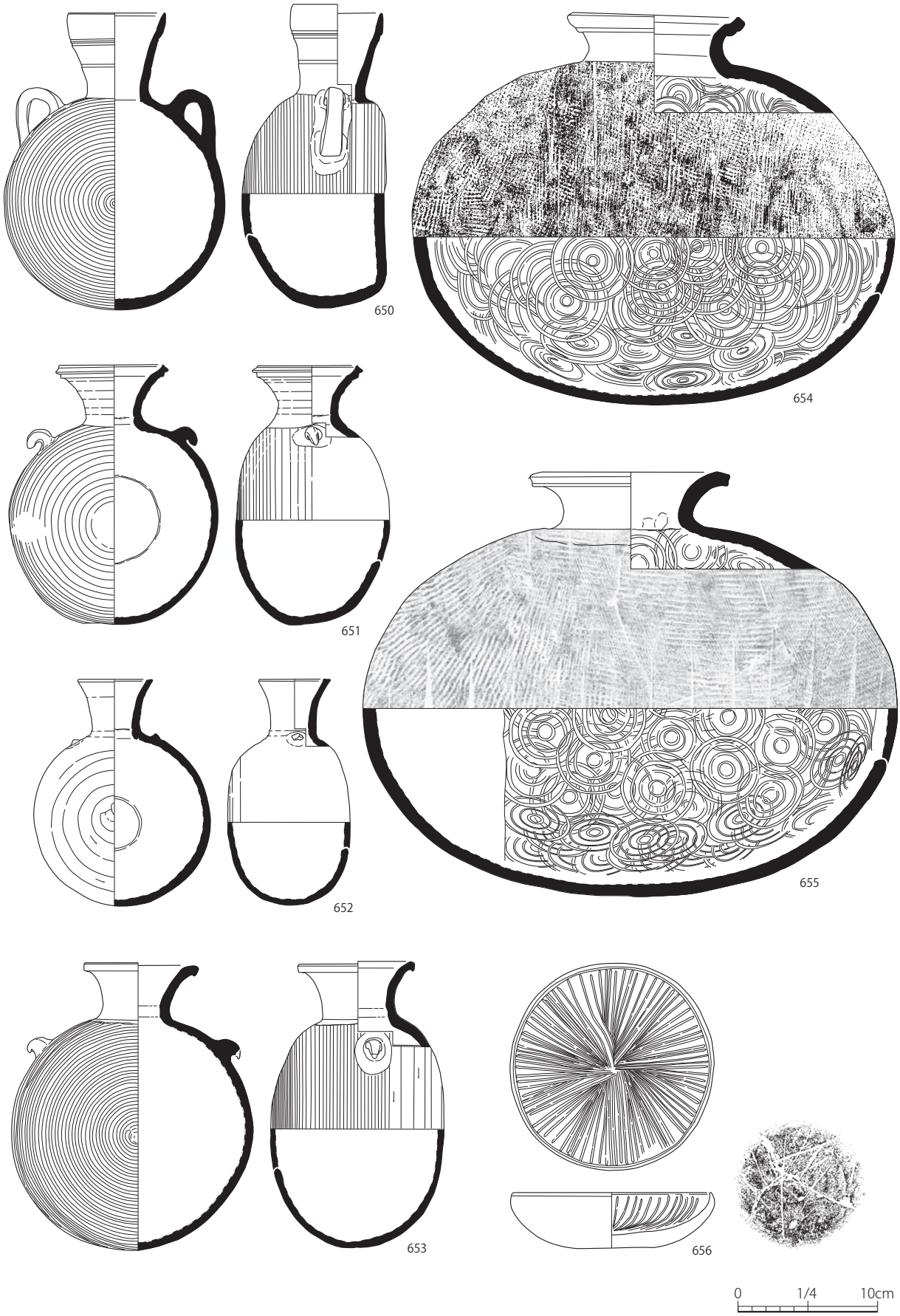
1 点（648）出土している。把手は残存しないものの、剥離痕跡から把手がついていたことが分かる碗である。底部から立ち上がり部分の器壁が 1cm 程度と厚く仕上げられている。それ以外の器壁は 0.4cm 程度である。底面はナデ調整で丁寧に調整されている。把手部分の剥離径は下が 1.2cm、上が 2.2cm 程度と上部分が厚く、把手間は 3.0cm であったことが分かる。口唇部の高さはほぼ水平だが、上から見るとゆがみが目立つ。剥離部分や断面は赤褐色（Hue 5YR4/6）を呈している。胎土は精緻。

・提瓶（第 121・122 図 649 ～ 653）

5 点（649 ～ 653）出土している。650 のみ胎土に白色粒子を含まないが、他は直径 0.5mm から 2mm 程度の白色粒子を多く含んでいる。

649 は体部の一側面を平坦にし、もう一面には丸みをもっている。体部の丸みをもった面の内側には 7cm 程度の穴を粘土板でふさいだ痕跡が確認できる。一方、平坦な面も粘土板から粘土の積み上げが開始されている。また、体部全面に 1cm あたり 7 本程度のカキメが施される。肩に環状吊り手が 2 箇所つく。頸部から口縁部は大きく外反し、口唇部外面に一条の沈線を有する。また、口頸部と体部との接合の際にヨコナデが施され、その際に器面が若干へこんだように観察される。

650 も形態、体部の成形方法は 649 と同じである。カキメは 1cm あたり 5 本程度とやや粗い。肩部の環状吊り手は平らな粘土板を上方に吊り上げるように取り付けている。



第 122 図　須恵器・土師器実測図

口頸部は外反せず直線的に立ち上がり、口唇部付近は内湾する。口縁部外面には、頸部から 2.3cm、4.0cm の箇所にそれぞれ沈線が認められる。

651 は一側面が若干平坦なものの、両方ともやや丸みを持っている。全体的に歪な形態である。平坦な側のカキメは観察されるものの、粘土板で孔を塞いだ側の外面にはカキメがほぼ確認されない。加えて、カキメも 1cm あたり 3 から 4 本程度とかなり粗い。肩部には鉤状の吊り手がつくものの作りが粗雑である。頸部から口縁部は外反し、端部に沈線を有する。口唇部は摘み上げているものの精緻さがない。

652 はやや小型の提瓶である。両側面ともにやや丸みを持っているものの、どちらかというと粘土板で孔を塞いだ側の方が平らである。カキメはなく、回転台を使って成形された側に回転ヘラケズリが認められるのみである。肩部の吊り手は浮文が付くのみである。頸部は細く、やや外反する。口唇端部は平らに調整されている。

653 は 649 や 650 と同じような形態・調整を施している。ただし、平坦な部分は回転ヘラケズリ調整された後にその面にはカキメが施されない。丸みをもつ側には 1cm あたり 7 本程度のカキメが施される。肩部にはやや幅のある鉤状の吊り手がつく。

・横瓶（第 122 図 654・655）

2 点（654、655）出土している。

654 は俵形の胴部に短い口縁部がつく。胴部の長軸を立てた状態で輪積みされており、その際に底部になった部分と胴部部分の内面にはいずれも同心円状の当て具痕が残るが、大きさがやや異なる。頂部に開いた孔は粘土板で塞がれ、その後、口縁部を取り付けるために側面にあけた穴を利用して頂部内面に当て具を入れ外面のタタキが行われる。外面のタタキは格子目状である。タタキ目の上に幅の広いカキメが施される。胎土には直径 0.5mm から 2mm 程度の白色粒子を多く含む。

655 の製作技法も 654 と同様である。胴部長軸を立てた際の底部内面には当て具の痕跡は認められない。また、外面のタタキは格子目ではなくスジ状で、粘土板で塞がれた側部分のみ丁寧なカキメが施されている。胎土には直径 0.5mm から 2mm 程度の白色粒子を多く含む。

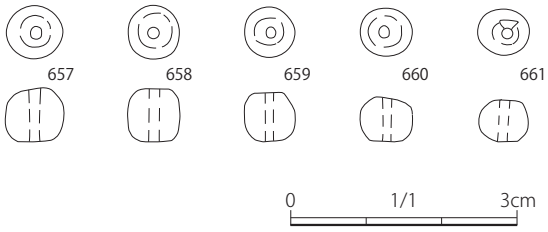
土師器

・坏（第 122 図 656）

石室内から出土した唯一の土師器である。底部はやや平底で外面に木葉痕が残る。底部からやや内湾しながら口縁部に至るが、全体的に器壁が厚い。見込み部には放射状のヘラミガキが比較的丁寧に施されている。口径 14.2cm、器高 4.0cm、底部径 5.5cm を測る。

須恵器から出土した丸玉（第 123 図 657 ～ 661）

645 の須恵器の短頸壺の中から出土した。周囲から同様の丸玉 110 点（76 ～ 185）が撒かれたように出土している。ここでは出土状況の違いから供献具としたが、本来同一の性格の遺物である。大きさなどの特徴も前述のとおりである。



第 123 図　丸玉実測図

第３節　中原第５号墳

1．現況

中原第５号墳は、調査以前はその存在が確認されず、高まりなどは認識されていなかった。古墳は大淵扇状地上の緩斜面、標高 81.5m 付近に築造される。

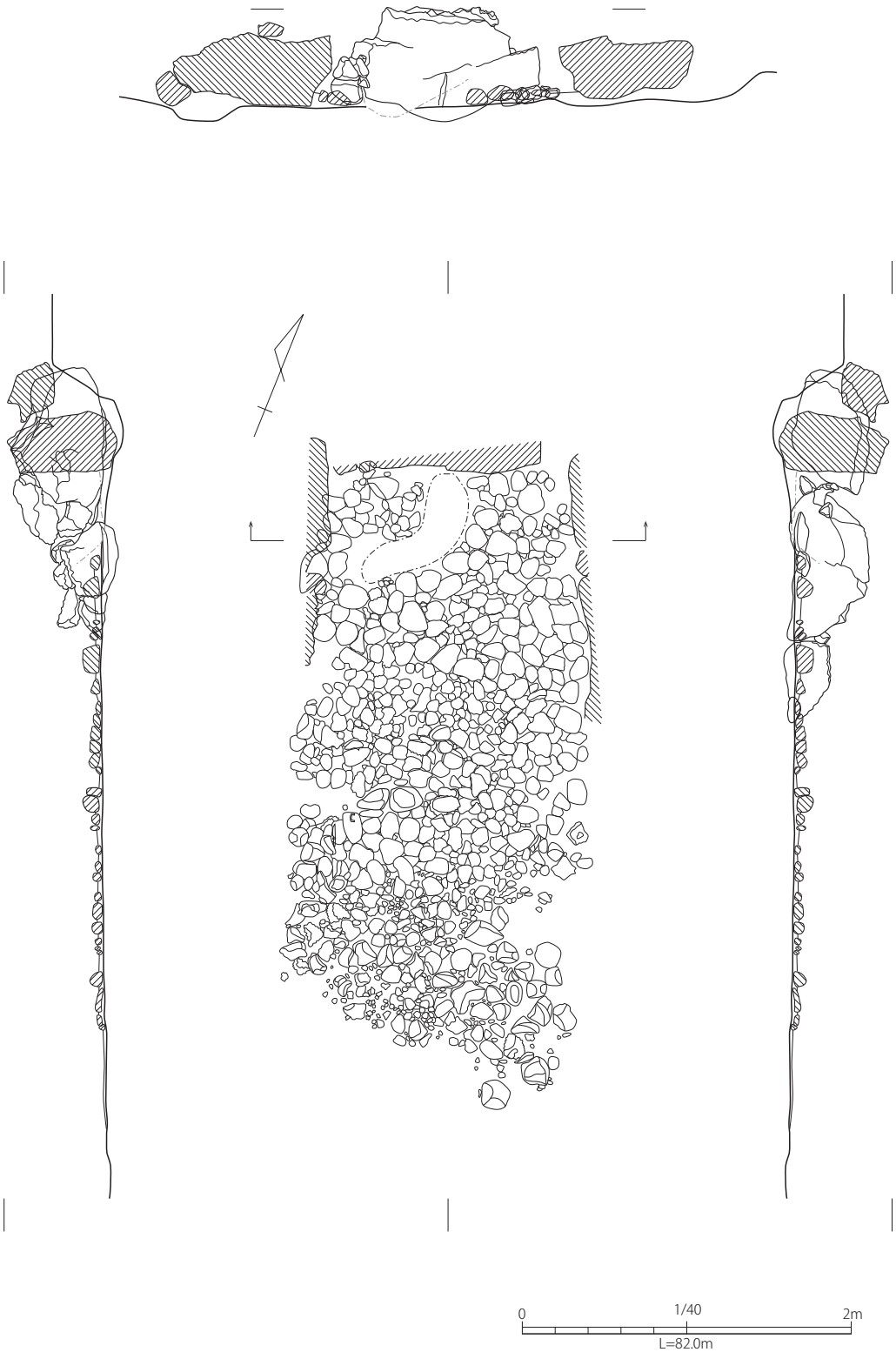
2．墳丘の構造

墳丘　後世の土地改変などにより失われており、一部横穴式石室の裏込め埋土が残存するのみであった。

周溝　周溝は石室の西側から北側にかけてと南側の一部で検出されたのみで、他の場所については、削平により検出する事が出来なかった。

復原される墳丘規模は周溝内側で東西 9.14m、南北 9.17m、周溝を含めた総長は東西 10.58m、南北 10.31m を測る。石室南側が残存しない為、墳丘中心点と石室中心との関係は明らかでない。

第 124 図　測量図



第 125 図　石室展開図（第 1 次床面）

3. 埋葬施設の構造

埋葬施設は南南東に向かって開口する横穴式石室であるが、奥壁と側壁 2m 程度しか残存せず、詳細は明らかではない。主軸方位はN－ 158° －Eである。

墓坑　墓坑は山側の奥壁側のみ残存しており、幅約 3.85m を測る。

石室　玄室平面形は長方形で、胴張りはないと思われる。奥壁 1 石、右側壁の基底石 2 石、左側壁の基底石 3 石のみが残存するのみである。基底石の据え方が検出されており、そこから推定すると、玄室長 4.23m 以上、玄室幅 1.45m（奥壁）を測る。仮に墳丘の中心点が石室中心点と一致した場合は、石室全長 5.4m に復元されるが、奥壁がやや周溝に近い様にも見える為、それほど大きくはならないと思われる。

奥壁・側壁　奥壁は、幅のある大型の石材を配置する。現状で観察される墓坑の掘り込み面よりも、奥壁上端が高くなっており、奥壁の控えの石材が、墓坑の上端にのる様にして奥壁を支えている。

第 126 図　石室平面図・断面図（第 2 次床面）

側壁の基底石の大きさは一定せず、右側壁の１石は長さ 95cm、左側壁の奥壁より２石はそれぞれ 115cm、135cm を測るにもかかわらず、残る基底石は 75cm と明らかに小型の石材を使用している。検出された基底石の据え方の大きさから、他の基底石も小型の石が使用された可能性が高い。

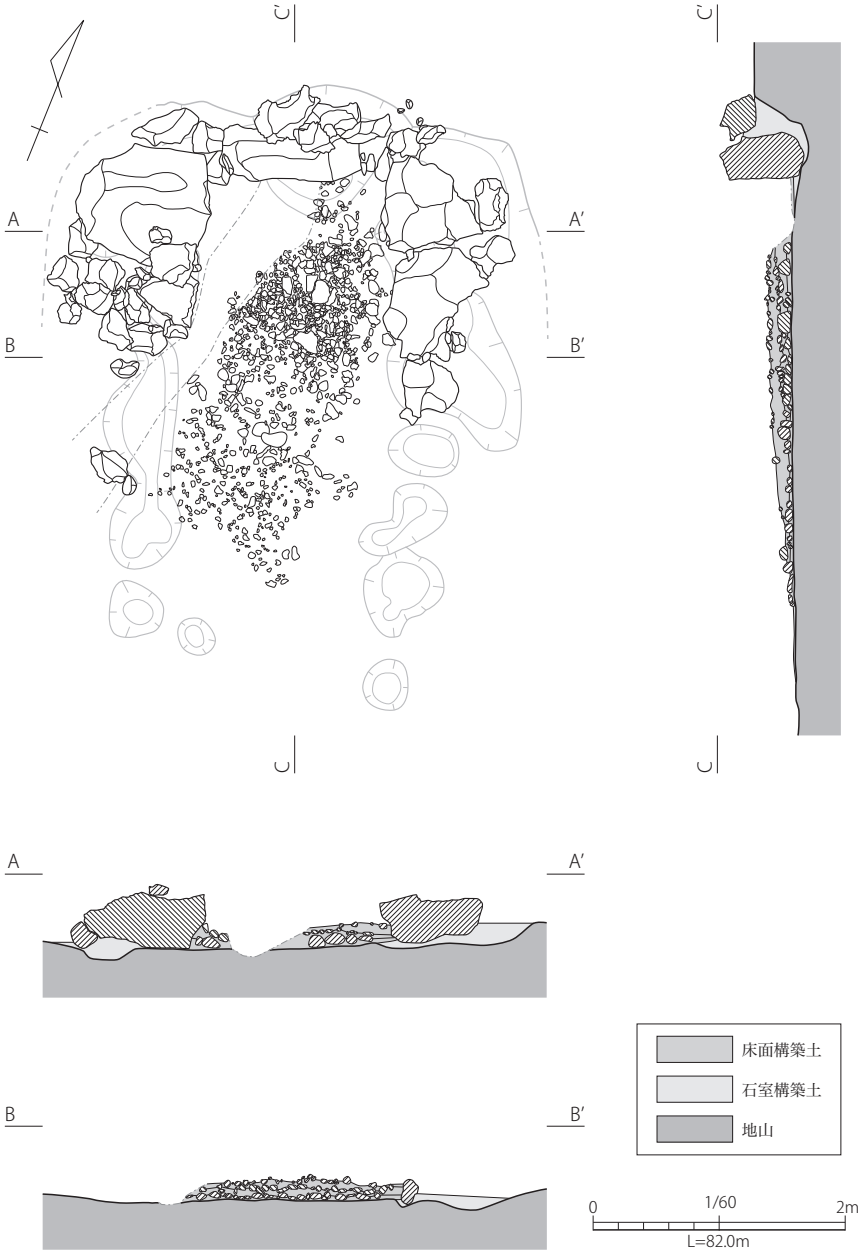
床面　奥壁付近において撹乱が存在し、床面が破壊されている以外は、側壁残存範囲よりも広い範囲において床面を確認する事が出来た。

調査時の所見では上層（第３次床面）、中層（第２次床面）、下層（第１次床面）の３面が存在する。

第１次床面は奥壁側約 3.9m の範囲に認められる。奥壁より 1.95m 付近の仕切石を境にして、使用する石材が異なることから、それより北側に被葬者が埋葬されたものと考えられる。

第２次床面は、第１次床面の奥壁側約 1.95m の範囲（仕切り石より奥）にのみ、床石を新たに敷き直している。

第３次床面は、奥壁側は比較的細かな床石が認められたが、入り口側においては上面が削平されている影響もあり、奥壁から 3.1m 分が残存するのみである。



第 127 図　石室平面図・断面図（第３次床面）

4. 副葬品出土状況

石室内からは5点の遺物が出土しており、そのうち4点の出土位置が明らかとなっている。いずれも第1次・第2次床面の仕切石より入り口側からの出土である。

床石の入口側は、第1次床面と第2次床面で床面を共有している事から、いずれの遺物も初葬時の遺物なのか、追葬時の遺物なのかは、判断できない。刀子（1）、鉄鏃（2）が石室中央より右側壁付近より、また、須恵器壺（4）、土師器坏（5）は、残存する床面のうち最も開口部に近い場所からまとまって出土している。

第128図　刀子（1）の出土状況

5. 副葬品

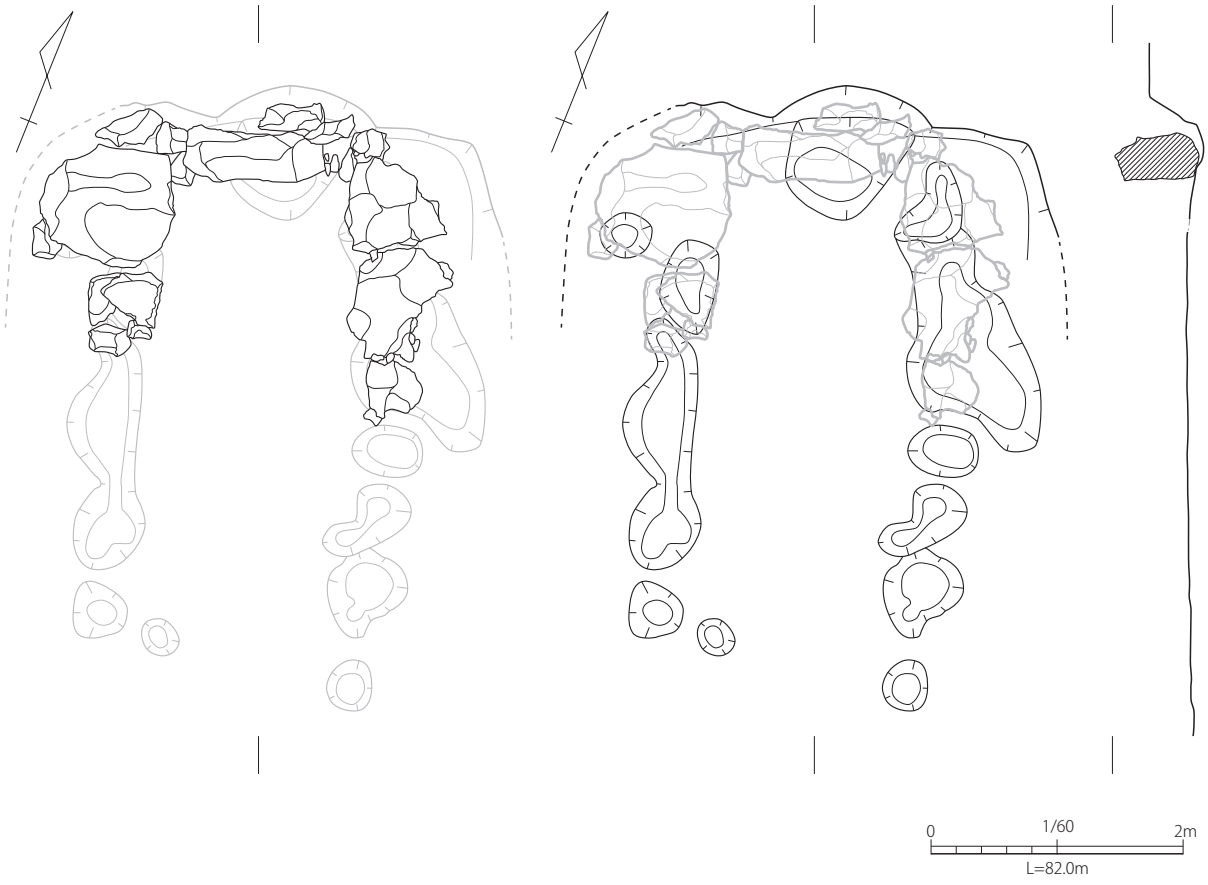
石室内より刀子1、鉄鏃1、須恵器2、土師器1が出土している（第131図）。4の壺は遠江Ⅳ期に位置づけられ7世紀後半の年代が与えられる。

1は茎の一部が欠損する刀子である。残存長12.2cm、関幅1.1cm、刃部長9.2cm、刃部幅1.1cm、茎部残存長3.0cm、茎部幅0.7cmを測る。関は直角片関で茎は直線的に茎尻に向かう。茎には木質が残存する。身部は幅が狭く、棟側は反りがなく、刃側はやや反りながら切先にいたる。

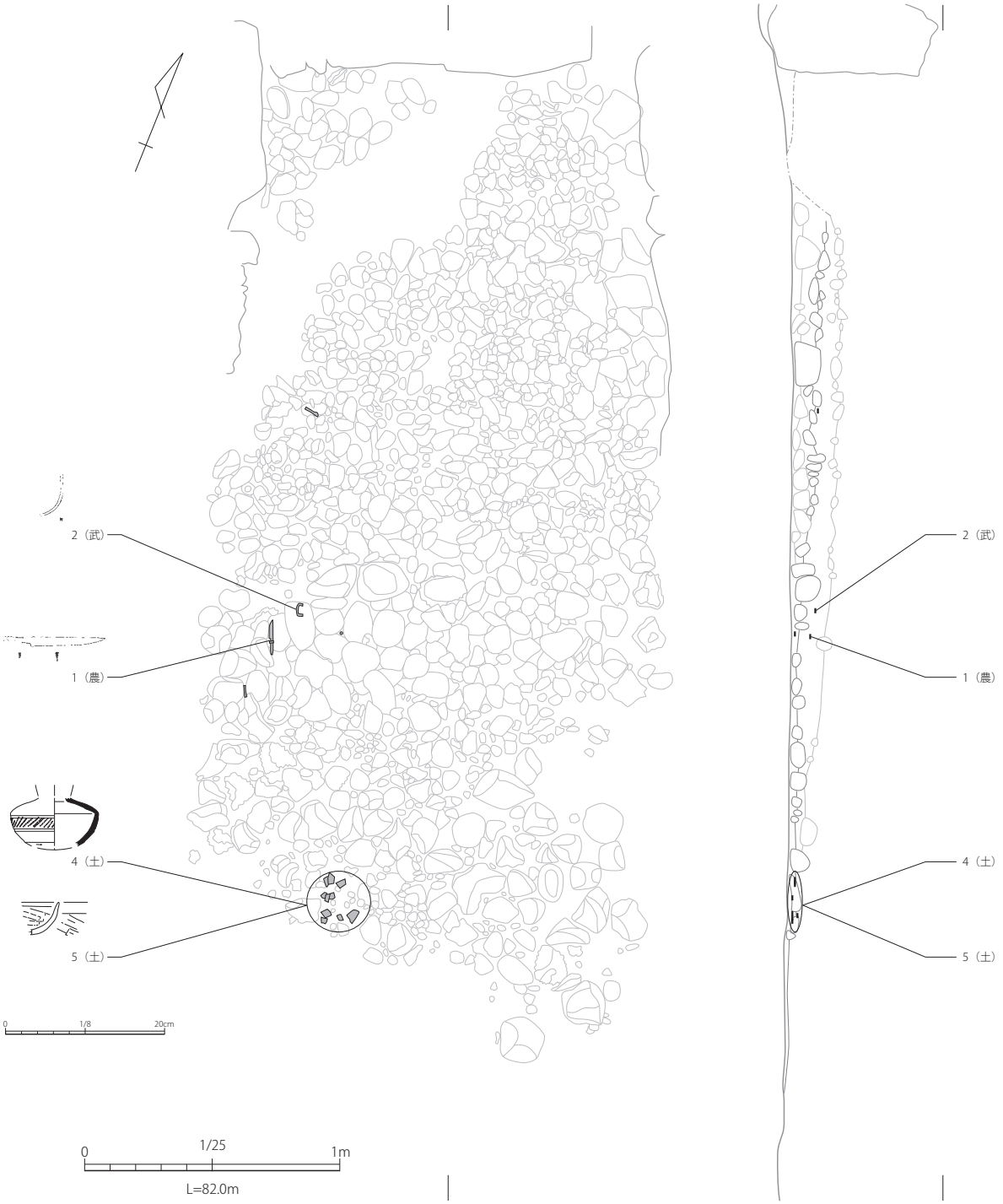
2は鉄鏃の茎部と考えられる。弧を描くように曲げられている。断面は四角形で、幅0.3cmを測る。

3は須恵器蓋、4は壺の破片である。4は算盤玉形の体部の破片で底部ヘラケズリで二条の沈線を有する。沈線間には櫛歯状の刺突をもつ。最大径11.0cmを測る。

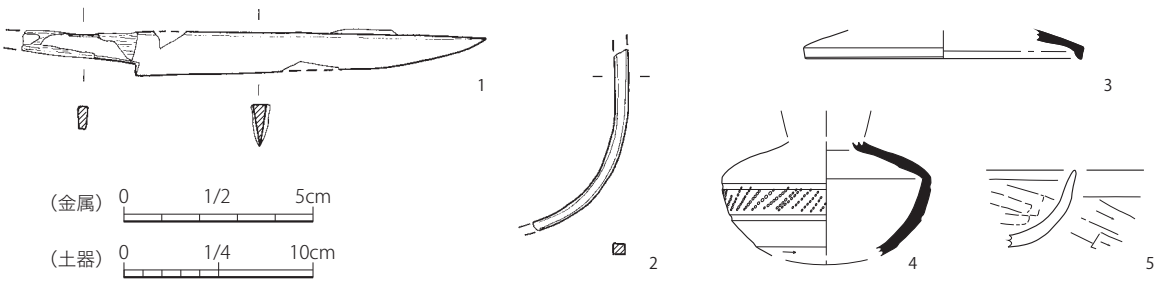
5は土師器坏の破片である。口縁部が薄く直線的に立ち上がる。外面はヘラケズリの後、ミガキは施されない。内面はナデの後、ミガキが施されている可能性が高いが、不鮮明である。



第129図　石室基底石・基底石据え方・墓坑実測図



第 130 図　石室遺物出土状況図



第 131 図　刀子・鉄鏃・須恵器・土師器実測図

第４節　中原第６号墳

1. 現況

中原第６号墳は、調査以前はその存在が確認されず、高まりなどは認識されていなかった。古墳は大淵扇状地上の緩斜面、標高 83.5m 付近に築造される。

2. 墳丘の構造

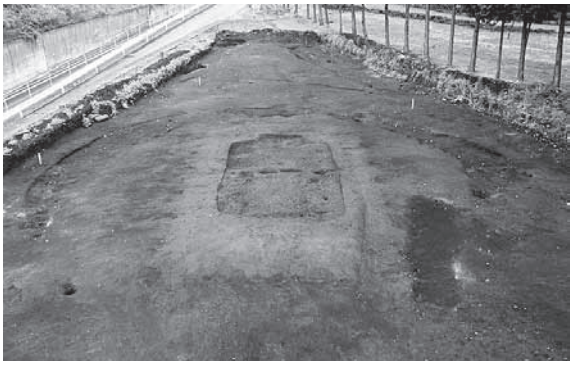
墳丘　土地改変などにより大部分が失われており、一部、横穴式石室の裏込め埋土が残存するのみであった。

周溝　周溝は、南側の一部を除いて存在するが、全周していたかどうかは明らかではない。西側の周溝上端幅は 1.69m、下端幅 0.59m、東側の上端幅 1.83m、下端幅 0.93m、北側の上端幅 1.41m、下端幅 0.83m を測る。墳丘規模は、周溝の内側では東西 11.05m、南北推定 10.56m、周溝を含めた総長は、東西 14.68m、南北推定 13.31m を測る。墳丘の中心点は、墓坑の中心にほぼ一致している。

周溝出土土器　須恵器３点が出土している（第 136 図）。１は甕の口頸部の破片である。頸部より口縁部にいたる。口縁部外面には幅の広い折り返しをもつ。外面にカキメ状の調整が施されている。また、カキメの上に二条１対の沈線が２対あり、櫛描波状文を有する。

２は瓶の頸部から口縁部の破片である。頸部は細く筒状を呈する。内外面にみられる斜め方向のシワは絞りの痕跡と推測される。口縁部は二段階に外反するが、口唇部を欠損する。胎土に白色粒子はまったく含まず、全体的に薄い灰色の土で作成されている。

３は長頸壺の底部の破片である。回転台で成形後、ヘラにより切り離し、高台をつけている。内面にノタメ痕跡が明瞭に残る。胎土に白色粒子は含まない。



第 132 図　周溝完掘状況

3. 埋葬施設の構造

埋葬施設は南南東に向かって開口する横穴式石室と考えられるが、墓坑と基底石の据え方、床面の一部が残存するのみである。主軸方位はＮ－ 161° －Ｅである。

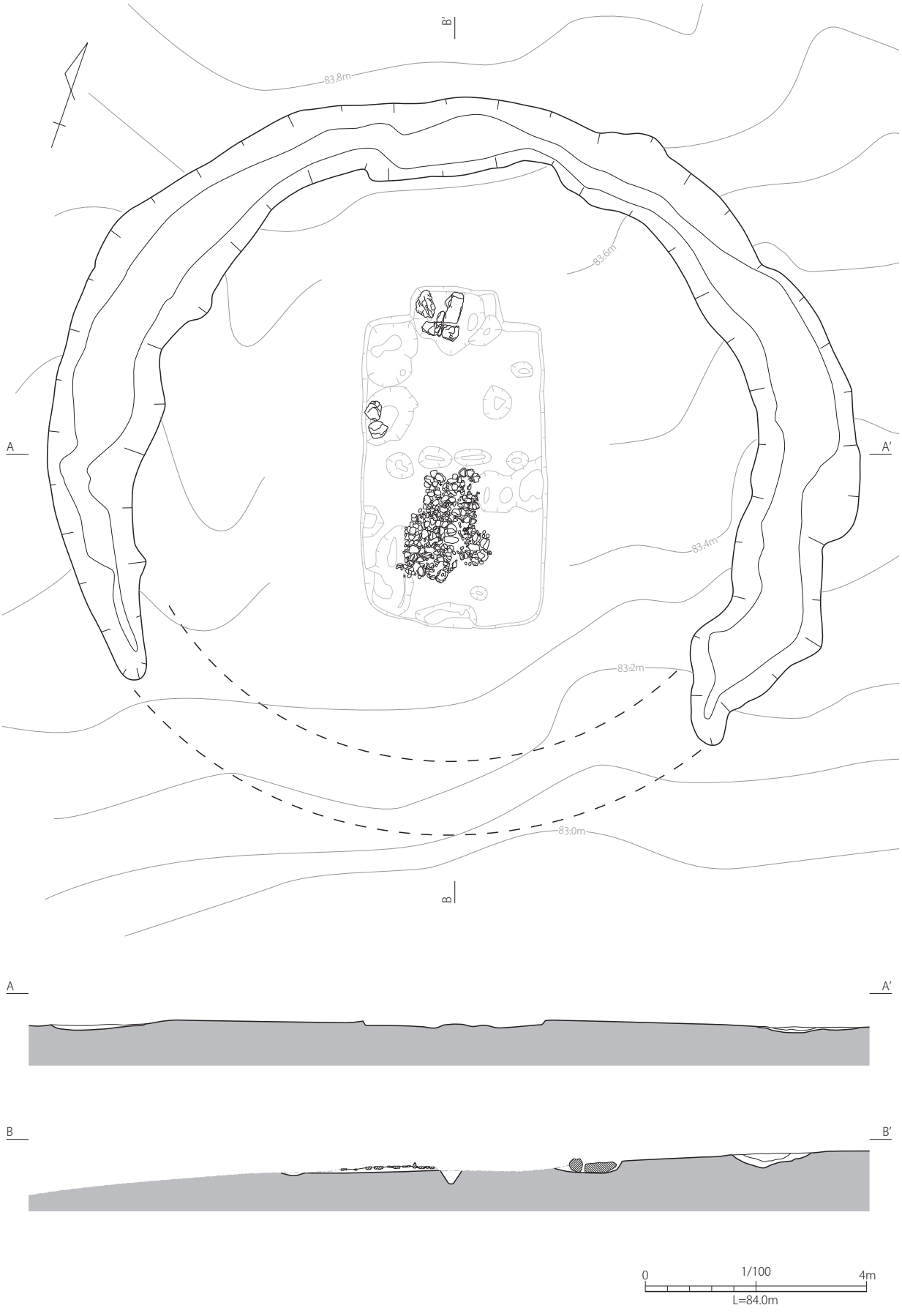
墓坑　墓坑は隅丸方形で、奥壁の部分のみが張り出して掘削されている。

規模は、幅 3.31m、長さ 6.17m、深さ 14cm を測る。奥壁部分は幅 1.63m を測る。

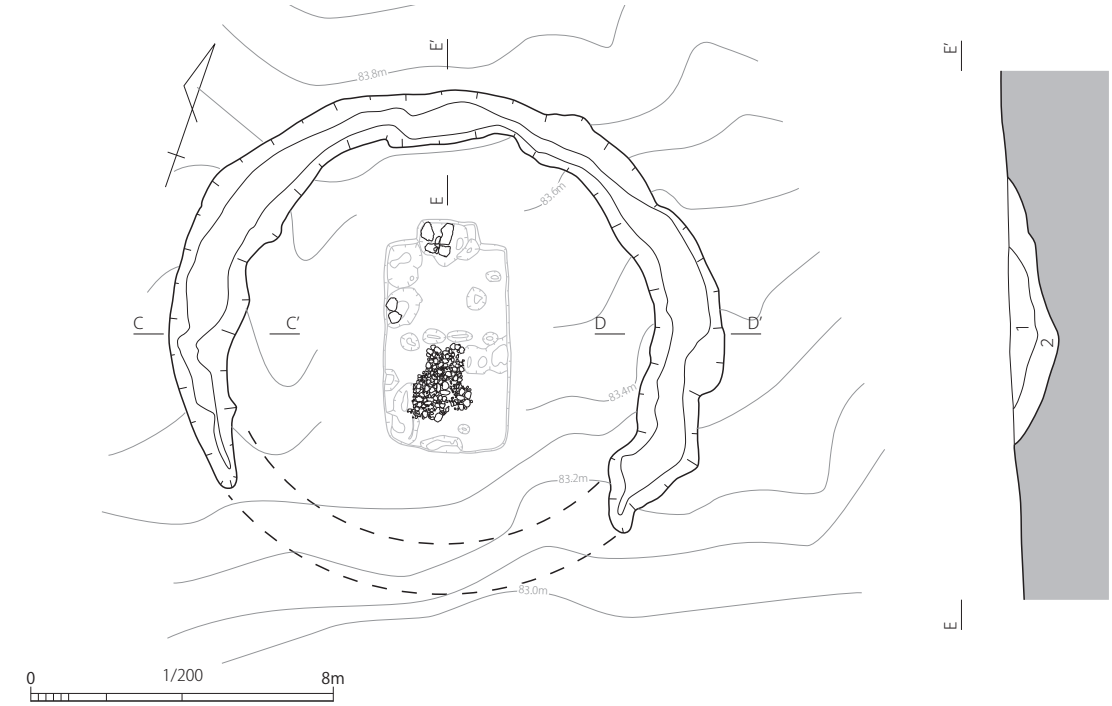
石室　石室石材がほとんど残存しない為、基底石の据え方などから大きさ、構造を復元していく事とする。まず構造は、墓坑の南端に 1.1m×0.45m の楕円形の掘り込みが存在する事から、框石としてやや大型の石材を立てておいた段構造を有する横穴式石室の可能性が高い。全長は奥壁の据え方内部の石と前述の南端の掘り方間で、4.73m を測る。幅は側壁基底石の据え方から 1.18m 程度と考えられる。

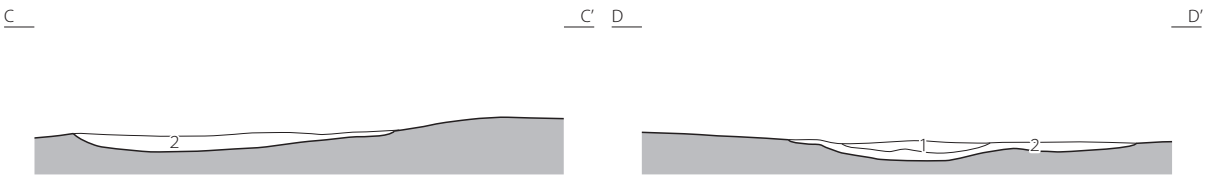
奥壁掘り方から 1.89m の場所に 0.39m×0.61m、0.28m×0.67m の２つの掘り込みが確認されている。これは玄室内部の仕切石の据え方と考えられる。この仕切石と考えられる据え方よりも南側にのみ、床石と考えられる面が残存し、北側には床石は残存しない。墓坑南端の框石の据え方と、残存する床石との間に、本来、床石が存在したのか、元から、その間の 30cm 程度には床石が敷かれなかったのかは不明である。

第 133 図　石室の残存状況

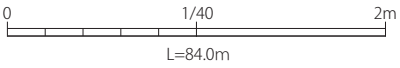


第 134 図　測量図

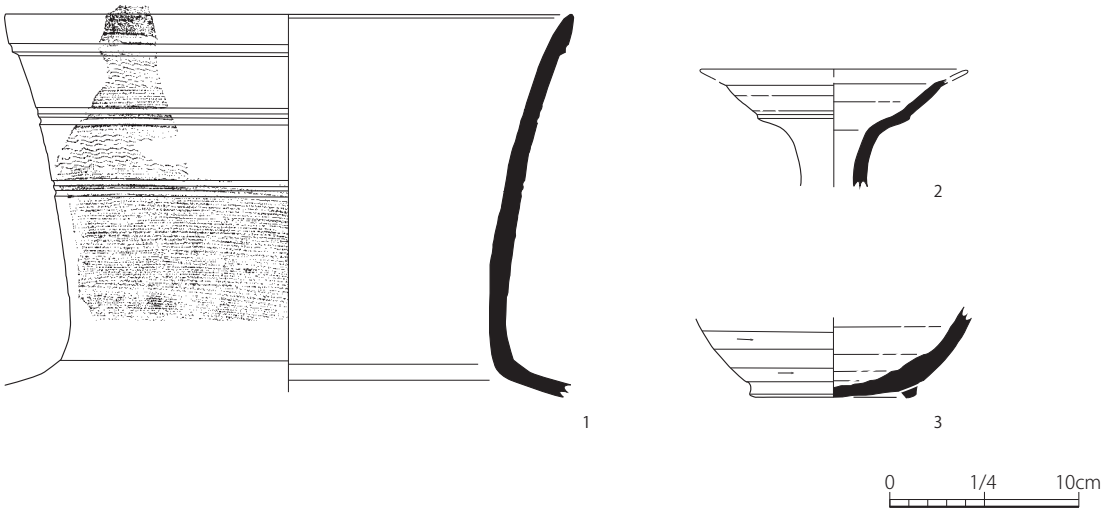




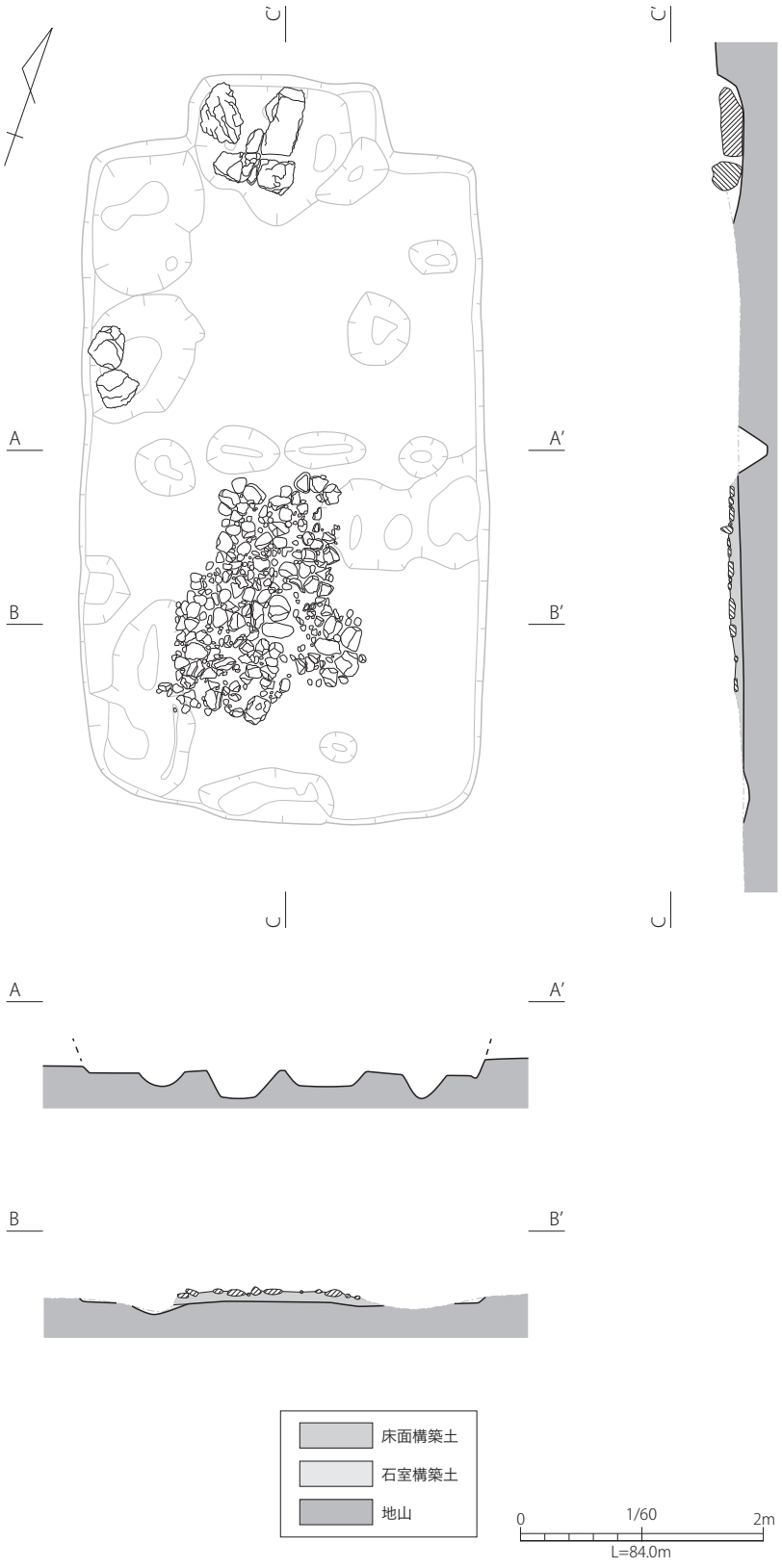
1 暗褐色土　しまりあり、粘性なし。
　赤色スコリア少量、白色スコリア極微量含む。　周溝覆土
2 黒褐色土　しまりあり、粘性なし。
　赤色スコリア多量、白色スコリア・炭化物粒極微量含む。周溝覆土



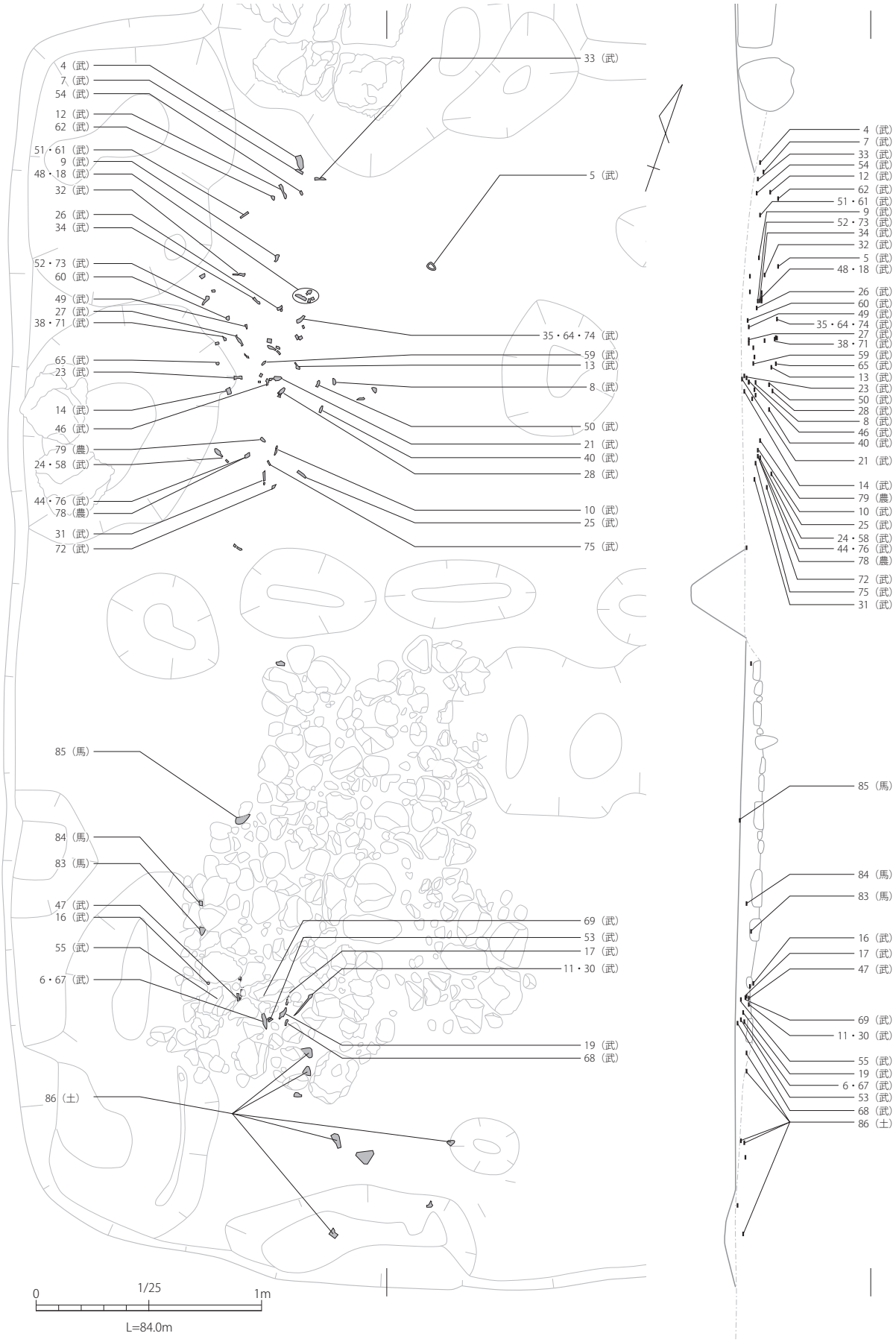
第 135 図　周溝平面図・断面図



第 136 図　周溝内出土遺物実測図



第 137 図　石室平面図・断面図



第138図　石室遺物出土状況図

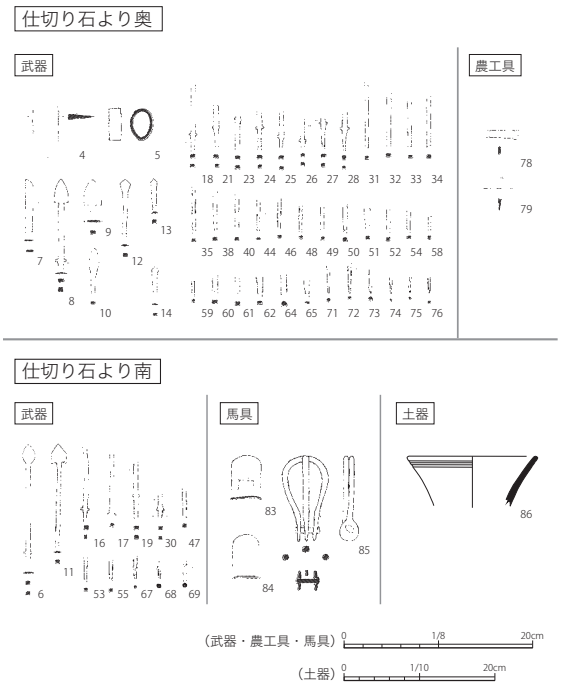
4. 副葬品出土状況

石室内からは、図化しただけで 83 点の遺物が出土している。石室石材が残存せず、床面も一部しか残存しなかったにも関わらず、多くの遺物が出土したと言える。

前述の仕切石と考えられる掘り込みより奥壁側には、床石が残存しなかった事から、このエリアから出土した遺物は全て原位置を留めていないと判断できる。それでも大刀（4）が 1 振存在した事が分かる。

仕切石より南側には、床石が存在したが、そこから出土した遺物のうち原位置を留めているものがあるかは判断出来ない。右側壁付近から、鉸具などの馬具（83 ～ 85）が比較的まとまって出土し、南西コーナー付近から鉄鏃が出土している。

第 139 図　馬具（85）の出土状況



第 140 図　出土遺物一覧図

5. 副葬品

構成　副葬品は大刀 1、刀装具 1、鉄鏃 18（関から想定される数）、農工具（刀子）最低 2、馬具 3（帯金具 2、鉸具 1）、土器（須恵器提瓶）1 で構成される。

年代　年代決定の根拠となる遺物の出土に乏しいが、鉄鏃の形態などから 7 世紀と考えられる。

武器

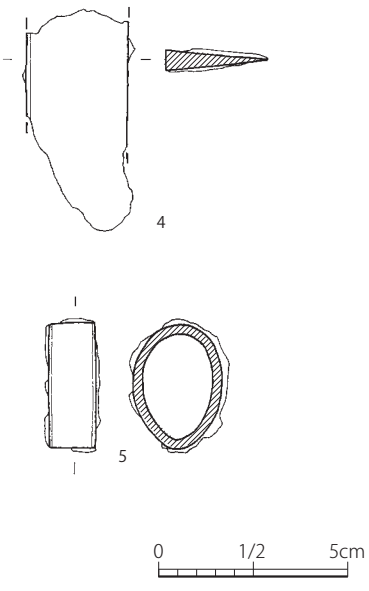
大刀（第 141 図 4・5）

4 は大刀の刀身部の破片と考えられるが、長さ 5.8cm が残存するのみである。刀身幅 2.7cm、棟厚 0.55cm を測る。5 は鏨で断面倒卵形、長さ 1.2cm、断面の長軸 3.3cm、幅 2.3cm を測る。サビの状態から銀装の可能性がある。

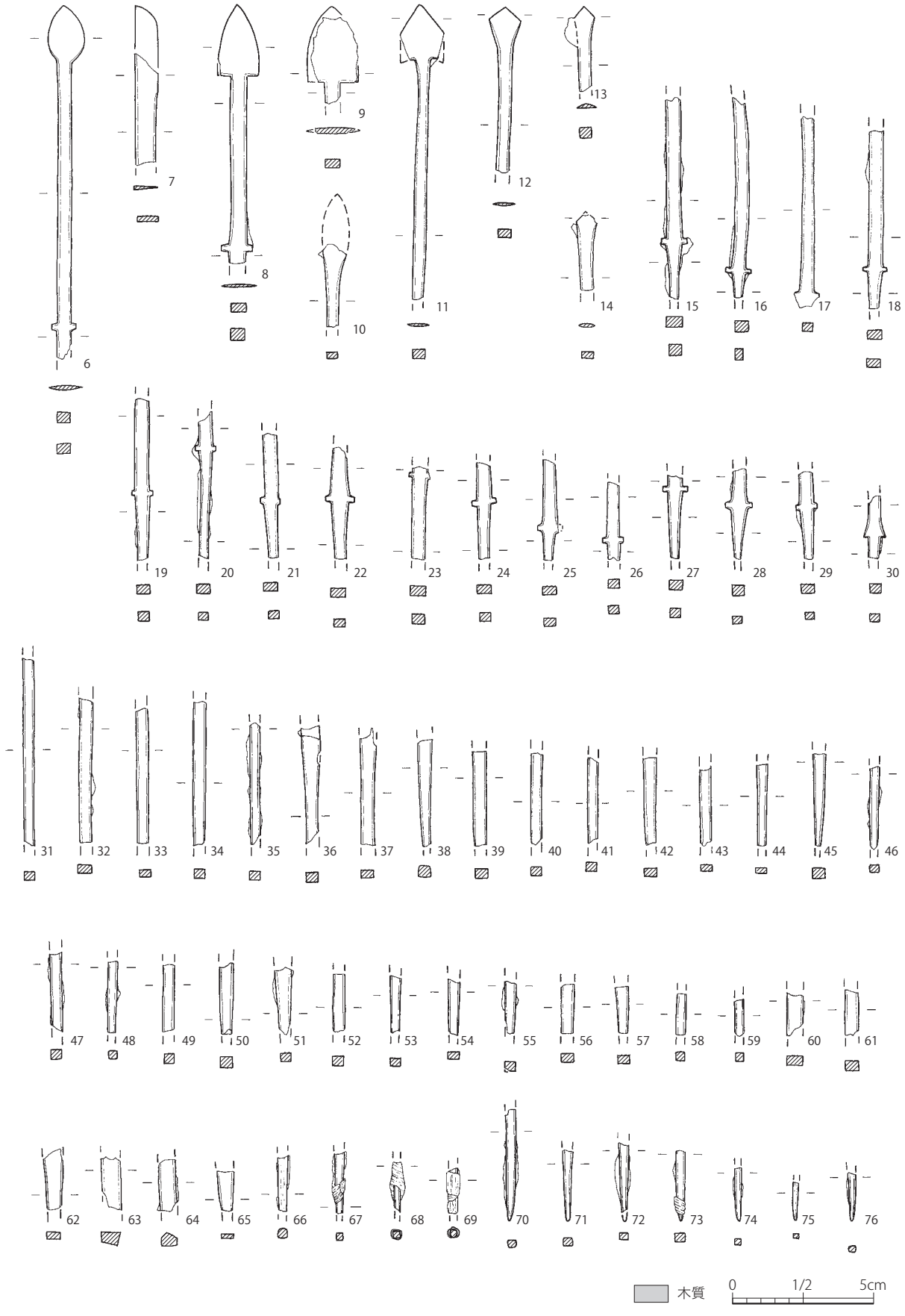
鉄鏃（第 142 図 6 ～ 76）

形式が明らかなもので尖根柳葉式 1（6）、尖根片刃箭式 1（7）、尖根三角形式 2（8･9）、尖根五角形式 1（11）、尖根片刃箭式 3（12 ～ 14）がある。10 は三角形式の可能性が高いが保留する。

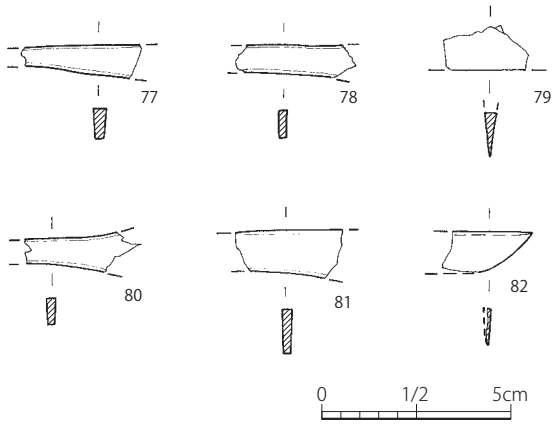
6 は茎部が欠損するものの比較的、良好に遺存する。鏃身先端部から膨らみながら弧を描きそのまま鏃身部関に至る。両丸造りである。頸部は直線的で細い。茎関は棘関である。残存長 12.5cm、鏃身部長 2.0cm、鏃身部幅 1.25cm、頸部長 9.5cm、頸部幅 0.5cm を測る。



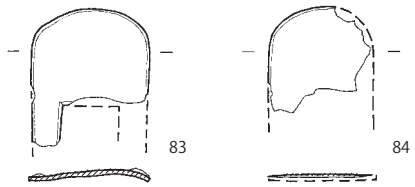
第 141 図　大刀実測図

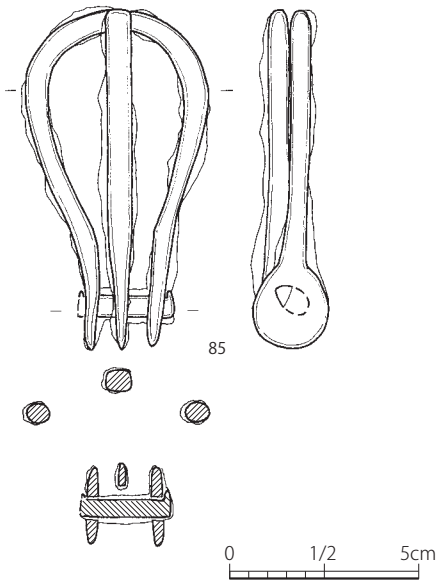

6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
木質
0
1/2
5cm

第142図　鉄鏃実測図

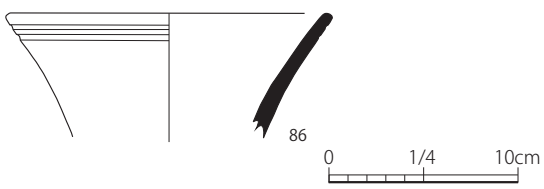


第 143 図　刀子実測図





第 144 図　帯金具・鉸具実測図



第 145 図　須恵器実測図

7 は鏃身部の大部分が欠損するものの、鏃身部関の形状などから片刃箭式とした。

8・9 は三角形式で、先端部から弧を描きながら鏃身部関にいたる。関部幅は 1.4cm を測る。頸部は直線的で 6.2cm とさほど長くはない。茎部関は棘関である。

11 は五角形式と推測されるが鏃身部の遺存状態が良好でない。頸部は 8.5cm 以上ある。

12 から 14 は鏑箭式で 12 は 13・14 に比べてやや大きい。12 は幅 1.1cm、13・14 は 0.7cm 程度である。

15 から 76 は頸部から茎部の破片である。茎関が残存するもので棘関が 15 点(15 ～ 29)、台形関が 1 点(30)である。

農工具

刀子（第 143 図 77 ～ 82）

破片が 6 点出土している。77・78・80・81 が茎部、79、82 が刃部の破片である。79・82 が別の個体と考えると 2 本以上が存在したことになる。

馬具（第 144 図 83 ～ 85）

83・84 は一辺が半円の爪形を呈する帯金具である。83 には方形の透かしが認められる。83 は幅 3.1cm、穿孔幅推定 1.6cm を測る。

鉸具が 1 点（85）出土している。一本の鉄棒を円形に曲げ開放している外枠に棒状の刺金と軸棒を装着している。軸棒は刺金と外枠を貫通し外側でかしめられている。貫通する部分の外枠は直径 2.0cm 程度の円形をなす。鉸具長 9.0cm、基部幅 2.0cm、尻幅 4.8cm を測る。

土器

須恵器（第 145 図 86）

86 は壺の破片とした。直線的に延びる口縁部で二条の沈線が認められる。胎土には白色粒子を全く含まない。口径 16.7cm に復元される。

第４章　考　察

第１節　伝法古墳群の展開と地域社会の成立

佐藤 祐樹

はじめに

中原４号墳は富士山南麓の伝法沢に所在する古墳時代後期後半（6 世紀後半）の横穴式石室墳である。石室は未盗掘であったことから出土した鍛冶具や農具を始めとした生産用具などの副葬品組成は被葬者の職掌を考えるうえで貴重な調査資料となる。また、駿河東部地域における横穴式石室導入期の古墳であることからも古墳が造られた時期の地域社会の状況を考えるうえでも貴重な資料となっている。

そのため、本稿では中原４号墳を含む伝法古墳群の展開を再確認（藤村 2011b）するとともに、古墳が築造された前後の時期における集落形成を整理し、古墳築造と集落の消長との関係を把握することを目的とする。集落形成についての対象は５世紀後半以降 11 世紀前半までとした。

伝法古墳群の範囲に一部重なる東平遺跡は駿河国富士郡家と位置づけられており、郡司層が関わった郡家周辺寺院「三日市廃寺跡」（法照寺か）の存在も知られている。そのため、集落景観の復元と古墳築造の様相を対比することは７世紀以降の地域社会を考える上で有効な方法と考えられる。

第 146 図　伝法古墳群周辺遺跡分布図

1　伝法古墳群における古墳

(1) 伊勢塚古墳

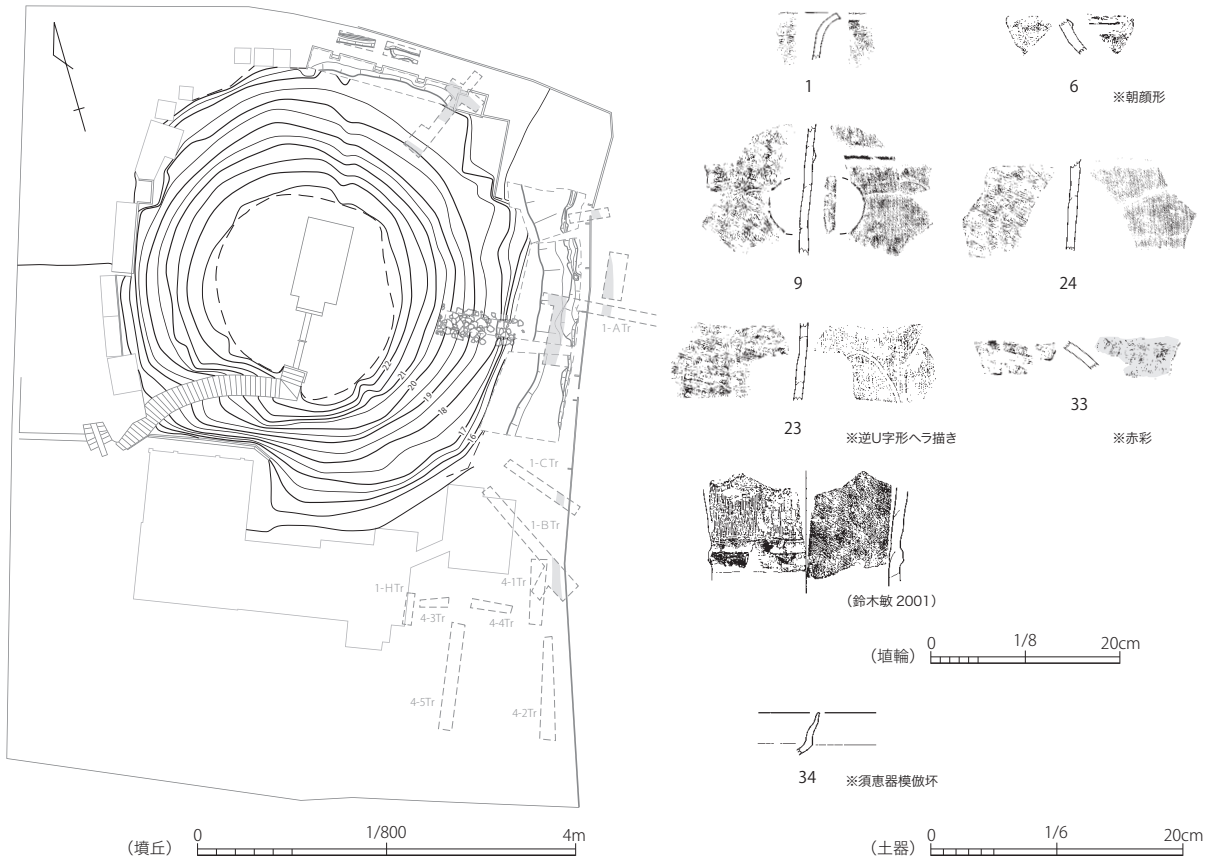
富士火山地の南麓斜面（大淵扇状地）の傾斜が緩やかになる変換点付近に立地する大型古墳である。墳丘についてはこれまで3回にわたる調査（第1次・2次・4次）が行われている。昭和33年に後藤守一氏を中心に行われた第1次調査では、墳丘形態の確認を目的にし、昭和55年の第2次調査は墓地造成に伴い、また平成12年の第4次調査では庫裡改築にともないそれぞれ発掘調査が行われた。

第1次調査では円墳でありながら「盾形周溝」が存在するとされているものの（吉原市 1958）、第2次調査では帆立貝形前方後円墳の可能性が指摘され（富士市教委 1983）、また、『静岡県の前方後円墳』では、造り出し付き円墳の可能性が指摘されている（静岡県教委 2001）。藤村も述べるように帆立貝形前方後円墳や円墳という墳丘形態は、現状では追認できない「盾形周溝」を根拠に導き出されたものであり（藤村 2012）、造り出し部（前方部）の存在を想定している寺院本堂の調査を行っていない現状や、かつての測量図や航空写真において円丘以外の存在の確認が出来ない状況では、円墳としておくほかない。

墳丘の大きさは第1次調査において直径54m、高さは南では8m、北側では6mとされており、それを踏襲する。埋葬施設は不明。墳丘からは円筒埴輪のほか、形象埴輪片が出土している。いずれも低位置突帯の埴輪であり、「関東系埴輪」とされている（鈴木 2001）。築造時期は、伊豆の国市多田大塚6号墳との類似や出土した須恵器模倣土師器坏からTK47型式期頃と想定されており（藤村 2012）、潤井川流域において初めて築造された首長墓と位置づけられる。

(2) 伊勢塚古墳周辺の古墳

伊勢塚古墳周辺は早い段階から宅地が進んでおり、かつてこの地域は「塚林」と呼ばれていたことからも（吉原市 1958）、かつて存在したと考えられる古墳が消滅していたり、また、新たに古墳が発見される例が数多く存在すると推測される。いずれも伊勢塚古墳より築造年代が遡る確実な古墳はないが、伝法古墳群の展開を考える上で重要と考えられるため、改めて古墳の存在について触れておくこととしたい。



第147図　伊勢塚古墳　墳丘実測図・出土遺物実測図

（a）コンニャク稲荷塚（伝法 A- 第 2 号墳）

伊勢塚古墳の北西約 190m の伝法小学校構内に現存する円墳。直径は 15m、高さ 1.1m を測る（吉原市 1958）。内部主体は横穴式石室で組合せ式箱式石棺があったとされており、さらに刀子、銀環、須恵器横瓶の破片が出土したとされている（静岡県 1930）。年代は明らかではないが 7 世紀前後と考えられる。

（b）九郎林塚（伝法 A- 第 3 号墳）

伊勢塚古墳の西約 140m にかつて存在した円墳で墳丘の大きさは明らかでない。過去に行われた発掘の聞き取りでは石で囲んだ幅 1m、長さ 3m ぐらいの室があったとのことで、竪穴式石室もしくは横穴式の小石室とも考えられる。大刀、「鍍金した轡鏡板」や須恵器（坩）が出土したようである。

（c）鏡塚（伝法 A- 第 4 号墳）

伊勢塚古墳の南東 50m にかつて存在したとされる円墳。埋葬施設等の詳細は明らかではないが俗称が示すとおり、かつて 1 面の鏡が出土したとされている。

（d）兜塚（伝法 A- 第 5 号墳）

伊勢塚古墳の北西 220m の場所にかつて存在したとされる円墳。地元の人によって発掘され、その際に、大刀、甲冑残片、須恵器破片が出土したとされており、注目される。

（e）中村上第 1 号墳

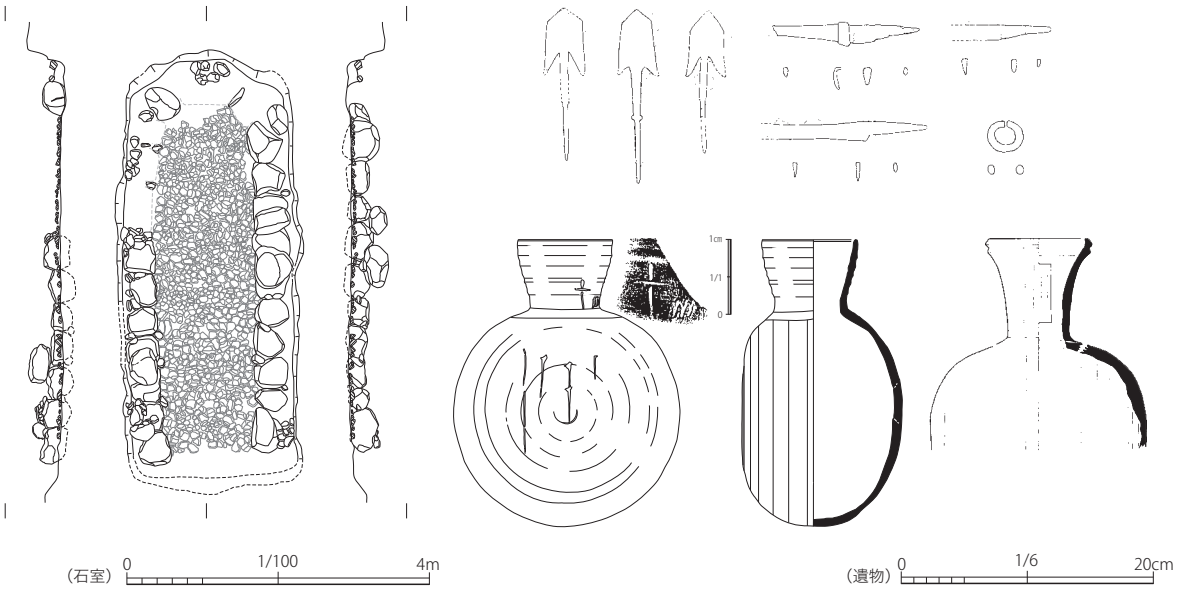
伝法小学校校舎改築に伴い平成 18 年に新たに発見された。上面が大規模に削平されており、墳形、大きさは明らかではない。埋葬施設は横穴式石室で残存長 4.76m を測る。遺物は銅製耳環 1、平根系鉄鏃 3、刀子 3、須恵器（フラスコ長頸瓶 1、提瓶 1）が出土している。7 世紀前葉から中葉と考えられる（富士市教委 2010）。

(3) 西平第 1 号墳

伊勢塚古墳の西 320m には当時の潤井川に合流する最大流路延長 12.65km、流域面積 10.38k㎡を測る「伝法沢川」と呼ばれる沢が存在する（富士市 1986）。この沢沿いに中原第 3・4 号墳や後述する横沢古墳などが存在する。西平第 1 号墳は伝法沢の東 160m、伊勢塚古墳から見ると北北西 800m の大淵扇状地上に立地している。

西平第 1 号墳は昭和 54 年、墓地改修中に偶然発見されたため、緊急で富士市教育委員会による発掘調査が行われている（富士市教委 2003）。調査範囲が横穴式石室の一部（開口部側）のため、全体の大きさは明らかではないが、長さ 3.2m、幅 1.2 ～ 1.32m が検出されている。注目されるのは出土した遺物の内容であり、須恵器の瞿 2、坏 1、長頸壺 1 に加え、大刀 1、蕨手刀 1、腰帯具（巡方 4、丸鞆 4、蛇尾 1）が出土している。築造は出土遺物から 8 世紀第 1 四半期が想定される。

周辺では平成 8 年に西平第 2 ～ 6 号墳（6 号墳のみ場所が少し離れる）が発見、調査されている。いずれも副葬品が出土していないため、築造された年代が明確ではないが石室長 2m 前後という「小石室」であることから 8 世紀代（一部は 9 世紀か）に築造されたものと考えられている（富士市教委 2003）。



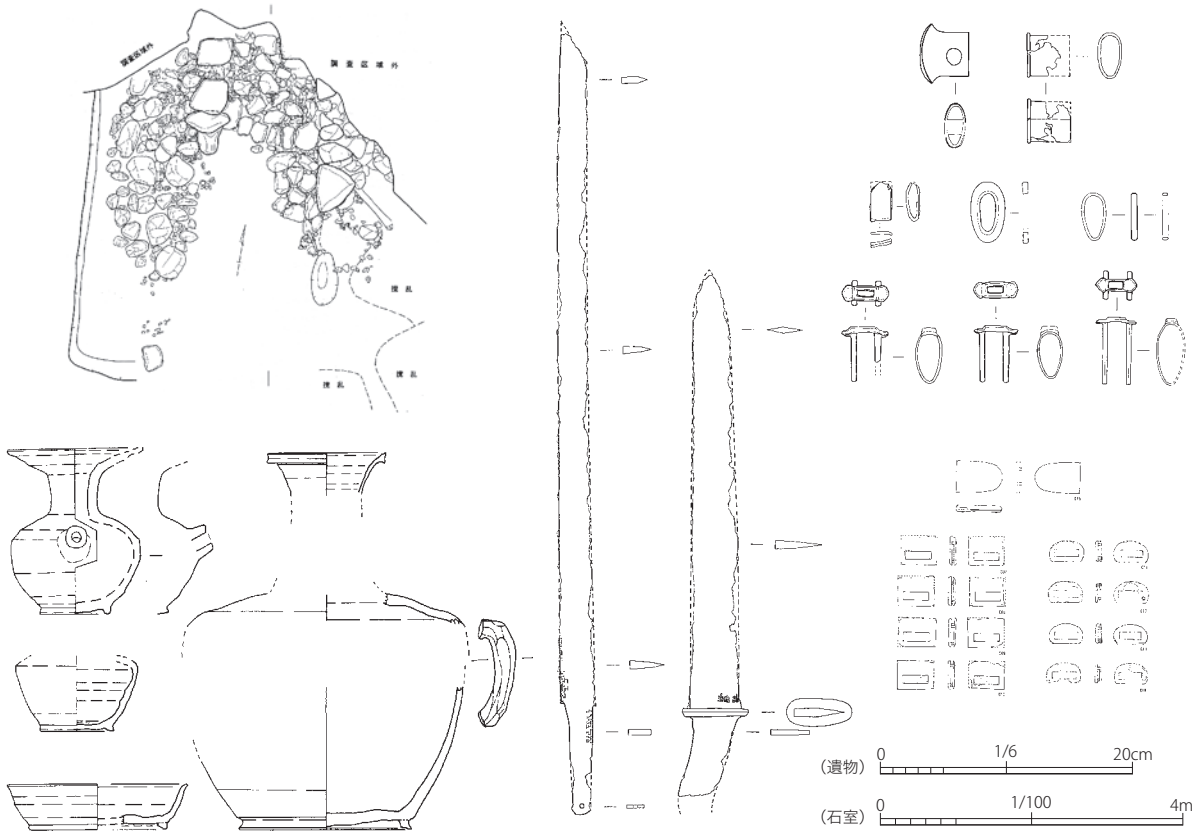
第 148 図　中村上 1 号墳　石室実測図・出土遺物実測図

(4) 東平第 1 号墳

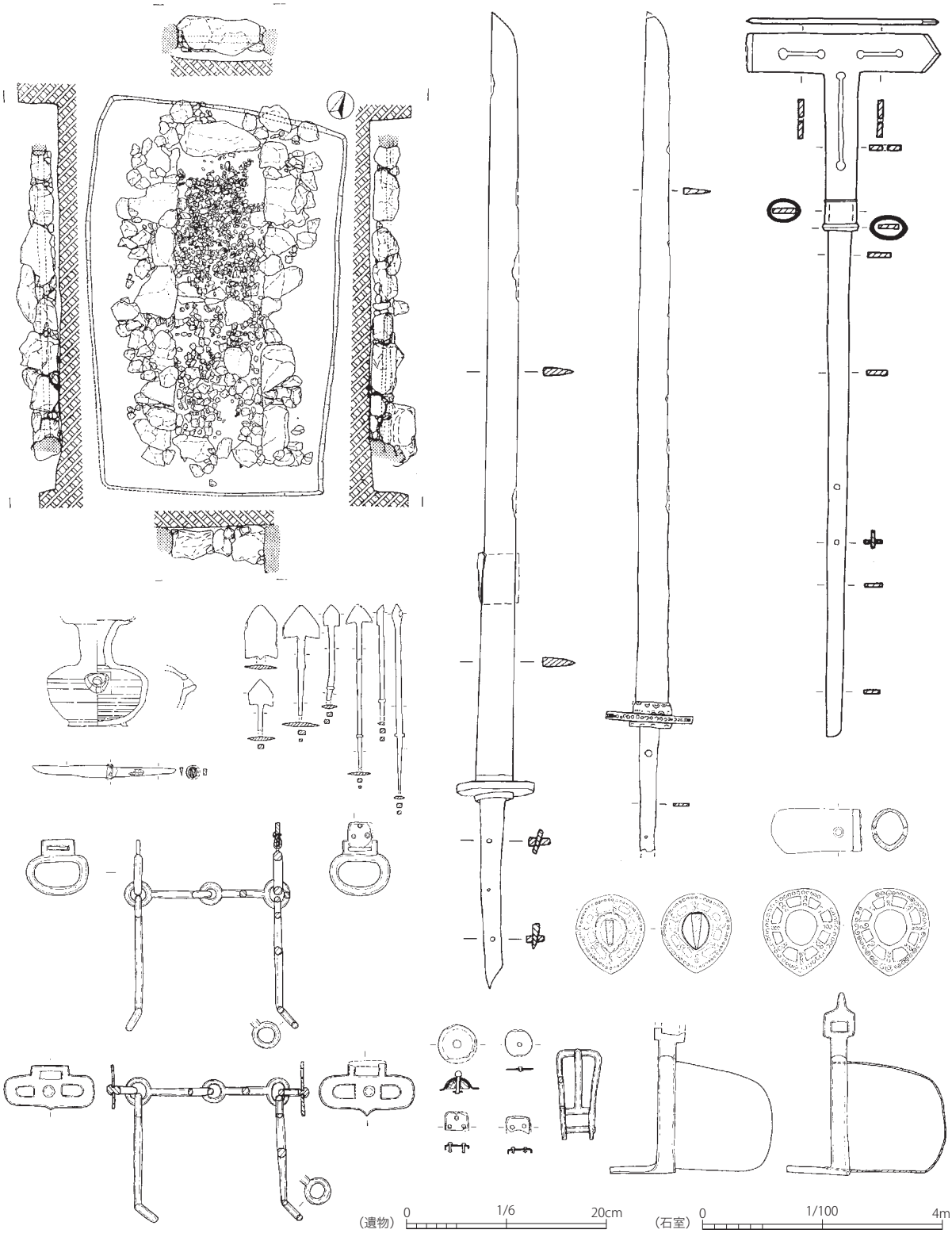
伊勢塚古墳の北東 600m に立地する。平成元年、事務所建設に伴い新たに発見され発掘調査が行われた。墳丘、石室天井石を含む上半部は失われており、墓坑内の石室のみが残存していた。墳丘は失われていたものの、南側以外に残存する周溝から直径約 13m の円墳であることが判明している。石室は段構造を有する横穴式石室で全長 5.2m、幅 1.5m を測る。床面は 2 面存在するとされており、一部は 3 面存在する可能性が指摘されている（富士市教委 1990）。上面から出土したとされる遺物には、大刀 3（うち 2 振が銀象嵌鍔）、丁字型利器 1、鉄鏃、轡 2、壺鐙 2、金銅製飾金具 4、刀子 1 がある。また、下面からは円頭柄頭 1、鉄鏃、金銅製飾金具 6、刀子 2 が出土している。特に注目されるのが上面の床面から出土した丁字型利器である。同様の形態をもつものに沼津市宮原 2 号墳から出土したと推定されている例（後藤 1922・小野 1957）、宮城県多賀城跡第 66 次調査（宮城県多賀城跡調査研究所 1996）、兵庫県香美町月岡下古墳などがあるものの全国的に類例が少なく、使用方法を含めて注目される。

(5) 国久保古墳

国久保古墳は平成 13 年に宅地造成分譲工事に伴い、地下 1.2m から新たに発見された古墳である。墳丘は残存せず、石室側壁の石も最大 2 段分しか残存していない。トレンチ調査により、周溝と考えられる落ち込みを検出しており、そこから復元される墳丘は直径 8m 程度の円墳である。内部主体は段構造を有する横穴式石室で全長 4.7m を測る。古墳は現在、砂で埋め戻され、現地に保存されている。そのため、調査は床面の最上面で止めており、さらに下位に石室床面が残存するものと考えられる。このように一部分の掘削のため、出土した遺物も必ずしも同じ面に副葬されたものなのか確かではないが、ガラス製雁木玉の出土が注目される。藤村の集成によれば同じタイプのものは全国で 8 例ほどが確認されているという（藤村 2011）。また、鉄器製作集団との関わり（早野 2008）も指摘されている鉄鐸が出土していることも注目される。そのほか、銀装大刀柄頭 1、鍔 1、鉄鏃 53 ＋、轡 1、須恵器坏 1、耳環 1、切子玉 2、丸玉 3、小玉 25 が出土している。築造時期は飛鳥 I 期と考えられている（藤村 2011）。



第 149 図　西平 1 号墳　石室実測図・出土遺物実測図



第 150 図　東平 1 号墳　石室実測図・出土遺物実測図

(6) 伝法沢周辺の古墳

伊勢塚古墳から伝法沢を 1500m、標高にして約 55m 遡った場所に中原第 3・4 号墳が立地している。そこからさらに 600m 遡った場所に横沢古墳がかつて存在した。西富士道路建設に伴い昭和 54 年に発掘調査が行われており、横穴式石室を内部主体とする直径約 16m の円墳であることが明らかとなっている。古墳は墓として使用されていた間に石室の崩落があったと考えられ、そのための改修が墳丘・石室ともに行われている（報告書では改修前をⅠ期､改修後をⅡ期として標記)｡そのため、石室規模が改修前と改修後で異なるが、改修前の大きさは石室長 8.7m、幅 2.3m を測る。石室はいわゆる「段構造」を持つものである。

床面は、全部で 3 面認められ初葬時（報告書 3 面）の副葬品としては、大刀、鉄鏃、矩形立聞轡 1、金銅製鈴 5、刀子 1、須恵器（提瓶、瑞)、木製金箔製品などが出土している。また、追葬時（報告書 2 面）の副葬品として大刀、鉄鏃、刀子に加え、須恵器の坏身蓋が 6 個体ずつ出土している。築造は 6 世紀末から 7 世紀初頭と考えられる。

(7) 広見公園周辺の古墳

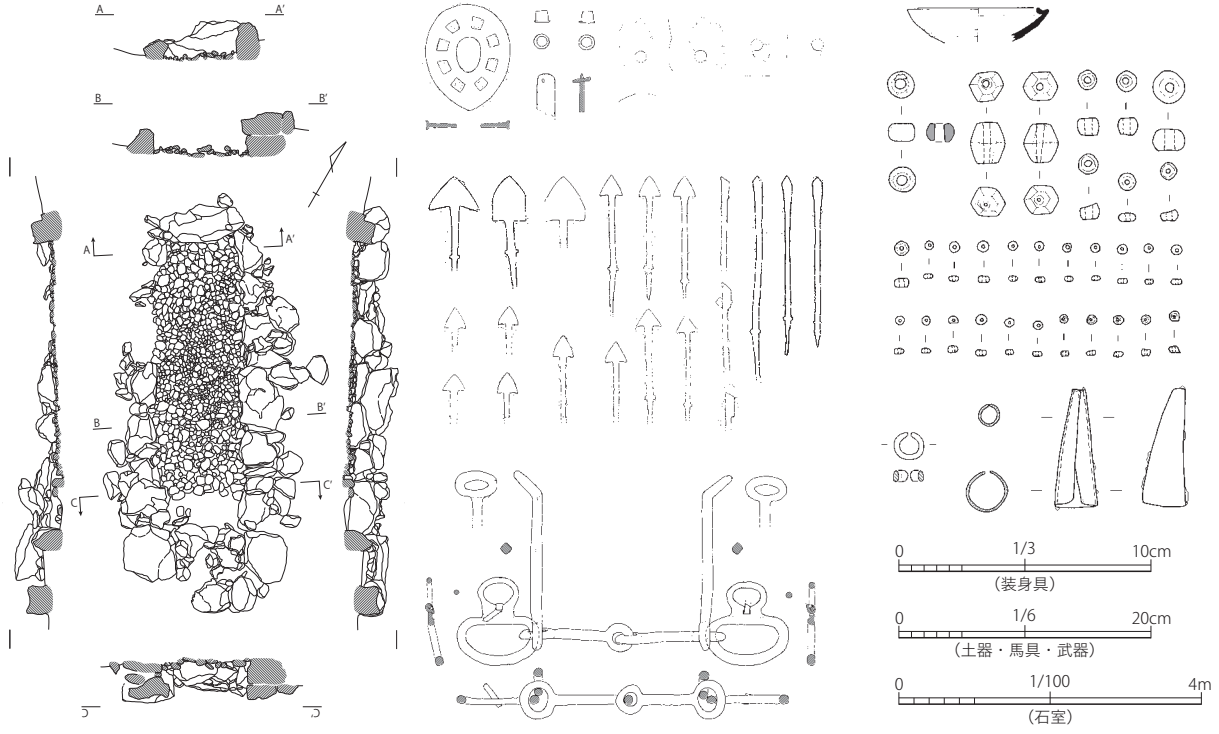
横沢古墳のある伝法沢から東に 1500m の場所に現在、広見公園として整備されている場所がある。このエリアには 21 基の古墳の存在が知られている。中原第 5・6 号墳もこのエリアに含まれる古墳で、現在「土手内・中原 2 古墳群」として包蔵地登録されている。そのうち 5 基の古墳が調査され、いずれも 7 世紀中葉から 8 世紀にかけての古墳と考えられている。

(8) 片倉第 1 号墳

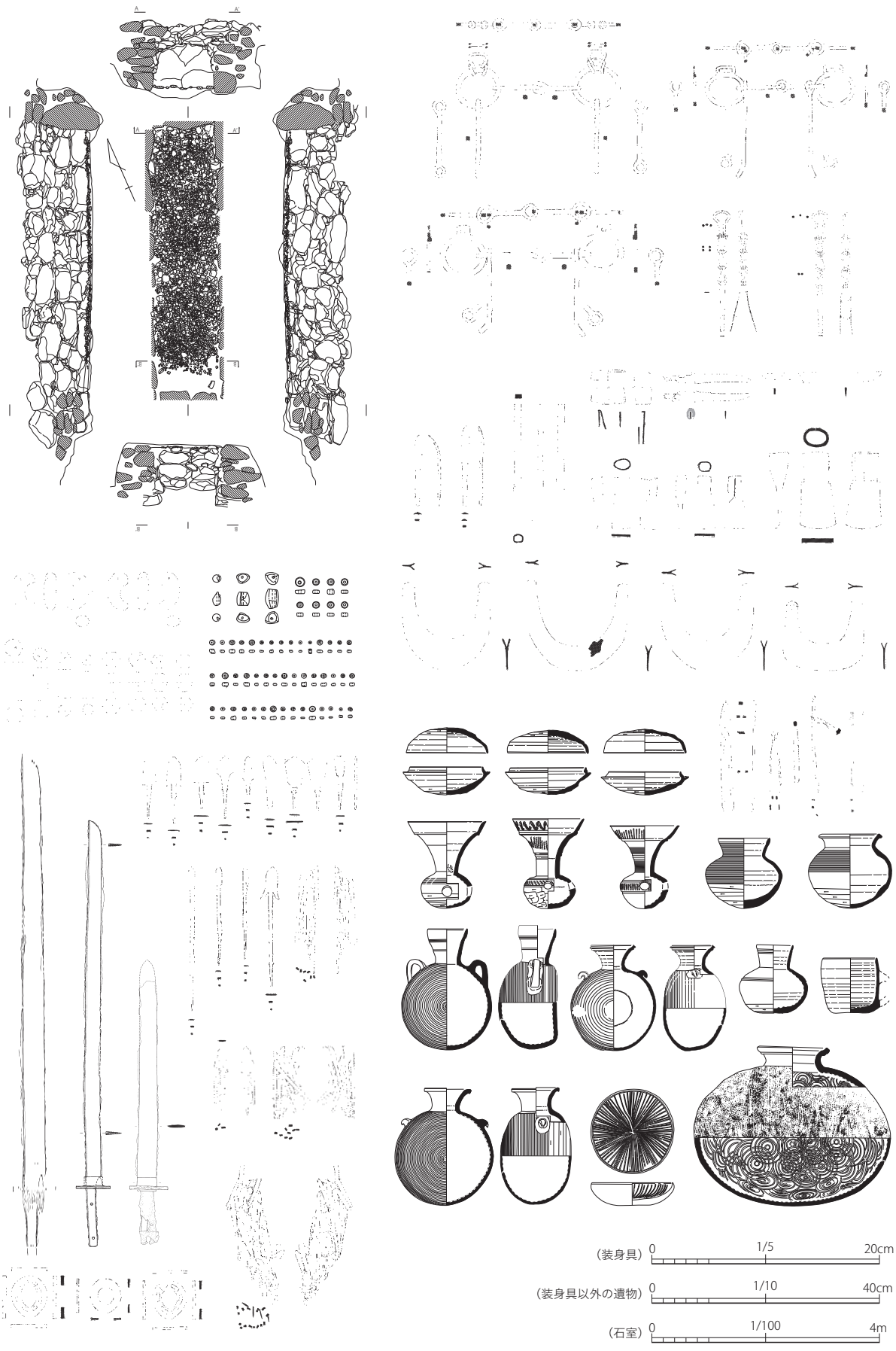
片倉第 1 号墳は標高 165m 付近の伝法古墳群最高所に位置する古墳である。昭和 50 年に地元住民からの連絡により市教育委員会の知るところとなった。現在も富士総合運動公園において保存されており、かつ天井石も残存する中で石室内へ入ることも可能な古墳である。

古墳発見当時は、墳丘盛り土が流失した結果、古墳の石材と考えられる石が散乱しており、積石塚のような状況であったことが知られている。石室の遺存状況がよく、石室裏込めの石が散乱したとも考えられないことから、築造当時から、墳丘に石材を多用する構造であったと推測される。

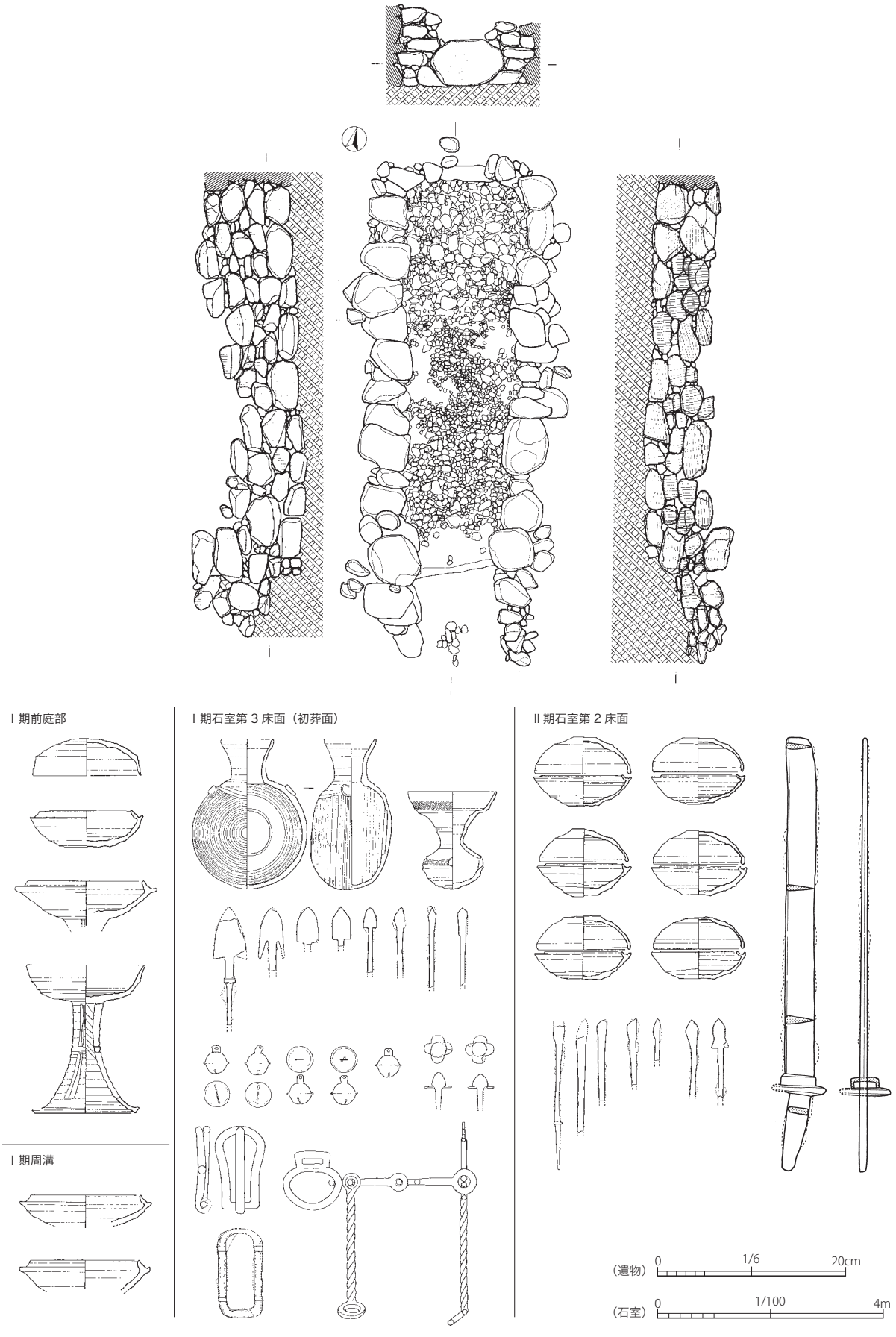
石室は、無袖の横穴式石室で「段構造」を有する。残存長 4.5m、幅 1.3m、高さ 1.7m を測る。石室内より土師器が出土しており、その年代から 7 世紀後半の築造が想定される。



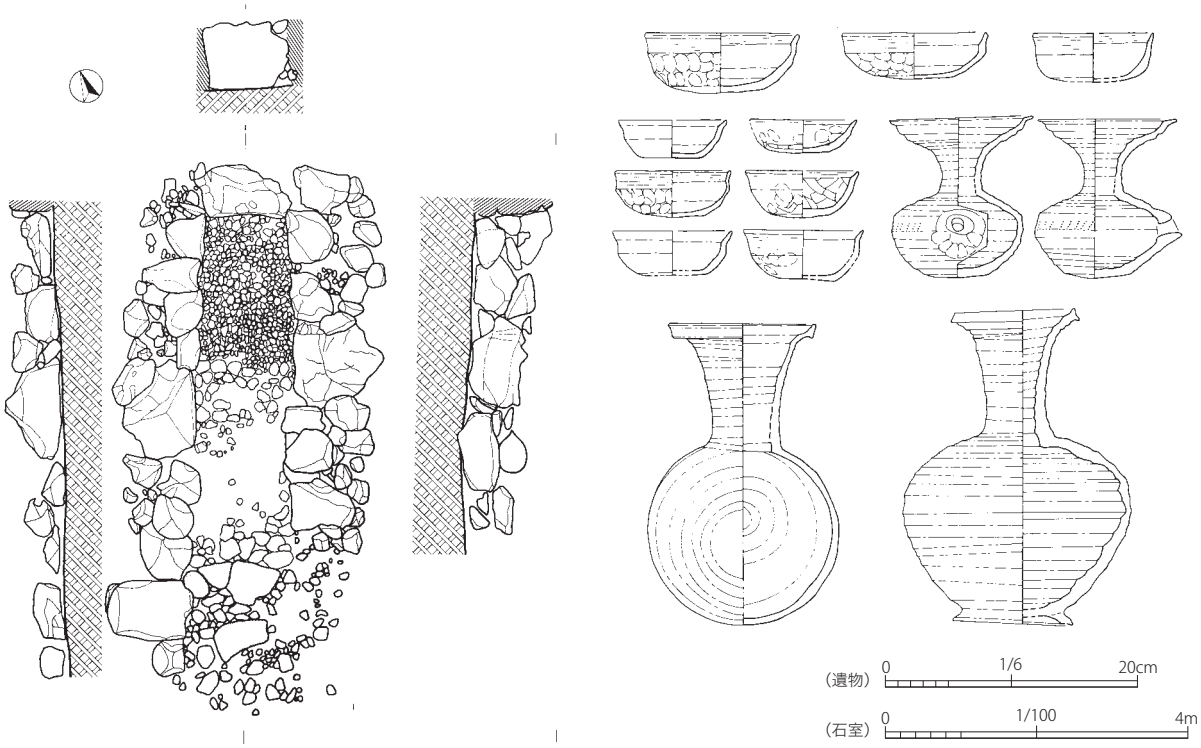
第 151 図　国久保古墳　石室実測図・出土遺物実測図



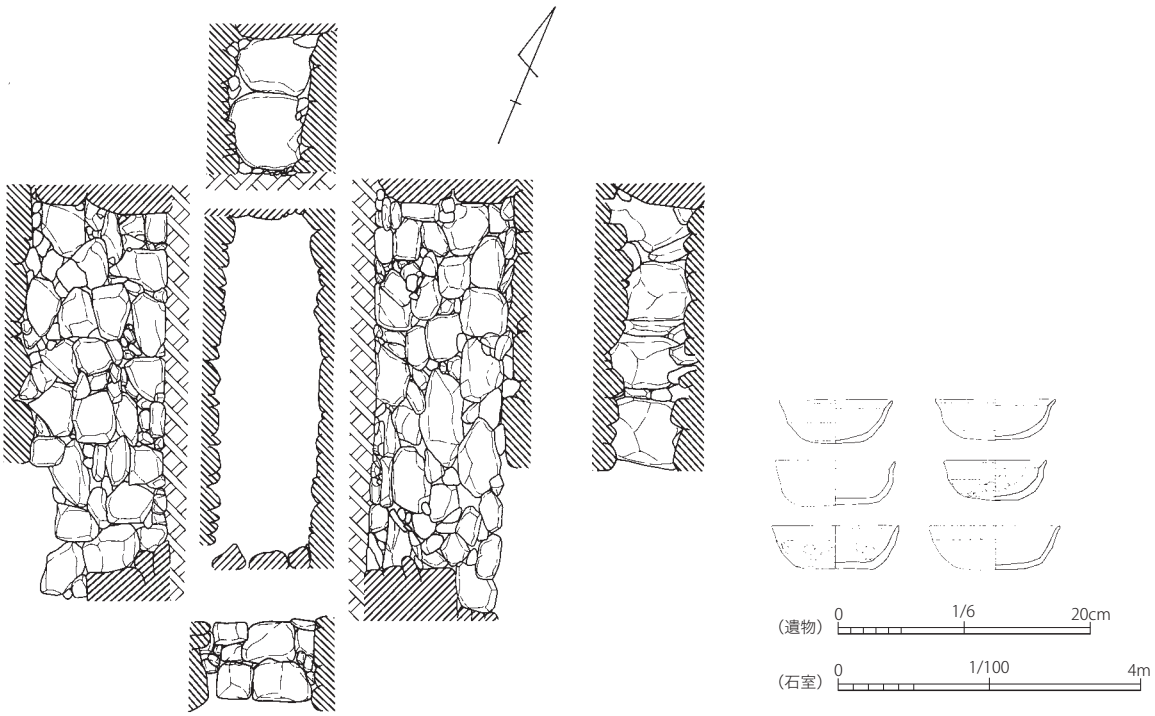
第 152 図　中原 4 号墳　石室実測図・出土遺物実測図



第 153 図　横沢古墳　石室実測図・出土遺物実測図



第 154 図　土手内 1 号墳　石室実測図・出土遺物実測図



第 155 図　片倉 1 号墳　石室実測図・出土遺物実測図

(9) 小結

伝法古墳群の展開については既に藤村によりまとめられているように古墳時代中期末頃（TK47 型式期）の伊勢塚古墳の築造が契機となっていることは確実である。潤井川流域において初めて築造された大型古墳の被葬者には低地部開発の先駆者が想定され、また、築造の背景には王権の地域支配の一端を読み取ることも出来る。周辺に造られた「鏡塚」や「兜塚」と呼ばれる古墳の築造時期が判明しないがおそらく 6 世紀代の古墳と考えられ盟主墳である伊勢塚古墳の周辺に造られた陪塚のようなものであったと推測される。

その後、伝法沢においてつくられるのが、沢を遡った場所に位置する中原 4 号墳である。この 6 世紀後半頃の築造と考えられる古墳には、それまでに当該地域では認められない横穴式石室という新たな埋葬形態を導入しており、新たな葬送概念も導入されたことを示している。つづいて 7 世紀に入り横沢古墳が、やはり伝法沢を強く意識した場所に築造されることとなる。7 世紀中葉以降、伝法沢の東側、現在の広見公園周辺や伊勢塚古墳の北東側に展開し始めるようになり、8 世紀前葉まで築造が続けられる。

7 世紀初頭頃を境に伝法古墳群の造営は、伊勢塚古墳や「交通路を大いに意識した構造」からの変容をみせると評価される（藤村 2011）のである。

2 伝法古墳群周辺における集落の展開

(1) 分析の視点

富士市では東平遺跡を始めとして、これまでに数多くの集落遺跡の発掘調査を行っており、その成果が蓄積されてきている。本論では中原 4 号墳が所在する伝法沢を中心に地形的に明確に区分することができる潤井川流域に立地する沢東Ａ遺跡、沢東Ｂ遺跡、川窪遺跡、中桁・中ノ坪遺跡、東平遺跡（三日市廃寺跡を含む）においてこれまで本発掘調査された竪穴建物数(試掘調査は除外)から遺跡の消長を確認することとした。

さらに、各調査における本調査面積を確認し、竪穴建物跡（以下、「建物跡」とする）の遺構密集度を算出した。建物跡の所属時期は 5 世紀以降 11 世紀までおおよそ 50 年区切りとした。もちろん、さらに細かな時間軸を設定することは可能だが､細かくしすぎることにより、実態を見えにくくすることや、出土した遺物から時期を決定するうえでそれ以上の細分は、無理があると判断したためである。

問題となるのが、これまでに報告されていない建物跡の取り扱いである。これまでに 400 軒近くの建物跡が発掘されている東平遺跡では、東名高速道路富士インターチェンジ建設に伴い調査された第 2 地区 107 軒の報告が一部の遺物実測図の公表を除きされていない。そのため、時期決定ができない状況にある。

そのため、本論では建物跡の軒数などを検討するうえでは未報告分の成果を取り扱うものの、時間軸における建物軒数を把握する際には、検討から除外することとした。今後、報告された際に再度、検討を加えることとしたい。

(2) 沢東 A 遺跡

南下していた潤井川の流れが流路を東に変更する場所に立地している。古代における潤井川は氾濫により土地に肥沃な農作物を生む一方で､水害の被害は計り知れず、それにもかかわらず古墳時代中期以降 7 世紀代を中心に集落が営まれている。

古墳時代前期における遺構も少なからず認められるものの、本格的な集落形成は古墳時代中期後半である。潤井川と凡夫川の合流する地点では、子持ち勾玉や滑石製模造品などが出土しており（富士市教委 1995)、水辺における祭祀の存在も想定される。集落の急速な形成は自然発生では説明できず、外的要因を考えるべきである。大和王権による東国支配の影響と捉えることができるが、以前述べたように、直接的には武蔵など新興勢力の影響も想定すべきである（佐藤 2014)。

さて、沢東Ａ遺跡ではこれまでに 7098㎡の本発掘調査が行われており、100 軒の竪穴建物跡が調査されている。前述のように 5 世紀後半に集落形成が開始され、6 世紀後半まで各時期 10 軒ほどの建物跡が認識されている。しかし、7 世紀に入り爆発的に建物数が増加し 34 軒が認められる。一方で、その建物数は 7 世紀後半には継続せず 8 世紀後半には集落が終焉を迎える。

沢東Ａ遺跡は氾濫原における発掘調査のため、遺構検出や切りあい関係の把握に困難さが伴い、また、潤井川との距離関係、言い換えれば、遺構密度の高さや自然環境が異なる地点ごとに時期別の建物数が大きく異なることなども特徴といえるが、全体としては 6 世紀後半から 7 世紀前半における建物数の増加が特徴的といえる。

(3) 沢東B遺跡

沢東B遺跡は沢東A遺跡の北東に隣接して立地する遺跡である。大規模な調査がこれまで行われたことがなく、4軒の建物跡が確認されているのみである。いずれも8世紀代の建物である。

(4) 川窪遺跡

川窪遺跡は沢東A遺跡と後述する中桁・中ノ坪遺跡の間に位置する遺跡で平成17年度に新たに発見された遺跡である。これまでに1回の本調査しか行われていないが、周辺では珍しい11世紀前半の竪穴建物跡が調査されている（富士市教委2008）。

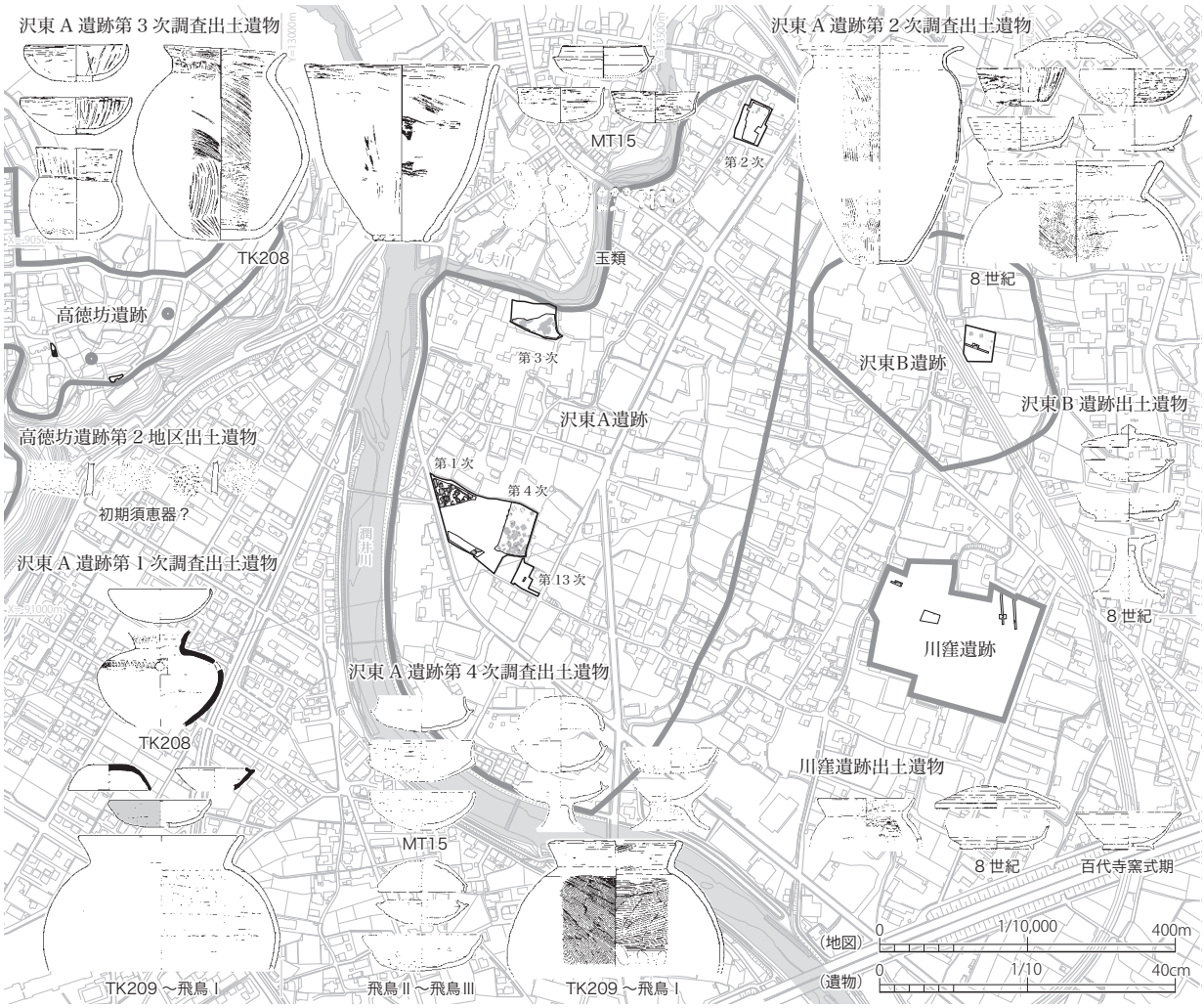
(5) 中桁・中ノ坪遺跡

潤井川の北岸、沢東A遺跡の東方に立地している遺跡である。かつては「中桁遺跡」「中ノ坪遺跡」として区別されており、その名称で調査されたこともあったが、遺構のあり方からは二つの集落を区別することは困難であり、平成17年度に統合して名称を変更して現在の包蔵地名とした。

本遺跡では、これまで3476㎡の本発掘調査が行われており、60軒の竪穴建物跡が調査されている。沢東A遺跡と同じく、古墳時代前期に集落としての萌芽を見ることが出来るが、単発的であり建物跡としては検出されていない。5世紀後半以降、10世紀前半に至るまで途中、途切れることなく集落が継続している状況が見られる。建物数のピークは6世紀前半の7軒と8世紀後半の11軒に見ることが出来る。伝法古墳群が展開する6世紀後半から7世紀後半まではあまり活発な集落とは現状では考えられない。

(6) 東平遺跡

中桁・中ノ坪遺跡のさらに東方に存在するのが、東平遺跡である。両遺跡の間には伝法沢とよばれる沢が存在し、その沢を遡ると中原4号墳が立地している。東平遺跡は駿河国富士郡の郡家と考えられており、8世紀を中心とした集落形成が想定されてきた。また、集落の東



第156図　高徳坊遺跡・沢東A遺跡・沢東B遺跡・川窪遺跡

側には『日本三代実録』貞観五年（863）六月二日条にて「以駿河国富士郡法照寺預之定額」とされた「法照寺」がかつて存在したと考えられており現在、「三日市廃寺跡」として包蔵地登録されている。

東平遺跡についてはこれまで多くの研究者によりその様相がまとめられてきた（植松 2002・藤村 2014 など）。今一度、整理すると以下のようになる。8 世紀に入るとそれまで伝法古墳群において墓域と考えられていた遺跡内の縁辺部（第 2・3・15 地区）において大規模な集落が突如出現し、中央政権の地方支配の一環として計画的に集落形成が進められた（佐野 2008）。方形配列の掘立柱建物群や銅製腰帯具・鞘羽口・鉄屑・土馬・「布自」墨書須恵器の出土等を総合的に考えれば、このエリアが 8 世紀の富士郡家の中枢付近と考えることが出来る。

一方、遺跡東側では 8 世紀前半の布目瓦が半径 100m 程度の範囲にまとまって出土しており、郡衙周辺寺院（山中 2005）として整備された可能性が考えられる。これまでに寺院の存在を直接的に実証する遺構は検出されていないものの、このエリアが寺域と考えられる。しかし、9 世紀に入ると急速に集落としての勢いが衰え、10 世

第 157 図　中桁・中ノ坪遺跡

紀までには衰退するという流れである（佐藤 2013）。

改めて、建物跡の軒数について整理しておこう。これまでに 30,328㎡が調査され、383 軒の建物跡が調査されている（161 軒未報告）。消長を見ていくと、5 世紀後半に 1 軒認められるものの 6 世紀代の建物は認められず、7 世紀前半の 7 軒、7 世紀後半の 10 軒に見える。さらに、8 世紀に入り爆発的に建物数が増加し、前半には 57 軒、後半には 92 軒が発掘されており、ここに本格的な集落形成をみることができる。9 世紀前半には 27 軒、9 世紀後半に 4 軒、そして 10 世紀前半の 5 軒を最後に東平遺跡は終焉を迎えており、これまで述べられてきた歴史像に概ね一致する。

特徴的なことは 8 世紀以前は集落形成がほとんど見られないことと、その一方で 7 世紀後半から 8 世紀における建物数の爆発的増加である。そのピークのあり方は沢東A遺跡と対照的であり、両遺跡の間に有機的な関係をも想定させる。

(7) 滝下遺跡

滝下遺跡は東平遺跡の北東に位置する。これまで 3,762㎡の調査がなされ、6 軒の建物跡が調査されている。時期の明らかな 4 軒はいずれも 8 世紀前半のものであり、B 地区第 1 号住居址から銅製蛇尾が出土していること。

本来、東平遺跡の一部として捉えることができる。

第 158 図　東平遺跡・三日市廃寺跡

3　古墳の築造と集落の消長

これまでにみてきたように、潤井川流域における本格的な集落形成は5世紀後半における沢東A遺跡にみることができる。沢東A遺跡においては、石製模造品の出土やTK23・47型式期における須恵器の流入など、あらたな権力を背景とした技術や思想などの外的な要因により集落形成がなされたと考えられている。一方で、その時期における東平遺跡では集落の形成はほとんど認められないといえる。これは、同じ時期に築造された伊勢塚古墳を盟主墳として、その時期に古墳周辺に集落が作られなかったことによるものと考えられる。伊勢塚古墳は外部から駿河湾から河川を遡って来る際の交通の玄関口である場所に築造され、その視覚的役割も重要であったと考えられる。また、その頃の中心的な集落である沢東A遺跡は古墳よりもさらに奥側に展開していたことになる。

6世紀に入り、やはり潤井川流域における中心的な集落は沢東A遺跡であり、一部に中桁・中ノ坪遺跡における集落形成が開始される。5世紀末に噴火した富士山(大淵スコリア）の影響（佐藤・藤村 2013）をあまり感じ

第7表　時期別にみた竪穴建物数の推移

遺跡名	地区名	調査面積(㎡)	建物軒数	軒数/100㎡	5C後半	6C前半	6C後半	7C前半	7C後半	8C前半	8C後半	9C前半	9C後半	10C前半	10C後半	11C前半	時期不明	未報告
沢東A遺跡	第1次調査地点	1,730	27	1.56	1	1	9	3	2	5	2	0	0	0	0	0	4	0
	第2次調査地点	1,849	9	0.49	0	0	0	0	0	4	3	0	0	0	0	0	2	0
	第3次調査地点	1,200	19	1.58	7	7	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
	第4次調査地点	2,319	45	1.94	1	2	0	31	3	0	0	0	0	0	0	0	8	0
	合計	7,098	100	1.41	9	10	12	34	5	9	5	0	0	0	0	0	16	0
	合計軒数に対する時期ごとの割合（%）				9	10	12	34	5	9	5	0	0	0	0	0	16	

遺跡名	地区名	調査面積(㎡)	建物軒数	軒数/100㎡	5C後半	6C前半	6C後半	7C前半	7C後半	8C前半	8C後半	9C前半	9C後半	10C前半	10C後半	11C前半	時期不明	未報告
沢東B遺跡	第3地区	711	4	0.56	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0
	合計	711	4	0.56	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0
	合計軒数に対する時期ごとの割合（%）				0	0	0	0	0	50	50	0	0	0	0	0	0	

遺跡名	地区名	調査面積(㎡)	建物軒数	軒数/100㎡	5C後半	6C前半	6C後半	7C前半	7C後半	8C前半	8C後半	9C前半	9C後半	10C前半	10C後半	11C前半	時期不明	未報告
中桁・中ノ坪遺跡	第1地区	1,400	42	3.00	1	7	0	0	3	1	3	3	5	4	0	0	15	0
	第2地区	180	5	2.78	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
	第4地区	1,819	9	0.50	0	0	0	0	0	1	6	1	0	0	0	0	1	0
	第6地区	77	4	5.20	0	0	0	0	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0
	合計	3,476	60	1.73	1	7	1	2	3	3	11	5	5	4	0	0	18	0
	合計軒数に対する時期ごとの割合（%）				1.67	11.67	1.67	3.33	5	5	18.33	8.33	8.33	6.67	0	0	30	

遺跡名	地区名	調査面積(㎡)	建物軒数	軒数/100㎡	5C後半	6C前半	6C後半	7C前半	7C後半	8C前半	8C後半	9C前半	9C後半	10C前半	10C後半	11C前半	時期不明	未報告
川窪遺跡	第1地区	545	1	0.18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	合計	545	1	0.18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	合計軒数に対する時期ごとの割合（%）				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100	0	

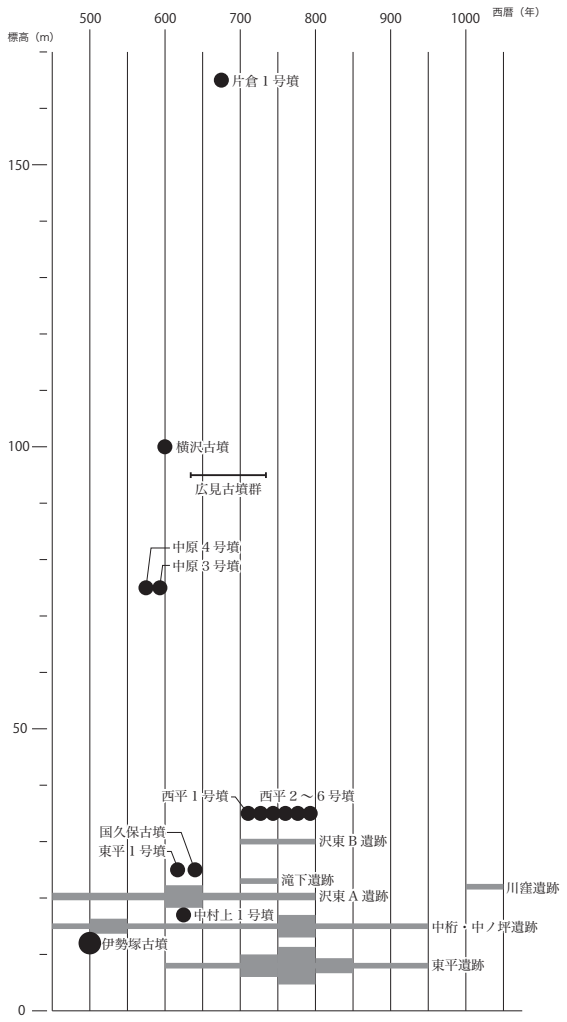
遺跡名	地区名	調査面積(㎡)	建物軒数	軒数/100㎡	5C後半	6C前半	6C後半	7C前半	7C後半	8C前半	8C後半	9C前半	9C後半	10C前半	10C後半	11C前半	時期不明	未報告
東平遺跡	第3地区	13,570	129	0.95	0	0	0	0	0	35	74	20	0	0	0	0	0	0
	第9地区	2,955	11	0.37	0	0	0	0	0	1	6	1	0	0	0	0	3	0
	第15地区	2,356	23	0.98	0	0	0	0	0	10	2	5	0	4	0	0	2	0
	第16地区	670	19	2.84	0	0	0	3	7	0	2	1	2	0	0	0	4	0
	第24地区	545	1	0.18	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	第27地区	120	1	0.83	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	第28地区	1,008	16	1.59	1	0	0	4	2	3	1	0	0	0	0	0	5	0
	第30地区	275	2	0.73	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	第37地区-2次	246	1	0.41	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	第37地区-4次	766	14	1.83	0	0	0	0	0	3	5	0	2	1	0	0	3	0
	第60地区	99	5	5.05	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	1	0
	第2地区	6,435	107	1.66	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	107
	第20地区	1,283	54	4.21	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	54
	合計	30,328	383	1.26	1	0	0	7	10	57	92	27	4	5	0	0	19	161
	合計軒数に対する時期ごとの割合（%）				0.45	0	0	3.15	4.51	25.68	41.44	12.16	1.80	2.25	0	0	8.56	

遺跡名	地区名	調査面積(㎡)	建物軒数	軒数/100㎡	5C後半	6C前半	6C後半	7C前半	7C後半	8C前半	8C後半	9C前半	9C後半	10C前半	10C後半	11C前半	時期不明	未報告
滝下遺跡	B地区	3,430	3	0.09	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0
	G地区	332	3	0.90	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0
	合計	3,762	6	0.16	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	2	0
	合計軒数に対する時期ごとの割合（%）				0	0	0	0	0	66.67	0	0	0	0	0	0	33.33	

させない集落の継続性を看取することができる。中原４号墳が作られた６世紀後半までは、建物跡の軒数は決して多くはないものの潤井川流域において６世紀後半の建物跡は沢東Ａ遺跡に限られており、今後、発掘調査が進んだとしても、その傾向と認識に大きな変更はないものと考えられる。そのため、現段階では沢東Ａ遺跡と3km 程度離れた伝法沢周辺に展開を見せ始める古墳のあり方に直接的関係を想定せざるを得ない。

さらに想像を逞しくすれば、生活域の中心としての沢東Ａ遺跡に豪族居館が存在し、伝法沢を境界として伊勢塚古墳築造以降、墓域としての空間認識がされ続けていたとも考えられる。結果として、沢東Ａ遺跡の経営と伝法沢沿いに展開を見せる古墳のあり方はセットをなしていると考えられるのである。

中原４号墳は副葬品や執行された儀礼の複雑性、同時期における古墳がないことなど地域内において階層的



第 159 図　古墳と集落の消長

に上位であったことは明らかである。藤村も述べるように６世紀末から７世紀初頭に位置づけられる横沢古墳を境として伝法古墳群における古墳のあり方は階層性が等質化されるのであろう。その現象は東平遺跡における本格的な集落形成と関連しているものと推測される。

伝法古墳群が伝法沢の左岸において面的な広がりを見せ始める７世紀前半における建物数が際立って多い。その時期に中桁・中ノ坪遺跡などにおいても集落は継続して認められ、東平遺跡でも７世紀に入りようやく本格的な集落形成が開始しており、伝法古墳群が広がりをみせ始める時期と一致している。

７世紀後半に入るとこれまで中心的な集落であった沢東Ａ遺跡は集落形成が下火となり、伝法古墳群の広がりとともにその中心は東平遺跡に移っていく。

８世紀に入ると完全に集落の中心は、駿河国富士郡家である東平遺跡に移る中、その頃までも伝法古墳群では造墓活動が継続して行われており、郡家における官人層という被葬者が想定される西平１号墳のように、８世紀後半頃にはその活動を終える。

伝法古墳群が終焉を迎えた９世紀に入ると富士郡家東平遺跡でも、建物数が減少し始め、９世紀後半には遺跡中心部分では、ほとんど建物が認められなくなる。これは貞観六～七年（864 ～ 865）に富士山で起きた『貞観の大噴火』とも関係している可能性があり、『扶桑略記』延喜２年（902）９月 26 日には「駿河国云上富士郡官舎為群盗被焼亡之由」という記事も不安定な社会状況と人々の不満の表れとみられ、ここに郡司支配からの脱却という新たな社会ステージの幕開けを示している（佐藤・藤村 2013）。

おわりに

以上、伝法古墳群の展開と周辺における集落の消長を整理してきた。その結果、７世紀初頭までの伝法沢に展開する古墳の展開と沢東Ａ遺跡という古墳時代中期から形成される遺跡との間に有機的な関係が存在する可能性を指摘するにいたった。

また、集落の消長を建物数で整理することにより各遺跡の展開過程をより実証的な歴史叙述の基礎材料を提示することができたものと考えられる。今後も同様の分析視点を広げることが課題となろう。

第８表　竪穴建物跡の時期一覧

遺跡名	地区名	遺構名	時期	備考	報告書
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB01	6C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB02	8C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB03	不明		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB04	6C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB05	8C 前半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB06	6C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB07	7C 前半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB08	8C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB09	7C 前半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB10	6C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB11	7C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB12	6C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB13	7C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB14	不明		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB15	6C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB16	8C 前半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB18	8C 前半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB19	8C 前半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB20	8C 前半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB21	6C 前半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB22	6C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB23	不明		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB24	不明		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB25	6C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB26	6C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB27	5C 後半		a
沢東 A 遺跡	第 1 次調査地点	SB28	7C 前半		a
沢東 A 遺跡	第 2 次調査地点	第 1 号住居跡	8C 前半		b
沢東 A 遺跡	第 2 次調査地点	第 2 号住居跡	8C 後半		b
沢東 A 遺跡	第 2 次調査地点	第 3 号住居跡	8C 後半		b
沢東 A 遺跡	第 2 次調査地点	第 5 号住居跡	8C 前半		b
沢東 A 遺跡	第 2 次調査地点	第 6 号住居跡	8C 前半		b
沢東 A 遺跡	第 2 次調査地点	第 7 号住居跡	8C 後半		b
沢東 A 遺跡	第 2 次調査地点	第 8 号住居跡	不明		b
沢東 A 遺跡	第 2 次調査地点	第 9 号住居跡	不明		b
沢東 A 遺跡	第 2 次調査地点	第 10 号住居跡	8C 前半		b
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 1 住居址	不明		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 2 住居址	6C 前半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 3 住居址	6C 前半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 4 住居址	6C 後半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 5 住居址	6C 前半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 6 住居址	6C 後半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 7 住居址	5C 後半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 8 住居址	5C 後半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 9 住居址	6C 前半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 10 住居址	5C 後半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 11 住居址	6C 後半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 12 住居址	5C 後半	ガラス小玉 1 点	c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 13 住居址	不明		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 14 住居址	5C 後半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 15 住居址	6C 前半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 16 住居址	6C 前半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 17 住居址	5C 後半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 18 住居址	6C 前半		c
沢東 A 遺跡	第 3 次調査地点	第 19 住居址	5C 後半		c
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 1 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 2 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 3 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 4 号住居跡	不明		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 5 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 6 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 8 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 9 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 10 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 11 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 12 号住居跡	5C 後半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 13 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 14 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 15 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 16 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 17 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 19 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 20 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 21 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 22 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 23 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 24 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 25 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 26 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 27 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 28 号住居跡	7C 後半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 29 号住居跡	不明		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 30 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 32 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 33 号住居跡	6C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 35 号住居跡	7C 後半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 36 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 37 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 38 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 39 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 41 号住居跡	不明		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 42 号住居跡	不明		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 43 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 44 号住居跡	7C 前半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 45 号住居跡	7C 後半		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 46 号住居跡	不明		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 47 号住居跡	不明		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 48 号住居跡	不明		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 49 号住居跡	不明		d
沢東 A 遺跡	第 4 次調査地点	第 50 号住居跡	6C 前半		d
沢東 B 遺跡	第 3 地区	第 1 号住居跡	8C 後半		e
沢東 B 遺跡	第 3 地区	第 2 号住居跡	8C 後半		e
沢東 B 遺跡	第 3 地区	第 3 号住居跡	8C 前半		e
沢東 B 遺跡	第 3 地区	第 4 号住居跡	8C 前半		e
川窪遺跡	第 1 地区	SB01	11C 前半		f
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 1 号住居跡	6C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 2 号住居跡	8C 後半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 3 号住居跡	6C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 4 号住居跡	8C 後半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 5 号住居跡	10C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 6 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 7 号住居跡	6C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 8 号住居跡	10C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 9 号住居跡	8C 後半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 10 号住居跡	10C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 11 号住居跡	9C 後半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 12 号住居跡	9C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 13 号住居跡	7C 後半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 14 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 15 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 16 号住居跡	6C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 18 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 19 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 21 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 22 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 23 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 24 号住居跡	9C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 25 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 26 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 27 号住居跡	9C 後半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 28 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 29 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 30 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 31 号住居跡	9C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 32 号住居跡	10C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 33 号住居跡	8C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 35 号住居跡	9C 後半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 36 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 37 号住居跡	5C 後半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 38 号住居跡	9C 後半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 39 号住居跡	不明		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 40 号住居跡	7C 後半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 41 号住居跡	6C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 42 号住居跡	6C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 43 号住居跡	7C 後半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 44 号住居跡	6C 前半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 1 地区	第 45 号住居跡	9C 後半		g
中桁・中ノ坪遺跡	第 2 地区	第 1 号竪穴住居跡	6C 後半		h
中桁・中ノ坪遺跡	第 2 地区	第 2 号竪穴住居跡	不明		h
中桁・中ノ坪遺跡	第 2 地区	第 3 号竪穴住居跡	不明		h
中桁・中ノ坪遺跡	第 2 地区	第 4 号竪穴住居跡	7C 前半		h
中桁・中ノ坪遺跡	第 2 地区	第 5 号竪穴住居跡	7C 前半		h
中桁・中ノ坪遺跡	第 4 地区	SH01	8C 後半		i
中桁・中ノ坪遺跡	第 4 地区	SH02	8C 後半	鉄鏃	i
中桁・中ノ坪遺跡	第 4 地区	SH03	8C 後半	鉄鏃・刀子	i
中桁・中ノ坪遺跡	第 4 地区	SH04	8C 後半		i
中桁・中ノ坪遺跡	第 4 地区	SH05	8C 後半		i
中桁・中ノ坪遺跡	第 4 地区	SH06	8C 後半		i
中桁・中ノ坪遺跡	第 4 地区	SH07	8C 前半		i
中桁・中ノ坪遺跡	第 4 地区	SH08	9C 前半	鉄鏃	i
中桁・中ノ坪遺跡	第 4 地区	SH09	不明		i
中桁・中ノ坪遺跡	第 6 地区	SB01	8C 後半		j
中桁・中ノ坪遺跡	第 6 地区	SB02	8C 後半		j
中桁・中ノ坪遺跡	第 6 地区	SB03	9C 前半		j
中桁・中ノ坪遺跡	第 6 地区	SB04	8C 前半		j
東平遺跡	第 3 地区	第 1 号住居址	8C 前半	鉄鏃・鎌	k
東平遺跡	第 3 地区	第 2 号住居址	8C 前半	鉄鏃	k
東平遺跡	第 3 地区	第 3 号住居址	8C 前半		k
東平遺跡	第 3 地区	第 5 号住居址	8C 後半		k
東平遺跡	第 3 地区	第 6 号住居址	8C 後半		k
東平遺跡	第 3 地区	第 7 号住居址	8C 後半	刀子	k
東平遺跡	第 3 地区	第 8 号住居址	8C 前半		k

遺跡名	地区名	遺構名	時期	備考	報告書
東平遺跡	第3地区	第9号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第10号住居址	8C前半	鉄鏃・刀子	k
東平遺跡	第3地区	第11号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第12号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第13号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第14号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第15号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第16号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第17号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第18号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第19号住居址	8C前半	鉄鏃・鎌	k
東平遺跡	第3地区	第20号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第21号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第22号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第23号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第24号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第25号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第26号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第27号住居址	8C後半	鎌・刀子	k
東平遺跡	第3地区	第28号住居址	8C後半	鉄鏃	k
東平遺跡	第3地区	第29号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第30号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第31号住居址	8C前半	土馬	k
東平遺跡	第3地区	第32号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第33号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第34号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第35号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第36号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第37号住居址	8C前半	鎌・腰帯具	k
東平遺跡	第3地区	第38号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第39号住居址	8C後半	鉄鏃・刀子	k
東平遺跡	第3地区	第40号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第41号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第42号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第43号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第44号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第45号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第46号住居址	8C後半	鉄鏃	k
東平遺跡	第3地区	第47号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第48号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第49号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第50号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第51号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第52号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第53号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第54号住居址	9C前半	鉄鏃	k
東平遺跡	第3地区	第55号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第56号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第57号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第58号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第59号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第60号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第61号住居址	9C前半	鉄鏃・刀子	k
東平遺跡	第3地区	第62号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第63号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第64号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第65号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第66号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第67号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第68号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第69号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第70号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第71号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第72号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第73号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第74号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第75号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第77号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第78号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第79号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第80号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第81号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第82号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第83号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第84号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第85号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第86号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第87号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第88号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第89号住居址	8C後半	鉄鏃・鞴の羽口	k
東平遺跡	第3地区	第90号住居址	9C前半	鎌	k
東平遺跡	第3地区	第91号住居址	8C前半	鉄鏃・刀子	k
東平遺跡	第3地区	第92号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第93号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第94号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第95号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第96号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第97号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第98号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第99号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第100号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第101号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第102号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第103号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第104号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第105号住居址	8C後半	壺G	k
東平遺跡	第3地区	第106号住居址	9C前半	鉄鏃	k
東平遺跡	第3地区	第107号住居址	9C前半	刀子・鎌・腰帯具	k
東平遺跡	第3地区	第108号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第109号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第110号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第111号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第112号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第113号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第114号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第115号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第116号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第117号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第118号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第119号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第120号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第121号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第122号住居址	8C前半		k
東平遺跡	第3地区	第123号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第124号住居址	9C前半		k
東平遺跡	第3地区	第125号住居址	9C前半	紡錘車・鉄斧・鎌・刀子3・鉄鏃19	k
東平遺跡	第3地区	第126号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第127号住居址	8C後半	腰帯具	k
東平遺跡	第3地区	第128号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第129号住居址	9C前半	鉄鏃・刀子	k
東平遺跡	第3地区	第130号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第3地区	第131号住居址	8C後半		k
東平遺跡	第9地区	第1号住居跡	8C後半		l
東平遺跡	第9地区	第2号住居跡	8C後半		l
東平遺跡	第9地区	第3号住居跡	不明		l
東平遺跡	第9地区	第4号住居跡	8C前半		l
東平遺跡	第9地区	第5号住居跡	8C後半		l
東平遺跡	第9地区	第6号住居跡	8C後半	鉄鏃	l
東平遺跡	第9地区	第7号住居跡	9C前半		l
東平遺跡	第9地区	第8号住居跡	8C後半	勾玉	l
東平遺跡	第9地区	第9号住居跡	8C後半	鉄鏃・刀子	l
東平遺跡	第9地区	第10号住居跡	不明		l
東平遺跡	第9地区	第11号住居跡	不明		l
東平遺跡	第15地区	SB01	8C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB02	8C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB03	9C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB04	8C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB05	8C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB07	8C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB08	8C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB09	8C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB10	8C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB11	10C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB12	9C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB13	9C前半	轡・鉄鏃・土馬	m
東平遺跡	第15地区	SB14	8C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB15	8C後半		m
東平遺跡	第15地区	SB16	9C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB17	10C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB18	10C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB19	10C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB20	8C後半		m
東平遺跡	第15地区	SB21	不明		m
東平遺跡	第15地区	SB22	8C前半		m
東平遺跡	第15地区	SB23	不明		m
東平遺跡	第15地区	SB24	9C前半		m
東平遺跡	第16地区	SB01	7C後半		n
東平遺跡	第16地区	SB02	8C後半		n
東平遺跡	第16地区	SB03	9C後半		n
東平遺跡	第16地区	SB04	9C前半		n
東平遺跡	第16地区	SB05	7C後半		n
東平遺跡	第16地区	SB06	7C前半		n
東平遺跡	第16地区	SB08	7C後半		n
東平遺跡	第16地区	SB09	8C後半		n
東平遺跡	第16地区	SB10	不明		n
東平遺跡	第16地区	SB11	7C後半		n
東平遺跡	第16地区	SB13	不明		n
東平遺跡	第16地区	SB14	7C後半		n
東平遺跡	第16地区	SB15	7C後半		n
東平遺跡	第16地区	SB16	不明		n
東平遺跡	第16地区	SB17	7C前半		n

遺跡名	地区名	遺構名	時期	備考	報告書
東平遺跡	第 16 地区	SB18	9C 後半		n
東平遺跡	第 16 地区	SB19	不明		n
東平遺跡	第 16 地区	SB20	7C 前半		n
東平遺跡	第 16 地区	SB21	7C 後半		n
東平遺跡	第 24 地区	第 1 号竪穴式住居跡	8C 前半		o
東平遺跡	第 27 地区	SB01	8C 前半	墨書「布自」	n
東平遺跡	第 28 地区	SB1	7C 前半		p
東平遺跡	第 28 地区	SB2	不明		p
東平遺跡	第 28 地区	SB3	7C 後半		p
東平遺跡	第 28 地区	SB4	8C 前半	刀子	p
東平遺跡	第 28 地区	SB5	7C 前半		p
東平遺跡	第 28 地区	SB6	7C 前半		p
東平遺跡	第 28 地区	SB7	不明		p
東平遺跡	第 28 地区	SB8	7C 前半		p
東平遺跡	第 28 地区	SB9	7C 後半		p
東平遺跡	第 28 地区	SB10	5C 後半		p
東平遺跡	第 28 地区	SB11	不明		p
東平遺跡	第 28 地区	SB12	8C 前半		p
東平遺跡	第 28 地区	SB13	8C 前半		p
東平遺跡	第 28 地区	SB14	8C 後半		p
東平遺跡	第 28 地区	SB15	不明		p
東平遺跡	第 28 地区	SB16	不明		p
東平遺跡	第 30 地区	第 2 号竪穴式住居跡	7C 後半		o
東平遺跡	第 30 地区	第 3 号竪穴式住居跡	不明		o
東平遺跡	第 37 地区－ 2 次	SB01	8C 前半		f

遺跡名	地区名	遺構名	時期	備考	報告書
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB1	10C 前半		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB2	8C 後半		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB3	9C 後半		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB4	8C 前半		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB5	8C 前半		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB6	9C 後半		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB7	8C 後半		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB8	8C 前半		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB9	不明		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB10	8C 後半		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB11	8C 後半		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB12	8C 後半		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB13	不明		q
東平遺跡	第 37 地区－ 4 次	SB14	不明		q
東平遺跡	第 60 地区	SB01	8C 前半		j
東平遺跡	第 60 地区	SB02	8C 後半		j
東平遺跡	第 60 地区	SB03	8C 後半		j
東平遺跡	第 60 地区	SB04	8C 前半	鉄鏃	j
東平遺跡	第 60 地区	SB05	不明		j
滝下遺跡	B 地区	第 1 号住居址	8C 前半	銅製鉈尾	r
滝下遺跡	B 地区	第 2 号住居址	8C 前半		r
滝下遺跡	B 地区	第 3 号住居址	8C 前半		r
滝下遺跡	G 地区	SB01	8C 前半		s
滝下遺跡	G 地区	SB02	不明		s
滝下遺跡	G 地区	SB03	不明		s

報告書

a『沢東 A 遺跡 第 1 次』富士市埋蔵文化財調査報告（2014）富士市教育委員会
b『沢東 A 遺跡第 2 次調査』富士市埋蔵文化財発掘調査報告書－第 4 集－（1995）富士市教育委員会
c『沢東 A 遺跡　－富士不燃建材工業株式会社工場増設に伴う埋蔵文化財第 3 次発掘調査報告書－』（1995）富士市教育委員会
d『沢東 A 遺跡・第Ⅴ地区　第 4 次調査発掘調査報告書』（1997）富士市教育委員会
e『沢東 B 遺跡　埋蔵文化財発掘調査報告書』（1998）富士市教育委員会
f『平成 17・18 年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』（2008）富士市教育委員会
g『中桁遺跡　王子板紙株式会社富士工場製品倉庫新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（2004）富士市教育委員会
h『中桁・中ノ坪遺跡 第 2 地区　株式会社 ABC 新店舗建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査』（2007）富士市教育委員会
i『中桁・中ノ坪遺跡』静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第 24 集（2013）静岡県埋蔵文化財センター
j『富士市内遺跡発掘調査報告書　－平成 24・25 年度－』富士市埋蔵文化財調査報告　第 57 集（2015）富士市教育委員会
k『西富士道路（富士地区）・岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　東平』（1981）富士市教育委員会
l『東平遺跡第 3 次調査』富士市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 3 集（1992）富士市教育委員会
m『東平遺跡　第 15 地区　富士市立伝法小学校校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（2010）富士市教育委員会
n『東平遺跡　第 16 地区（三日市廃寺跡）、第 27 地区発掘調査報告書』（2002）富士市教育委員会
o『東平遺跡発掘調査報告書』（2003）富士市教育委員会
p『東平遺跡　第 28 地区発掘調査報告書』（2001）富士市教育委員会
q『東平遺跡　葬祭場建設工事に伴う東平遺跡第 37 地区 4 次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』（2009）富士市教育委員会
r『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書　－第 2 集－』（1991）富士市教育委員会
s『平成 14・20 年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』（2010）富士市教育委員会

参考文献

植松 章八　2002「東平遺跡の成立と展開」『東平遺跡第 16 地区（三日市廃寺跡）、第 27 地区発掘調査報告書』富士市教育委員会
小野 真一　1957「スルガの国東部古墳群」『沼津長塚古墳』沼津市教育委員会
佐藤 祐樹　2013「東平遺跡・三日市廃寺跡の概要」『富士市内遺跡発掘調査報告書―平成 22・23 年度―』富士市教育委員会
佐藤 祐樹　2014「沢東Ａ遺跡の成立の背景」『沢東Ａ遺跡　第 1 次』富士市教育委員会
佐藤 祐樹・藤村 翔　2013「考古学からみた富士山の噴火と地域社会の変動」『考古学からみた静岡の自然災害と復興』静岡県考古学会 2012 年度シンポジウム
鈴木 敏則　2001「埴輪」『静岡県の前方後円墳－総括編―』静岡県教育委員会
静岡県　1930『静岡県史』第 1 巻
後藤 守一　1922「丁字形利器発見古墳」『考古学雑誌』第 20 巻第 7 号
早野 浩二　2008「古墳時代の鉄鐸について」『研究紀要』第 9 号　愛知県埋蔵文化財センター
富士市　1986『富士市の自然』（富士市域自然調査報告書）
富士市教育委員会　1983『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』
富士市教育委員会　1990『東平第 1 号墳発掘調査概報』
富士市教育委員会　2003『東平遺跡発掘調査報告書』
富士市教育委員会　2010『東平遺跡第 15 地区』
藤村 翔　2011「国久保古墳出土遺物の検討」『平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
藤村 翔　2011「伝法古墳群の構造と展開」『平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
藤村 翔　2012「古墳時代後期初頭における 2 つの首長墓とその評価」『富士市内遺跡発掘調査報告書―平成 11・12 年度―』富士市教育委員会
藤村 翔　2014「富士郡家関連遺跡群の成立と展開」『静岡県考古学研究』No.45
宮城県多賀城跡調査研究所　1996『年報 1995』多賀城跡第 66 次調査
山中 敏史　2005「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題」『地方官衙と寺院－郡衙周辺寺院を中心として－』奈良文化財研究所
吉原市教育委員会　1958『吉原市の古墳』

第２節　中原４号墳の横穴式石室とその歴史的意義

藤村　翔

はじめに

本書で報告された横穴式石室のなかでも、特に中原４号墳については、未盗掘とみられる豊富な副葬品内容もさることながら、深い墓坑と段構造を有する無袖石室として、調査時から注目されてきており、以後の駿河東部地域の横穴式石室の展開を方向づけた資料として、以前から評価されている（木ノ内 1998、井鍋 2003、鈴木 2010 など）。今回の報告において改めて確認された特徴を列記すると、以下のようにまとめられる。

①石室全長 5.6m（西側壁）、奥壁幅 1.0m、開口部幅 1.0m を測る無袖横穴式石室である。

②石室石材には近接する伝法沢周辺で採取されたとみられる河原石が利用され、裏込めは礫と土を併用する。

③開口部に地山の掘り込みと石材（梱石）を用いた段構造を有する。

④地表下に上下二段に掘り込まれた方形の墓坑内に石室空間の大半が収まる構造である。

本節では、今回の報告により新たに公表した図面類をもとに、中原４号墳の築造工程や石室の使用法について検討する。その上で、駿河東部地域において同古墳の横穴式石室が築かれた歴史的な意義についても、先行研究に導かれながら再考してみたい。

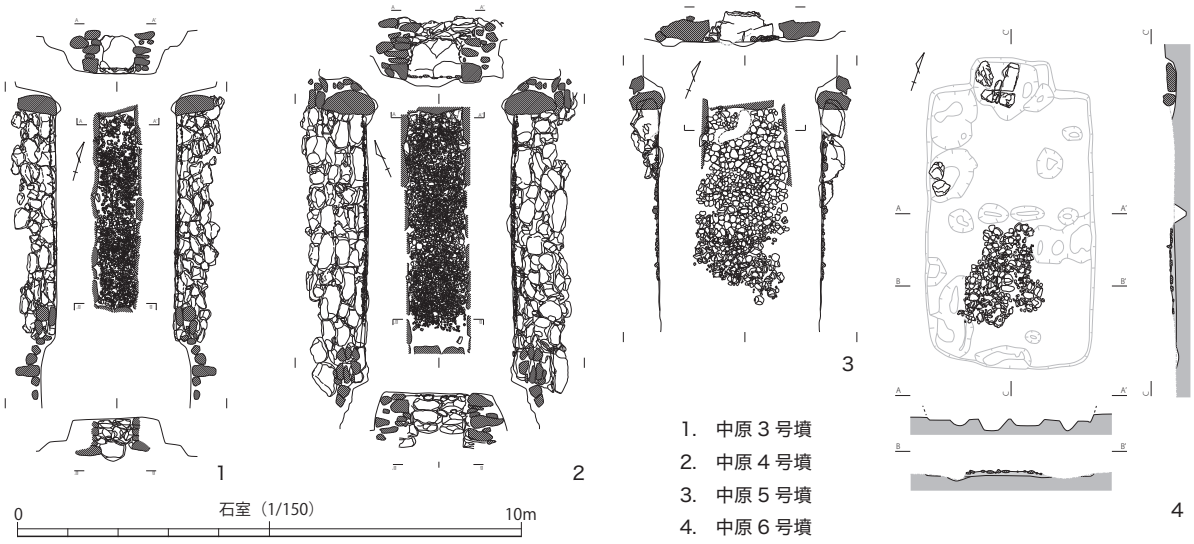
１　中原４号墳の築造工程

(1) 閉塞方法の再検討

横穴式石室の構築手順については、第３章第１・２節（pp.24 ～ 27、44 ～ 49）でも推定されているところであるが、3・4 号墳の段構造の詳細や閉塞、開口部から延びる墓道状の掘り込みについては、残された図面類から推測するのみでは不明な部分も多く、言及できることが少ない。ここでは、調査時の図面から読みとれる情報を基礎としつつも、中原３号墳や周辺諸地域の類例も加味しながら、閉塞や墓道に関する知見を再考してみたい。

４号墳の段構造と問題の所在　４号墳の段構造部分は、石室両側壁の前端に揃える形で、左右２列に基底石を設置している。報文にもある通り、奥からみて左側の石は側壁基底石とかみ合わせているようであり、開口部分の側壁とは同じタイミングで設置されていると判断される。石材の大きさや上端も側壁基底石のそれと近似させている点も、補強材料となるだろう。

しかし、基底石の設置が側壁と同時構築であったとして、２段目以上も同様であったかどうかについては、慎重な判断を要する。段構造の２～３段目は、石室内部側に大きめの石材を配置し、段構造の内側をまさに「前壁」様に整えようとする志向性はうかがえるものの、側壁石材と比べても小型で貧弱な感はぬぐえない。また、



第 160 図　本書報告の横穴式石室

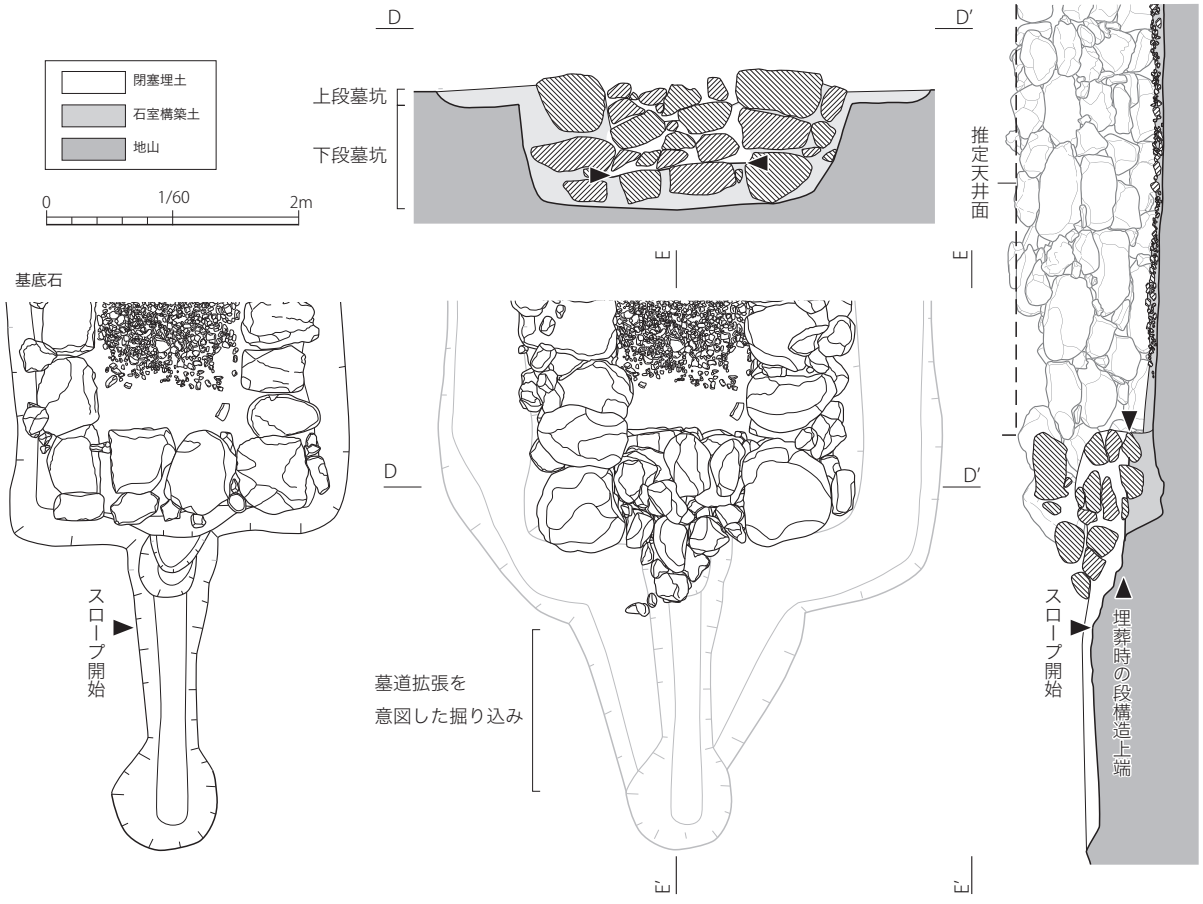
閉塞時に段構造が３段目まで存在したとみる場合、おそらくはこの直上にあたるとみられる天井石との隙間は、推定ながら高さ 0.5m 程しかなく、横口部からの被葬者の埋葬は、不可能とは言わないまでも、非常に困難と判断される。

２段目以上の段構造を理解する上で、開口部に向かってスロープ状に作られた墓道状の掘り込みの存在も、見逃せない。掘り込みは２段で構成され、下段は開口部から直線状に延びた後、前端で円形状となる浅い掘り込みである。上段は平面三角形状を呈し、断面図等はないものの、下段よりもさらに浅い掘り込みとみられる。

残された図面類には、下段掘り込み内の覆土が段構造基底石まで一様に伸び、壁面の裏込め土同様の石室構築土として把握されている（p.45、第 53 図）。図面通りに解釈すれば、他の石室壁面の積み上げと墓坑内への裏込め土の封入にあわせて、段構造の３段目までが構築され、それに伴い上下段の掘り込みも石室構築段階（埋葬前）に埋め殺された、という理解となる。その場合、この掘り込みの機能として、石材の運搬路や祭祀上の導線にかかわる施設の可能性が想定されることになるが、前者は壁面内では最大となる奥壁基底石周囲にそうした作業施設が見当たらない点から、また後者は墓坑まで完掘しても特に埋納遺物などの形跡が見当たらない点から、それぞれ成り立ちがたいものと考える。

段構造と墓道状掘り込みの機能　そうであるならば、一連と評価された段構造背後から墓道状の掘り込みにかけての覆土は、複数回にわたるものと判断する必要がある。段構造の基底石が側壁と同時に設置されたことは動かないことから、筆者は、この基底石の上端で分層し、下層を石室構築時の裏込め土、上層を閉塞時の埋土とすることで、開口部前方の掘り込みを埋葬時に利用した墓道とする案を提示したい（第 161 図）（註 1）。

その理解に立つと、石室構築後、段構造１段目上端に高さを揃えるように墓道を設けたことがうかがわれる。平面図上でも、小規模な掘り込みを重ねることで高さ調節を意図したことが推定されるが、断面図をみれば、さらにその前方からスロープが開始されていることがわかる。段構造の基底石や２段目の上端が墓道面と揃う



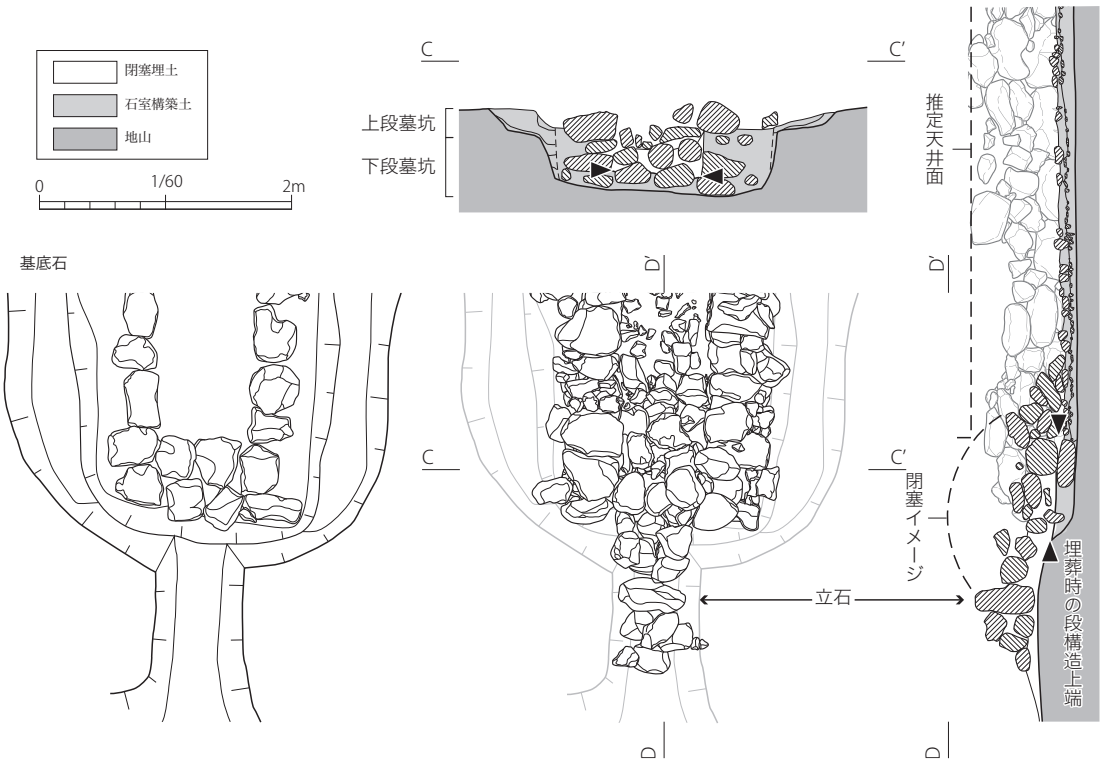
第 161 図　閉塞方法の検討（４号墳）

例は当地域においてもいくつか確認できることから（第163図）、4号墳のみならず、3号墳（第162図）においても、そのような理解が首肯されよう。

石室壁面の構築とともに平面方形の墓坑は埋められ、天井石の架構と墳丘盛土構築時には開口部付近も石室内に土が流入しない程度に埋められていたと考えられるが（第164図f）（註2）、平面三角形状の上段の掘り込みの存在は、幅1.0m、推定高0.8m程度の狭小な開口部の前面を少しでも広げようとする意図が感じられる。被葬者の埋葬や副葬品の配置とそれにまつわる一連の儀礼を執行するなかで、開口部にも一定の空間は不可欠であり、上下二段の墓道が設けられたものと推察されよう（第164図g）。

閉塞　閉塞時には、閉塞石（段構造2段目以上）が天井石最前面まで積まれ、墓道も土によって埋められる。段構造の直上の閉塞石は、周辺の古墳を含めて、石室内部側は面を揃えて1～2段分が丁寧に積まれる傾向にある。こうした造作が、当地域において入口部に壁状の構築物（段構造）があると認識されるに至った一因であろう。塊石多段積みの段構造の場合、本例や3号墳（第162図）のように埋葬時には1～2段程しか積んでいないものが大半を占めるとみられる（第163図）。また、閉塞石も虎杖原古墳（第163図1）のように段構造の石室内部側に面を揃えて完結させる場合もあれば、中原3号墳のように段構造の前後にまたがって積まれる場合があるが、後者は、追葬を経てそのようになった場合も考慮しておく必要があるだろう。

なお、当地域の横穴式石室の埋葬・閉塞方法をめぐり、埋葬時に入口側天井石の開閉を想定する意見もあるが、開口部の高さが0.7m前後確保できるような石室であれば、被葬者を運び入れることは十分可能とみられる。武蔵南部地域の段構造を有する河原石積み石室を調査・分析した松崎元樹氏も、やはり当地域と同じような閉塞方法の解釈が提示されていた瀬戸岡古墳群において、墓道や閉塞埋土の詳細な観察から、段構造の石積みの多くは閉塞時や追葬時の石材であることを突き止め、通有の横穴式石室と大きく変わらない、横口部分からの出入り・閉塞であったと結論付けている（松崎2001）。特に、他地域から遅れて6世紀後葉に横穴式石室を本格的に導入した駿河東部地域においては、列島内からの2～3次的伝播によってその石室形態や埋葬原理を採用していったことが推測されるのであり、その段階において、天井石の開閉のような葬法が生み出される蓋然性は低いと判断される。



第162図　閉塞方法の検討（3号墳）

3号墳閉塞前面の立石　3号墳は段構造の前方1.2 mの墓道内に、幅0.55 m、高さ0.5 m、厚さ0.2 m程の石材を立てて設置されていることが特筆される。おそらく、この立石へと閉塞の前面や石室の入り口をあらわす象徴的な機能が付与されていたと考えられる。後期の横穴式石室において、塊石閉塞の前面付近にこうした大型の立石が配される例はあまり知られていないが、同じく竪穴系横口式石室あるいは有段の無袖石室が集中することで知られる大和・葛城地域の寺口千塚古墳群では、閉塞石の上方において、板石状の大型石材が立てて設置される例が存在する（第167図5）。同地域と駿河東部地域の竪穴系横口式石室や有段の無袖石室については、渡来系技術者にかかわる職掌のような、互いに共通した導入の背景を想定する意見も提示されているところであり（鈴木2003・2010、大谷2010）、閉塞という行為の中の一部とはいえ、注意しておく必要がある。

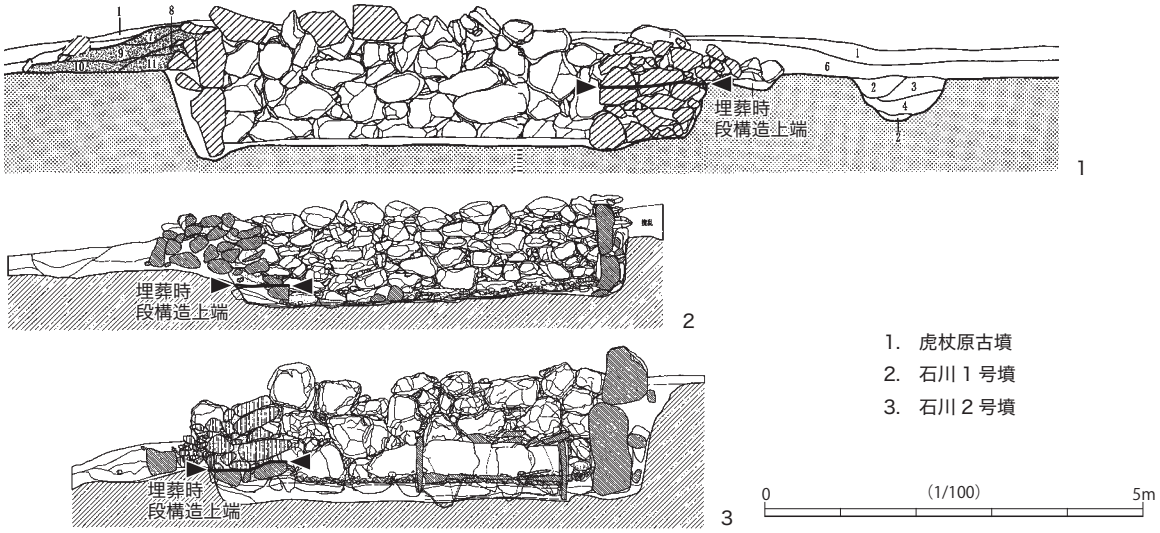
駿河東部地域においては、段構造部分に床面からの高さが0.8 mから1 m以上となるように大型の石材を横位に立てて配した例（框石）が、実円寺西1号墳や比奈G-74号墳（第166図6・10）といった富士山南麓地域の6世紀末～7世紀前半代の古墳において確認されている。比奈G-74号墳では、奥壁基底石と上端レベルを揃えて設置されており、その高さが側壁構築における工程上の画期としても捉えられる。中原3号墳の立石は、壁面構築には直接関係はないとみられるものの、上端の高さはやはり奥壁基底石の高さや、後述する下段墓坑の上端高を意識した印象を受けるのであり、こうした造作が、同時期あるいは後出する実円寺西1号墳や比奈G-74号墳例のように埋葬空間内の「前壁」を象徴するものにつながっていった可能性を考慮してもよい。また、3号墳ほど目立つ石ではないものの、墓道上・閉塞前面付近にやや大きめの石材や立石を配する例は石川1・2号墳などでもみられ（第163図）、石室入口や閉塞の正面をわずかながら象徴する用法も、形を変えて残っていったとみられる。

(2) 築造工程の復元

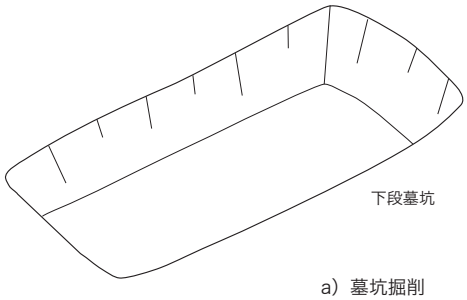
前段で得た閉塞の知見も踏まえ、4号墳の築造工程を整理しておきたい（第164図）。

a）墓坑掘削　石室壁面が平面・高さともにほぼ収まる深さの方形の墓坑が掘削される（下段墓坑）。このとき、段構造を含めた石室内空間の法量も想定の上で、最低限の規模の墓坑を用意していることは注意される。（註3）

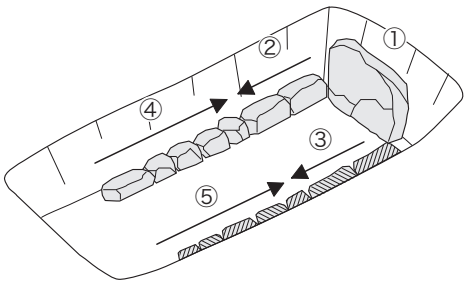
b）奥壁・側壁基底石の設置　奥壁基底石を置いた後、側壁基底石を奥から7石目まで配置する。側壁基底石は、奥壁側の2石と右側壁の最前面にやや大型の石材が長手を向けて用いられる。おそらくは両側で奥2石分を置いた後、予定されていた寸法（註4）に基づいて奥から7石目が置かれ、残りの基底石は手前から順に配置したとみられる。そのことを示すように、両側壁とも奥から3石目は、隙間を埋めるように小型の石材が小口を向けて用いられている。このような側壁基底石の配置順序は、類似した石室形態・大きさの虎杖原古墳でも想定されており（笹原2003）、興味深い。



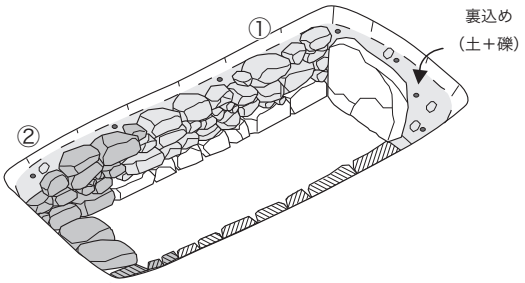
第163図　閉塞方法の類例



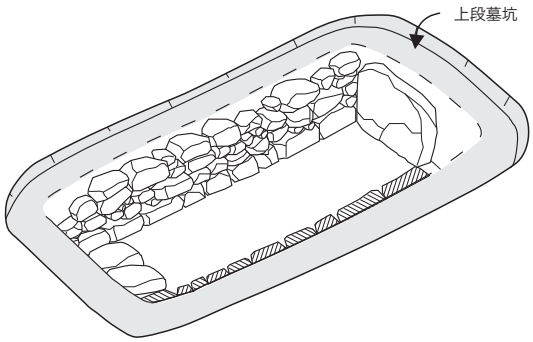
a）墓坑掘削



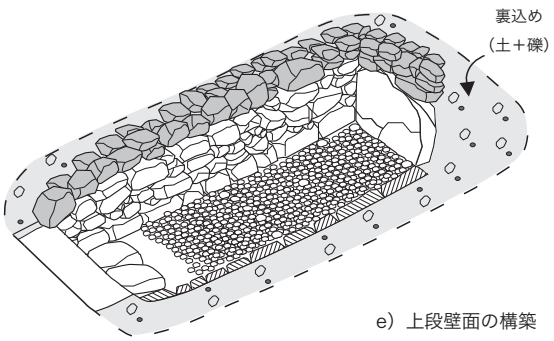
b）奥壁・側壁基底石の設置



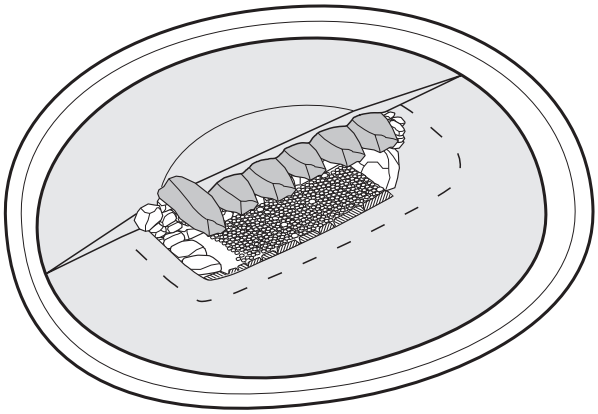
c）下段壁面の構築と梱石の設置



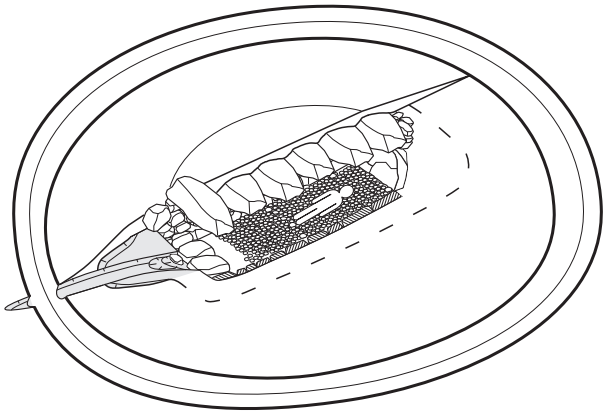
d）墓坑拡張



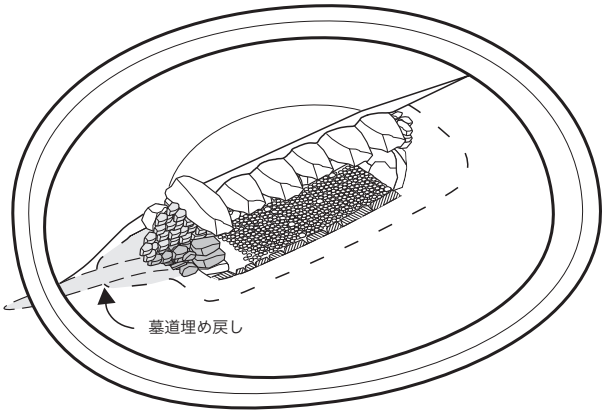
e）上段壁面の構築



f）天井石架構と周溝掘削・墳丘盛土



g）墓道掘削・埋葬



h）段構造追加・閉塞

第 164 図　4 号墳構築過程の復元

c）下段壁面の構築と梱石の設置　奥壁基底石上端レベルまで、工程ｂにおいて側壁基底石を据えた部分から先行して側壁が積み上げられ（ｃ-①）、墓坑の内壁との間には土や小礫が裏込めとして充填される。これについては報文にもある通り（p48）、奥から７石目の基底石前端から奥壁側に向かって斜め上方に通る目地を重視し、この前後で壁面構築の工程が分かれることを想定した。その後、入口側の側壁についても同じレベルまで積み上げられるが、段構造部分については、基底石（梱石）が置かれるにとどめられる（ｃ-②）。両側壁の開口部については大型の石材の使用が目立っており、石室入口の正面観を意識して石材が選択されたものと考えられる。

d）墓坑拡張　奥壁基底石上端レベルよりも上段の壁面石材の控えを確保することを目的に、墓坑の上方が拡張される（上段墓坑）。厳密に上段墓坑の掘削時期を特定することは困難であるが、作業効率を考慮し、上段壁面の構築の直前とした。

e）上段壁面の構築　奥壁基底石の上端レベルよりも上段の壁面について、今度は上段墓坑の上端レベルに揃えて構築する。４号墳同様に墓坑内に石室壁面の大半が収まり、築造時期も近い船津寺ノ上１号墳でも天井石は墓坑上端レベルの直上に架構されることから、以下、４号墳の墓坑と壁面・天井石の関係も同様のものと推定した。

f）天井石架構と周溝掘削・墳丘盛土　４号墳発見時には天井石の一部とみられる石材が存在したようであるので（p44）、残存する壁面上端に天井石やその裏込め石が載っていたものと想定される。また、虎杖原古墳の状況を参考に、天井石を薄く覆う程度の盛土を想定した。天井石は、左側壁最前端、下から３段目の大型の石材付近までは架構されたものと推測される。墳丘盛土には、墓坑掘削土や周溝掘削土が利用されたのであろう。

g）墓道掘削・埋葬　埋葬に先立ち、墳丘外から石室内・梱石上端をめがけてスロープ状に下降する墓道が掘削され、開口部の墳丘も削られて入口周辺が整備される。その後、被葬者および副葬品の搬入がおこなわれる。

h）段構造追加・閉塞　梱石の上部に石材が土とともに２段分丁寧に積まれ、墓道が埋められる。さらに大小の塊石によって天井石まで積み上げられ、閉塞が完成する。

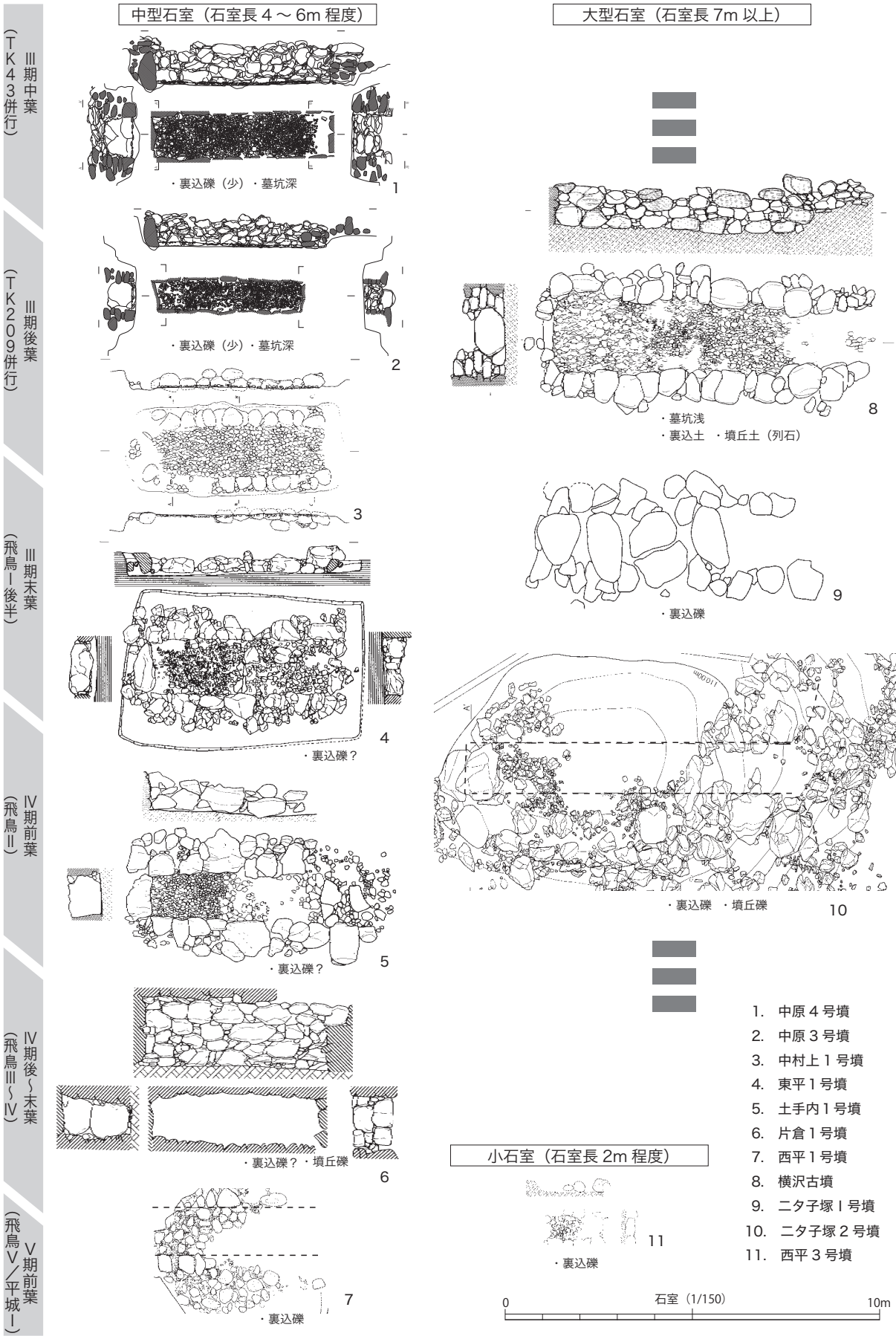
２　駿河東部地域のなかの中原４号墳

（1）伝法古墳群の横穴式石室

伝法古墳群の理解　中原４号墳は、伝法沢川の周辺とその東側の低丘陵部に６世紀後葉から８世紀初頭にかけて広く展開する伝法古墳群（藤村 2011）のひとつとして捉えられる。伝法古墳群の横穴式石室は、現状ではすべて有段の無袖石室で占められており、中原４号墳はその最初期の古墳であることから、その後の伝法古墳群や同じく有段の無袖石室が広く発達する駿河東部地域に与えた影響は非常に大きいものと推定される。ここでは、古墳群内の横穴式石室の展開を整理しておきたい（第 165 図）。

伝法古墳群の石室の特色　まず、駿河東部地域の横穴式石室は、石室全長により、大型石室（7 m以上）・中型石室（4 ～ 6 m程度）・小石室（2 m程度）におよそ大別され（井鍋 2008）、遠江Ⅲ期中葉からⅤ期（陶邑 TK43 型式併行期から平城Ⅰ期）にかけて展開する。中原４号墳は中型石室の導入期の例として位置づけられるが、この時点で大型の奥壁基底石や開口部側壁石材を用いる点や、深い方形（竪穴状）の墓坑を有する点、裏込めに礫を用いる点といった、その後１世紀以上にわたり造られた古墳群の横穴式石室に通じる要素を揃えている点は、重要である（前田 2008、菊池 2010 など）。同等規模の石室の比較を通してその特徴を評価するならば、特に中型石室や小石室に広く浸透したとみられる。特に中原４号墳のような深い墓坑を有する石室は、その低い墳丘から、古墳構築に伴う労力自体も最小限におさまる（菊池 2010 など）。浅い墓坑で盛土を多く用いる古墳とは、構造的な階層差がすでに生じていると判断される。

大型石室についてみると、現状で最も古い６世紀末頃築造の横沢古墳では墓坑が浅く、裏込めに礫が用いられず、盛土主体で築かれたことは当地域では特徴的といえる。やや時期が下るが、中里・須津古墳群の千人塚古墳や土狩古墳群の原分古墳といった駿河東部地域の大型石室を採用する古墳で散見されるが、伝法古墳群ではその後、裏込めに礫を多用する大型石室が築造される。二タ子塚２号墳は、近年の調査成果から一色古墳群の実円寺西１号墳と共通した主軸断面Ｌ字形の浅い墓坑の存在が推定され、裏込めから墳丘にかけて多量の礫が使用されたことが想像される。こうした裏込めに礫を多用



第 165 図　伝法古墳群の横穴式石室

する石室は、愛鷹山南麓地域でも中里 K-95 号墳や船津寺ノ上 1 号墳、虎杖原古墳などでも散見されるものの、伝法古墳群や岩淵・木島古墳群、一色古墳群といった富士川河口部周辺の古墳に圧倒的に集中する。中原 4 号墳はそうした展開を方向付けることとなった古墳であることに相違はないが、7 世紀以降の伝法や岩淵・木島といった富士川氾濫原両岸の古墳をみれば、積石塚を彷彿とさせるような、墳丘そのものにも礫を多用する古墳が規模の大小を問わず築造されることも重要である。

交通の結節点　このような石室構築の背景には、富士山西麓や富士川を通って本地域とつながる甲斐地域（甲府盆地）の横穴式石室との関連を指摘しておきたい。甲府盆地では袖の有無を問わず、裏込めに礫を多用する横穴式石室が数多く築かれているほか、6 世紀代まで積石塚が築かれる（小林 2010）。駿河東部地域の内部においても、仕切石や箱形石棺の有無に代表されるように（大谷 2010）、東西で異なる展開を示しているが（第 166 図）、西半部を特徴づける要素として裏込めに礫を多用する点は重要であり、その背景には、富士山西麓を隔てて甲府盆地への玄関口として機能した地域の特性があったと考えられるのである。この点については、中原 4 号墳のような列島東部に展開した有段無袖石室の被葬者層の性質にかかわる問題として評価できるので、後述したい。

（2）富士山南麓・愛鷹山南西麓の横穴式石室

駿河東部地域といえば、一般に富士川流域から黄瀬川流域の範囲を指し、当該地域全体に階層の上下を問わず、無袖石室が広く普及している。中原 4 号墳を嚆矢とする段構造のものが、床面が平らなものに対して数量も多く、全域に分布する。一方で、先述の通り東西の地域差も存在し、裏込めに礫を用いるものや仕切り石を備えるものは富士川流域に、箱形石棺を備えるものは黄瀬川流域にそれぞれ分布の中心をもつとみられる（註 5）。

駿河東部地域のなかではその西半部（現在の富士・富士宮市域）にあたる、富士山南麓から愛鷹山南西麓には 6 世紀後葉から 8 世紀初頭にかけ、総数 800 基にのぼる古墳が造られたとみられる。それらは河川や丘陵によって区分される小地域単位で古墳群を形成しており、伝法古墳群はその西側の一角に位置する。

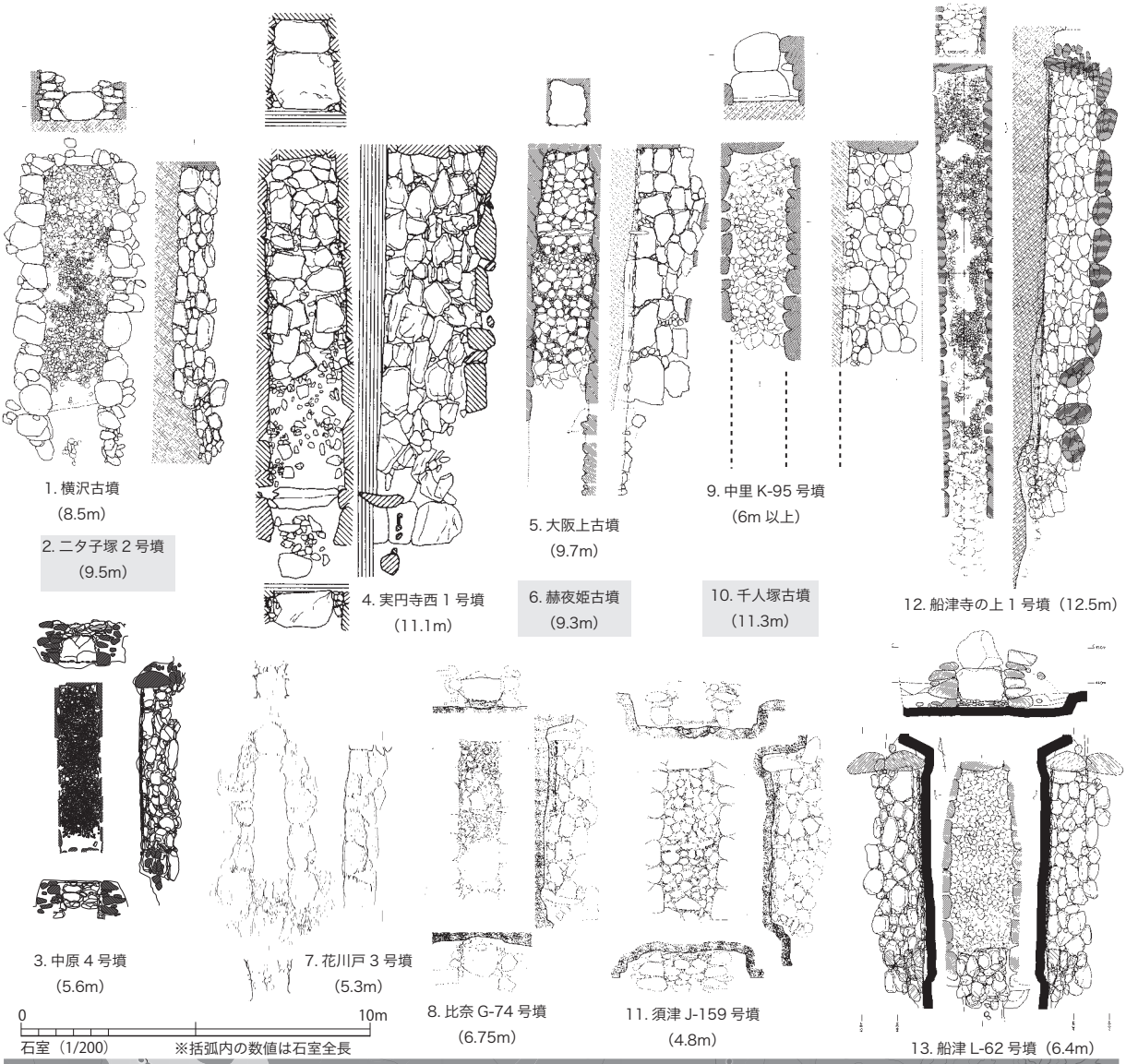
無袖石室の階層構造　駿河東部地域の無袖石室の階層構造については、石室全長 10 mを超える大型の無袖石室を頂点として、その下に中型石室や 7 世紀後半以降はこれに小石室も加わるヒエラルキーが想定されている（井鍋 2003）。ただ、当地域で重要なのは、菊池吉修も指摘している通り、最上位階層が同時期に複数存在する点であろう（菊池 2010）。

少なくとも 6 世紀末頃（TK209 型式併行）には 10 m前後の大型石室と 4 ～ 6 mの中型石室の間に階層構造が生まれ、後者はさらに副葬品内容によっても分化する。伝法古墳群では、7 世紀前半に銀象嵌大刀や丁字形利器、金銅装馬具などを有する東平 1 号墳や、銀装大刀や多量の鉄鏃、鉄鐸、雁木玉などを有する国久保古墳は、ともに石室全長は 5 m前後であるが、これらのさらに上位には二タ子塚 2 号墳が位置づけられるし、下位には副葬品の質で劣る土手内 1 号墳クラスの古墳が位置づけられるのである。こういった階層構造が、各小地域の古墳群単位で少なくとも 7 世紀中頃（飛鳥Ⅱ）まではうかがえるが、大型石室も各古墳群で 1 世代限りというわけではなく、岩淵・木島や伝法、比奈・富士岡、中里・須津では群内で 2 ～ 3 世代ほど続けて築かれたものとみられる（第 166 図）。

階層構造の実態　前段に挙げた状況は、各古墳群単位で駿河東部地域全体（あるいは西半部）の首長権が輪番的に回されたという理解ではなく、古墳群をまとめる指導者クラスが当該時期に並立し、彼らがそれぞれの群の集団を取り仕切っていたことを想起させる。

一古墳群内でも多様な形式のみられる装飾付大刀をはじめ、優位の副葬品目が各小地域に分散し、それらが中型石室からも多く副葬される点も重視するならば、各古墳群の集団単位やそのなかの個人レベルで、ヤマト王権を構成する有力氏族や地域の大首長層などと直接関わり、その恩恵を受けていた結果として、前段冒頭に述べた階層構造が表出されるにいたったと考えられよう。

時勢によって、駿河東部地域内の集団間の優劣はあったのであろうが、地域全体を統べるような支配者層の墳墓は当地域内には存在しないものと評価される。鈴木一有は中原 4 号墳と黄瀬川流域の原分古墳の副葬品や石室・石棺から得られる被葬者像から、駿河東部地域を王権に出仕・奉仕する、令制下の舎人に相当する人格を累代的に輩出した、王権直属の地域とする見解を導いたが（鈴木 2010）、駿河東部地域の各古墳群の様相からも、同じような成立背景を想定することができるとみられる。



第 166 図　富士山南麓〜愛鷹山南西麓の大型石室と中型石室

地域首長を介した王権とのかかわり　当地域の集団と関連しそうな地域首長層の候補としては、隣接する駿河中部地域や甲斐地域の大型横穴式石室墳が想定される。前者には6世紀後葉以降に伊豆凝灰岩製の家形石棺を有する畿内系の両袖石室を相次いで採用した賤機山古墳や駿河丸山古墳が、後者には長大な片袖形で東国最大級の横穴式石室を有する姥塚古墳・加牟那塚古墳が該当する。

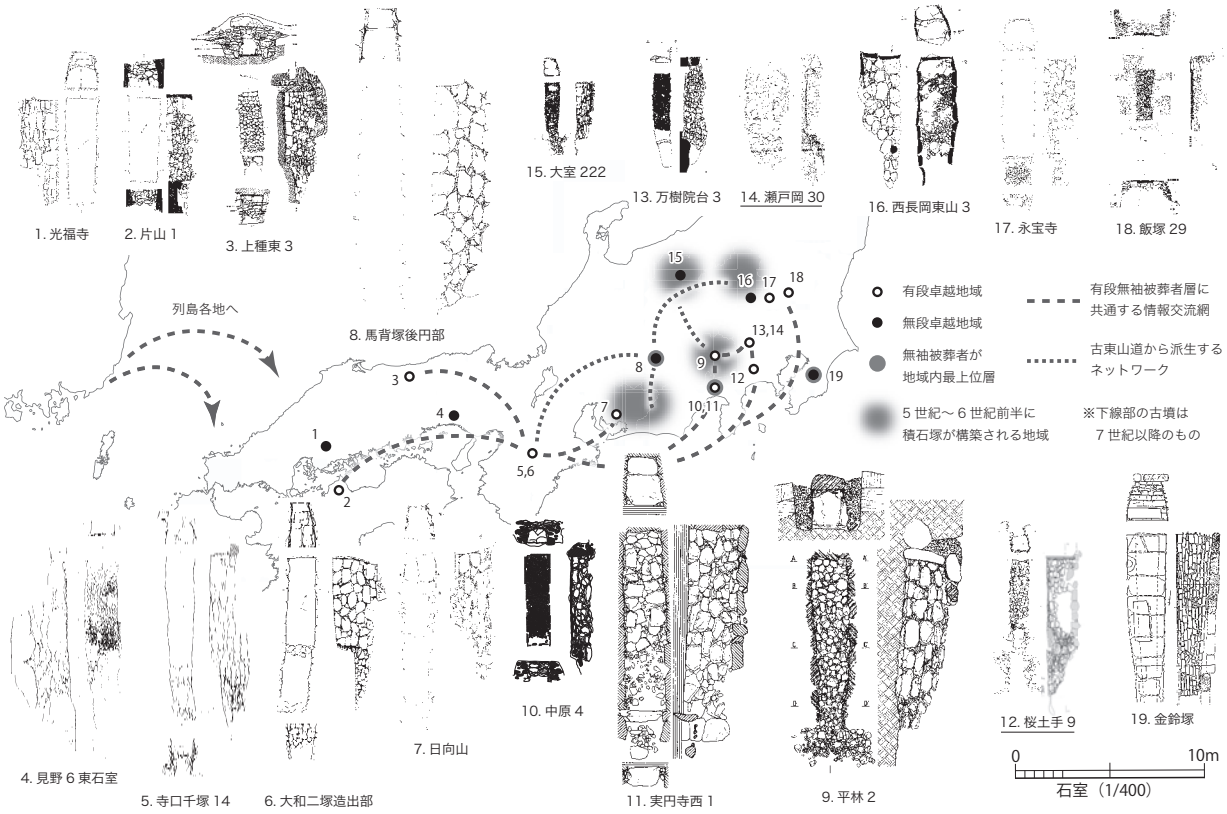
両地域の首長墳ともに前方後円墳ではなく大型の円墳であることも、その内部主体にかかわる要素以外にも王権との関わりを示唆する大首長墳である。

家形石棺を有する原分古墳に駿河中部地域の首長層との関連性が想定されるのであれば（鈴木2010）、裏込めや墳丘に礫を多用する古墳の多い富士山南麓を中心とする集団については、甲斐地域と共通した石室構築技術のあり方から、両地域の集団間における活発な交流を指摘しておきたい。その際、富士山西麓の交通路や富士川が両地域をつなぐ際に重要な役割を果たしたと考えられよう。特に富士山西麓を通る交通路は中近世には中道往還とも呼ばれ、駿河湾の新鮮な魚介類を早馬で甲府へと送る最速のルートとして使用されているのであり（山梨県立博物館編2008）、古代以前も駿河―甲斐地域間の最速の道として、重視されていたことが想像される。石室構造の類似性とともに、甲斐地域と富士川流域の狭い範囲で「東日本専有型式」（内山2003）である腸抉三角形式の長頸鏃がみとめられる点や、甲斐地域から愛鷹山南麓において鷹匠を彷彿とさせる桂甲付属具の籠手のみを副葬する古墳がみられる点も、上記の理解と親和的であろう。

王権と密接につながった駿河中部・甲斐地域の両大首長層を介することで、駿河東部地域の諸集団は6世紀後葉から7世紀代にわたり、さまざまな面で王権への奉仕を遂行していたとみられる。

3　無袖石室の列島的展開と中原4号墳

6世紀後葉の意味　駿河東部地域に中原4号墳が築かれた6世紀後葉（TK43型式併行期）という時期は、ヤマト王権が主導する横穴式石室の形態と規模によって表現される階層秩序の整備が飛躍的に前進する時期であると考えられている。広瀬和雄は畿内中枢地域の藤ノ木古墳や烏土塚古墳といった巨大な（両袖の）横穴式石室が王権中枢のステータスシンボルと化す一方、畿内地域の群集墳の石室には規模や片袖といった形態差によって階



第167図　6世紀後葉を中心とした無袖石室の展開

層性が表現されていったとみるほか（広瀬 2001）、鈴木一有は 6 世紀後半以降に九州から東北南部の広い範囲において、石室の形態と規模によって被葬者の社会的位置が示される状況が形成され（鈴木 2011）、東海地域においては古東山道や古東海道ルートで畿内系の両袖石室が展開することを指摘している（鈴木 2001 など）。

無袖石室自体は一般に中小の古墳に採用されることの多い下位階層の墓制であり（土生田編 2010）、当該期に王権によって規定された階層システムに組み込まれることで、列島の広範囲に展開をみせていったことが想定されるのである（第 167 図）。

無袖石室の展開と王権　東海地域以東では、5 世紀から 6 世紀前半に積石塚の古墳群が形成された地域（古東山道ルートとその周辺）や九州や朝鮮半島起源の竪穴系横口式石室が導入された地域を軸として、6 世紀前半代に飛騨地域や三河地域、遠江地域、信濃地域、上野地域などで無袖石室が展開する。それに対して、6 世紀後半以降、新たに有段の無袖石室が築かれる地域には、前代までに王権によって形成された交流網の延長・補完を目的とするような意図が看取される。

特に相模・武蔵南部・下野の各地域における有段の無袖石室の導入経路については、駿河東部を含む東海地域を介した太平洋沿岸（古東海道）ルートが想定されているところである（松崎 2001、植山 2010、草野 2010、市橋 2010）。そうした情勢と前後して、中原 4 号墳の被葬者のようにヤマト王権と密接な関係を有した渡来系技術者集団の指導者層（鈴木 2010）が新天地に生まれる意味を再考するならば、当該期の甲斐・駿河東部地域以東における有段無袖石室の広がりも、王権による渡来系集団の再編と諸地域への配置を通じた東国への影響力の拡大を狙う一連の政策としての側面があったとみられる。その上で、前項で検討した駿河―甲斐地域を結ぶ経路に、古東山道と古東海道を結ぶ支道としての役割が付与され、ヤマト王権による東国経営の前線として 7 世紀代まで機能することとなったと考えたい。

地域内最上位の無袖石室被葬者の役割　地域内最上位層に無袖石室が採用された駿河東部・南信・上総の諸地域は、新旧の街道を結んだり、海上交通を意識した要衝であったりする点において共通する。各地の首長層の配下に置かれた無袖石室被葬者層には馬匹生産や鉄器製作を担った技術者集団に直結する事例が知られるが（大谷 2010a）、地域内最上位となる無袖石室被葬者層には、そうした技術者集団を統括する一方で、交通路を掌握することで生産物の流通も担う働きが期待されていたことが推測される。地域内最上位の無袖石室被葬者層の性質は、多種にわたる須恵器や農工具、武器類を取り揃えた中原 4 号墳の被葬者の性格を考えるうえでも、多くの示唆に富んでいる。

おわりに

中原 4 号墳の横穴式石室から派生する問題について、雑駁ながら検討してきた。塊石多段積みの段構造においては、埋葬時には 1 段目が積まれるのみで、閉塞時に壁状に仕上げられたことを指摘した。また駿河東部地域において群集墳内の指導者層が古墳群単位で並立した状況から、隣接する甲斐地域や駿河中部地域の大首長層を介してヤマト王権の管理下に置かれていたことを想定した。最後に 6 世紀後葉前後における無袖石室の拡散のなかで、特に有段の無袖石室が王権による階層分化政策や東国経営と一体となり展開した可能性を指摘した。

中原 4 号墳の石室は、段構造の仕上げを除けば、埋葬原理自体は通有の横穴式石室と共通したものであるといえる。おそらくは下位階層を対象とした古墳構築の省力化を目指す試みの中で、渡来系の出自を示す積石塚の裏込め技法などの伝統を引き継ぎ、6 世紀代に創出された石室形態なのであろう。当該期の駿河湾岸には、在地の墓制として前代から引き継がれた竪穴式石槨（礫床）に横口を取り付けたような埋葬施設も存在したが（池谷ほか 2015）、後代にはより横穴系埋葬原理に適した中原 4 号墳のような構造が残ることとなった。4 号墳石室はそうした在地の延長上の埋葬施設とは一線を画する構造であり、その導入契機も、より広範な視野で引き続き検討していく必要がある。

註

1　段構造 3 段目の上端から発する土層線を活かし、第 161 図の主軸断面上の「スロープ開始」点につなげる分層線を想定して、それより上を閉塞石・閉塞埋土と考えることもできるかもしれないが、その場合、段構造 3 段目の開口部側の石材が墓道状の掘り込みの床面から遊離する点が問題となる。スロープ状掘り込みの機能は、段構造の上端を揃えるための掘り方と考えられるが、他の壁面の基底石が総じて掘り方に接することをみると、ここだけ遊離するほど深く掘り込む必要性は感じられない。

2　逆に、石室完成時に開口部周辺が上段墓坑を残してオープンスペースだったとすると、既に一定の空間が確保されているわけで

あるから、三角形状の上段掘り込みをわざわざ設ける必要性がなくなるものと判断される。

3　6世紀代から7世紀前葉にかけての横穴式石室に当てはまる例の多いとされる高麗尺（1尺＝約36cm）相当の単位で割り付けた場合（和田1992）、下段墓坑は17尺×7尺、石室内は13尺×3尺で設計されたことが想定される。

4　註3の理解を踏襲すれば、奥からちょうど11尺までが先行して構築される壁面となる。

5　ただし、それぞれの分布圏が明確に分かれるという性質のものではなく、富士川西岸の妙見F-1号墳や室野坂A1-2号墳の組合式箱形石棺のように、一方の主体分布域にも他方の要素がモザイク状に確認できる事例があるので、あくまで分布の傾向としての特徴である。

参考文献

池谷 信之・北 佳奈子　2015『松長6号墳発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書　第110集　沼津市教育委員会

市橋 一郎　2010「下野」土生田 純之編『東日本の無袖横穴式石室』（株）雄山閣

井鍋 誉之　2003「東駿河の横穴式石室」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会

井鍋 誉之　2008「古墳時代終末期における駿河東部の有力古墳」井鍋編『原分古墳　調査報告編』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第184集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

植山 英史　2010「相模」土生田 純之編『東日本の無袖横穴式石室』（株）雄山閣

内山 敏行　2003「古墳時代終末期の長頸鏃　－東日本における棘関長頸腸抉鏃の評価－」七世紀研究会編『七世紀研究会シンポジウム　武器生産と流通の諸画期』

大谷 宏治　2010a「副葬品からみた無袖石室の位相－東海～関東を中心に－」土生田 純之編『東日本の無袖横穴式石室』（株）雄山閣

大谷 宏治　2010b「古墳時代後期～終末期の古墳について」大谷編『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第231集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

菊池 吉修　2010「駿河」土生田 純之編『東日本の無袖横穴式石室』（株）雄山閣

木ノ内 義昭　1998「前壁状の封鎖施設を有する横穴式石室の意義－富士・愛鷹山南麓を中心に－」『静岡の考古学　植松章八先生還暦記念論文集』静岡の考古学編集委員会

草野 潤平　2010「武蔵」土生田 純之編『東日本の無袖横穴式石室』（株）雄山閣

小林 健二　2010「甲斐」土生田 純之編『東日本の無袖横穴式石室』（株）雄山閣

笹原 千賀子　2003『寺林遺跡・虎杖原古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第142集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

鈴木 一有　2001「東海地方における後期古墳の特質」『第8回東海考古学フォーラム三河大会　東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム

鈴木 一有　2003「東海東部の横穴式石室にみる地域圏の形成」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会

鈴木 一有　2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」土生田 純之編『東日本の無袖横穴式石室』（株）雄山閣

鈴木 一有　2011「横穴式石室」一瀬 和夫ほか編『古墳時代の考古学3　墳墓構造と葬送祭祀』（株）同成社

土生田 純之編　2010『東日本の無袖横穴式石室』（株）雄山閣

広瀬 和雄　2001「7世紀の畿内首長層の動向－横穴式石室と横口式石槨の変遷をとおして－」『第8回東海考古学フォーラム三河大会　東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム

藤村 翔　2011「伝法 国久保古墳の調査」藤村・若林美希編『平成13年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会

前田 勝己　2008「富士市中原第4号墳」『東国に伝う横穴式石室－駿河東部の無袖式石室を中心に－』静岡県考古学会

松崎 元樹　2001「瀬戸岡古墳群の再検討」松崎ほか『東京都あきる野市天神前遺跡　瀬戸岡古墳群　上賀多遺跡　新道通遺跡　南小宮遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告　第95集　東京都埋蔵文化財センター

山梨県立博物館編　2008『甲州食べもの紀行－山国の豊かな食文化－』山梨県立博物館

和田 晴吾　1992「群集墳と終末期古墳」『新版　古代の日本』第5巻　近畿Ⅰ　（株）角川書店

図版の出典

第160～162図　本書報告遺構図を基に筆者構成

第163図　1:笹原2003文献、2～3:荒井玲子・鶴田晴徳　2006『石川古墳群』沼津市文化財調査報告書　沼津市教育委員会を基に筆者加筆

第164図　筆者作成

第165図　1～2:本書、3:藤村翔ほか2010『東平遺跡　第15地区』富士市教育委員会、4：久松義昭1991『東平第1号墳発掘調査概報』富士市教育委員会、5：平林将信編1981『西富士道路（富士地区）・岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　東平』富士市教育委員会、6・9:渡井義彦1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』富士市教育委員会、7・11：志村博ほか2003『東平遺跡発掘調査報告書　第4地区（西平1号墳）ほか』富士市教育委員会、8:平林将信・志村博1981「横沢古墳」『西富士道路（富士地区）　岳南広域都市計画道路田子浦臨港線　埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会、10：佐藤祐樹・若林美希編2015『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成24・25年度－』富士市教育委員会

第166図　4:前掲（渡井1988）、5:後藤守一・中野国雄ほか1958『吉原市の古墳』吉原市教育委員会、7：志村博2003『花川戸第2・3号墳発掘調査報告書』富士市教育委員会、8：前掲（佐藤・若林編2015）、9：植松章八ほか1975『中里大久保（K第95号）古墳』富士市教育委員会、11：大谷宏治編2010『富士山・愛鷹山麓の古墳群』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所、12：平林将信・渡井義彦1987『船津寺ノ上第1号墳　発掘調査報告書』富士市教育委員会、13：藤村翔ほか2013『船津古墳群Ⅱ』富士市教育委員会

第177図　1・3山崎信二1985『横穴式石室構造の地域別比較研究－中・四国編－』、2：谷若倫郎ほか1984『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター、4：南部裕樹ほか2011『姫路市見野古墳群発掘調査報告』立命館大学文学部学芸員課程研究報告、5:坂靖編1991『寺口千塚古墳群』奈良県教育委員会、6：伊達宗泰ほか1962『大和二塚古墳』奈良県教育委員会、7：小笠原久和1988『日向山古墳発掘調査報告書』幸田町教育委員会、8:飯田市教育委員会編2007『飯田における古墳の出現と展開－資料編－』、9：吉岡弘樹ほか2000『平林2号墳』山梨県埋蔵文化財センター、10・11：前掲（本書、渡井1988）、12：吉田章一郎1989『神奈川県秦野市桜土手古墳群の調査』桜土手古墳群発掘調査団、13：日野市史編纂委員会1984『日野市史資料集』考古資料編、14：松崎2001文献、15：大塚初重ほか2006『信濃大室積石塚古墳の研究Ⅱ』東京堂出版、16:天笠洋一1991「西長岡東山古墳群（第Ⅲ次）A区」『埋蔵文化財発掘調査年報1』太田市教育委員会、17：足利市教育委員会文化課2004『平成14年度文化財保護年報』、18：鈴木一男1999『飯塚古墳群Ⅲ』小山市教育委員会、19：滝口宏編1981『上総金鈴塚古墳』臨川書店

第３節　中原４号墳の埋葬と儀礼

田村 隆太郎

はじめに

富士市中原４号墳は、東駿河において初現期となる横穴式石室の古墳であり、多くの生産用具を含む特徴的で豊富な副葬品が注目される。

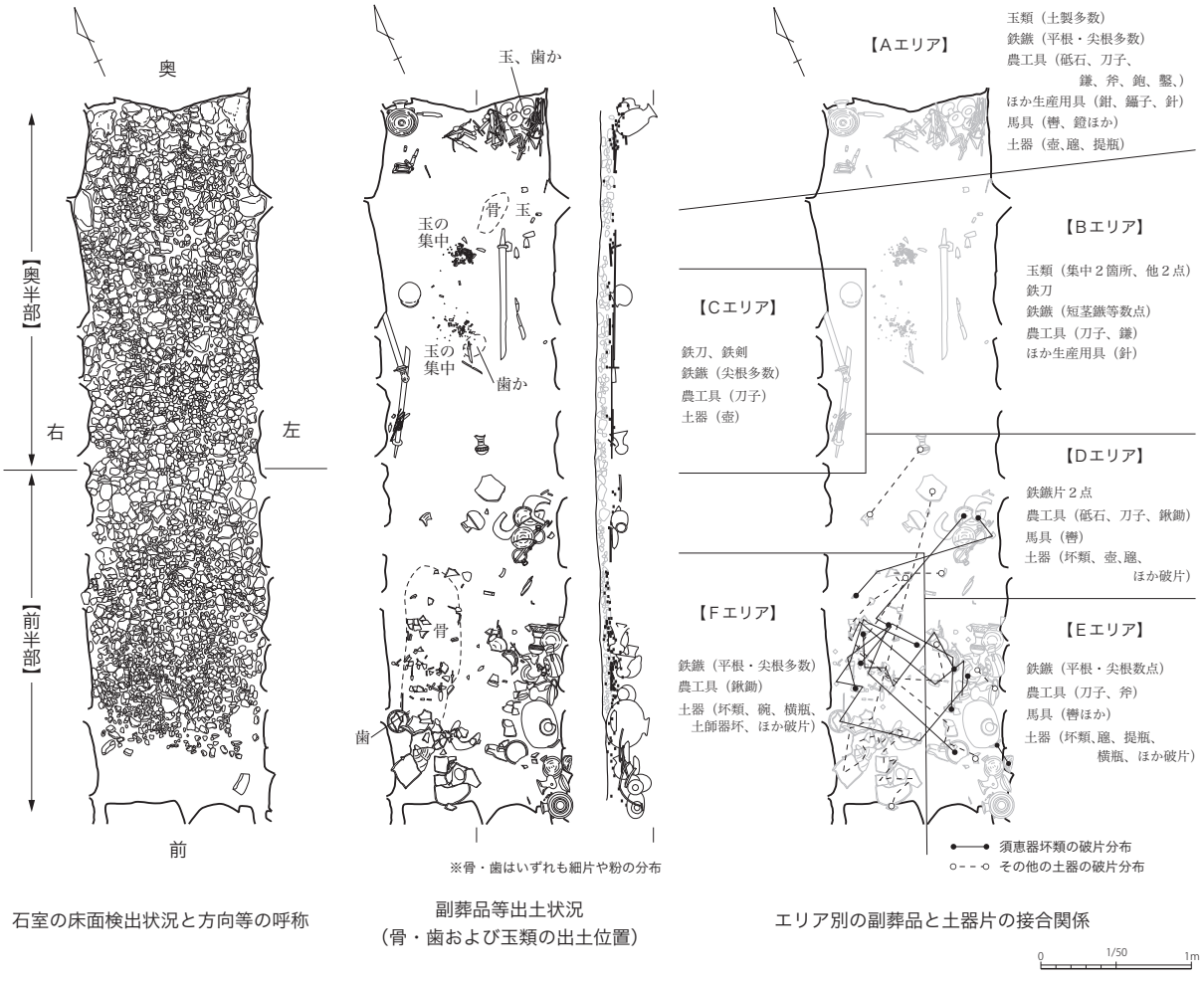
この石室内には、複数箇所の埋葬主体（埋葬された被葬者の存在）や片づけなどの痕跡が認められ、また、出土した武器などに若干の時期差を伴うことも指摘できる。したがって、複数回の埋葬があったと判断することができる。

ここでは、複数回に及ぶと判断できる埋葬とその他の儀礼的行為に関する諸状況を整理し、その特徴について考察したい。

１　埋葬等の復元

中原４号墳の横穴式石室には石棺がなく、木棺の痕跡や釘の出土、棺台などの特別な造作も認められない。床面は礫床１面であるが、石室中央に横断して大きめの石が用いられていることから、石室空間が奥半部と前半部に分けられていたことが指摘できる（註１、第168図）。

一方、盗掘や床面の破壊は認められず、副葬品などの出土状況は、古墳として機能した最終状態を良好に残しているといえる。また、良好な残存状態とはいえないが、埋葬された遺体と思われる歯や骨片の分布が数箇所で確認されている（註２）。そこで、これらの情報から埋葬等に関する復元を検討する（註３、第168・169図）。



石室の床面検出状況と方向等の呼称

副葬品等出土状況
（骨・歯および玉類の出土位置）

エリア別の副葬品と土器片の接合関係

第168図　石室内の状況と呼称

(1) 石室奥半部の埋葬主体

副葬品配置による復元　石室奥半部（B・Cエリア）では、玉類と刀剣の配置によって、その中央付近に埋葬主体の存在を把握することができる。

玉類は、前と奥の２箇所に集中域があり、いずれも埋葬時の位置に残されている状況が指摘できる。さらに、この玉類集中域の左右両側（Bエリア左寄りとCエリア）において、刀剣が石室主軸に沿って配置されていた。以上から、石室奥半部の中央付近に玉類を伴う埋葬主体があり、その傍らに刀剣類を配置したことが復元できる。

２つの埋葬主体　石室左側の大刀は切先を前に向けているが、右側の大刀と剣は切先を奥に向けている。さらに、両者を比較すると、右側の刀剣の方が新相の特徴を伴うことが指摘できる（本書第４章第６節、大谷論考）。右側の鏃群と奥壁寄りの鏃群との間にも同様の時期的傾向が認められ（本書第４章第７節、菊池論考）、右側の武器類は新しい時期に位置づけできる可能性がある。なお、奥壁寄りと前半部の２箇所にある馬具においても、同様の時期差を伴う可能性が指摘される（本書第４章第６節、大谷論考）。

以上から、この場所には時期の異なる２つの埋葬主体が存在した可能性を評価したい。一つは、やや奥寄りの左側の大刀を伴う埋葬主体であり（以下、「埋葬①」）、概ね６世紀後葉の初葬に位置づけることができる。もう一つは、やや前寄りの右側の刀剣を伴う埋葬主体であり（以下、「埋葬②」）、概ね６世紀末葉頃の追葬に位置づけることができる（註４）。

埋葬①と埋葬②の位置関係　刀剣は伸展葬された被葬者の傍らに配置されたと復元できるが、その切先方向が埋葬時の頭位に関係すると評価するならば、埋葬①は頭位を奥方向、埋葬②は頭位を前方向にしたと判断することができる。この判断にしたがうならば、奥半部の前寄りで確認されている歯については、埋葬②のものであったといえる。以上から、石室奥半部の２つの埋葬主体（埋葬①と埋葬②）は、近接もしくは一部重複する位置関係にあり、頭位は互いに逆（奥方向と前方向）にしていた可能性が高いと判断することができる。

なお、２つの玉類集中域については、時期差のある２つの埋葬主体によるものというよりも、同じ６世紀後葉の埋葬①における装着位置の違いを示す可能性が指摘される（本書第４章第５節、戸根論考）。したがって、埋葬①の遺体配置を反映している可能性が考慮される。

(2) 奥壁寄りの片づけと儀礼的行為

副葬品の片づけ　石室奥壁寄り（Aエリア）の左半には、土器・鉄鏃・馬具・生産用具といった副葬品が集積された状態で出土しており、片づけによって寄せ集められたことが確認できる。奥壁寄り中央の鉄鏃群がやや乱れ、馬具は右側にも散在的に出土していることから、それらの方向からの片づけを復元することができる。

この奥壁寄りの副葬品群は、いずれも初葬の時期に位置づけできるもので占められている。したがって、埋葬①の副葬品を片づけたものであり、埋葬②の前段階もしくは埋葬②に際して行われた可能性を評価することができる。なお、埋葬①の大刀とその周囲の鉄鏃などは、片づけの対象とならずに副葬位置に残されたということになる。

儀礼的行為の可能性　同じ奥壁寄りの左半では、玉類も確認されている。玉類は、集積された副葬品と重なる範囲に分布し、一部は壺の中からも出土している。また、これらは土製の玉を主体としており、奥半部中央の玉類集中域とは組成が異なる（本書第４章第５節、戸根論考）。したがって、儀礼的行為として土製の玉類が用意され、片づけられた副葬品の上に載せられた、もしくはばら撒いた可能性が考慮される。

さらに、壺の中からは歯の可能性がある小片も出土したとする遺物台帳の記載がある。この調査記録によるならば、その位置が石室奥隅であることから、埋葬遺体を二次的に移動した可能性を評価することができる。さらに、復元される埋葬①と埋葬②の位置関係が重なることから、追葬（埋葬②）の際に初葬（埋葬①）の遺体と副葬品への対処が意識され、副葬品を奥壁左隅に集積するような片づけを行い、その後に初葬者自体に手を加えた可能性も指摘することができる。

しかし、奥半部における埋葬遺体の残りは非常に悪く、埋葬①のみならず、追葬の埋葬②の遺体もほとんど消失している。また、壺の内容物についても、現在では骨であるかも判断し難い白色の細片しか確認できない。したがって、先述したような埋葬①を対象とした遺体の移動があったのかを検証することは難しい。一方、埋葬①に伴う可能性が指摘できる玉類集中域に大きな乱れはないことから、遺体の移動があったとしても、一部分に限られたと推測できる。

(3) 石室前半部の埋葬主体

骨片分布による復元　石室前半部では、その前寄り右半（Fエリア）に骨片の分布が確認されている。その範囲は石室主軸に沿った長さが約1m、幅は0.4m程である。骨片は細片化した状態になっているが、前寄りでは歯を確認している。なお、発掘調査では、この範囲を一度に検出したわけではなく、前寄り部分と中央〜奥寄り部分を別々に把握している。検出高は前者の方がやや高い。しかし、一連の分布範囲を発掘作業エリアや高さに沿って二分した可能性も考慮される。したがって、埋葬主体の別を反映した検出であるかはわからない。

この骨片分布の下からは、散在した土器片が検出されており、鉄鏃についても同様の出土状況が把握できる。このことから、既に副葬されていた土器などが破壊され、ばらばらにされた後に遺体が置かれたと判断することができる。したがって、この遺体を初葬に位置づけることはできない。また、石室の出入口を占める場所にあることから、奥半部の埋葬①・②より前に埋葬されたとは判断し難く、それらから二次的に移動してきた可能性も評価できない。以上から、埋葬①・②とは異なる最後の埋葬であった可能性を評価したい（以下、「埋葬③」）。

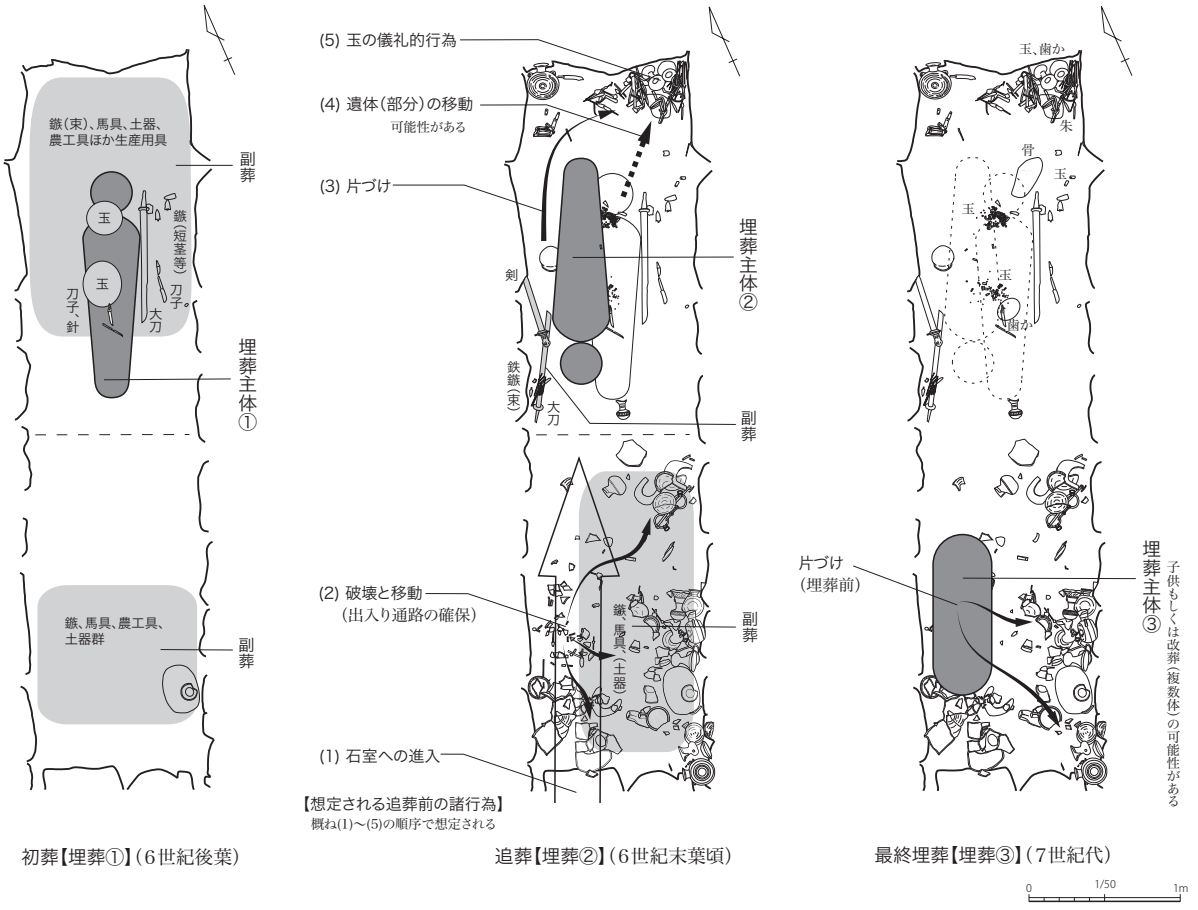
埋葬③の時期と埋葬方法　しかし、この古墳の出土遺物は、埋葬①か②に伴うことが明らかなものと、それらと同時期のもので占められている（本書第4章第5〜10節）。したがって、この埋葬③には副葬品が認められず、時期を特定することは難しい。

また、この埋葬も伸展葬であれば、歯の出土位置から頭位は前方向にあると推測できる。しかし、骨片分布の範囲は全体でも長さ約1mと狭く、発掘調査で把握したように南部と中北部が別であるならば、さらに小さい範囲の埋葬が2つあったことになる。子供の埋葬である可能性も否定できないが、被葬者の装身具や傍らに置かれる刀剣などもないため、伸展葬とする根拠もない。

(4) 石室前半部における諸状況

副葬品の破壊と移動　石室前半部（D〜Fエリア）については、左寄りに残存状態の良い土器が並ぶ一方、右半を中心に土器片や鉄鏃が散在している。

この土器片の接合関係をみると、ほぼ全ての個体が



第169図　埋葬等の復元

右半のＦエリアと左半のＤまたはＥエリアの間で接合する。さらに、Ｆエリアの土器片の方が小さく、出土レベルが低い傾向にある。以上から、右半（Ｆエリア）に置かれていた土器を破壊し、左側の各所（ＤエリアやＥエリア）へ寄せるような移動が行われ、結果としてＦエリアには小片が散在的に残るという過程を把握することができる。

鉄鏃については、土器のような接合は確認できないが、散在した出土状況である。Ｄエリアの農工具などについても、土器片と混在して出土していることから、同様に移動している可能性が考慮される。

左側に並ぶ甕や提瓶は、坏類の多い右半のようには破壊されずに寄せられたと推測できる。副葬位置または器種に応じて、扱われ方に差異が生じたということになる。さらに、左側の横瓶は、床面に設置された状態にあり、副葬状態を保っている可能性が指摘できる。なお、この位置が礫床範囲の前端にあたることから、当初の副葬品はここから奥に配置されていた可能性が考慮される。

一方、右側の横瓶は大きく壊れており、前方の高い位置に多くの破片が分布している。副葬位置において破壊されたうえで、前方の入口寄りに堆積した土砂の上に敷き均された状況が把握できる。左前隅の坏・提瓶・甕についても、床面にはなく、入口寄りに堆積した土砂の上に置かれた状況が確認できる。

破壊と移動の目的　副葬土器や鏃群が破壊されながら各所に寄せられ、破片が散在的に残されるという状況は、石室奥壁寄りの片づけに比べると乱雑さが見受けられる。先葬の副葬品を周到に集積する片づけとは明らかな違いがあり、異なる目的を指摘することができる。すなわち、埋葬のためというよりも、石室の奥へ出入りする通路を確保するために行われた可能性を評価したい。

このように考えれば、この副葬品の破壊と移動は、埋葬③のためではなく、例えば埋葬②に際して行われ、結果的に空間になった部分が埋葬③の埋葬場所になったと把握することができる。

副葬および破壊と移動の過程　石室前半部の鉄鏃の中には、初葬の時期に位置づけ難いものもある（本書第４章第７節、菊池論考）。また、Ｄエリアの轡は初葬の副葬品が移動したものと判断できるが、Ｅエリアの轡は追葬の時期に位置づけられる（本書第４章第６節、大谷論考）。農工具は初葬のもので占められる可能性が評価でき（本書第４章第８節、鈴木論考）、土器も初葬と追葬に分けて把握することが難しく、多くは初葬の可能性が評価されるが、一部に新相も確認できる（本書第４章第９節、和田論考）。以上から、前半部には初葬（埋葬①）において多くの土器や鉄鏃、馬具、農工具を副葬したほか、追葬（埋葬②）においては少数の土器や鉄鏃、馬具を副葬したことが指摘できる。

さらに、追葬に伴う鉄鏃も散在した状態で出土しており、Ｅエリアの轡は甕の下から出土している。鉄鏃の出土状況については、副葬方法や矢柄の腐蝕によって混在した可能性もあるが、轡の出土状況は、追葬（埋葬②）に伴う副葬より後に土器（甕）の移動が行なわれたことを示している。

少なくとも大きな破壊と移動については、先述のとおり石室の奥への出入りを目的として、埋葬②に際して行われた可能性を評価したい。一方、埋葬②より後の土器等の移動が確認できることについては、埋葬③に伴う片づけとして多少の副葬品の移動もあった可能性を評価したい。なお、埋葬①～③のほかに、埋葬主体等に何らかの処置を行った別の機会を想定することもできるが、本墳においては推測の域を出ない。

2　埋葬方法に関する特徴

復元した３つの埋葬主体については、いずれも被葬者自体が良好に残存しているわけではないため、埋葬方法の詳細を特定することは困難である。また、駿河地域では多くの古墳が同様の状況にあり、埋葬習俗の詳細を体系的に把握するには課題も多い。そこで、ここでは以下の２点について注目し、埋葬方法に関する可能性について触れておきたい。

(1) 埋葬②の頭位について

切先を奥に向ける刀剣　横穴式石室の主軸に沿って埋葬する場合、頭位を奥方向とし、傍らに副葬する刀剣は切先を脚側（石室前方）に向けるのが一般的な埋葬方法として認識される。しかし、埋葬②に伴う石室奥半部右側の刀剣は、切先を奥に向けている。

静岡県内の横穴系埋葬施設における刀剣の配置をみると、前述のとおり切先を前方に向ける場合が多いが、石室主軸に直交または斜交する場合や石室壁面に立て掛ける例があるほか、埋葬②の刀剣のように切先を奥に向ける例も少数ながら確認することができる（第９表）。

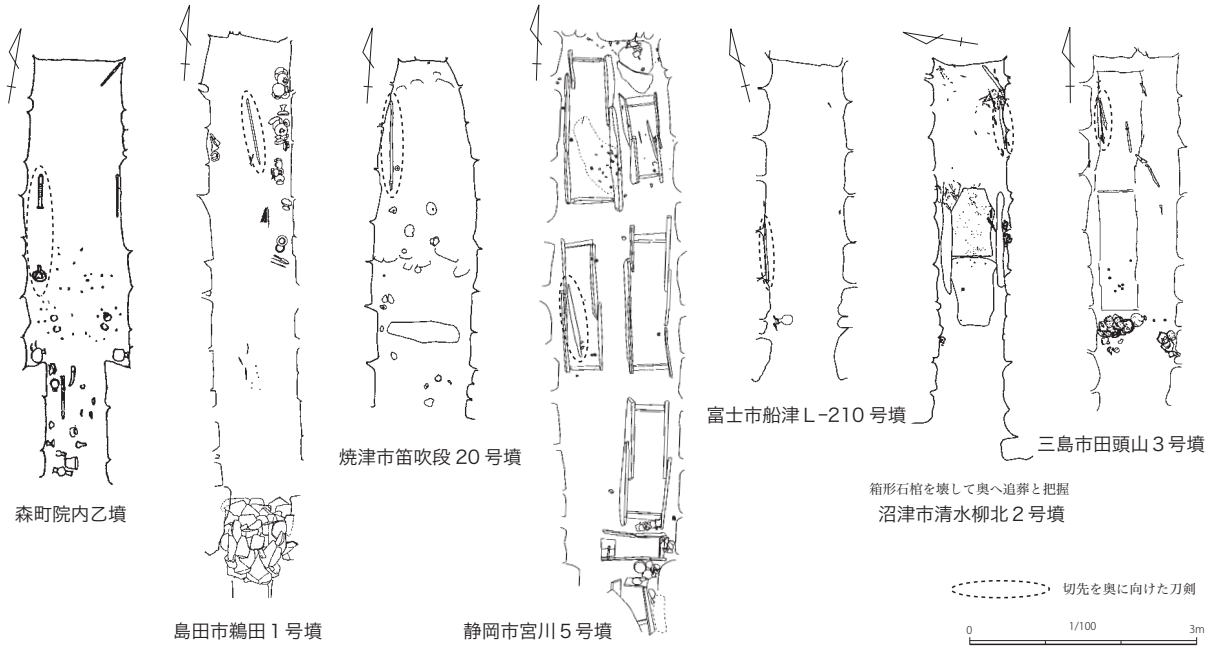
その分布をみると、三島市田頭山古墳群や沼津市清水柳北古墳群、そして本古墳群に複数例が確認できるが、特定の地域や時期に偏るとまではいえない（註5）。また、埋葬①でも確認できるように、同じ古墳や古墳群の中に切先を石室前方に向ける場合もあることから、古墳群などにおいて踏襲された方法であったとも評価できない。少なくとも東海地方東部では、広く少数派の埋葬方法として用いられたということになる。

なお、これらの刀剣は右側に配置されるものが多く、さらに、追葬に伴うとされる場合が目立つ。しかし、埋

第９表　静岡県の切先を奥に向ける刀剣副葬例

市町	名称	築造時期	墳丘 形	墳丘 規模 m	埋葬施設	切先を奥に向ける副葬 副葬位置	切先を奥に向ける副葬 刀剣	備考	文献
磐田市	押越５	A	円	8	横穴式石室（擬似両袖）	前寄り　左側	無窓鍔付大刀１		豊岡村 1983
森町	院内乙	A	円	12	横穴式石室（両袖）	中央　右側	環頭大刀１		森町 1998
森町	谷口ＥⅠ２	A	-		横穴墓	奥寄り　右側	無窓鍔付大刀１		森町 1996
袋井市	地蔵ヶ谷 10	B	-		横穴墓	中央　右側	六窓鍔付大刀１、無窓鍔付大刀１		袋井市 2004
袋井市	道ヶ谷 B2	A	-		横穴墓	中央　右側	鍔付大刀１、大刀１		袋井市 1997
掛川市	居村１	B	円	17	横穴式石室（擬似両袖）	奥寄り　左側	無窓鍔付大刀１		静岡県 1997
牧之原市	大寄 C6	A	-		横穴墓	前寄り　左側	無窓鍔付大刀１、大刀１		相良町 2000
島田市	水掛渡 A14	A	円	？	横穴式石室（無袖）	奥寄り　右側	無窓鍔付大刀１		遠江考 1965
島田市	駿河山２	B	円	10	横穴式石室（無袖）	奥寄り　右側	無窓鍔付大刀１	追葬と把握	金谷町 1983
島田市	鵜田１	A	不明		横穴式石室（無袖）	奥寄り　左側	大刀１		島田市 1978
藤枝市	衣原 11	A	不明		横穴式石室（両袖）	中央　右側	八窓鍔付大刀（象嵌）１		静岡県 2010
藤枝市	横添板沢２	B	不明		横穴式石室（無袖）	奥寄り　右側	無窓鍔付大刀１		岡部町 1982
藤枝市	本郷 31	A	円	10	横穴式石室（無袖）	奥寄り　左側	六窓鍔付大刀１		岡部町 1981
焼津市	笛吹段 20	B	円	7	横穴式石室（無袖）	奥寄り　右側	八窓鍔付大刀１		駿府博 1984
静岡市	宮川５	A	不明		横穴式石室（無袖）	中央　右側	八窓鍔付大刀（象嵌）１	追葬と把握	静岡市 2011
静岡市	伊庄谷６	A	-		横穴墓	中央　右側	無窓鍔付大刀１、大刀２		望月他 1963
静岡市	伊庄谷 B8	A	-		横穴墓	中央　中程	無窓鍔付大刀１		静岡県 1984
静岡市	神明４	A	円	18	横穴式石室（擬似両袖）	中央　右側	環頭大刀１		清水市 2002
富士市	中原３	A	円	8	横穴式石室（無袖）	中央　右側	無窓鍔付大刀１	左側小刀も切先奥	本書
富士市	中原４	A	円	11	横穴式石室（無袖）	奥寄り　右側	六窓鍔付大刀１、六窓鍔付剣（象嵌）１	追葬と把握	本書
富士市	船津 L210	B	円	8	横穴式石室（無袖）	前寄り　右側	無窓鍔付大刀１		富士市 1999
沼津市	石川１	A	円	8	横穴式石室（無袖）	中央　左側	無窓鍔付大刀１		沼津市 2006
沼津市	平沼吹上２	A	円	15	横穴式石室（無袖）	中央　右側	八窓鍔付大刀１		沼津市 1985
沼津市	清水柳北２	A	円	10	横穴式石室（無袖）	奥寄り　左側	大刀２	追葬と把握	沼津市 1990
沼津市	清水柳北３	A	円	9	横穴式石室（無袖）	中央　左側	大刀１		沼津市 1990
三島市	田頭山１	B	円	12	横穴式石室（無袖）	中央　右側	大刀１		静岡県 2004
三島市	田頭山３	A	円	11	横穴式石室（無袖）	奥寄り　右側	無窓鍔付大刀（象嵌）１、無窓鍔付大刀１	左側に別の刀あり	静岡県 2004

名称は「号墳」「号横穴」などを省略している。
時期は、概ね７世紀初頭以前を「A」、７世紀前葉以降を「B」としている。



第 170 図　静岡県の切先を奥に向ける刀剣副葬例

葬の数や順序などが正確に把握し難い古墳も少なくない。また、清水柳北２号墳のように、追葬と判断されるが左側に切先奥方向の刀剣を配置する例もある。したがって、傾向として指摘できる可能性はあるが、決められた方法という評価は難しい。

逆頭位の評価　刀剣の向きで頭位を判断するならば、これらの頭位は石室前方にあり、多くの場合とは逆頭位になる。また、本墳の場合は、初葬（埋葬①）との関係においても逆頭位の追葬ということになる。

岩松保は、古墳時代前・中期における埋葬と儀礼について、人骨が良好に残る石棺等の事例を分析し、棺内に複数の伸展葬がある場合（Ⅰ類）や改葬や集骨が認められる場合（Ⅱ・Ⅲ類）があり、九州地方北部から近畿地方西部にかけて追葬の風習が広がっていたことを明らかにしている（岩松 2010）。さらに、Ⅰ類において狭い棺内に先葬者と追葬者が上下に重なる場合が多いことから、集骨には単に追葬スペースを確保するためではなく、儀礼的・象徴的な理由があったと論じている。

そして、Ⅰ類における先葬者と追葬者の頭位について、順・逆があることについても言及している。このことについても、狭い棺内で機能的に並べるためではなく、出自の異同などを含めて（註 6）、何らかの象徴的・儀礼的な意味が付与されていた可能性を評価している（岩松 2010）。本墳などの状況を説明するには後期古墳の検討を加える必要があるが、こうした埋葬習俗が横穴系埋葬施設の出現と伝播、導入を経て反映されているという可能性も考慮したい。

（2）埋葬③の埋葬方法について

最終埋葬の改葬の可能性　最終埋葬に位置づけた埋葬③は、石室の前寄りに位置し、副葬品が認められない点で埋葬①・②とは顕著な違いをもつ。土器片や鉄鏃が散らばった状態の上に置かれている点も、特徴的である。さらに、埋葬①・②に比べて骨が残りやすい状態にあった可能性も考慮される。

この埋葬方法について、歯の出土位置から頭位を前方に向けていたと推測することもできるが、先述のとおり伸展葬ではなかった可能性も考慮される。そこで、一つの案として改葬について考えておきたい。

東駿河の改葬例　遠江の横穴墓には人骨が残る場合が多く、大谷宏治や松井一明の研究によって、７世紀以降に改葬が一般化したことが解明されている（大谷 2001・2012、松井 2004）。ただし、全てが改葬になるとは限らず、地域的な導入状況の差異もあると指摘されている。東駿河地域の状況は把握されていないが、改葬の可能性が指摘できる事例はいくつか存在する。

長泉町原分古墳は、大型の横穴式石室を埋葬施設とする径 17 m程の円墳であり、金銅装馬具や装飾付大刀など豊富な副葬品が出土している。初葬は家形石棺、追葬は釘付木棺による埋葬主体が復元できるが、人骨は、それらとは別に４体分が残存していた。しかも、土器片や鉄鏃の上で検出されている。それぞれの人骨は部分的な骨格に限られており、集積状態や獣骨の混在も認められることから、最終埋葬における改葬の可能性を評価することができる。初葬は７世紀初頭であるが、改葬には土器が伴っており、７世紀末葉に位置づけることができる（静岡県 2008）。

富士市須津Ｊ -159 号墳は、横穴式石室を埋葬施設とする径約 14 mの円墳である。盗掘などは認められず、石室全体から３～４体分の人骨が検出されている。骨の残存状態が決して良くないことから、詳細な判断は難しい。しかし、集積した状態が各所で確認できる一方、伸展葬が認められないことなどから、改葬の可能性も評価される。築造時期は７世紀初頭から前葉であり、７世紀後葉までに少なくとも２回の追葬が行われた可能性が指摘できる（静岡県 2010a）。

本墳の場合は、これらのような検討もできない残存状態であるが、埋葬③は入口寄りに位置し、他の埋葬①・②に比べて骨が遺存していること、先葬の副葬土器や鉄鏃の破片の上に置かれていることなど、原分古墳の改葬例に似た状況を確認することができる。

３　儀礼に関する特徴

（1）諸行為における儀礼的要素

石室内の埋葬やその他諸行為には、多くの儀礼的要素を指摘することができる。埋葬方法には死に対する観念が反映されていることが推測でき、前項では追葬における逆頭位と最終埋葬における改葬の可能性を指摘した。また、奥壁寄りの片づけに伴う玉類による儀礼的行為、遺体の移動に関する可能性にも触れた。

副葬行為においても、Ｂエリアで短茎鏃等が散在している状態については、古墳時代前・中期から類例が多く認められ、矢束の副葬とは異なる儀礼的意味や象徴性

をもつものと指摘されている（鈴木 2000 など）。また、石室前半部の副葬品の破壊については、出入り通路の確保を目的とした行為として評価したが、愛媛県松山市葉佐池古墳（松山市 2003）における遺体と副葬品等の顕著な毀損行為で指摘されているような、再生阻止や社会的死（田中 2013 など）といった観念的な側面も内在している可能性は考慮される。

(2) 副葬土器群の特徴

土器の副葬　静岡県内における土器の副葬は、一部の地域では古墳時代中期の木棺直葬にも認められるが、多くは後期の横穴式石室や横穴墓に伴って普及する。このことは、古くから副葬品として扱われてきた武器などとは異なり、被葬者の所有もしくは社会的に属する品というよりも、葬送儀礼との関係が強いものと評価される。とくに、埋葬主体から離れた場所の個体数の多い土器群は、葬送儀礼用の飲食器であり、何らかの死生観に基づいて墓室内に持ち込まれたものと把握される。

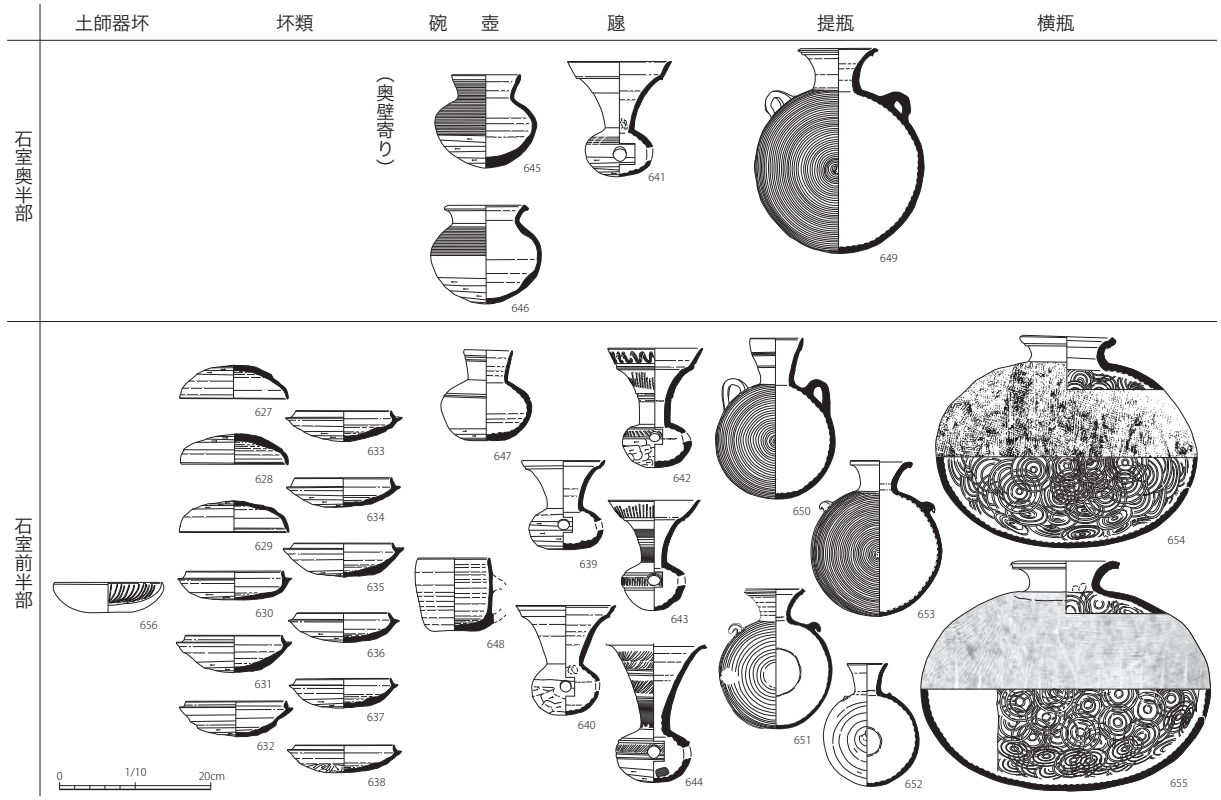
本墳では、多くの土器が石室内の出土であり、とくに須恵器は石室内に限定される。儀礼に用いた土器群を墓室内に副葬するという所作と観念も含めて、新たな横穴式石室の墓制が用いられたと評価することができる。

副葬土器群と埋葬の関係　土器の出土状況をみると、埋葬主体の近くには甕と壺瓶類が副葬され、埋葬主体から離れた石室前半部には坏類と甕、提瓶が数個体ずつ配置され、さらに碗、横瓶、土師器の坏が加わる（第 171 図）。

副葬土器は概ね、初葬に相当する 6 世紀後葉を中心としたなかに位置づけられるが、複数ある甕や提瓶については、古相を示す形態のものと新相を示す形態のものが含まれる。しかし、その差異は個体ごとに認められ、さらに胎土等の違いもあるため、初葬と追葬に二分することは必ずしも容易ではない（本書第 4 章第 9 節、和田論考）。

奥壁寄りの土器群については、ともに集積された鉄鏃や馬具、生産用具が初葬に伴う副葬品であると評価でき、同様のものと考えたい。一方、前半部の土器群については、初葬と追葬の両方の副葬が含まれている可能性があるが、形態や胎土等のバラエティーに加えて、出土状況も混在する。正確に整理することは難しい。

先述のとおり、初葬の埋葬主体（埋葬①）と追葬の埋葬主体（埋葬②）は、非常に近い位置関係にある。2 個体の横瓶をそれぞれの副葬に対応させ、甕や提瓶など



第 171 図　中原 4 号墳の副葬土器群

もほぼ等分することで、類似した２つの土器群を推測することも可能かもしれない。しかし、土器群を一つの墓室における葬送儀礼の諸行為によるものと考えれば、被葬者ごとに属する武器などとは異なる把握も考慮される。とくに一箇所に集め置かれた土器群については、その多くが一つの葬送儀礼（供献等）によるもので、その後に加わるのは別の性格、例えば呪的逃亡による数個体程度であった可能性なども考えられる。いずれにしても、様々な形態的特徴と胎土等を含むことから、多様な生産と入手過程によって豊富な土器群を実現させた点を評価し、次に器種組成の特徴を検討したい。

豊富な器種組成と脚付器種の欠如　本墳の副葬土器群の器種組成は、「土師器の坏と須恵器の坏類・碗・甕・壺・提瓶・横瓶」となる。副葬土器の器種組成については、白澤崇が三重県・静岡県の群集墳や横穴群を中心に分析している（白澤 2001 他）。その成果によれば、本墳の副葬土器群は「坏類＋壺類＋甕＋α」という最も豊富な組成に該当し、優位性の高い被葬者に伴うものと評価することができる。

一方、器台や脚付壺のほか、高坏も含めて脚付器種を

第 10 表　駿河の 7 世紀初頭以前における馬具副葬古墳の土器群

市町	名称	墳丘 形	墳丘 規模 m	埋葬施設	副葬土器群 須恵器 坏身	坏蓋	高坏	脚付碗等	碗等	甕	壺	脚付壺	子持器台	提瓶	平瓶	フラスコ瓶	横瓶	甕	土師器 坏碗類	高坏	脚付壺等	壺瓶類	鉢	馬具	装飾付大刀	備考	文献
島田市	波田 1	円	13	石室	3	2	1	1	1	1				2					7			2		○			島田市 1980
島田市	駒形 1	円	18	石室	3	1		1	1					1	2									○			静岡縣 1930
藤枝市	八幡 2	円	?	石室	13	10	10			3	4	2		3					1					●			藤枝市 2007
藤枝市	衣原 11	不明		石室	6	3	4		1	1	1			2		2	1		10	5		5	1	○	○		静岡県 2010
藤枝市	瀬戸 1	円	13	石室	35	31	5	1	2	4	4			1	7	2			3	1				○			西駿考 1968
藤枝市	瀬戸 2	円	9	石室	6	4	1		1		1						1							○			西駿考 1968
藤枝市	瀬戸 3	円	11	石室	30	24	7			3	3			1	3	2			1					○			西駿考 1968
藤枝市	釣瓶落 7	円	14	石室	3	1				1	1			1										○			静岡県 1975
藤枝市	本郷 31	円	9.8	石室	4	2				1	1				2									○	●		岡部町 1981
静岡市	佐渡山 2	方	32	石室	3		4			1			1					2						○	●	撹乱顕著	静岡市 1984
静岡市	楠ヶ沢 3	方	17	石室	12	10	4		1	3	6	5		1	2			11	1			1		○		撹乱顕著	静岡市 1985
静岡市	賤機山	円	32	石室	12	11	24	1		3		2		4	2		1					1		●	● ○	※	後藤他 1953
静岡市	駿河丸山	方	18	玄室	12	11	10			3	1	2		3	5									○	○	羨道 :7 世紀	静岡市 1962
				羨道	20	29	8			6	2	3			5	2											
静岡市	小鹿山ノ神	方	23	石室	3		1								1									●			静岡縣 1930
静岡市	小鹿堀ノ内山 4	円	12	石室					3	1					1									○			静岡市 1967
静岡市	伊庄谷南谷 6	-		横穴墓	3	3	5			1	2			2					7	3		1		○			静岡市 1963
静岡市	伊庄谷南谷 23	-		横穴墓	1	1			2					1	1				2					○			静岡県 1984
静岡市	宮川 5	不明		石室	15	16	4		1	3	1				5	1	1		4	2		1		○	○		静岡市 2011
静岡市	上中林	不明		石室				1	1		1			2				1						○			静岡大 2007
静岡市	下中林 2	円	20	石室	1	3	5					1		1	2	1	2		1					○			静岡大 2007
静岡市	神明 4	円	18	石室	1	1						1			1	1								○	●		清水市 2002
静岡市	東久佐奈岐 3	不明		石室	1	1	3		1						1			1						○	○		清水市 1984
静岡市	尾羽西山 3	円	15	石室			1				1				1						2			○			静岡市 2010
静岡市	室ヶ谷 1	不明		石室	1	1				1				2	1									○	●		由比町 1985
静岡市	室ヶ谷 3	円	16	石室	8	3	2			1	1			4	1	2		1						○	●		由比町 1985
富士市	横沢	円	16	石室	12	12	2			1				1		1		1						○			富士市 1981
富士市	東平 1	円	13	石室																				●	○		富士市 1990
富士市	中原 4	円	11	石室	9	3			1	6	3			5			2		1					○	○		本書
富士市	中里大久保	円	12	石室						1				2	1				1					○	●	土器 :7 世紀	富士市 1988
沼津市	荒久城山	円	?	不明	1	1				1	1													●			沼津市 2002
沼津市	東原 1	円	15	石室																				○			加藤学 1972
沼津市	東原 2	円	14	石室								1												○			加藤学 1972
沼津市	石川 119	円	10	石室						1				1	2		2							○	●		加藤学 1976
沼津市	東本郷 3	円	?	石室	1						1			3		1		1	1					○	●		沼津市 2002
長泉町	本宿上ノ段 2	円	14	石室		1	2							1	1	1			1					○			沼津考 1970
長泉町	上出口 1	不明		石室	2	2																		○			長泉町 1974
三島市	願塚	不明		石室	3	2	1		2	3				2					4					○			三島市 1958
三島市	夏梅木 6	円	11	石室				1						1				1						○	●		三島市 2000

名称は「号墳」「号横穴」などを省略している。
「石室」は、横穴式石室である。
副葬土器群は、初葬・追葬の混在を含む可能性がある。
馬具は、金銅装の轡・杏葉・鞍・鐙のあるものを●、ないものを○としている。
装飾付大刀は、金銅装飾を●、鉄柄頭・象嵌を○としている。
※ 賤機山古墳は静岡市による発掘調査も行われている。
前田 2007 によれば、賤機山古墳出土須恵器には坏身 16、坏蓋 17、高坏 31、脚付盌 1、盌 2、甕 5、脚付壺 2、提瓶 6、平瓶 2 がある。

全く含まないという特徴が確認できる。脚付器種については、横穴式石室の導入と関連して長脚化するという変遷が指摘されており（藤原 1985）、さらに、各地の後期古墳における土器群の分析によって、とくに器台や脚付壺の有無は階層秩序と対応することが指摘されている（寺前 2005、三原 2013、田村 2014）。

本墳と同じ駿河の 7 世紀初頭以前の馬具副葬古墳をみると（第 10 表）、子持器台や脚付壺をもつ古墳は、墳丘規模や副葬品内容において明らかに本墳より上位にあるといえる。すなわち、本墳の副葬土器群は、先述のとおり群集墳を含めた全体の中では優位性が高いと評価できるが、そのレベルを超えた首長墓の要素までは伴っていないということになる。

ただし、高坏については、上位階層に多い傾向はあるものの、本墳と同じか下位に位置づけられる古墳にまで副葬が認められる（第 10 表、第 172 図）。階層秩序だけではなく、脚付器種を求めないような本墳特有の性質が内在している可能性も考慮される。

醼の多い組成　本墳の副葬土器群のうち、最も多いのは坏類であるが、それに次ぐのが 6 個体もの醼である。先述の白澤崇の研究では、醼について、その希少性と「注ぐ」機能に特化した器種であることに注目し、また、基本的に土器群中に 1 ～ 2 個体しか含まないことを指摘して、器種組成の頂点に位置づけられるものとして評価している（白澤 2001 他）。

第 10 表をみても、醼は 1 個体の場合が多く、ほとんどは 3 個体以下である。5 個体以上の醼を含む副葬土器群（註 7）となると、静岡県内では本墳のほかに、6 世紀の首長墓である静岡市賤機山古墳に可能性があるほか、7 世紀代の静岡市駿河丸山古墳の羨道や同牧ヶ谷 2 号墳（静岡市 1983）に確認できる程度である。

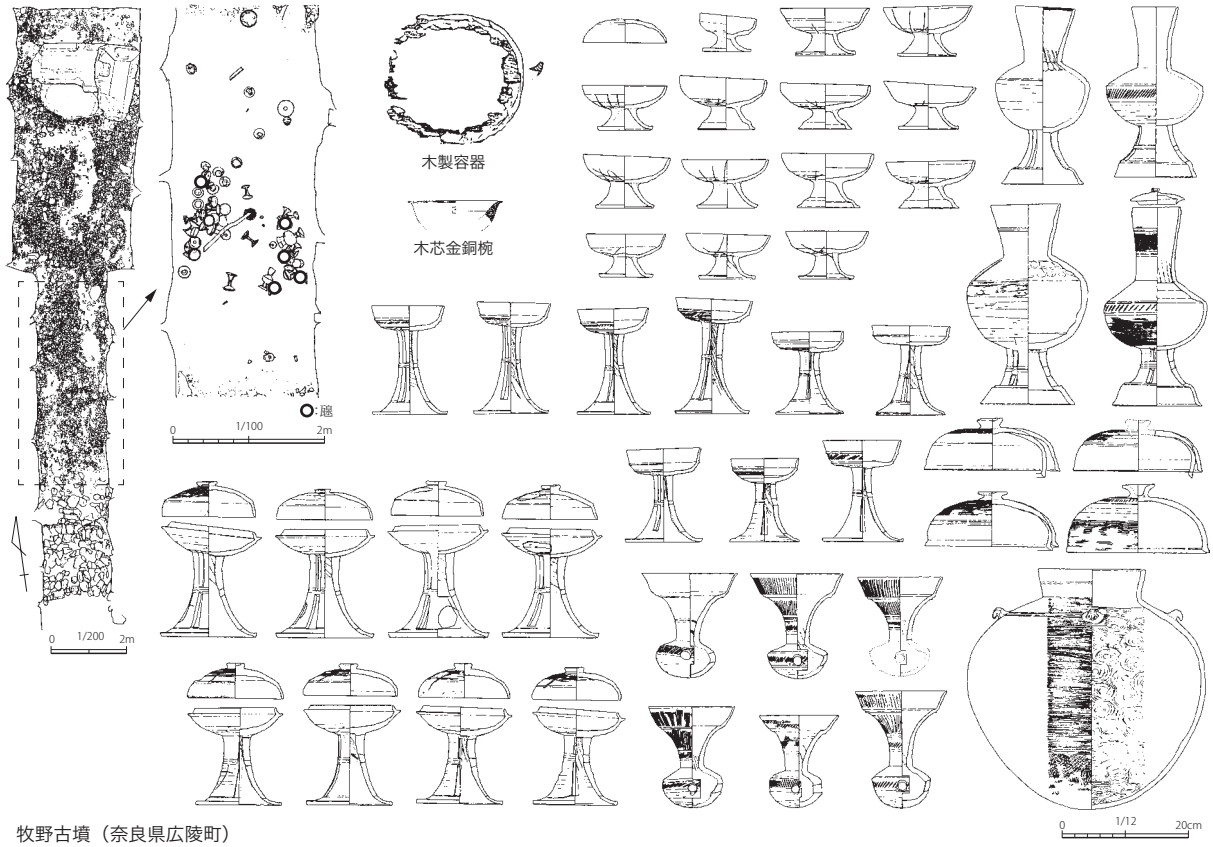
大和（奈良県）の有力古墳の中では、平群町三里古墳（奈良県 1977）や葛城市平林古墳（奈良県 1994）、広陵町牧野古墳（奈良県 1987、第 173 図）などにおいて、5 個体程度の醼を確認することができる。しかし、斑鳩町藤ノ木古墳（奈良県 1993）では 3 個体、高取町市尾墓山古墳（奈良県 1984）や平群町烏土塚古墳（奈良県 1972）、葛城市二塚古墳（奈良県 1962）では 2 個体である。一方、中小規模の古墳でも大半が 3 個体以下であるが、径 15 mの円墳である御所市吐田平 2 号墳（網干 1961）に 6 個体の醼を確認することができる。

その他の近畿・東海地方においても、5 個体以上の醼の副葬は、径 20 m程度の円墳で装飾付大刀や馬具をもつ京都府京丹後市湯舟塚 2 号墳（久美浜町 1983）や大阪府八尾市芝塚古墳（八尾市 1993）、岐阜県池田町南高野古墳（岐阜県 2000）にある一方、墳丘規模・副葬

第 172 図　駿河の比較例（近い時期・階層の古墳）

品ともに劣る京都府綾部市山尾北古墳（綾部市 1997、第 173 図）や同市キツネ塚古墳（綾部市 1998）、滋賀県米原市黄牛塚古墳（滋賀県 1976）、愛知県名古屋市東谷 12 号墳（名古屋市 1969）にも認められる。なお、その他の地方においてもほとんど例はないものとみられ、いずれの地域や階層においても少数例として把握することができる。

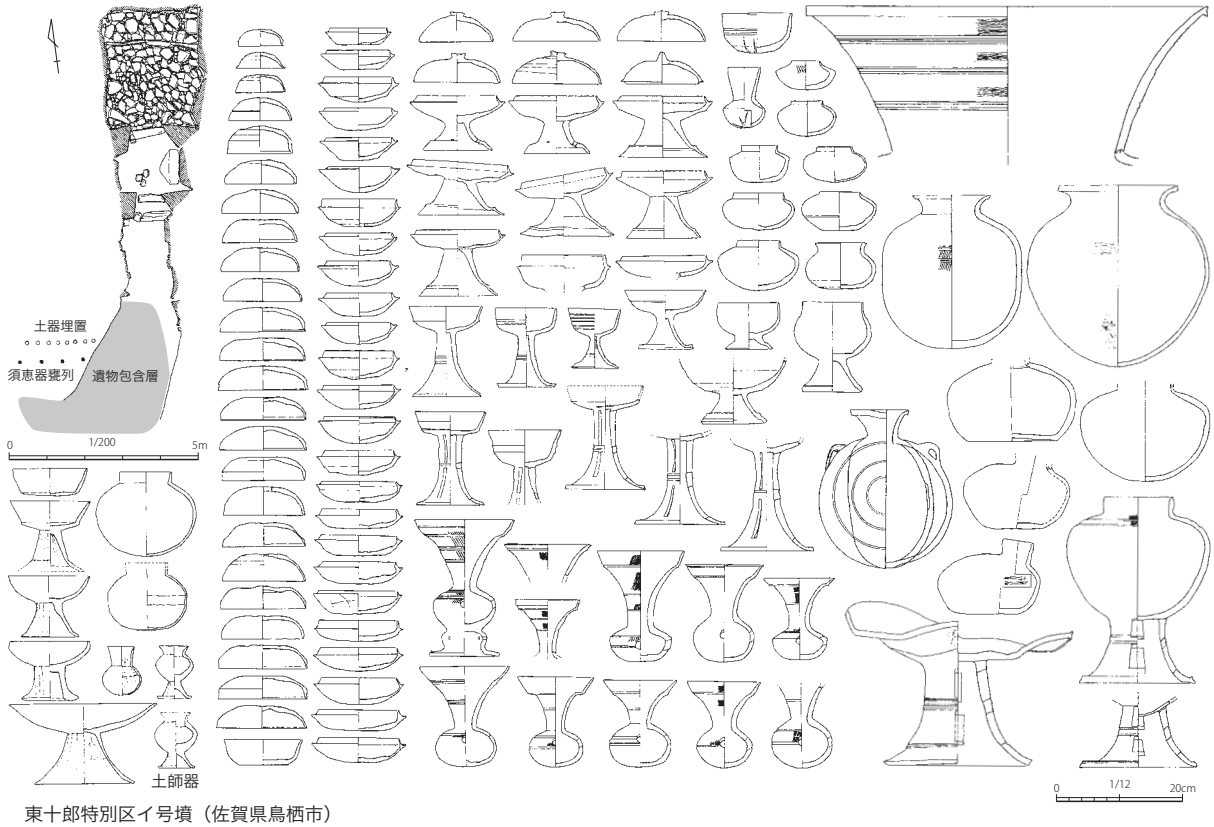
墓室外における鏃の多用　福岡県岡垣町東田 11 号墳（岡垣町 1977）の墳丘盛土中や佐賀県鳥栖市東十郎特別区イ号墳（佐賀県 1966、福岡大学 2003）の羨道前では、9 個体以上の鏃を含む多くの須恵器が集中して出土している（第 174 図）。いずれも 6 世紀後葉の横穴式



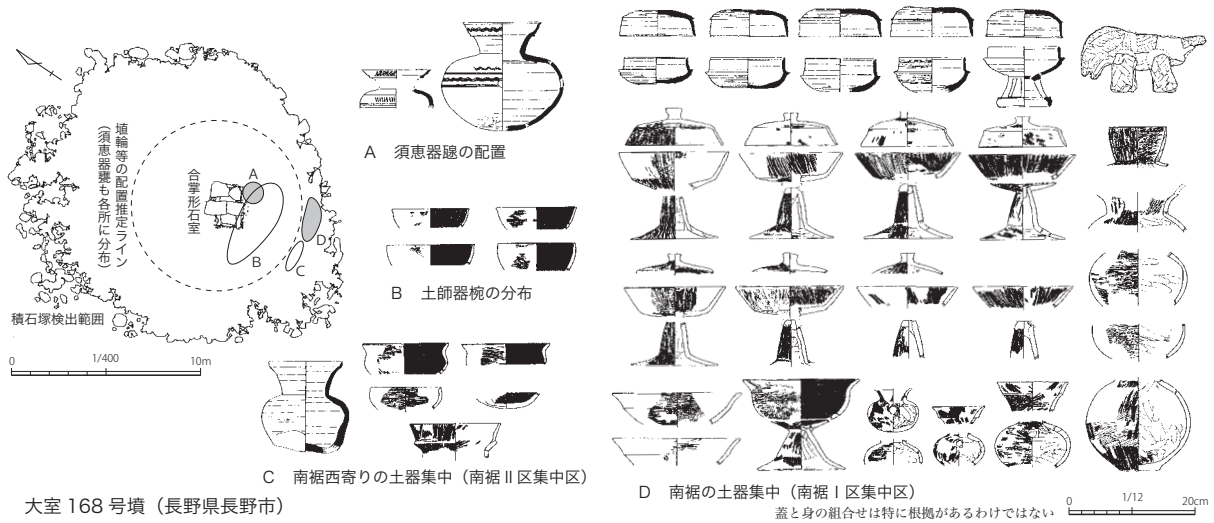
第 173 図　鏃を多く含む副葬土器群（近畿地方の事例）

石室墳であるが、石室内からの土器の出土はほとんどなく、これらは墓室外の土器群である。前者は、玉類と鉄製武器、刀子、鉋の副葬に限られるが、古墳群の中で最も大きな規模の古墳であり、最高所に位置する。後者も古墳群の中で最も大きな古墳であり、群形成初期に位置づけられる。さらに、馬具や農工具、あてびしなどの出土が注目される。後期群集墳の契機となる古墳において、竈の多用を含む特徴的な儀礼が行われた可能性も考慮される。

一方、古墳時代中期について、筆者は静岡県森町円田丘陵の古墳群における木棺直葬墳の供献土器群に注目し、6 個体程度の土師器高坏に土師器壺と須恵器甕が加わる共通した器種組成を確認している（田村 2008）。さらに、近畿から関東地方の広い範囲に類例が確認できることから、葬送儀礼の共有化の背景として、初期群集墳の東日本への展開と関係する可能性を指摘した。そ



東十郎特別区イ号墳（佐賀県鳥栖市）



大室 168 号墳（長野県長野市）

第 174 図　竈を多用する葬送儀礼の土器群

して、この土器群には、1～2個体の須恵器瓲が加わる場合が少なくない（三好 1997、白澤 1998 他、田村 2008）。

しかし、筆者が指摘した器種組成の共通性は、必ずしも全国各地の全ての古墳に強く踏襲されたということではない。古屋紀之は、信濃の諸例について分析し、田村が確認した様相との関係性に触れながら、異なる志向性を持った土器群の展開を指摘している（古屋 2008）。そして、その中の長野市大室 168 号墳や諏訪市一時坂古墳第4集中では、3個体を超える土師器の瓲を確認することができる。大室 168 号墳では、2個体の須恵器瓲を合掌形石室の近くに配置する一方で、南裾の土器群中に3個体を超える土師器瓲を用いており、瓲の多用の可能性が把握できる（第 174 図）。新来的な須恵器の瓲のあり方に対して、各地で生産しやすい土師器において瓲の多用が指摘できる点に注目したい。

瓲の多用の背景　先述したように、瓲を含む副葬土器群は比較的上位の階層にあるといえるが、その多用は必ずしも階層秩序と対応していたとは評価できず、また少数派である。畿内系石室を頂点とした横穴式石室の土器副葬の普及だけでは説明できず、そうした政治権力的な志向性とは違った側面を象徴するものと考えたい。

ただし、その類例は地域的にも広く点的に確認される状況にあり、特徴的な副葬品や埋葬施設構造の共通点も明確ではない。したがって、特定の地域や集団のつながりは評価し難く、具体的な説明は課題である。本墳の場合は、農工や鍛冶などの生産用具と一部の鉄鏃形態に大きな特徴があり、それらが示すような生産活動と関連した性格が考えられる。群集墳の契機として、その特徴的な志向性が影響し、瓲を多用した葬送儀礼が行なわれた可能性を考えることもできる。それぞれの発現の経緯は個別的であろうが、一つの可能性ある要因として、地域生産との関わりを考えたい。

なお、類例のほとんどが6世紀末葉頃までに位置づけでき、本墳もその範囲内にある。しかし、駿河の静清地域では、先述のとおり賤機山古墳から駿河丸山古墳や牧ヶ谷2号墳まで、7世紀に至る瓲の多用を少数ながら確認することができる。須恵器の地域生産が指摘される時期において、地域性としての瓲への志向が生じている可能性も推測することができる。

4　まとめ

埋葬の復元　本稿では次の埋葬主体を復元した。

埋葬①　石室奥半部の左寄り

埋葬②　石室奥半部の右寄り

埋葬③　石室前半部の右半前寄り

副葬品の編年的位置などによって、埋葬①は6世紀後葉の初葬、埋葬②は6世紀末葉頃の追葬に位置づけた。一方、埋葬③には副葬品が認められなかったが、先葬の副葬品の上に置かれることなどから、7世紀代の最終埋葬に位置づけでき、さらに、東駿河の諸例も参考にして改葬の可能性を指摘した。

埋葬①と埋葬②は、その時期が近いだけではなく、位置関係も近接もしくは一部重複しており、さらに、頭位を互いに逆にする関係（逆頭位）にある可能性を指摘した。そして、古墳時代前・中期の西日本に確認できる石棺埋葬の研究成果を参考にして、被葬者間の性格等に起因した何らかの象徴的意味をもつ埋葬方法であり、こうした埋葬習俗が横穴式石室の出現と伝播、導入を経ながら反映している可能性を考えた。

片づけと破壊等の行為　石室の奥壁寄りでは、副葬品の片づけが確認でき、埋葬②に際して埋葬①の副葬品を片づけた可能性を評価した。さらに、それらの上に検出した玉類などについて、追葬に際したスペースの確保というだけではなく、先葬に対する儀礼的行為が行われた可能性を評価した。

石室前半部では、奥壁寄りの片づけとは異なる副葬品の散在状態が確認できることから、埋葬③に際しての片づけだけではなく、その前の追葬（埋葬②）において、石室の奥へ出入りするための破壊と移動が行われた可能性を評価した。なお、この毀損行為にも社会的死を意図した儀礼的側面が内在している可能性を指摘した。

副葬土器群からみた特徴　葬送儀礼の特徴を示す要素として、副葬土器群の器種組成について検討した。階層性に関しては諸研究を参考にして、比較的優位な階層にある器種組成として評価できるが、首長墓の儀礼には劣るものと位置づけた。

その一方で、脚付器種の欠如とともに、瓲の多用という特徴をもつことを指摘した。各地に点在する類例などを含めた考察は更に深める必要があるが、階層秩序に対応するものではなく、本墳については、その副葬品に示された生産活動に関わる特徴的な性格が影響している可

能性を考えた。本墳は、地域にとって新来の埋葬施設と埋葬習俗を持ち込んだ、後期群集墳の契機となる古墳である。畿内を中心とした政治権力への新たな象徴性よりも、地域生産の開拓に対する社会的役割を志向するような特質があった可能性も考えておきたい。

本稿の執筆にあたり、中原古墳群研究会において多くの御教示を得たほか、以下の方々に御協力、御教授を賜りました。記して感謝申し上げます。

大谷宏治　草野潤平　白澤 崇　鈴木一有　三原翔吾

註

1　石室の方向については、奥壁側を「奥」、出入口側を「前」とし、「左」・「右」については、奥から前を見たときの方向とする（第168図参照）。

2　歯や骨片の出土については、それぞれ発見された当初の所見に基づいている。しかし、現在では粉状になってしまっていて追認が困難であり、当初の所見も細片によるものが多いことは注意する必要がある。

3　埋葬等の復元に関しては、本書の執筆者による意見交換の内容に基づいて検討したものである。

4　時期については、田辺1966・1981や鈴木敏2004などを参考にして、陶邑編年TK43型式併行期を6世紀後葉、陶邑編年TK209型式併行期の古相を6世紀末葉頃、同新相を7世紀前葉に概ねあたるものとする。

5　西遠江（浜松市など）に事例が認められない点が注意されるが、盗掘などによって残存の悪い古墳が多い地域でもあるため、当該事例が破壊により消失している可能性も考慮される。

6　岩松2010では、出自の差によるという辻村1989による解釈の提示に対して、その当否について具体的な考えを持たないとしたうえで、その可能性を含めて葬送儀礼の上で何らかの意味が付与されている点を評価している。

7　白澤2001などの成果から、3個体程度を超えれば廻の多用とすることもできる。しかし、追葬が可能な横穴系埋葬施設において、複数組成によるものであれば評価が異なることになる。本稿では、中原4号墳の石室前半部の廻の個体数から、廻の多用の基準を5個体以上の出土とした。

引用・参考文献

岩松 保　2010「竪穴系埋葬施設における追葬とその儀礼－横穴系埋葬施設を準備した時代」『京都府埋葬文化財論集』第6集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

大谷 宏治　2001「遠江における横穴墓研究ノート②」『静岡県考古学研究』33　静岡県考古学会

大谷 宏治　2012「宇藤・天王ヶ谷横穴墓群の評価」『森町円田丘陵の横穴墓群』 静岡県埋蔵文化財センター

白澤 崇　1998「組成から見た古墳主体部の副葬土器 - 静岡県・三重県の事例を中心に -」『網干善教先生古希記念考古学論集』同刊行会

白澤 崇　1998「組成から見た古墳主体部の副葬土器 -2」『静岡県考古学研究』30　静岡県考古学会

白澤 崇　2001「土器組成からみた横穴墓」『東海の横穴墓』 静岡県考古学会

鈴木 一有　2000「交易される鉄鏃」『表象としての鉄器副葬』 鉄器文化研究会

鈴木 敏則　2004『有玉古窯』 浜松市教育委員会

田中 良之　2013「墓地に残された人骨から復元する葬送儀礼」土生田純之編『事典　墓の考古学』 吉川弘文館

田辺 昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古クラブ

田辺 昭三　1981『須恵器大成』 角川書店

田村 隆太郎　2008「木棺直葬墳の土器群と葬送儀礼」『森町円田丘陵の古墳群』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

田村 隆太郎　2014「静岡県の後期古墳における脚付長頸壺」『研究紀要』第3号　静岡県埋蔵文化財センター

辻村 純代　1989「箱式石棺に葬られた人々－『同棺複数埋葬』と『二次葬』をめぐって」『考古学ジャーナル』307号

寺前 直人　2005「後期古墳における土器副葬の階層性」『井之内稲荷塚古墳の研究』 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団

藤原 学　1985「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米寿記念献呈論文集』乾　末永先生米寿記念会

古屋 紀之　2008「信濃の中期古墳における土器配置の一様相」小林三郎・大塚初重ほか編『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅲ』六一書房

松井 一明　2004「袋井の群集墳と横穴墓を考える」『地蔵ヶ谷古墳群・横穴群』 袋井市教育委員会

三原 翔吾　2013「若狭・越前地域における古墳出土須恵器」『駒沢考古』第38号　駒沢大学考古学研究室

三好 博喜　1997「廻の祭り」『太邇波考古学論集』 両丹考古学研究会

前田 健　2007「古墳出土須恵器からみた須恵器の使用者と生産者 - 静岡平野の事例分析から -」『静岡県考古学研究』39　静岡県考古学会

資料文献

網干 善教　1961「御所市森脇吐田平古墳群」『奈良県文化財調査報告』第4集　奈良県教育委員会

綾部市資料館　1997『綾部市資料館報』平成7年度

綾部市教育委員会　1998『京都府綾部市文化財調査報告』第26集

岡垣町教育委員会　1977『東田古墳群』

岡部町教育委員会　1981『内谷古墳群　本郷支群31・32号墳発掘調査概報』

岡部町教育委員会　1982『静岡県志太郡岡部町横添古墳群板沢支群発掘調査報告書』

加藤学園沼津考古学研究所　1972『駿河東原古墳』

加藤学園沼津考古学研究所　1976『駿河石川古墳群第3次発掘調

査報告書』
金谷町教育委員会　1983『駿河山２号墳発掘調査報告書』
岐阜県文化財保護センター　2000『南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡』
久美浜町教育委員会　1983『湯舟坂２号墳』
後藤 守一・斉藤 忠　1953『静岡賤機山古墳』 静岡県教育委員会
佐賀県教育委員会　1966『東十郎古墳群』
相良町教育委員会　2000『大寄横穴群・山下遺跡』
滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1976『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
静岡縣　1930『静岡縣史』1
静岡県教育委員会　1975『静岡県埋蔵文化財調査報告』
静岡県教育委員会　1984『伊庄谷横穴群』下（遺物編）
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1997『小笠山総合運動公園内遺跡群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004『田頭山古墳群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『原分古墳』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010a『富士山・愛鷹山麓の古墳群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010b『衣原古墳群　衣原遺跡　衣原古窯群』
静岡市教育委員会　1962『駿河丸山古墳』
静岡市教育委員会　1963『駿河伊庄谷横穴群』 静岡考古館
静岡市教育委員会　1967『駿河堀ノ内山古墳群』
静岡市教育委員会　1983『駿河・牧ヶ谷古墳』
静岡市教育委員会　1984『佐渡山２号墳発掘調査報告書』
静岡市教育委員会　1985『駿河楠ヶ沢古墳群』
静岡市教育委員会　2010『尾羽西山遺跡発掘調査報告書』
静岡市教育委員会　2011『宮川５号墳発掘調査報告書』
静岡大学人文学部考古学研究室　2007『有度山麓における後期古墳の研究Ⅰ』 六一書房
島田市教育委員会　1978『鵜田１号墳・２号墳　法信寺１号墳』
島田市教育委員会　1980『波田１号墳　馬平遺跡』
清水市教育委員会　1984『東久佐奈岐古墳群（3・4・6号墳）・宮平Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
清水市教育委員会　2002『神明山第４号墳』
駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所　1984『笛吹段・兎沢古墳群』
西駿考古学研究会　1968『静岡県藤枝市瀬戸古墳群第１次調査瀬戸地区その1』
遠江考古学研究会　1965『島田市水掛渡古墳群発掘調査報告書』 静岡県
豊岡村教育委員会　1983『押越・社山古墳群調査報告書』
長泉町教育委員会　1974『上出口古墳』
名古屋市教育委員会　1969『守山の古墳』調査報告第二
奈良県教育委員会　1962『大和二塚古墳』
奈良県教育委員会　1972『烏土塚古墳』
奈良県立橿原考古学研究所　1977『平群・三里古墳』
奈良県立橿原考古学研究所　1984『市尾墓山古墳』 高取町教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所　1987『史跡牧野古墳』 広陵町教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所　1993『藤ノ木古墳第2･3発掘調査報告書』
奈良県立橿原考古学研究所　1994『平林古墳』 當麻町教育委員会
沼津考古研究所　1970『本宿上ノ段古墳』
沼津市　2002『沼津市史』資料編考古
沼津市教育委員会　1985『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』
沼津市教育委員会　1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書』
沼津市教育委員会　2006『石川古墳群』
袋井市教育委員会　1997『八幡ヶ谷横穴群』
袋井市教育委員会　2004『地蔵ヶ谷古墳群・横穴群Ⅰ・Ⅱ』
福岡大学人文学部考古学研究室　2003『佐賀県・東十郎古墳群の研究／対馬・サイノヤマ古墳の調査』
藤枝市　2007『藤枝市史』資料編１考古
富士市教育委員会　1981『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　横沢古墳・中原１号墳　伝法遺跡群（伝法Ａ～Ｅ地区）　天間地区』
富士市教育委員会　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』
富士市教育委員会　1990『東平１号墳発掘調査概要』
富士市教育委員会　1999『船津古墳群』
松山市教育委員会　2003『葉佐池古墳』
三島市　1958『三島市誌』上巻
三島市教育委員会　2000『夏梅木遺跡群』
明治大学文学部考古学研究室　2008『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅲ』六一書房
望月 董弘・手島 四郎　1963『駿河伊庄谷横穴墳』 静岡工業高等学校・静岡英和女学院
森町　1998『森町史』資料編一　考古
森町教育委員会　1996『静岡県森町飯田の遺跡』
八尾市文化財調査研究会　1993『芝塚古墳』
由比町教育委員会　1985『室ヶ谷遺跡群』

図出典

第170図　院内乙墳（森町1998）、鵜田１号墳（島田市1978）、笛吹段20号墳（駿府博1984）、宮川５号墳（静岡市2011）、船津Ｌ-210号墳（富士市1999）、清水柳北２号墳（沼津市1990）、田頭山３号墳（静岡県2004）により作成

第172図　衣原11号墳（静岡県2010b）により作成

第173図　牧野古墳（奈良県1987）、山尾北古墳（綾部市1997）により作成

第174図　東十郎特別区イ号墳（福岡大2003）、大室168号墳（明治大2008）により作成

第４節　中原４号墳出土ガラス小玉の自然科学的調査

田村 朋美

はじめに

中原４号墳からは多くのガラス小玉が出土している。今回、これらのガラス小玉232点（No.186～417）について、各種の自然科学的手法を用いてガラスの材質調査を実施した。以下、その結果について報告する。

１　調査方法

(1) コンピューテッドラジオグラフィ法

鉛を融剤としたガラス（鉛ガラス、鉛バリウムガラス、カリ鉛ガラスなど）の判別を目的としてＸ線透過撮影を実施した。本調査では、Ｘ線透過撮影法としてコンピューテッドラジオグラフィ法（Computed Radiography法：以下、CR法）を適用した。CR法は、従来のフィルムのかわりにイメージングプレート（Imaging Plate、以下、IP）を検出系に用いる方法である。用いた装置は、マイクロフォーカスＸ線拡大撮像システム（富士フィルム社製μFX-1000）とイメージングアナライザー（富士フィルム社製BAS-5000）である。IPにはBAS-SR2025を使用した。管電圧は40 kV、管電流は60 μA、露光時間は60秒であった。

(2) オートラジオグラフィ法

本調査では、カリウム（K）を多く含むガラス（カリガラス、カリ鉛ガラス）の判別を目的としてオートラジオグラフィ法（Auto Radiography法：以下、AR法）を実施した。IPは放射線に対して極めて感度がよく、微弱な放射線でも長時間暴露することで検出可能である。AR法は、物質から放射される放射線をフィルムやIPに記録して画像を得る方法であり、放射線の蓄積線量により画像の濃淡が異なる。カリガラスは一般に酸化カリウムを18%前後含有し、^{40}Kに由来する放射線（ベータ線）を放射している。したがって、カリガラスとソーダ石灰ガラスをIP上に同じ時間だけ暴露した場合、得られた画像の中でより濃いものを、カリガラスとして識別することができる。

本調査では、以下の手順でAR法を実施した。まず、資料を直接上に置いたIPを、外部からの放射線を遮断するため、鉛製の遮蔽箱内に設置した。そして、遮蔽箱の鉛に由来する放射線を遮蔽するため、IPの周辺を銅板で囲った。使用したIPはBAS-SR2025であり、暴露時間は168時間とした。また、比較のための標準試料として、日本岩石標準試料JB-1aとJG-1aの粉体圧縮ピース、およびBCR126A（IRMM（Institute for Reference Material and Measurement）標準物質）を同時に暴露した。これらの酸化カリウム（K_2O）の含有量は、それぞれ1.4%、4.0%および10.0%である。暴露後、IPを取り出し、CR法と同様にイメージングアナライザーによりスキャンニングをおこない、AR像をデジタルデータとして取得した。

(3) 蛍光Ｘ線分析法

ガラス小玉の主要な構成成分とそれらのおおよその含有量を知るために蛍光Ｘ線分析を実施した。資料の測定箇所は、亀裂等が少なく、保存状態が良好と判断した部分を選定した。なお、測定に先立ち、土などの汚れは顕微鏡下でエチルアルコールを用いた洗浄をおこなった。測定結果は、測定試料と近似する濃度既知のガラス標準試料（CG-A、SG5、SG7、SGT5、NIST620）を用いて補正した理論補正法（Fundamental Parameter method、以下FP法とよぶ）により、検出した元素の酸化物の合計が100%になるように規格化した。

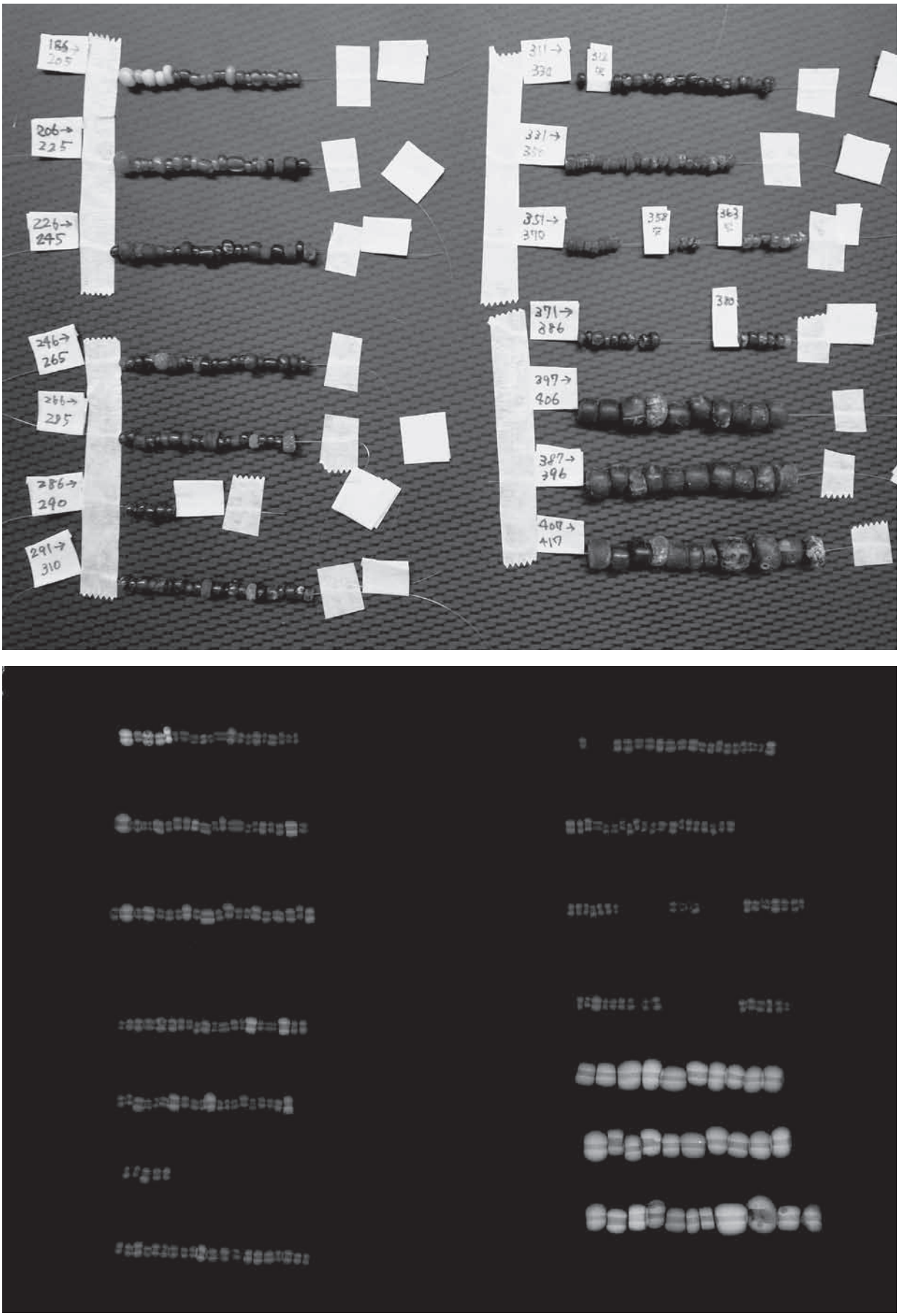
測定に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（エダックス社製EAGLE Ⅲ）である。励起用Ｘ線源はMo管球、管電圧は、FP法を用いた定量分析では20 kVに設定し、一部の資料については20 keV以上のスペクトルを検出するため、50 kVに設定した。管電流は100 μA、Ｘ線照射径は112 μm、計数時間は300秒とした。なお、測定は真空中で実施した。

２　結果と考察

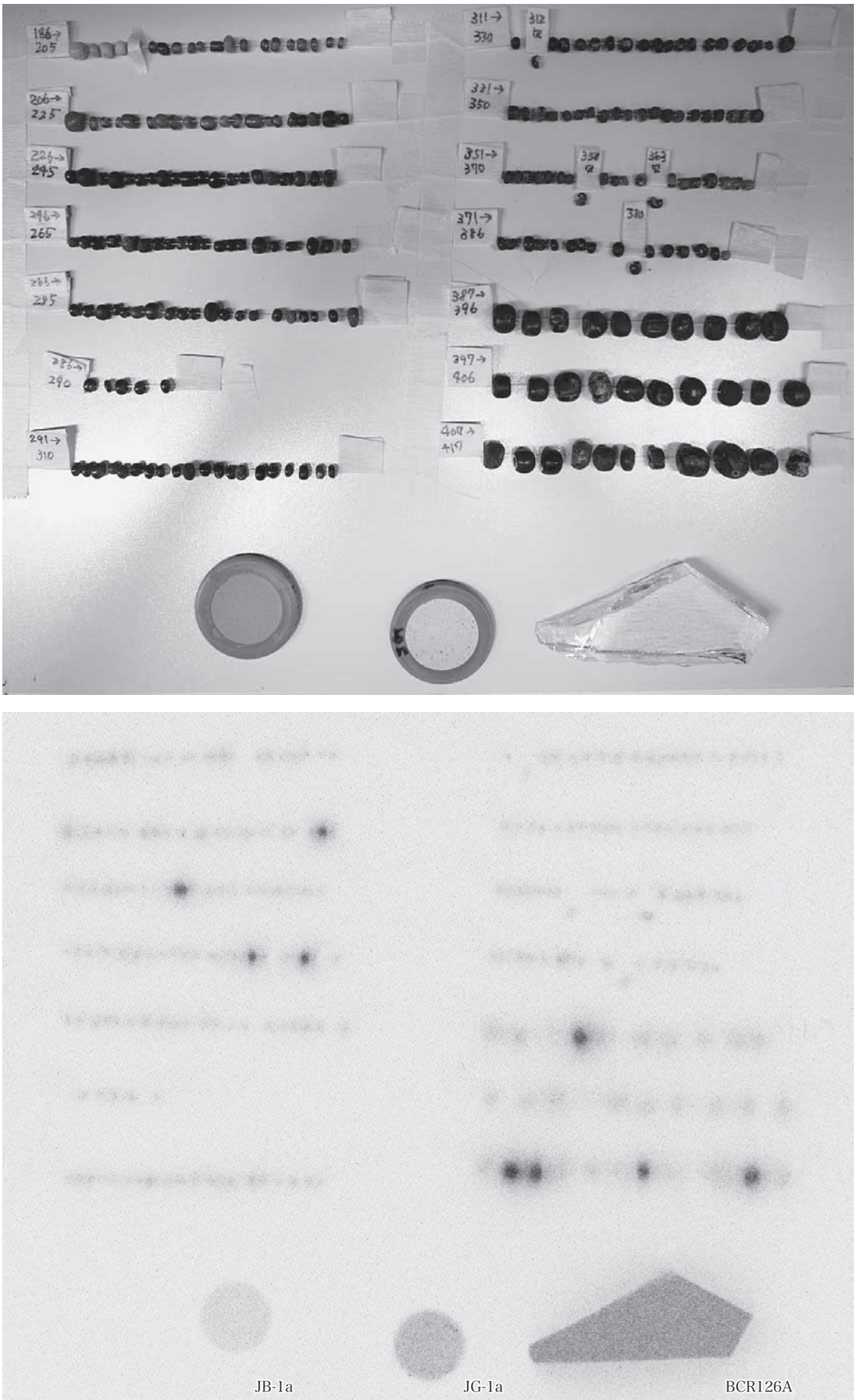
(1) CR法・AR法による材質推定結果

CR法を実施した結果、Ｘ線の吸収が著しく大きい資料は認められなかったことから、いずれもアルカリケイ酸塩ガラスであると推定される（第175図）。

AR法を実施した結果、No.224、235、260、263、390、408、409、413、416の９点のみ比較資料の


186→205
206→225
226→245
246→265
266→285
286→290
291→310
311→330
331→350
351→370
371→386
387→396
397→406
407→417

第175図　CR法



第176図　AR法

BCR126A（K_2O：10.0%）よりも濃い画像が得られた（第176図）。CR法の結果と総合して、これら9点のガラス小玉はカリガラスの可能性が高いと判断される。一方、これら以外のガラス小玉のK_2O含有量は、比較資料のJB-1aと同程度、またはJB-1aとJG-1aの中間程度と推定され、ソーダガラスと推定される。

（2）蛍光X線分析結果

以上の結果を踏まえて、蛍光X線分析を実施した。ただし、破片資料のNo.312、358、362、363、380は脆弱であり、真空下に置くことによって更なる破損が危惧されたため、蛍光X線分析は実施せず、CR法およびAR法による材質推定にとどめた。また、鋳型法によって製作されたガラス小玉（40点）については、異なる種類のガラスが混合されている可能性があるため、化学組成による分類的評価は行っていない。以下、鋳型法以外のガラス小玉を対象として考察する。

1）カリガラスグループ

AR法およびCR法によりカリガラスと推定されたNo.224、235、260、263、390、408、409、413、416の9点は、蛍光X線分析の結果、K_2Oの定量値が高い値を示し、カリウムを融剤としたカリガラスであることが確認された。さらに、これらは、カリガラスの中でも酸化アルミニウム（Al_2O_3）含有量が少なく、酸化カルシウム（CaO）含有量が多いタイプのカリガラス（Group PII）（Oga and Tamura 2013）に相当する。これまでの類例調査において、Group PIはコバルト着色の紺色カリガラスに、Group PIIは銅着色の淡青色カリガラスに対応することが明らかとなっている。本資料は、すべてコバルト着色であり、基礎ガラスの化学組成と着色剤の組み合わせから、典型的なGroup PIのカリガラスであると言える。なお、これらの紺色カリガラスは、コバルト原料の不純物と考えられる酸化マンガン（MnO）を多く含有する。このことは、Group PIのカリガラスに用いられたコバルト原料の特徴と一致する。

2）ソーダガラスグループ

鋳型法以外のガラス小玉のうち、CR法およびAR法の結果からソーダガラスと推定されたものは、蛍光X線分析でも矛盾しない結果が得られた。これらの資料について、ソーダガラスを細分する指標である酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化カルシウム（CaO）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）の含有量から、既存のグループ（Group SI～SV）（Oga and Tamura 2013）への帰属を検討した。その結果、高アルミナタイプのソーダガラス（Group SIIB）に帰属すると判断されるもの127点、植物灰タイプのソーダガラス（Group SIIIB）に帰属すると判断されるもの45点、ナトロン主体タイプのソーダガラス（Group SIV）と判断されるもの2点（No.388、415）、帰属判断に疑問が残るもの4点（No.264、389、400、414）に分類した。

高アルミナタイプのソーダガラス（Group SII） これらは、MgO-K_2Oのグラフ上でMgOが少なくK_2Oが多く、かつ、CaO-Al_2O_3のグラフ上で比較的Al_2O_3の多い特徴を有する。これらは、ほかにもTiO_2の含有量が他のグループに比べて相対的に多い。Group SIIはGroup SIIAとGroup SIIBに分けられるが、本資料はすべてGroup SIIBであった。なお、今回蛍光X線分析を実施しなかった破片資料についても、CR法・AR法による材質推定および製作技法と色調の類似性からGroup SIIBに帰属する可能性が高いと推察される。

これらのガラスは色調と着色剤の種類が最も多様であり、着色に関与する成分によって、マンガンと銅で複合的に着色された濃青色～灰色のもの（85点）、銅イオンによって淡青色～淡青緑色を呈するもの（34点）、人工黄色顔料の錫酸鉛（$PbSnO_3$）によって黄色を呈するもの（5点）（No.186～190）、銅イオンと錫酸鉛（$PbSnO_3$）によって複合的に着色され黄緑色を呈するもの（2点）（No.194、214）、および鉄により黒色を呈するもの（1点）（No.305）がある。

植物灰タイプのソーダガラス（Group SIII） MgOおよびK_2Oの含有量がいずれも1.5%よりも多く、かつ、低アルミナ（Al_2O_3＜5%）高カルシウム（CaO＞5%）であることが特徴である。いずれもコバルト着色の紺色ガラス小玉である。コバルト原料は、MnO含有量が少なく、CuOおよびPbOを0.1%前後含むタイプである。このような基礎ガラスの化学組成と着色剤の組み合わせは古墳時代後期に流通したガラス小玉に一般的なものである。Group SIIIは、流通時期や製作技法の違いによって、Group SIIIA～Cに分けられるが、本資料はすべてGroup SIIIBと判断される。

ナトロン主体タイプのソーダガラス（Group SIV） No.388およびNo.415の2点が該当する。Group SIV

は、MgO および K_2O の含有量が少ないタイプのソーダガラスだが、典型的なナトロンガラス（Group SI）と比較すると K_2O の含有量が多いことや、CaO 含有量がやや少ない傾向が認められる。さらに、これらのガラス小玉はコバルト着色による紺色ガラス小玉であり、MnO 含有量が多く、CuO および PbO の含有量が極めて少ないタイプのコバルト原料が用いられている。このような着色剤の特徴も、これまでに知られる Group SIV の類例と矛盾しない。

その他　今回、蛍光 X 線分析を実施した資料のうち、No.264、389、400、414 の 4 点については、既存のグループに帰属させることに疑問が残った。いずれも紺色を呈するガラス小玉である。これらは、低 Al_2O_3、高 CaO タイプのソーダガラスであるが、MgO と K_2O 含有量の両方またはどちらか一方が Group SI や Group SIV としては多いが、Group SIII としては少ない。一方、着色剤の特徴については、MnO 含有量が比較的少なく、CuO および PbO を 0.1 ～ 0.2% 含有することから、Group SIIIB に用いられるコバルト原料の特徴と一致する。全体としては、Group SIIIB との共通項が多い印象をうけるが、現段階では判断を保留した。

参考文献

Oga and Tamura　2013 Ancient Japan and the Indian Ocean International Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenences and Trade Routes of imported glass beads in the Yayoi-Kofun Periods（3rd Century BCE- 7th Century CE）, *Journal of Indian Ocean Archaeology* No.9, pp.34-60.

第 11 表　蛍光 X 線分析結果一覧

番号	製作技法	材質		着色材	色調	重量濃度（%）															
		大別	細別			Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O3	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	CoO	CuO	ZnO	PbO	Rb2O	SrO	ZrO2
186	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	錫酸鉛	黄色不透明	16.2	0.3	7.8	68.3	0.1	2.2	2.2	0.47	0.08	1.30	0.03	0.03	0.01	0.95	0.00	0.01	0.05
187	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	錫酸鉛	黄色不透明	17.4	1.3	9.1	64.0	0.1	1.7	2.8	0.49	0.12	2.30	0.05	0.02	0.01	0.54	0.00	0.02	0.03
188	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	錫酸鉛	黄色不透明	11.4	0.8	10.7	68.4	0.3	2.3	2.7	0.33	0.05	1.85	0.03	0.06	0.01	1.02	0.01	0.05	0.07
189	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	錫酸鉛	黄色不透明	14.2	0.8	10.5	66.1	0.2	3.2	2.1	0.42	0.04	0.81	0.01	0.02	0.01	1.45	0.01	0.05	0.15
190	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	錫酸鉛	黄色不透明	18.0	0.8	8.9	64.6	0.5	2.6	1.8	0.39	0.05	0.84	0.02	0.02	0.01	1.49	0.01	0.03	0.07
191	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	18.5	0.9	10.7	60.1	0.3	1.6	4.8	0.46	0.06	1.69	0.04	0.51	0.01	0.04	0.02	0.04	0.16
192	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	16.5	0.4	8.1	66.7	0.2	2.0	2.9	0.44	0.29	1.52	0.03	0.76	0.01	0.03	0.01	0.03	0.10
193	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	15.2	0.7	6.1	71.4	0.2	1.4	3.0	0.26	0.04	0.94	0.01	0.55	0.02	0.04	0.01	0.04	0.12
194	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋錫酸鉛	黄緑色半透明	13.9	0.5	9.7	66.9	0.2	1.8	3.3	0.27	0.05	1.24	0.02	0.94	0.02	1.18	0.00	0.05	0.05
195	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	16.2	0.9	10.2	64.4	0.2	1.9	2.8	0.45	0.08	1.85	0.03	0.84	0.02	0.07	0.02	0.05	0.08
196	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	15.7	0.4	7.8	67.9	0.1	2.2	2.9	0.46	0.25	1.24	0.02	0.66	0.00	0.07	0.03	0.06	0.16
197	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	12.0	0.4	10.7	68.6	0.2	3.5	2.1	0.57	0.08	1.01	0.03	0.55	0.01	0.07	0.01	0.03	0.13
198	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	19.4	1.0	10.5	60.5	0.3	1.7	4.1	0.42	0.05	1.54	0.04	0.47	0.01	0.02	0.02	0.04	0.05
199	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	17.6	0.3	7.4	67.3	0.1	1.9	2.8	0.51	0.09	1.09	0.03	0.67	0.01	0.03	0.01	0.03	0.05
200	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	15.7	0.8	9.7	65.4	0.2	2.5	2.8	0.80	0.11	1.44	0.04	0.32	0.00	0.02	0.02	0.05	0.09
201	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	16.2	0.5	8.0	66.4	0.2	2.5	3.3	0.44	0.07	1.28	0.02	0.75	0.02	0.04	0.03	0.03	0.20
202	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	14.6	0.9	9.0	64.9	0.3	2.2	5.6	0.45	0.08	1.30	0.02	0.35	0.01	0.05	0.01	0.02	0.10
203	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	15.0	0.6	8.2	67.7	0.2	2.6	3.3	0.44	0.09	1.22	0.03	0.51	0.01	0.06	0.01	0.02	0.06
204	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	19.4	0.6	10.5	60.0	0.2	1.6	4.8	0.47	0.05	1.66	0.02	0.50	0.01	0.02	0.01	0.03	0.15
205	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	15.5	0.6	8.2	64.6	0.2	1.9	5.8	0.39	0.07	1.98	0.03	0.67	0.01	0.02	0.00	0.04	0.02
206	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	19.0	0.5	10.6	62.9	0.1	2.1	2.3	0.50	0.05	0.92	0.02	0.63	0.01	0.22	0.01	0.05	0.20
207	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	14.9	0.7	8.6	64.8	0.2	2.2	6.0	0.47	0.08	1.36	0.03	0.35	0.01	0.05	0.01	0.04	0.13
208	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	10.3	1.0	11.1	68.2	0.4	4.3	2.1	0.43	0.09	1.27	0.03	0.46	0.01	0.03	0.02	0.05	0.13
209	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	15.4	0.7	8.0	67.3	0.2	1.9	3.9	0.47	0.07	1.30	0.02	0.54	0.01	0.04	0.01	0.02	0.04
210	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青緑色透明	18.5	0.5	5.5	68.8	0.1	1.3	1.3	0.59	0.11	1.83	0.03	1.04	0.01	0.21	0.02	0.04	0.09
211	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	20.5	0.7	9.5	61.3	0.2	3.6	1.9	0.42	0.11	1.10	0.03	0.39	0.01	0.04	0.02	0.03	0.22
212	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	14.1	0.7	8.8	69.4	0.2	2.8	1.6	0.40	0.10	0.70	0.02	0.83	0.01	0.12	0.02	0.04	0.08
213	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	12.8	0.7	8.0	70.8	0.2	2.1	2.9	0.47	0.06	1.10	0.02	0.57	0.02	0.02	0.02	0.03	0.16
214	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋錫酸鉛	黄緑色半透明	15.2	0.6	8.5	68.7	0.1	1.4	2.6	0.27	0.06	1.05	0.03	0.68	0.00	0.77	0.00	0.03	0.12
215	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	20.3	0.6	8.9	62.2	0.2	2.4	2.5	0.80	0.12	1.36	0.04	0.44	0.01	0.05	0.01	0.04	0.06
216	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	14.3	0.9	7.9	68.1	0.3	2.2	3.8	0.44	0.07	1.12	0.02	0.63	0.00	0.04	0.01	0.03	0.10
217	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	19.6	0.4	7.4	65.5	0.1	2.1	2.6	0.46	0.05	1.00	0.02	0.48	0.01	0.03	0.01	0.04	0.10
218	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	13.9	0.6	8.1	69.8	0.3	2.1	2.8	0.49	0.07	1.08	0.03	0.56	0.01	0.05	0.02	0.03	0.15
219	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	18.7	0.9	10.5	60.3	0.3	1.6	4.7	0.46	0.06	1.68	0.03	0.52	0.02	0.01	0.01	0.04	0.06
220	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	19.0	0.9	10.4	60.2	0.3	1.6	4.7	0.44	0.06	1.64	0.02	0.49	0.01	0.02	0.01	0.03	0.14
221	鋳型				紺色	11.1	1.7	3.9	71.9	0.3	3.4	5.1	0.22	0.58	1.36	0.10	0.16	0.01	0.08	0.02	0.03	0.07
222	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	17.1	0.5	8.4	65.3	0.1	1.9	2.7	0.44	0.57	1.40	0.03	1.14	0.01	0.17	0.02	0.03	0.14
223	鋳型				紺色	8.9	2.7	3.5	73.8	0.4	1.7	6.3	0.20	0.26	1.57	0.12	0.16	0.02	0.10	0.02	0.04	0.08
224	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト	紺色透明	0.8	0.5	2.3	76.9	0.3	13.7	1.6	0.26	2.46	0.97	0.09	0.04	0.01	0.04	0.02	0.03	0.06
225	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	17.8	0.4	7.3	66.5	0.1	1.8	2.6	0.50	0.40	1.57	0.03	0.87	0.02	0.03	0.01	0.03	0.13
226	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	21.6	0.6	7.5	62.1	0.2	1.9	3.6	0.38	0.39	1.26	0.03	0.42	0.02	0.02	0.01	0.03	0.00
227	鋳型				紺色	7.1	2.9	3.6	74.0	0.4	2.5	6.9	0.22	0.23	1.62	0.10	0.14	0.01	0.10	0.03	0.04	0.12
228	鋳型				紺色	16.5	4.5	3.2	66.0	0.4	1.9	5.9	0.12	0.36	0.87	0.05	0.06	0.01	0.04	0.01	0.04	0.09
229	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	13.2	4.8	4.4	63.9	0.5	3.2	7.6	0.14	0.09	1.39	0.15	0.23	0.01	0.05	0.02	0.05	0.13
230	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	16.6	3.8	2.8	66.9	0.2	2.0	5.6	0.20	0.23	1.18	0.09	0.12	0.01	0.08	0.01	0.06	0.15
231	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	11.1	0.8	8.6	69.7	0.3	2.4	4.1	0.43	0.44	1.46	0.03	0.46	0.01	0.03	0.02	0.06	0.09
232	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	17.8	0.4	8.2	65.1	0.1	1.8	2.6	0.47	0.59	1.38	0.03	1.08	0.02	0.17	0.01	0.03	0.18
233	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	11.1	1.4	2.8	73.2	0.3	2.0	6.7	0.19	0.37	1.50	0.13	0.17	0.02	0.10	0.01	0.05	0.06
234	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	15.6	1.0	8.6	66.1	0.2	2.4	2.5	0.51	0.45	1.38	0.04	0.87	0.01	0.09	0.01	0.03	0.12
235	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト	紺色透明	0.7	0.4	2.8	79.0	0.2	13.4	0.9	0.14	1.40	0.82	0.06	0.02	0.01	0.02	0.02	0.02	0.10
236	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	15.3	0.9	9.3	65.0	0.4	2.2	4.0	0.42	0.41	1.40	0.03	0.43	0.01	0.04	0.01	0.03	0.17
237	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	11.3	0.7	8.6	69.8	0.2	2.3	4.2	0.42	0.44	1.40	0.02	0.48	0.01	0.02	0.01	0.03	0.05
238	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	16.4	0.6	8.2	65.9	0.2	2.1	3.9	0.41	0.41	1.33	0.02	0.42	0.01	0.04	0.01	0.03	0.12
239	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	17.8	0.8	8.3	64.7	0.2	2.4	2.5	0.45	0.41	1.31	0.02	0.85	0.01	0.10	0.00	0.04	0.10
240	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	16.5	2.6	3.0	67.9	0.3	1.5	6.2	0.30	0.13	1.27	0.07	0.08	0.00	0.05	0.01	0.03	0.05
241	鋳型				紺色	13.5	4.4	3.5	68.1	0.3	2.5	6.0	0.15	0.16	1.14	0.07	0.10	0.01	0.07	0.02	0.04	0.04
242	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	20.0	0.5	7.6	63.4	0.1	2.0	3.7	0.39	0.40	1.24	0.02	0.43	0.01	0.01	0.01	0.04	0.11
243	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	15.8	2.2	3.2	66.3	0.3	2.0	8.2	0.18	0.40	1.02	0.07	0.08	0.01	0.07	0.01	0.05	0.08
244	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	8.9	0.6	8.7	71.3	0.2	2.5	4.7	0.45	0.48	1.49	0.02	0.50	0.02	0.00	0.02	0.04	0.08
245	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	2.6	2.0	4.4	77.9	0.6	1.4	8.2	0.25	0.52	1.54	0.10	0.13	0.02	0.10	0.01	0.04	0.17
246	鋳型				紺色	15.1	3.0	3.5	67.7	0.4	2.1	6.1	0.17	0.19	1.25	0.08	0.13	0.01	0.08	0.02	0.04	0.13
247	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	6.1	0.9	9.4	73.4	0.4	2.6	4.1	0.45	0.45	1.48	0.02	0.49	0.02	0.00	0.03	0.03	0.11
248	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	4.1	0.6	9.4	74.6	0.3	2.9	4.7	0.48	0.49	1.59	0.03	0.53	0.02	0.03	0.02	0.04	0.16
249	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	18.9	0.4	7.9	64.0	0.1	2.0	4.0	0.41	0.41	1.33	0.03	0.44	0.01	0.04	0.00	0.03	0.07
250	鋳型				紺色？	13.8	2.9	4.6	66.8	0.9	2.6	6.2	0.21	0.22	1.41	0.08	0.20	0.01	0.07	0.01	0.04	0.09
251	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	15.9	4.7	3.7	62.7	0.4	3.3	7.6	0.14	0.06	1.02	0.09	0.10	0.01	0.03	0.01	0.05	0.07
252	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	11.2	2.5	3.2	71.5	0.3	2.0	6.4	0.19	0.45	1.66	0.13	0.19	0.01	0.08	0.00	0.03	0.10
253	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	8.8	0.6	9.0	71.7	0.2	2.5	4.2	0.43	0.46	1.45	0.02	0.46	0.01	0.04	0.02	0.04	0.15
254	鋳型				紺色	13.6	1.9	3.5	70.1	0.4	2.0	6.0	0.19	0.23	1.57	0.12	0.16	0.02	0.09	0.01	0.04	0.06
255	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	9.7	0.6	8.7	70.7	0.2	2.6	4.2	0.49	0.51	1.50	0.04	0.50	0.02	0.03	0.02	0.04	0.15
256	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	13.8	0.7	8.9	68.1	0.2	2.0	2.2	0.43	0.54	1.43	0.03	1.17	0.02	0.16	0.01	0.03	0.08
257	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	15.3	0.8	8.3	66.4	0.3	2.2	4.0	0.43	0.41	1.35	0.02	0.43	0.01	0.02	0.03	0.04	0.04
258	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	16.8	0.8	8.2	65.1	0.2	2.1	4.0	0.46	0.46	1.34	0.04	0.44	0.01	0.03	0.00	0.03	0.10
259	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	16.3	0.8	8.6	65.9	0.2	2.0	2.4	0.43	0.55	1.39	0.03	1.15	0.02	0.17	0.02	0.03	0.09
260	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト	紺色透明	0.9	0.5	3.2	76.2	0.1	12.6	1.4	0.27	2.79	1.84	0.10	0.03	0.01	0.03	0.01	0.01	0.00
261	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	15.6	1.7	2.7	69.2	0.2	1.7	6.5	0.17	0.31	1.40	0.11	0.17	0.01	0.07	0.02	0.02	0.00

番号	製作技法	材質		着色材	色調	重量濃度（%）															
		大別	細別			Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O3	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	CoO	CuO	ZnO	PbO	Rb2O	SrO	ZrO2
262	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	12.5	0.5	8.5	69.0	0.3	2.4	3.9	0.42	0.45	1.40	0.03	0.46	0.02	0.02	0.02	0.02	0.13
263	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト	紺色透明	0.4	0.6	3.1	78.3	0.7	10.2	2.0	0.28	2.83	1.35	0.06	0.04	0.01	0.02	0.02	0.00	0.10
264	引き伸ばし	ソーダ	判断保留	コバルト	紺色透明	14.7	0.9	2.8	71.5	0.2	0.9	6.2	0.32	0.24	1.76	0.14	0.18	0.01	0.12	0.01	0.03	0.07
265	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	13.4	0.9	8.6	67.3	0.3	2.2	3.7	0.45	0.20	1.42	0.03	1.32	0.01	0.07	0.02	0.04	0.15
266	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	14.9	0.8	8.3	66.6	0.2	2.3	3.9	0.42	0.43	1.35	0.02	0.46	0.01	0.02	0.02	0.04	0.11
267	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	18.4	0.3	8.5	64.2	0.1	1.9	2.7	0.43	0.56	1.40	0.02	1.18	0.02	0.16	0.00	0.02	0.11
268	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	16.6	1.9	2.7	66.5	0.2	1.8	8.1	0.17	0.53	1.17	0.10	0.11	0.01	0.08	0.01	0.05	0.08
269	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	19.5	0.4	7.7	63.7	0.1	2.0	3.8	0.39	0.39	1.30	0.02	0.40	0.02	0.03	0.00	0.03	0.12
270	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	17.4	0.6	8.7	64.9	0.2	1.8	2.5	0.45	0.55	1.36	0.03	1.10	0.02	0.19	0.00	0.02	0.09
271	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	14.8	1.4	3.8	72.3	0.2	2.0	3.7	0.27	0.16	1.08	0.07	0.08	0.01	0.07	0.01	0.03	0.11
272	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	17.2	0.3	8.5	64.9	0.1	2.3	3.5	0.49	0.20	1.41	0.03	0.66	0.02	0.07	0.00	0.04	0.14
273	鋳型				紺色	15.1	3.4	3.4	67.1	0.4	2.5	6.0	0.21	0.13	1.34	0.07	0.13	0.01	0.10	0.01	0.02	0.11
274	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	19.5	0.8	7.9	63.4	0.2	1.9	3.7	0.39	0.40	1.29	0.02	0.42	0.01	0.02	0.02	0.04	0.08
275	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	18.5	0.7	8.5	64.1	0.2	1.8	2.5	0.42	0.53	1.33	0.02	1.11	0.02	0.16	0.02	0.03	0.10
276	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	16.2	2.8	3.6	65.4	0.3	2.1	7.6	0.18	0.35	1.08	0.09	0.09	0.01	0.09	0.01	0.03	0.06
277	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	20.5	0.5	7.6	62.6	0.1	2.0	3.9	0.40	0.41	1.33	0.02	0.43	0.02	0.04	0.01	0.03	0.11
278	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	14.8	0.3	8.8	66.4	0.2	2.1	3.0	0.56	0.63	1.52	0.04	1.23	0.02	0.18	0.02	0.03	0.09
279	鋳型				紺色？	12.2	3.1	3.2	70.0	0.3	2.5	6.5	0.23	0.20	1.27	0.09	0.13	0.01	0.10	0.01	0.03	0.05
280	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	20.3	0.4	7.5	63.4	0.1	1.9	3.7	0.39	0.39	1.25	0.02	0.41	0.01	0.03	0.01	0.03	0.11
281	鋳型				紺色	10.9	2.8	4.1	69.7	0.4	2.8	6.5	0.22	0.41	1.58	0.09	0.11	0.01	0.08	0.02	0.05	0.12
282	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	20.1	0.8	7.9	62.8	0.2	1.9	3.7	0.38	0.38	1.24	0.02	0.41	0.01	0.04	0.00	0.02	0.07
283	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	9.9	0.5	9.1	71.7	0.1	2.9	2.1	0.54	0.33	1.80	0.03	0.73	0.02	0.12	0.02	0.03	0.12
284	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	19.1	0.7	7.9	63.6	0.2	2.0	3.9	0.39	0.41	1.31	0.03	0.43	0.01	0.03	0.02	0.02	0.07
285	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	10.5	4.2	4.1	71.0	0.3	2.5	5.6	0.15	0.10	1.13	0.09	0.09	0.01	0.10	0.01	0.05	0.09
286	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	5.5	0.9	9.3	73.9	0.4	2.6	4.2	0.44	0.48	1.48	0.02	0.48	0.01	0.02	0.02	0.03	0.16
287	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	16.9	0.8	8.1	65.5	0.2	2.1	3.7	0.38	0.41	1.31	0.03	0.43	0.01	0.03	0.02	0.03	0.12
288	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	13.1	0.7	8.4	68.5	0.2	2.3	3.9	0.41	0.42	1.38	0.03	0.49	0.02	0.06	0.03	0.03	0.10
289	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	19.3	0.4	7.7	63.9	0.1	2.0	3.8	0.38	0.41	1.27	0.03	0.44	0.01	0.05	0.01	0.02	0.13
290	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	11.2	0.8	8.5	69.8	0.3	2.3	4.1	0.42	0.46	1.39	0.03	0.47	0.02	0.04	0.03	0.02	0.10
291	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	17.6	0.7	8.0	64.9	0.2	2.0	3.8	0.40	0.40	1.30	0.02	0.42	0.01	0.01	0.02	0.02	0.11
292	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	19.0	0.7	7.9	64.1	0.2	1.9	3.7	0.38	0.39	1.23	0.02	0.40	0.02	0.03	0.01	0.04	0.05
293	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	16.5	0.4	7.8	67.5	0.1	2.1	3.0	0.46	0.24	1.04	0.03	0.54	0.01	0.11	0.01	0.03	0.03
294	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	13.4	4.4	3.5	67.7	0.2	2.2	6.3	0.18	0.25	1.39	0.10	0.16	0.00	0.07	0.02	0.04	0.12
295	鋳型				紺色	8.7	3.0	5.8	71.6	0.4	2.1	6.2	0.25	0.14	1.36	0.10	0.14	0.01	0.04	0.02	0.04	0.11
296	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	8.6	0.9	9.1	71.5	0.3	2.4	4.2	0.43	0.44	1.44	0.03	0.46	0.01	0.04	0.02	0.02	0.08
297	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	14.6	0.7	8.4	67.1	0.3	2.2	4.0	0.41	0.41	1.35	0.02	0.41	0.02	0.00	0.00	0.02	0.13
298	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	18.1	0.4	10.9	61.7	0.1	4.0	2.0	0.32	0.29	1.10	0.02	0.84	0.01	0.03	0.02	0.03	0.07
299	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	14.5	0.7	8.6	66.9	0.3	2.2	4.0	0.42	0.42	1.34	0.02	0.45	0.01	0.03	0.02	0.04	0.08
300	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色	14.4	4.9	4.3	62.4	0.5	2.8	8.6	0.16	0.11	1.43	0.12	0.18	0.01	0.09	0.02	0.06	0.06
301	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	16.1	0.5	8.3	66.1	0.2	2.1	3.9	0.39	0.41	1.32	0.03	0.42	0.01	0.03	0.01	0.04	0.13
302	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	19.7	0.6	7.8	63.1	0.2	2.1	3.8	0.39	0.40	1.27	0.03	0.41	0.01	0.05	0.02	0.04	0.11
303	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	20.4	0.4	7.6	63.0	0.1	2.0	3.8	0.40	0.41	1.30	0.02	0.43	0.02	0.02	0.01	0.02	0.13
304	鋳型				紺色	13.4	2.2	3.4	70.1	0.3	2.7	5.7	0.21	0.53	1.21	0.09	0.10	0.01	0.04	0.02	0.06	0.02
305	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	鉄	黒	13.3	0.9	9.4	68.3	0.3	2.6	2.7	0.76	0.06	1.39	0.02	0.03	0.01	0.04	0.02	0.06	0.11
306	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	11.1	0.4	8.7	69.7	0.2	2.4	4.4	0.45	0.48	1.52	0.02	0.49	0.02	0.02	0.01	0.03	0.07
307	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	19.9	0.8	7.8	62.7	0.2	2.0	3.9	0.39	0.39	1.29	0.03	0.39	0.01	0.03	0.01	0.02	0.12
308	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	19.0	0.6	7.9	63.6	0.2	2.0	3.8	0.44	0.43	1.31	0.03	0.43	0.01	0.02	0.02	0.04	0.03
309	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	13.2	0.6	8.3	68.6	0.1	2.1	4.1	0.42	0.42	1.42	0.03	0.49	0.02	0.02	0.02	0.02	0.12
310	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	15.4	3.7	2.9	68.1	0.2	2.1	5.2	0.16	0.28	1.31	0.11	0.19	0.01	0.11	0.01	0.02	0.13
311	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	19.8	0.4	7.7	63.6	0.1	2.0	3.8	0.40	0.39	1.26	0.02	0.40	0.00	0.01	0.01	0.05	0.07
312	引き伸ばし	ソーダ			濃青色透明（暗）	破片のため未分析																
313	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	17.7	0.4	7.9	65.2	0.1	2.1	3.9	0.40	0.40	1.31	0.02	0.42	0.01	0.00	0.01	0.02	0.11
314	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	16.4	0.4	8.1	65.9	0.2	2.2	4.1	0.41	0.43	1.36	0.02	0.44	0.01	0.03	0.02	0.03	0.10
315	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	13.1	1.7	4.1	73.3	0.4	1.8	3.7	0.27	0.14	1.17	0.10	0.08	0.01	0.06	0.01	0.01	0.08
316	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	5.6	0.6	9.3	74.0	0.4	2.5	4.3	0.50	0.48	1.58	0.02	0.53	0.01	0.03	0.01	0.05	0.12
317	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	14.2	0.5	8.3	67.5	0.2	2.1	4.2	0.43	0.41	1.39	0.03	0.45	0.02	0.05	0.01	0.05	0.15
318	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	14.6	0.4	8.4	66.9	0.3	2.3	4.2	0.43	0.43	1.41	0.02	0.48	0.01	0.01	0.02	0.01	0.13
319	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	20.6	0.7	7.7	62.5	0.2	1.9	3.7	0.44	0.44	1.27	0.04	0.40	0.01	0.03	0.01	0.03	0.09
320	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	19.0	0.4	7.8	64.3	0.1	2.0	3.7	0.39	0.40	1.29	0.02	0.41	0.02	0.04	0.03	0.04	0.09
321	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	18.2	0.8	7.8	64.3	0.2	2.1	3.9	0.45	0.46	1.32	0.04	0.41	0.01	0.02	0.01	0.01	0.03
322	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	19.1	0.6	7.6	63.7	0.2	2.0	4.0	0.42	0.41	1.30	0.03	0.43	0.02	0.02	0.01	0.02	0.10
323	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	16.0	0.9	8.2	65.5	0.2	2.2	4.0	0.43	0.41	1.35	0.02	0.45	0.00	0.02	0.01	0.04	0.10
324	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	18.3	0.8	7.9	64.0	0.3	1.9	4.1	0.40	0.41	1.29	0.03	0.42	0.01	0.04	0.00	0.02	0.10
325	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	16.2	2.7	3.3	67.0	0.3	2.1	6.6	0.21	0.11	1.04	0.09	0.07	0.01	0.03	0.00	0.03	0.10
326	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	18.0	0.3	7.9	64.9	0.2	2.0	3.9	0.41	0.41	1.31	0.02	0.43	0.01	0.02	0.01	0.02	0.20
327	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	17.5	5.0	2.6	64.8	0.2	2.0	5.8	0.14	0.18	1.25	0.09	0.17	0.01	0.06	0.01	0.03	0.11
328	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	13.4	3.7	3.3	67.7	0.3	2.9	7.0	0.13	0.18	0.95	0.09	0.09	0.01	0.05	0.00	0.02	0.07
329	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	15.2	4.0	3.3	65.9	0.3	3.0	6.6	0.15	0.20	1.07	0.10	0.09	0.01	0.03	0.02	0.02	0.09
330	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	18.9	3.1	2.5	65.7	0.2	1.7	5.8	0.15	0.24	1.30	0.11	0.17	0.00	0.08	0.00	0.02	0.02
331	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	15.5	1.5	2.2	68.5	0.3	2.5	7.6	0.09	0.09	1.22	0.12	0.20	0.00	0.10	0.00	0.02	0.06
332	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	14.9	3.6	2.8	68.6	0.2	1.8	6.1	0.17	0.16	1.19	0.09	0.15	0.01	0.07	0.02	0.04	0.08
333	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明	16.1	2.4	2.0	68.0	0.3	2.1	7.4	0.09	0.08	1.08	0.12	0.19	0.01	0.11	0.00	0.04	0.00
334	鋳型				紺色	14.5	2.1	4.3	68.0	0.4	1.9	6.0	0.25	0.23	1.66	0.12	0.25	0.01	0.08	0.01	0.03	0.13
335	鋳型				紺色	14.2	3.2	3.2	67.7	0.4	2.5	6.5	0.21	0.27	1.45	0.09	0.09	0.01	0.07	0.01	0.03	0.06
336	鋳型				紺色	11.6	1.6	6.2	69.0	0.6	2.4	5.7	0.33	0.27	1.58	0.07	0.44	0.02	0.07	0.02	0.02	0.05
337	鋳型				紺色	16.4	1.8	3.6	67.9	0.3	2.2	5.7	0.23	0.31	1.18	0.11	0.12	0.02	0.07	0.01	0.02	0.10
338	鋳型				紺色	13.7	2.9	2.7	68.6	0.3	3.0	6.6	0.14	0.29	1.29	0.09	0.10	0.01	0.05	0.01	0.05	0.06
339	鋳型				紺色	10.9	2.8	3.5	70.4	0.5	3.4	6.8	0.16	0.28	0.98	0.06	0.10	0.01	0.04	0.01	0.06	0.05

番号	製作技法	材質		着色材	色調	重量濃度（%）															
		大別	細別			Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O3	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	CoO	CuO	ZnO	PbO	Rb2O	SrO	ZrO2
340	鋳型				紺色	8.0	2.4	6.0	69.6	1.5	2.5	6.9	0.33	0.46	1.81	0.14	0.15	0.02	0.07	0.02	0.04	0.07
341	鋳型				紺色	10.1	2.6	4.0	72.3	0.4	2.1	5.9	0.27	0.25	1.55	0.10	0.24	0.01	0.13	0.01	0.04	0.09
342	鋳型				紺色	15.0	3.8	3.1	67.6	0.4	2.2	6.1	0.15	0.14	1.11	0.08	0.12	0.02	0.07	0.02	0.05	0.06
343	鋳型				紺色	13.2	0.6	7.2	68.9	0.4	2.5	3.7	0.45	0.27	1.47	0.02	1.12	0.01	0.06	0.01	0.03	0.07
344	鋳型				紺色	5.2	2.3	4.2	75.4	0.9	1.7	7.7	0.30	0.32	1.43	0.08	0.15	0.01	0.10	0.01	0.03	0.09
345	鋳型				紺色	8.6	2.3	4.2	72.7	0.6	2.8	6.8	0.15	0.34	1.16	0.07	0.10	0.01	0.03	0.02	0.05	0.06
346	鋳型				紺色	15.9	1.7	2.9	68.4	0.3	2.5	5.5	0.22	0.32	1.68	0.14	0.18	0.01	0.14	0.00	0.04	0.13
347	鋳型				紺色	14.8	3.2	3.5	67.2	0.4	2.7	6.1	0.19	0.25	1.34	0.07	0.10	0.01	0.04	0.01	0.02	0.13
348	鋳型				紺色	11.4	2.9	4.6	68.8	0.7	2.4	6.7	0.27	0.23	1.53	0.10	0.14	0.01	0.08	0.01	0.04	0.10
349	鋳型				紺色	7.7	2.1	3.3	75.3	0.3	1.9	6.6	0.21	0.35	1.86	0.15	0.18	0.02	0.11	0.00	0.04	0.04
350	鋳型				紺色	5.2	2.8	7.6	70.4	1.6	2.3	7.1	0.38	0.20	2.09	0.09	0.13	0.01	0.08	0.02	0.05	0.07
351	鋳型				紺色	10.9	3.3	4.3	71.1	0.4	2.5	5.7	0.16	0.13	1.14	0.08	0.11	0.01	0.04	0.01	0.02	0.17
352	鋳型				紺色	4.5	2.5	6.3	71.9	1.5	2.6	7.5	0.44	0.20	2.13	0.11	0.15	0.02	0.10	0.02	0.04	0.09
353	鋳型				紺色	9.1	2.8	4.9	70.8	1.1	3.1	5.9	0.20	0.25	1.47	0.09	0.14	0.02	0.12	0.01	0.02	0.11
354	鋳型				紺色	9.2	3.2	4.8	70.6	0.9	2.6	6.6	0.22	0.20	1.43	0.08	0.10	0.01	0.05	0.01	0.04	0.04
355	鋳型				紺色	9.9	3.1	3.6	71.1	0.6	3.1	6.6	0.14	0.27	1.19	0.07	0.10	0.01	0.09	0.00	0.05	0.06
356	鋳型				紺色	5.7	2.9	3.5	75.8	0.5	2.8	6.5	0.23	0.14	1.44	0.07	0.16	0.02	0.10	0.01	0.05	0.08
357	鋳型				紺色	15.0	2.8	3.5	67.2	0.4	2.4	6.4	0.23	0.26	1.51	0.08	0.11	0.00	0.06	0.01	0.03	0.07
358	引き伸ばし	ソーダ			濃青色透明（暗）	破片のため未分析																
359	鋳型				紺色	13.7	2.3	3.7	69.0	0.6	2.5	5.7	0.23	0.47	1.55	0.08	0.09	0.01	0.05	0.01	0.05	0.04
360	鋳型				紺色	5.9	2.4	5.5	72.2	1.0	2.4	7.5	0.27	0.32	1.93	0.11	0.18	0.02	0.14	0.02	0.04	0.04
361	鋳型				紺色	4.7	2.4	5.5	74.8	0.9	2.0	6.7	0.35	0.23	1.84	0.09	0.11	0.02	0.09	0.01	0.03	0.16
362	引き伸ばし	ソーダ			濃青色透明（暗）	破片のため未分析																
363	引き伸ばし	ソーダ			濃青色透明	破片のため未分析																
364	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	7.0	0.8	10.6	72.5	0.3	2.6	3.2	0.86	0.06	1.56	0.02	0.35	0.01	0.03	0.02	0.04	0.04
365	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	14.6	0.8	8.9	65.3	0.3	2.1	5.7	0.43	0.08	1.29	0.02	0.32	0.01	0.05	0.02	0.04	0.00
366	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	10.9	0.7	8.5	69.2	0.3	2.7	4.8	0.52	0.19	1.27	0.02	0.61	0.02	0.05	0.00	0.03	0.14
367	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	9.1	0.8	8.4	72.9	0.3	2.6	2.8	0.54	0.21	1.40	0.02	0.83	0.00	0.02	0.02	0.04	0.11
368	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	16.9	0.3	7.7	67.8	0.2	2.1	2.7	0.49	0.06	1.07	0.02	0.52	0.01	0.02	0.02	0.04	0.09
369	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	14.7	0.5	6.7	70.1	0.2	2.4	3.0	0.42	0.07	1.07	0.02	0.68	0.02	0.00	0.02	0.03	0.08
370	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	5.4	0.4	7.6	77.5	0.3	2.8	3.3	0.47	0.06	1.23	0.02	0.75	0.02	0.00	0.03	0.03	0.11
371	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	5.7	0.8	9.3	74.1	0.5	2.5	4.0	0.45	0.46	1.50	0.03	0.49	0.01	0.02	0.03	0.04	0.06
372	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	14.2	0.8	9.1	67.3	0.3	2.0	2.6	0.44	0.55	1.42	0.01	1.16	0.01	0.13	0.01	0.03	0.03
373	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	14.8	0.8	8.4	66.6	0.3	2.3	4.1	0.42	0.41	1.35	0.02	0.44	0.01	0.03	0.00	0.04	0.06
374	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	11.0	0.9	8.7	69.8	0.4	2.3	4.1	0.44	0.43	1.37	0.02	0.45	0.01	0.01	0.02	0.03	0.10
375	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	10.8	0.4	9.0	69.5	0.5	2.4	4.3	0.45	0.45	1.49	0.03	0.50	0.01	0.04	0.01	0.02	0.14
376	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	12.2	0.9	11.8	65.7	0.2	3.9	2.2	0.36	0.30	1.16	0.02	0.89	0.01	0.03	0.02	0.03	0.12
377	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	16.7	0.7	8.1	65.7	0.2	2.1	3.8	0.40	0.40	1.32	0.02	0.42	0.02	0.02	0.01	0.03	0.07
378	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	15.8	0.4	8.2	66.6	0.2	2.2	3.9	0.42	0.42	1.30	0.02	0.43	0.01	0.02	0.01	0.03	0.10
379	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	19.3	0.4	7.9	63.9	0.2	2.0	3.8	0.39	0.40	1.27	0.02	0.42	0.02	0.01	0.01	0.04	0.03
380	引き伸ばし	ソーダ			濃青色透明（暗）	破片のため未分析																
381	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	14.1	0.5	8.2	68.0	0.2	2.2	4.0	0.43	0.44	1.39	0.02	0.46	0.01	0.04	0.02	0.04	0.06
382	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	10.5	0.4	8.5	70.7	0.3	2.3	4.5	0.43	0.46	1.45	0.03	0.48	0.02	0.02	0.01	0.03	0.11
383	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	16.6	0.8	8.0	65.5	0.2	2.1	3.9	0.40	0.43	1.31	0.02	0.44	0.00	0.04	0.03	0.02	0.08
384	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	17.8	0.4	8.0	65.0	0.2	2.1	3.8	0.41	0.43	1.31	0.02	0.45	0.01	0.02	0.01	0.06	0.06
385	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明（暗）	18.3	0.6	7.9	64.1	0.2	2.1	3.9	0.44	0.47	1.33	0.04	0.44	0.01	0.02	0.01	0.03	0.11
386	引き伸ばし	ソーダ	SIIB	銅	淡青色透明	14.4	0.4	6.8	72.1	0.1	1.3	1.9	0.27	0.07	1.83	0.04	0.67	0.00	0.03	0.02	0.03	0.08
387	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	14.2	3.4	3.3	67.0	0.4	2.9	6.8	0.20	0.30	1.40	0.06	0.09	0.00	0.06	0.01	0.03	0.02
388	引き伸ばし	ソーダ	SIV	コバルト	紺色透明（大）	13.4	0.8	3.2	73.4	0.3	1.2	6.0	0.16	0.80	0.58	0.05	0.02	0.01	0.04	0.02	0.05	0.00
389	引き伸ばし	ソーダ	判断保留	コバルト	紺色透明（大）	16.6	1.2	2.6	69.7	0.2	1.4	5.7	0.20	0.30	1.61	0.13	0.18	0.01	0.11	0.00	0.03	0.09
390	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト	紺色透明（大）	1.5	0.7	2.7	76.3	0.2	14.1	1.6	0.17	1.43	0.96	0.05	0.02	0.01	0.04	0.02	0.02	0.04
391	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	17.2	5.6	2.6	64.8	0.3	2.4	5.8	0.12	0.09	0.87	0.06	0.10	0.00	0.06	0.01	0.04	0.06
392	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	16.2	2.6	2.7	67.5	0.3	2.7	6.2	0.14	0.29	1.09	0.05	0.10	0.01	0.05	0.01	0.03	0.11
393	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	14.2	2.8	3.3	68.7	0.3	2.6	6.3	0.15	0.25	1.09	0.06	0.08	0.01	0.06	0.02	0.05	0.12
394	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	18.3	5.2	2.6	63.9	0.2	2.1	5.9	0.16	0.18	1.08	0.06	0.11	0.01	0.08	0.02	0.04	0.10
395	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	14.9	3.3	3.0	67.2	0.4	2.5	6.5	0.20	0.29	1.37	0.06	0.09	0.01	0.05	0.00	0.03	0.12
396	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	17.7	4.7	2.3	65.6	0.2	2.5	5.3	0.13	0.19	1.00	0.06	0.10	0.01	0.06	0.01	0.05	0.03
397	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	14.7	4.6	2.9	67.2	0.2	2.3	6.0	0.17	0.20	1.28	0.09	0.14	0.02	0.09	0.01	0.03	0.19
398	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	13.5	3.3	3.1	68.1	0.3	2.6	6.7	0.19	0.35	1.46	0.07	0.10	0.01	0.07	0.01	0.02	0.11
399	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	15.2	3.1	2.7	66.8	0.2	3.3	6.3	0.18	0.30	1.30	0.10	0.11	0.00	0.07	0.01	0.01	0.13
400	引き伸ばし	ソーダ	判断保留	コバルト	紺色透明（大）	12.6	1.2	2.9	72.5	0.2	1.5	6.3	0.22	0.27	1.76	0.15	0.20	0.02	0.12	0.01	0.03	0.03
401	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	15.6	3.3	2.8	66.9	0.3	2.8	6.6	0.14	0.25	1.13	0.06	0.08	0.00	0.05	0.01	0.03	0.13
402	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	17.0	1.5	2.2	66.7	0.2	2.5	7.4	0.08	0.09	1.49	0.15	0.29	0.01	0.15	0.01	0.04	0.05
403	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	15.5	3.3	2.9	67.1	0.3	2.3	6.4	0.25	0.18	1.41	0.09	0.11	0.02	0.07	0.01	0.04	0.09
404	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	18.4	5.0	2.4	64.3	0.2	2.0	5.9	0.15	0.22	1.12	0.07	0.11	0.01	0.05	0.02	0.05	0.08
405	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	17.4	4.2	2.3	65.8	0.2	2.9	5.6	0.14	0.19	0.94	0.05	0.07	0.00	0.08	0.01	0.04	0.04
406	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	16.0	3.3	3.0	66.5	0.2	2.9	6.2	0.16	0.23	1.14	0.06	0.08	0.00	0.06	0.02	0.05	0.13
407	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	17.6	5.8	2.6	64.0	0.2	3.0	5.5	0.13	0.11	0.91	0.04	0.06	0.01	0.06	0.01	0.03	0.05
408	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト	紺色透明（大）	0.7	0.5	3.1	72.8	0.2	17.2	1.6	0.16	1.75	1.86	0.07	0.03	0.01	0.04	0.01	0.01	0.06
409	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト	紺色透明（大）	1.3	0.7	3.2	71.9	0.2	16.7	1.3	0.23	2.28	1.83	0.09	0.03	0.01	0.04	0.02	0.02	0.07
410	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	17.3	5.1	3.1	62.1	0.3	3.1	7.6	0.16	0.12	0.78	0.02	0.05	0.01	0.05	0.02	0.04	0.03
411	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	18.0	5.4	2.5	64.4	0.3	2.5	5.3	0.13	0.11	0.99	0.06	0.08	0.01	0.05	0.02	0.04	0.08
412	引き伸ばし	ソーダ	SIIIB	コバルト	紺色透明（大）	14.7	3.0	2.9	67.3	0.2	3.0	6.7	0.24	0.21	1.39	0.07	0.11	0.01	0.06	0.02	0.04	0.11
413	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト	紺色透明（大）	1.6	0.6	3.0	74.0	0.2	15.2	1.4	0.25	2.10	1.36	0.07	0.03	0.01	0.02	0.02	0.04	0.06
414	引き伸ばし	ソーダ	判断保留	コバルト	紺色透明（大）	17.1	1.0	2.7	68.2	0.1	2.1	6.0	0.21	0.36	1.78	0.15	0.23	0.02	0.10	0.00	0.04	0.02
415	不明	ソーダ	SIV	コバルト	紺色透明（大）	14.2	0.5	2.4	74.8	0.2	0.9	4.4	0.20	1.38	0.77	0.07	0.03	0.01	0.03	0.02	0.03	0.06
416	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト	紺色透明（大）	1.0	0.4	2.6	77.8	0.1	13.1	1.7	0.20	1.69	1.18	0.05	0.02	0.01	0.03	0.01	0.02	0.11
417	引き伸ばし？	ソーダ	SIIB	銅＋マンガン	濃青色透明	18.9	0.6	5.2	69.1	0.1	1.4	1.7	0.29	0.73	0.84	0.01	0.87	0.02	0.06	0.01	0.00	0.08

第５節　中原４号墳出土の玉

戸根 比呂子

はじめに

中原４号墳からは、器種、素材、数量とも豊富な玉が出土している。このうちの多くが原位置を保っている可能性が高く、出土状況も含めて良好な一括資料と捉えることができる。

本稿では、出土状況を今一度整理するとともに、その用途についても検討する。また、それぞれの器種の特徴を概観することで、時期的位置づけを明らかにする。さらに、当該時期の東海地方における墳墓出土の玉との比較検討により組成の特徴を明らかにし、その背景や意義についても、若干の考察を試みることとしたい。

なお、時期区分は大賀（2002b）（註１）に、地域区分は戸根（2008）（註２）に準拠する。

１　出土状況と用途

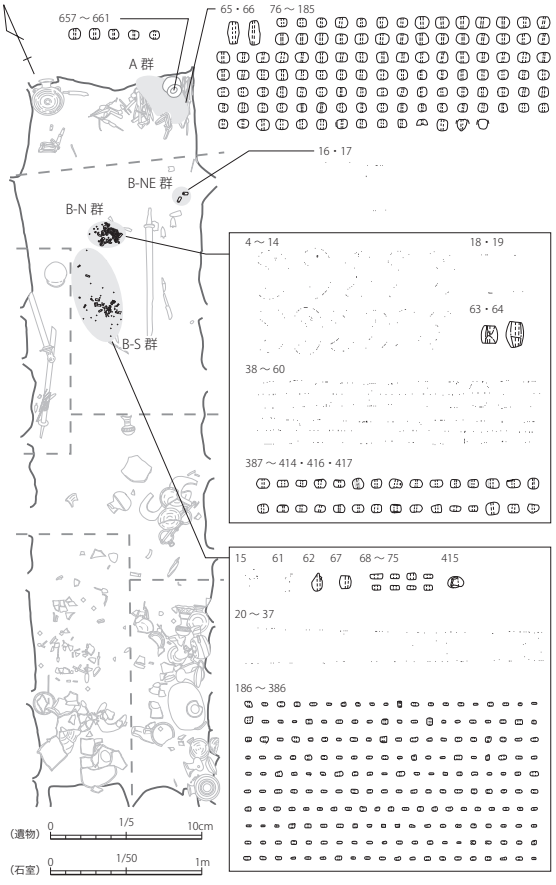
中原４号墳からは、勾玉、管玉、切子玉、棗玉、臼玉、丸玉、小玉（註３）の各種の玉が出土している（第 12 表）。遺物の出土地点は、Ａ～Ｆの６群のうち、Ａ群及びＢ群より出土している（第 177 図）。ここではまず、出土地点、出土状況を概観する。その上で、各群の玉が一連の資料として捉えうるのか検討したい。玉は、１点で目的を完結することもあるが、装身具という用途を考える以上は基本的には孔を紐で繋ぎ、１つの「環」として用いることが想定される。ここでは、出土状況を示すそれぞれの「群」について、その外見や法量の共通性から本来は一括性のある「環」を形成しうるか否かを検証した上で、用途についても検討してみたい。

Ａ群の玉は、石室内の北東隅に集中している。土製の丸玉と棗玉で、半径 30 ～ 40cm の範囲に集中している。一部の丸玉は須恵器内から出土しているが、須恵器内外で外見上の相違は特に認められない。また第 181 図のとおり、径 8.0mm 前後の資料と 6.5mm 前後の資料とに区分されるが、その中で須恵器内の資料が特別な分布域を示すわけでもなく、法量にも指向性が認められない。こうしたことから、須恵器の内外で資料を峻別することはできず、一部の玉を意図的に須恵器内に収納したというよりは、据えられている須恵器の上から玉が撒かれ、そのまま原状が保たれている、あるいは、須恵器外の玉は須恵器から零れ落ちたもの、と考えられる。この状況が、副葬当初のものであるか、二次的に移動されたものであるかは判別しがたいが、仮に原位置を保っているとすれば、須恵器上で実際に装身の状態であったとは考え難く、いわゆる祭祀的な用途で用いられたものと考えられる。

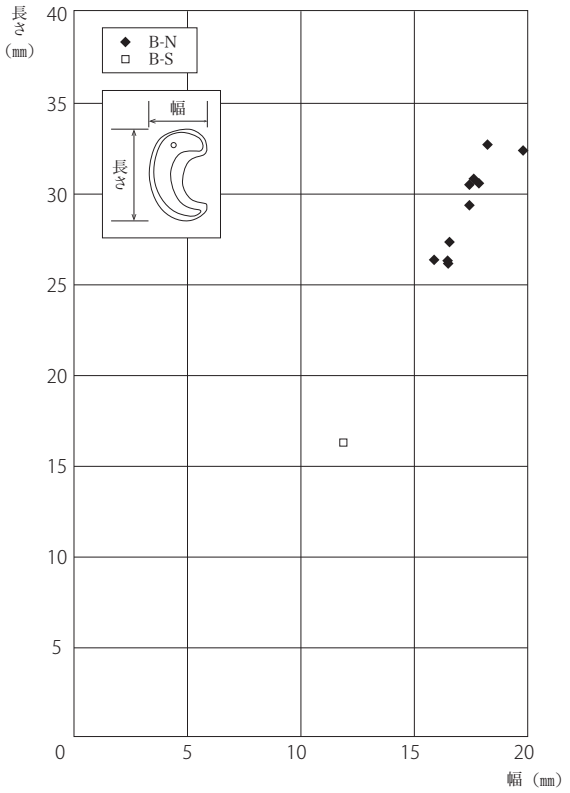
第 12 表　中原４号墳出土の玉

器種	材質	A 群	B-NE 群	B-N 群	B-S 群	計
勾玉	瑪瑙			11	1	12
管玉	碧玉		2	2	18	22
切子玉	水晶			23	1	24
棗玉	翡翠				1	1
	琥珀			2	1	3
	土	2				2
臼玉	滑石				7	7
	碧玉				1	1
丸玉※	土	115				115
小玉	ガラス			30	202	232
計		117	2	68	232	419

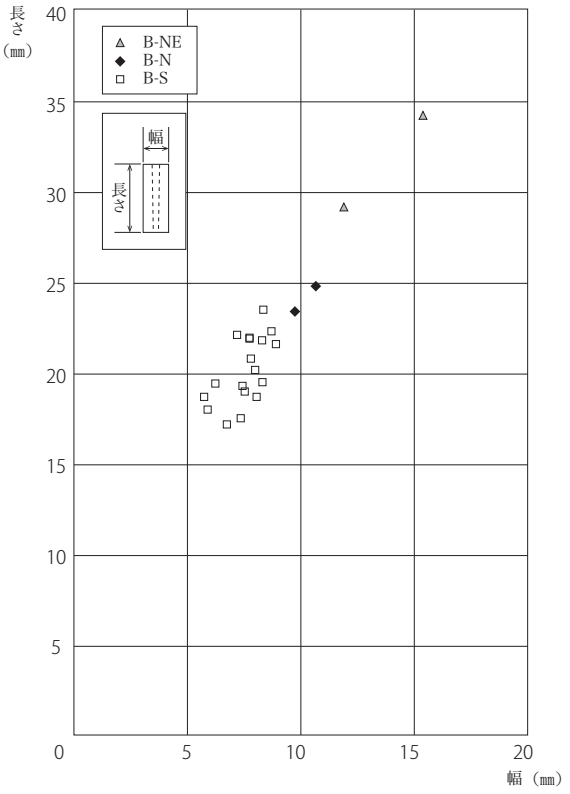
※ 須恵器短頸壺（645）内から出土した５点を含む。



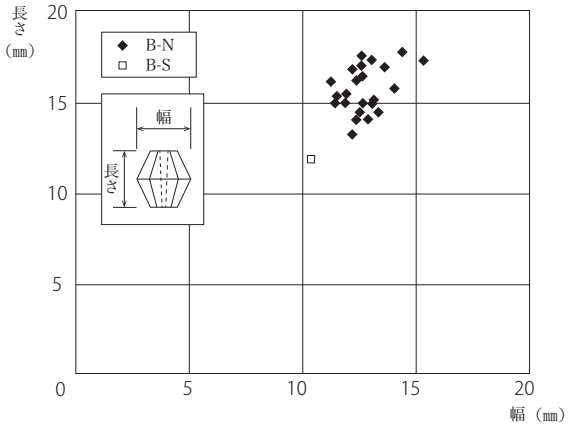
第 177 図　中原４号墳玉類出土状況図



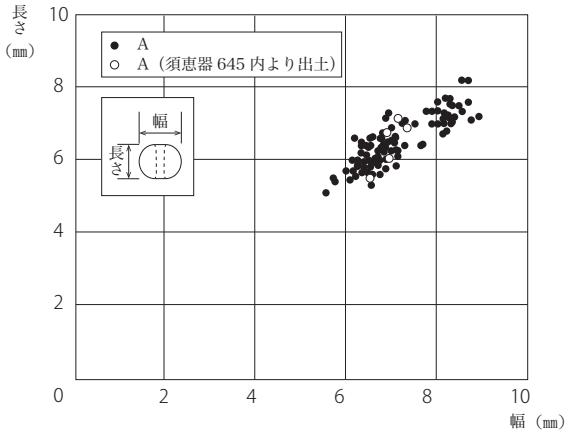
第 178 図　瑪瑙製勾玉の法量



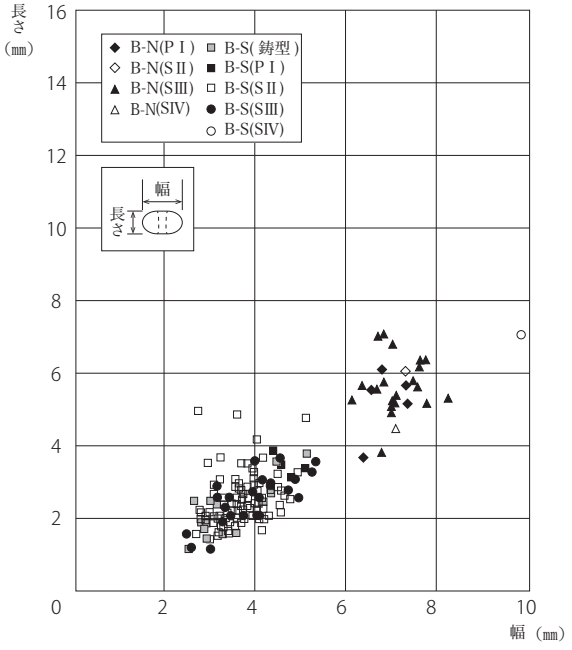
第 179 図　碧玉製管玉の法量



第 180 図　水晶製切子玉の法量



第 181 図　土製丸玉の法量



第 182 図　ガラス製小玉の法量

B群の玉は、さらに3つの小群に分かれる。その出土位置から、北東の一群をB-NE群、北側の一群をB-N群、南側の一群をB-S群、とする。B-NE群は、碧玉製管玉2点のみである。碧玉製管玉はB-N群、B-S群からも出土しており、いずれかの群の玉が移動した可能性もあるが、第179図のとおり、法量的に明らかに大きく、他の2群とは別の環を形成する可能性がある。ただし、2点という数から、実際に環状にして使用したとは考え難く、耳飾やその他の装具であったと推定される。

B-N群は、瑪瑙製勾玉、碧玉製管玉、水晶製切子玉、琥珀製棗玉、ガラス製小玉であり、特に勾玉、切子玉の数量の多さが目立つ。半径約20cmの範囲に集中している。B-S群は、瑪瑙製勾玉、碧玉製管玉、水晶製切子玉、琥珀製及び翡翠製棗玉、滑石製臼玉、ガラス製小玉であるが、B-N群に比して勾玉、切子玉の数量はわずかに1点ずつで、管玉の数量の多さが目立つ。南北に約60cmの範囲に広がり、やや散在している。この2群は器種が重複するので、それぞれ2つの環として区分しうるのか、器種ごとに確認していく。

瑪瑙製勾玉はB-N群で11点、B-S群で1点出土している。B-S群の1点は、第178図のとおり12点の中でも際立って小さく、B-N群の11点とは別の環を形成すると捉えうる。碧玉製管玉は、色調に若干の違いがあるほか、B-S群はやや小さく、B-N群は一回り大きく（第179図）、各々の群で法量の指向性を持った、別々の環を形成すると考えられる。水晶製切子玉は、B-N群で23点、B-S群で1点出土している。いずれも形状、法量が類似しているが、強いて言えばB-S群はB-N群よりも若干小さいことを指摘できる（第180図）。棗玉についても、同じ素材の琥珀製については、B-S群、B-N群とで区別し難く、元は一連のものであった可能性もあるが、B-S群の1点は一回り小さい。ガラス製小玉は、材質については次項でまとめるが、B-N群に大型の資料、B-S群に小型の資料と、法量に一定のまとまりが認められる（第182図）。

以上により、若干の移動があった可能性も残すのもの、器種が重複するものは、B-N群が大型、B-S群が小型という傾向が共通して確認され、それぞれの群ごとに少なくとも2つの環を形成していたことがわかる。これにより、出土状況が環ごとの現位置を保っている可能性が高いと推定される。さらに、各々の群の玉をつなげると、B-N群は約74cm、B-S群は約91cmの長さになる（註4）ことから、手や足環ではなく、頭、胸、腰などの装身具として想定される。さらに、石室の広さを考慮すると、頭を北にしたと推定され、B-N群は首飾り（あるいは頭飾り）、B-S群は腰飾り（あるいは首飾り）、という用途を想定することができる。

2　中原4号墳出土の玉の時期的位置

続いて、それぞれの玉の特徴から、時期的位置づけについて確認しておく。

(1) 瑪瑙製勾玉

瑪瑙製の勾玉は12点が出土している。このうち4～14はB-N群、15はB-S群から出土している。瑪瑙という素材、鉄針による片面穿孔という製作の特徴から、いずれも典型的な山陰系の玉と判断される（註5）。

山陰系の瑪瑙製勾玉は、日本列島に広域的に分布する。前Ⅴ期に登場し、以後、後期に至るまで流通が認められる。特に生産、消費の量が増大する後期において製作される勾玉は、前期に比べ、最終研磨が粗雑で平滑さに欠け、また、平面形についても滑らかな曲線を描く「C」字形ではなく、角ばった「コ」字形を呈する。特に後Ⅱ期以降は、「全長／幅」の指数が1.70を超える縦長化が顕著になったり、セット内での指数の変異が大きくなったりする。こうした特徴は、山陰系の碧玉製勾玉や水晶製勾玉にも認められる傾向である（大賀2009）。

中原4号墳の瑪瑙製勾玉については、いずれも平面形が「コ」字形を呈し、指数が1.59～1.79であることからも、後Ⅱ期以降に位置付けることができる。

(2) 碧玉製管玉

碧玉製の管玉は22点が出土している。16～17の2点はB-NE群、18～19の2点はB-N群、20～37の18点はB-S群から出土している。石材は、17、36、37以外はいずれも硬質で濃緑色の、花仙山産碧玉と推定される。17はやや灰色味のある緑色、36、37はやや淡い青緑色であるが、同じく花仙山産碧玉の範疇と推定される。さらに、21、36が鉄針による両面穿孔であるが、このほかはいずれも鉄針による片面穿孔である、という特徴もあわせ、典型的な山陰系の玉と判断される。

山陰系の碧玉製管玉は、日本列島に広域的に分布する。弥生時代に登場し、中期後半に断絶するが、その後、後Ⅰ～Ⅱ期に再び生産、流通が認められるようになる。特

に後期の玉は、全長と径の比率が3：1となる規格性の強いものとなり、さらに鉄針による片面穿孔が顕著となる（大賀2009、米田2009）。

中原4号墳の碧玉製管玉は、いずれも全長と幅の比がほぼ3：1であり、一部を除いて片面穿孔であることから、後Ⅰ～Ⅱ期ないしこれ以降に位置づけることができる。

(3) 水晶製切子玉

水晶製の切子玉は24点が出土している。38～60はB-N群、61はB-S群から出土している。水晶という素材、鉄針による片面穿孔という製作の特徴から、いずれも典型的な山陰系の玉と判断される。

山陰系の水晶製切子玉は、日本列島に広域的に分布する。後Ⅱ期後半以降に製作され、後Ⅳ期後半まで続くことが知られている。また、後Ⅱ期は長さ25mm以下にほぼ限定される一方で、後Ⅳ期にかけて長さ40mmを超えるような大型品が出現する（大賀2009）。

中原4号墳出土の水晶製切子玉は、長さ11.90～17.70mmであり、後Ⅱ～Ⅲ期ないしこれ以降の資料と捉えることができる。

(4) 琥珀製棗玉

琥珀製の棗玉は5点が出土している。このうち、出土地点が明らかで、図化しえたものは3点である。62はB-S群、63・64はB-N群から出土している。

琥珀製棗玉は、前期から見られるが、後期を最盛期として流通する。日本列島で広域的に出土するが、後Ⅱ期までは畿内以西を中心とする一方、後Ⅲ期以降は東海以東で多く出土する。水晶製切子玉同様、時期が下るほど大型化し、前期は全長10mm以下を中心とするものが、後Ⅱ～Ⅲ期には10～30mm、後Ⅳ期以降はさらに大型化する（斉藤2008）（註6）。

中原4号墳出土の資料は、長さ12.70～16.20mmであり、後Ⅱ～Ⅲ期ないしこれ以降の資料である可能性が高い。

(5) 土製棗玉

土製の棗玉は2点が出土している。いずれもA群から出土している。

土製棗玉は、出土事例がそれほど多くなく、具体的な研究も進んでいない。しばしば土製丸玉と共伴することや、外表面に煤等を付着したようなにぶい灰色を呈するなどの特徴から、両者が同じ場所で製作された可能性はある。東海地方での出土事例は、尻矢4号墳（三重県、後Ⅲ期）の5点、船来山29号墳（岐阜県、後Ⅱ期）の11点、高尾向山7号墳（静岡県、後Ⅳ期）の5点、土橋4号墳（静岡県、後Ⅲ期）の5点などが挙げられる。

(6) 翡翠製棗玉

翡翠製棗玉は、B-S群より1点が出土している。翡翠製棗玉は、前期を中心に流通する。しばしば綾杉紋を持ち、前期の翡翠製勾玉に共伴する（大賀2002a）が、中原4号墳出土資料には綾杉紋、翡翠製勾玉とも伴わない。前期に流通したものが、伝世等、何らかの形で含まれたものと考えられる。

(7) 碧玉製丸玉

碧玉製とみられる丸玉が、B-S群より1点出土している。形状は円筒形で、次に述べる臼玉に似ている。類例が不詳であり、流通の範囲や時期についても不明である。

(8) 滑石製臼玉

滑石製の臼玉は7点が出土している。いずれもB-S群から出土している。

滑石製臼玉は、前期後半から後期を通して確認される。中期を中心に、多ければ数千点から1万点を超える出土も珍しくない。一方、後期になるとこのような多量副葬は少なくなり、東海地方では少なければ数点、多くても大城5号墳（三重県、後Ⅲ期）の63点、船来山264号墳（岐阜県、後Ⅱ期）の52点にとどまる。また、地域ごとに若干の多寡があるようである（戸根2008）。

なお、滑石製臼玉の中でもいくつかの系へ分化される可能性があるものの、現状では未分化であり、詳細な時期比定も困難である。

(9) 土製丸玉

土製の丸玉は115点が出土している。いずれもA群から出土しており、このうち5点は、須恵器内から出土している。前節のとおり、径8.0mm前後、径6.5mm前後の2群にわけることもできるが、径5.55～8.95mm、長さ5.10～8.20mmに凝集する。また、外表面はいずれもやや光沢のある黒色で、漆等を付着しているものと考えられる。

土製丸玉は、後期になると、中期の滑石製臼玉に替わるように流通するようになる（大賀2002a）。東海地方では、後Ⅰ期の船来山145号墳の365点が最初期のまとまった出土例であるが、地域ごとの偏りもある。この点については次項でも詳しく検討していく。

(10) ガラス製小玉

ガラス製の小玉は232点以上が出土している。このうち、186～386、415の202点はB-S群、387～414、416、417の30点はB-N群から出土している。今回は、科学分析も実施しているので、田村朋美による本書別稿（本書第4章第4節）を参照いただきたいが、ここではその結果を引用しておく。

肉眼観察では、鋳型法による資料が40点あり、そのほかの192点は引き伸ばし技法による資料である。このうち、引き伸ばし技法による資料の内訳は、ソーダガラスが174点で、このうちGroupSIIが127点、SIIIが45点、SIVが2点である。SIIはさらに着色剤・発色によって細分可能である。カリガラスは5点で、いずれもGroupPIである。このほか、判断保留とされたものが4点、未分析資料が5点ある。細分類も含め、内訳は第13表のとおり示す。

時期的位置づけは、GroupSIIBが4～6世紀、SIIIBが5～6世紀、SIVが2～5世紀、PIが紀元前3～紀元後5世紀であり、中原4号墳出土の大半の資料が6世紀までに捉えられる。GroupSIVやPIは若干数であり、出土状況も特に他の玉と差がないことからも、副葬されるまでの間に何らかの形で混入したことが推定される。

(11) 小　結

以上、中原4号墳出土の玉の特徴を概観してきた。翡翠製棗玉や一部のガラス小玉など、古い様相の資料も含まれるが、他の資料からは後Ⅱ期後半以降の資料と位置付けることができる。また、後Ⅳ期以降に特徴的な玉を伴わないことから、後Ⅲ期までの範疇に収まる可能性が高い。この点については、A群、B群出土の他の資料の年代観とも符合している。

なお、群ないし環ごとの時期差は積極的には認められなかった。基本的に原位置を保っていると推定されることも踏まえると、それぞれ同時期ないしごく短い期間に副葬されたものと考えられる。

第13表　ガラス製小玉の分類別数量一覧

製作技法	材質	分類	着色剤	色調・透明度	B-S群	B-N群	合計
鋳型法				紺色透明	40	0	40
引き伸ばし	カリ	PI	コバルト	紺色透明	4	5	9
引き伸ばし	ソーダ	SII	錫	黄色不透明	5	0	5
引き伸ばし	ソーダ	SII	鉄	黒色不透明	1	0	1
引き伸ばし	ソーダ	SII	銅	淡青色透明	33	0	33
引き伸ばし	ソーダ	SII	銅	淡青緑色透明	1	0	1
引き伸ばし	ソーダ	SII	銅、錫	黄緑色半透明	2	0	2
引き伸ばし	ソーダ	SII	銅、マンガン	濃青色透明	19	1	20
引き伸ばし	ソーダ	SII	銅、マンガン	濃青色透明(暗)	65	0	65
引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト	紺色透明	25	20	45
引き伸ばし	ソーダ	SIV	コバルト	紺色透明	1	1	2
引き伸ばし		保留			1	3	4
引き伸ばし		未調査			5	0	5
合　計					202	30	232

3　中原4号墳出土の丸玉・臼玉・小玉の組成

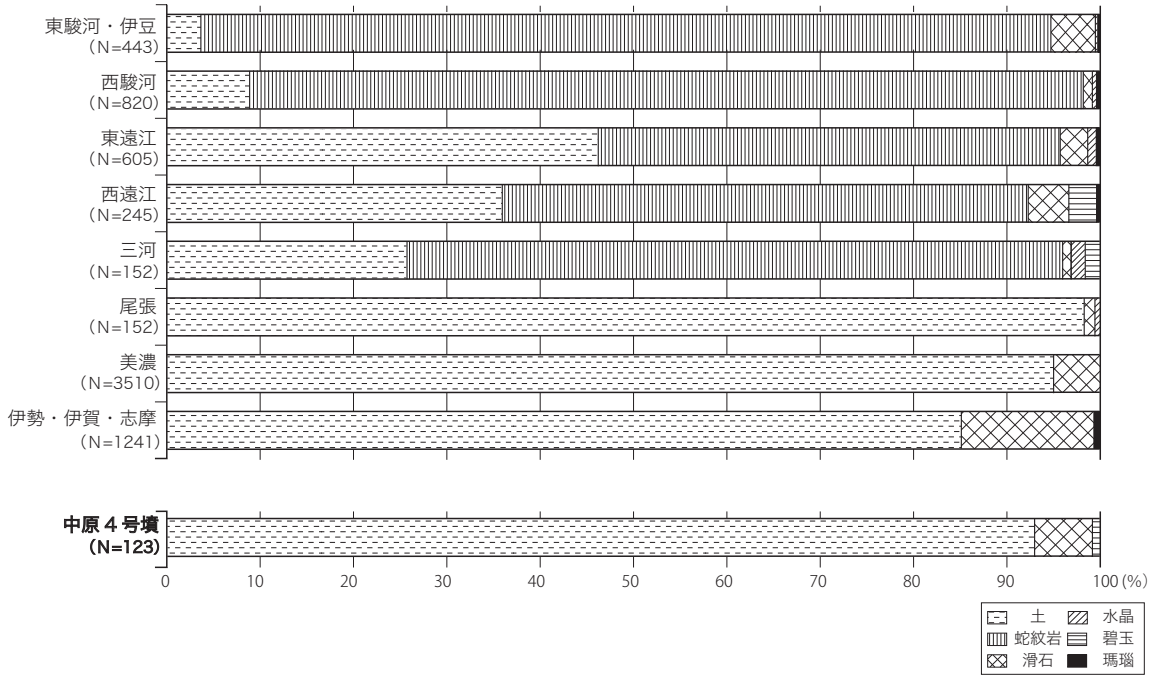
続いて、流通圏に特徴が認められる丸玉、臼玉、小玉について、周辺地域の様相を概観し、中原4号墳の特徴を明らかとしたい。

後期における丸玉、臼玉、小玉の材質は、瑪瑙、碧玉、水晶、滑石、蛇紋岩、土、翡翠、琥珀、金属、ガラスがあげられる。この中でもガラスが圧倒的多数を占め、一括して検討すると、他の素材の特徴を捉えにくくなってしまう。そこで、ガラス以外を素材とした丸玉・臼玉とガラスを素材とした小玉とをそれぞれ検討する。

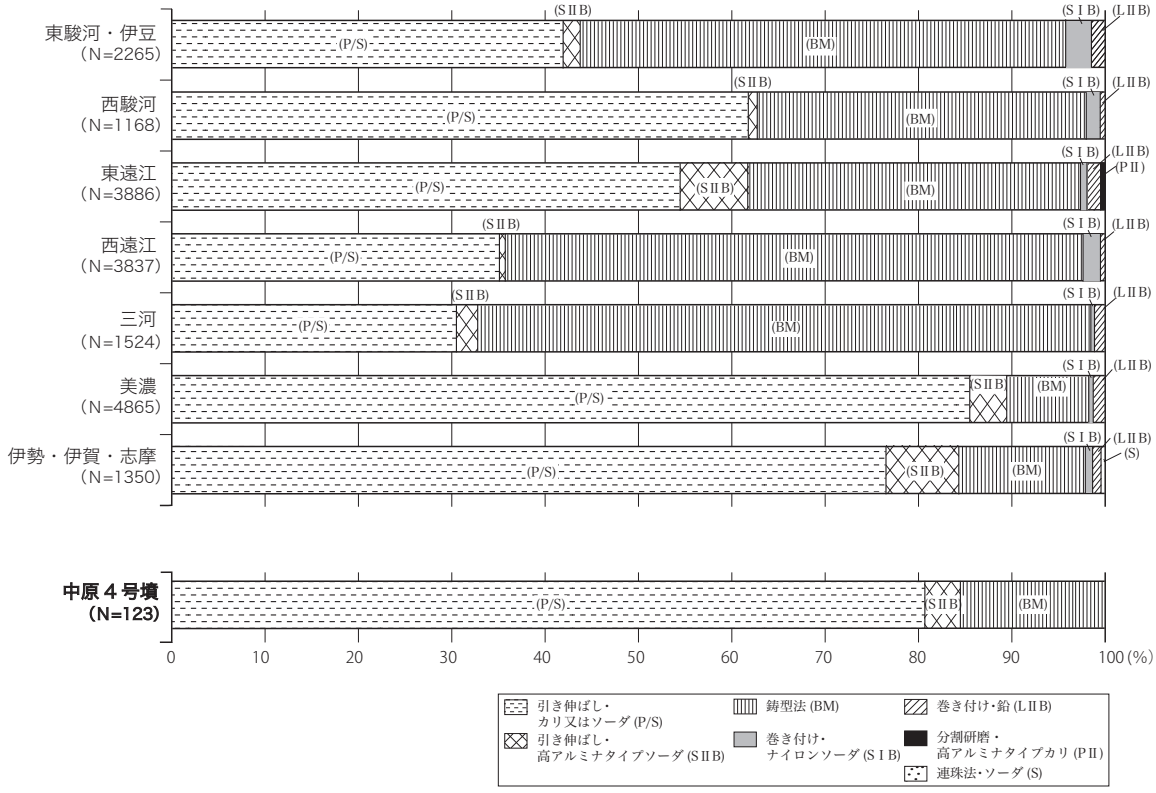
(1) 丸玉・臼玉の材質組成と特徴

後期になると、これらの玉は、中期までに多量に生産、副葬された滑石製臼玉が激減し、替わってガラス製小玉や土製丸玉が多く出土するようになる。一方、東海地方においては、土製丸玉よりも「東海系」と呼ばれる蛇紋岩製丸玉が流通する（大賀2002a）。東海系の蛇紋岩製丸玉は、特に中原古墳群の所在する東駿河を中心に、西は三河まで流通が認められるが、これより西には広がらない（戸根2008）。ところが、中原4号墳では各種の玉が出土しているにも関わらず、蛇紋岩製丸玉は出土していない。

こうした状況を踏まえ、東海地方における地域別の丸玉・臼玉の材質組成を確認していく。第183図に示すとおり、母数にややばらつきはあるものの、いくつかの特徴を知ることができる。まず、先行研究のとおり、三河以東に東海系の玉である蛇紋岩製丸玉が見られること。この割合は少なくとも5割、多ければ9割近くを占め、丸玉・臼玉の主体を占めていることがわかる。反対に、尾張以西においては、土製丸玉が主体を占め、その割合は8～9割にのぼる。土製丸玉は三河以東においても一定量が出土しているが、三河と遠江においては3～4割を占めている一方で、さらに東方の駿河においては1割に満たない。また、土製丸玉、蛇紋岩製丸玉に次いで出土量の多いのが滑石製臼玉である。土製丸玉と蛇紋岩製丸玉の量に圧倒され、あまり存在感がないが、伊勢地域では1割を超える出土量であることも注目される。



第 183 図　丸玉・臼玉の地域別材質組成



第 184 図　ガラス製小玉の地域別材質組成

続いて、中原４号墳出土丸玉類の材質組成を確認すると、土製丸玉が９割以上、滑石製臼玉が１割弱となり、蛇紋岩製丸玉は含まれない。この組成は、中原４号墳の所在する東駿河の様相とは異なり、尾張以西の特徴に非常に似通っていることが指摘できるのである。

(2) ガラス製小玉の製作技法・材質法組成の特徴

ガラス製小玉は、肉眼観察からは、製作技法、色調（色味）・透明度、法量等について判別できる。材質の化学分析の蓄積によって、こうした肉眼観察の結果と、実際の材質との対照がある程度可能となっているが、一方で青色系のガラス製小玉は色調がバリエーションに富むと同時に、材質も多様である（註 7）。ここでは特に製作技法に着目し、材質については明らかなものについて併記するにとどめ、検討を進めることとしたい。

ガラス製小玉の製作技法は、引き伸ばし技法、変則的引き伸ばし技法、巻き付け法、包み巻き法、連珠法、加熱貫入法、管切法、鋳型法、分割研磨法、融着法が知られている（Oga and Tamura 2013）。このうち、東海地方において実見したガラス製小玉で確認できた製作技法は、引き伸ばし技法（変則的引き伸ばし技法を含む）、巻き付け法、連珠法、鋳型法、分割研磨法である。さらに色調や透明度といった観察所見を踏まえると、巻き付け技法は鉛ガラス（GroupLIIB）又はナトロンタイプのソーダガラス（SIB）、連珠法はソーダガラス（S）、分割研磨法は高アルミナタイプのカリガラス（PII）の可能性が高い。鋳型法は、各種ガラスを原料として二次的に再生していることが推定され、ガラスの材質を一概に決めることは難しい。また、引き伸ばし技法のガラス製小玉は、カリガラス（P）又はソーダガラス（S）のいずれかに帰属する。このうち、SIIB に分類される資料の一部は、不透明な赤色、黄色、緑色など特徴的な色調を呈する高アルミナタイプのソーダガラスである。

以上を踏まえ、ここでは、巻き付け技法・鉛ガラス（GroupLIIB）、巻き付け技法・ナトロンタイプのソーダガラス（SIB）、連珠法・ソーダガラス（S）、分割研磨法・高アルミナタイプのカリガラス（PII）、鋳型法（BM）、引き伸ばし技法・カリ又はソーダガラス（P/S）、引き伸ばし技法・高アルミナタイプのソーダガラス（SIIB）（註 8）、として、それぞれについて、地域ごとの割合を確認していく。第 184 図のとおり母数にばらつきはあるが、いくつかの特徴を知ることができる。まず、三河以東では鋳型法（BM）の割合が、少なくとも３割、多ければ６割以上を占めることがあげられる。反対に、尾張以西においては、引き伸ばし技法・カリ又はソーダガラス（P/S）が主体を占め、８～９割にのぼる。また、数量は決して多くないが、西遠江以東で GroupSIB が一定量ある（33 ～ 92 個）のに対し、三河以西では僅少（5 ～ 24 個）であることも傾向として捉えることができる。

続いて、中原４号墳出土のガラス製小玉について、製作技法別の組成を確認すると、引き伸ばし技法（P/S）が８割以上、鋳型法（BM）は２割弱にとどまる。また、GroupSIB も出土していない。この組成は、中原４号墳の所在する東駿河の様相とは異なり、尾張以西の特徴に似通っている。

(3) 小　　結

以上のとおり、東海地方における地域別の検討により、中原４号墳出土の玉の組成が特徴的であることが確認された。具体的には、蛇紋岩製の玉が出土しないこと、土製丸玉を多く含むこと、滑石製臼玉を含むこと、また、鋳型法によるガラス製小玉の占める割合が低いことなどが明らかとなった。こうした特徴は、東遠江を含む三河以東の様相ではなく、尾張以西の特徴に近い、ということも確認された。

4　中原４号墳出土の玉の意義

前項のとおり、中原４号墳出土の玉は、近隣地域である三河、遠江、駿河の様相とは異なり、尾張以西の様相に類似することが明らかとなった。この背景と意義について、さらに考察を進めておきたい。

はじめに、東海地方における玉の材質組成の特徴から、その生産地について考えてみたい。蛇紋岩製の玉は、これまで生産地が発見されていない。しかし、その消費地の分布状況は明らかに偏っており、三河以東のどこかに生産地が存在していた可能性が高いと言えよう。また、この時期のガラス製小玉は、基本的には舶載品に限定されていた一方で、鋳型を用いた小玉の生産は国内でも行われていた。鋳型は、中・後期に限れば布留遺跡（奈良県）、蔀屋北遺跡（大阪府）、難波宮跡（大阪府）、大県南遺跡群（大阪府）など畿内を中心に出土しているが、前期に遡れば西新町遺跡（福岡県）、豊島馬場遺跡（東京都）、川戸下遺跡（千葉県）、鶴ケ岡１号墳（千葉県）など各地で出土していることがわかっている（田中 2007）。

ただし、事例が十分蓄積されているとは言いがたく、また、消費地側の検討も不十分であり、現状では生産地と消費地を単純に結びつけることは難しい。しかし、消費地に偏りがあることは事実であり、生産地と消費地のつながりが密接であった可能性は十分ありえる。その意味でも、東海地方においても、例えば静岡県沼津市の中原遺跡から鋳型が出土していることは示唆的である。さらに、同じく生産地が不詳である土製丸玉や滑石製臼玉についても、地域の偏在性を考慮すれば、同様の現象を説明できるであろう。

このように生産地と消費地の関係を仮定すると、地域性の高い玉の有無は、そのままその被葬者がその地域と密接なつながりがあるか否かと結びつくことになる。すなわち、中原４号墳の被葬者は尾張以西の勢力と密接なつながりを持っていた、と推定することができるのである。反対に、蛇紋岩製の丸玉を持たず、鋳型によるガラス製小玉の割合が低いことは、在地勢力との関係の希薄さを示すのであろう。

さらにもう一歩踏み込むならば、こうした地域性の高い玉が、どのような時代背景の中で生産されるようになったかによって､その意味合いも大きく変わってくる。例えば、あくまでも地域性の低い玉、広域に流通する玉の代替品なのであれば、それを入手できない、入手が難しいことの裏返しであり、広域流通品に対する権力の弱さを示すことになるが、地域の結束の象徴として生産が開始したのであれば、その有無が地域の中での力の強弱を示し得る。この点については、より広域での玉流通の検討や、同時代の他の遺物の地域性との関り等も踏まえた検討を進める中で明らかにできるかもしれない。

いずれにしても、中原４号墳の被葬者については、少なくとも在地勢力というよりは、尾張以西の勢力とのつながりが強かったことを、出土した玉の特徴から捉えることができるだろう。

5　まとめ

本稿では、中原４号墳出土の玉を通して、時期的位置づけ、組成の特徴を概観し、さらにその背景について考察した。最後に今一度まとめるとともに、今後の課題を述べておく。

出土状況については、大きく２群、細分すると４群に分けることができた。その組成や環の検討により、これらが基本的に原位置を保っていることや、その用途についても祭祀的用途、頭飾り、首飾り等と推定した。

時期的位置づけについては、水晶製切子玉、琥珀製棗玉の大型化が認められないこと、瑪瑙製勾玉や碧玉製管玉の形状の特徴から、後Ⅱ～Ⅲ期の可能性が高い。この点については、一部、翡翠製棗玉など明らかに時期の異なる玉を除けば、他の玉についても矛盾せず、また他の副葬品の年代観とも符合する。一方で、上記２群（細別４群）間における時期差は積極的に認めることはできず、これらの玉は同時あるいは極めて近い時期に副葬されたものと推定した。

組成の特徴は、特に地域色が明らかとなる丸玉、臼玉、小玉に着目し、蛇紋岩製の玉が出土しないこと、土製丸玉を多く含むこと、滑石製臼玉を含むこと、ガラス製小玉のうち鋳型法による小玉の占める割合が低いこと、などが明らかとなった。こうした特徴は、周辺地域とは異なり、東海地方の中でも尾張以西と共通する。その背景として、中原４号墳の被葬者が、尾張以西の勢力とのつながりが強かったことを推定した。

なお、今回、ガラス製小玉についての科学分析を実施しているが、他遺跡の出土資料については肉眼観察による検討にとどまっている。科学分析の結果が蓄積されることを待ちつつ、肉眼観察でも進めるべき課題は残されており、より詳細な観察を通して行うべき議論の余地もあろう。

また、中原４号墳の被葬者とつながりを持つと推定した尾張以西の勢力については、当然畿内勢力を視野に入れてはいるが、今回、明確な根拠を示す資料を提示することはできなかった。今後、土製丸玉や滑石製臼玉の適切な分類により、それぞれの偏在性を確認する中でより具体的になるだろう。

いずれにしても、東海地方という限られた地域であるが、これまで十分な議論がなされてこなかった玉の動向を明らかにし、これを元に一古墳の特徴と意義について一定の見解をえることができた。本稿を機に議論が深化すれば幸いである。

【謝辞】

資料見学に際しては、下記の諸機関に便宜を図っていただきました。記してお礼申し上げます。

磐田市埋蔵文化財センター、岡崎市教育委員会、各務原市埋蔵文化財調査センター、掛川市教育委員会、可児市教育委員会、亀山市歴史博物館、菊川市教育委員会、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所、静岡市立登呂博物館、静岡市埋蔵文化財センター、島田市博物館、市民ミュージアム浜北、津市埋蔵文化財センター、豊川市教育委員会、豊田市郷土資料館、豊橋市美術博物館、名古屋市博物館、沼津市教育委員会、浜松市博物館、袋井市教育委員会、藤枝市郷土博物館、富士川町教育委員会、富士市立博物館、三重県埋蔵文化財センター、三島市教育委員会、本巣市教育委員会、森町教育委員会（50 音順）

註

1　時期区分の概要は次のとおり。

大賀 2002b	和田編年	広瀬編年	須恵器
後Ⅰ期	九	8	TK23 TK47
後Ⅱ期	十	9	MT15 TK10
後Ⅲ期	十一	10	TK43
後Ⅳ期			TK209 TK217

2　地域区分の概要は次のとおりである。

伊勢　　旧伊勢、伊賀、志摩国を総称する。

美濃・尾張・三河　それぞれ旧美濃国、尾張国、三河国を指す。

西遠江　旧遠江国のうち天竜川以西とする。

東遠江　旧遠江国のうち天竜川以東とする。

西駿河　旧駿河国のうち富士川以西とする。

東駿河　旧駿河国のうち富士川以東及び旧伊豆国を総称する。なお現富士市、富士宮市は便宜上東駿河に含める。

3　球形の玉については大玉、丸玉、小玉、粟玉等の呼称があるが、便宜上、石製の玉を丸玉、ガラス製の玉を小玉とする。

4　各群の玉について、孔の軸方向の長さ（勾玉以外）ないし厚さ（勾玉）を合計して求めた。

5　13、14 は、特に白色系の石材を採用していることや、全長に対する幅の比率（全長／幅≒ 1.60）が大きいことなどから、非山陰系の可能性もある。

6　斉藤 2008 では、前期の全長が 10mm 以下を中心とすることには触れているが、大型化の度合いを具体的な数値では示していない。ここでは、上記文献掲載のグラフから、筆者が読み取った。

7　たとえば、引き伸ばし技法による「紺色・透明」で「径 3 〜 4mm」に該当する資料は、カリガラスの PI、ソーダガラスの SII、SIII の可能性があり、即断が困難である。

8　観察所見が特徴的である GroupSIIB を抽出しているが、これが SIIB 全てを示すわけではなく、一部の資料は「P/S」の中に含まれている。

主要参考文献

大賀 克彦　2002a「弥生･古墳時代の玉」『考古資料大観』9　弥生･古墳時代　石器・石製品・骨角器　小学館　pp.313-320

大賀 克彦　2002b「凡例　古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』(『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅴ)　福井県清水町教育委員会　pp.1-20

大賀 克彦　2002c「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』(『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅴ)　福井県清水町教育委員会　pp.1-20

大賀 克彦　2009「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究―古代出雲における玉作の研究Ⅲ―』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター　pp.9-62

斉藤 あや　2008 「古墳時代後期における琥珀製棗玉の再検討―地域的偏在と大型化―」『史叢』第 78 号　日本大学史学会　pp.199-218

田中 清美　2007 「『たこ焼き型鋳型』によるガラス小玉の生産」『研究紀要』第 6 号　大阪歴史博物館　pp.1-24

田村 朋美　2015 「引き伸ばし法によるガラス小玉の系譜と伝播」『物質文化』第 95 集　pp.19-32

戸根 比呂子　2008 「『東海系』の玉の流通」『玉文化』第 5 号　日本玉文化研究会　pp.45-64

廣瀬 時習　1996 「弥生・古墳時代の玉の使用形態と意義―玉副葬の歴史的展開―」『文化史学』第 52 号　文化史学会　pp.1-23

米田 克彦　2009「穿孔技術からみた出雲玉作の特質と系譜」『出雲玉作の特質に関する研究―古代出雲における玉作の研究Ⅲ―』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター　pp.93-126

Oga Katsuhiko and Tamura Tomomi　2013 Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere : Cemical Compositions,Chronologies and Trade Routes of Imported Glass Beads in the Yayoi-Kofun Periods (3rd century BCE-7th Century CE),Japan of Indian Ocean Archaeology No.9,pp.35-65

※都合により遺跡報告書については割愛させていただきます。

図表出典

第 177 図　富士市教育委員会作成、筆者加筆。

第 178 ～ 184 図　筆者作成。

第 12 ～ 13 表　筆者作成。

第６節　中原４号墳出土刀剣類・馬具の特徴と被葬者の性格

大谷 宏治

はじめに

中原４号墳では、刀剣類として象嵌装大刀１点、鍔付大刀１点、象嵌装・鹿角装剣１点が、馬具として鉄製環状鏡板付轡３点（小型矩形立聞環状鏡板付轡・兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡・大型矩形立聞環状鏡板付轡各１点。以下、環状鏡板付轡は「円環轡」とする）、木芯鉄装（鉄板張）（三角錐形）壺鐙１組、帯金具９点、鋲具４点が出土した。

ここでは、それらの時期的な位置づけをまず確認し、それぞれの遺物の特徴、馬装・拵えなどの特徴から中原４号墳の被葬者像の一側面を明らかにしたい。

１　刀剣および馬具の編年的位置

（1）刀剣の帰属年代

中原４号墳出土の刀剣について属性の特徴からそれぞれの遺物が帰属する時期をみておきたい。

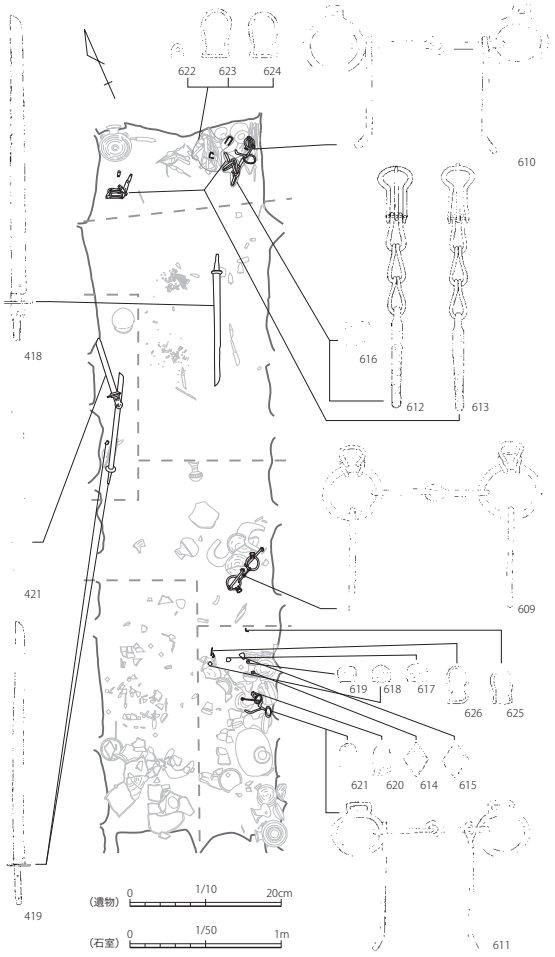
波状Ｃ字文象嵌鍔付大刀・剣　中原４号墳では３点の刀剣が出土しているが、いずれも鍔を有する。鍔は日本列島独自のもので、おおむねMT15～TK10型式期に創出され（菊地2010）、TK43型式以降に採用が本格化する（瀧瀬1984、菊地2010など）。

瀧瀬芳之によれば、TK10型式期に象嵌装鍔が出現し、TK43型式期に圏線Ｃ字文が、つづくTK209型式前半に波状Ｃ字文が採用される（瀧瀬・野中1995）。したがって、これまでの研究では中原４号墳出土刀剣に採用された波状Ｃ字文はTK209型式期を遡らない。

一方で、中原４号墳出土の波状Ｃ字文象嵌鍔付大刀は、出土位置（第185図）からみて初葬者に伴う副葬品である可能性が高い。初葬時の副葬品の可能性が高いTK43型式に位置づけられる遺物が多数存在することから、象嵌装大刀もTK43型式に位置づけられる可能性があり、これまでの波状Ｃ字文鍔の編年観と差異がある。ここでは中原４号墳出土の象嵌装大刀・剣を位置づけるため波状Ｃ字文鍔を集成し、編年的位置を確認したい。

波状Ｃ字文象嵌鍔は、総数42例である（第14表）。耳象嵌（註１）では八窓鍔17例、六窓鍔10例、九窓鍔、十窓鍔、十三窓鍔各１例、有窓鍔４例が確認できる。面・耳象嵌では八窓鍔２例、六窓鍔２例、無窓鍔４例である。

波状Ｃ字文耳象嵌鍔は、TK10型式期まで遡るものはない。TK43型式に確実に位置づけられるものもなく、数は少ないがTK43～TK209型式期に大分県ガランドヤ２号墳（日田市1986）、大阪府大石古墳（八尾市1995）などの八窓鍔が位置づけられる（第186図）。波状Ｃ字文象嵌鍔の大部分がTK209型式期以降に位置づけられ、TK209型式期に六窓鍔が出現するが、八窓鍔も消滅したわけではなく飛鳥Ⅱ期まで並存している。瀧瀬芳之は象嵌文様の編年観を示す際、八窓鍔に施されるものが大部分である圏線Ｃ字文が古く、六窓鍔に施されるものが半数近い波状Ｃ字文を新しく位置づける（瀧瀬・野中1995、註２）。したがって、波状Ｃ字文の八窓鍔がTK43型式まで遡ることは否定していないこと



第185図　中原４号墳刀剣・馬具出土状況図

から、八窓鍔の一部がTK43型式期まで遡るものと考えたい。

また、詳細な検討を行う必要があるが、象嵌文様からみると、田中新史(田中1988)の分類では波状C字文(Ⅰ類)と圏線C字文(Ⅳ類)には大きな違いがあり、圏線C字文から波状C字文が派生した可能性は低く、田中氏のⅠa類の祖形となる唐草文から圏線C字文と波状C字文の両者が派生したと考える。つまり波状C字文が圏線C字文の出現よりは遅れるにしても、TK43型式後半からTK209型式期の直前に、圏線C字文とは別に波状C字文が採用された可能性を想定したい。

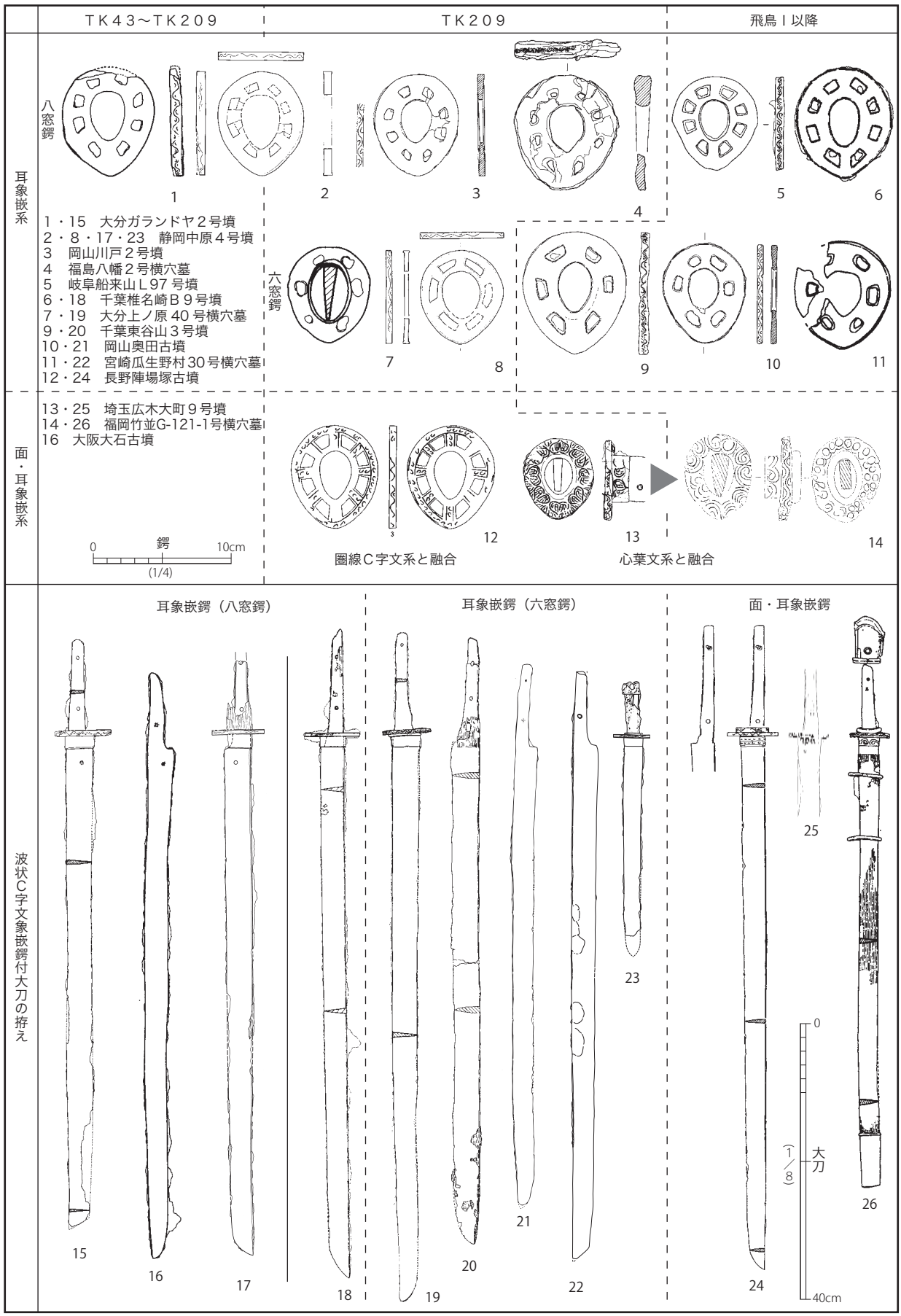
さらに、別の要素として中原4号墳の大刀・剣に伴う波状C字文鍔は、鍔断面がT字形である。T字形断面の鍔は、金銅装頭椎大刀の影響を受けていることは明らかである。橋本英将は頭椎大刀などの倭装大刀に用いられた鍔を断面からⅠ類(扁平な断面)、Ⅱ類(断面T字形)に区分し、後者をTK209型式期以降に位置づける(橋本2013)。中原4号墳例は金銅装大刀の事例を参考にすれば、TK209型式期以降となるが、その初現的なものと考え、TK43型式期の生産と考えたい(註3)。しかし、TK43型式期に遡るとしても、極めてTK209型式期に近い時期の所産と想定できる。

つまり、中原4号墳の八窓鍔付大刀はTK209型式に近いもののTK43型式まで遡ると考えたい。一方で、剣に伴う鍔は六窓鍔であり、八窓鍔よりも後出する可能性が高く(瀧瀬・野中1995)、出土位置からみれば追葬に伴う可能性が高いことからも、TK209型式に位置づけたい。

第14表　波状C字文象嵌鍔の出土古墳一覧

古墳名	所在地	墳形	規模	埋葬施設	規模	鍔	象嵌	長径	短径	文献
八幡2号横穴墓	福島県いわき市	横穴墓	-	横穴墓	2.96	八窓鍔	耳	8.5	7.5	いわき市2011
八幡4号横穴墓	福島県いわき市	横穴墓	-	横穴墓	4.62	有窓鍔	耳	-	-	いわき市2011
八幡23号横穴墓	福島県いわき市	横穴墓	-	横穴墓	-	八窓鍔？	耳	-	-	いわき市2011
郭内横穴墓群	福島県白河市	横穴墓	-	横穴墓	-	六窓鍔	耳	7.5	6.5	森2005
観音山7号墳	茨城県潮来市	後円	15.2	石棺	-	八窓鍔	耳	6.6	6.0	西山・山口ほか1996
立野古墳	栃木県矢板市	円	30	横石	3.75	六窓鍔	耳	-	-	栃木県博ほか1998
飯塚1号墳	栃木県小山市	後円	50	横石	5	八窓鍔	耳	未	未	小山市1981
小山市出土	栃木県小山市	-	-	-	-	八窓鍔	耳	未	未	西山・山口ほか1996
藤岡市三本木出土	群馬県藤岡市	-	-	-	-	十三窓鍔	耳	8.0	6.6	東博HP
山名原口Ⅱ-2号墳	群馬県高崎市	円	16.5	横石	7.3	八窓鍔※	耳	8.0	6.8	高崎市1999
広木大町9号墳	埼玉県美里町	後円	32	横石	6.9	無窓鍔※	面	5.6	5.0	瀧瀬・野中1995
法皇塚古墳	千葉県市川市	後円	54.5	横石	7.5	無窓鍔？	面？	-	-	市立市川博1976
大袋出土	千葉県成田市	-	-	-	-	六窓鍔	面	8.0	-	瀧瀬・野中1995
将門2号墳	千葉県佐倉市	後円	16	不明	-	十窓鍔？	耳	8.3+	7.5+	東博1986
椎名崎B9号墳	千葉県千葉市	帆立	34	横石	6.8	八窓鍔	耳	8.0	7.0	千葉県2006
神明社裏1号墳	千葉県千葉市	帆立	51?	木棺	-	六窓鍔	耳	7.5	6.5	千葉県2008
東谷山3号墳	千葉県木更津市	円	-	木棺	-	六窓鍔	耳	8.8	7.4	君津郡市2002
林添1号墳	神奈川県厚木市	古墳	-	横石	5	六窓鍔	耳	7.6	6.5	厚木市1993
森12号墳	長野県千曲市	古墳？	-	横石	2.3	六窓鍔	耳	7.2	6.0	更埴市1992
陣場塚古墳	長野県上田市	円	8.2	横石	5.2	八窓鍔※	面	7.5	6.7	長野県教委ほか1999
山の神1号墳	長野県佐久市	古墳	不明	木棺？	-	有窓鍔	耳	-	-	佐久市2013・土屋1975
土合1号墳	長野県佐久市	円	10	横石	4.8+	八窓鍔	面	9.8	7.5	土屋1975
天白古墳群	長野県下諏訪町	古墳	-	-	-	八窓鍔	耳	7.5	6.5	長野県史1988
中原4号墳	静岡県富士市	円	12	横石	5.52	六窓鍔	耳	6.7	6.0	本書
中原4号墳	静岡県富士市	円	12	横石	5.52	八窓鍔	耳	7.5	6.2	本書
宮坂7号横穴墓	静岡県掛川市	横穴墓	-	横穴墓	-	六窓鍔	面	未	未	西山・山口ほか1996
船来山L97号墳	岐阜県本巣市	円	11	横石	2.6+	八窓鍔※	耳	6.7	6.2	糸貫町ほか1999
中坂5号墳	京都府福知山市	円	13	-	-	九窓鍔	耳	6.8	6.0	豊島2001
神宮谷3号墳	京都府綾部市	円	13	横石	6.3+	八窓鍔	耳	8.3	6.5	豊島2001
宇山1号墳	大阪府枚方市	円	13	木室	-	有窓鍔	耳	未	未	枚方市
大石古墳	大阪府八尾市	円？	22?	横石	8.0+	八窓鍔	耳	7.3+	5.3+	八尾市1995
三田古墳	大阪府岸和田市	円	18	横石	4.4	六窓鍔	耳	7.2	6.2	大阪府埋文1993
上塩冶8-3号横穴墓	島根県出雲市	横穴墓	-	横穴墓	1.31+	八窓鍔？	耳	-	-	出雲市2003
奥田古墳	岡山県真庭市	円	11	横石	7	六窓鍔	耳	7.0	6.0	岡山県1999
川戸2号墳	岡山県美作市	円	17	横石	12.75	八窓鍔	耳	7.3	6.1	大原町1995
花見古墳	福岡県古賀市	円？	-	横石	4.5	無窓鍔※	面	6.1	5.0	横田1985
竹並G-121-1号横穴墓	福岡県行橋市	横穴墓	-	横穴墓	3.79	無窓鍔	面	5.7	4.5	横田1985・竹並遺跡1979
ガランドヤ2号墳	大分県日田市	円	8	横石	3.3+	八窓鍔	耳	7.8	6.7	日田市1986
上ノ原40号横穴墓	大分県中津市	横穴墓	-	横穴墓	2.8	六窓鍔	耳	6.8	6.0	大分県1989
西都原古墳群周辺	宮崎県西都市	古墳？	-	-	-	八窓鍔	耳	8.2	6.0	横田1985
瓜生野村30号横穴墓	宮崎県宮崎市	横穴墓	-	横穴墓	3.6+	六窓鍔	耳	7.9	6.8	宮崎県2003
不詳	-	-	-	-	-	八窓鍔	耳	7.4	6.0	小川編1988

略記「後円」＝前方後円墳　「木棺」＝木棺直葬　「石棺」＝箱形石棺直葬　「横石」＝横穴式石室　「木室」＝横穴式木室　「面」＝面・耳象嵌　「未」＝未確認
※　鏨・責金具などにも象嵌あり(あるいは象嵌の鏨や責金具が伴う可能性あり)



第 186 図　波状 C 字文象嵌鍔の編年的位置と拵えの特徴

無窓鍔付大刀　鍔付大刀は、臼杵勲による大刀の形態分析から、撫角片関細形茎に区分することができる（臼杵 1984）。この形態の大刀は MT15 ～ TK209 型式まで用いられるとされるが、中原 4 号墳例は、TK43 型式以降に普及する鍔付であることから TK43 ～ TK209 型式期に位置づけるのが妥当である。また、鍔は西澤正晴による無窓鍔 A 類に区分できる。西澤氏は静岡県内出土の無窓鍔の集成から、無窓鍔 A 類を TK43 型式～飛鳥Ⅲ型式まで出土するものの、TK43 ～ TK209 型式に多く用いられたとする（西澤 2002）。つまり、両者の編年観からは TK43 ～ TK209 型式期に位置づけられるが、中原 4 号墳例は鉄剣と接するように出土し、切先が奥壁側を向くことから（第 185 図）、追葬に伴う可能性が高く、鉄剣と同様 TK209 型式に位置づけるのが妥当である。

（2）馬具の帰属年代

轡　小型矩形立聞円環轡は、立聞に兵庫鎖を取り付けるもの、舌状吊金具を取り付けるもの、兵庫鎖・吊金具を伴わないもの（無吊金具）の 3 者がある。無吊金具のそれは、一部鏡板介在型（註 4）などの連結方法を採用するものを除いた衝介在型のものは TK43 ～ TK217 型式に位置づけられる（大谷 2016b）。編年に有効な特徴が少ないことから断定的ではないが、鏡板の大きさが全長 8.4cm、幅 8.0cm と無吊金具小型矩形立聞円環轡の中ではやや大きいことから、TK43 型式期に位置づけられる。初葬時の副葬品の蓋然性が高い。

兵庫鎖立聞素環円環轡は、兵庫鎖の連数に時期差が表出しており、3 連以上のものが MT15 ～ TK10 型式期に、2 連のものが TK43 型式期、単連のものが TK209 型式期に概ね位置づけられる（岡安 1984、大谷 2016c ほか）。2 連の中原 4 号墳例は TK43 型式期に位置づけられ、初葬時の副葬品の可能性が高い。

大型矩形立聞円環轡は、立聞部分が岡安光彦のいう「回字形」であり、氏の編年による「谷口原 10 号墳型」に該当する。TK209 型式期に位置づけられる（岡安 1984）。追葬時の副葬品の可能性が高い。

鐙　鐙は木製壺鐙に鉄製吊金具を取り付けるもので木芯鉄装（三角錐形）壺鐙である。斎藤弘により木芯鉄装壺鐙は吊金具の兵庫鎖の連数が多いものから少ないものへ変遷していることが明らかとなっている。中原 4 号墳例は 3 連であり、吊金具の長さがやや長いことから斎藤氏の三 C 式、TK43 型式に位置づけることができる（斎藤 1986、註 5）。

奥壁側の帯金具　方形 1 点、半円形 1 点が出土し、岡安光彦による帯金具の編年では TK43 ～ TK209 型式期に位置づけられる（岡安 1987）。

大型矩形立聞円環轡近くの帯金具　菱形 2 点、やや長い半円方形 2、短い半円方形 3 点が出土した。岡安光彦によれば、菱形で断面コ字形の菱形帯金具、半円方形帯金具 5 点ともに TK43 ～ TK209 型式に位置づけられる（岡安 1987）。出土位置が大型矩形立聞円環轡に近いことから同一の馬具セットであり、それと同時期の TK209 型式期に位置づけるのが妥当である。

類別＼時期		遠江Ⅲ期前葉 TK10	Ⅲ期中葉 TK43	Ⅲ期後葉 TK209	Ⅲ期末 飛鳥Ⅰ	Ⅳ期前葉 飛鳥Ⅱ	参考文献
象嵌装大刀	大刀		■	■			臼杵 1984
	象嵌八窓鍔			■			本節、瀧瀬・野中 1995
小型矩形円環轡			■	■			大谷 2016b
鐙			■				大谷 2016a
方形帯金具			■	■			岡安 1987
兵庫鎖立聞円環轡（兵庫鎖２連）			■				大谷 2016c
象嵌装剣	剣			■			本節
	象嵌六窓鍔			■	■	■	本節、瀧瀬・野中 1995
無窓鍔付大刀	大刀		■	■			臼杵 1984
	無窓鍔		■	■			西澤 2002
大型矩形立聞円環轡				■			岡安 1984
菱形帯金具			■	■			岡安 1987
半円方形帯金具				■			岡安 1987
			初葬	追葬１回目			

第 187 図　刀剣・馬具の編年的位置

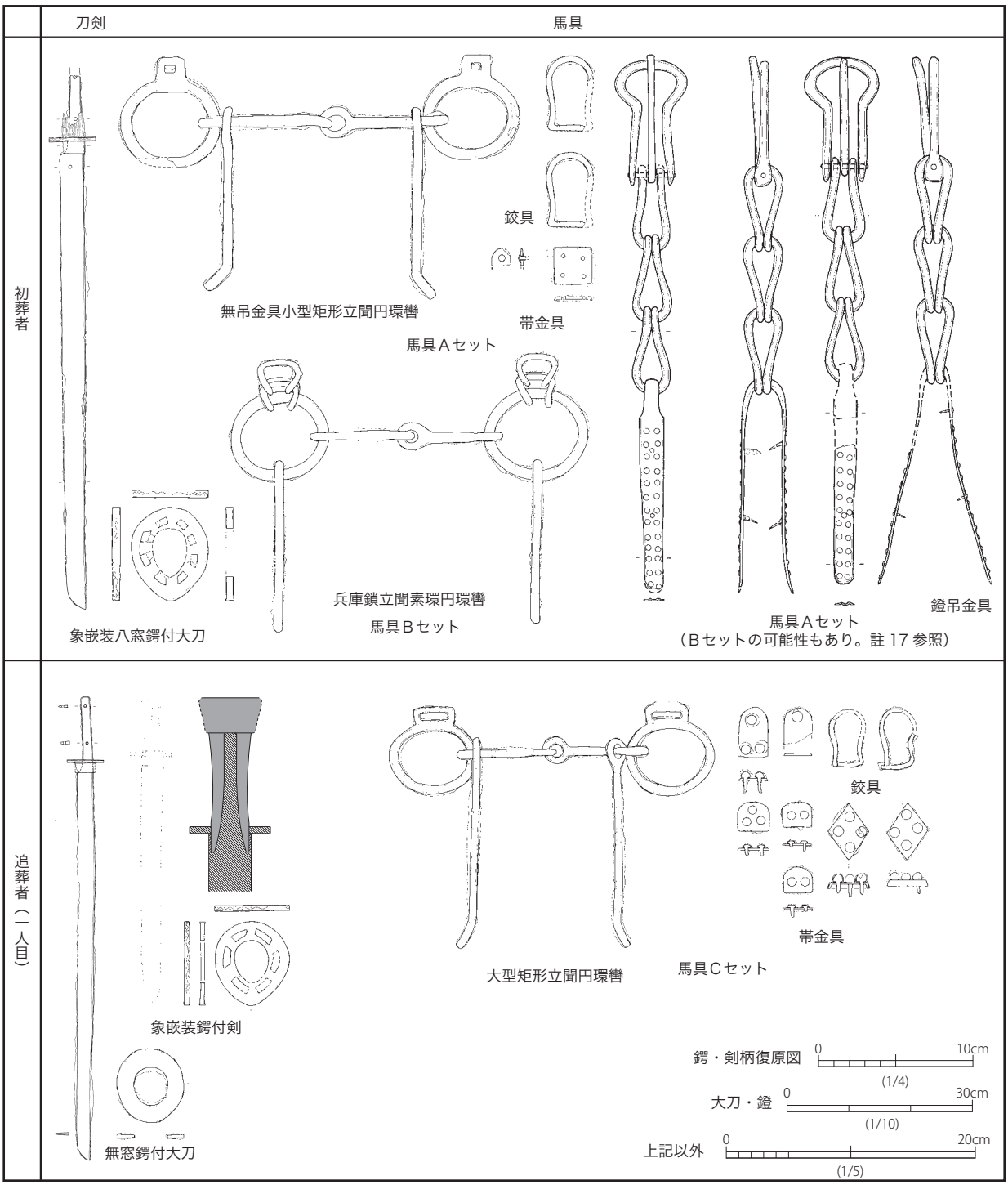
(3) 被葬者と刀剣・馬具との関係

これまで分析したように、刀剣・馬具はTK209型式期に近いTK43型式期と、TK209型式に区分できる（第187図）。前者には、象嵌八窓鍔付大刀、小型矩形立聞円環轡、兵庫鎖立聞素環円環轡、鐙、奥壁側の帯金具と鉸具、後者には剣、無窓鍔付大刀、大型矩形立聞円環轡と帯金具7点、鉸具2点があり、前者が初葬者、後者が追葬者の副葬品である可能性が高い（第188図）。

2 刀剣類の特徴

(1) 波状C字文象嵌鍔付大刀の特徴

波状C字文象嵌鍔の分布　波状C字文象嵌鍔付大刀を副葬した古墳は、41古墳・横穴墓などで42例確認でき（第14表）、北は福島県八幡横穴墓群から南は宮崎県瓜生野村30号横穴墓まで分布する。東北4例、関東14例、中部5例、東海4例、近畿5例、山陰山陽3例、九州6例、出土地不明1例であり、極端に集中する地域



第188図　被葬者と副葬刀剣・馬具との関係

は確認できない。この中で注目されるのは、福島県八幡横穴墓群（3例）と中原4号墳（2例）であり、同一古墳、同一横穴墓群に波状C字文象嵌鍔付大刀が複数副葬されることである。全国的に象嵌鍔が集中する地域は少ないことから、象嵌鍔付大刀を複数副葬する古墳（群）は畿内王権との関係を有し、特殊な役割を有する被葬者像が描かれる（瀧瀬・野中 1995）。中原4号墳は、2人目の被葬者が波状C字文象嵌鍔を伴う刀剣を保有することから、同じような役割を担う被葬者であること、畿内王権との関係を継続的に有したことが想定できる。

出土古墳の特徴　出土地点が不明確な9例を除く34例中、9例が横穴墓・地下式横穴墓である。前方後円墳（帆立貝形墳含む）は6基と少なく、千葉県法皇塚古墳（市立市川博 1976）や椎名崎B9号墳（千葉県 2006）などいずれも関東の中規模～小規模の古墳である。それ以外はおおむね20m以下の小規模古墳が多いことが特徴である。地域の最有力古墳ではなく、群集墳中の有力古墳に位置づけられるものが多い。中原4号墳も12mの小規模古墳である点、墳丘規模は小さいながらも副葬品の量は多く、群集墳中の有力古墳に位置づけられることも全国的な傾向と合致する。

波状C字文象嵌鍔付大刀　波状C字文耳象嵌鍔付大刀は柄頭まで残存するものがなく、また柄頭の形状を明らかにすることができる刀装具も伴わないことから柄頭の形状は不明である（第186図）。鎺元孔が穿たれること、鍔付であることから、倭装大刀であることは明らかであり、有機質の柄頭をもつ頭椎大刀か倭系（風）円頭大刀であった蓋然性が高い。また、第186図に示したように、鍔装着状態で出土したものでは鞘尻・鞘間・鞘口金具が伴わないことから判断して、外装は瀧瀬芳之による「素鞘」である（瀧瀬 1984）。また、佩用金具が確認できない（註6）。さらに、波状C字文耳象嵌鍔付大刀は、茎の形状が八窓鍔・六窓鍔ともに片関、大部分が一文字尻という特徴も共通する（第186図、註7）。八窓鍔・六窓鍔で、大刀の特徴、外装の特徴が一致する点は生産主体が安定し、生産にあたって拵えに対する規範があった可能性を想定できる（註8）。

以上、波状C字文鍔付大刀は、象嵌装が施された装飾付大刀であるものの、装飾付大刀の中では、非常に簡素な装飾のみに留まる倭装大刀であることが明らかとなる。橋本英将によれば、頭椎大刀など倭装大刀は仕様（材質）で階層差（金銅装→鉄地銀象嵌装→木装）を表現している（橋本 2013）ことから、耳象嵌鍔付大刀は、装飾が施された大刀の中では、階層性の低い大刀であった可能性が高い（豊島 2014、註9）。さらに、象嵌装鍔付大刀の中でも面・耳象嵌鍔を有するものと比較すると、面・耳象嵌鍔が鏨にも文様を施したり、金銅装大刀に採用されたりするなどより装飾性が高いことから、耳象嵌鍔の方が簡素な装飾であったと想定できる（註10）。

東駿河の中の中原4号墳　東駿河は、装飾付大刀が多く出土する地域であり、中でも単鳳環頭大刀が集中することが指摘される（岩原 2005）。近年、富士市内をはじめ圭頭大刀が複数出土し、その量も増加傾向にある。東駿河地域では中原4号墳と同時期には、単鳳環頭大刀や双鳳環頭大刀、圭頭大刀など金銅装大刀が副葬される中（岩原 2005）で、金銅装大刀を保有することはできず、やや装飾性が乏しい同文様の象嵌装鍔付刀剣を2人の被葬者が連続して保有していることに特徴がある。

東駿河では、象嵌装刀装具を有する古墳は、中原4号墳に近い東平1号墳、富士宮市別所1号墳、長泉町原分古墳、三島市田頭山3号墳と沼津市井田松江古墳群である。金銅装大刀と異なるのは、金銅装大刀が東駿河に散在するのに対し、象嵌装大刀は潤井川流域、黄瀬川流域、伊豆半島の海岸に偏在する傾向にあることである（西澤 2002）。特に沼津市井田松江18号墳に複数副葬されていることが特徴である。中原4号墳は、潤井川流域に所在し、象嵌装大刀がやや集中する地域にあたり、その初現的な古墳であるとともに、この地域が伝統的に象嵌装大刀に与えられた役割を担う集団が居住する地域である可能性を想定しておくべきだろう。また、同一古墳で複数保有する点は、井田松江18号墳が滝沢誠により海上交通などの東西交流を担う被葬者像（滝沢 2001）が描かれるように、中原4号墳被葬者も東西交流に長けていた可能性を考慮したい。

(2) 剣副葬の意義

古墳時代後期の剣副葬古墳　中原4号墳の大きな特徴は、古墳時代後期にはほとんど副葬されることのない剣が出土したことである。菊地芳朗によれば剣の副葬は古墳中期末で大きく衰退する（菊地 2010）。特に古墳後期後半になると、その数は非常に少なく、刀剣類の副葬が多い遠江・駿河でも本墳のみである。このように古墳時代後期の剣は類例が少ないことから、その評価を

探るに当たり、まず全国的な事例を示す（第 15 表、註 11 ）。集成の結果、中期末から後期初頭に位置づけられる古墳は除き、古墳時代後期～終末期に位置づけることができる剣はおおむね 40 例弱が確認できる（註 12 ）。

古墳時代後期の剣の分類　古墳時代後期以降の剣は、藤ノ木古墳（橿考研 1995）のような金銅装（飾鞘）のもの、中原 4 号墳のように金属製鍔（鎺を含む）を有するもの（鍔付、金属装）、井ノ内稲荷塚古墳（大阪大学 2005）のように鍔を有さないもの（無鍔）の 3 者が確認できる（第 189 図）。藤ノ木古墳例のように豪奢なものは他に確認できないが、鍔付が一定量存在する。

古墳時代後期の剣の時期的変遷　TK43 型式までのものは、基本的に鍔を伴わない。一方、装飾付や鍔付などの金属装剣は、奢侈な藤ノ木古墳例が TK43 型式期に位置づけられ、同時期に鎺や鞘尻に金具を用いるものが現れ、中原 4 号墳例や中尾 6・8 号地下式横穴墓例（吾平町 1998・2005）など鍔付のものが TK209 型式期に出現した可能性が高い。また、大年寺山 6 号墓例（宮城県ほか 1990）は、銅製装具であり、磐田市上神増 B7 号墳（静岡埋文研 2010a）などで出土する古墳時代終末期に用いられた大刀装具と共通することから、7 世紀中頃に位置づけられる。さらに、福本 70 号墳例（八頭町 2014）は八窓鍔付であるが、7 世紀第 2 四半期に位置づけられる。これらの事例から剣は少ないながらも古墳時代終末期まで存在している可能性が高い。

つまり TK43 型式までは木装剣が主体で、TK43 型式期に金属の刀装具が装着されるようになり（金属装）、TK209 型式期に鍔付が出現し、以後古墳時代終末期まで確実に剣が存在することが確認できる。

第 15 表　古墳時代後期～終末期の剣出土古墳一覧

古墳名	所在地	墳形	規模	埋葬施設	規模	鍔の有無	拵え	長さ	文献
大年寺山 6 号横穴墓	宮城県仙台市	横穴墓	-	横穴墓	3	喰出鍔	銅製刀装具・糸巻き	70	宮城県ほか 1990
原市出土	群馬県安中市	不明	-	不明	-	喰出鍔	喰出鍔・責金具	34	高崎市観音塚 2011
翁作古墳	千葉県館山市	後円？	-	不明	-	×	-	不明	千葉県 2003
今富新山遺跡	千葉県市原市	円	26	木棺	5.5	×	鹿角柄	30.8	千葉県 2003
塚原 29 号墳	千葉木更津市	円	23.4	木棺	3.7	×	無窓鍔	52.6	藤平 1998
横山台出土	千葉県山武市	不明	-	不明	-	◎	無窓鍔	-	関 1960
万田熊之台 12 号横穴墓	神奈川県平塚市	横穴墓	-	横穴墓	2.25+	◎	鎺	44	平塚市 1999
中原 4 号墳	静岡県富士市	円	11	横石	5.52	◎	象嵌装・鹿角柄	46.3+	本書
虎渓山 1 号墳	岐阜県多治見市	円	16	横石	9.25	×	-	67.2	多治見市 1996
江道 27 号横穴墓	富山県高岡市	横穴墓	-	横穴墓	3.68	×	-	27.4	高岡市 1998
柿谷古墳	京都府八幡市	方	12	木棺	4	×	-	65.2	京都府 2011
藤ノ木古墳	奈良県斑鳩町	円	48	横石	14.3	特殊	金銀装	64	橿考研 1995
井ノ内稲荷塚古墳	京都府長岡京市	後円	46	横石	10.1	×	-	65.2+	大阪大学 2005
井ノ内稲荷塚古墳	京都府長岡京市	後円	46	横石	10.1	×	-	破片	大阪大学 2005
上寺山古墳	大阪府茨木市	古墳	-	木室	4.5	×	-	破片	上寺山古墳研 2015
上寺山古墳	大阪府茨木市	古墳	-	木室	4.5	◎？	鍔の痕跡	破片	上寺山古墳研 2015
富木車塚古墳	大阪府高石市	後円	48	木棺	2.2	×	-	44	上田・森他 1960
三田古墳	大阪府富田林市	円	18	木棺	2.42	×	-	90.3	大阪府埋文 1993
西山古墳	大阪府堺市	円？	-	木棺	2.93	×	-	31+	大阪府教委 1990
檜尾塚原 8 号墳	大阪府堺市	円	13	木室	3.5	×	鎺	25+	大阪府教委 1990
福本 70 号墳	鳥取県八頭町	八角墳	9	横石	7.5	◎	有窓鍔・鎺	69+	八頭町 2014
大法 3 号墳	鳥取県琴浦町	円	12	横石	4.3	不明	不明	6.8+	東伯町 1979
中竹矢 1 号横穴墓	島根県松江市	後方	14	横穴墓	2.4	×	-	63	島根県 1983
長畑山北 4 号墳	広島県三次市	円	9.8	横石	3.73+	×	鎺	65.1	広島県 2015
経ヶ岡古墳	愛媛県四国中央市	後円	30	横石	7.5	×	-	49+	愛媛県 1984
津古片曽葉 2 号墳	福岡県小郡市	円	10.6	横石	2.3	×	-	45	九前研 1999
干隈熊添 1 号墳	福岡県福岡市	円	15	横石	2.1	-	-	85	九前研 1999
阿志岐 A3 号墳	福岡県筑紫野市	円	10.5	横石	2.3	-	-	49+	筑紫野市 1972
北垣 4 号墳	福岡県みやこ町	円	9.8	横石	6.4	-	-	破片	九前研 1999
小城炭坑跡古墳	佐賀県多久町	円	13?	横石	2.54	不明	不明	5.0+	佐賀県 1984
オブサン古墳	熊本県山鹿市	円	22	横石	8.5	-	-	破片	熊本県 1987
才園 2 号墳（才園古墳）	熊本県あさぎり町	古墳	-	横石	-	不明	不明	破片	宮代 1999
才園 2 号墳（才園古墳）	熊本県あさぎり町	古墳	-	横石	-	不明	不明	破片	宮代 1999
上三津栗原遺跡 ST001	佐賀県吉野ヶ里町	古墳	-	横石	8.9	不明	不明	破片	佐賀県 1983
木城村 27 号横穴墓	宮崎県木城町	横穴墓	-	横穴墓	3.8	×	鎺？	17.4+	宮崎県 2000
吾平小学校蔵	鹿児島県鹿屋市	不明	-	不明	-	×	刃関双孔	55	上村・酒匂 1972
吾平小学校蔵	鹿児島県鹿屋市	不明	-	不明	-	×	-	28	上村・酒匂 1972
中尾 6 号地下式横穴墓	鹿児島県鹿屋市	横穴墓	-	地下式	2	◎	鍔付	74	吾平町 1998
中尾 8 号地下式横穴墓	鹿児島県鹿屋市	横穴墓	-	地下式	2.2	◎	鍔付・糸巻装	73.7	吾平町 2005
北後田 1 号地下式横穴墓	鹿児島県肝属町	横穴墓	-	地下式	-	×	鎺・鞘尻金具	73.6+	橋本編 2014

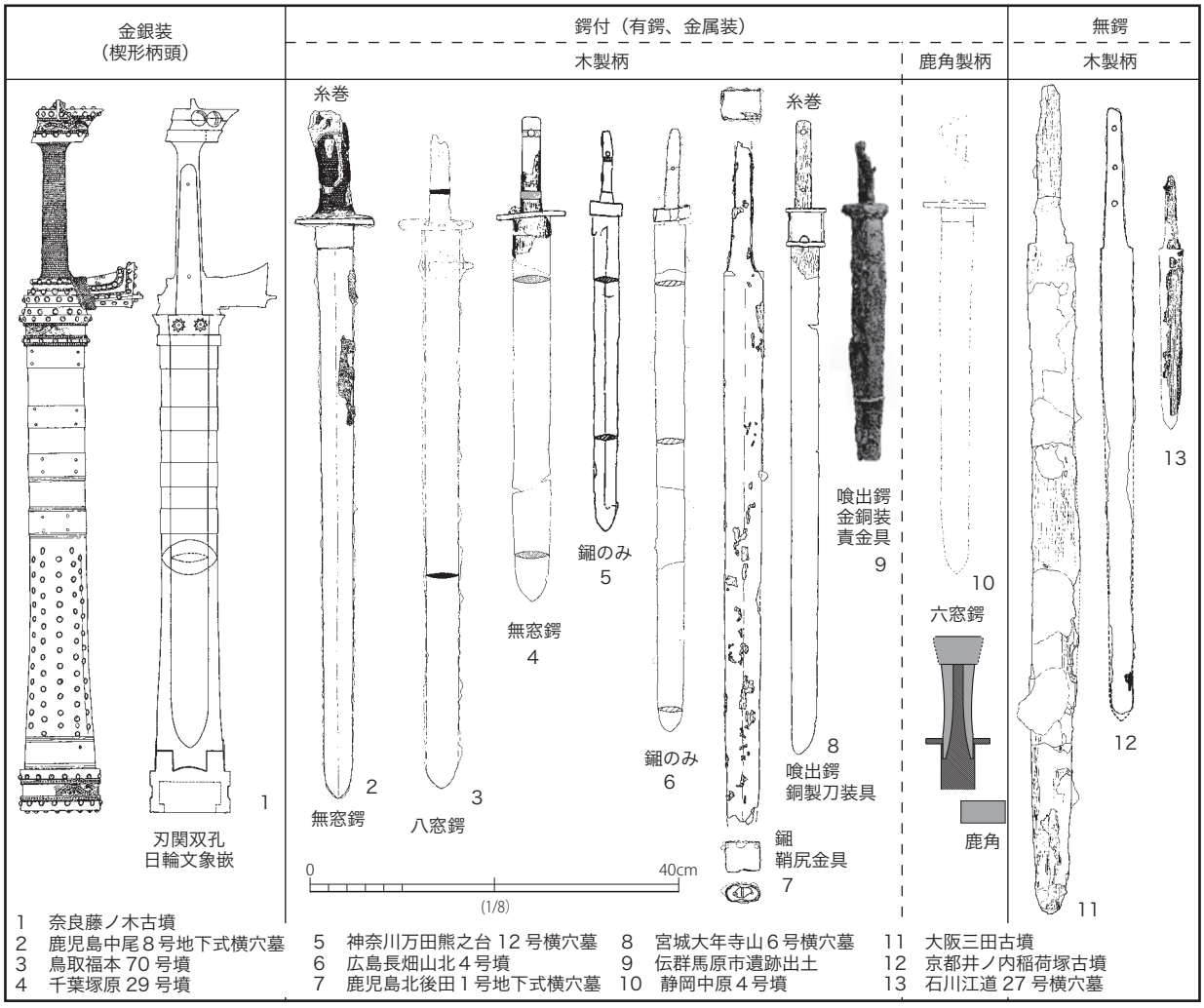
※「後円」＝前方後円墳 「後方」＝前方後方 「地下式＝地下式横穴墓 「木棺」＝木棺直葬 「横石」＝横穴式石室 「木室」＝横穴式木室
※吾平小学校蔵の剣 2 点は 5 世紀の可能性がある。

鍔付剣の特徴　鍔付には中原４号墳例・今宿新山遺跡例（千葉県 2003）が鹿角製であるが、木柄が基本である。木製柄のものには無窓鍔・八窓鍔が装着され、鹿角製柄である中原４号墳例には波状Ｃ字文象嵌六窓鍔が装着される。柄頭まで残存しているものは存在しないが、鹿児島県中尾８号地下式横穴墓例（吾平町 2005）から判断して、木柄のものは刃側が弧を描く柄間の（糸巻きを施した）頭椎大刀（あるいは倭装円頭大刀）の可能性が高い。

中原４号墳例は鹿角柄であり、古墳時代後期の剣の中では特殊な柄を有するものである。復原では柄頭は左右均等の逆台形のような平面形態に復原したが、藤ノ木古墳のような楔形柄頭であった可能性も残る。古墳時代後期にも一定数鹿角装短刀が存在することから断定はできないが、古墳時代中期に鹿角が剣装具に利用されていたという伝統的観念（豊島 2014）に基づき、中原４号墳例は剣という古式の武器に、木柄ではなく鹿角製柄が組み合わされたと想定したい。

古墳時代後期の剣生産の意義　鍔付剣は、楔形大刀、頭椎大刀などの倭装大刀の形状と類似する。藤ノ木古墳例は中期の鹿角を柄縁と柄頭に用いる剣の形状を保持する（豊島 2014）とされるが、中尾８号地下式横穴墓例をみると、倭装大刀の外装と同じであった可能性があり、中身を見せなければ剣であることは確認できなかった可能性がある。では、なぜ金銀装剣や鍔付剣が生産され、副葬されたのか。

菊地芳朗は、中期末で剣生産が停止されたことを想定する（菊地 2010）が、中期以前に生産されたものが古墳時代後期後半以降まで伝世し、その拵えを古墳時代後期のものに一新（改造）して装飾したり、鍔を装着したりしたとするよりも、拵えは金属装大刀と同様であることから古墳時代後期以降も微量ながら大刀生産の中で剣



1　奈良藤ノ木古墳
2　鹿児島中尾８号地下式横穴墓
3　鳥取福本 70 号墳
4　千葉塚原 29 号墳
5　神奈川万田熊之台 12 号横穴墓
6　広島長畑山北４号墳
7　鹿児島北後田１号地下式横穴墓
8　宮城大年寺山６号横穴墓
9　伝群馬原市遺跡出土
10　静岡中原４号墳
11　大阪三田古墳
12　京都井ノ内稲荷塚古墳
13　石川江道 27 号横穴墓

第 189 図　古墳時代後期～終末期の剣分類

も生産され続けたと想定したい。ただし、常時生産されたわけではなく、需要に応じて生産された可能性が高い。

鈴木一有は甲冑の分析を通じ、中世以降の武家の棟梁家の例を参照しながら、『「古式」と認識されるような武装が、正当性を示す儀礼的な用具として認識されていた』と評価する（鈴木 2008a）。また、筆者は鉄鏃における無茎式・短茎式が後期になると関東・東北地方以外では激減するものの生産され続けている点、あるいは鉄鏃の頸部をわざわざ矢柄で覆い、無茎式・短茎式に外見を模したものが生産され、副葬されることから、伝統性の保持のために生産されたと想定した（大谷 2011a）。さらに、藤ノ木古墳出土の装飾付剣は刃関双孔が穿たれており、その周囲には日輪文が象嵌される。杉山和德は弥生時代から古墳時代中期までの刃関双孔鉄剣を集成し、前期古墳では刃関双孔鉄剣がヤリに転用されるが、古墳時代中期には「『弥生時代以来』という伝世品としての付加価値が付帯され」たとする（杉山 2010）。豊島直博は藤ノ木古墳例が古墳中期の大刀の外装を保持した状況で装飾が加えられていることから「伝統的な儀器として存続した」と想定する（豊島 2014）。鈴木、杉山、豊島各氏及び筆者は、いずれも古い要素をもつ武器・武具に対して伝統性の保持、正当性の表示等の見解を示している（註 13）。

したがって、古墳時代後期以降の剣も、伝統性の保持や正当性を表示するために生産されたと想定したい。ただし、単純に再生産されるのではなく、奈良県藤ノ木古墳例は別格としても、中原 4 号墳例は象嵌鍔付であり、大年寺山 6 号横穴墓例は銅製の鍔・鎺が装着され、通常の大刀よりも装飾性を高める。また、鍔（鎺）という最新の装備（刀装具）を装着することで新たな装具を加える。古墳時代後期以降の剣は、弥生時代以来の伝統保持、そして最新の鍔や装具を付加することで先進性をもつ鉄剣という、伝統性の表示と最新性の創出を同時に行った可能性が高い（註 14）。

中原 4 号墳の剣副葬の意義　中原 4 号墳に副葬された理由について、想像をたくましくすれば、追葬者に伴うものの、弥生時代の伝統を引く器物を保有する＝古い系譜を有すること＝自分たちの系譜、権威の正当性（註 15）を表示するような文物として利用された可能性も考慮する必要がある（註 16）。

3　馬具の特徴

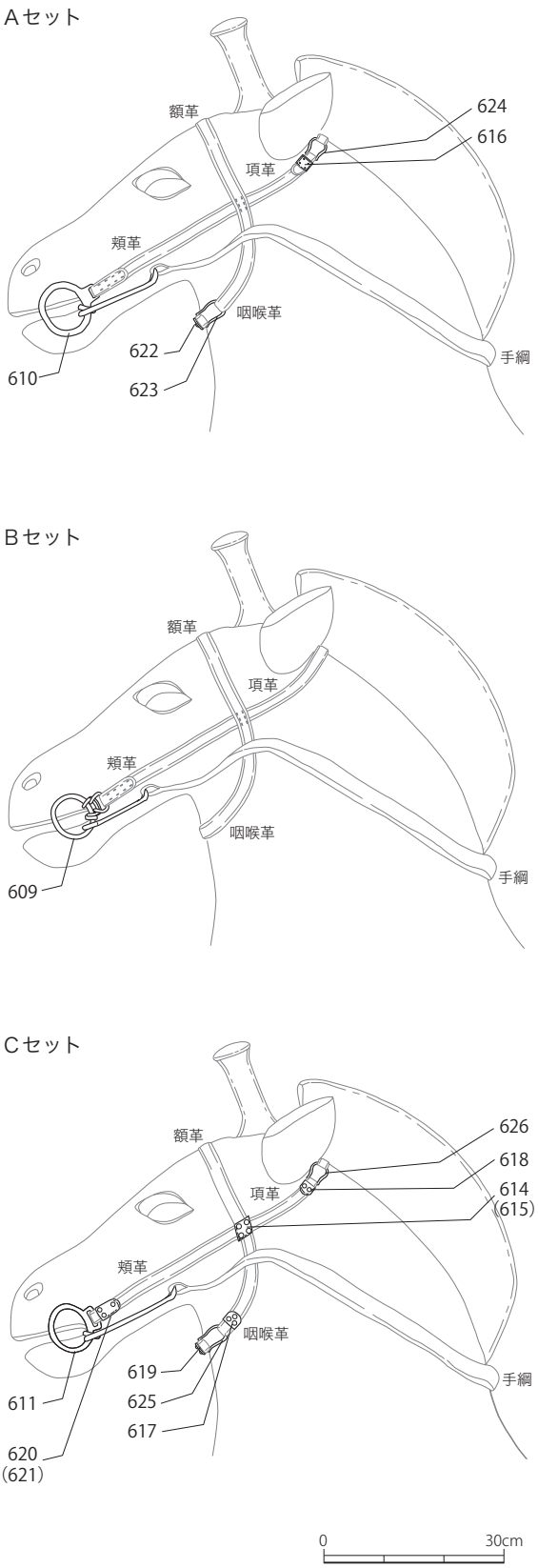
(1) 馬具の組合せと馬装の復原

馬具の組合せ　中原 4 号墳の馬具は、かたづけ行為は認められるものの石室内が盗掘などにより乱されていないことから、概ね出土位置（第 185 図）と遺物の帰属時期（第 187 図）から当初の組合せを想定できる。その組合せは、奥壁近くに副葬された小型矩形立聞円環轡と鐙 1 組、方形・半円形帯金具各 1 点、鉸具 2 点の 1 組（A セット）、玄室左側壁側中央やや南側に単独で副葬された兵庫鎖立聞素環円環轡 1 組（B セット、註 17）、その羨門側に副葬された大型矩形立聞円環轡と、帯金具 7 点、鉸具 2 点の 1 組（C セット）の 3 組である（第 188 図）。

A セット馬装　A セットの面繋は轡と革帯（繋）を繋ぐ鉸具とその留金具のみが金具で、それ以外は有機質であったと想定する。想定される面繋は、頬革・額革・喉革・項革（増田 1960）で構成されるもので、金具が少ないことから革の交点は縫い合わせの可能性が高い。鉸具は面繋を着脱するために喉革と頬革に一つずつ使用されたと想定した。鞍金具等鞍金具が伴わず鞍の有無は不明であるが、鐙が伴う。A セットは金具をほとんど用いない装飾性の低い面繋に鐙を伴うだけの馬装であった可能性が高い（第 190 図上段）。

A セットに用いられた吊金具や兵庫鎖を伴わない無吊金具小型矩形立聞円環轡は、轡以外には金具を伴わないものが多い（大谷 2016b、註 18 ）。中原 4 号墳の A セット馬具はこの傾向に合致している。また、鐙は擬似鋲表現のある鐙吊金具であり、この鐙は全国で 20 例以下であるとともに、組合される轡が一定していない（大谷 2016a）。以上の点からみると、A セットの組み合わせは、それぞれが生産されたときに組み合わされる予定で生産されたわけではなく、組み合わされた場所を特定することはできないが、別々に生産され流通していた出来合いの馬具を組み合わせた（宮代 2013）可能性が高い。東駿河でも、長泉町原分古墳、富士市船津 L62 号墳で同様の評価がなされている（鈴木 2008b、大谷 2013）。

B セット馬装　B セットの金具は轡のみで、それ以外は有機質の馬装である。面繋の構造、鞍の有無、尻繋などは全く不明であるが、A セット同様頬革・額革・喉革・項革で構成される面繋で、繋の交点は糸で縫いつけられていたと想定する（第 190 図中段）。鉸具がないことか



第190図　A～Cセット馬装の復原

ら面繋の着脱は、革帯を縛るなどして行ったのであろうか。

Bセットの兵庫鎖立聞素環円環轡のうち兵庫鎖が2連のものは、雲珠や杏葉を伴うものは少なく、兵庫鎖立聞素環円環轡は簡易の馬装であったことがわかる（大谷2016c）。中原4号墳例はこの傾向に合致する。

A・Bセットは、帯金具をほぼ伴わない面繋－宮代栄一の分類（宮代1997）にはないが、「単条系/辻金具・帯金具を（ほぼ）使用しない馬装」と仮称－として表現した。宮代栄一は、熊本県赤坂古墳例で、円環轡のみの面繋を復原し、縫い付けで革帯を繋ぐ方法を想定しており（宮代2015）、中原4号墳のA・Bセットをその一例として追加できる。

Cセット馬装　Cセットの面繋は、轡と帯金具、鋲具で構成される。出土状況からみると、轡の直近で帯金具620・621が出土しており、この金具は繋を轡の立聞に通した後で鋲留めする帯金具であると推断できる。菱形帯金具2点（遺物番号614・615）は轡からはやや離れた位置で出土しており、面繋の交点に取り付けられたものと想定する。これにより辻金具を伴わずに交差する繋を結合できる。それ以外の帯金具3点と鋲具は面繋を着脱するために利用するもので、項革と喉革に装着されたものと判断した（第190図下段）。Cセットの馬装は宮代栄一による「単条系/辻金具を伴わない馬装」のうちの「菱形飾金具装着」（宮代1997）であり、宮代氏が代表例として挙げる宮崎県馬頭13号墳例とほぼ同様の面繋構造である。

馬装の特徴　中原4号墳出土の3組の馬具はいずれも雲珠・杏葉を伴わない「面繋馬装」（宮代1997）である。また、3セットとも辻金具を伴わない非常に簡素な馬装である。中原4号墳は3組の馬具セットをもち、また2人の被葬者が、馬具を保有しているが、簡素な馬装を保有するに留まる。また、金具を伴わない簡素な馬具であることから、儀式用や騎馬用以外の別の用途に用いられた可能性を考慮する必要がある。

（2）副葬された馬具からみた中原4号墳

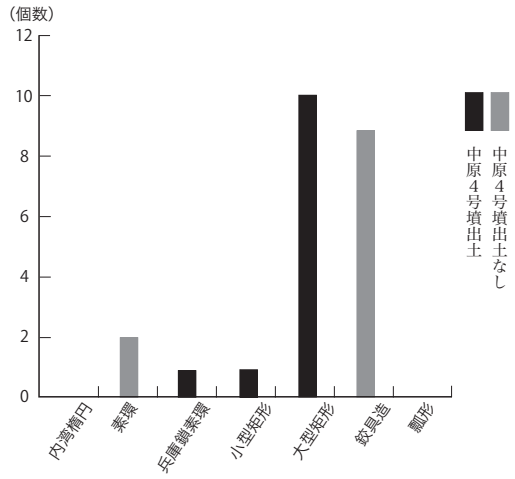
東駿河における馬具の種類からみた中原4号墳　筆者が前稿（大谷2006）で分析したように、東駿河では円環轡は、大型矩形立聞と鋲具造立聞の2者で80％以上を占める（第191図）。中原4号墳は大型矩形立聞円環轡が出土しており、その傾向に合致する。

一方、東駿河には類例のない小型矩形立聞、兵庫鎖立聞素環円環轡（註 19）を有することが際立つ。小型矩形立聞素環円環轡（無吊金具）は日本列島で 20 例強の出土であるが、関東 3 例、東海 8 例、中部 2 例、近畿 2 例、山陰山陽 4 例、九州 8 例である（第 192 図）。明気古墳群など三重県中部にやや集中する傾向にある。後者は 100 例強であり、関東 11 例、中部 6 例、北陸 1 例、東海 13 例、近畿（滋賀含む）20 例、山陰山陽 8 例、四国 18 例、九州 22 例、韓国 1 例（玉田 M6 号墳）である。東海以西に多い傾向にある（第 192 図）。また、小型矩形立聞円環轡とは、分布のあり方が異なるため、流通経路（あるいは用途）などが異なっていた可能性が高い。

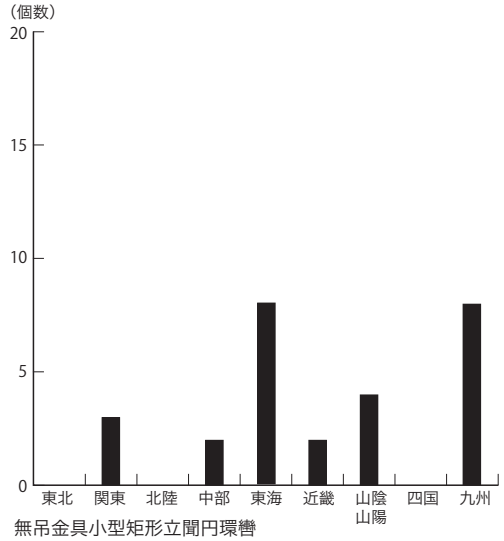
別稿（大谷 2016c）で詳しく論じるが、兵庫鎖立聞素環円環轡は、西日本にやや分布が多く、特に愛媛県（松山市 8 例・今治市 5 例などの総数 15 例）に多い点が特徴である。また、関東では馬具が多い群馬には 2 連のものは存在せず、栃木や埼玉などで出土する。長野では、南信濃には 1 例のみで、北・東・中信濃で出土する。静岡では非常に円環轡の出土は多いものの、兵庫鎖立聞素環円環轡は 2 例である。大型矩形立聞や鉸具造立聞の分布が多い地域（群馬・静岡・山梨）には少ない傾向にある。

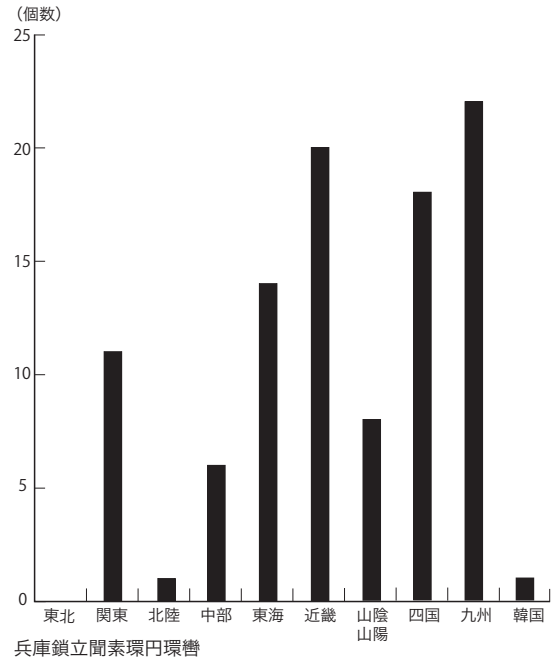
さらに、瓢形円環轡（大谷 2008）と比較すると、岡山や愛媛などで多く確認できるなど兵庫鎖立聞素環円環轡と分布傾向が類似する地域が確認できる。また、埼玉県黒田古墳群（関・宮代 1987）や岐阜県大牧 1 号墳（東海古墳文化研 2006）、奈良県寺口忍海古墳群（橿考研 1988）、兵庫県箱塚 4 号墳（兵庫県 1993）、大分県飛山横穴墓群（大分県 1973）など同一古墳・古墳群内で出土すること、瓢形円環轡が兵庫鎖立聞素環円環轡から派生したものであること（岡安 1984、大谷 2008）から、同様の役割や出自をもつような被葬者間で共有されていた可能性もある。筆者は瓢形円環轡を保有する古墳の分析から鍛冶技術を有する工人集団間で共通する馬具の可能性を論じたが、兵庫鎖立聞素環円環轡についても同様の評価ができる可能性がある。中原 4 号墳では鍛冶具が出土しており、こうした馬具と鍛冶具との関係も考慮しておく必要があると考える。

したがって、中原 4 号墳は、初葬者は東駿河の中では稀有な小型矩形立聞と兵庫鎖立聞素環円環轡を、追葬者は駿河に共通する大型矩形立聞円環轡を保有している。



第 191 図　東駿河における円環轡の種類別出土数





第 192 図　円環轡の種類別出土数

前者は後者とは異なる流通経路や役割（手工業生産技術者の交流関係）によって馬具を２セット保有し、後者は駿河の一般的な馬具副葬古墳の被葬者と同様の流通経路･役割によって馬具を入手した可能性を想定したい。

ただし、初葬者が保有した馬具については、畿内でも出土していることや、金銅装辻金具・雲珠を伴う馬装である吊金具付小型矩形立聞円環轡から無吊金具小型矩形立聞円環轡が派生したことから（大谷 2016b）、畿内との関係を抜きには考えることができない。寺口忍海古墳群や巨勢山古墳群など手工業生産と関係するような集団と想定される古墳群からの出土があることから、こうした集団との関係を想定しておくべきであろう。特に寺口忍海古墳群の無袖石室と東駿河の無袖石室は特徴が類似していることが指摘されており（鈴木 2010）、中原４号墳の被葬者がその集団と職掌を通じて石室形態を共有していた可能性もある。

３組の鉄製轡の副葬　３組の円環轡を有する点は、馬具の出土数が多い駿河の中でも静岡市賤機山古墳（東海古墳研 2006）に次ぐ数量である。宮代栄一によれば、複数の馬具を副葬する古墳では金銅装馬具と鉄製馬具の組み合わせであることが一般的で、鉄製馬具で占められることは少ない。これらの複数の鉄製馬具を副葬する古墳は、鐙が伴えばよい方で、ほとんどは鐙１点で構成されることが多い（宮代 2015）。また、鉄製馬具のみを複数副葬する古墳は信濃に他地域よりも多く認められる（宮代 2015、註 20 ）。宮代氏は鉄製馬具のみを複数副葬する古墳は何代にも亘って馬具を保有することができ、その出自や位置づけを示そうとした集団で、こうした鉄製馬具のみを副葬する集団の共通した性格を表示している可能性を指摘する（宮代 2015）。中原４号墳出土馬具は少なくとも被葬者２人が保有し､簡素な馬装(轡のみと、轡と鐙）であった可能性が高いが、宮代氏の指摘と合致する｡鉄製馬具の複数副葬という点からみれば、宮代氏が指摘するように（宮代 2015）馬匹生産に関係すると考えたい。また、複数の系統の円環轡を保持するということで、象嵌装大刀の複数副葬古墳の項でも注目したように、地域間交流にたけた被葬者像を描くことができよう。

４　刀剣・馬具からみた被葬者の性格

(1) 被葬者間の関係

中原４号墳では、人骨の出土位置などから少なくとも３人の埋葬が確認できる（本文参照）。出土位置から、このうち馬具と大刀は初葬者と１回目の追葬者に伴うもので（第 188 図）、２回目の追葬者に伴うと想定できる刀剣・馬具はない（以下、追葬者とする場合は、１回目の追葬者を指す）。これまでに分析したように、初葬者は円環轡２セット、象嵌鍔付大刀１点、追葬者は円環轡１セット、象嵌鍔付・鹿角柄装鉄剣１点、無窓鍔付大刀１点が副葬される（第 188 図）。数量・形態に若干の差異は確認できるが、馬具は金銅装轡や杏葉の伴わない面繋馬装の円環轡、象嵌鍔は波状Ｃ字文で同様であることから、被葬者と追葬者で階層的な位置づけはほぼ同様であったといえる。また、刀剣・馬具の編年的な位置づけからみると、初葬者は TK43 型式期でも比較的新しい時期、追葬者は TK209 型式期に活躍した人物と想定できる。この２者の活躍時期は、それほど隔たりはなかった可能性が高く、近い時期に活躍したことが想定される。

２人の関係が兄弟であるのか親子であるのか不明確であるが、清家章の研究（清家 1996）に基づけば、両者に鉄鏃が副葬されることから、２人とも男性であることが想定できる。彼らは馬具の種類の違い、象嵌装大刀と象嵌装剣という違いに､それぞれが担う役割（職掌など）に違いが表出している可能性が高い。

(2) 被葬者の特徴

中原４号墳被葬者集団の特徴　副葬品の特徴は、波状Ｃ字文象嵌鍔付刀剣の複数副葬、面繋馬装のみの３組の轡の副葬など、全国的にも同一古墳に集中することの少ないものを複数保有していることが特徴である。また、刀剣・馬具ともに保有するが、装飾付大刀や馬具の中では最も簡素なものである点も特徴的である。鉄製轡のみの複数副葬から馬匹生産・乗馬技術に関連する被葬者集団を、象嵌装大刀の複数副葬からは地域間交流にたけた集団を想定できる。ただし、被葬者２名ともに特異で重要な役割（職掌）を担いつつも、簡素な馬装・簡素な装飾付大刀のみの保有であることを評価すれば、畿内王権からは格段に優遇はされていない状況が窺える。

初葬者の性格　兵庫鎖立聞素環円環轡が最も集中する松山や今治の古墳をみると、農工具の副葬が多い特徴

があり、中原４号墳もそれらの副葬が際立ち、初葬者に副葬されたものであることから（本書第４章第８節、鈴木論文参照）、中原４号墳の初葬者は、愛媛の古墳被葬者集団と直接の関係があったかどうかの判断は難しいが、彼らと同様の性格をもつ職掌であった可能性を想定できる。兵庫鎖立聞素環円環轡は瓢形円環轡と分布が類似する地域があり、愛媛は類似する地域に当たる（大谷2016c）。この瓢形円環轡の保有者は鍛冶関連技術による交流が想定できる（大谷2008）ことから、兵庫鎖立聞素環円環轡についても同様の職掌や交流関係により入手した可能性がある。

中原４号墳初葬者はこのように鍛冶技術や馬匹生産など手工業生産技術をもち、彼の傘下にある集団を直接指揮するような人物像が描ける。こうした技術を保持し、王権に奉仕することにより畿内王権から装飾付大刀や馬具２組を配布された可能性が高い。

追葬者の性格　鍔付剣という伝統的でありながら最新式でもある武器を保有することが特徴である。古式の武器を用いて地域に根差している伝統性と支配の正当性を示す必要があるような被葬者を描けようか。

大型矩形立聞円環轡という東駿河で一般的な馬具を保有する。この大型矩形立聞円環轡あるいはもう一つの東駿河で副葬割合が高い鉸具造立聞円環轡は、岡安光彦が古墳時代に牧の存在があることを想定した（岡安1986）群馬、長野、山梨、静岡（駿河）に多い形式である。岡安氏が想定するように東駿河に牧が存在し、乗馬技術にたけた集団が存在するのであれば、馬具形式を東駿河で共通して保有することから他の馬具保有者と同様の性格（馬匹生産）をもち、初葬者の性格を引き継ぎつつも、乗馬技術にたけた被葬者像を描けようか。

初葬者と追葬者､時期をあまり隔てず活躍した２人は、このように自らの持つ性格（職掌など）をやや違え、多方面に活躍範囲を広げることで自らの集団を経営していたのであろう。

【謝辞】

小論の執筆に当たり、事例の収集・文献等の探索および資料の評価にあたり、内山敏行、河内一浩、齋藤大輔、杉山和徳、鈴木一有、瀧瀬芳之、田村隆太郎、豊島直博、橋本達也、深野信之、宮代栄一の各氏にご教授、ご高配賜りました。明記して深謝いたします。

註

1　鍔の平面を「面」、側面を「耳」と呼称し、面に象嵌があるものを「面象嵌」､耳に象嵌があるものを「耳象嵌」とする。通常「面象嵌」があるものは耳にも象嵌が施されていることが多く、その場合は「面・耳象嵌」とする（瀧瀬・野中1995、豊島2001）。

2　波状Ｃ字文象嵌鍔は時期が下るにつれて大きさが小さくなる傾向は確認できない。逆に言えば、大きさで時期を判別することは困難である。

3　今回分析した象嵌鍔・馬具の分析では、須恵器の型式変化よりも刀剣装具や馬具のほうが時期が短期間に変化している可能性が高いことがわかる。

4　轡を構成する鏡板・銜・引手の連結方法として、銜外環に鏡板と引手を連結するものを「銜介在型」、鏡板に銜と引手を別々に連結するものを「鏡板介在型」、遊環を配して遊環に鏡板・銜・引手を装着するものを「遊環介在型」とする。

5　この鐙の特徴は吊金具に擬似鋲表現を有することである。筆者の分析では、擬似鋲表現鐙金具の出土数は20例前後であるものの、おおむね（MT85型式～）TK43～TK209型式期に編年できる。擬似鋲表現のある吊金具を持つ鐙は２類４型式に区分できる。このうち、中原４号墳例は「三里型」に区分でき、TK43型式期に位置づけられる（大谷2016a）。

　なお、疑似鋲表現鐙金具について、内山敏行氏に類例をご教示頂いた。

6　群馬県高崎市山名原口Ⅱ遺跡２号墳（高崎市1999）では、波状Ｃ字文八窓鍔と、鱗状文鞘尻（あるいは柄頭）が出土しているが､大刀に伴って出土しているわけではなく､同一の拵えであったのか不明確である。また、栃木県矢板市立野古墳（栃木県博ほか1998）で、波状Ｃ字文六窓鍔に伴って象嵌装花形金具が出土している。本報告が未刊のため確実ではないが、写真を見る限り柄頭は出土していないようであり、有機質製柄頭の懸通孔に装着された飾りであろうか。

　したがって、一部の事例について、鍔・鏨以外に金具を伴う可能性は排除できないものの、大部分が鍔と鏨のみに金属を用いるだけの簡素な拵えであったことは確実である。

7　千葉県椎名崎B9号墳例（千葉県2006）のみ大刀の茎が「隅抉尻」である（臼杵1984）。時期差であるのか、系統差であるのかは判別が難しいが、飛鳥Ⅰ期に降る可能性が高いことから、時期差の可能性を想定し、大刀の生産における工人集団等の再編などが起こった可能性を想定したい。

8　TK43～TK209型式期に位置づけた八窓鍔である大阪府大石古墳、大分県ガランドヤ２号墳は、中原４号墳と比較すると大刀に鏨元孔を有する点や、刀身の長さがほぼ同一である点、ガランドヤ２号墳とは目釘孔の位置もほぼ同一であることから、同時期に同工房で生産された可能性がある。

9　一方で、波状Ｃ字文を配する面・耳象嵌鍔付大刀は、竹並G-121-1号横穴墓例(竹並遺跡1979)で圭頭大刀に採用されたり、陣場塚古墳（長野県ほか1999）や広木大町９号墳（瀧瀬・野中1995）のように鏨などに文様を施したりと、耳象嵌鍔付大刀より装飾が多いことから、面・耳象嵌鍔付大刀の方が装具による階

層は高かった可能性が高い。

10 面・耳象嵌の長野県陣場塚古墳例（長野県ほか 1999）は、両関であり、倭系大刀では新しく位置づけられる。

また、波状 C 字文は基本的に耳象嵌で、それを装着する大刀は片関である。一方で面・耳象嵌に両関のものが確認できること、耳象嵌鍔付大刀は飛鳥Ⅱ期の六窓鍔付大刀でも片関であることから、同時期に波状 C 字文鍔を採用するものでも面・耳象嵌と耳象嵌では、生産体制が異なる可能性がある。

なお、本論とは離れるが、象嵌装大刀は TK209 型式期後半以降、系列間の文様の融合が起こり、新しい文様の組み合わせが出現する（大谷 2011b）が、竹並 G-121-1 号横穴墓例や広木大町 9 号墳例や陣場塚古墳例は、その融合例と考えることができる。面・耳象嵌に波状 C 字文が採用されるものは、象嵌装大刀生産の再編の一環として、波状 C 字文が圏線 C 字文系、心葉文系に取り入れられたと考えたい。したがって、耳に波状 C 字文が施されているといえども耳象嵌鍔と面・耳象嵌と同等に扱うには注意が必要である。

11 事例の収集にあたり、瀧瀬 芳之氏、内山 敏行氏、鈴木 一有氏、齋藤 大輔氏にご協力いただきました。

12 筆者が報告書を確認できた範囲内での集成であり、遺漏が多いと考えている。更なる集成とそれに基づいた検討が必要である。

13 正倉院に納められた大刀には鑢元孔を有するものがあり、古墳時代の遺制が残存していることが述べられている。また、奈良時代に固有の手鉾に、「日本古来の伝統を引く刃の作り方」が採用されていることが説明されている（奈良博 2014）。したがって、奈良時代には古墳時代の伝統を引く特徴をもつ遺制や作り方が採用されたものがあり、やはり古い伝統が時に重要視されることがあったことがわかる。

14 筆者は、古墳時代中期においてヤリの副葬が減少する中で、ヤリ状の身をもちながら有袋の鉄鉾（いわゆる「槍身鉾」）を分析し、ヤリという古式の武器と有袋という新しい要素の融合が行われ、「槍身鉾」として新たに創出されたことを論じた（大谷 2004）。蛇行剣でも古式武器に新しい要素（蛇行）を施し、新たな意味を加えていることが指摘される（北山 1999）。

15 中原 4 号墳が所在する富士市域には、古墳時代中期の間門松沢 1 号墳（静岡県埋文研 2010b）に刃関双孔鉄剣が副葬されており、古い武器である鉄剣を重視するような傾向がある可能性も排除できない。

16 さらに、鈴木一有が想定するように東駿河の導入期の横穴式石室の構築集団に他地域からの移入者がいた可能性を考慮すれば（鈴木 2010）、その移入者集団が、伝統的な武器である剣を保持することで、あたかも古くからこの地域に居住していたように正当性を裏付ける文物として使用した可能性も念頭に入れておきたい。

17 大阪府切戸 1 号墳（羽曳野市 1985）、栃木県上野原 12 号墳（南河内町 1992）では、兵庫鎖立聞素環円環轡に擬似鋲表現鐙吊金具が伴う。岐阜県大牧 1 号墳（東海古墳文化研 2006）では兵庫鎖立聞素環か瓢形円環轡に伴う可能性が高い。一方、静岡県八幡 2 号墳（東海古墳文化研 2006）、大阪府大石古墳では大型矩形立聞円環轡に伴う（大谷 2016a）。したがって、中原 4 号墳の 3 組の轡の種類でみると、兵庫鎖立聞素環円環轡とやや親縁性が高いことから、本来兵庫鎖立聞素環円環轡と組み合わされていたものが、被葬者集団により小型矩形立聞円環轡と組み合わせに変更され、最終的に副葬された可能性がある。

18 馬装の復原にあたっては、宮代栄一氏に御教授いただきました。

なお、轡が副葬され、辻金具が出土しない場合、盗掘などにより辻金具が失われた可能性が想定されることが多いが、円環轡では轡のみ、あるいは轡と帯金具で面繋を構成するものがあること（宮代 1997）を念頭に置いて分析を行う必要があり、古墳時代の馬装は非常に多様性を持った組合せが存在したことに留意する必要がある。

19 前稿（大谷 2006）では、沼津市東原 2 号墳例（東海古墳文化研 2006）が兵庫鎖立聞素環円環轡であると認定したが、兵庫鎖と想定する金具が他の兵庫鎖立聞素環の装着方法と異なるため、別の形式（無吊金具素環円環轡）として、今回の分析からは除外した。

20 宮代氏は、長野県須坂市本郷大塚古墳、茅野市茅野大塚古墳、熊本県多良木町赤坂古墳などを挙げ、他地域に比べ長野（信濃）に多いことを指摘する（宮代 2015）。筆者が確認できた範囲では、中原 4 号墳のほか、静岡県掛川市原 7 号横穴墓、兵庫県篠山市箱塚 4 号墳、オギタ古墳も 3 種の円環轡のみの副葬となる。

必ずしも馬匹生産集団とは直結できないが、複数の被葬者が、鉄製轡のみを保有する点は、馬とのかかわり（馬匹生産・乗馬技術）が強かった集団（被葬者）と想定する根拠になろう。

引用・参考文献

【論文】

岩原 剛　2002「東海の飾大刀」『立命館大学考古学論集Ⅲ』 立命館大学考古学論集刊行会

岩原 剛　2005「東海地域の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳』 島根県古代文化センター

上村 俊雄・酒匂 義明　1972「鹿児島県吾平町発見の地下式土壙」『考古学ジャーナル』67 号　ニュー・サイエンス社

臼杵 勲　1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　PHALANX

大谷 宏治　2004「鉄鉾について」『寺山古墳群』 静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2006「馬具の分布からみた東海古墳時代社会」『東海の馬具と飾大刀』 東海古墳文化研究会

大谷 宏治　2008「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40 号　静岡県考古学会

大谷 宏治　2011a「遠江・駿河の頸部を呑み込む矢柄をもつ鉄鏃の意義」『研究紀要』17　静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2011b「象嵌装大刀の変遷」『考古学ジャーナル』616　ニュー・サイエンス社

大谷 宏治　2013「船津 L- 第 62 号墳の馬具について」『船津古墳群Ⅱ』 富士市教育委員会

大谷 宏治　2016a「擬似鋲表現のある鐙金具の特質」『静岡県考古学研究』47　静岡県考古学会
大谷 宏治　2016b「小型矩形立聞環状鏡板付轡について」『関西大学文学部考古学研究室設立六拾周年記念考古学論集』（刊行予定）
大谷 宏治　2016c「兵庫鎖立聞素環環状鏡板付轡の特質」『研究紀要』5　静岡県埋蔵文化財センター（刊行予定）
岡安 光彦　1984「環状鏡板付轡について」『日本古代文化研究』創刊号　PHALANX
岡安 光彦　1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』2　PHALANX
岡安 光彦　1986「馬具副葬古墳と東国舎人騎兵」『考古学雑誌』71 巻 4 号　日本考古学会
岡安 光彦　1987「遺物編年の現段階　鏡板・杏葉の編年（1）」『古墳文化研究会研究発表・討論会発表要旨　関東・東北地方の群集墳－造営年代と歴史的意義』 PHALANX（古墳文化研究会 2010『日本古代文化研究』創刊号～ 3 号復刻・合本に所収）
小川 貴司編　1988『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』言叢社
菊地 芳朗　2010『古墳時代史の展開と東北社会』 大阪大学出版会
北山 峰生　1999「副葬された蛇行剣」『石ノ形古墳』 袋井市教育委員会
九州前方後円墳研究会　1999『九州における横穴式石室の導入と展開』
斎藤 弘　1986「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』vol.3　古墳時代研究会
佐久市　2013「協和山の神古墳群 1 号墳出土品保存修理完成」『広報佐久』平成 25 年 7 月号
杉山 和德　2010「間門松沢 1 号墳出土刃関双孔鉄剣について」『富士山・愛鷹山麓の古墳群』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木 一有　2008a「古墳時代の甲冑にみる伝統の認識」『王権と武器と信仰』 同成社
鈴木 一有　2008b「原分古墳出土馬具の時期と系譜」『原分古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木 一有　2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」『東日本の無袖石室』 雄山閣
清家 章　1996「副葬品と被葬者の性別」『雪野山古墳の研究』考察編　大阪大学考古学研究室
関 俊彦　1960「千葉県山武郡横山台出土の鉄剣の一資料」『立正考古』14　立正大学考古学研究会
関 義則・宮代 栄一　1987「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館紀要』14
滝沢 誠　2001「総括」『井田松江古墳群』 戸田村教育委員会
瀧瀬 芳之　1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号　PHALANX
瀧瀬 芳之・野中 仁　1995「埼玉県内出土象嵌遺物の研究」『研究紀要』12　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
高崎市観音塚考古資料館　2011『輝ける大刀』
田中 新史　1988「八窓鍔」『井上コレクション　弥生・古墳時代資料図録』 言叢社
土屋 長久　1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』
東海古墳文化研究会　2006『東海の馬具と飾大刀』
栃木県立博物館・栃木県文化振興事業団　1998『発掘された日本列島 '98　地域展示栃木をひらく－平成の発掘から－』
豊島 直博　2001「古墳時代後期における直刀の生産と流通」『考古学研究』48 巻 2 号　考古学研究会
豊島 直博　2014「日韓の刀・剣・鉾」『武器・武具と農工具・漁具』「日韓交渉の考古学－古墳時代－」研究会・国立釜山大学校博物館
豊島 直博　2015「九州南部における鉄鏃の地域性とその変化」『第 12 回古代武器研究会発表資料集』
奈良国立博物館　2014『第 66 回正倉院展』
西澤 正晴　2002「遠江・駿河における鉄製板鐔の変遷と展開」『研究紀要』9　静岡県埋蔵文化財調査研究所
西山 要一・山口 誠治ほか　1996「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究（一）」『青丘学術論集』9　韓国文化研究振興財団
橋本 達也編　2014『九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究』鹿児島大学総合博物館
橋本 英将　2013「装飾大刀」『古墳時代の考古学』4　副葬品の型式と編年
藤平 裕子　1998「塚原 29 号墳出土の鍔付き鉄剣」『研究紀要』8　君津郡市文化財センター
増田 精一　1960「埴輪馬にみる頭絡の結絡」『考古学雑誌』45 巻 1 号　日本考古学会
宮代 栄一　1997「古墳時代の面繋構造の復元－X 字脚辻金具はどこにつけられたか－」『HOMINIDS』Vol.1　CRA
宮代 栄一　1999「熊本県才園古墳出土遺物の研究」『人類史研究』11
宮代 栄一　2013「将軍山古墳出土の馬具とその馬装」『古代の豪族』埼玉県立さきたま史跡の博物館
宮代 栄一　2015「熊本県球磨郡多良木町赤坂古墳出土遺物の研究」『熊本古墳研究』6　熊本古墳研究会
森 幸彦　2005「福島県内出土の象嵌資料」『文化財と技術』4 工芸文化研究所
横田 義章　1985「古墳時代の象嵌文様―九州の諸例紹介を中心に―」『九州歴史資料館研究論集』10　九州歴史資料館

【報告書・県市町村史】
吾平町教育委員会　1998『中尾地下式横穴群』（鹿児島県）
吾平町教育委員会　2005『中尾遺跡Ⅳ』（鹿児島県）
厚木市　1993『厚木市史』古代資料編（1）
出雲市教育委員会　2003『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』13
糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会　1999『船来山古墳群』（岐阜県）
いわき市教育文化事業団　2011『八幡横穴群』 いわき市教育委員会
上田 舒・森 浩一他　1960『富本車塚古墳』
愛媛県埋蔵文化財調査センター　1984『四国縦貫自動車道関係埋

蔵文化財調査報告書』
大分県教育委員会　1973『飛山』
大分県教育委員会　1989『上ノ原横穴墓群Ⅰ』
大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団　2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究』
大阪府教育委員会　1990『陶邑Ⅶ』
大阪府埋蔵文化財協会　1993『上フジ遺跡Ⅲ・三田古墳』
大原町教育委員会　1995『川戸古墳群発掘調査報告書』（岡山県）
岡山県教育委員会　1999『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136
小山市　1981『小山市史』史料編・原始古代
橿原考古学研究所　1990『斑鳩藤ノ木古墳第1次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
橿原考古学研究所編　1988『寺口忍海古墳群』
橿原考古学研究所　1995『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
君津郡市文化財センター　2002『中尾遺跡群Ⅱ』
京都府埋蔵文化財調査研究センター　2011『京都府遺跡調査報告集』127
熊本県教育委員会　1987『オブサン古墳修復整備工事報告書』
更埴市教育委員会　1992『史跡森将軍塚古墳』
佐賀県教育委員会　1983『西原遺跡』
佐賀県教育委員会　1984『東多久バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010a『合代島丘陵の古墳群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010b『富士山・愛鷹山麓の古墳群』
島根県教育委員会　1983『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』
上寺山古墳研究会　2015『上寺山古墳の研究』
市立市川博物館　1976『法皇塚古墳』
高岡市教育委員会　1998『江道横穴墓群調査報告』
高崎市　1999『新編高崎市史』資料編1　原始古代1
竹並遺跡調査会　1979『竹並遺跡』寧楽社
多治見市教育委員会　1996『虎渓山1号古墳発掘調査報告書』
千葉県　2003『千葉県の歴史』資料編　考古2
千葉県教育振興財団　2006『千葉東南部ニュータウン35』
千葉県教育振興財団　2008『千葉東南部ニュータウン38』
東京国立博物館　1986『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（関東Ⅲ）
東伯町教育委員会　1979『大法3号墳（三塚ノ谷古墳）発掘調査報告書』
筑紫野市文化財調査室　1972『阿志岐シメノグチ遺跡』
長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター　1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』21
長野県史刊行会　1988『長野県史』考古資料編全1巻（4）遺構・遺物　長野県
羽曳野市教育委員会　1985『古市遺跡群Ⅵ』
日田市教育委員会　1986『ガランドヤ古墳群』
兵庫県教育委員会　1993『箱塚古墳群』
枚方市文化財研究調査会『文化財だより』44号
平塚市　1999『平塚市史』11上　別編　考古（1）
広島県教育事業団　2015『長畑山北第1～6号古墳』
南河内町　1992『南河内町史』史料編1　考古
宮城県教育委員会・仙台市教育委員会ほか　1990『大年寺山横穴群』
宮崎県埋蔵文化財センター　2000『木城村古墳27号・60号横穴墓』
宮崎県埋蔵文化財センター　2003『瀬戸前1号横穴墓　瓜生野村古墳30号（横穴墓）』
八尾市文化財調査研究会　1995『大石古墳』
八頭町教育委員会　2014『福本70号墳発掘調査報告書』（鳥取県）

※紙幅の関係で、参照した報告書の大部分を省略いたしました。御容赦ください。

図の出典

第185図　富士市教育委員会作成。
第186・189図　筆者作成。第14・15表文献より引用。
第187・188・190～192図　筆者作成。富士市教育委員会清書。

第７節　中原４号墳出土鉄鏃について

菊池 吉修

はじめに

中原古墳群では、３号墳、４号墳、６号墳から鉄鏃が出土している。東駿河における後期古墳の出土品として鉄鏃はけっして珍しいものではない。しかし、多くの場合、１基あたりの鉄鏃出土数は 10 数本以下であるなか（第 16 表）、４号墳からは 100 本を超える鉄鏃が出土していることは注目に値しよう。古墳時代を通し、駿河・伊豆では、１基あたりの最多出土量である。そこで、ここでは中原４号墳出土の鉄鏃についてまとめるとともに、鉄鏃から読み取れる古墳の位置づけ等を考えてみる。

１　東駿河の鉄鏃研究

古墳時代の鉄鏃研究は後藤守一、末永雅雄の研究（後藤 1939、末永 1941）を端緒とし、地域的な研究を経て、後藤の研究を継承的に発展させた杉山宏一による分類・編年の提示により研究の一到達点が示された（杉山 1988）。その後、研究視点の多様化が進むとともに、地域的研究及び広域対象の研究は更に深化し、再整理された基準による分類方法も示されている（水野 2007 他）。

東駿河の鉄鏃は、まず広域研究の中で地域的特性として五角形式鉄鏃の分布が注目されてきた（杉山 1988・水野 1995）、その後、静岡県下の古墳出土鉄鏃集成が行われる過程で地域的な様相がまとめられ（長谷川 2003、井鍋 2003）、更に、大谷宏治によりその特徴がより明確にされた（大谷 2004）。また、集成以後に刊行された報告書等においても議論が深められている（菊池 2008、大谷 2010、藤村 2011）。

これら一連の研究から、駿河東部における鉄鏃の特徴は、以下の様にまとめられる。なお、本稿では各部位の名称や分類、編年等は、大谷 2003 に準拠する。

①　多種少量の平根と少種多量の尖根の組合せが一般的（長谷川 2003、註 1）

②平根は五角形式の占める割合が高く、尖根の主流は三角形式、長三角形式、柳葉式、片刃箭式、鑿箭式（長谷川 2003）

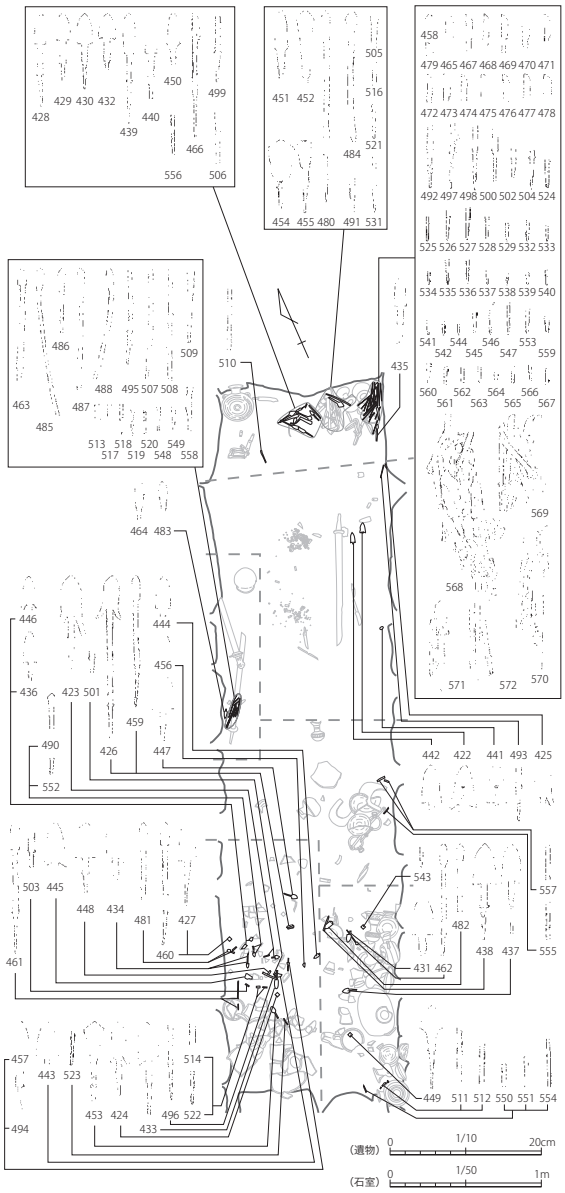
③出土鉄鏃の組み合わせから、五つの小地域が設定できる（井鍋 2003）。

２　出土位置と鏃構成

概要　中原４号墳には残存する鏃身部数等から 131 点以上の鉄鏃が副葬されていたといえる、このうち鏃身の形状が判明するものは平根が 43 本、尖根が 53 本である。

平根では、腸抉柳葉式が５点、長三角形式が 27 点、腸抉三角形式１点、五角形式３点、撫関三角形式３点、圭頭式３点、方頭式１点が出土している。

尖根は、柳葉式が７点、片刃箭式 34 点、鑿箭式が



第 193 図　鉄鏃出土状況

13点出土している。

出土量もさることながら、平根鏃の多様性も特徴の一であり、多種多量の平根と小種多量の尖根を持つ古墳といえる。ただし、出土位置からは複数の鏃群に分けることができ、各鏃群の鏃構成は一様ではない。そこで、次に出土位置別の状況を概観する。

Aエリア　錆着した鏃束を含め鏃身形態が把握できるものが60点出土している（第195図）。4号墳中最もまとまった出土量であり、4号墳の中心的な被葬者に伴う副葬鏃群と理解される。

このうち、平根は21点が確認でき、長三角形式15点、圭頭式2点、方頭式1点、撫関三角形式2点、五角形式1点である。5種に大別したが、長三角形式は錆着して出土した8点（568）は形状・法量とも規格性の高さがうかがえるものの、そのほかのものは、断面形状や、腸抉の有無、フクラの張り具合、茎関の形状などの細部の違いが多岐にわたる。また、圭頭式の2点も全くの同一形状とはいえず、Aエリアの平根は多種多量の構成といえよう。

尖根は39点出土しており、このうち34点が片刃箭式、4点が鑿箭式、1点が柳葉式である。片刃箭式の主体は、鏃身長が2.9～3.2cm、鏃身関が角関あるいは極浅い腸抉、茎関が棘関となるものであるが、例外的に刃部断ち落しのものが1点、深い逆刺を持ち茎関が角関となるものが1点混ざる。鑿箭式のうち2点は錆着し詳細を把握できないが、残る2点はそれぞれ鏃身部の形状が異なる。Aエリアの尖根は、規格性の高い片刃箭式鏃群に少数の異なった形状の鏃が加わる構成といえる。

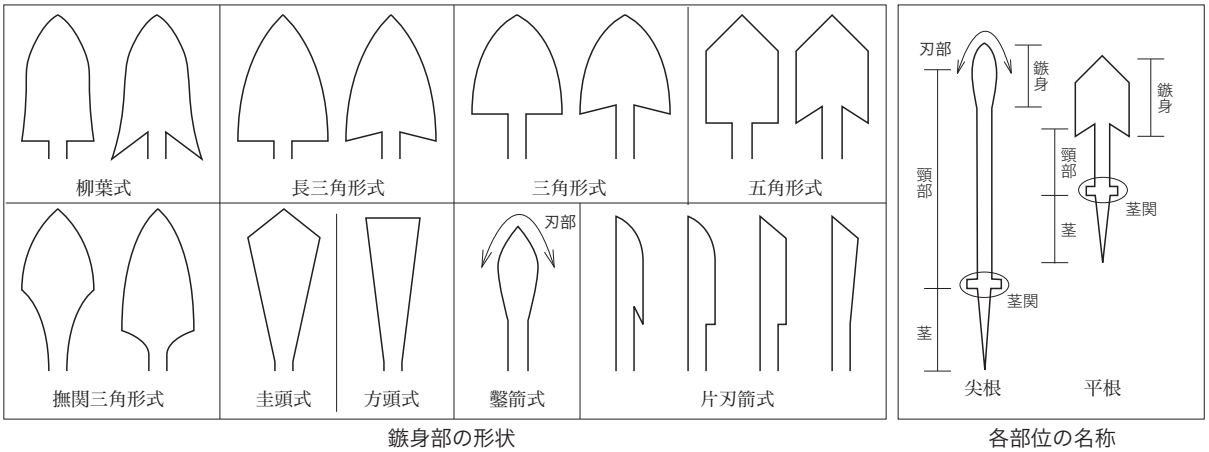
以上より、Aエリアは多種多量の平根系鏃群と小種多量の尖根系鏃群の構成といえる。ただし、全点が一括の束であったのか、複数の束であったのかは判然としない。なお、Aエリアでは茎関が台形関・角関の鏃と棘関の鏃が混在する。ただし、角関の平根柳葉式と棘関の尖根片刃箭式が錆着して出土しているため、棘関の鏃束と角関の鏃束が別個にあったとは考え難い。また、平根鏃は鏃身と頸部を合わせた長さにより長（428・439・451・452・571）、 短（429・430・432・435・340・454・455・568）の2群に区分できる。それぞれで一群を成していた可能性はあるものの、推測の域を出るものではない。

Bエリア　Bエリアでは4点の平根が出土した。うち2点は短茎鏃で、1点は方形、もう1点は円形の穿孔を持つ。残る2点の平根は、1点が重抉の腸抉柳葉式、もう1点は角関長三角形式である。なお、このほかにも鏃身形状不明な破片が1点出土している。

以上、Bエリアは細部形状の異なる平根鏃のみで構成される鏃群であるといえる。

Cエリア　Cエリアでは鏃身形状が把握できた7点はいずれも、尖根のみであった。このうち5点が鑿箭式、2点が柳葉式である。鑿箭式のうち3点の鏃身は平造りであるが、486と487は頸部から刃部に向け緩やかに幅を広げるタイプである。一方、485は鏃身幅が頸部幅の3倍近くあり、前2者とは異なった印象を受ける。鑿箭式の残る2点の鏃身は、488が片丸造り、483は片鎬造りである。

Cエリアは細差を持つ小種の尖根で構成される鏃群と



第194図　鉄鏃名称・各部位

いえる。なお、Cエリアでは鏃身数以上の頸部～茎又は茎のみの破片も13点出土しており、本来的な副葬鏃数は7点以上であったと推測される。

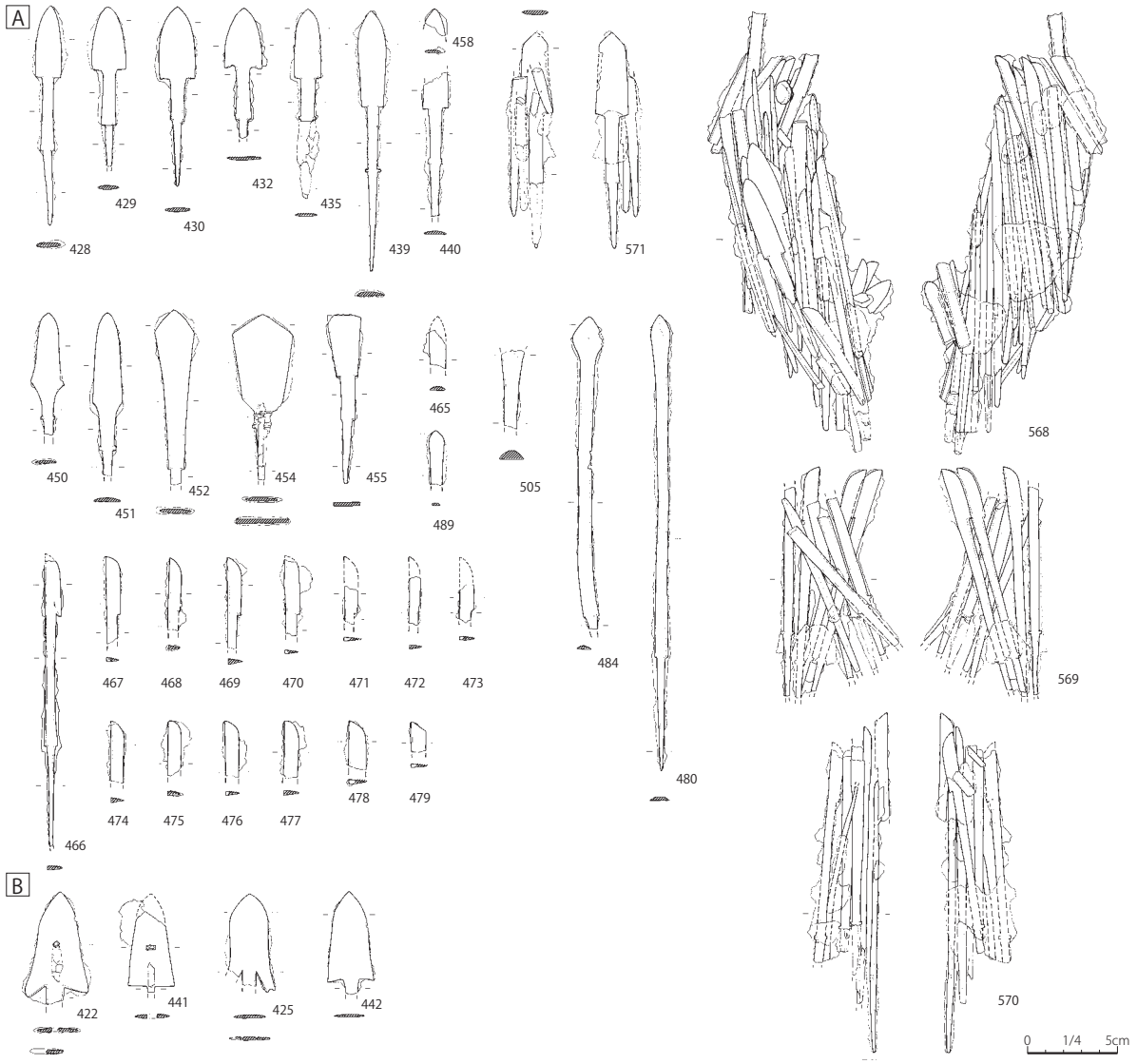
Dエリア　Dエリアでは、頸部の破片が2点出土しているが、鏃身形状は不明である。

Eエリア　Eエリアでは、4点の平根と2本の尖根が出土している。平根のうち2点はフクラの張る腸抉長三角形式、1点は角関長三角形式、1点は駿河では類例が少ない撫関三角形式鏃である。フクラの張る腸抉三角形式は形状および法量が近似する。角関長三角形式鏃は、Eエリア出土の他の平根と異なり、茎関が角関である。

尖根は角関柳葉式と鑿箭式が1点ずつであり、統一感を欠く鏃群という印象を受ける。なお、頸部のみの破片や茎のみの破片も出土していることから、更に数点の鏃がEエリアに副葬されたいたことがうかがえる。

Fエリア　鏃身形状がうかがえるものが19点出土しており、出土数はAエリアに次ぐ。このうち、14点が平根、5点が尖根である。尖根は、角関長三角形式と鑿箭式の2種に限られる。

平根は長三角形式7点、腸抉柳葉式3点、五角形式2点、腸抉長三角形式1点、圭頭式1点に加え形状が特定できないものの平根鏃とみられる破片も2点出土している。腸抉長三角形式と圭頭式を除く形態は複数本が出土しているが、それぞれ細部に差異を持つ。まず、腸抉柳葉式は2点が重抉、残る1点は他2点に比べ長頸化が著しいという違いがある。長三角形式では、腸抉を持ちフクラの張るもの2点（433・434）、フクラが張らないもの（445）、浅い腸抉のもの2点（436、444）、角関のもの2点（427、443）に細別できる。また、2点の五角形式も茎関が棘状と角状という違いがある。

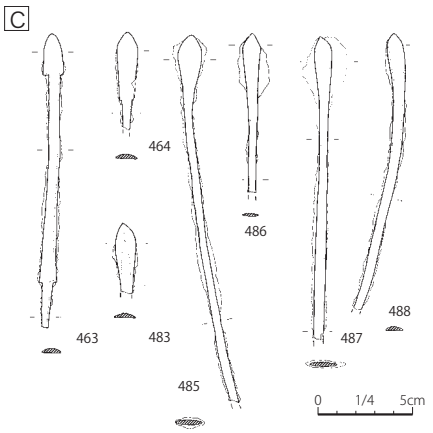


第195図　A・B群出土鉄鏃（初葬鏃）

3　出土鏃の形態と時期

(1) 特徴的な形態の鏃

先述のとおり４号墳からは、多様な平根が出土した。このうち、方頭式（Aエリア）、圭頭式（A・Fエリア）、撫関三角形式（A・Eエリア）は東駿河では古墳時代全体を通しても類例が限られ、腸抉柳葉式（B・Fエリア）に至っては周辺に類例が看取できない形態である。それぞれ、分布の偏在性が指摘される形態の鏃であり、方頭式は圭頭式と共に瀬戸内～九州に分布の中心、撫関三角形鏃は主に畿内～西日本に分布し（杉山 1988、尾上 1993、水野 1995）、東海では伊賀・伊勢・三河・遠江に分布する傾向が指摘されている（大谷 2004）。また、腸抉柳葉は駿河・甲斐では少なく、東海西部に偏在する傾向が指摘されており（大谷 2004）、重抉の近似例としては愛知県北長尾３号墳等があげられる。



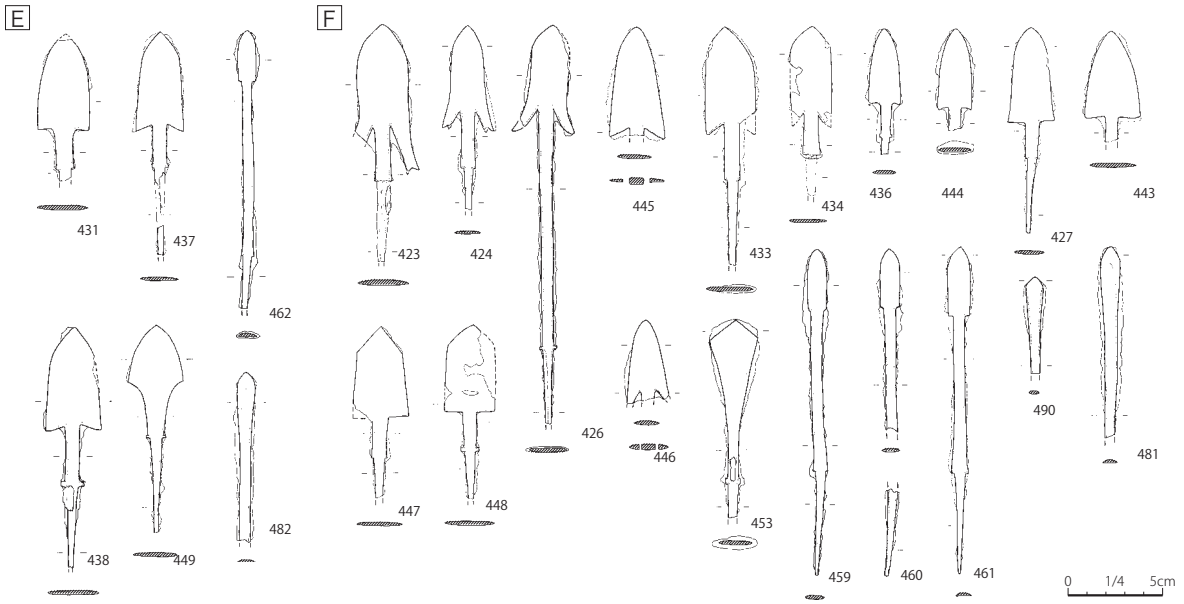
第 196 図　C 群出土鉄鏃（追葬鏃）

その一方で、長三角形、三角形、五角形は東駿河における平根の主体的な形態と指摘されており（長谷川 2003）、中でも長三角形は古墳時代後期における東海・甲信地方の主要形態、三角形式は東海東部と甲信地方で多く出土する形態といわれている（大谷 2004）。

また、中原４号墳からは短頸鏃も出土しているが、古墳時代後期における無頸・短頸鏃の分布圏は静岡県以東の東日本と指摘されるとおり（水野 1995）、東駿河では短茎鏃が一定量出土している。なお、尖根は大きく３種に区分できるが、鑿箭、片刃箭、柳葉式のいずれも東駿河では一般的な形態と言える。

以上より、中原４号墳出土の鉄鏃は、東駿河における一般的な形態に（第 198 図）、西日本及び東海西部以西に分布の中心を持つ形態の鏃が複数本加わることで、平根の多様性が形成されているといえる。さらに、ここでは中原４号墳出土鉄鏃の多様性を特徴づけるものとして、分布の中心が西日本にある鏃形態といわれる方頭式と圭頭式に注目したい。

方頭式　方頭式は東駿河の主流形態ではないが、７世紀代には一定量が出土している（大谷 2004）。しかしながら、中原４号墳出土例は鏃身関と茎関をもち鏃身、頸部、茎が角関により区分されているという特徴があり、当地域では類例を看取できない。視野を分布の中心といわれる西日本に転ずると、福岡県川島５号墳や岡山県岩田 14 号墳、福岡県下渕名子 11 号墳出土鏃の中に比較的類似する形態がみられる（第 199 図）。



第 197 図　E・F 群出土鉄鏃（初葬・追葬混在）

東駿河における方頭式は鏃構成の主要形態とはならない散発的な出土で、形状的統一性もうかがえないことから、中原４号墳出土の方頭式を含め東駿河の方頭式は、西日本とのつながりによりもたらされたものと理解したい。ただし、製品自体の搬入か、情報伝播による在地生産であるのかは特定しがたい。

圭頭式　圭頭式は、東駿河では古墳時代をとおして見られず、近隣では７世紀末葉の伊豆の横穴で１例が出土しているのみである。遠江では後期古墳から数例の出土が確認できるが、中原４号墳のような棘関のもの（453）や鏃身幅が著しく広いもの（454）は見られない。

中原４号墳では平根、尖根の両者で棘状の茎関を持つものが確認できる。他の鏃と並び製作される過程で、圭頭式にも棘関が取り入れられた可能性がある。ただし、圭頭式は東海東部では、TK43 型式期ではほぼ副葬されなくなり、畿内を経ない西日本との交流を見出すには良好な資料とも指摘されている（大谷 2004）。西日本においては、岡山県川戸２号墳や、同県段林古墳、徳島県山田Ａ２号墳、大分県飛山８号横穴等に棘関を持つ圭頭式の類例を求める事ができる。方頭式と同様に西日本との関連性をもつものと理解したい。

いっぽうで、著しく幅が広い圭頭式は、類例は見出し難い。福岡県東田 20 号墳、大分県羽野２号横穴、福岡県極楽寺３号墳例などが比較的近い例といえるであろうか。

ここでは圭頭式に分類したが、中原４号墳出土例のものは、一般的な圭頭式とは異なり頸部を持つ。しかしながら、頸部には木質が付着し矢柄に呑み込まれていたことがうかがえる。頸部を持つ鉄鏃の同様の装着方法は沼津市秋葉林１号墳の飛燕式鉄鏃で見られ、新来型式の鏃が伝統的な無頸・短頸式と同様の装着方法を採る背景に、鏃がもつ祭祀的側面が見出されている（大谷 2010）。なお、三島市小平Ｂ１号墳からは、鏃身幅が広くフクラが強調された鉄鏃が出土している。小平Ｂ１号墳例は柳葉式の鏃身部を広大化することで儀器としての鉄鏃を強く示したものと理解できるが、中原４号墳出土例も圭頭式が柳葉式等の他の形態の影響を受けながら、伝統的な手法で矢柄に装着することで、「平根」の儀器的側面を強く意識した鉄鏃と解釈したい。

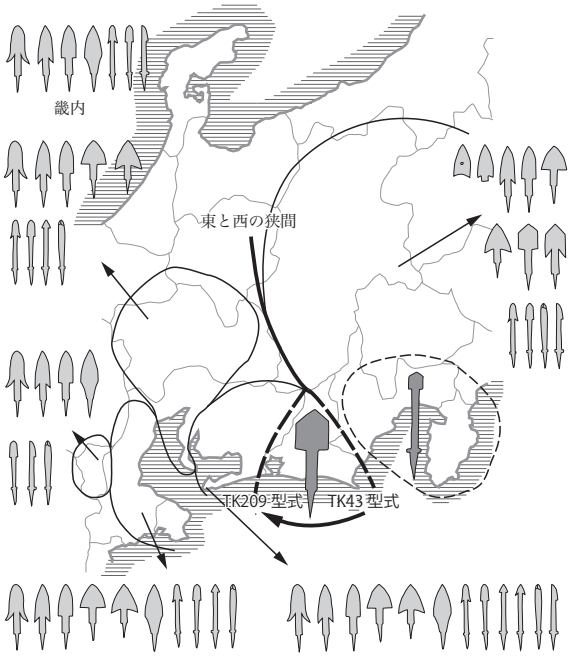
（2）形態別時期

中原４号墳出土鏃は、平根、尖根とも「TK43 ～ 209 型式期に駿河・遠江から姿を消すあるいは出土量が減じるもの」、「新たに出現するもの」、「古墳時代後期を通じて見られるもの」の３者が混在する（註 2）。

まず平根では、圭頭式が TK43 型式期、撫関三角形式が TK43 ～ 209 型式期で駿河・遠江からほぼ姿を消す形態である（註 3）。ただし、棘関の圭頭式は TK43 ～ TK209 型式期の所産とされ（水野 1995）、類例に掲げた古墳も概ねこの時期のものであることから、角関の圭頭式は TK43 型式以前、棘関の圭頭式は TK43 ～ TK209 型式期に位置づけたい。撫関三角形式は、いずれも棘状の茎関であるため、この形態の最終段階のものと考えられ、鏃身部が三角形のものが TK43 型式期、長三角形のものが TK43 ～ 209 型式期に位置づけられよう。

一方、五角形式はこの時期に出現する形態である。ただし、中原４号墳例は鏃身関に対しフクラの幅が狭いという五角形式の初現段階の特徴を持つことから TK43 ～ 209 型式期のものと考えられる。

長三角形式は、東駿河では古墳時代後期を通じて見られる形態であるため、時期は特定し難い。ただし、棘関のものみられることから上限は TK43 型式期といえ、TK217 型式期以降は出土例が減少することが指摘されていることから、TK43 ～ 209 型式期の慨然性が高い。短頸式も駿河・遠江では TK217 型式期まで残る形態であり帰属時期を特定し難いが、東駿河での出土例は



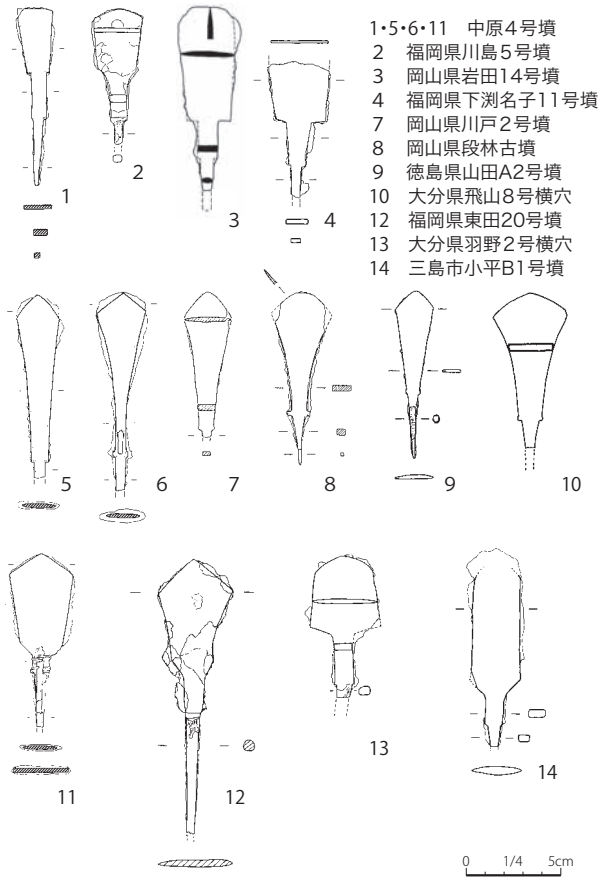
第 198 図　古墳時代後期前半　鉄鏃の地域色（東海・甲信）

TK43 ～ 209 型式期に多いことから、この時期の所産と考えたい。

なお、方頭式は例示した川島 5 号墳が初葬は TK43 型式期、岩田 14 号墳が 6 世紀中葉～後葉、下渕名 11 号墳は 7 世紀後半であるため、TK43 型式期以降の所産と考えられる。腸抉柳葉式は出土例が減少する TK209 型式期以前のものと考えられるが、長頸化したものは時期を違える可能性がある。

尖根は、この時期以降に現れるものとして、茎関が棘関となる片刃箭鏃と、刃部裁ち落としの鑿箭鏃が上げられる。一方で、茎関が台形関・角関のものはこの時期以降、著しく数を減じる。

柳葉式は確認可能な茎関は全て台形関又は角関であることから TK43 ～ TK209 型式期以前、片刃箭式の主体となる鏃身関が角関又は極浅い逆刺を持つものは TK43 形式期以降、鑿箭式は TK43 ～ 209 型式以前のものと以降のものが混在するといえる。なお。深い腸抉を持つ片刃箭式は MT15 ～ TK10 型式期あるいは更に 1 段階古い時期の可能性が考えられる。



第 199 図　方頭と圭頭鏃

(3) 副葬時期

では、次に出土位置別の時期と副葬時期について検討したい。

初葬に伴うと考えられるのは、AエリアとBエリアの鏃である。Aエリアは茎関が台形関・角関のものと棘関のものが混在している一方で、角関の圭頭式や腸抉が明瞭な片刃箭式など古相の鏃が含まれることから、TK43 型式期に収まるものと考えられる。ただし、平根における棘関の採用は尖根よりも遅いといわれていることや(関 1986)、五角形式が含まれていることを勘案すると TK43 型式期の中でもやや新しい時期の可能性がある。

Bエリアは､出土鏃からは時期を特定し難い。ただし、供伴する大刀がCエリア出土の大刀より古いことから、Bエリアの鉄鏃は初葬に伴うもので、Aエリアと同時期のものと考えたい。なお、Bエリアは平根のみで構成されており、意図的に他の鏃束とは異なった扱いをされていたものとみられる。

追葬に伴うと考えられるのは、Cエリアの鏃束である。CエリアもBエリアと同様に大刀と共に出土しているが、供伴する大刀がBエリアより後出するものであることと、Aエリアの鑿箭式に比べ後出的要素である端刃造りのものが含まれることから、CエリアはA・Bエリアより新しい時期の被葬者に伴うものと考えられる。時期としては端刃造りの鑿箭式は TK209 型式期以降に多くなる傾向があることから TK209 型式期と理解したい。

のこるD～Fエリアは、初葬、追葬の別を出土鏃から判断することは難しい。ただし、FエリアにはCエリアと同様の端刃造りの鑿箭鏃が含まれることから、追葬に伴う鏃が含まれている可能性がある。しかし、その一方でBエリアと共通する腸抉柳葉式鏃もFエリアでは出土しており、Bエリア出土の腸抉柳葉式鏃とFエリア出土の腸抉柳葉式長頸鏃は逆刺部の形状はことなるが、鏃身部の法量は極めて近いことから、Fエリアには初葬に伴う副葬鏃も含まれると考えられる。

なお、Aエリアの平根を見ると、鏃身形態は同じでも、細部をそれぞれ違えているものや（428 ～ 430、432)、大形のものと小形のものが組み合わされていることがうかがえる（435 と 439、450 と 451)。初葬の副葬鏃においては、細部を違えた鏃の組合せを志向していると考えるのであれば、Fエリア出土の棘関の圭頭式は、Aエリア出土の角関の圭頭式と組み合うもの、五角形鏃の

447 と 448 は茎関の形状を違えた組合せ、腸抉長三角形式の 433 と 434、腸抉柳葉式の 423 と 424 はそれぞれ大小の組合せと言え、初葬に伴うものの可能性が考えられる。

ＥエリアはＦエリアと同タイプの尖根が出土していることから､尖根はＦエリアと同時期のものと考えられる。一方、腸抉長三角形式の 437 と 438 を大小の組合せとみるのであれば、平根の中には初葬に伴うものが含まれる可能性がある。

4　鉄鏃からみた中原４号墳

(1) 東駿河の鉄鏃出土古墳

ここで、あらためて、東駿河における鉄鏃の出土傾向を概観したい。

東駿河及び伊豆において発掘調査が行われた古墳は 200 基を越えるが、鉄鏃が出土したのは、このうち 108 基である。概ね半数の古墳が鉄鏃を保有するといえる。なお、横穴は 300 基余りの計測が行われ、このうち約 140 基が図化されているが、鉄鏃出土が確認されているのは、14 基に過ぎない。遺存状況や調査状況の違いもあるため断定するものではないが、横穴は石室墳とは鉄鏃出土傾向が異なる可能性が高いとみられるため、ここでは横穴を除いて考えることにする。

まず、東駿河において 1 基辺りの鉄鏃出土量は、10 点以下の古墳が全体の半数以上を占め、10 本を越えると振幅を繰り返しながら漸移的に数を減じ、20 点を越えるものは 22 基である。20 点を超えると古墳数は断続的な分布となり、30 点を越える古墳は 1 割程度となる（第 201 図)。

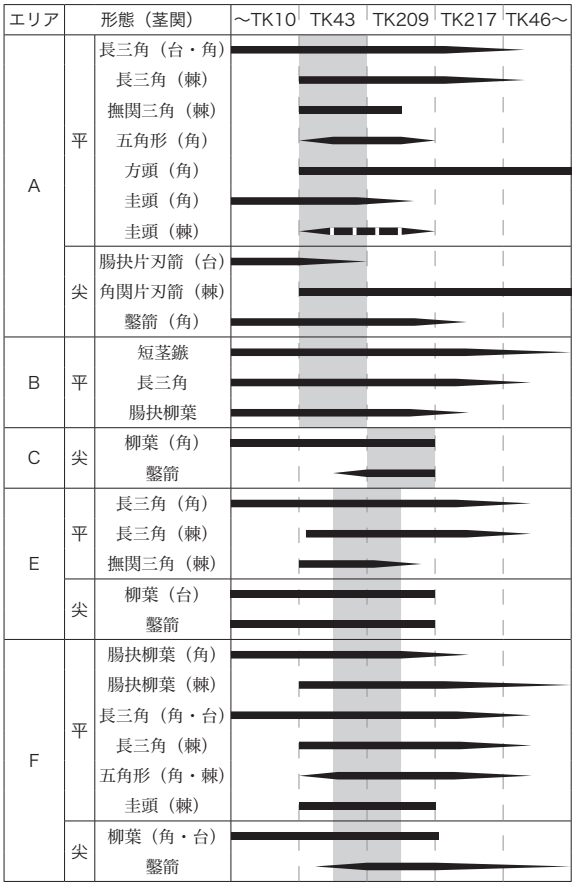
岩原は東海地方では 20 点以上を副葬する古墳は階層が高いことを指摘し（岩原 2001)、大谷も 20 点以上副葬する古墳は古墳時代終末期に至るまで階層的に上位であることを追認している（大谷 2003)。20 点を越える鉄鏃を出土した古墳は注目すべき鉄鏃多量副葬古墳と捉えて差し支えないであろう。この観点からみると、中原 3 号墳、4 号墳は鉄鏃多量副葬古墳といえる。特に 4 号墳はＡエリアだけでも特筆に値する出土量である。

ここで、東駿河における鉄鏃出土古墳の埋葬施設の規模を見ると（第 203 図)、平均規模は約 6.1㎡であり、床面積が 9.0 ～ 10.5㎡に一定程度のまとまりを示すグループがあるが、9.0㎡以上は隔絶した規模の古墳と見なすことができよう。

次に、埋葬施設の規模と鉄鏃出土本数を対比すると（第 204 図)、面積と出土本数は比例していないことがいえる。むしろ、鉄鏃多量副葬古墳は、埋葬施設の規模としては平均的な古墳でみられる。ただし、各氏により指摘されるとおり（岩原 2001、井鍋 2003、大谷 203) 鉄鏃多量副葬古墳では、飾大刀や馬具等を伴っており、副葬品からは階層的上位の被葬者をうかがうことができる。

ところで、東駿河における鉄鏃の多量副葬については多種多量タイプ（谷津原 6 号墳)、同種多量タイプ（清水柳北 3 号墳）があり、それぞれが鉄鏃の流通経路を掌握していたと指摘される（井鍋 2003)。中原 3 号墳は同種多量タイプ、4 号墳もＡエリアに注目するのであれば、同種多量タイプといえる。また、西日本においては 30 点以上を副葬する古墳と鍛冶関連遺跡との関連性が言及されている（尾上 1993)。

ここで、鉄鏃多量副葬古墳の所在地区と時期、そして規格性をみると、1 ～ 4 のいずれの地区においても、1 期と 2 期では同数程度の鉄鏃多量副葬古墳が存在する



第 200 図　鉄鏃時期

第 16 表　東駿河・伊豆の鉄鏃出土古墳

	古墳名	地域	鉄鏃数			鏃構成率		時期	墳丘規模	石室面積	大刀	馬具	弓具
			総数	平根	尖根	平根	尖根						
1	室ノ坂 A1-2	1	7	1	6	14%	86%	3		2.15			
2	室ノ坂 B1-2	1	4	0	4	0%	100%	3		2.12	○		
3	室ノ坂 E1-1	1	1	1	0	100%	0%	3		1.24			
4	室ノ坂 E2-1	1	6	1	4	17%	67%	3	8.0	1.89	●		
5	室ノ坂 A3-1	1	1	0	1	0%	100%	3			○		
6	室ノ坂 D3-1	1	2	0	2	0%	100%	3	12.7	4.24			
7	室ノ坂 B4	1	32	0	32	0%	100%	3	10.0	6.43	●		
8	室ノ坂 D4-1	1	1	0	1	0%	100%	3	5.8	6.50			
9	山王 J4-2	1	16	0	13	0%	81%	4		3.10			
10	山王 N4-2	1	1	0	1	0%	100%	4		4.04			
11	妙見 I2	1	24	4	12	17%	50%	3		1.73			
12	妙見 F0	1	2	0	0	0%	0%	3		1.58	○		
13	妙見 F1	1	12	1	11	8%	92%	3		2.84	●		
14	谷津原 2	1	25	1	24	4%	96%	2	9.0	7.54	○		
15	谷津原 6	1	57	26	31	46%	54%	1	17.0		○		
16	谷津原 7	1	29	3	26	10%	90%	1～2		9.35		○	胡
17	谷津原 8	1	14	0	14	0%	100%	2		10.38	●		
18	谷津原 12	1	14	10	4	71%	29%	2～3		5.25			両
19	谷津原 15	1	12	6	6	50%	50%	2		3.16			両
20	谷津原 16	1	14	2	12	14%	86%	1		4.13	●		
21	谷津原 17	1	26	3	23	12%	88%	2	9.4	6.46	●		
22	中原 3	2	31	6	25	19%	81%	1	7.5	3.49	○		
23	中原 4	2	131	43	54	33%	41%	1	11.0	5.29	●	●	
24	中原 6	2	18	0	9	0%	50%	3			○	○	
25	中村上 1	2	3	3	0	100%	0%	2		4.77			
26	東平 1	2	12	5	7	42%	58%	2	13.0	6.89	●	●	
27	土手内 1	2	9	0	9	0%	100%	3		7.20			
28	横沢	2	19	7	12	37%	63%	1	16.0	19.09		●	
29	国久保	2	55	3	50	5%	91%	2	8.0	5.05	●	○	
30	大坂上	2	13	4	9	31%	69%	2	17.0	15.78	●		両
31	比奈 G74	2	7	5	2	71%	29%	1～2	7.0	7.49	●		
32	かぐや姫	2	20	17	3	85%	15%	2	15.0	10.46		○	
33	赫夜姫 2	2	1	1	0	100%	0%	3		3.87			
34	花川戸 1	2	2	1	1	50%	50%	2	9.6	4.53			
35	花川戸 3	2	2	0	2	0%	100%	3		3.67	○		
36	富士岡 F22	2	20	4	13	20%	65%	3		7.98			
37	間門 E6	2	3	0	3	0%	100%	1		4.95	○	○	
38	大塚団地 2	2	1	1	0	100%	0%	3		6.25			
39	須津 J6	3	15	0	15	0%	100%	1	13.0	7.80	●	○	
40	須津 J159	3	19	11	8	58%	42%	2	9.8	6.65	●	○	両
41	中里大久保	3	44	2	28	5%	64%	2	12.0	9.00	●	○	
42	中里 K-97	3	3	1	2	33%	67%	1			○		
43	中里 K-98	3	16	1	7	6%	44%	1			○	○	
44	中里 K-99	3	13	3	10	23%	77%	1			○	○	
45	船津寺ノ上 1	3	25	2	23	8%	92%	1	22.5	15.75	○		
46	船津 L-62	3	29	9	20	31%	69%	2		9.50	●	●	両
47	船津 L-206	3	7	0	6	0%	86%	1		4.43	○		
48	船津 L-208	3	2	1	1	50%	50%	2	8.0	5.20			
49	船津 L-209	3	7	4	3	57%	43%	2	9.0	3.24	○	●	
50	船津 L-210	3	2	0	2	0%	100%	2	7.9	4.12	○		
51	船津 L-211	3	3	0	3	0%	100%	3	10.0	4.75			両
52	船津 L-212	3	12	1	11	8%	92%	1～2	12.1	6.96	○		
53	船津 L-214	3	18	0	3	0%	17%	2	4.3	1.17	○		
54	船津 L-117	3	6	2	5	33%	83%	1～2	9.0	4.16			
55	石川 2	3	11	2	9	18%	82%	2	8.0	5.72	○	○	
56	石川 6	3	26	7	19	27%	73%	1	7.0	2.85	○		
57	石川 10	3	3	1	2	33%	67%	4	8.0	3.69	○		両
58	石川 11	3	6	2	4	33%	67%	2	7.5	4.40			
59	石川 12	3	1	0	1	0%	100%	4	6.5	2.52			
60	石川 17	3	4	0	1	0%	25%	4	8.0	3.90			
61	石川 15	3	5	2	3	40%	60%	1		3.78	○		両
62	石川 22	3	4	4	0	100%	0%	2	5.0	1.76			
63	石川 26	3	1	1	0	100%	0%	4	6.0	3.00			
64	石川 29	3	2	0	0	0%	0%	3					
65	石川 78	3	6	0	3	0%	50%	1～2		5.76			
66	石川 98	3	8	0	6	0%	75%	1～2		3.86	○		
67	石川 119	3	20	13	7	65%	35%	2		6.49	●	●	
68	平沼吹上 1	3	2	1	1	50%	50%	1	18.0	12.05	○		
69	平沼吹上 2	3	14	0	14	0%	100%	1	15.0	6.66	●		両
70	井出	3	9	6	3	67%	33%	1～2	10.5	6.63		●	
71	段崎	3	6	0	0	0%	0%	3		2.85	○		
72	秋葉林 1	3	31	5	19	16%	61%	1～2	9.0	5.99	●		両
73	東原 1	3	17	0	17	0%	100%	1～2	15.0	12.96	○	○	
74	東原 2	3	7	0	7	0%	100%	1～2	13.3	6.67		○	
75	東原 5	3	33	0	33	0%	100%	1～2	20.0	5.61	○		
76	清水柳北 2	3	36	0	36	0%	100%	1	8.9	6.36	○		
77	清水柳北 3	3	41	0	41	0%	100%	1	8.5	4.94	○		
78	本宿上ノ段 1	4	4	4	0	100%	0%	1	13.7	5.33	○		
79	本宿上ノ段 2	4	4	2	2	50%	50%	1	13.4	9.36	○	●	
80	下土狩西 1	4	11	5	6	45%	55%	2		16.00	●	○	
81	原分	4	43	3	38	7%	88%	2	17.0	12.75	●	●	
82	上出口 1	4	12	5	4	42%	33%	1		4.05	○	○	
83	生茨沢	5	6	1	5	17%	83%	1	9.0	6.47	○		
84	夏梅木 6	5	14	4	10	29%	71%	2	11.1	9.26	●	○	両
85	夏梅木 8	5	2	0	2	0%	100%	2		5.54	○		
86	夏梅木 9	5	9	0	9	0%	100%	2	11.0	9.44	○		
87	夏梅木 16	5	1	0	1	0%	100%	2	12.0	6.60	●		
88	小平 B1	5	13	3	10	23%	77%	1	14.0	6.76			
89	赤王山 1	5	6	0	4	0%	67%	2	10.5	5.58	○		
90	赤王山 2	5	6	0	6	0%	100%	1～2	13.0	4.56	●		
91	田頭山 1	5	10	0	10	0%	100%	2	10.8	4.35	○		
92	田頭山 2	5	2	0	2	0%	100%	2	8.8	1.99	○		
93	田頭山 3	5	5	4	1	80%	20%	1	11.0	5.31	●		両
94	柏谷 102	5	8	0	8	0%	100%	2		6.00	○	○	
95	柏谷 103	5	1	0	1	0%	100%	3		5.70			
96	柏谷 104	5	8	4	4	50%	50%	3		3.70	○		
97	柏谷 122	5	1	0	1	0%	100%	3		4.90			
98	柏谷 125	5	9	0	9	0%	100%	1		6.00			
99	柏谷 126	5	1	0	1	0%	100%	2		2.20		○	
100	柏谷 D15	5	1	0	1	0%	100%	3		3.00		○	
101	柏谷 D24	5	1	0	1	0%	100%	4		3.45	○		
102	日守中里 11	6	1	0	1	0%	100%	4		4.80			
103	大北 1	6	1	1	0	100%	0%	3		9.30			
104	大北 23-2	6	1	1	0	100%	0%	3		0.70	●		
105	大北 34	6	1	1	0	100%	0%	3		2.70			
106	大北 36	6	1	1	0	100%	0%	3		2.10			
107	大北 37	6	1	1	0	100%	0%	3		2.20			
108	天神洞 1	6	12	0	12	0%	100%	1		5.60	○		
109	天神洞 3	6	2	2	0	100%	0%	1		6.72	○		
110	天神洞 4	6	7	0	7	0%	100%	2		5.52	○		
111	大平小山	6	10	3	7	30%	70%	1		6.50	○		
112	芋ヶ窪 1	6	6	2	4	33%	67%	1		9.45	○		
113	芋ヶ窪 2	6	6	0	6	0%	100%	2		10.46	○	●	
114	芋ヶ窪 5	6	1	0	1	0%	100%	1		5.07			
115	芋ヶ窪 6	6	3	1	1	33%	33%	1	8.0	3.31			
116	平石 4	6	18	11	7	61%	39%	3	12.2	10.43	○		
117	花ヶ崎	6	2	2	0	100%	0%	1	30.0	9.12	○		
118	富士見夫婦塚	6	3	2	0	67%	0%	2	14.5	7.95			
119	平沢 1	6	37	12	25	32%	68%	1			○	○	胡
120	別所 1	6	3	1	0	33%	0%	2	13.0	6.64	○		
121	別所 2	6	2	1	0	50%	0%	4		13.32	○		
122	井田松江 18	6	9	3	6	33%	67%	1～2	11.0	13.80	●		両
123	井田松江南 1	6	5	5	0	100%	0%	2	11.5	9.35	○		

時期区分　1：TK43 ～ TK209（Ⅲ期中～後）、2：TK217（Ⅲ期末～Ⅳ期前）、3：TK46 ～（Ⅳ期後）、4：時期不明　　※不確定なものは、新しい時期とした

地域区分　1：富士川西岸、2：富士山麓、3：愛鷹山麓、4：黄瀬川流域、5：箱根山西麓、6：伊豆

●飾大刀・金銅装馬具、○大刀・鉄製馬具、両：両頭金具、胡：胡簶金具

石室面積 =（最大幅 + 最小）/2× 石室長　（※横穴墓は静岡県考古学会 2000 に準拠）

ことがうかがえ、規格性の傾向についても同地区内では1期と2期が同様であることが看取できる（第17表）。また、富士山麓地区及び愛鷹山南麓地区の東側（高橋川以東）は特に規格性を持つ副葬鏃群が集中する。原分古墳のように鉄鏃流通に関わるとされる鉄鏃多量副葬古墳被葬者の中でも、鉄鏃製作や鉄鏃の集約・分配により近い立場にいる者が、この両地区にいた可能性を考えたい。

なお、この両地区は東駿河の中でも特に大型の無袖石室墳が見られる地域であることも注目できよう。中原古墳の所在する富士山南麓では、鉄鏃流通・生産の中核的な役割を果たす被葬者と地域で主導的な役割を果たした被葬者が並立していたとみられる。

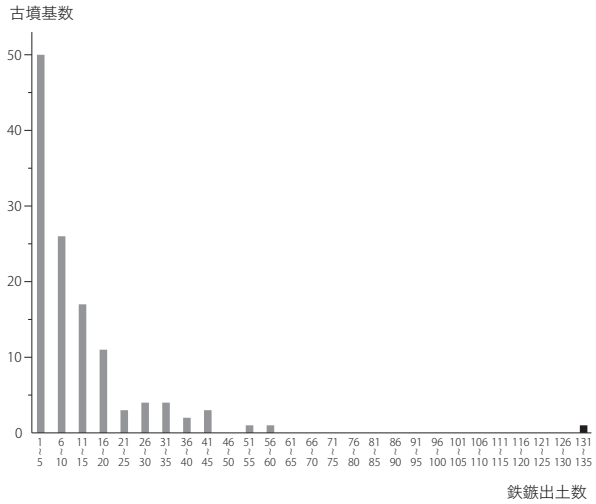
(2) 鏃構成

中原4号墳では、出土鏃全体のうち平根が約4割を占める。ただし、出土位置別の様相はそれぞれ異なり、Bエリアは平根のみの構成、いっぽうCエリアは尖根のみで構成される。A・E・Fエリアは尖根と平根で構成されるが、Aエリアは尖根が主体、EエリアとFエリアは平根数が尖根を上回る。

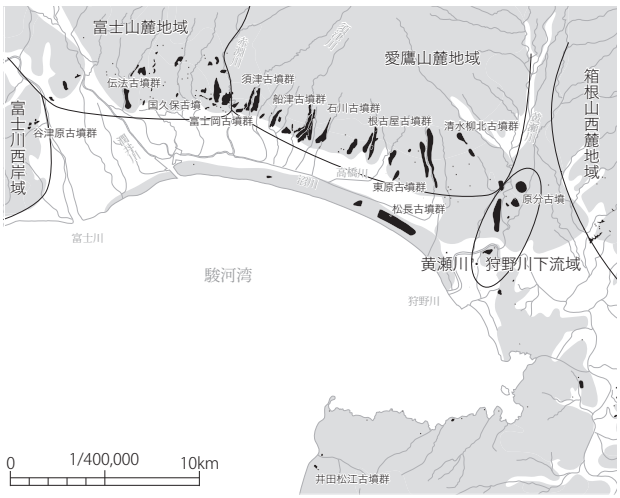
このうちA・Bエリアは初葬、Cエリアは追葬、EエリアとFエリアは初葬と追葬が混在すると考えたが、E・Fエリアの平根のうち幾つかは初葬に伴う可能性があることを勘案すると、中原4号墳における初葬時の副葬鏃は平根鏃が尖根鏃と拮抗するか、上回る数の構成であったとみられる。一方、追葬は尖根のみの鏃構成、あるいはこれに数本の平根が加わる構成であり、鉄鏃から見る限り、初葬者と追葬者が同質であったとは捉えがたい。さて、5世紀末頃には、後の正倉院御物箭に見られるような、多数の尖根に少数の平根を組み合わせて一束とするシステムの基礎が形成されたといわれ（関1986）、古墳時代後期では「多数の尖根＋少数の平根」の鏃束の副葬が多いことが諸先学により指摘している。東駿河でも概ね同様であるが、平根は少量ながらも多種といわれている（長谷川2003）。尖根を主体とする4号墳の追葬時の副葬鏃はこの傾向にそったものと理解できる

一方、初葬時の副葬鏃群は、多種多量の平根を含み、古墳時代後期の一般的な傾向とは異なる様相を示す。もっとも、「多数の尖根」を合わせもっていることも事実であり、中原4号墳の初葬時の副葬鏃は、「多数の尖根＋少数の平根」という後期古墳一般の鏃構成と多種の平根という東駿河の特徴のうえに、さらにより多くの平根が加わった結果「多数の尖根＋多種多量の平根」という鏃構成になったものと考えられる。

鏃構成に多くの平根を加えた背景には、平根鏃の持つ象徴性を被葬者が重視していたためとみられる。古墳時代後期の平根鏃について、鈴木は中央政権や他の集団との関係、威信財的な性格や基層的儀器としての性格といった中期の副葬鏃にみられる意味づけが一部に継承されていると指摘している（鈴木2003）。中原4号墳出土の平根鏃のうち、方頭式や圭頭式、撫関三角形式は、西日本に分布傾向を持つ形態であり、6世紀代の当地では類例が少ない形態である。水野は、鉄鏃は基本的には長距離交易の対象にはならないものの東海地方における方頭式は北九州・瀬戸内との交渉を想定すべきと指摘し（水野1995）、大谷は、沼津市秋葉林1号墳から出土した飛燕式鏃を巡る論考を展開するなかで、東駿河に



第201図　東駿河・伊豆における鉄鏃出土数



第202図　地域区分

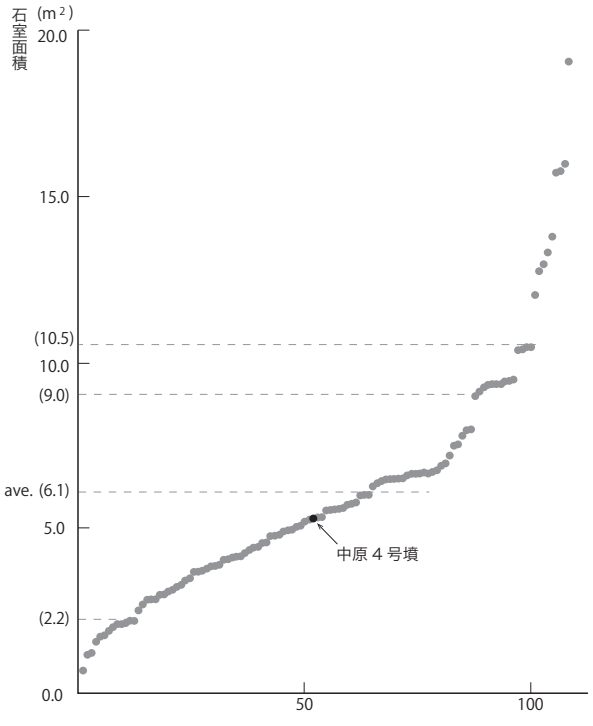
は北部九州などから鉄鏃型式の最新情報が伝播していた可能性が高いことを指摘している（大谷 2010）。中原4号墳出土のこれらの鏃も西日本各地との交渉によりもたらされた可能性があり、被葬者が他地域との関係を示すものとして、これらを鏃群に加えていたと考えられよう。なお、瀬戸内沿岸地域に共通する特徴として、平根の種類が豊富であり、岡山平野では県岩田14号墳にみられるように大小が組み合わされる事例も多いと指摘される（尾上 1993）。中原4号墳も平根の種類が豊富であることに加え、重抉柳葉式の423と424、長三角形式の433と434、撫関三角形式の450と451のように大小の組み合わせとなるものや、圭頭式の452と453、五角形式の447と448のように細部の意匠が若干ことなる鏃の組み合わせも見られる。あるいは、鏃の形態のみならず、保有のセット関係にも他の地域からの影響を受けている可能性も考えられる。

また、Bエリアの鏃束は、大刀とともに被葬者の被葬者の傍らに副葬されており、他の鏃束とは異なる扱いを受けている。大谷は無頸式の鏃は、伝統的な形態の保持・意味の再生として極端に重視する古墳の存在を指摘しているが（大谷 2003）、短頸鏃を含む平根鏃のみで構成されるBエリアの鏃束も、伝統的な葬送儀礼を踏襲した基層的儀器として他の鏃とは異なる扱われかたをしていたと考えられる。Cエリアも同様に大刀とともに被葬者の傍に副葬された鏃束であるが、尖根のみで構成される。一見すると被葬者近傍の副葬品組成として、追葬者は初葬者を踏襲しているかのように見えるが、副葬鏃に込められた意味合いまでも踏襲するものではなかったといえる。

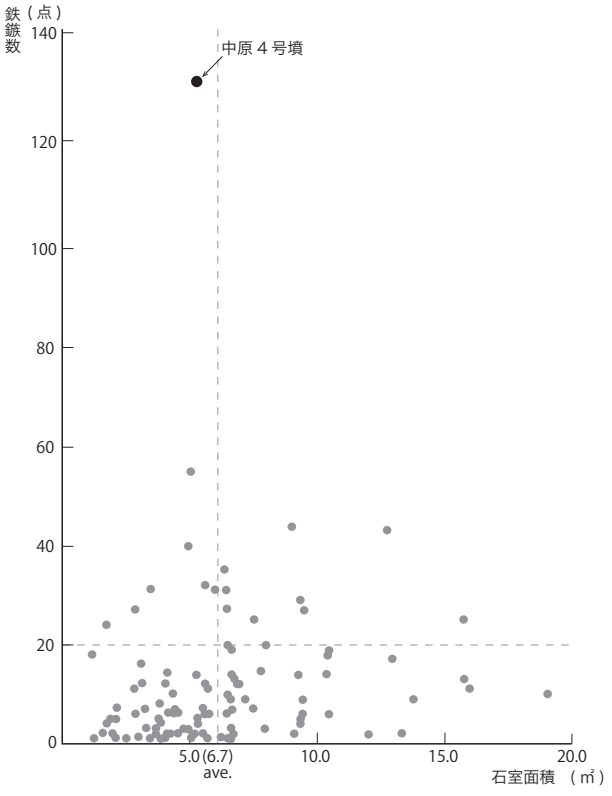
なお、中原古墳群では3号墳と6号墳でも鉄鏃が出土した。このうち、尖根のみで構成される6号墳はこの時期の一般的傾向に概ね沿っており、4号墳追葬者に近い被葬者像がうかがえる。一方で3号墳は短頸鏃を含む多種多様の平根と多種多量の尖根で構成される鏃束であり、平根の類似形態が大小の組み合わせを持つなど、4号墳初葬者に近い被葬者像がうかがえる。

さて、先に記したとおり古墳時代後期においては「多数の尖根＋少数の平根」の鏃束の副葬が多いことが指摘されるが、畿内では首長墳は尖根、群集墳では平根鏃が多く副葬されるという指摘もある（豊島 2002）。

そこで、次に東駿河における鏃構成と階層や鏃の保有量等との関連性の有無をみることにしたい。東駿河において石室規模や副葬品から有力な被葬者像がうかがえる古墳をみると、谷津原7号墳、船津寺ノ上1号墳、中



第203図　鉄鏃出土古墳・横穴の埋葬施設面積



第204図　埋葬施設の規模と出土鉄鏃数

里大久保古墳、原分古墳のように「多数の尖根＋少数の平根」という鏃構成となるものが見られる一方で、横沢古墳や船津Ｌ 62 号墳、大阪上古墳のように出土鏃の３割以上を平根が占めるものや、かぐや姫古墳、石川 119 号墳のように平根が主体となる古墳も見られる。小規模墳では、尖根のみの出土や、平根のみが出土する事例が混在するなど一様ではない。

鉄鏃の副葬量からみると、平根が鏃構成の主体となる事例は出土鏃総点数が数本程度の場合が多く、十数本以上鉄鏃が出土している場合の多くは「多数の尖根＋少数の平根」となる傾向にあると言えるが、かぐや姫古墳と石川 119 号墳のように平根が主体となる鉄鏃多量副葬古墳や、尖根のみが数点するような事例もみられ、鉄鏃の保有量と鏃構成の間にも関連性は見出しがたい。

遠江では一定以上の階層については「多数の尖根＋少数の平根」の構成が多いものの、多様な鏃束構成があり、階層性と鏃構成が必ずしも一致しないことが指摘されていが（田村 2003）、東駿河における鏃構成は、遠江と同様に階層性と鏃構成に密接な関係性があったとは言い難く、さらには鏃の保有数との相関関係も見いだせない。中原４号墳は東駿河では平均的な石室規模であるが、副葬品からは初葬時の被葬者は、階層的には上位であったとみられる。東駿河における上位階層の中には平根を主体とする鏃構成となる古墳はほかにもあり、中原４号墳の初葬時の副葬鏃が特異な事例とはいえない

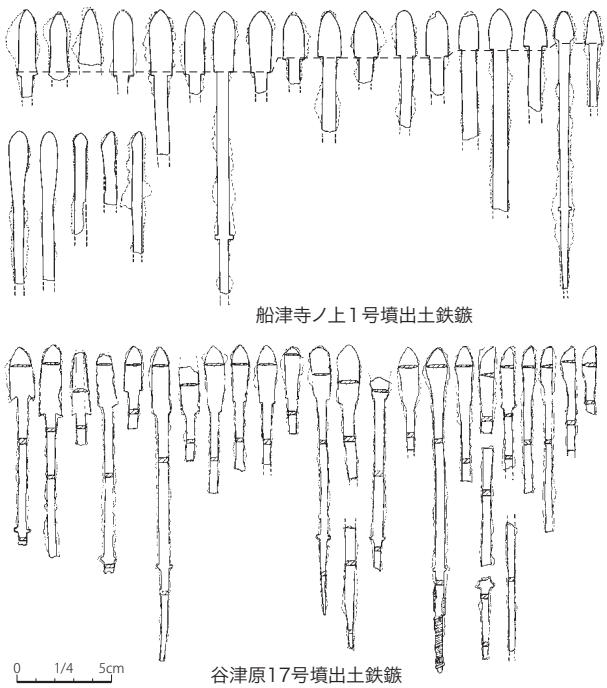
なお、束となって出土したＡエリアの鏃については、何らかの容器あるいは盛箭具に納められていた可能性も考えられるが、それらの存在を指し示すような供伴物もないため、判断はしかねる。ただし、４号墳出土鏃の鏃身部には平絹等や木質等の有機物の付着がないことから、すくなくとも鏃身部を覆うような容器や胡籙に納められてはいないと考えられる。

5　まとめ

以上、中原４号墳の出土鏃について検討したが、あらためてその特徴をまとめることで、結びとしたい。

まず、中原４号墳は東駿河では最多の鉄鏃が出土し、半数近くを平根鏃が占めることが大きな特徴である。出土位置や形態から２回の埋葬行為に伴い副葬されたものと考えられるが、そのほとんどが初葬に伴うものである。初葬時の副葬鏃群と副葬時の副葬鏃群の構成は大きく異なり、副葬鏃からみる限り初葬者と追葬者を等質視することはできない。

追葬者は後期古墳の一般的な鏃構成であり、社会的立



第 205 図　船津寺ノ上１・谷津原 17 号墳出土鏃の規格性

第 17 表　鉄鏃多量出土古墳における規格性

地区	古墳名	出土数	分類	時期 1	時期 2	時期 3
1	室ノ坂 B4 号墳	32	B			
1	妙見 I2 号墳	24	A			
1	谷津原２号墳	25	C			
1	谷津原６号墳	57	C			
1	谷津原７号墳	29	C			
1	谷津原 17 号墳	26	A			
2	中原３号墳	31	B			
2	中原４号墳	111	B			
2	国久保古墳	55	B			
2	かぐや姫古墳	20	C			
2	富士岡 F22 号墳	20	B			
3	中里大久保古墳	44	C			
3	船津寺ノ上１号墳	25	C			
3	船津 L62 号墳	29	A			
3	石川６号墳	26	A			
3	石川 119 号墳	20	A			
3	秋葉林１号墳	31	C			
3	東原５号墳	32	B			
3	清水柳北２号墳	35	B			
3	清水柳北３号墳	40	B			
4	原分古墳	43	B			
5	平沢１号墳	37	C			

A：多種多量、B：同種多量、C：数本単位の規格性
※ 谷津原２・６・７号墳、中里大久保古墳、秋葉林１号墳は、数本単位での規格性は高く、A・B の中間的な様相といえる。

場は東駿河における古墳埋葬者としては一般的なものであったと考えられる。一方、初葬時の副葬鏃は多種多量の平根と少量多種の尖根で構成され、他の古墳被葬者とは鉄鏃に関して異なった立場であったと言える。

静岡は北〜西関東・千葉とともにTK209形式期ごろの東日本において比較的広域に供給を始めた生産地域の候補地として指摘されている（内山2003）。中原4号墳は多量の平根と拮抗する量の尖根が出土しているが、尖根は地域的な特徴を逸脱しない規格性の高いものである。尖根の保有状況からは、中原4号墳の1回目の被葬者は鉄鏃生産あるいは流通の中枢に近い立場にいた被葬者がうかがえる。

平根の中には、短頸鏃のように東日本に分布傾向を持つものと、方頭式や圭頭式など瀬戸内〜九州との交流が考えられるもの、撫関三角形式のように畿内に分布傾向があるものが混在する。6世紀末頃には、鉄鏃の地方生産の拡大により、平根が多様化することが指摘されているが（関1986）、中原4号墳の被葬者は他の鉄鏃生産地との交流により多種多様な平根鏃を持ちえた可能性が考えられる。なお、短頸鏃を含む平根鏃のみの鏃束の存在からは、鉄鏃の伝統的な儀器としての側面も同時に意識していたこともうかがえる。明らかに他の鉄鏃より古い形態的特徴を示す腸抉片刃箭鏃も伝統的側面を象徴するものとして重視されていたのであろう。

以上、中原4号墳の初葬に伴う鏃束における多種多量の平根保有という特異性は、被葬者が鉄鏃に交流と伝統の象徴性を付加していたことがその背景にあるのであろう。鉄鏃から見た中原4号墳初葬者は、遠隔地との交流を持つ鉄鏃の生産あるいは流通に携わる立場にあり、鉄鏃の形態とその象徴性を強く意識していた人物であったと位置づけることができる。

註

1　静文研2003では、「少種」及び「多種」並びに「少量」及び「多量」を組合せて出土鏃の傾向を指摘しているが、明確な基準は設けていない。ここでは、3種未満を「少種」とし、出土鏃5本以下（東駿河における1古墳あたりの平均出土数の半分以下）を「少量」と表現する。なお、三角形式及び柳葉式については、鏃身関の形状が異なる場合は別形態として扱う。

2　各形態の帰属時期については大谷2003に基づく。

3　伊豆の横穴では7世紀後半台に圭頭式が出土しているが、鏃身は菱形状となり、6世紀以前の圭頭式とは直接つながらないものと言える。

参考文献

井鍋 誉之　2003「富士川西岸〜箱根山西麓地域」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

内山 敏行　2003「古墳時代終末期の長頸鏃−東日本における棘関長頸腸抉鏃の評価−」『部位生産の流通の諸画期』七世紀研究会

大谷 宏治　2003a「地域区分・時期区分と鉄鏃分類」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2003b「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2004　「東と西の狭間」『設立20周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2010「出土遺物から見た秋葉林1号墳の被葬者像」『秋葉林遺跡Ⅱ』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

尾上 元規　1993「古墳時代鉄鏃の地域性−長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として−」『考古学研究』第40巻第1号

菊池 吉修　2008　「原分古墳出土の鉄鏃について」『原分古墳』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

後藤 守一　1939「上古時代鉄鏃の研究」『人類学雑誌』第54号第4号

末永 雅雄　1941『日本上代の武器』

杉山 秀宏　1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8

鈴木 一有　2003「後期古墳に副葬される特殊鉄鏃の系譜」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

関 義則　1986　「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号古墳文化研究会

田村 隆太郎　2004「副葬鏃群からみた遠江の横穴式木室墳」『設立20周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

豊島 直博　2002「後期古墳出土鉄鏃の地域性と階層性」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所

長谷川 睦　2003「静岡県における鉄鏃の地域色と生産・流通」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

藤村 翔　2011「国久保古墳の評価と被葬者像」『平成13年度　富士市内遺跡・伝法国久保古墳』富士市教育委員会

水野 敏典　2007「古墳時代鉄鏃研究の諸問題−東アジアの中の鉄鏃様式の展開−」『古代武器研究』第8号

水野 敏典　1995　「東日本における古墳時代鉄鏃の地域性」『古代探叢』Ⅳ

引用報告書

甘木市教育員会　1998『下渕名子古墳群』

飯塚市教育委員会　2012『川島5号墳』

大分県教育委員会　1973『飛山』

大分県教育庁埋蔵文化財センター　2009『羽野横穴墓群』

岡垣町教育委員会　2002『東田古墳群Ⅱ』

岡山県古代吉備文化財センター　1995『川戸古墳群発掘調査報告書』

岡山県教育委員会　1982『高坪古墳』

岡山県古代吉備文化財センター　1998『段林遺跡・段林古墳』

山陽団地埋蔵文化財調査事務所　1976『岩田古墳群』

（財）徳島県埋蔵文化財センター　1994『柿谷遺跡・菖蒲谷西山B遺跡・山田古墳群A』

富士川町教育委員会　2008『谷津原古墳群』富士川町文化財調査報告書第23集

富士市教育委員会　1987『船津寺ノ上1号墳発掘調査報告書』

三島市教育委員会　1997『小平C遺跡』

第８節　中原４号墳から出土した生産用具が提起する問題

鈴木 一有

はじめに

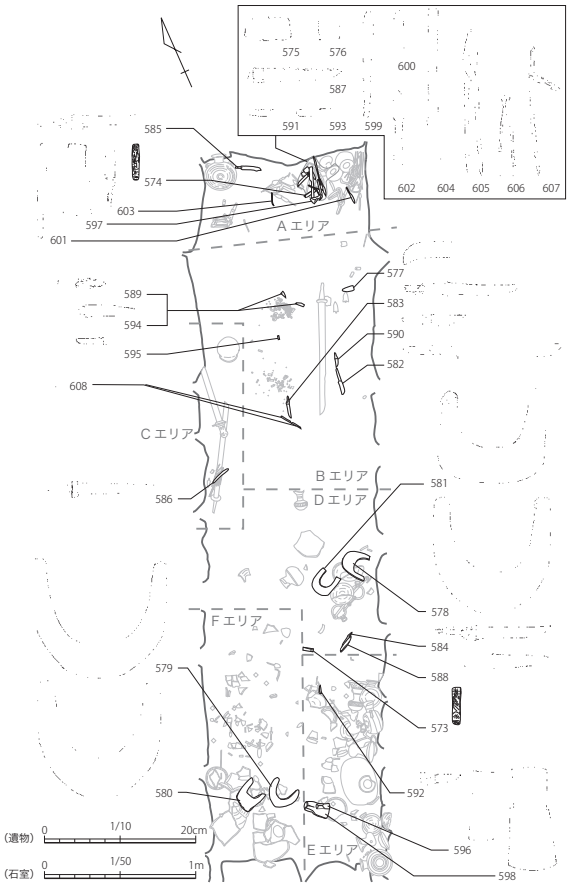
中原４号墳は静岡県富士市に築かれた直径８ｍの円墳であり、未盗掘の無袖横穴式石室から装身具、刀剣、鉄鏃、馬具、須恵器とともに、豊富な生産用具が出土した。その内訳は、刀子４点（註 1）、斧３点、鉇（やりがんな）５点、鑿（のみ）１点、鎌３点、鍬鋤先４点、砥石２点、鉄鉗（かなはし）１点である。農工具と共伴して出土した針 14 点以上（註 2）や鑷子（じょうし）１点も関連遺物に加えることが許されれば、本墳から出土した生産用具は実に 10 種類 38 点以上を数える。一般的に生産用具の副葬が衰退する古墳時代後期において、この種類と量は全国的にみても注目しうる多さといえよう。本稿では、中原４号墳から出土した生産用具の位置づけを明確にし、それらが本墳に一括して副葬された意義にふれ、被葬者の性格に迫ることを目的としたい。

１　生産用具副葬の意義をめぐる解釈

古墳出土の農工具については、情報が豊富な前・中期を中心に型式学的な検討が進められるとともに、副葬する意味についての考究が深められてきた。かつて小林行雄は、古墳出土農工具を古墳被葬者である首長が祭祀の場を調整する建築用具と捉え、その副葬行為は被葬者の司祭的な性格を伝えるものと考えた（小林 1961）。古墳出土農工具の用途を建築用具に限定することは、その後の研究で留保されたが、農工具を神まつりの用具とみる考えは引き継がれ、石製模造品を含んだ総合的な検討が加えられた。

寺沢知子は、前・中期古墳に副葬された鉄製農工具の組合せや出土状態を検討し、副葬された農工具を首長が担う農耕儀礼の執行権を示すものと解釈した（寺沢 1979）。寺沢は農工具を用いた祭儀を、政治的紐帯を示す儀礼として捉え、前期には倭王権中枢から地域首長へと儀礼の情報を与えることで定着し、中期にはその祭儀が定式化、やがて地域性が発露するという見通しを示した。白石太一郎も、農工具を象った石製模造品の分析を通じ、副葬農工具は農耕儀礼を実修する司祭者（首長）が用いる神まつりの道具と評価した（白石 1985）。広瀬和雄は古墳副葬農工具について田畠を切り開く勧農の象徴物と捉え、共同体を維持繁栄させる首長の役割を示す財の一つとみなす（広瀬 2003）。

こうした前中期古墳にみられた祭儀の内容は後期になると著しく変容する。白石は奈良県藤ノ木古墳から出土した農工具の分析を通じて、古墳時代後期における農工具副葬の意義を探り、６世紀以降、倭王権中枢の限られた階層が前期以来の農耕儀礼の司祭者としての性格を濃厚に残すいっぽうで、地方を含め多くの首長層は農耕儀礼にあまり拘泥しなくなると捉えた（白石 1997）。白石の論考は国家的祭祀を担う藤ノ木古墳被葬者の特殊な性格を明らかにすることに主眼をおいたものであったが、同時に古墳時代後期における農工具を用いた祭祀の変容過程を示した点で、本稿の目的と触れ合う部分が多い。



第 206 図　生産用具等出土状況図

古墳から出土する農工具の評価については、寺沢や白石とはやや異なる視点も示されている。関川尚功は副葬農工具と古墳造営に伴う祭儀や武器との関係に注目し(関川 1987)、田中新史は埋葬施設以外から出土する農工具について、古墳造営に伴う地鎮祭祀との関連を指摘した（田中 1994・1995)。古墳に副葬される農工具は、漁具や、狩猟具と関連がある平根系鉄鏃と共伴することを考慮すると、一義的には生産用具としての性格をもつものとみられる。しかし、関川や田中が示す農工具の性格は、寺沢や白石が評価した農工具副葬の意義と背反するものではなく、むしろ生産用具を用いた祭祀の具体的場面や、神まつりの多様性を示したといえる。古墳に埋納される農工具の中には、農耕儀礼に留まらず、木器の製作や建物の建築、さらには、土木、軍事などにかかわる象徴的意味も含まれると考えられよう。

本稿で取り扱う古墳時代後期の様相は、古墳時代前期から中期へと継承された農工具祭祀の変容過程をうかがう上でも重要である。近年、古墳時代後期に副葬された農工具について、地域ごとに検討が深められている（柳沢 1994、武田 2003、十亀ほか 2013、松浦 2014)。これらの研究は、各地域における副葬行為の実態や時間的な推移を明らかにしており、地域の枠をこえた農工具副葬の総合的理解を進める上で大きな助けになる。

こうした問題意識の中で、改めて中原 4 号墳の事例に注目すると、農工具以外にも鉄鉗や針･鑷子といった、その他の生産用具とみられる製品が共伴している点が注目できる。鉄鉗は、鍛冶具の最も基層的な用具として注目されている（潮見 1981、松井 1991、花田 2002)。その副葬行為についても、鉄器生産を統括・管理する首長の性格や、鉄器生産に直接かかわる渡来系集団の職能を表すものと捉えられている。村上恭通は 5 世紀から 6 世紀における日本列島内での鉄器生産の受容過程とかかわり、北部九州や岡山県域、奈良県域、東日本といった地域の違いが鉄鉗の副葬行為に反映されていると捉えた(村上 2007、pp.244-255)。生産用具副葬の変容過程と地域性の発露が指摘されたことは、本稿の内容とかかわる重要な論点といえる。

古墳に副葬される針についても､全国的な集成作業(楠本編 1986、大谷 2012）をふまえ、その副葬の意義にかかわる検討が進みつつある。生産用具の副葬行為をその用具を用いた手工業生産と関連づける文脈に沿って解釈すれば、針の副葬も布・皮革製品の生産と関わる表象行為と捉えることができるだろう。

このように、中原 4 号墳から出土した生産用具は、農工具副葬の変容過程にある 6 世紀の実例を具体的に示すだけでなく、鉄器生産や布・革製品の生産ともかかわり、後期古墳における手工業生産用具の副葬行為の意味を総体的に分析すべきことを伝えている。以下、未盗掘の本墳にかかわる出土位置などの情報整理と個別の遺物にかかわる検討を基礎的作業として行い、これら生産用具副葬の意義に触れていきたい。

2　中原 4 号墳における生産用具の副葬

出土位置　農工具をはじめとした生産用具は中原 4 号墳の石室内のほぼ全域から出土しているが、その出土位置には種類の偏りが看取できる（第 206 図)。最も生産用具がまとまっているのが、奥壁に近い A エリアで、刀子 2 点以上、斧 2 点、鉇 5 点、鑿 1 点、鎌 3 点、砥石 1 点、鉄鉗 1 点、針 14 点以上、鑷子 1 点が集中する。これらの遺物群は、追葬などによる二次的な移動を考慮しうるが、一括性が高い集積であり、副葬時期が同一の生産用具が一箇所に集められたものとみなせるだろう(註 3)。

初葬の遺体（本書第 4 章第 3 節、田村論考、埋葬①）が想定できる B エリアからは、刀子 4 点以上（582、583、590、594 など)、鎌 1 点（577)、針 1 点（608）が出土した。鎌は破損が著しく小片化しているが、この地点で出土していることは看過できない。針についても一点のみであるが、同様である。これらの遺物は、本墳における生産用具の本来的な副葬位置を示している可能性があるだろう。

いっぽう、4 点分の刀子については、想定しうる被葬者の位置を考慮して、その性格や用途を判断する必要がある。刀子については工具以外に、被葬者の装着物や、儀礼に伴って遺体に沿わせたものが含まれる可能性がある。とくに 2 点の刀子（582、590）は、原位置を留めているとみられる刀（418）と近接して出土していることを考慮すると、被葬者に直接かかわる遺物とみなすことができるだろう。

追葬の遺体（本書第 4 章第 3 節、田村論考、埋葬②）が想定できる C エリアからも 1 点の刀子（586）が出土している。C エリアで共伴する副葬品は少なく、出土遺

物は追葬者に伴うものに限定しうる可能性が高い。他の生産用具が共伴せず、1点の刀子のみが出土していることをふまえると、この刀子は農工具祭祀に用いた生産用具というよりも、追葬者に直接かかわる装着物などの一つと捉えるほうがよいであろう。

開口部に近いD～Fエリアからは、鍬鋤先4点（578～581）と斧2点（596、598）、刀子3点（584、588、592）、砥石1点（573）が出土している。D～Fエリアでは須恵器破片の接合関係が相互に認められることから、副葬時に開口部付近のE・Fエリアに置かれていたものが追葬時の片付けによって一部Dエリアに移動したものがあると解釈できる。鍬鋤先2点（578、581）や刀子2点（588、592）はその蓋然性が高いとみてよいだろう。鍬鋤先は奥壁近くのAエリアの生産用具集積にはみられず、大小2点の斧（596、598）もAエリアにはみられない組合せである。これらの農工具は地鎮などにかかわる土木用具（田中1994･1995）など、使用された儀礼の場面や性格がAエリアで出土した生産用具と異なっていた可能性も考慮してよいだろう（註4）。

副葬時期　生産用具の副葬の時期を考えるにあたっては、各遺物の編年的位置づけを重視すべきである。しかし、古墳時代後期の生産用具については、形態変化が不明確で詳細な検討にこたえられない。ここでは、須恵器や武器・馬具などの形態差から明らかにする副葬の段階把握から、生産用具の副葬時期について考えておきたい。初葬の被葬者は古相の武器が集まるBエリアに想定でき、奥壁よりのAエリアについても、須恵器や鉄鏃の特徴から、初葬に伴う副葬品の集積と判断できる。同一地点から出土した生産用具も初葬時の副葬品と理解してよいだろう。

また、開口部に近いD～Fエリアについても、古相の須恵器が数多く含まれる。初葬時の副葬品として開口部付近（E、Fエリア）にまとまっていたものが、追葬時に一部Dエリアに移動したものが主体を占めると捉えられよう。鍬鋤先や大小の斧など、Aエリアで確認できる生産用具と補完的な組成であることからも、このエリアで出土した農工具も初葬時に伴うと捉えるのが妥当といえる。以上のことから、中原4号墳から出土した生産用具は、その多くが初葬時の副葬品である蓋然性が高いと判断できる。その時期は、初葬時に副葬されたとみられる須恵器の時期、すなわちTK43型式期（その中でも新相期）と捉えられる。実年代では、6世紀後葉に相当する。追葬に伴うものとして、若干の刀子などがあげられるが、さしあたり本墳の生産用具の組成を考えるには大きな違いが生じない程度の量といえるだろう。

3　中原4号墳出土生産用具の特徴

次に中原4号墳から出土した生産用具の特徴について触れておこう。

刀　子　中原4号墳からは刃部破片で数えて総数10点の刀子が出土している。確認できるものはすべて刃側と背側の双方に関がある両関造りであり、鎺をもつものが4点（584、585、586、587）ある。刀子の出土位置はA～Eのエリアに分散している。被葬者が想定できるB・Cエリアからの出土品については、先述の通り、工具以外の用途を考慮してよい。また、本墳から出土した刀子の柄には木製のものと鹿角製のものの2種が知られる。鹿角装刀子はBエリアから出土した583と、Eエリアから出土した592であり、他の工具と出土位置が異なる。また小型の刀子590、592、594は刃部の研ぎ減りが顕著で、590や592は木柄の外側に別素材の柄がつけられている。長期間にわたり使い込まれたものとみられ、出土位置も他の工具とは異なるB・Eエリアにあたる。以上のことから、B・C・Eエリアから出土した、大型品582～584、586、および小型で研ぎ減りが顕著な590、592、594（鹿角柄刀子583、592を含む）は、被葬者佩用品などとして工具から分離して捉えておきたい。

工具として捉えうる刀子は、奥壁よりのAエリアから出土した585、587とDエリアから出土した584、588の4点である。以下、本墳から出土した工具としての刀子は4点として論を進める（註5）。4点の刀子はいずれも刃部長7.4～10.2cmほどの中型品で、鎺を備えるものが3点ある。

斧　有袋鉄斧が3点出土している。全長9.3cmの小型品（597）が奥壁よりのAエリアから、全長9.0cmの小型品（596）と全長13.5cmの大型品（598）が開口部付近のEエリアから出土している。大きさは異なるが、いずれも実用品とみてよい。出土位置が異なる前者と後者は、使用する儀礼の場面などが異なる可能性がある。小型の鉄斧2点は肩部が比較的不明瞭なことに対し、大型の1点は肩部の角が明瞭である。また、前者は袋

部の合わせ目が明確であることに対し、後者は袋部の合わせ目が不明瞭である。前者は刃部と一体になった原形から袋部を造り出すことに対し、後者は別作りの刃部と袋部を鍛接するなど、袋部を造り出す製作技術が異なるとみられる。こうした形態差は、伐採用、加工用といった斧の具体的な用途の違いに起因する可能性があり、柄の付け方も異なっていた可能性が高い。Eエリアから出土した大小の斧（596、598）は、縦斧と横斧といった柄の付け方が異なる二つの斧の組合せであった可能性がある。

鉇　茎式の鉇が5点確認できる。5点ともに奥壁よりのAエリアから出土した。いずれも柳葉状の刃部をもち、緩やかに反り上がる。刃部の断面は片鎬造りで、裏すきはみられない。刃部と茎の間の関には、角関（602、603）、ナデ関（601）、無関（599）などの多様性が認められる。全長が判明する個体は、全長11.1～14.2cmであり、実用的な大きさといえる。本例のような茎式の鉇は西日本を中心とした後期古墳副葬品に数多く認められる（古瀬1977）。

鑿　袋式の鑿が1点、奥壁よりのAエリアから出土した。一部に破損がみられるが、全長19cm程度に復原できる。鑿は刃部形態（刃部が広いか狭いか、有肩か無肩かなど）や木柄との装着方法（袋式か茎式か）、全体の寸法などで細分しうるが（古瀬1991）、本例のような無肩で袋式の鑿は、古墳時代後期以降に増加する。寸法についても後期古墳出土例は全長20cm前後のものが一定量あることをふまえると、本例は古墳時代の実用的な鑿として一般的な形態、大きさであるといえるだろう。

鎌　鎌は完形品がなく、すべて破片の状態で出土した。基部が3点、刃部先端が1点あり、副葬数は3点以上である。3点の基部破片は奥壁よりのAエリアから出土したが、刃先の破片1点はやや離れたBエリアから出土している。先述の通り、Bエリアから出土した小破片が移動から漏れたものと解釈すると、農工具本来の副葬位置はBエリアであった可能性が考えられる。基部の形状から、3点の鎌はすべて直角鎌であることが確認できる。また、遺存している刃部先端の形状から、判明するものについては曲刃鎌であることが分かる。刃部幅は1.8～2.5cm、推定できる全長は15cm程度であり、その大きさからいずれも実用品と捉えてよいだろう。基部の折り返しの向きについては、折り返し部を上に、かつ刃部を手前に置いたとき、刃部先端が左である「甲技法」（都出1967）が2点、右である「乙技法」が1点であり、両者が混在する。

鍬鋤先　4点ある鍬鋤先はすべてU字形鍬鋤先で、長さ12.4～15.3cm、幅13.8～17.8cmである。2点（578・581）がDエリアから、もう2点（579・580）がFエリアから出土した。Dエリアから出土した2点は、二次的に移動としたとみられる須恵器に近接しており、本来、開口部付近のE・Fエリアにあったものが、追葬等に伴い移動した可能性がある。U字形鍬鋤先には、刃幅10cm以下の小型品（都出1967）が知られるが、本例はいずれもその大きさから実用品とみられる。刃部が全体的にU字形を呈するものが3点（578～580）、左右に張り出すものが1点（581）ある。形状の違いは鍬鋤の機能差を反映している可能性がある。古墳時代後期におけるU字形鍬鋤先は、奈良県を中心に小型品がみられる（坂2005）ものの、西日本地域で出土する多くは実用的な大きさの製品であり、本例もその一例に加えることができるだろう。

砥　石　本墳からは2点の砥石が出土した。奥壁よりのAエリアで他の農工具と共伴して出土した1点（574）と開口部に近いDエリアで単独で出土した1点（573）がある。石材はいずれも凝灰岩である。両者ともに全長9cmほどの小型品であり、角柱状を呈する四面すべてに顕著な使用痕がみられる。573の端部には穿孔が認められ、佩用が可能な「佩砥」（入江1998）であったとみることもできよう。また、これらの砥石は農工具の刃部を研ぎ出す用途に加え、鍛冶具である鉄鉗が出土していることから、鍛冶具を構成する道具の一つと捉えることも可能である（註6）。

鉄　鉗　奥壁よりのAエリアから農工具とともに鉄鉗が1点出土している。本例は全長19.3cmの比較的小型の製品である。鉄鉗は大きさの違いに注目することが多い。松井和幸は、全長25cm以下を小型品、25～40cmを中型品、40cm以上を大型品とし（松井1991）、加藤俊吾もおおよそ同様の見解を示している（加藤1997・1998）。いっぽう、朝鮮半島の事例については李東冠が、全長18cm以下を小型品、20～30cmを中型品、30cm以上を大型品として認識している（李2012）。

本稿では上述の研究を参考にして、全長20cm未満

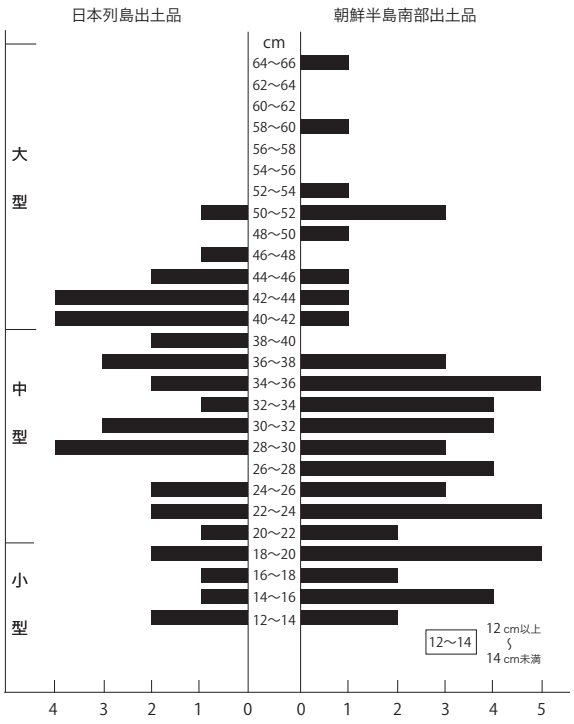
を小型品、20cm 以上 40cm 未満を中型品、40cm 以上を大型品と捉えたい（第 207 図）。この基準に照らせば、中原 4 号墳例は小型品に位置づけられる。

鉄鉗の形状については、挟み部や握り部の形状をもとに細分案が出されている。濱崎範子は、挟み部が円形を呈するＡ類、挟み部が比較的長く先端を閉じたときに空間があるＢ類、先端を閉じたときに空間がないＣ類、挟み部や握り部の肩が張らないＤ類という分類案を示した（濱崎 2008）。濱崎分類によるＡ類は朝鮮半島の出土品に多くみられ、Ｂ・Ｃ類は、日朝双方に出土例がある。Ｄ類は日本列島にのみ確認できることから、列島の独特形態である可能性がある。本例は、日朝ともに類例があるＢ類に属している。

鉄鉗の大きさは金属加工で用いる工程や技術力の違いを反映したものと解釈できる。大〜中型品は鍛冶用具として捉えて問題ないだろう（吉川 1991）。とくに、全長 30cm 以上の大型品や中型品の一部は、片手で扱うことができず、複数の工人がかかわる作業に使われたものと捉えられる。いっぽう、本例のような小型品は片手で扱える大きさであり、修復や簡易な加工など、より小規模な作業に使用された用具と評価できる（註 7）。

針　針は、奥壁よりのＡエリアから 13 点以上（607）と、初葬者が想定できるＢエリアから 1 点（608）の合計 14 点以上が出土している。本墳の事例は全長 14.1 および 17.0cm の大型品（607、608）と全長 3.5 〜 4.0cm ほどの小型品に分けられる。前者は針孔も鮮明に確認できるが、後者は針孔の有無を含め全体形が不明瞭である。また、小型品は束になって錆着しており、糸などで束ねられていたか、何らかの容器に入れられていた可能性が高い。本例のような大型の針は、茨城県三昧塚古墳出土品に類似例がある（註 8）。三昧塚古墳例は、全長 15.8cm で、本体の断面形は円形、端部は方形であり、一端には孔があけられている。

全長 15cm を超えるような大型の針については儀礼用に特化したものと捉える考えがある。しかし、後述するように古墳時代の金属製針の祖形とみなせる弥生時代の骨角製針の中には全長 15cm を超える大型品が一定量認められることは留意すべきである。中原 4 号墳から出土した鉄製生産用具の殆どが実用品とみられることから考えても、本墳から出土した大型針も実用品であったと捉えておく方がよいだろう。



第 207 図　鉄鉗の全長比較

鑷　子　奥壁よりのＡエリアにおいて農工具と共伴して鑷子が 1 点出土している。鑷子は先端で対象物を挟む機能をもつ鉄器の総称である。形態的特徴や古墳における出土状態から、毛抜き説、刀剣や刀子の吊り金具説、馬具説など、多様な機能が推定されてきた。機能を限定する用語を避け、「鑷子状鉄製品」と呼ぶこともある（鈴木 1999、諫早 2008）。しかし、諫早直人が明確に示しているとおり、この種の鉄器は吊り金具や馬具として捉えることは困難であり、本義的に細かなものを挟む機能を果たす道具と評価しうる。

鑷子には捩りを加えた棒状金具を備えるものも知られ、これらは化粧用具（毛抜き）など、属人性が高い佩用品や携行品として用いられたものが含まれる可能性が考えられる。毛抜きとしての機能が想定できる鑷子は、日本列島において古墳時代中期に出土例が増加するが、その普及には朝鮮半島からの影響があったと捉えられる。いっぽう、本例のように棒状金具が伴わず、生産用具と共伴して出土する事例については、皮革の毛を抜いたり、糸くずなど細かいものを摘んだりするような、生産用具の一種として捉えることも許されよう。

4　鍛冶具副葬の意義

中原 4 号墳からは鉄鉗が 1 点、出土している。鉄鉗の出土例は東海地方で唯一であり、東日本においても、類例が極めて限られる。以下、鉄鉗と関連する鍛冶具副葬の意義について整理しておきたい。

鍛冶具の種類　古墳出土の鍛冶具については、鉄器生産・加工技術の推移を直接的に示す資料として古くから注目されてきた。鉄鉗を中心に、出土地の地名表が潮見浩と和島誠一によって作成され（潮見・和島 1966）、以後、新出例を加えて提示が繰り返されている（野上 1968、潮見 1982、松井 1991、加藤 1997・1998、花田 2002、村上 2004 など）。鍛冶具の中心は、製品を挟む機能をもつ鉄鉗であり、さらに充実した組合せが見られる場合、鉄鎚（かなづち）、鏨（たがね）、鉄砧（かなどこ）、鑢（やすり）などが共伴する。砥石については、鍛冶具に限定することは難しいが、鉄製鍛冶具と共伴する事例については鍛冶関連の道具として用いられた可能性を考慮してもよいだろう。

先述のとおり、鉄鉗には全体の大小と挟み部の形状の区別があり、本稿では全長 20cm 未満を小型品、20cm 以上 40cm 未満を中型品、40cm 以上を大型品と捉えている。また、鉄鉗に伴う鉄鎚や鏨にも大きさの違いがある。鉄砧は、角柱状の鉄塊であるものと、本体が細長く一端が尖る小型のものがある。鑢については明確な鑢目が確認できないものが殆どであるので、その認定が難しい。しかし、本体が扁平で、「鏨」もしくは「鏨状」とされる鉄器の中には鑢が含まれる可能性がある。鑢とされる鉄器は朝鮮半島での出土例が目立ち、鍛冶具と共伴する。本稿では可能な限り鑢の可能性が考えられる形状の鉄器についても取り上げておきたい。このほか、炉内の鉄滓・鉄塊や炭を掻き出すための「なゆで」「かぎやり」とみられる鉤状鉄器も福岡県広石南 A4 号墳例など、ごく少数ながら知られる。

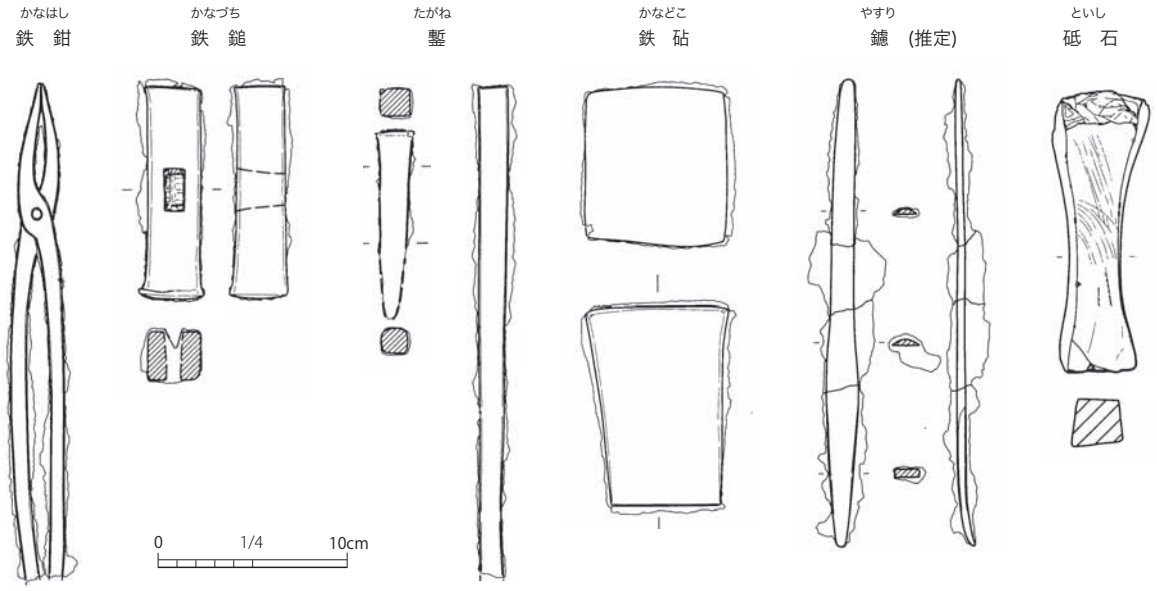
鍛冶具の組合せ　中原 4 号墳出土の鍛冶具組成を評価するために、鉄製鍛冶具の組合せを以下のように分類する。

A 類）4 種の鉄製鍛冶具（鉄鉗、鉄鎚、鏨、鉄砧の組合せ）が揃う事例

B 類）2 ～ 3 種の鉄製鍛冶具が共伴する事例

C 類）1 種類の鉄製鍛冶具が出土する事例

このうち、C 類は、C1 類）鉄鉗のみ、C2 類）鉄鎚のみ、C3 類）鏨のみ、C4 類）鉄砧のみ、といった細分が可能である。ただし、C2 類・C4 類については、確実な事例に乏しく、類型として一般化しうるか検討が必要である。また、C3 類については、単体で出土する「鏨」状の鉄器を鍛冶具と限定しうるかという問題があり（村上 2004、濱崎 2008）、正確な評価が難しい。C 類は鉄鉗のみが確認できる C1 類が主体といえ、中原 4 号墳を含め、東日本地域の鍛冶具出土例はこの類型に限定できる。1 点の鉄鉗を副葬することは、鍛冶具副葬の最も基層的な行為であると認識しうるだろう。また、後述するように、東日本で出土する鉄鉗は小型品に限られることにも、注目しておきたい。



第 208 図　鍛冶具の組成（奈良県五條猫塚古墳例）

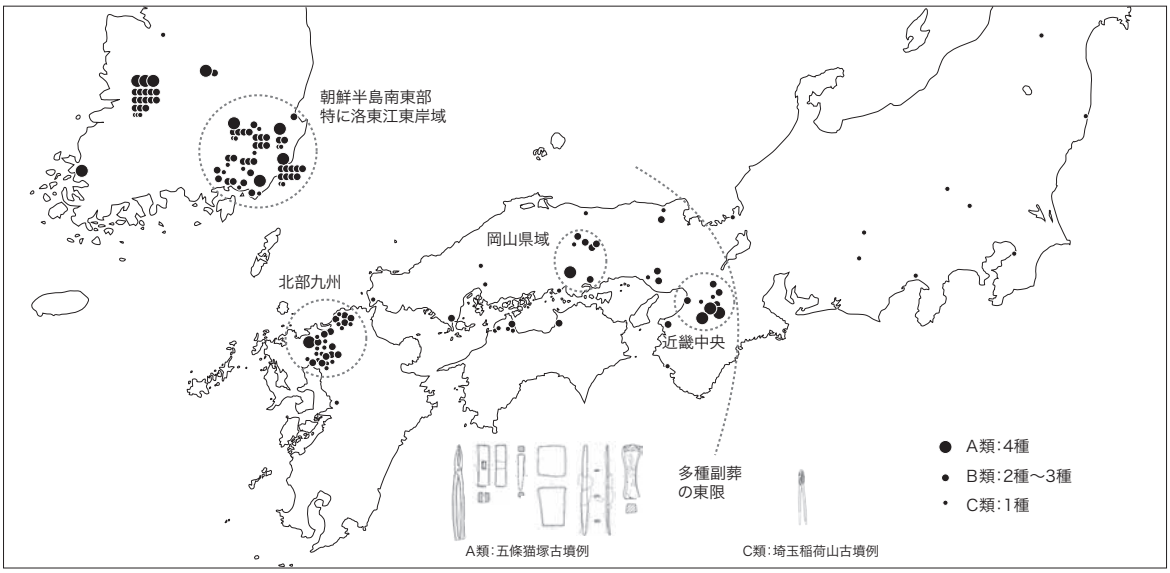
分布と推移　日本列島において鉄鉗を中心とする鍛冶具が出土しはじめるのは、古墳時代中期前葉のことである（註9）。福岡県池の上6号墳例（B類型）や兵庫県行者塚古墳例（C類型）などが、その初期の事例である。続く中期中葉には、奈良県五条猫塚古墳や岡山県随庵古墳などA類型の事例が知られ、日本列島内に本格的な鍛冶具が出現する。これら出現初期の鍛冶具副葬古墳には豊富な副葬品が伴う例が多く、その被葬者には鉄器生産を統括する渡来系の首長を想定しうる。また、池の上6号墳にみるように、鉄器生産の工人に近い階層の被葬者が想定できる事例もある。その後、中期後葉から後期にかけては中小規模古墳からの出土例が目立つ。これら鍛冶具出土古墳は北部九州をはじめ、岡山県域、奈良県域などに集中する傾向があり、鉄器生産の中心地をあとづけることができる。

朝鮮半島の鍛冶具　近年、朝鮮半島南部における鍛冶具の出土例が激増している。とくに2010年以降、全羅北道完州上雲里遺跡や、慶尚南道蔚山地域における多くの発掘調査成果が公表され、総合的な検討をする素地が整った。朝鮮半島における鍛冶具の組合せを先の分類に従って整理すると、日本列島の事例と比べて種類が充実しているA類やB類の割合が高い（第19表）。鍛冶具の副葬行為は日朝に共通し、その量や種類の違いが鉄器生産力の差を反映しているものと解釈できるだろう。朝鮮半島南部における鍛冶具副葬は、古墳時代前期に併行する時期にもみられるが、中期から後期にかけて出土例が集中する点は、日本列島と共通する。鉄鉗をはじめ、鍛冶具個別の大きさが多様であることも留意したい。中原4号墳例のような小型品も朝鮮半島から一定量が認められるので、鉄鉗の大きさの違いは鍛冶の場面や従事者数の違いなどを反映した機能差に起因する可能性が高いとみられよう。

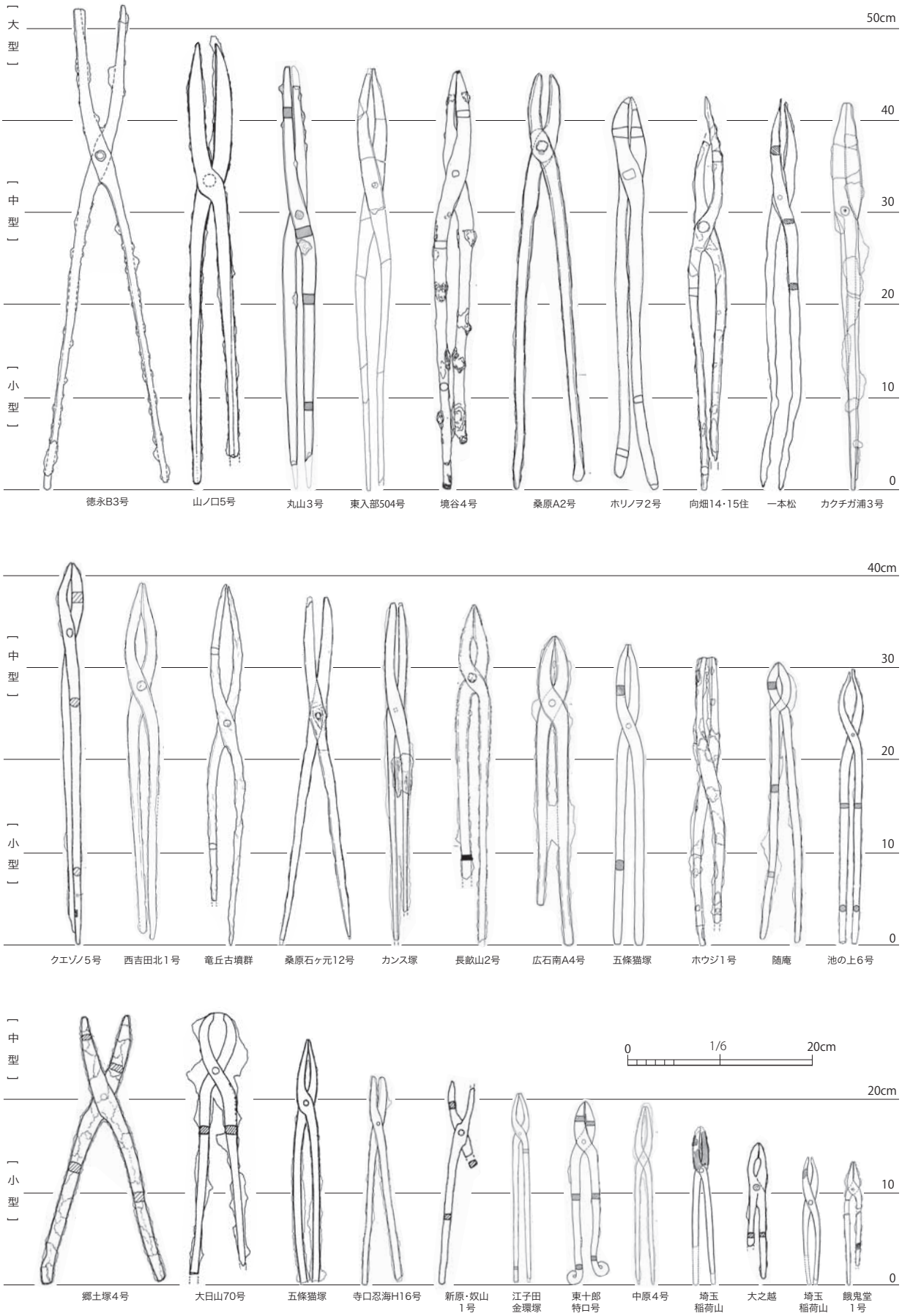
鍛冶具の出土例は、完州上雲里古墳群に集中するほか、大邱、慶山、慶州、蔚山、昌寧といった小地域ごとにまとまる傾向がある。鉄器生産の拠点に鍛冶具副葬古墳が集中すると評価できよう。特に上雲里遺跡からは、20点を数える鉄鉗が集中して出土しており、朝鮮半島の中でも突出した出土量を誇る。鉄器生産集団がかかわる墓地といえるだろう。

上雲里遺跡を除くと、朝鮮半島南部地域における鍛冶具出土古墳は、洛東江以東の地域に偏りがある点も留意したい。日本では鉄器生産の中心地として加耶地域が注目されているが、朝鮮半島南部全体で比較すれば、鍛冶具出土古墳の分布の中心は、新羅の領域にあるとみなせる（濱崎2008）。日本列島の鍛冶技術の淵源地として、新羅の領域を視野に入れた検討が求められるだろう。

鍛冶具副葬の意義　鍛冶具副葬古墳の様相を古墳の時期、出土地、出土した鍛冶具の種類などから整理すると、鉄器生産技術の伝播過程とその定着度がうかがえる。朝鮮半島における分布の核は新羅の領域を中心とした洛東江東岸域にあり、古墳時代中期前葉から中葉にかけて北部九州や岡山県域、奈良県域といった西日本地域に伝



第209図　鍛冶具の分布

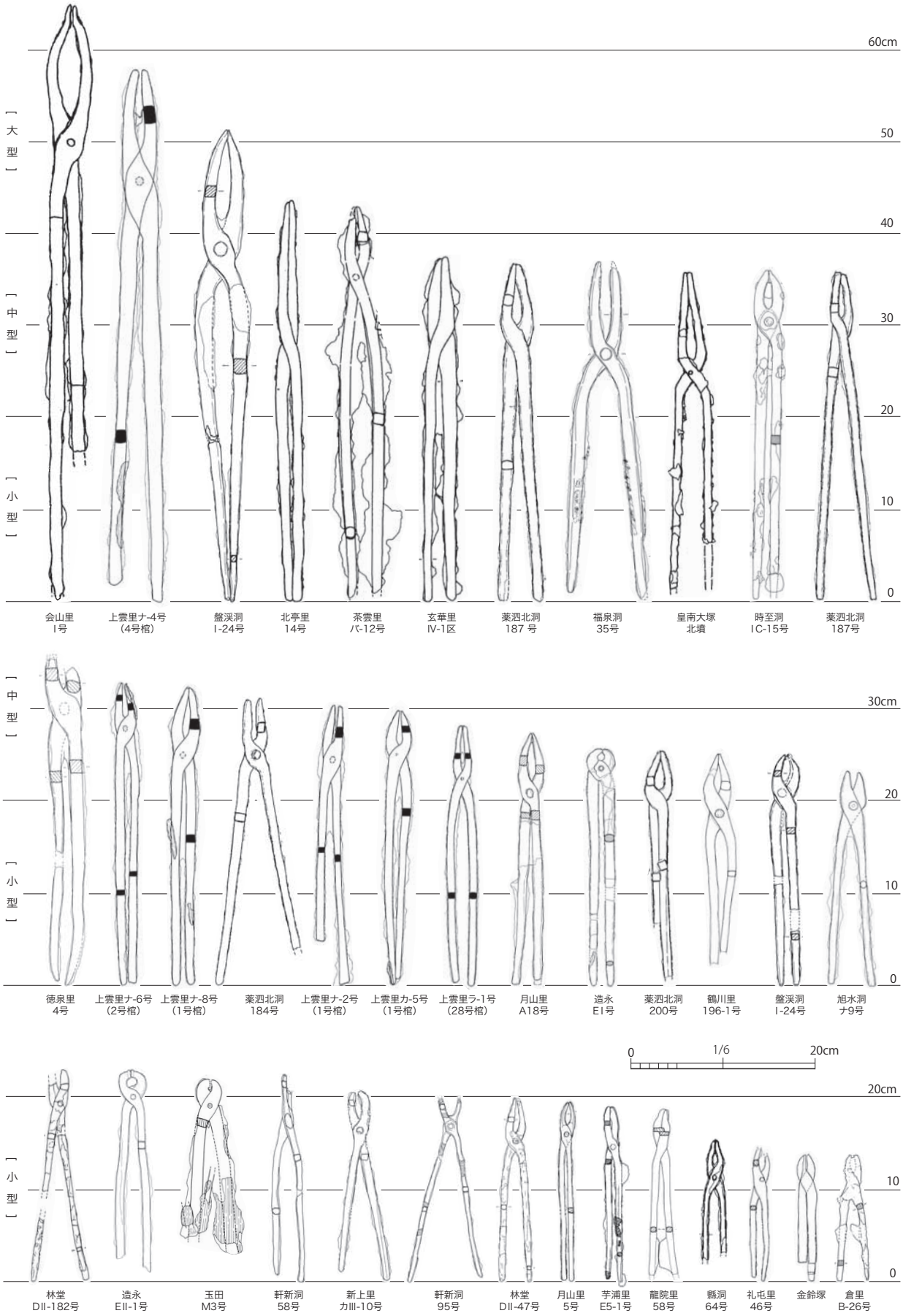


第 210 図　日本列島から出土した鉄鉗の諸例

第 18 表　日本列島における鍛冶具出土古墳

都府県	所在地	古墳名	墳形	時期	鍛冶具						その他	鉄製鍛冶具の内容		
					鉄鉗	鉄鎚	鑿	鉄砧	鑢	砥石		種	点	類型
山形県	山形市	大之越	円墳	中期	1							1	1	C 1
福島県	いわき市	餓鬼堂 1 号横穴	横穴	後期	1							1	1	C 1
群馬県	高崎市	弦巻	前方後円墳	中期	1							1	1	C 1
埼玉県	行田市	埼玉稲荷山	前方後円墳	中期	2							1	2	C 1
千葉県	市原市	江子田金環塚	前方後円墳	後期	1							1	1	C 1
福井県	美浜市	獅子塚	前方後円墳	後期	1							(1)	(1)	(C 1)
長野県	伊那市	如来堂	円墳	後期		1						(1)	(1)	(C 1)
長野県	飯田市	竜丘古墳群	不明	—	1							(1)	(1)	(C 1)
静岡県	富士市	中原 4 号	円墳	後期	1					2		1	1	C 1
京都府	京丹後市	畑大塚	円墳	後期	1							1	1	C 1
京都府	京田辺市	郷土塚 4 号	円墳	後期	1	1						2	2	B
大阪府	柏原市	雁多尾畑 9 支群 4 号	円墳	後期	1							1	1	C 1
大阪府	堺市	百舌鳥大塚山	前方後円墳	中期	1		1					1	1	B
兵庫県	豊岡市	ホウジ 1 号	円墳	中期	1	1	2			1		3	3	B
兵庫県	加西市	タンダ山 2 号	—	中期	1		1					2	2	B
兵庫県	加古川市	カンス塚	円墳	中期	1	1	1			1		3	3	B
兵庫県	加古川市	行者塚	前方後円墳	中期				1				1	1	C 4
奈良県	大和郡山市	菩提寺 2 号	方墳	中期	1							(1)	(1)	(C 1)
奈良県	天理市	ホリノヲ 2 号	円墳	後期	1	1						2	2	B
奈良県	葛城市	寺口忍海 H16 号	円墳	中期	1	1	1	1		1		4	4	A
奈良県	御所市	境谷 4 号	円墳	中期	1	1		1				3	3	B
奈良県	高取町	イノヲク 1 号	円墳	後期	1	1	1	1				4	4	A
奈良県	五條市	五條猫塚	方墳	中期	2	3	2	1	(1)	6		4＋	8＋	A
和歌山県	和歌山市	大日山 70 号	円墳	後期	1	2	1					3	4	B
和歌山県	みなべ町	箱谷 3 号	円墳	後期	1							1	1	C 1
鳥取県	倉吉市	高畔 2 号	円墳	後期			1					1	1	C 3
岡山県	真庭市	四ツ塚 1 号	円墳	後期	1	1	1					3	3	B
岡山県	勝央町	勝央町内横穴	横穴	後期	1							(1)	(1)	(C 1)
岡山県	鏡野町	ツルギ	不明	後期	1	1	(1)					2＋	2＋	B
岡山県	津山市	長畝山 2 号	円墳	中期	1	1	1					3	3	B
岡山県	津山市	西吉田北 1 号	方墳	中期	1		1				鉄鐸	2	2	B
岡山県	総社市	随庵	円墳	中期	1	1	1	1	(1)	1		4＋	4＋	A
岡山県	岡山市	一本松	前方後円墳	中期	1	2						2	3	B
岡山県	笠岡市	竹之内	円墳	後期	1							(1)	(1)	(C 1)
広島県	安芸高田市	上野部 1 号	—	—	1							(1)	(1)	(C 1)
広島県	広島市	三王原	円墳	中期		1						(1)	(1)	(C 2)
山口県	田布施町	後井 3 号	円墳	後期	1			2		1		2	3	B
山口県	下関市	心光寺 2 号	不明	後期		1						1	1	(C 2)
香川県	三豊市	財田西	—	—	1	1				(1)		3	3	B
愛媛県	今治市	古国分	—	—	1	1						2	2	B
愛媛県	今治市	矢田大塚	(円墳)	後期	1							(1)	(1)	(C 1)
愛媛県	伊予市	猪の窪	円墳	中期			1							C 3
愛媛県	松山市	かいなご 1 号	円墳	後期		1						1	1	C 2
愛媛県	松山市	塚本 1 号	円墳	後期			2							C 3
福岡県	福津市	新原・奴山 1 号	前方後円墳	中期	1	2						2	3	B
福岡県	福津市	新原・奴山 44 号	円墳	後期			1							C 3
福岡県	福間町	手光南 2 号	円墳	後期			1				蛇行鉄器			C 3
福岡県	福間町	割畑 1 号	円墳	中期			3				鉄鋌			C 3
福岡県	宗像市	平等寺原 5 号	円墳	後期	1	3						2	4	B
福岡県	宗像市	山ノ口 5 号	円墳	後期	1	3						2	4	B
福岡県	宗像市	山ノ口 6 号	円墳	後期	1	1						2	2	B
福岡県	宗像市	大井平野 1 号	円墳	前期			(1)			1		(1)	(1)	(C 3)
福岡県	古賀市	永浦 4 号	円墳	中期			1					1	1	C 3
福岡県	福岡市	クエゾノ 5 号	円墳	中期	1	1					鋳造鉄斧	2	2	B
福岡県	福岡市	広石南 A4 号	円墳	後期	1	1					鉤状鉄器	2	2	B
福岡県	福岡市	桑原石ヶ元 12 号	円墳	後期	1	2	1	1				4	5	A
福岡県	福岡市	桑原 A2 号	円墳	後期	1	1						2	2	B
福岡県	福岡市	桑原 A4 号	円墳	後期	1							1	1	C 1
福岡県	福岡市	東入部 504 号	円墳	後期	1							1	1	C 1
福岡県	福岡市	梅林	前方後円墳	中〜後期			1					1	1	C 3
福岡県	福岡市	徳永 B3 号	円墳	中期	1		1					(2)	(2)	(B)
福岡県	那珂川町	片縄丸ノ口Ⅴ -4 号	円墳	後期	1							1	1	C 1
福岡県	那珂川町	カクチガ浦 3 号	円墳 (墳裾)	中期	1						鉄鐸	1	1	C 1
福岡県	春日市	角田 2 号	円墳	後期		1						1	1	C 2
福岡県	筑前町	赤坂烏毛 1 号	円墳	後期	1		2			2		2	3	B
福岡県	朝倉市	妙見 8 号	円墳	後期	1	1				1		3	3	B
福岡県	小郡市	花立山 2 号横穴	横穴	後期	1							1	1	C 1
福岡県	小郡市	花立山 6 号横穴	横穴	後期		1		1		1		2	2	B
福岡県	小郡市	花立山 12 号横穴	横穴	後期			1					1	1	C 3
福岡県	甘木市	池の上 6 号	円墳	中期	1	1						2	2	B
福岡県	久留米市	石垣古墳群 A	不明	—	1							(1)	(1)	(C 1)
福岡県	久留米市	石垣古墳群 B	不明	—	1							(1)	(1)	(C 1)
福岡県	久留米市	七曲山 1 号	円墳	中期			1					1	1	C 3
佐賀県	小城市	丹坂峠	円墳	後期	1							1	1	C 1
佐賀県	鳥栖市	東十郎特別地区イ号	円墳	後期	1		1			1		2	2	B
佐賀県	鳥栖市	東十郎特別地区ロ号	円墳	後期	1							1	1	C 1
佐賀県	鳥栖市	梅坂 5 号	不明	後期	1							1	1	C 1
佐賀県	吉野ヶ里町	塚山	前方後円墳	中期		1	1					2	2	B
熊本県	熊本市	丸山 3 号	円墳 (周溝)	中期	1							1	1	C 1

凡例は第 20 表・第 21 表に準拠



第 211 図　朝鮮半島南部から出土した鉄鉗の諸例

第 19 表　朝鮮半島南部における鍛冶具出土古墳

道	所在地	古墳名	埋葬施設等	時期	鍛冶具						鉄製鍛冶具の内容		
					鉄鉗	鉄鎚	鏨	鑪	鉄砧	砥石	種	点	類型
京畿道	平澤	玄華里Ⅳ -1 区土坑墓	土坑	中期	1						1	1	C
忠清北道	清原	米川里古墳群	不明	—	1						—	—	—
忠清南道	天安	龍院里 58 号	土坑	中期	1						1	1	C
全羅北道	完州	上雲里カ 5 号（1）	木棺	前～中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ナ 1 号（1）	木棺（粘土）	前～中期	1	1		1			3	3	B
全羅北道	完州	上雲里ナ 1 号（6-2）	木棺（粘土）	前～中期	2						1	2	C
全羅北道	完州	上雲里ナ 2 号（1）	木棺	前～中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ナ 4 号（4）	木棺	中期	1	1		1			3	3	B
全羅北道	完州	上雲里ナ 4 号（7）	木棺	中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ナ 5 号（2）	木棺	中期	1	1	1	1			4	4	A
全羅北道	完州	上雲里ナ 6 号（2）	木棺	前～中期	1	1		1			3	3	B
全羅北道	完州	上雲里ナ 7 号（1）	木棺	前～中期	1						1	1	C
全羅北道	完州	上雲里ナ 7 号（9）	木棺	前～中期	1	2					2	3	B
全羅北道	完州	上雲里ナ 8 号（1）	木棺	中期	1	1	1	1			4	4	A
全羅北道	完州	上雲里ナ 8 号（2）	木棺	中期	1	2		1			3	4	B
全羅北道	完州	上雲里ナ 8 号（3）	木棺	中期	1	1		1			3	3	B
全羅北道	完州	上雲里ラ 1 号（1）	木棺	前～中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ラ 1 号（20）	木棺（粘土）	前～中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ラ 1 号（28）	木棺	中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ラ 1 号（29）	木棺	中期	1	2	2	1			4	6	A
全羅北道	完州	上雲里ラ 2 号（1）	木棺	中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ラ 2 号（3）	木棺	中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ラ 8 号	木棺	中期	1						1	1	C
全羅南道	務安	社倉里甕棺	甕棺	中期	1	1	(1+)		1	2	4+	6+	A
慶尚北道	慶州	皇南大塚北墳	積石木槨	中期	1						1	1	C
慶尚北道	慶州	金鈴塚	積石木槨	後期	1						1	1	C
慶尚北道	慶州	月山里 A18 号	竪穴式石槨	中～後期	2	3		1			3	6	B
慶尚北道	慶州	徳泉里 4 号（副）	積石木槨	中期	1	1	3		1		4	6	A
慶尚北道	慶山	林堂造永 C Ⅰ -135 号	横穴式石室	後期	1		1		1		3	3	B
慶尚北道	慶山	林堂 D Ⅱ -47 号	土坑	後期	1	1			1		3	3	B
慶尚北道	慶山	林堂 D Ⅱ -182 号	土坑	後期	1	1	(1+)		1		3+	3+	B +
慶尚北道	慶山	林堂造永 E Ⅰ号（副）	木槨	中期	1		1			1	3	3	B
慶尚北道	慶山	林堂造永 E Ⅱ -1 号	横穴式石室	中期	1					1	2	2	B
慶尚北道	慶山	新上里カⅡ -45 号	積石木槨	中期	1	1			1		3	3	B
慶尚北道	慶山	新上里カⅢ -10 号	木槨	中期	1		2				2	3	B
慶尚北道	大邱	時至洞Ⅰ B-61 号	竪穴式石槨	後期		2					1	2	C
慶尚北道	大邱	時至洞Ⅰ C-15 号	竪穴式石槨	後期	1	1	1				3	3	B
慶尚北道	大邱	時至洞Ⅰ D-145 号	竪穴式石槨	後期	1	2					2	3	B
慶尚北道	大邱	旭水洞ナ -9 号	竪穴式石槨	後期	1	1		1	1		4	4	A
慶尚北道	大邱	時至洞 39 号	—	後期	1						1	1	C
慶尚北道	大邱	汶陽里 35 号	竪穴式石槨	中期	1	1					2	2	B
慶尚北道	大邱	達城古墳群	不明	不明	1						—	—	—
慶尚北道	浦項	鶴川里 196-1 号	竪穴式石槨	中～後期	1	1			1		3	3	B
慶尚北道	尚州	軒新洞 58 号	竪穴式石槨	中～後期	1		2				2	3	B
慶尚北道	尚州	軒新洞 95 号	横口式石槨	後期	1	1	1	1			4	4	A
慶尚北道	亀尾	黄桑洞 94 号	竪穴式石槨	中～後期	1	1					2	2	B
慶尚南道	蔚山	大垈里 36 号	竪穴式石槨	中～後期	1	1	1				3	3	B
慶尚南道	蔚山	早日里（昌）54 号	不明	—	1	1					2	2	B
慶尚南道	蔚山	明山里 38 号	横穴式石室	後期		1			1		2	2	B
慶尚南道	蔚山	茶雲洞バ -12 号	竪穴式石槨	後期	1	1			1		3	3	B
慶尚南道	蔚山	薬泗洞北洞 21 号	竪穴式石槨	後期	1		1	1	1		4	4	A
慶尚南道	蔚山	薬泗洞北洞 178 号	竪穴式石槨	中期		1	1	(1)			3	3	B
慶尚南道	蔚山	薬泗洞北洞 184 号	竪穴式石槨	中期	1		1	1			3	3	B
慶尚南道	蔚山	薬泗洞北洞 187 号	竪穴式石槨	中期	2	1					2	3	B
慶尚南道	蔚山	薬泗洞北洞 200 号	竪穴式石槨	中期	1	1	1				3	3	B
慶尚南道	蔚山	薬泗洞北洞 218 号	竪穴式石槨	中期	1	1			1		3	3	B
慶尚南道	蔚山	華峰洞 14 号	竪穴式石槨	—	1						1	1	C
慶尚南道	蔚山	雲化里 1 号	横穴式石室	後期	1						1	1	C
慶尚南道	昌寧	桂城 A-14 号	横口式石室	後期	1	1			1		3	3	B
慶尚南道	昌寧	桂城 B39-1 号	横口式石室	後期		1			1		2	2	B
慶尚南道	昌寧	桂城 B-3 号	横口式石室	後期	1						1	1	C
慶尚南道	昌寧	桂城 I-26 号	横口式石室	後期	1						1	1	C
慶尚南道	昌寧	桂城 89 号	横口式石室	後期	1	1			1		3	3	B
慶尚南道	陜川	玉田 M3 号	木槨	中期	1	1				5	3	7	B
慶尚南道	陜川	芋浦里 E5-1 号	横口式石室	後期	1	1					2	2	B
慶尚南道	陜川	倉里 B-26 号	横口式石室	後期	1						1	1	C
慶尚南道	宜寧	礼屯里 46 号	竪穴式石槨	中期	1	2					2	3	B
慶尚北道	梁山	北亭里 14 号	横口式石室	後期	1	1	1		1		4	4	A
慶尚南道	密陽	月山里 5 号	竪穴式石槨	後期	1	1			1		3	3	B
慶尚南道	釜山	福泉洞 35 号	竪穴式石槨	中期	1	1					2	2	B
慶尚南道	釜山	福泉洞 73 号	竪穴式石槨	中期		1					1	1	C
慶尚南道	金海	徳亭里古墳群	竪穴式石槨	中～後期	1						1	1	C
慶尚南道	昌原	縣洞 64 号	竪穴式石槨	中期	1		1				2	2	B
慶尚南道	馬山	盤渓洞Ⅰ -24 号	竪穴式石槨	後期	2	2			1		3	5	B
慶尚南道	馬山	合城洞 9 号	竪穴式石槨	中～後期	1	1					2	2	B
慶尚南道	咸安	会山里 1 号	竪穴式石槨	中期	1	1					2	2	B
慶尚南道	山清	玉山古墳群	不明	—	○	○					—	—	—

凡例は第 20 表・第 21 表に準拠

播する。東日本への移入は古墳時代中期後葉以降であり、西日本地域と比べて遅れる傾向がある。また、東日本では副葬される鍛冶具が小型品の鉄鉗に限定され、鉄器製作工程の複雑化という視点においても西日本地域との違いがある。6 世紀以降も、東日本地域では小型の鉄鉗のみを副葬することが存続することを考慮すると、鉄器製作にかかわる東西差は少なくとも 6 世紀までは顕著であったと解釈できよう。このように、副葬鍛冶具の充実度の違いは、日本列島内における鉄器生産能力の違いを示すものと捉えられる。

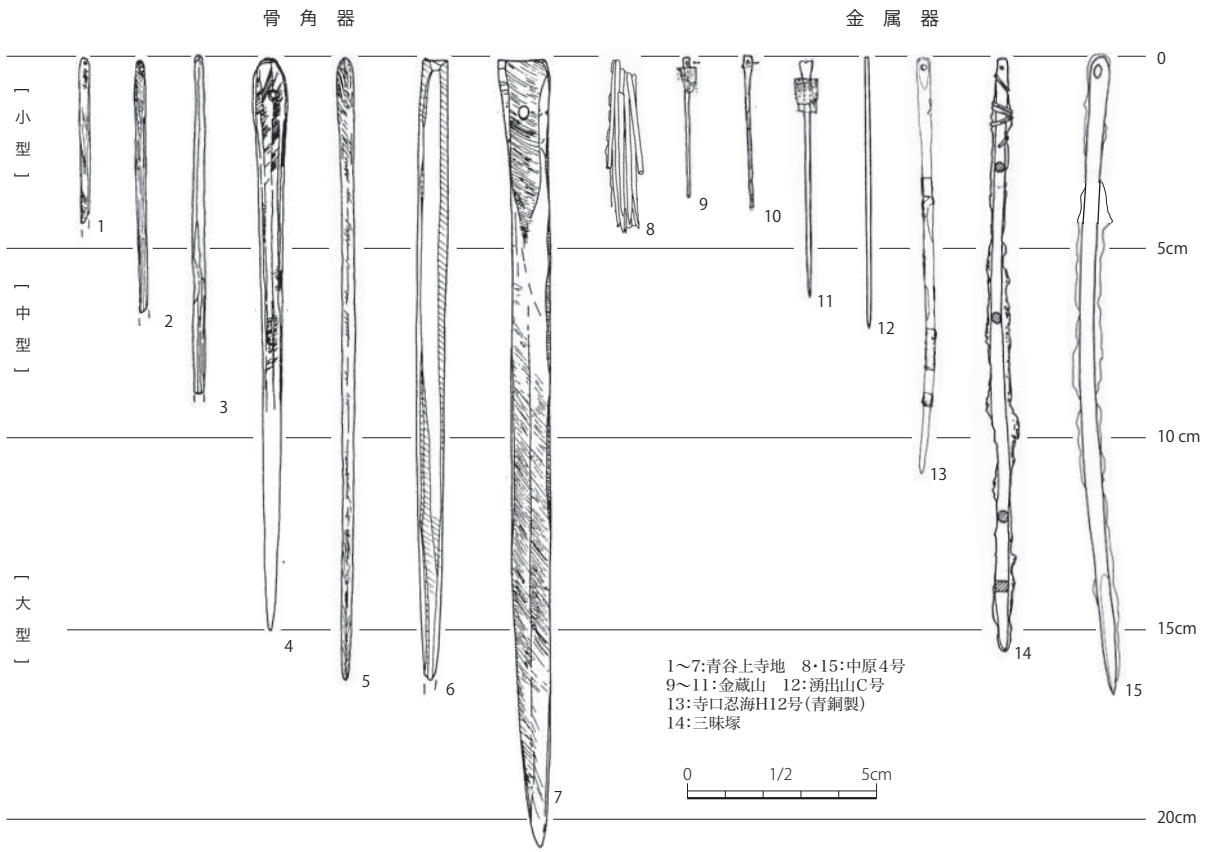
鍛冶具の副葬には、鉄器生産の統括者としての首長の性格や直接的な鉄器生産者としての職能が示されると解釈される。小規模な古墳である中原 4 号墳の事例は、両者の性格を併せ持つものといえる。当墳では鍛冶具以外の生産用具も豊富に出土していることを重視すると、中原 4 号墳における鉄鉗の副葬行為は、地域における手工業生産を総括する中で鉄器生産にかかわる技術集団も統率する役割を担った被葬者の職能を表象するものと捉えておきたい。

5　金属製針副葬の意義

古墳から出土する金属製針については、鉄製のものと青銅製のものが知られている。出土事例の報告に合わせ、集成や事例紹介が繰り返し行われ（安部 1969、平ノ内 1984、楠本・朴編 1986、大谷 2010）、おおよその変遷が示されるに至っている（大谷 2012、註 10）。

鉄製針については、布や革などを縫う機能を果たす縫い針のほかに、穿孔などの用途をもった工具としての針状鉄製品がある。また、髪留めとしての針状品についても、その存在を想定すべきであろう。糸を通す小孔が認められない場合、形態的特徴からこれらを弁別することは難しい。

また、後述するように、古墳から出土する針には筒状の容器に入れられたり、束の状態で収められたりするものが知られ、収納状況等から縫い針と認識しうる事例が多く認められる。本稿で扱う金属製針には、工具や髪留め等、別の用途の製品が含まれる余地があるが、可能な限り縫い針と認識しうる事例を比較資料として取り上げておきたい（第 20 表・第 21 表）。



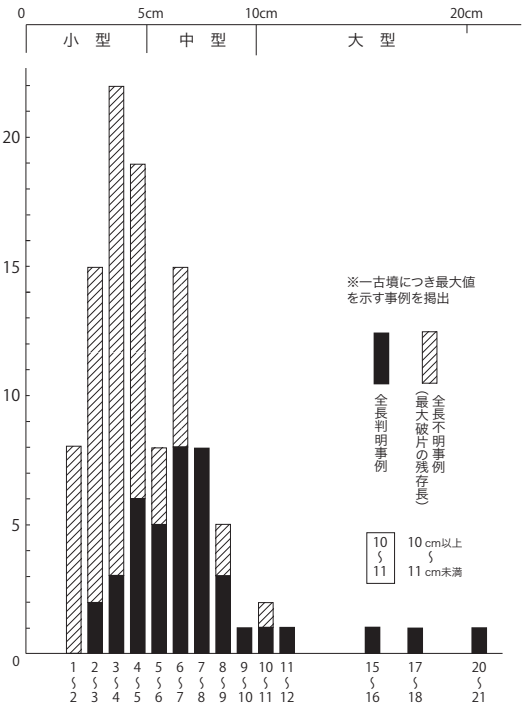
第 212 図　針の諸例

形態的特徴　針は直径 1mm 程度の繊細な遺物であることから欠損する事例が多く、網羅的に形態や大きさを検討することが難しい。第 213 図は古墳出土の金属針の大きさを整理したものであるが、総数が不明確なものが多いことから、一古墳につき、最大値を示す 1 点をとりあげ図示した。全体形状がうかがえる事例の長さを比較すると、おおむね 4 ～ 6cm を頂点に 2.5cm ～ 10cm 程度の大きさのものが圧倒的多数を占めることが分かる。定量的に数値を示すことは難しいが、ここでは大谷宏治の認識に導かれながら、全長 5cm 未満のものを小型品、5cm 以上 10cm 未満のものを中型品、10cm 以上 20cm 未満のものを大型品、20cm 以上のものを超大型品としたい（大谷 2010）。中原 4 号墳では、全長 3.5 ～ 4.0cm ほどの小型品 12 本が束になっており、全長 17.0cm の大型品が錆着している。また、本墳には全長 14.1cm 大型品がもう一点ある。12 本以上の小型品と 2 本の大型品が組み合う事例は、他に例がない。

古墳出土の金属針の頭部は、扁平にされることが一般的で、孔があけられているものが多数であったと想定できる。頭部は破損することも多く、微細な孔を報告時点で見落とすことも多いとみられる。報告時には孔の存在が不明確でも、再検討の結果、孔が確認できる事例報告があり（間壁 2000）、金属針における孔の確認が困難なことをよく示している。近年の報告例では、X 線画像をふまえた詳細な観察を経ており、頭部に孔を認める事例が増加している。ただし、滋賀県湧出山 C 号墳例など念入りな検討を加えても孔が確認できない事例もある。金属製針についても、青谷上寺地遺跡から出土した骨角製針に知られるような無孔式、有頭式といった頭部形態も想定すべきであろう。

針の断面形態についても円形、方形、杏仁形などの多様性が認められる。微小な鉄器の場合、正確な断面形状をうかがうことが困難であること、円形に見えても実際は角が取れた多角形状を呈するものが含まれる可能性が高いことなどから、断面形状にかかわる検討は深めることが難しい。ここでは、扁平で杏仁形を呈する奈良県大谷今池 2 号墳例のような、通常の裁縫とは異なる用途に用いられた可能性がある針も知られていることを指摘するにとどめておきたい。

小型品や中型品は、古墳時代を通じて存続し、金属針として一般的な製品であることが知られる。いっぽう、



第 213 図　針の全長比較

大型品や超大型品については数が限られることに加え、奈良時代の遺品である正倉院宝物中に銀製、銅製、鉄製の全長 35cm を超える超大型品が知られることから、儀礼用具である可能性が示されている（大谷 2012、註 11）。しかし、青谷上寺地遺跡から出土した弥生時代の骨角製針をみると、全長 10cm をこえる大型品が一定量含まれることが知られており、大型であることのみをもって非実用品と判断するのは早計であろう。中原 4 号墳から出土したその他の生産用具ほぼ全てが実用に耐えうる大きさであることから考えても、本墳から出土した大型針についても、たとえ儀式で用いられたことがあったとしても一義的には実用品と捉える方が妥当と判断しうる。針は、服飾や刺繍といった繊細な裁縫用具として用いられる以外にも、敷物や皮革製品といった比較的硬く大きな物品の製作に使われることも想定できる。大型品は機能分化した針の一形態として、弥生時代から継続して存在するものと捉えられよう。

分布と推移　鉄製針は古墳時代の前期前半から終末期まで出土例がある。弥生時代には福岡県南八幡遺跡例など工具としての針状鉄製品が知られるものの、小孔をもつような縫い針は認められない。縫う機能をもった狭義の針は古墳時代に移行してから鉄器化が進んだものとみてよいだろう。銅製の針は後期、終末期のものが知られ

第 20 表　針出土古墳（1）

都府県	所在地	古墳名	墳形	埋葬施設	時期	針の詳細					共伴関係		
						数	出土位置	長さ	孔	特記事項	甲	鏃	人骨
山形県	山形市	お花山 1 号（10）	円墳	木直	中期	1	刀子共伴	(8.3)	不明			×	
福島県	会津坂下町	森北 1 号	後方	木直	前期	1	（農工具共伴）	4.3	不明			×	
福島県	白河市	郭内 6 号横穴	—	横穴	終末期	○	—	(3.8)	不明			○	
茨城県	稲敷市	原 1 号	後円	木直	前期	○	農工具共伴	(3.0)	不明	糸状繊維有		×	
茨城県	行方市	三昧塚	後円	箱石	中期	1	石棺内	15.8	有孔	大型針	○	○	♂
茨城県	坂東市	上出島 2 号	後円	粘梆	前期	1	—	5.1	不明	筒入カ		○	
栃木県	宇都宮市	中島笹塚 1 号	円墳	ー	中期	17+	—	(3.8)	不明	17 本束		—	
群馬県	前橋市	前橋天神山	後円	粘梆	前期	7	—	—	不明			○	
千葉県	香取市	城山 1 号	後円	横石	後期	30	—	(5.0)	有孔		○	○	
千葉県	市原市	山王山	後円	粘梆	後期	3	刀子共伴	(1.9 ～ 2.3)	不明			○	
千葉県	我孫子市	水神山	後円	粘梆	中期	2+	刀子共伴	(5.0)	不明	筒入		×	
東京都	世田谷区	殿山 1 号	円墳	横石	後期	1	—	(2.2)	不明			○	
神奈川県	伊勢原市	下谷戸 7 号	円墳	横石	後期	1	単独	(1.8)	不明			○	
神奈川県	さんせ塚	さんせ塚	円墳	横石	後期	(1)	—	—	不明			○	
石川県	能美市	西山 9 号	不明	横石	後期	13	—	(3.3 ～ 3.5)	不明	13 本束		○	
石川県	能美市	秋常山 2 号	方墳	粘梆	中期	3	農工具共伴	(4.1)	不明	筒入		×	
石川県	七尾市	中島ヤマンタン 25 号	円墳	横石	後期	(2)	—	(3.5)	不明			○	
福井県	福井市	花野谷 2 号	帆立	粘梆	中期	16+	装身具共伴	5.2 ～ 6.7	有孔	筒入		○	
長野県	伊那市	如来堂	円墳	—	後期	(1)	—	—	不明		(○)	○	
岐阜県	本巣市	船木山 O274 号	(円墳)	横石	後期	6+	—	(4.5)	不明	5 本束		×	
岐阜県	大垣市	昼飯大塚	後円	竪石	中期	37 片	—	(2.5)	不明	束		—	
岐阜県	岐阜市	龍門寺 1 号	円墳	粘梆	中期	4+	単独	4.5	不明		○	○	
静岡県	三島市	田頭山 1 号	円墳	横石	後期	1	（武器共伴）	10.6	有孔			○	
静岡県	富士市	須津 J6 号	円墳	横石	後期	4+	単独	2.4 ～ 2.9	有孔			○	
静岡県	富士市	中原 4 号	円墳	横石	後期	14+	農工具共伴	4.6、17.1	有孔	12 本束、大型 2		○	
静岡県	藤枝市	岩田山 21 号	円墳	木直	中期	1	—	—	不明			×	
静岡県	掛川市	高代山 4 号	円墳	木直	後期	3±	—	(3.0)	不明			○	
静岡県	掛川市	春院林	円墳	粘梆	前期	5 片	（農工具共伴）	(1.1 ～ 2.1)	不明	筒入		×	
愛知県	犬山市	東之宮	後方	竪石	前期	9+	農工具共伴	6.0	不明	筒入		○	
三重県	伊賀市	石山（東梆）	後円	粘梆	中期	20+	武器共伴	—	不明	筒入	○	○	
		石山（西梆）		粘梆		20+	農工具共伴	—	不明	筒入		×	
滋賀県	長浜市	湧出山 C 号	方墳	木直	中期	8+	農工具共伴	7.2	無	筒入		○	
京都府	城陽市	芝ヶ原 10 号（2）	円墳	粘梆	中期	13 片	単独	6.0	不明	筒入		×	
京都府	城陽市	芝ヶ原 11 号（1）	後円	粘梆	中期	8	単独	—	不明	筒入	○	○	
京都府	綾部市	奥大石 2 号（SX205）	方墳	木直	中期	1	装身具共伴	2.6	不明			×	
京都府	城陽市	西山 1 号	後方	粘梆	前期	13	単独	—	—			×	
京都府	向日市	井ノ内稲荷塚	後円	横石	後期	2	—	(1.6 ～ 2.1)	不明			○	
京都府	京丹後市	里ヶ谷 3 号	—	横穴	後期	1	—	7.0	不明			×	
京都府	南丹市	園部垣内	後円	木直	前期	4+	農工具共伴	7.0 ～ 8.0	不明	繊維巻付	○	○	
京都府	南丹市	平山	円墳	木直	前期	1	農工具共伴	(2.9)	不明			×	
京都府	京丹後市	大田南 6 号	円墳	木直	前期	8 片	単独	(4.7)	不明			×	
京都府	長岡京市	宇津久志 1 号	方墳	木直	(中期)	○	—	—	不明			×	
京都府	与謝野町	入谷西 D1 号	(方墳)	横石	後期	4+	土師器壺内	5.3	不明	筒入		×	
京都府	木津川市	上人ヶ平 16 号	方墳	木直	中期	2	単独	—	不明			×	
大阪府	高槻市	弁天山 D2 号（b）	後方	木直	中期	1	装身具共伴	(5.0)	不明			×	
大阪府	高槻市	弁天山 D2 号（c）	後方	木直	中期	1	刀子共伴	(3.0)	不明			○	
大阪府	高槻市	紅葺山 C3 号	円墳	木直	中期	2	—	—	不明			○	
大阪府	岸和田市	風吹山（2）	帆立	粘梆	中期	8	農工具共伴	(4.0)	不明			×	
大阪府	八尾市	心合寺山（西）	後円	粘梆	中期	10 片	単独	(4.5)	不明		○	○	
兵庫県	豊岡市	カチヤ	円墳	木直	中期	3	単独	7.3 ～ 7.7	有孔			×	♀
兵庫県	豊岡市	深谷 1 号（2）	方墳	木直	中期	1	単独	4.2	不明			×	
兵庫県	朝来市	茶すり（1）	円墳	粘梆	中期	1	装身具・刀子共伴	(2.4)	不明	筒入	○	○	
		茶すり（2）		粘梆		10	農工具・櫛共伴	7.2	不明	筒入		○	
兵庫県	朝来市	梅田 1 号	円墳	木直	中期	21 片	装身具共伴	5.5 ～ 6.9	有孔	筒入		○	
兵庫県	朝来市	梅田 3 号（2）	円墳	木直	中期	1+	単独	(4.7)	不明			○	
兵庫県	養父市	田和	—	箱石	中期	○	—	—	不明			×	♀
兵庫県	朝来市	柿坪中山 4 号（1）	円墳	竪石	前期	1	農工具・武器共伴	(3.1)	不明			○	♂
兵庫県	たつの市	鳥坂 3 号	円墳	粘梆	中期	(○)	(単独)	(6.1)	不明	針か不明確		×	
兵庫県	香美町	大寺山古墳群	—	—	中期	○	—	—	不明			×	
奈良県	奈良市	ベンショ塚（2）	後円	粘梆	中期	○	—	—	不明		○	○	
奈良県	桜井市	桜井茶臼山	後円	竪石	前期	○	—	—	不明			○	
奈良県	桜井市	双築 1 号	円墳	粘梆	前期	4±	農工具共伴	(2.7 ～ 3.7)	不明	筒入		×	
奈良県	宇陀市	見田大沢 1 号（中）	後円	木直	後期	1	（農工具共伴）	(4.9)	不明			○	
奈良県	葛城市	大和二塚（造出）	後円	横石	後期	10	—	20.2	不明			○	
奈良県	葛城市	寺口千塚 16 号	円墳	横石	後期	1	—	(10.7)	有孔			○	
奈良県	葛城市	寺口忍海 E12 号	円墳	横石	後期	1	—	11.0	有孔	青銅製		×	
奈良県	葛城市	寺口忍海 H34 号	円墳	横石	後期	1	—	(3.0)	不明	繊維巻付		○	
奈良県	葛城市	寺口忍海 H39 号	—	横石	後期	5	—	5.3	不明	筒入		○	
奈良県	斑鳩町	藤ノ木	円墳	横石	後期	17+	（農工具共伴）	3.2 ～ 3.5	不明	17 本+束	○	○	♂
奈良県	大和高田市	大谷今池 2 号	円墳	木直	後期	1	（農工具共伴）	(6.4)	有孔			○	
奈良県	葛城市	火野谷山 2 号	円墳	木直	中期	1+	—	(2.1)	不明			×	
奈良県	宇陀市	北原（北棺）	円墳	木直	中期	6	農工具共伴	8.0	有孔	筒入		○	
奈良県	宇陀市	北原西 1 号	後方	木直	中期	10+	農工具共伴	(～ 1.8)	不明	鉇鋸着		○	
奈良県	宇陀市	後出 6 号	円墳	木直	中期	5	単独	(2.7)	不明	筒入		○	
奈良県	宇陀市	前山 1 号（東）	円墳	木直	中期	1	単独	(5.2)	不明			×	
奈良県	宇陀市	池殿奥 5 号（南）	後円	木直	中期	2	—	(2.9)	不明			○	

第 21 表　針出土古墳（2）

都府県	所在地	古墳名	墳形	埋葬施設	時期	針の詳細					共伴関係		
						数	出土位置	長さ	孔	特記事項	甲	鏃	人骨
奈良県	宇陀市	ヲトンダ 4 号（1）	円墳	木直	中期	1	単独	—	不明			○	
奈良県	高取町	市尾今田 1 号	円墳	粘槨	中期	1	—	—	不明		○	○	
奈良県	高取町	タニグチ 1 号	円墳	粘槨	前期	2	農工具共伴	（1.8 ～ 3.3）	不明		○	○	
奈良県	高取町	タニグチ 3 号	円墳	木直	中期	8 片	農工具共伴	（～ 2.3）	不明			○	
和歌山県	御坊市	岩内 3 号	円墳	木直	中期	5	装身具共伴	7.6	有孔	筒入		×	♀
鳥取県	湯梨浜町	宮内 2 号（3）	後円	箱石	後期	1	—	3.6	不明			○	
鳥取県	北栄町	狼谷	円墳	箱石	中期	1	—	—	不明			×	
鳥取県	鳥取市	桂見 2 号（1）	方墳	木直	前期	○	—	—	不明			×	
鳥取県	鳥取市	糸谷 3 号（5）	方形墳	箱石	前期	1	単独	（3.4）	不明	単独か		×	
鳥取県	鳥取市	六部山 28 号（1）	円墳	木直	後期	1	（装身具共伴）	6.6	不明			×	
鳥取県	鳥取市	六部山 80 号	円墳	木直	後期	1	—	（1.7）	不明			○	
鳥取県	鳥取市	浜坂横穴墓群	—	横穴	終末期	○	—	—	不明			○	
鳥取県	米子市	日下 12 号	円墳	箱石	後期	1	農工具共伴	（1.6）	不明			○	
島根県	出雲市	上島	円墳	横石	後期	4	—	（3.6）	不明			○	
島根県	安来市	小丸子山	—	横穴	後期	○	—					×	
島根県	雲南市	松本 1 号（1）	後方	粘槨	前期	7+	農工具共伴	8.6	不明	繊維巻付		×	
島根県	雲南市	神原神社	方墳	竪石	前期	4 片	農工具共伴	6.3	不明			○	
岡山県	赤穂市	四辻 1 号	円墳	木直	中期	1	刀子共伴	（6.0）	不明			×	
岡山県	岡山市	七つ塊 1 号（1）	後方	竪石	前期	2	—	（4.3）	不明			○	
岡山県	岡山市	金蔵山（合子）	後円	竪石	中期	30±	農工具共伴	2.3 ～ 3.5	有孔	筒入		○	
		金蔵山（南）		竪石		○	農工具共伴	（3.2）	不明		○	○	
岡山県	岡山市	旗振台（北）	方墳	粘槨	中期	1	（単独）	—	不明		○	○	
岡山県	美咲町	月の輪（南）	円墳	粘槨	中期	22+	単独	4.2 ～ 7.5	不明	筒入		×	（♀）
岡山県	瀬戸内市	我城山 6 号	円墳	木直	中期	1	—	—	不明			○	
岡山県	倉敷市	勝負砂	後円	竪石	中期	1	工具共伴	11.6	有孔	筒入	○	○	
岡山県	総社市	佐野山	方墳	箱石	中期	2	—	7.3	不明	筒入	○	○	
岡山県	真庭市	堂山 5 号	円墳	木直	中期	2	—	—	不明			○	
岡山県	総社市	西山 26 号	方墳	粘槨	中期	3+	装身具共伴	（1.7）	不明			×	
広島県	福山市	山の神	（円墳）	横石	後期	10+	—	不明	不明			×	
広島県	福山市	才谷 3 号（A）	円墳	箱石	中期	1	単独	（3.0）	不明			×	
広島県	福山市	才谷 4 号（B）	円墳	土坑	中期	1	（農工具共伴）	（1.8）	不明			×	
広島県	府中市	山ノ神 1 号（2）	円墳	箱石	中期	1	—	（2.3）	不明			×	♂／♀
広島県	広島市	地蔵堂山 1 号	円墳	木直	中期	1	有孔円盤共伴	（4.2）	不明			○	
山口県	山口市	赤妻（舟）	円墳	石棺	中期	（20）	（装身具共伴）	—	不明			×	♀
山口県	山口市	朝田Ⅰ -2 号周溝	円墳	箱石	中期	1	石製模造品共伴	（5.2）	不明			×	♀
山口県	山口市	朝田Ⅲ -7 号	円墳	箱石	中期	1	単独	（4･2）	不明			×	
山口県	山口市	朝田Ⅱ -12 号	円墳	箱石	中期	2	単独	（3.2）	不明			○	（小児）
山口県	田布施町	国森	方墳	木直	前期	1	平根鏃・農工具共伴	（0.8）	不明			○	
山口県	長門市	糠塚横穴墓群	—	横穴	終末期	1	—	5.1	不明	青銅製		×	
山口県	下関市	形山石棺	—	箱石	（前期）	1	—	—	不明			×	
山口県	下関市	汐入町	—	石蓋	（中期）	10±	—	—	不明			×	
愛媛県	今治市	雉之尾 1 号	後方	木直	前期	3	武器共伴	—	不明			○	
愛媛県	今治市	若草 4 号	—	横石	後期	1	—	（1.5）	不明			×	
愛媛県	松山市	葉佐池（2）	楕円墳	横石	後期	2	—	（2.7）	不明			○	
福岡県	古賀市	馬渡東ヶ浦 SF4	—	土坑	中期	7+	装身具共伴	（1.8 ～ 6.9）	不明			×	
福岡県	福岡市	老司（3）	後円	横石	中期	2	農工具共伴	（6.6）	不明		○	○	
福岡県	福岡市	鋤崎（1）	後円	横石	中期	6+	刀子共伴	（4.8）	不明	筒入		×	
		鋤崎（2）		横石		7	単独	（3.7）	不明	筒入		×	
福岡県	宇美町	神領 2 号	円墳	粘槨	中期	3	装身具共伴	6.5	有孔			×	
福岡県	筑紫野市	欠塚	後円	横石	中期	1	—	（2.2）	不明		○	○	
福岡県	みやこ町	古川平原 5 号	円墳	箱石	中期	1	単独	（3.2）	不明			○	♂
福岡県	福津市	奴山正園	円墳	箱石	中期	36±	石製模造品共伴	6.0	不明	筒入 3×12 カ	○	○	
福岡県	大宰府市	菖蒲浦 1 号	—	粘槨	中期	1	装身具共伴	6.2	有孔	筒入		×	
福岡県	甘木市	柿原Ⅰ -2 号	円墳	横石	後期	11	装身具共伴	3.7 ～ 4.0	不明	11 本束		○	
福岡県	粕屋町	西尾山 1 号	円墳	横石	中期	1	装身具共伴	（6.4）	不明			×	
福岡県	志免町	萱葉 1 号	円墳	木直	中期	5+	装身具共伴	（4.3）	不明			○	
福岡県	志免町	七夕池	円墳	竪石	中期	2	装身具共伴	（5.5 ～ 6.2）	不明	筒入		×	♀
福岡県	みやこ町	惣社	円墳	竪石	中期	2	—	（8.8）	有孔	採集品		○	
福岡県	苅田町	奥ヤ子	不明	横石	後期	1	—	（4.5）	不明			○	
福岡県	苅田町	古大内石棺	—	箱石	中期	2+	—	—	不明			不明	
福岡県	那珂川町	野口 2 号（1）	—	土坑	中期	2	—	5.1	不明			×	
福岡県	うきは市	天神山	—	箱石	中期	4±	—	7.2	不明	繊維巻付		不明	
福岡県	甘木市	古寺 D-10 号	—	石蓋	中期	1	刀子共伴	（3.2）	不明			×	
佐賀県	佐賀市	熊本山	円墳	石直	前期	1	農工具共伴	4.5	不明		○	×	
熊本県	玉名市	伝左山	円墳	横石	中期	3+	—	—	不明		○	○	
大分県	玖珠町	おごもり 1 号（4）	方墳	箱石	（中期）	1	—	—	不明			○	
宮崎県	国富町	市の瀬 10 号	—	地下	後期	1	農工具共伴	9.5	有孔			○	

凡例：古墳名欄の（　）：埋葬施設の名称　　その他の欄の（　）：不確実な情報であることを示す　　＋：実数は増える可能性がある事例　　±：概数を示す
墳形の略称　後円：前方後円墳、後方：前方後方墳、帆立：帆立貝形墳
埋葬施設の略称　木直：木棺直葬、箱石：箱式石棺、横石：横穴式石室、粘槨：粘土槨、竪石：竪穴式石室、地下：地下式横穴

鉄製針出土古墳の分布（前期～中期）

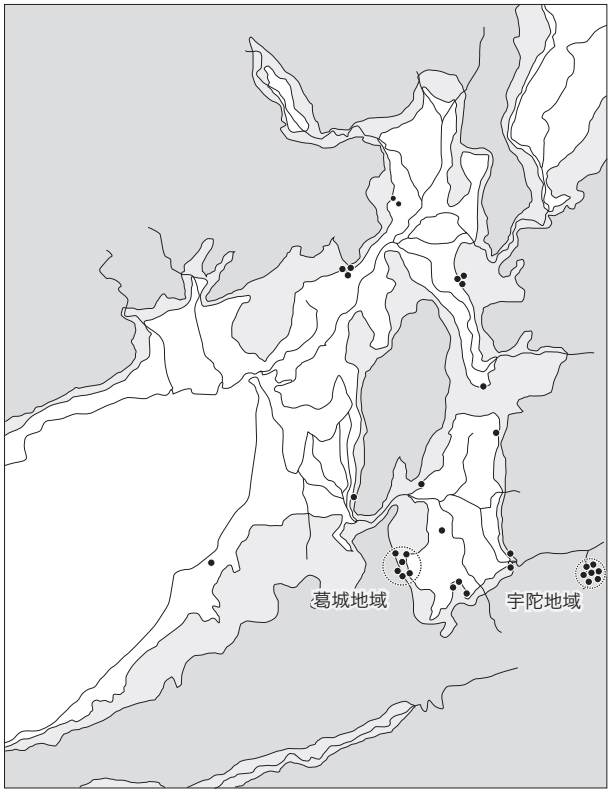
鉄製針出土古墳の分布（後期～終末期）

第214図　針の分布

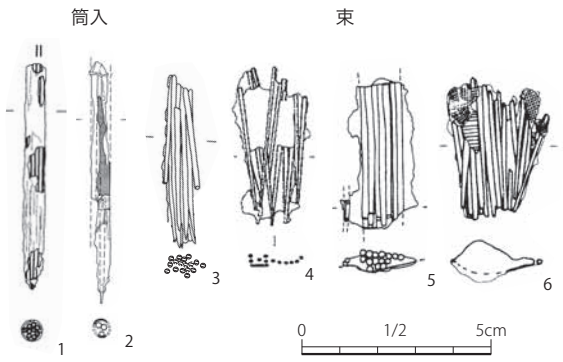
ている。正倉院にみられる銅針と関連づけることが許されれば、儀礼に用いられた可能性も考慮しうる。小型品、中型品、大型品といった多様性は、弥生時代の骨角器に認められるので、道具としての機能分化は弥生時代に進行していたことが分かる。

古墳時代を通じて針が出土した古墳の分布の中心は近畿地方と捉えられるが、北部九州、瀬戸内、山陰などからの出土例も多い。分布の中心が近畿地方中央部にあること、大型古墳の副葬品に含まれることから、葬送儀礼が定型化されていく中で、倭王権の中枢が鉄製針を儀礼用具として採用し、地方に拡散させたと捉えてよいだろう。針が出土した古墳に注目すると、前期では前方後円（方）墳（註12）が、中期では甲冑を出土するような有力古墳が多いことに気付く。針の副葬が全国の有力首長の間で共有されていたことを伝えている。

いっぽう、中小古墳から針が出土することも多い。とくに奈良県の宇陀地域や忍海郡域を含む葛城地域は、中期から後期にかけて針を副葬する古墳が目立ち、針の副葬行為が小地域の中で特化していたことが分かる（第215図）。この地域の針出土地には寺口忍海古墳群など渡来系技術者集団の墳墓とみられる古墳群が含まれ、特産物の一つに布・皮革製品が含まれていた可能性が考えられる。この他、針の出土古墳が比較的集中する地域として、北部九州をはじめ、山口県域、鳥取県域などがあ



第 215 図　近畿地方中央部における針出土古墳の分布



1:東之宮　2:奴山正園　3:中原4号　4:柿原I2号　5:中島笹塚1号　6:藤ノ木

第 216 図　針の副葬形態

げられる。これらの地域の評価は個別に検討を深める必要があるが、針の副葬行為が偏って認められることは、地域性の発露と評価できるだろう。

副葬形態　針の副葬形態には、竹などの筒状容器に入れられるものに加え、筒以外のものを用いて束にされている事例や、1 本ずつ分けて副葬する場合などがある。筒を容器として用いた事例では、2 ～ 3 本といった少数の針がまとめられていることが多いが、愛知県東之宮古墳例のように一つの筒に 9 本程度の針を入れた事例も知られる。筒の直径は 5mm 程度であり、その材質は竹である可能性が高い。筒入りの副葬形態は、古墳時代前期から後期まで認められるが、前期や中期の事例が多く、古墳時代の中では比較的古い時期に好まれたものといえるだろう。

針を束にして副葬する場合は、10 数本がまとめられている事例が多い。繊維などが巻きついた事例もあるので、針の束を糸などで巻きつけたり、容器や袋に入れたりしたものとみられる。針を束ねて副葬する行為は古墳時代前期から看取できるが、古墳時代後期の事例が目立つ。束の状態で副葬することは、筒に入れることと入れ替わり、比較的新しい時期に多いといえるだろう。

針は単体で出土する場合もあるが、中原 4 号墳の大型針のように、2 本一組で使用された可能性が想定できることもある。正倉院の針には、同大の超大型品が 2 本ずつ知られ、奈良時代には針の員数を示す助数詞として片一方であることを表す「隻」が用いられている。儀式の中では針を 2 本一組で用いることが多かったことを示している。

共伴遺物　竪穴系埋葬施設の事例を中心に、葬送儀礼における針の使用方法が判明する出土状態を瞥見しておこう。埋葬施設内の細部における針の共伴関係を整理すると、農工具と混在するもの、竪櫛や玉類など装身具と共伴するもの、滑石製品とともに用いられるもの、単独で出土するもの、などが認められる。中でも農工具との共伴関係は各時期を通じて認められる。とくに、岡山県金蔵山古墳の事例は注目できる。金蔵山古墳では中央施設副室に収められた合子内から多くの鉄製農工具が出土しているが、同一の合子内には針も収められている。針が農工具と同様に生産用具の一種として認識されていたことを示す事例といえるだろう。中原 4 号墳の事例も農工具や鍛冶具との共伴関係が認められるので、生産用具の一種として副葬された意味合いが強いと判断しうる。

いっぽうで、針が被葬者の頭部を中心に鏡や装身具などと近接して出土する事例や、臼玉や有孔円盤、琴柱形石製品などと共に出土する事例も一定量認められる。こうした事例は鏡や装身具、滑石製模造品と同様に、針が被葬者を邪悪なものから遠ざける辟邪の呪具として用いられていた可能性を想定しうる。針が単独で出土する場合も、辟邪の祭祀具として使用された可能性を考慮すべきであろう。

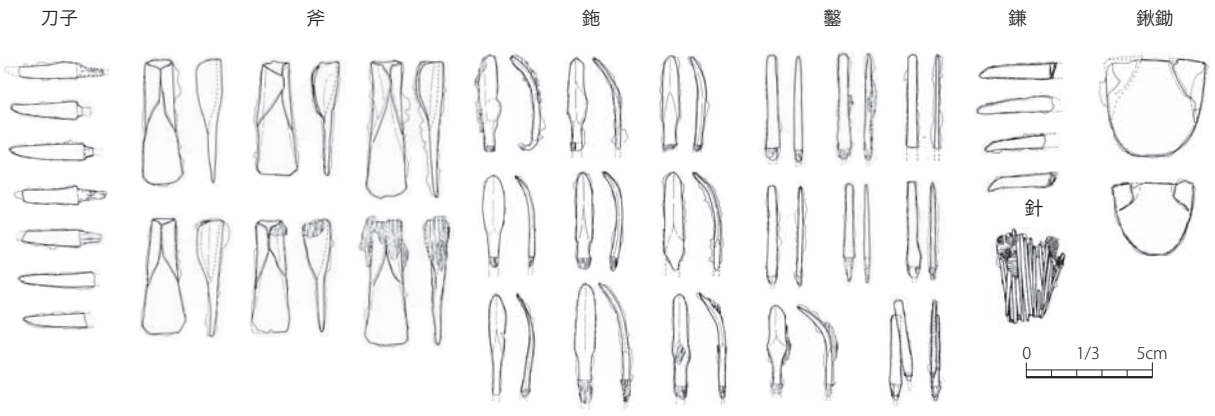
針と性別　針が出土した埋葬施設に性別が判明する人骨が伴う事例は、現状で 13 例知られる。このうち男性人骨に伴う事例が 4 例、女性人骨に伴う事例が 8 例、男・女両方の人骨が伴う事例が 1 例ある。男性人骨と針との共伴関係が認められるので、針の副葬は必ずしも女性被葬者に限定できないことが分かる。人骨が遺存しない事例において、被葬者の性別を考える上では鏃の有無が有効である（清家 1996）。古墳副葬品のうち、鏃は男性被葬者との強い関連がうかがえ、鏃が共伴する事例については、被葬者の性別は男性である可能性が高いと捉えられよう。被葬者との関連が捉えにくい後期の横穴式石室の事例を省くと、比較が有効とみられる 112 例中、鏃が共伴する事例が 57 例、共伴しない事例が 55 例と、ほぼ同数である。鏃をもたない埋葬施設の被葬者を女性と断定することができないが、兵庫県梅田 1 号墳例のように、鏃を伴う埋葬施設においても、男女 2 体の埋葬が想定できるような事例があり、個別の吟味が必要である。また、広島県地蔵堂山 1 号墳や福岡県奴山正園古墳など、針が古墳の被葬者とは異なる位置で滑石製模造品と共に出土する事例もある。鏃を伴うこれらの埋葬施設においても、針は被葬者に直接かかわるものでなく、辟邪の祭祀具として用いられたと解釈することができるだろう（註 13）。

針副葬の意義　以上、古墳から出土する針について、その特徴を瞥見してきた。中原 4 号墳から出土した針は農工具や鍛冶用具と共伴しており、生産用具のひとつとして用いられていたと考えられる。小型品 12 点以上と大型品 2 点の組合せは他に例がない充実した内容である。機能分化した 2 種の針を副葬することに、古墳被葬者が多様な布・皮革製品の生産と関わっていたことを読み取りたい。

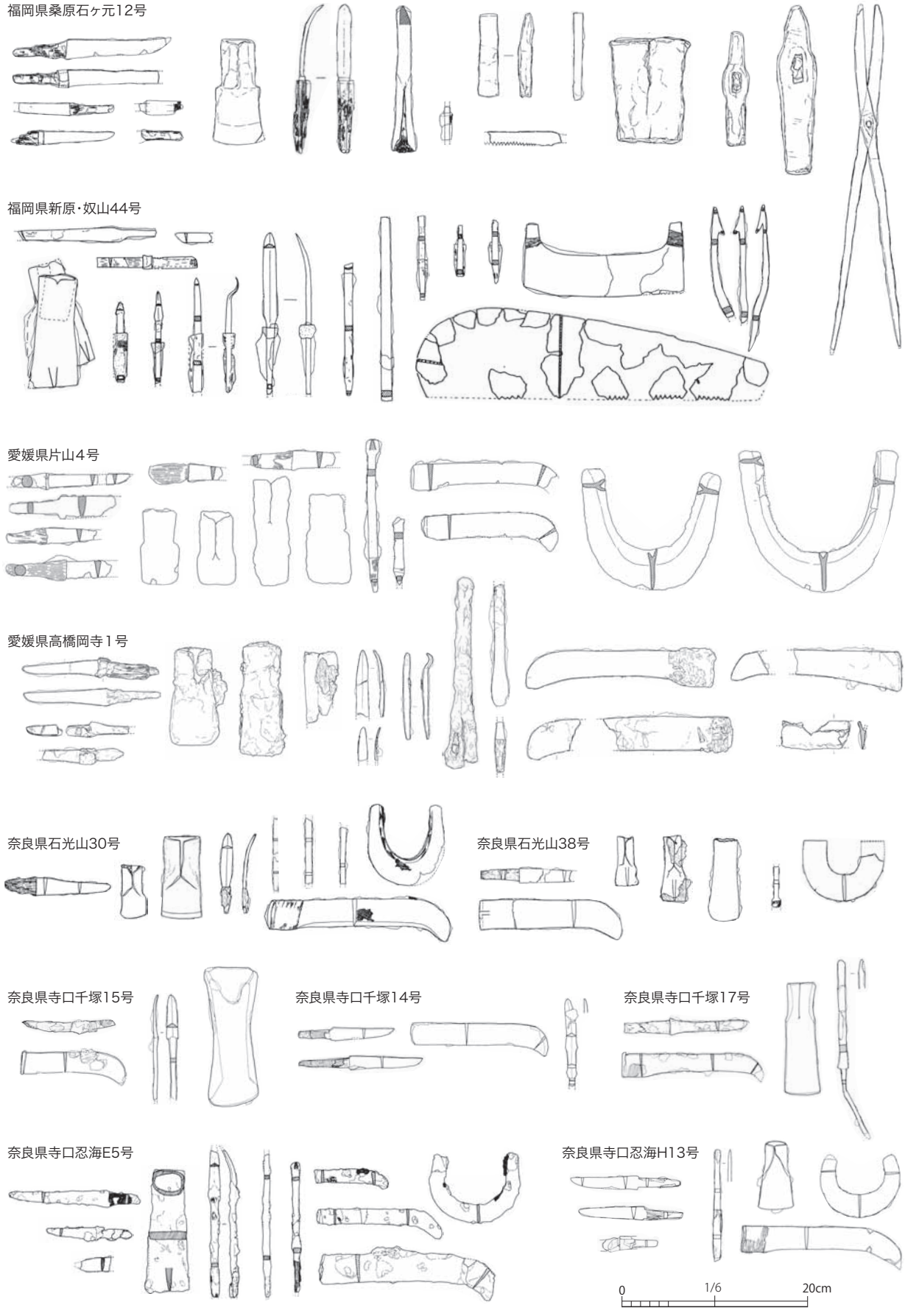
6　後期古墳における生産用具副葬の意義

生産用具副葬の推移　中原 4 号墳で出土した豊富な生産用具の副葬の意義について触れておきたい。後期古墳に副葬される農工具の組成を考えるにあたり、まずは副葬農工具の種類や量が最も充実している中期古墳の事例を瞥見しておこう。第 21 表は古墳時代中期から後期に至る副葬農工具組成の推移を示す主要な事例を整理したものである。鉄製農工具の副葬・埋納事例として、種類や量が最も充実しているのが、古墳時代中期前半代である。この段階は鉄製農工具が小型化し、農工具形石製品も多くみられるなど、農工具の儀器化が進んでいる。地域の大首長墓や大王墓に近接する陪冢に伴う農工具の組成は共通性が高く、倭王権を中心とした祭祀の情報が有力首長を通じて日本列島各地に共有されていたことが分かる（寺沢 1979）。なかでも、刀子、斧、鉇、鑿、鎌、鍬鋤の主要 6 種は副葬農工具の基本組成として多くの古墳で共通し、さらに充実した内容をもつ事例には手鎌や鋸、錐、刺突具などが加わる。

中期前半において、種類、量ともに頂点に達した農工具の副葬・埋納行為は、その後、中期後半を通して縮小化をたどる。小型化した農工具は依然として存続するが、何百点を超えるような多種・大量副葬はみられなくなる。後期に入ると農工具副葬はさらに少なくなり、刀子、斧、鎌などを副葬する程度に収束する。東日本においては農工具副葬の縮小傾向が顕著で、全長 100 m を超えるような大型前方後円墳であっても、副葬品の中に農工具が見出せない事例も多い。中原 4 号墳にみられる豊富な農工具副葬は、時期的にも、地域的にも、突出した事例であり、在来的な儀礼行為としては理解しがたい事象といえる。



第 217 図　藤ノ木古墳から出土した農工具等



第 218 図　後期古墳における農工具組成

第 22 表　後期古墳の副葬農工具と関連資料

古墳名	時　期	墳形	農工具類									鍛冶具	砥石	その他生産用具等
			刀子	斧	鉇	鑿	鎌	鍬鋤	鋸	錐	針			
比較対象古墳														
中原 4 号	TK43（新）	円墳	4	3	5	1	3	4			14+	1	2	鏃子 1
中期　大王墓陪冢、首長墓														
金蔵山（中・合子内）	中期初頭	後円	8	11	33	40	19	8	9	42	30±			手鎌 30、漁具ほか
西墓山（西）	TK73 並行	方墳	45+	139+	148+	132+	237+	294+	12+	9+				手鎌 72+
アリ山（北）	TK73 並行	方墳	151	134	14	90	201	49	7	1				
堂山（前）	TK73 並行	後円	14+	11	4	5	28	6	1	8				手鎌 19、鉄柄斧 1
五ヶ山 B2 号	TK73 並行	方墳	3	6	8+	4+	7	3		3			1	刺突具 4
野中（2･3･5）	TK216	方墳	2	30	8	2	2	15		45				手鎌 35、刺突具 2
大谷	TK47	後円	5+	15	14+	18	10+	8						
中期　鍛冶具出土古墳														
池の上 6 号	TG232 並行	円墳	1	1								2		
五條猫塚	TK73 並行	方墳	6+	7	4+	3+	1					8+	6	
随庵	TK216 並行	帆立	1	5	7	3	2		1	9+		4+	1	漁具
新原・奴山 1 号	TK208	後円		2	3	3			1	2		3		
ホウジ 1 号	TK23 ～ 47 ?	円墳	3	1	2	1	1	1	(1)			3	1	
寺口忍海 H16 号	TK47	円墳	5	2	3	1		1				4	1	
後期　奈良県の首長墓														
藤ノ木	TK43	円墳	21	19	20	27	7	2			17±			
二塚（造出）	TK43	後円		3	1	1	1	3			10			
後期　奈良県の群集墳														
石光山 7 号	MT15	円墳	2	1			1							
石光山 20 号	MT15 ～ TK10	円墳	4	1				4						
石光山 4 号	TK10	後円	2	4	1		1						1	
石光山 30 号	TK10	円墳	1	1	1	(1)	1	1						
石光山 38 号	TK10（新）	円墳	1	3		(1)	1	1						
石光山 31 号	TK209	円墳	1									1		
寺口千塚 15 号	MT15	円墳	1	1	1		1							
寺口千塚 16 号	TK10	円墳	4	2			3				1			
寺口千塚 11 号（3）	TK10	円墳	1				1							
寺口千塚 10 号	TK43	円墳	1				1	1						
寺口千塚 14 号	TK43	円墳	2		1		1							
寺口千塚 17 号	TK43	円墳	1	1		1	1							
寺口忍海 D27 号	TK47	円墳	8	4	3	2	3	4						石製紡錘車 1
寺口忍海 E3 号	MT15	円墳	3	1				1						
寺口忍海 E5 号	TK10	円墳	3	1	1	2	3	1						
寺口忍海 E7 号	TK10	円墳	4			1	1	1						
寺口忍海 H1 号	TK10	円墳	2		2	1								鉄製紡錘 1
寺口忍海 H13 号	TK10	円墳	3	1		1	2	1						
寺口忍海 H15 号	TK10	円墳	1	1	1		1							
寺口忍海 H5 号	TK10（新）	円墳	1	3										
寺口忍海 H11 号	TK43	円墳	4	2			1							
中期末～後期　北部九州の首長墓														
小正西（2）	TK47	円墳	4	1	3	1			1			1		鏃子 2
番塚	TK47	後円	4	2	1									
山の神	TK47	後円	2	13	1	2		3						鋳造鉄斧 10+
櫨山	TK47 ～ MT15	（横穴）	1	5	(2)	2	4	1						大型鎌 2
正籠 3 号	MT15	後円	7	1	1									
柏原 A2 号	TK43-209	後円	5+	1		(1)	1	1						手鎌 ?1
後期　北部九州の群集墳														
吉武 S8 号	MT15	円墳	1+	3	(1)	(1)	2							
吉武 S9 号	MT15	円墳		4			1							
吉武 S27 号	TK10	円墳		2			2							
吉武 S11 号	TK10（新）	円墳	1+	3			1	1						
赤坂烏毛 1 号	TK43	円墳	6+		1							3	2	鏃子 1
桑原石ヶ元 12 号	TK43	円墳	6+	1	1	1			1			5		
新原・奴山 44 号	TK43	円墳	2	2	4+	2+			1					鈹 1、苧引金 1
亀田道 4 号	TK43-209	円墳	2+	2			2	1						
後期　愛媛県の群集墳														
高地栗谷 1 号	MT15-TK10	後円	7	1	(1)		2	1						石製紡錘車 1
片山 1 号	TK43	（円墳）	7	2	1		1							鉄鐸 2
片山 4 号	TK43	円墳	10 +	4		2	2	3						刺突具 8
片山 7 号	TK209	円墳	4+	2			3	1					1	鉄芯石製紡錘車 1
高橋岡寺 1 号	TK43	円墳	17	4	4	2	3	1						
治平谷 2 号（2）	TK10(新)	円墳	1	2			1	1						
治平谷 3 号（1）	TK10(新)	円墳	2	1			3	1						
法華寺裏山	(TK43-209)	円墳	6	1			4	1						鞴羽口 1
旦 13 号	TK10(古)	円墳	2	1	1		2	1						
端華の森（1）	(TK209)	円墳	11	1			3	1	(1)					
上難波南 0 号	(TK43-209)	－	4	1	1		3	3						
庄の谷	(TK10)	円墳	(2)	(2)	1	1		1						
庄 1 号	(TK43-209)	（方墳）	5	3			2	1						
片山 1 号	(TK10-43)	－	2		1	1	1	1						
北谷王神ノ木 1 号	TK43	円墳	4	2	2		1							
塚本 1 号	TK217	（方墳）	3	3		1						2		
瀬戸風峠 1 号	TK10(新)	－	5	3	3	7	4	3						
東山鳶が森 4 号（A）	TK209-217	円墳	14	2	1		1							
東山鳶が森 8 号（A）	TK43	円墳	7	1	2		2							

凡例は第 20 表・第 21 表に準拠

後期古墳における生産用具副葬　6世紀における生産用具の副葬状況は地域的ごとの相違が顕著である。縮小傾向はあるものの、西日本地域では生産用具の副葬行為は残存する。なかでも、北部九州や愛媛県域、奈良県域などに農工具を多く副葬する古墳が目立ち、その他の地域との差異が顕著である。

筑紫を中心とした北部九州においては、農工具を3種類以上副葬する後期古墳が首長墓および中小規模の古墳ともに一定量認められる（松浦 2014）。また、鉄鉗を中心とする鍛冶具を副葬する後期の中小古墳が多いことも特徴的である。

愛媛県域においては比較的小規模な古墳を中心に農工具が豊富に副葬されている。また、実用的な大きさのU字形鍬鋤先の副葬も6世紀後半まで広く残存していることも特徴的である（十亀編 2013、第218図）。農工具を豊富に副葬する古墳は今治市域から松山市域に集中する。6世紀の瀬戸内地域の中でも、この地域における農工具の副葬量は群を抜いて多い。この地域では、5世紀から陶質土器の移入が多く、この他にも、外来系の遺物、遺構が多く確認できる。古墳時代中期から後期にかけて、渡来系集団が集中的に移動した地域と評価しうる。

奈良県域ではU字形鍬鋤先を模倣した独特の雛形品が出現し、藤ノ木古墳（第217図）のような大首長墓のほか、葛城地域を中心とした中小古墳に多く副葬される（白石 1997、坂 2005）。また、近畿地方の多くの群集墳において農工具の副葬が減少するなかで、石光山古墳群、寺口千塚古墳群、寺口忍海古墳群など葛城地域に築造される群集墳には、農工具を豊富に副葬する中小古墳が多くみられる。

このように、6世紀以降の生産用具については、副葬するかしないかの選択、副葬する生産用具の種類や数、さらには局所的な特殊形態の発達など、地域ごとの違いが顕著といえるだろう。6世紀以降、生産用具を用いた儀礼は、日本列島的規模で規律が貫徹されていなかったと評価できる。

中原4号墳における生産用具副葬の意義　在来の古墳祭祀の中に生産用具を豊富に副葬する伝統がみられないことをふまえると、中原4号墳における生産用具の副葬行為に、被葬者の出自や職掌などを積極的に読み取ることが許されよう。研究史の項目で触れたとおり、古墳に副葬される生産用具については、地鎮用具や建築用具などと限定するのでなく、広く農耕・手工業生産にかかわる儀礼用具と捉えておく方が妥当と考えられる。古墳副葬の生産用具としては、農工具が一般的であるが、この他にも、銛やヤスなどの漁具、鍛冶用具などの鉄器生産用具、紡錘車や機織具、針といった布・皮革製品生産用具などがある。これらの生産用具は、副葬状況から、互いに近似した儀礼用具として扱われていたことがうかがえ、被葬者の生前の性格や職掌を示すものと捉えられる。

鉄鉗の副葬には、鉄器生産や加工技術に長けた技術者集団との密接な関係を想定することができる。東駿河の地において鉄器の生産や加工に従事した集団の中には渡来人が含まれていた可能性も充分想定できるだろう。また、特異ともいえる豊富な生産用具の副葬行為からは、中原4古墳の被葬者が、北部九州や、愛媛県域（今治・松山地域）、奈良県域（葛城地域）といった生産用具を豊富に副葬する地域と何らかの関係をもっていた可能性も指摘しうる。

これらの地域には、渡来系の埋葬施設である竪穴系横口式石室や、段構造をもつ無袖石室が多くみられることも注目できる。中原4号墳に築かれた横穴式石室の系譜を考究する上でも、石室形態が共通するこれら遠隔地との関係を想定する視点が求められるだろう（本書第4章第2節、藤村論考）。

結　語

中原4号墳から出土した豊富な生産用具の特徴を整理する作業を通じ、後期古墳における生産用具を用いた祭祀の変容過程を明らかにした。とくに、手工業生産や加工技術に長けた中小勢力には生産用具の副葬が残存し、遠隔地どうしで集団間の関係が想定しうることは重要である。

さいごに、中原4号墳から出土したこの他の副葬品についても簡単に触れておきたい。中原4号墳から出土した須恵器は数や種類が多く、生産地も複数にまたがるとみられる。豊富な副葬須恵器の様相から判断すると、中原4号墳の被葬者は須恵器の生産主体とも密接な関係を有していたと解釈しうる。また、外来系器種である把手付碗の保有は、この古墳の被葬者が渡来系集団と関係をもっていた可能性も指摘できるだろう（本書第4章第9節、和田論考）。

中原４号墳から出土した武器や馬具は、日本列島の各地で共通する特徴がうかがえることから、その入手の経緯には、倭王権の関与があったことがうかがえる（本書第４章第７節、菊地論考、同第６節、大谷論考）。100点を超える鉄鏃の出土量は周辺の古墳と比較しても群を抜いており、本墳の被葬者が極めて武人的な性格を強く帯びていたことが理解できよう。また、本墳から出土した武器や馬具は必ずしも最高位の首長の持ち物とはいえないことも重要である。武器や馬具に明確な階層性が看取できることを考慮すると、その流通、保有の背後には倭王権の統制力が働いていたとみることが妥当であろう。

さらに、中原４号墳から出土した玉類には、愛知県西部（尾張）以西の西日本にみられる諸特徴が看取できることも注目できる（本書第４章第５節、戸根論考）。この検討結果は、中原４号墳の被葬者が西日本地域と強い繋がりをもっていたことを伝えるものである。玉類の特徴から被葬者の出自にまで踏み込めるかは、さらに慎重な検討が必要であるが、石室や生産用具副葬の評価とも整合的な西日本地域との関係は、手工業技術の東方移転のあり様を考える上でも示唆的である。

以上、本稿で明らかにした生産用具の位置づけと、石室やその他の副葬品にみる諸特徴とその評価が、互いに関連づけて理解しうることが確認できた。中原４号墳の被葬者には、倭王権との軍事的な結びつきを前提に、近畿地方や西日本地域の渡来系集団と関係をもち、駿河の地に新たな産業をもたらした技術者集団の統括者としての性格を読み取ることができる、と結論づけることができるだろう。

謝　辞

本稿をなすにあたり、次に示す方々からご協力、ご教示を得た。その名を記し、深く謝意を表す。

大谷 宏治、金澤 雄太、草野 潤平、清家 章、
高田 健一、田中 祐介、田邊 朋宏、辻川 哲朗、
濱崎 範子、藤藪 勝則、松崎 友理、山内 英樹、
若杤 義満、車　順哲、李　東冠、李　承一

註

1　本墳から出土した刀子の総数は10点以上であるが、このすべてを生産用具とはみなしがたい。詳細は本文中で述べるが、出土位置と形態的特徴から、生産用具としての刀子は４点と捉えている。

2　中原４号墳における針の正確な副葬数は不明である。最低でも14本の副葬が認められるので、ここでは最低限の点数をあげる。

3　Ａエリアの副葬品については、初葬に伴う遺物が片付けられてこの位置に移動したと捉えられる。鎌がＡ・Ｂエリアの双方から出土していることをふまえると、当初はＢエリア付近に置かれたものである可能性がある。

4　伊勢神宮における祭祀の詳細を記した「皇太神宮儀式帳」や「止由気宮儀式帳」に記される儀礼に用いた儀礼用具の組合せを整理すると、鍬鋤を用いる祭祀の場面が異なることが知られる。また、養老律令中の「軍防令」には、兵士の装備にかかわる規定があり、行軍の際には、大小の斧と２点の鎌、さらに最低限の修復をするための鉄鉗が組み合うことが記される。これらの記述はそのまま中原４号墳の生産用具の解釈に結び付けられるものではないが、生産用具の使用場面を考えるうえで、参照すべきことがらといえるだろう（関川 1987）。

5　Ａエリアから出土した刀子には、茎の破片として報告されている木柄付の小片が２点（591、593）ある。これらの破片は鉇の茎である可能性もあり、刀子の総数に計上していない。

6　本墳から出土した砥石は全長9.2～9.4cmであり、鍛冶具と共伴する砥石の中では小型である。積極的に鍛冶具として評価することは難しいといえるだろう。

7　小型品の中には、鍛金や彫金などの金工用具として用いられたもの（香取ほか 1986）も含まれる可能性がある。しかし、大きさだけをもって金工の専用具と限定することは難しい。本稿では、小型品についてもその多くは鍛冶用具として認識して議論を進める。

8　このほか兵庫県茶すり山古墳にも先端が尖った細長い円柱棒があり、大型針の類例に加えられる可能性がある。

9　日本列島における鉄鉗の最古例として、集落からの出土品であるが、長野県松本市向畑遺跡例をあげうる。この事例は竪穴建物から出土したものであるが、共伴遺物には新旧の遺物相があり、その時期認定については評価が分かれる（亀田 2016）。ただし、竪穴建物から出土した新旧二相に分かれる土師器は、古相のものも古墳時代中期により近い時期を想定することが可能である。また、新相のものは確実に中期のものといえる。この事例をもって、日本列島における鉄鉗の出現が前期に遡るとは積極的に言いにくい。確実な前期古墳からの出土例が確認できるまで、この事例の帰属時期については保留しておきたい。

10　金属製針は形態的に単純で微小な遺物であることから、その認定について慎重に臨む必要がある。古墳出土の金属針の集成として知られる［楠本・朴編 1986］や［大谷 2012］にあげられる事例においても、針と認定できないものが含まれる。本稿で検討外とした事例は次の通りである。組合せ式のヤスなど別の用途をもった道具の可能性が高いもの：福井県天神山７号墳例、滋賀県

雪野山古墳例、京都府瓦谷古墳例、京都府寺戸大塚古墳例、和歌山県崎山 14 号墳例。鉄鏃の茎の可能性が高いもの：神奈川県三ノ宮・下谷戸 7 号墳例。再整理の過程で針であることが否定されているもの：鳥取県古郡家 1 号墳例（高田編 2013、p.35）。

11　正倉院宝物として伝えられる針には大小が認められる。大型のものは長さ約 35cm で銀製・銅製・鉄製の 3 種が、小振りのものは長さ約 20cm で銀製・鉄製の 2 種がある。これらの大型針は、七月七日に行う乞巧奠（きっこうでん、針仕事の上達を祈願して織女を祀る儀式）に用いる儀礼用具だという (正倉院事務所 1996)。奈良県寺口忍海例 E12 号墳や山口県糠塚横穴墓群で出土している青銅製の針（前者は全長 11.0cm、後者は 5.1cm）がその祖形にあたる可能性がある。

12　古墳時代前期の針は、前方後方墳からの出土例が多い。副葬品目の違いが古墳祭式の細差を示すのか、検討を要する。

13　針と女性の関係を重視するなら、辟邪の呪具として針を用いる発想の根源に「女性の霊力」がかかわっている可能性もある。

参考文献

安部 黎子　1969「針状鉄器」『我孫子古墳群』我孫子町教育委員会

諫早 直人　2008「鑷子状鉄製品と初期の轡」『大隈串良　岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合博物館

入江 文敏　1998「佩砥考―日韓出土資料の検討―」『網干義教先生古稀記念考古学論集』網干義教先生古稀記念会

岩本 崇　2015「いわゆる古墳出土「鍛冶具」と五條猫塚古墳にみる副葬工具組成の特質」『五條猫塚古墳の研究　総括編』奈良国立博物館

魚津 知克　2005「鉄製農工具の副葬と農工具形石製祭器の副葬」『古代』第 118 号　早稲田大学考古学会

大谷 宏治　2010「須津 J- 第 6 号墳出土の鉄針について」『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2012「古墳出土の金属製針について」『研究紀要　創刊号』静岡県埋蔵文化財センター

加藤 俊吾　1997「鉄製鍛冶工具の基礎的分析（前編）」『大阪市立博物館研究紀要』第 29 冊

加藤 俊吾　1998「鉄製鍛冶工具の基礎的分析（後編）」『大阪市立博物館研究紀要』第 30 冊

香取 正彦ほか　1986『金工の伝統技法』理工学社

亀田 修一　2016「4、5 世紀の日本列島の鉄器生産集落―韓半島との関わりを中心に―」『日韓 4 ～ 5 世紀の土器・鉄器生産と集落』「日韓交渉の考古学―古墳時代―」研究会

楠元 哲夫・朴 美子（編）1986「針出土地地名表」『宇陀北原古墳』大宇陀町

小林 行雄　1961『古墳時代の研究』青木書店

潮見 浩　1982『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館

潮見 浩・和島 誠一 1966「鉄および鉄器生産」『日本の考古学Ⅴ』河出書房

正倉院事務所　1996『正倉院寶物 8　南倉Ⅱ』毎日新聞社

白石 太一郎　1985「神まつりと古墳の祭祀―古墳出土の石製模造品を中心として―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 7 集　国立歴史民俗博物館

白石 太一郎　1997「藤ノ木古墳出土農工具の提起する問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 70 集　国立歴史民俗博物館

鈴木 一有　1999「副葬遺物にみる先進性と特殊性」『五ヶ山Ｂ 2 号墳』浅羽町教育委員会

清家 章　1996「副葬品と被葬者の性別」『雪野山古墳の研究　考察篇』八日市市教育委員会

関川 尚功　1987「畿内中期古墳出土の鉄製農工具について」『横田健一先生古稀記念文化史論叢』横田健一先生古稀記念会

十亀 幸雄（編）　2013『遺跡』第 47 号（特集◎愛媛の鉄製農工漁具）　遺跡発行会

武田 寛生　2003「東海地域における後期古墳出土農工具について」『研究紀要』第 10 号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

田中 新史　1994・1995「使用具の古墳埋納（上）・（下）」『古代』第 98・100 号　早稲田大学考古学会

都出 比呂志　1967「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第 13 巻第 3 号　考古学研究会

寺沢 知子　1979「鉄製農工具副葬の意義」『橿原考古学研究所論集　第四』吉川弘文館

野上 丈助　1968「古墳時代における鉄及び鉄器生産の諸問題」『考古学研究』第 15 巻第 2 号

花田 勝広　2002『古代の鉄生産と渡来人―倭政権の形成と生産組織―』雄山閣

濱崎 範子　2008「韓半島出土の鉄製鍛冶具について」『朝鮮古代研究』第 9 号　朝鮮古代研究刊行会

坂　靖　2005「小型鉄製農工具の系譜―ミニチュア農工具再考―」『考古学論攷』第 28 冊　奈良県立橿原考古学研究所

平ノ内 幸治 1984「針について」『神領古墳群』宇美町教育委員会

広瀬 和雄　2003『前方後円墳国家』角川書店

古瀬 清秀　1977「古墳出土の鉋の形態的変化とその役割」『考古論集―慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集―』松崎寿和先生退官記念事業会

古瀬 清秀　1991「農工具」『古墳時代の研究』8 古墳Ⅱ　副葬品　雄山閣

間壁 葭子　2000「金蔵山古墳出土の針」『古代学研究』150 号

松井 和幸　1991「古代の鍛冶具」『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念事業会

松浦 宇哲　2014「古墳出土農工具からみた北部九州の地域性―福岡県内出土例を中心に―」『古墳時代の地域間交流 2』九州前方後円墳研究会

村上 恭通　2004「古墳時代における鍛冶具副葬古墳と被葬者像―中期を中心として―」『河瀬正利先生退官記念論文集　考古論集』

柳沢 一宏　1994「鉄製農工具類副葬からみた古墳の画期」『橿原考古学研究所論集』11

吉川 金次　1991『鍛冶道具考』平凡社

李　東冠　2012「九州出土の鉄製農工具と鍛冶関係遺物からみた対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第 15 回九州前方後円墳研究会　北九州大会発表要旨・資料集

ハングル文献

車順喆　2003「鍛冶具所有者についての研究」『文化財』第 36 号

申東昭　2013「初期鉄器時代～三国時代蔚山地域鉄製品の流通」『蔚山鉄文化』蔚山博物館

金銀珠　2007『三国時代鍛冶具研究―嶺南地方を中心として―』嶺南大学校大学院

本稿で触れた古墳、遺跡にかかわる文献

山　形

お花山 1 号：山形県教育委員会 1985『お花山古墳群』

大之越：山形県教育委員会 1979『大之越古墳発掘調査報告書』

福　島

餓鬼堂 1 号横穴：いわき市教育委員会 2009『餓鬼堂横穴墓群』

郭内 6 号横穴：白河市 2001『白河市史』第四巻　資料編 1　自然・考古

森北 1 号墳：会津坂下町教育委員会 1999『森北古墳群』

茨　城

上出島 2 号：岩井市教育委員会 1975『上出島古墳群』

三昧塚：茨城県教育委員会 1960『三昧塚古墳』

原 1 号：茨城県 1974『茨城県史料』、浮島研究会 1976『常陸浮島古墳群』

栃　木

中島笹塚 1 号：とちぎ生涯学習文化財団 2008『東谷・中島地区遺跡群 9　中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡』

群　馬

弦巻：後藤 守一ほか 1929「多野郡平井村白石稲荷山古墳」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告三』

前橋天神山：群馬県 1981『群馬県史』資料編 3　原始古代 3　古墳

埼　玉

埼玉稲荷山：埼玉県教育委員会 1980『埼玉稲荷山古墳』

千　葉

江子田金環塚：市原市教育委員会 1985『上総江子田金環塚古墳』

山王山：市原市教育委員会 1980『上総山王山古墳』

城山 1 号：小見川町教育委員会 1978『城山第一号前方後円墳』

水神山：我孫子町教育委員会 1969『我孫子古墳群』

東　京

殿山 1 号：茂木 雅博 1975「殿山 1 号墳」『世田谷区史料』第 8 集　考古編　世田谷区

神奈川

さんせ塚：甘粕 健・久保 哲三 1966「関東」（関東主要古墳分布表）『日本の考古学Ⅳ』河出書房

下谷戸 7 号：かながわ考古学財団 2000『三ノ宮・下谷戸遺蹟Ⅱ』

石　川

秋常山 2 号：能美市教育委員会 2011『史跡秋常山古墳群』

中島ヤマンタン 25 号：石川県埋蔵文化財センター 2002『中島ヤマンタン 25 号墳』

西山 9 号：寺井町教育委員会 1997『加賀能美古墳群』

福　井

獅子塚：［濱崎 2008］

花野谷 2 号：福井市教育委員会 2012『福井市古墳発掘調査報告書Ⅰ』

長　野

竜丘古墳群：長野県 1988『長野県史　考古資料編　全一巻(四)遺構・遺物』

如来堂：［野上 1968］

向畑遺跡：松本市教育委員会 1989『松本市向畑遺跡Ⅱ』

岐　阜

昼飯大塚：大垣市教育委員会 2003『史跡昼飯大塚古墳』

船木山 O274 号：糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会 1999『船木山古墳群』

龍門寺 1 号：岐阜市教育委員会 1962『岐阜市長良龍門寺古墳』

静　岡

岩田山 21 号：藤枝市 2007『藤枝市史』資料編 1

春林院：春林院古墳調査委員会 1966『春林院古墳』、静岡大学考古学研究室 2011『春林院古墳の研究』

須津 J6 号：静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『富士山・愛鷹山麓の古墳群』

田頭山 1 号：静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004『田頭山古墳群』

高代山 4 号：掛川市教育委員会 1970『高代山古墳群』

愛　知

東之宮：犬山市教育委員会 2014『史跡東之宮古墳』

三　重

石山：京都大学博物館 1993『紫金山古墳と石山古墳』

滋　賀

雪野山：八日市市教育委員会 1996『雪野山古墳の研究』

湧出山 C 号：高月町教育委員会 2007『高月の主要古墳Ⅲ』

京　都

井ノ内稲荷塚：大阪大学考古学研究室 2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究』

入谷西 D1 号：加悦町史編纂委員会 2007『加悦町史』資料編　第一巻

宇津久志 1 号：長岡京市 1991『長岡京市史』資料編 1、長岡京市教育委員会 1993『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和 63 年度

大田南 6 号：峰山町教育委員会 1998『大田南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡第 2 次～第 5 次発掘調査報告書』

奥大石 2 号：京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990『京都府遺跡調査概報』第 37 冊

郷土塚 4 号：小池 寛 1988「鍛冶道具副葬の新例―田辺町郷土塚 4 号墳―」『京都府埋蔵文化財情報』第 29 号

里ヶ谷 3 号：京都府埋蔵文化財センター 1993『京都府遺蹟調査概報』55

芝ヶ原 10･11 号：城陽市教育委員会 1986『芝ヶ原 10 号・11 号墳発掘調査概報』『城陽市埋蔵文化財調査報告書』15、城陽市 1999『城陽市史』第三巻

上人ヶ平 16 号：京都府埋蔵文化財センター 1991『京都府遺蹟調査報告書』15

園部垣内：同志社大学文学部文化学科 1990『園部垣内古墳』

西山 1 号：同志社大学考古学研究会 1962「久津川古墳群の研究」『同

志社考古』2
畑大塚：久美浜町教育委員会 1988『畑大塚古墳群』
平山：京都府埋蔵文化財センター 2001『京都府遺蹟調査概報』97
大　阪
風吹山：岸和田市教育委員会 2014『久米田古墳群発掘調査報告 2』
雁多尾畑：[花田 2002]
心合寺山：八尾市教育委員会 2001『史跡心合寺山古墳発掘調査報告書』
弁天山 D2 号：大阪府教育委員会 1967『弁天山古墳群の調査』
紅茸山 C3 号：高槻市 1973『高槻市史』考古編
百舌鳥大塚山：末永 雅雄 1961『日本の古墳』朝日新聞社、森 浩一 2003「失われた時を求めてー百舌鳥大塚山古墳の調査を回顧してー」『堺市博物館報』第 22 号　堺市博物館、[花田 2002]
兵　庫
梅田古墳群：兵庫県教育委員会 2002『梅田古墳群Ⅰ』
大寺山古墳群：[大谷 2012]
柿坪中山：山東町教育委員会 1978『柿坪中山古墳群』
カチヤ：兵庫県教育委員会 1983『半坂峠古墳群・辻遺跡』
カンス塚：[野上 1968]、加古川市教育委員会 1985『カンス塚古墳』、川畑 純・初村 武寛 2012「加古川市域の中期古墳出土鉄製品の再検討」『加古川市西条古墳群　尼塚古墳』加古川市教育委員会
行者塚：加古川市教育委員会 1997『行者塚古墳発掘調査概報』
田和：大屋町教育委員会 1992『大屋の遺跡 2』
タンダ山 2 号：加西市 2010『加西市史』第七巻　資料編 1　考古
茶すり山：兵庫県教育委員会 2010『史跡茶すり山古墳』
鳥坂 3 号：竜野市教育委員会 1984『鳥坂古墳群』
深谷 1 号：但馬考古学研究会 1985『中ノ郷・深谷古墳群』
ホウジ 1 号：豊岡市教育委員会 1986『長谷・ホウジ古墳群・妙楽寺・見手山横穴墳墓群』
奈　良
池殿奥 5 号：橿原考古学研究所 1988『野山遺跡群Ⅰ』
市尾今田 1 号：橿原考古学研究所 1983『奈良県遺跡調査概報』1981 年度、[楠本・朴（編）1986]
イノヲク 1 号：[花田 2002]
後出 6 号：橿原考古学研究所 2003『後出古墳群』
大谷今池 2 号：橿原考古学研究所 2003『大谷今池 1 号墳・2 号墳』
北原：橿原考古学研究所 1986『宇陀北原古墳』大宇陀町
北原西：楠本哲夫・朴美子ほか 1993「北原西古墳の発掘調査」『大和宇陀地域における古墳の研究』
五條猫塚：奈良県教育委員会 1962『五条猫塚古墳』、奈良国立博物館 2015『五條猫塚古墳の研究　総括編』
境谷 4 号：奈良県教育委員会 1974『大和巨勢山古墳群（境谷支群）』
桜井茶臼山：奈良県教育委員会 1961『桜井茶臼山古墳』
タニグチ古墳群：橿原考古学研究所 1996『タニグチ古墳群』高取町教育委員会
寺口忍海古墳群：橿原考古学研究所 1988『寺口忍海古墳群』
寺口千塚古墳群：橿原考古学研究所 1991『寺口千塚古墳群』
火野谷山 2 号：橿原考古学研究所 1979『新庄火野谷山古墳群』
藤ノ木：橿原考古学研究所 1990『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』
双築 1 号：桜井市文化財協会 2007『桜井公園遺跡群』
布留遺跡：埋蔵文化財天理教調査団 1995『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』
ベンショ塚：奈良市教育委員会 1991『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 2 年度
菩提寺 2 号：[花田 2002]
ホリノヲ 2 号：奈良県教育委員会 1975『天理市石上・豊田古墳群Ⅰ』
前山 1 号：橿原考古学研究所 1987『能峠遺跡群Ⅱ』
見田大沢 1 号：橿原考古学研究所 1982『見田・大沢古墳群』
大和二塚：奈良県教育委員会 1962『大和二塚古墳』
ヲトンダ 4 号：橿原考古学研究所 1991『高田垣内古墳群』
和歌山
岩内 3 号：御坊市教育委員会 1980『岩内古墳群発掘調査概報』、『岩内 3 号墳』刊行会 2014『和歌山県御坊市　岩内 3 号墳』
大谷：和歌山市教育委員会 1959『大谷古墳』
大日山 70 号：和歌山県教育委員会 2000『岩橋千塚周辺古墳群緊急確認調査報告書』
崎山 14 号：印南町教育委員会 1978『崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）発掘調査報告書』
箱谷 3 号：川辺町教育委員会 1984『箱谷古墳群―昭和 58 年度発掘調査概報―』、菊井 佳弥ほか 2003「箱谷 3 号墳の再検討―紀伊における埴輪研究 2―」『紀伊考古学研究』第 6 号
鳥　取
青谷上寺地：鳥取県埋蔵文化財センター 2010『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 5　骨角器（1）』
糸谷 3 号：同志社大学文学部文化学科 1994『糸谷古墳群』
狼谷：谷田 亀寿・佐々木 謙 1956「伯耆・土下狼谷古墳」『ひすい』30、山本 清 1971『山陰古墳文化の研究』
桂見 2 号：鳥取市教育委員会 1984『桂見墳墓群』
日下 12 号：米子市教育委員会 1992『日下古墳群発掘調査報告書』
古郡家 1 号：高田 健一（編）2013『古郡家 1 号墳・六部山 3 号墳の研究』鳥取県
高畔 2 号：倉吉市 1973『倉吉市史』
浜坂横穴墓群：[大谷 2012]
宮内 2 号：鳥取県教育文化財団 1996『宮内第 1 遺跡　宮内第 4 遺跡　宮内第 5 遺跡　宮内 2・63 ～ 65 号墳』
六部山古墳群：鳥取市教育福祉振興会 1995『六部山古墳群Ⅱ』
島　根
上島：出雲市教育委員会 2007「上島古墳出土遺物」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 17 集
神原神社：加茂町教育委員会 2002『神原神社古墳』
小丸子山：近藤 正 1969「安来・小丸子山横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第 1 集
松本 1 号：島根県教育委員会 1963『松本古墳調査報告』
岡　山
一本松：村井 嵓雄 1976「岡山市一本松古墳出土の甲冑」『MUSEUM』307
我城山 6 号：近藤 義郎 1969「備前邑久町我城山 6 号墳」『古代吉備』第 6 集

金蔵山：倉敷考古館 1959『金蔵山古墳』、間壁葭子 2000「金蔵山古墳出土の針」『古代学研究』150 号
佐野山：総社市 1987『総社市史』考古資料編
勝央町内：［花田 2002］
勝負砂：岡山大学考古学研究室 2009『勝負砂古墳調査概報』学生社
随庵：総社市教育委員会 1965『随庵古墳』
竹之内：河本 清 1971「美作考古学の研究と課題」『古代吉備』第 7 集
月の輪：月の輪古墳刊行会 1960『月の輪古墳』
ツルギ：岡山県 1991『岡山県史』第 2 巻　原始・古代
堂山 5 号：西川 宏 1963「岡山県吉備郡佐古田堂山古墳群（第 1 次調査）」『日本考古学年報』12
長畝山 2 号:坂本 心平 1996「長畝山 2 号墳出土の資料について」『年報津山弥生の里』第 3 号　津山弥生の里文化センター
七つ坑：七つ坑古墳群発掘調査団 1987『七つ坑古墳群』
西山 26 号：岡山県古代吉備文化センター 1997『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121
西吉田北 1 号：津山市教育委員会 1997『西吉田北遺跡』
旗振台：鎌木 義昌 1962「旗振台古墳」『岡山市史』古代編　岡山市役所
四ツ塚 1 号：上田 三平 1929「四つ塚古墳」『文部省史蹟調査報告』6
四辻 1 号：山陽団地埋蔵文化財発掘調査団 1973『四辻土壙墓遺跡・四辻古墳群』

広　島

上野部 1 号：［松井 1991］
才谷古墳群：広島県教育委員会 1976『県営駅字住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』
三王原：［潮見・和島 1966］
地蔵堂山：広島県教育委員会 1977『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』
福山市山の神：広島県立府中高等学校生徒会地歴部 1967『古代吉備品治国の古墳について』、篠原芳秀 1991「山の神古墳」『探訪・広島の古墳』芸備友の会
府中市山ノ神 1 号：府中市教育委員会 1983『府中・山ノ神 1 号古墳発掘調査報告』

山　口

赤妻：弘津 史文 1928「周防国赤妻古墳並茶臼山古墳（其一）」『考古学雑誌』第 18 巻第 4 号、山口市教育委員会 1997『赤妻古墳』
朝田Ⅰ -2 号：山口県教育委員会 1976『朝田墳墓群Ⅰ　木崎遺跡』
朝田Ⅲ -7 号：山口県教育委員会 1977『朝田墳墓群Ⅱ　鴻ノ峰 I 号墳』
朝田Ⅱ -12 号：山口県教育委員会 1983『朝田墳墓群Ⅵ』
後井 3 号：山口県 2000『山口県史』資料編　考古 1
形山石棺：山口県 2000『山口県史』資料編　考古 1
国森：田布施町教育委員会 1988『国森古墳』
汐入町：山口県 2000『山口県史』資料編　考古 1
心光寺 2 号：［潮見・和島 1966］
糠塚横穴墓群：山口県 2000『山口県史』資料編　考古 1

香　川

財田西：香川県教育委員会 1983『新編香川叢書』考古編

愛　媛

猪の窪：長井 数秋 1984「伊予市猪の窪古墳発掘調査報告書」『愛媛考古学』第 7 号
かいなご 1 号：愛媛県 1986『愛媛県史』資料編　考古
片山古墳群：愛媛県埋蔵文化財センター 1984『一般国道 196 号今治道路埋蔵文化財調査報告書』
上難波南 0 号：愛媛県教育委員会 1982『北条市上難波古墳群』
雉ノ尾 1 号：愛媛県 1986『愛媛県史』資料編　考古
北谷王ノ神 1 号：松山市教育委員会 1991『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』
古国分：［野上 1968］
庄 1 号：愛媛県埋蔵文化財センター 1990『小山田Ⅱ遺跡・小山田支群』
庄の谷：北条市 1981『北条市誌』
瀬戸風峠 1 号：松山市教育委員会 1998『瀬戸風峠遺跡』
高地栗谷 1 号：今治市教育委員会 2010『高地栗谷 1 号墳』
高橋岡寺 1 号：今治市教育委員会 2009『高橋山岸古墳』
治平谷古墳群：今治市 1974『唐子台遺跡群』
塚本 1 号：松山市教育委員会 1991『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』
葉佐池：松山市教育委員会 2003『葉佐池古墳』
東山鳶が森古墳群：松山市教育委員会 1981『東山鳶が森古墳群』
法華寺裏山・旦 13 号：愛媛県埋蔵文化財センター 2000『一般国道 196 号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
松山市片山 1 号：北条市教育委員会 1999『片山遺跡・片山 1 号墳』
矢田大塚：神原賢 1970「上浦町瀬山古墳の報告」『愛媛の文化財』愛媛県文化財保護協会
若草 4 号：愛媛県埋蔵文化財センター 1996『若草遺跡Ⅱ』

福　岡

赤坂鳥毛 1 号：夜須町教育委員会 2000『赤坂遺跡群Ⅰ』
池の上 6 号：甘木市教育委員会 1979『池の上墳墓群』
石垣古墳群：九州考古学会（編）1951『北九州古文化図鑑（2）』
馬渡東ヶ浦 SF04：古賀市教育委員会 2011『馬渡・東ヶ浦遺跡 3』
梅林：福岡市教育委員会 1991『梅林古墳』
大井平野 1 号：宗像市教育委員会 2004『大井平野』
奥ヤ子：苅田町教育委員会 1988『石塚山古墳発掘調査概報』
柿原Ⅰ -2 号：福岡県教育委員会 1986『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』6
カクチガ浦 3 号：那珂川町教育委員会 1990『カクチガ浦遺跡群』
角田 2 号：福岡県教育委員会 1976『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第 1 集
欠塚：筑後市教育委員会 1993『欠塚古墳』
片縄丸ノ口Ⅴ -4 号：那珂川町教育委員会 2003『片縄山古墳群』
萱葉 1 号：志免町教育委員会 1984『萱葉古墳群』
クエゾノ 5 号：福岡市教育委員会 1995『クエゾノ遺跡』
桑原石ヶ元 12 号：福岡市教育委員会 2003『元岡・桑原遺跡群 2』
桑原 A2・A4 号墳：福岡市教育委員会 2005『元岡・桑原遺跡群 5』

古寺 D10 号：甘木市教育委員会 1982『古寺墳墓群』
菖蒲浦 1 号：古都太宰府を守る会 1976『大宰府町の文化財　第 1 集　―菖蒲浦古墳群の調査－』
新原・奴山古墳群：津屋崎町教育委員会 1989『新原・奴山古墳群』、津屋崎町教育委員会 2001『新原・奴山古墳群Ⅱ』
神領 2 号：宇美町教育委員会 1984『神領古墳群』
鋤崎：福岡市教育委員会 2002『鋤崎古墳』
惣社：豊津町教育委員会 1976「惣社古墳」『幸木遺跡調査報告』
七夕池：志免町教育委員会 2001『七夕池古墳』
手光南 2 号：福間町教育委員会 1981『手光古墳群Ⅰ』
天神山：宇美町教育委員会 1984『神領古墳群』
徳永 B3 号：福岡市教育委員会 2014『徳永Ｂ遺跡 3』
永浦 4 号：古賀市教育委員会 2004『永浦遺跡』
七曲山 1 号：九州前方後円墳研究会 2005『九州における渡来人の受容と展開』
西尾山 1 号：福岡県教育委員会 1979『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXX
奴山正園：福津市教育委員会 2013『奴山正園古墳』
野口 2 号：那珂川町教育委員会 1979『野口遺跡』
櫨山：嶋田 光一 1991「福岡県櫨山古墳の再検討」『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念事業会
花立山横穴墓群：小郡市教育委員会 2000『花立山古墳群 1』、小郡市 2001『小郡市史』第四巻資料編
東入部 504 号：福岡市教育委員会 2001『入部Ⅸ』
広石南 A4 号：福岡市教育委員会 1999『広石南古墳群Ａ群』
平等寺原 5 号：原 俊一 1997「特色ある古墳文化」『宗像市史』宗像市
古大内石棺：宇美町教育委員会 1984『神領古墳群』、苅田町教育委員会 2002『苅田地区遺跡群Ⅰ』
古川平原 5 号：犀川町教育委員会 1997『古川平原古墳群』
妙見 8 号：福岡県立朝倉高等学校史学部 1969『埋もれていた朝倉文化』
山ノ口 5・6 号：宗像市教育委員会 1984『朝日山ノ口Ⅰ』
老司：福岡市教育委員会 1989『老司古墳』
割畑 1 号：福間町教育委員会 1999『福間割畑遺跡』

佐　賀

梅坂 5 号：鳥栖市教育委員会 1986『梅坂古墳群』
熊本山：佐賀県教育委員会 1967「熊本山舟形石棺墓」『帯隈山神籠石とその周辺』
丹坂峠：小城町 1974『小城町史』
塚山：佐賀県 1950「目達原古墳群調査報告」『佐賀県史跡名勝天然記念物』第 9 集
東十郎特別地区イ号・ロ号：佐賀県教育委員会 1966『東十郎古墳群』、福岡大学人文学部考古学研究室 2003『佐賀県・東十郎古墳群の研究／対馬・サイノヤマ古墳の調査』

熊　本

伝左山：玉名市歴史博物館こころピア 2013『伝左山古墳出土品図録』
丸山 3 号：熊本県教育委員会 1975『塚原』

大　分

おごもりⅠ区方形周溝墓 4 号石棺：玖珠町教育委員会 1977『おごもり遺跡調査概報』

宮　崎

市の瀬 10 号：田中 茂・岩永 哲夫ほか 1986「市の瀬地下式横穴墓群」『国富町文化財調査資料』第 4 集、宮崎県 1993『宮崎県史』資料編　考古 2

韓　国

京畿道

平澤玄華里Ⅳ -1 地区：忠北大学校先史文化研究所 1996『平澤玄華里遺蹟』

忠清北道

清原米川里古墳群：国立文化財研究所 1995『清原米川里古墳群発掘調査報告書』

忠清南道

天安龍院里 58 号：公州大学校博物館 2000『龍院里古墳群』

全羅北道

完州上雲里古墳群：全北大学校博物館 2010『上雲里Ⅰ～Ⅲ』

全羅南道

務安社倉里：国立光州博物館 1984『霊岩萬樹里古墳群』

慶州北道

慶州皇南大塚北墳：文化財管理局文化財研究所 1985『皇南大塚（北墳）』
慶州金鈴塚：梅原末治 1926『慶州金鈴塚飾履塚発掘調査報告』大正十三年度古蹟調査報告第 1 冊
慶州月山里 A18 号：国立慶州文化財研究所 2003『慶州月山里遺蹟』
慶州徳泉里 4 号：中央文化財研究院 2005『慶州徳泉里古墳群』
慶山新上里カⅡ -45 号：嶺南大学校博物館 2006『慶山新上里遺蹟Ⅱ』
慶山新上里カⅢ -10 号：嶺南大学校博物館 2006『慶山新上里遺蹟Ⅲ』
慶山林堂造永 E1 号：嶺南大学校博物館 2000『慶山林堂地域古墳群Ⅴ』
慶山林堂造永 E2-1 号：嶺南大学校博物館 2015『慶山林堂地域古墳群ⅩⅡ』
慶山林堂 C1-135 号：韓国文化財保護財団 1998『慶山林堂遺蹟（Ⅱ）』
慶山林堂 D2-47 号：韓国文化財保護財団 1998『慶山林堂遺蹟（Ⅵ）』
慶山林堂 D2-182 号：韓国文化財保護財団 1998『慶山林堂遺蹟（Ⅴ）』
大邱時至洞Ⅰ B-61 号：嶺南大学校博物館 1999『時至の文化遺蹟Ⅱ』
大邱時至洞Ⅰ C-15 号：嶺南大学校博物館 1999『時至の文化遺蹟Ⅲ』
大邱時至洞Ⅰ D-145 号：嶺南大学校博物館 1999『時至の文化遺蹟Ⅴ』
大邱旭水洞ナ -9 号：嶺南大学校博物館 2002『大邱旭水洞古墳群』
大邱時至洞 39 号：「濱崎 2008」
大邱達城古墳群：朝鮮総督府 1930『大正十二年度古蹟調査報告』第 1 冊
大邱汶陽里 35 号：嶺南文化財研究院 2003『達城汶陽里古墳群Ⅰ』
尚州軒新洞古墳群：慶尚北道文化財研究院 2003『尚州軒新洞古墳群』
浦項鶴川里 196-1 号：慶尚北道文化財研究院 2002『浦項鶴川里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
亀尾黄桑洞 94 号：［車 2003］

慶尚南道

蔚山大盐里 36 号：蔚山文化財研究院 2006『蔚山大盐里中盐遺蹟』
蔚山早日里（昌）54 号：国立昌原文化財研究所 2000『蔚山早日里古墳群発掘調査報告書』、蔚山博物館 2013『蔚山鉄文化』
蔚山明山里 38 号墓：蔚山文化財研究院 2011『蔚山明山里遺蹟』
蔚山茶雲洞バ -12 号：蔚山発展研究院 2005『蔚山茶雲洞バ区域遺蹟』
蔚山薬泗洞北洞古墳群：蔚山文化財研究院 2013『蔚山薬泗洞北洞遺蹟Ⅰ～Ⅴ』
蔚山華峰洞 14 号：蔚山発展研究院 2008『蔚山華峰洞遺蹟』
蔚山雲化里 1 号：蔚山発展研究院 2008『蔚山雲化里遺蹟』
昌寧桂城 A-14 号、B39-1 号：釜山大学校博物館 1995『昌寧桂城古墳群』
昌寧桂城 B-3 号：東亜大学校博物館 1977『昌寧桂城古墳群発掘調査報告』
昌原大学校博物館 2000『昌原盤渓洞遺蹟Ⅱ』
昌寧桂城Ⅰ -26 号：慶南考古学研究所 2001『昌寧桂城新羅高塚群』
昌寧桂城 89 号：朝鮮総督府 1931『大正十二年度古蹟調査報告』
昌原盤渓洞Ⅰ -24 号：昌原大学校博物館 2000『昌原盤渓洞遺蹟Ⅰ』
陜川玉田 M3 号：慶尚大学校博物館 1990『陜川玉田古墳群Ⅱ』
陜川芋浦里 E5-1 号：釜山大学校博物館 1987『陜川芋浦里Ｅ地区遺蹟』
陜川倉里 B-26 号：東亜大学校博物館 1987『陜川倉里古墳群』
梁山北亭里 14 号：沈奉謹 1994「梁山北亭里古墳群」『考古歴史学誌』第 10 輯　東亜大学校博物館
宜寧礼屯里：慶尚大学校博物館 1994『宜寧礼屯里墳墓群』
密陽月山里 5 号：密陽大学校博物館 2004『密陽月山里墳墓群』
釜山福泉洞 35 号：釜山大学校博物館 2012『福泉洞古墳群Ⅳ』
釜山福泉洞 73 号：福泉博物館 2001『福泉博物館』
金海徳亭里古墳群：［車 2003］
馬山縣洞 64 号：昌原大学校博物館 1990『馬山縣洞遺蹟』
馬山合城洞 9 号：慶南考古学研究所 2007『馬山合城洞遺蹟』
咸安会山里 1 号：［車 2003］
山清玉山里：［車 2003］

図出典

第 206 図　富士市教育委員会作成
第 207 図、第 209 図、第 213 図、第 214 図、第 215 図：筆者作成
第 208 図、第 210 図、第 211 図、第 212 図、第 216 図、第 217 図、第 218 図：各古墳、遺跡にかかわる文献から引用の上、筆者作成

第９節　中原４号墳出土須恵器の様相

和田 達也

はじめに

中原４号墳では、玄室内から 29 点の須恵器が出土した。須恵器は、古墳の築造年代、埋葬の時期・回数を推し測る資料のひとつである。数多くの古墳から出土し、相対的な時期差の検討に用いられている。

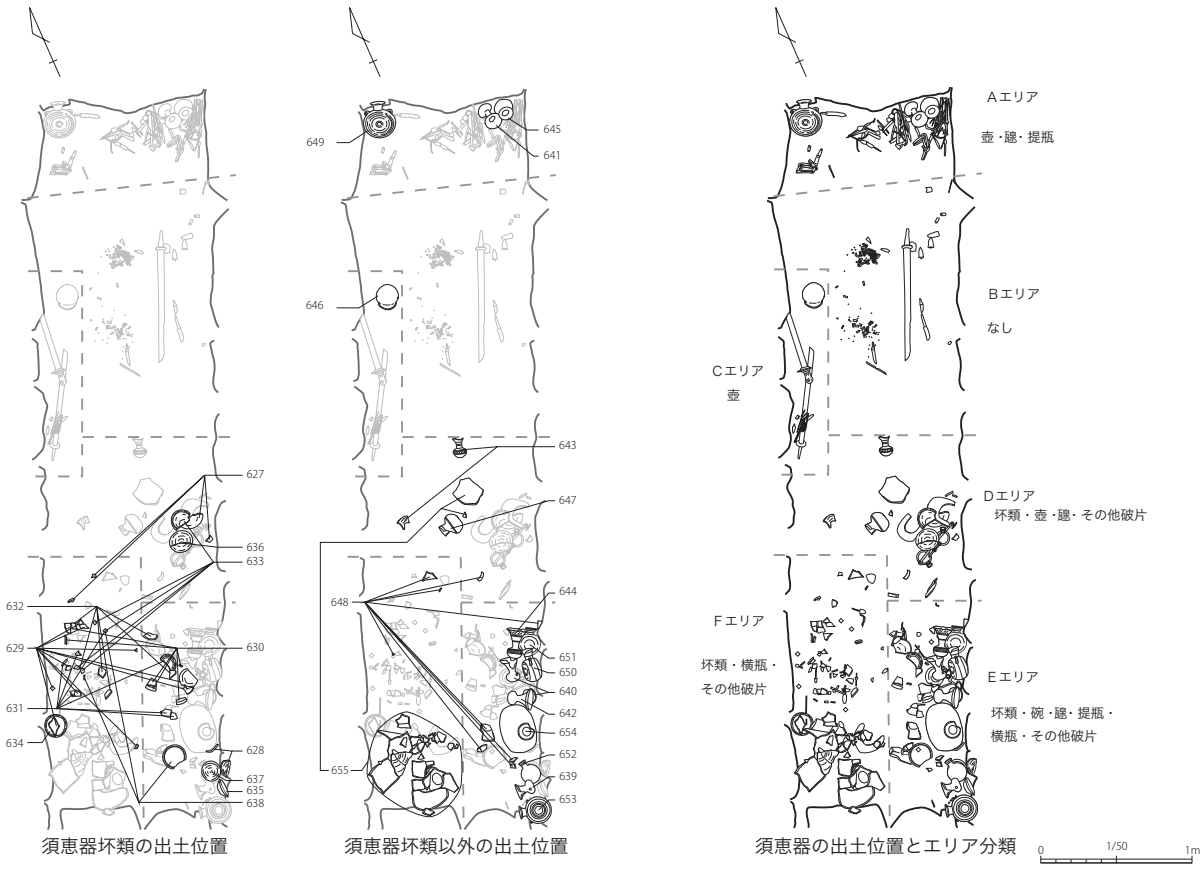
中原４号墳から出土した須恵器には、胎土や形態、調整技法などに多様性が認められ、時期や産地の異なるものが複数あるとみられる。また、副葬された須恵器のなかには追葬に伴い移動された資料や細片化した資料がみられ、複数回の葬送とそれに伴う行為があったと推定できる。

本稿では、須恵器の特徴から中原４号墳における初葬や追葬の時期について検討を行う。また、周辺古墳出土須恵器の特徴・構成と比較し、須恵器から見た中原４号墳の特徴について考察を行う。

１　須恵器の時期

静岡県内における古墳時代の須恵器の編年研究は、まとまった窯跡の調査事例があり資料数が確保されている県西部地方に所在する湖西窯跡群（湖西市）を中心に進められ、一定の成果が示されている。いっぽう、中原４号墳がする県中・東部地方では、生産地でのまとまった調査事例が少なく、編年をはじめとした須恵器に係わる研究は西部地方に比べ低調といえる。しかし、駿河西部地域の消費地の須恵器を素材に、流通構造の把握を試みた後藤の研究（後藤 2000）は、湖西窯産須恵器を中心とした編年に偏った静岡県内の須恵器研究において示唆に富んだものと評価できる。なかでも、静岡県中部における生産地数の推定と須恵器の高坏や瞿に地域色があることを指摘した点が注目できる。

中原４号墳出土の須恵器の生産時期を検討するにあ



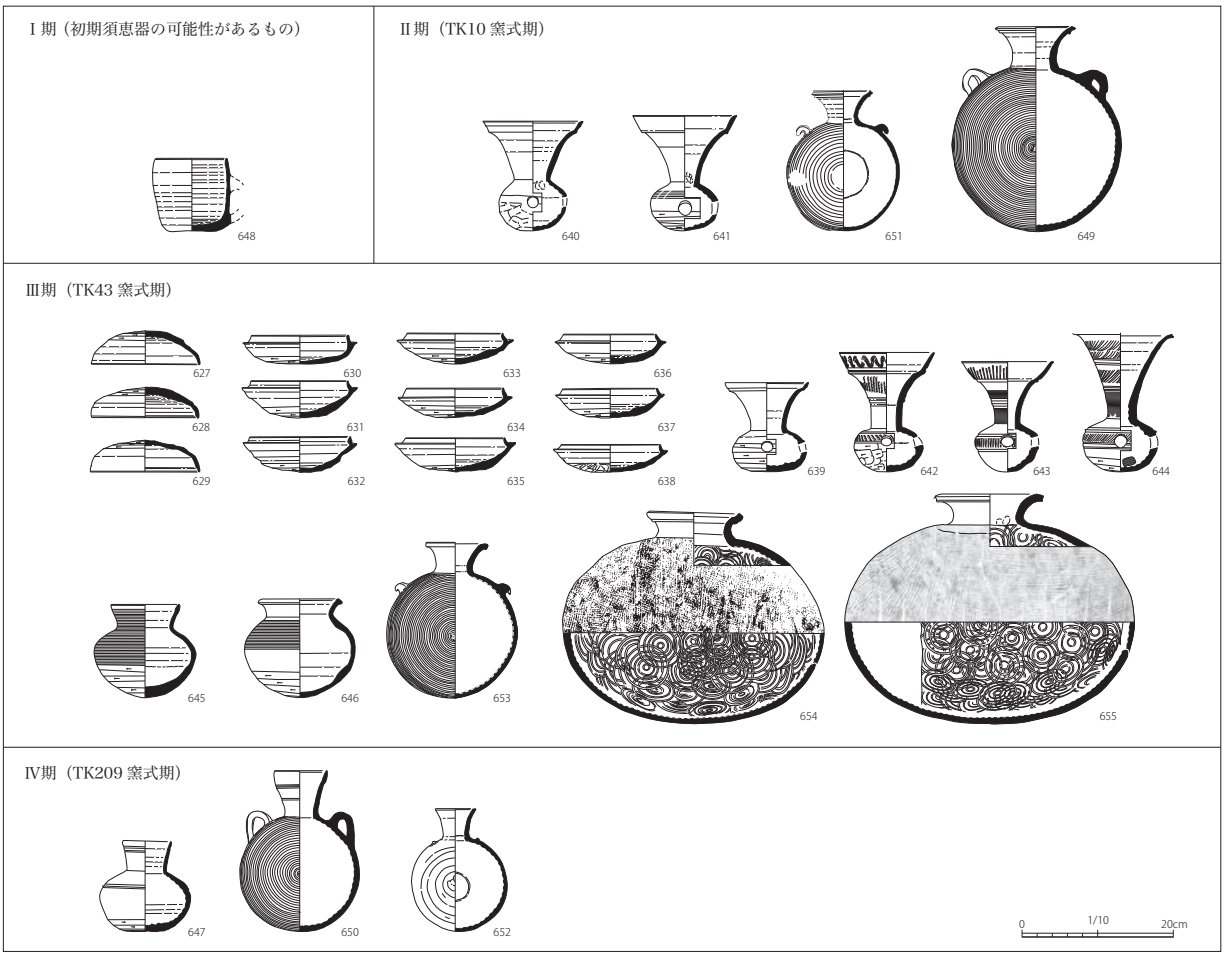
第 219 図　石室内の須恵器出土状況と呼称

たり、在地産須恵器の編年を基準とすることが望ましい。しかし、駿河地域において有効な須恵器編年が構築できていないため、列島各地で広く用いられている陶邑編年（田辺 1981）に基づいて検討を行う。中原 4 号墳から出土した須恵器は、TK73 ～ TK208 窯式期の可能性があるもの（Ⅰ期）、TK10 窯式期（Ⅱ期）、TK43 窯式期（Ⅲ期）、TK209 窯式期（Ⅳ期）の 4 つの時期がある。

Ⅰ期　Ⅰ期の須恵器は、把手付碗（648）である。把手付碗は、一般的に須恵器生産開始時～ＴＫ 23 窯式期までの間で生産が収束する器種である。器種や調整の特徴から TK73 ～ TK23 窯式期に生産された可能性がある。いっぽうで、少なくとも 100 年以上伝世したと考えられる点や装飾を持たない単純な形態であり、口縁端部が丸く整えられている点から、在地窯で生産された可能性も否定できない。

Ⅱ期　Ⅱ期の須恵器として、𤭯（640・641）、提瓶（649・651）の 5 点がある。𤭯は頸部の長頸化の様相が認められるが、相対的に太く、口縁端部は凹面をもつものが多い。提瓶は、環状の把手が付くもの（649）と角状の把手が付くもの（651）がみられ、把手の顕著な形骸化は認められない。口縁部は外反し、口縁端部下方隆帯をもつ。これらの特徴からⅡ期の須恵器はＴＫ 10 窯式期に併行する時期に生産されたと捉えられる。

Ⅲ期　Ⅲ期の須恵器として、坏類（627 ～ 638）、壺（645・655）𤭯（639・642 ～ 644）、提瓶（653）、横瓶（654・655）の 21 点がある。坏蓋は口径 14cm ほどのもので、口縁部と天井部の境には緩やかな段をもつものと滑らかに口縁部に至るものがある。口縁端部は内面に凹面をもつもの（628・629）と丸く整えるもの（627）が認められる。坏身は最大径が 14 ～ 16cm で、深身のものと浅身のものがある。口縁端部は丸く整えられている。坏身・坏蓋ともに天井部外面にはケズリ調整が器高の 1 ／ 3 ～ 1 ／ 5 程度まで施されている。𤭯（642 ～ 644）は、頸部が細くなり、口頸部高が胴部に対して長く、頸部には波状文や列点文、列線文が施されている。提瓶（653）は角状の把手をもつが、Ⅱ期の提瓶に比べ



第 220 図　中原 4 号墳出土須恵器の生産時期

角状の把手が小型であり、形骸化しているといえる。口頸部は外反するが、口縁端部は下方へとつまみ出された形態をしている。横瓶は胴部がほぼ左右均等な形態を呈し、口縁部は外反している。これらの特徴からⅢ期の須恵器はTK43窯式期に生産されたものと比定できる。なお、𤭯（639）は体部が扁平化し、頸部が太い。地域色が顕著であり、TK43窯式期以降に生産されたものと捉えられる。出土状況を踏まえ、Ⅲ期と推定できる。

Ⅳ期　Ⅳ期の須恵器として、壺（647）、提瓶（650・652）の3点がある。いずれの個体も口縁部が直立するものである。また、提瓶（652）は小型化が顕著で、把手の形態は形骸化が進行し浮文状を呈している。これらのことからⅣ期の須恵器は、TK209窯式期に生産されたと捉えられる。

2　造営時期と諸行為の時期

4号墳から出土した須恵器の時期と使用痕跡・出土状態の相関性について分析を行い、4号墳の造営時期と葬送儀礼の回数について検討を行う。

（1）須恵器の生産時期と使用痕跡・出土状態の相関性

Ⅰ期　把手付碗（648）はD・E・Fエリアから小片の状態で出土した。把手は出土しておらず、副葬前に埦部と離れていたと考えられる。顕著な使用痕跡はみられず、破断面にも摩滅・摩耗はみられない。把手が欠損した状態で持ち込まれたと推定できる。

Ⅱ期　𤭯（641）と提瓶（649）がAエリア、𤭯（640）と提瓶（651）がEエリアから出土した。いずれの𤭯も底部外面が滑らかになっており、注口部には欠損や摩耗が認められる。提瓶（651）は、口縁部を上に向けた際に下側となる部分に摩耗がみられる。649では、明確な使用痕や欠損は認められなかった。Ⅱ期と捉えられる遺物はいずれも床面に接した状態で出土している。

Ⅲ期　坏類はD・E・Fエリアから出土した。坏類の口縁端部には弱い摩耗がみられるものがみられる。摩耗がみられるのは、627・630・633・635・636・638である。床に接した状態で627・629～634、床からやや浮いた状態で636、床面から浮いた状態で628・635・637が出土した。

𤭯は、Dから643、Eから639･642･643が出土した。643の注口部には欠けがみられる。

壺は、Aから645、Cから646いずれもほぼ完形の状態である。646の底部と口縁端部が滑らかになっており使用痕跡がみられる。

提瓶は、653がEエリアから完形の状態で出土した。側壁に乗るような状態で出土しており、床面から10cm程度高い位置からであることから、原位置を保つものではない。口縁部に摩耗が認められる。

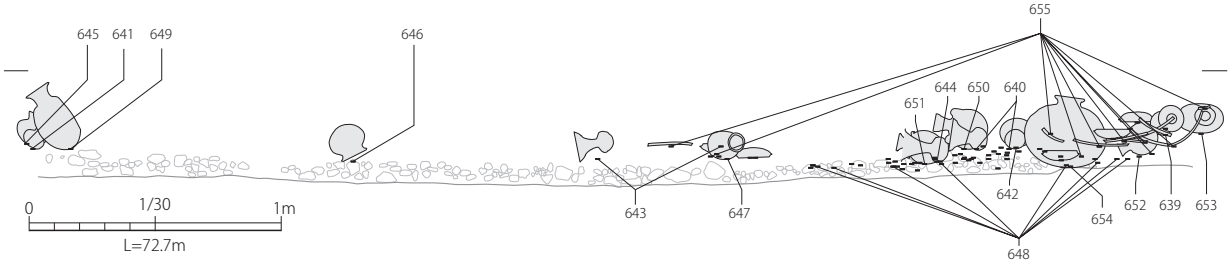
横瓶は、Eから654が完形の状態で出土し、D・Fから655が割れた状態で出土した。655の破片は床面から浮いた状態で出土している。使用痕は認められない。

Ⅳ期　壺（647）はDエリア、提瓶（650・652）はEエリアからほぼ完形の状態で床面から少し浮いた状況で出土した。口縁部には欠けや摩耗がみられる。650・652には使用痕跡がみられない。

（2）埋葬行為（儀礼）の時期と回数

初葬の時期　床面に接する状態で出土した須恵器は、Ⅰ～Ⅲ期に生産されたものに限られ、初葬の時期はⅢ期（TK43窯式期）を中心とした時期といえる。初葬時に副葬された可能性が高い床面直上から出土したものにも使用痕跡が認められ、使用していたものを石室に納めたと捉えられる。

追葬の時期　Ⅳ期に生産されたと捉えられるものは玄室の床面からやや浮いた状態で出土しており、追葬に伴うものと捉えられる。Ⅲ期に生産されたものの中にも床面から浮いた位置で出土したものもあり、追葬に伴い搬入された可能性もある。須恵器の形態差や出土状況からは、初葬後、2回以上の追葬などの行為が行われたと想定できる。



第221図　須恵器（坏以外）の出土高

3　副葬された須恵器の多様性

Ⅰ～Ⅲ期に生産された須恵器の多くは初葬時に、石室内に持ち込まれたと捉えられる。中原４号墳に副葬された須恵器の各器種には複数の個体の副葬が認められるものの、同一器種において同じ形態をしたものはみられない。胎土や焼成雰囲気にも多様性が認められる。多様性を胎土と焼成雰囲気、同一器種における形態や調整の差異などに注目し、中原４号墳出土須恵器の多様性について分析を行う。

(1) 胎土の多様性

類型１　砂質で、0.5 mmの白色粒子と黒色粒子を含む胎土をもつ。坏蓋（627）と坏身（631）の２点があり、天井部と底部の内面は５条程度のナデがみられる。坏身の受部内側はなめらかに立ち上がる。

類型２　粘質で、0.5mm ～ 3 mmの白色粒子、灰色粒を含む胎土で、黒色粒子は含まない。坏身（633）の１点がこの類型にあたり、受部内側は滑らかに立ち上がり、底部の内面には指頭痕とナデがみられる。

類型３　粘質の胎土で、0.5mm ～ 4mm の白色粒子やチャート粒、0.5mm 程度の黒色粒子を含むものである。坏類については、器表面がなめらかなものとなめらかでないもの２つに細分が可能である。表面が平滑な坏身（630・634）は受部内面が緩やかな曲線を描いてなめらかに口縁部に至る傾向がある。いっぽう、表面がざらつく坏身（632・635・636・638）は受部内面が弱く屈曲するもしくは屈曲するものである。平滑度合が中間に位置する坏身（637）は受部内面が屈曲する。

類型４　粘質の胎土で、0.5mm ～ 4mm の白色粒子や0.5 mm程度の黒色粒子を含むもの（643・644・645・647・650・652・654）である。645・647・650・652 は口縁部が直立する。壺・瓶類に偏っており、類型３に含まれるチャートが器面に現れていないものを分類している可能性があり、類型３と同じ産地の可能性を含むものである。

胎土５　非常になめらかな粘質の胎土で、0.5 mmの白色粒子や黒色粒子を少量含むもので甕（642）があげられる。

胎土６　非常に緻密な粘質の胎土で、0.5 mmの白色粒子を少量含むもので、断面色調は紫褐色を呈するものである。把手付碗（648）が例として挙げられる。

(2) 貯蔵具の多様性

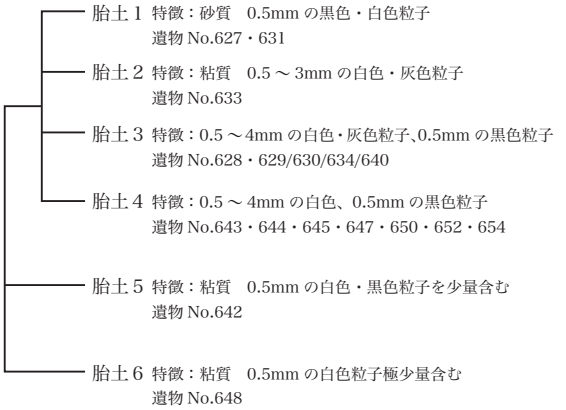
初葬に伴い副葬されたと捉えられるⅡ～Ⅲ期の須恵器貯蔵具の特徴として、甕や壺・提瓶・横瓶の同器種における形態の多様性が挙げられる。甕は頸部高と胴部の器高に占める割合や口縁端部の形態、施文の有無と種類に差異がみられる。壺は 645・646 が類似しているが、口縁端部形態に差異が認められる。提瓶も同一時期に生産されたと見なせるものがあるが、口頸部の形態や把手の形態に差異があり、同一形態のものがない。647 も壺だが、頸部形態や器面調整・焼成雰囲気が 645・646 とは明らかに異なる。横瓶も、口縁端部や成（整）形に差異が認められる。

(3) 坏類の多様性

中原４号墳からは９点と坏蓋３点の 12 個体が出土している。坏類は形態的特徴から同時期に生産されたと捉えられるが、焼成雰囲気や胎土、調整、細部形態の特徴には、差異が認められる。坏身と坏蓋の中に焼成時のセット関係を保ったまま持ち込まれたと評価できるものはない。坏蓋は、天井部と口縁部の境に稜や段をもつものと滑らかなものがあり、口縁端部は丸いもの（627）・内傾する凹面をもつもの（628）・口縁端部内面に凹線がみられるもの（629）があり、それぞれに形態的な特徴が異なる。

(4) 小結

中原４号墳に副葬された須恵器は、複数個体出土しているすべての器種において形態や胎土・焼成雰囲気の多様性が認められる。形態や産地の異なる須恵器を意図的に副葬していることがうかがえる。



第 222 図　胎土の分類とその特徴

4　把手付碗の時期について

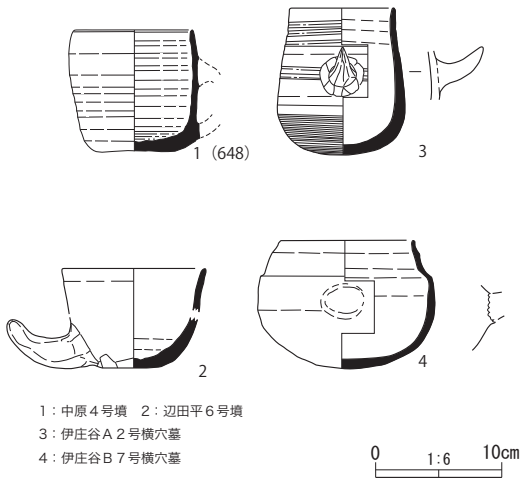
中原４号墳から出土した把手付碗は、陶質土器・初期須恵器もしくは在地産須恵器と考えられている（鈴木敏則 2012)。陶質土器・初期須恵器と捉えた場合、把手は欠損しているものの 100 年以上、ほぼ完形の状態で伝世したといえる。いっぽう、在地で生産されたと捉えた場合、初期須恵器と見紛うほど忠実に把手付碗を生産したことの意義が課題となる。本節では県内の後期の古墳や横穴墓における把手付碗の出土事例と伝世の有無を踏まえ、中原４号墳出土の把手付碗の時期について考察を行う。

(1) 中原４号墳出土把手付碗の特徴

中原４号墳出土の把手付碗（648）は、円柱状の形態を呈し、高さ 9.75cm、口径 9.3cm、底径 6.2cm である。口縁端部は丸く整形されている。底部外面は、ケズリとナデ調整が施され、共伴する他器種とは調整の雰囲気に大きな差異が認められる。把手は欠損しているが、器壁表面にのこる剥離の痕跡から環状の把手が付属したと考えられる。剥離部分や破断面の色調は赤褐色を呈している。初期須恵器に位置づけられる把手付碗に多くみられる隆帯や鋭い稜、波状文を用いた装飾などはみられない。

(2) 後期古墳から出土した把手付碗と伝世の様相

静岡県内の後期古墳や横穴墓から出土した全形をうかがい知ることのできる把手付碗を第 253 図に示した。浜松市の辺田平６号墳（2：MT15 窯式期・浜北市教委 2000)、静岡市の伊庄谷横穴墓群 A2 号横穴墓（3：TK209 窯式期、静岡県教委 1986)・B7 号横穴墓（4：TK209 窯式期）の３例がある。把手が残存しているものは２と３で角状の把手が付属し、４も剥離の状況から角状の把手が付くといえる。２～４は胎土の特徴や焼成雰囲気などから、在地窯で生産されたものと捉えられる。これら、在地窯で生産されたと評価できる把手付碗はいずれも角状の把手を備えている点が注目できる。



1：中原４号墳　2：辺田平６号墳
3：伊庄谷Ａ２号横穴墓
4：伊庄谷Ｂ７号横穴墓

第 223 図　静岡県内出土の把手付碗

なお、県内で出土した陶質土器や初期須恵器は鈴木敏則により集成が行われている（鈴木 2012）が、中原４号墳の把手付碗のように長期にわたる伝世が疑われるものは認められない。

(3) 小結

中原４号墳出土の把手付碗は、鈴木敏則が指摘するように形態が単純であり、共伴する須恵器の中に焼成雰囲気の類似するものがあることを鑑みると在地産の可能性を否定できない（鈴木 2012)。しかし、県内の後期古墳等から出土した在地産の把手付碗に比べ、焼成雰囲気や調整の表情、環状の把手をもつなど初期須恵器の特徴を色濃く示す中原４号墳出土の把手付碗は、伝世品の可能性が高いと考えられる。

5　同時期の古墳に副葬された須恵器の組成

中原４号墳に副葬された須恵器は、供膳具（坏･碗類）３器種 13 個体、貯蔵具（壺・甕・瓶類）４器種 16 個体の計７器種 29 個体がみられる。

中原４号墳と富士市内おけるにほぼ同時期（TK43 ～ TK209 窯式期）の古墳に副葬された須恵器の器種構成と個体数を比較し、中原４号墳出土須恵器の器種構成の特徴を抽出する。

古墳から出土した須恵器の器種構成に着目すると１～３器種の古墳と５～８器種と多様な器種構成を示す古墳がある。中原４号墳と器種構成が類似する古墳として中里 K-99 号墳や船津 L-154 号墳が挙げられるが、貯蔵具の器種毎の個体数は１～３個体であり、中原４号墳の出土量と比較すると少ない。中原４号墳より器種数が多い古墳として８器種 22 個体を数える横沢古墳があるが、副葬の回数が多く、幅広い時期の須恵器が認められる。

中原４号墳から出土した須恵器は、器種が豊富で、一器種あたりの所有量が突出して多い点が特筆できる。墳丘や石室の規模をみると、中原４号墳よりも大型の古墳が多くみられる。中原４号墳における須恵器を豊富に所有する状況は、単に階層性を示すものではなく、被葬者の特徴を示すものと考えられる。

第 23 表　富士市内の古墳における須恵器の器種組成

古墳の名称	時期	形態	規模(m)	埋葬施設	出土須恵器													備考	文献
					供膳具						貯蔵具								
					蓋坏(身)	蓋坏(蓋)	有蓋高坏	高坏(蓋)	無蓋高坏	把手付椀	醞	壺	提瓶	ﾌﾗｽｺ瓶	平瓶	横瓶	甕		
中原 4 号墳	TK43-209	円墳	11	横穴式石室	9	3				1	6	3	5			2		追葬有	本　書
横沢古墳	TK43-217	円墳	16	横穴式石室	7	7	1+		1		1		1	1			1	追葬有	富士市教委 1981
中里 K -99 号墳	TK43-209	円墳		横穴式石室	4	4					3		1	1		1			富士市教委 1975
船津 L-206 号墳	TK209	円墳		横穴式石室			5+	1	1			2					1+		富士市教委 2013
船津 L-123 号墳	TK43-209	円墳	10	横穴式石室			2	1										船津桜沢 A 古墳	吉原市教委 1985
船津 L-126 号墳	TK43-209	円墳		横穴式石室							1	1	2					船津丸山古墳	吉原市教委 1985
船津 L-202 号墳	TK43-209	円墳	22.5	横穴式石室	5	1			1				1					船津寺ノ上 1 号墳	富士市教委 1988
谷津原 2 号墳	TK43-209	円墳		横穴式石室	5	3						2							富士川町教委 1987
谷津原 6 号墳	TK43-209	円墳	17	横穴式石室	2						1				1				静岡県埋文研 2001
谷津原 8 号墳	TK209			横穴式石室	2														静岡県埋文研 2001
中原 3 号墳	TK209	円墳	7.5	横穴式石室									1						本　書

6　中原 4 号墳に副葬された須恵器が示すこと

葬送儀礼の時期　中原 4 号墳に副葬された須恵器の時期は、初期須恵器の可能性があるもの、TK10 窯式期、TK43 窯式期、TK209 窯式期の 4 つの時期に生産されたものがある。初葬の時期は TK43 窯式併行期と捉えられ、TK209 窯式期併行期までに 2 回以上の追葬があったと想定できる。初葬時に用いられたと捉えられる醞（640）や提瓶（649・651・653）には口縁部や底部に磨耗や欠損がみられ、古墳に副葬される前に使用されていたとことがうかがえる。葬送儀礼に際し、新調されたものではなく、使用された器物が副葬品として納められたと考えられる。また、把手付椀は、初期須恵器である可能性が高く、生産から副葬までに 100 年以上の伝世期間を経て、初葬時に副葬されたとみられる。

須恵器の多様性　同一器種における形態差や胎土の違い、焼成雰囲気からは在地窯を中心に最低 3 箇所の生産地から搬入されたと捉えらえる。坏類や醞・壺・提瓶・横瓶で複数個体の副葬が認められるが、同一形態のものがなく、産地や操業段階の違いをうかがわせる。周辺の古墳では、貯蔵具の同一器種を中原 4 号墳ほど所有する事例がみられない。また、周辺の古墳から出土した須恵器は、色調や形態に統一感のあるものが多い。中原 4 号墳出土の須恵器は、他の古墳に比べて複数の産地からもたらされていることが特筆できる。

被葬者像　中原 4 号墳の被葬者は複数時期・複数産地の須恵器を入手・保有できる立場にあったと捉えられる。中原 4 号墳の築造時期は、駿河地域において須恵器生産が開始された時期にあたる。初葬の時期よりも 100 年以上古い（古く見える）把手付椀を所有や副葬された多様な須恵器の所有は、中原 4 号墳の被葬者が須恵器生産の導入と管理に指導力を発揮した人物（集団）であったことを示していると捉えてよいだろう。

引用・参考文献

川江 秀孝　1992「須恵器の編年」『静岡県史資料編 3 考古三』静岡県

小池 寛　2010「須恵器提瓶再考」『京都府埋蔵文化財論集』第 6 集　京都府埋蔵文化財調査研究センター

後藤 健一　1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会

後藤 健一　2000「古墳出土須恵器にみる地域流通の解体と一元化『日本考古学』第 9 号　日本考古学協会

鈴木 敏則　2012「静岡県下タ村遺跡出土の韓式系土器 - 県内の韓式系遺物と渡来人」『韓式系土器研究Ⅻ』韓式系土器研究会

鈴木 敏則　2004「5 章 まとめ」『有玉古窯』浜松市教育委員会

田辺 昭三　1981『須恵器大成』角川書店

山田 邦和　1998『須恵器生産の研究』学生社

資料文献

後藤 守一・斎藤 忠　1953『静岡賤機山古墳』静岡県教育委員会

(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所　2001『富士川 SA 関連遺跡』

静岡県教育委員会　1986『伊庄谷横穴群』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010『衣原古墳群 衣原遺跡 衣原古窯跡群』

浜北市教育委員会　2000『内野古墳群』

富士川町教育委員会　1987『駿河妙見古墳群』

富士川町教育委員会　2008『谷津原古墳群』

富士市教育委員会　1975『中里大久保（K 第 95 号）古墳

富士市教育委員会　1981『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子臨海港線埋蔵文化財発掘調査報告書　横沢古墳　中原 1 号墳　伝法古墳群（A ～ E 地区）天間地区』

富士市教育委員会　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』

富士市教育委員会　1998『寺ノ上古墳発掘調査報告書』

富士市教育委員会　1999『船津古墳群』

富士市教育委員会　2013『船津古墳群Ⅱ』

吉原市教育委員会　1985『吉原市の古墳』

第 10 節　中原 4 号墳出土土師器の様相

佐藤 祐樹

はじめに

中原 4 号墳において石室内から 1 点、周溝内から 3 点の土師器が出土している。埋葬年代については、土師器 1 点のみから年代を決定することは非常に難しく、石室内から出土した豊富な副葬品の年代からせまる事になる。また、周溝から出土した土師器についても周辺遺跡における出土例から、その年代に迫っていくこととしたい。

1　出土土師器について

石室内からは坏、周溝からは坏 1 点、小型壺 2 点が出土している。

石室内から出土した坏（656）は、石室の開口部側において、8 点に割れて出土した。おそらく追葬時のかたづけ等により割れたものと考えられ、初葬時の遺物と考えてさしつかえない。木葉痕をもつ厚い底部から内湾しながら口縁部にいたる。見込みに放射状のヘラミガキが丁寧に施されている。口径 14.2cm、器高 4.0cm、底部径 5.5cm を測る。

周溝から出土した土器については、その出土状況の詳細が明らかではない。坏（1）はいわゆる須恵器坏蓋模倣とされるもので、口径 9.6cm、器高 3.8cm、最大径 10.4cm とやや小型な部類である。器壁は全体的に厚く、底部は丸底に仕上げられている。内外面ともに入念にヘラミガキが施され光沢をもっている。

小型の壺は 2 点出土しているが、それぞれ形態は大きく異なる。1 点（2）は、球形の胴部に内湾する口縁部がつく。集落遺跡では、あまり見ない形である。やはり全体的に入念なヘラミガキが特徴である。もう 1 つの小型壺（3）は、扁平で肩の張った胴部をもち、やや外反する口縁部をもつ。やはり、全体的に入念なヘラミガキが施されている。

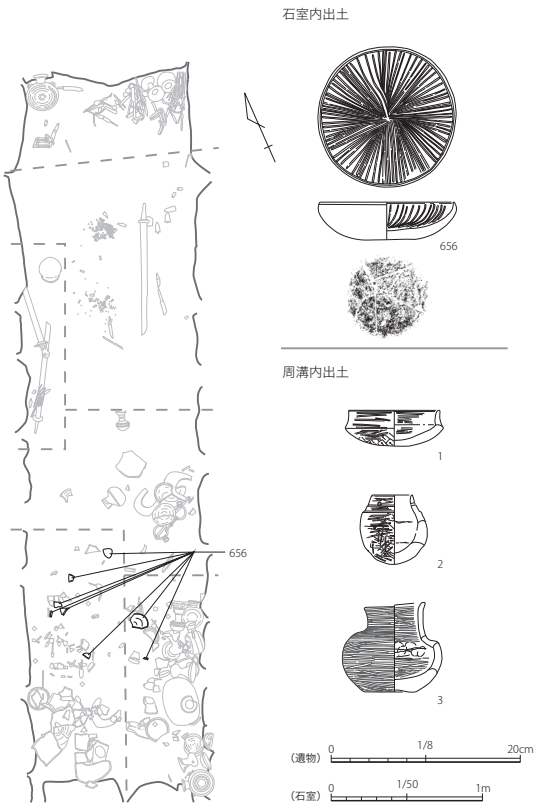
周溝出土の土師器については追葬もしくは、その後の祭祀行為に伴い私用されたもの可能性も残るが、集落遺跡ではあまり見ない形態などから、墓で使用する事を強く意識してつくられた土器と言える。

2　坏の変遷

石室から出土した坏の年代的位置付けを行うために、周辺における集落出土の土師器を概観し、その変遷について確認する必要がある。

著者は以前、山本恵一（1995）、木ノ内義昭（2001）の業績に導かれながら、富士山西麓に源をもち駿河湾へそそぐ潤井川流域における古墳時代中期中頃から飛鳥時代の土器様相について触れた（佐藤 2014）。

ただし、一括資料の提示に主目的をおいたため、各器種の型式変化については、述べる事が出来なかった。そのため本論では、坏の変遷について述べ、中原 4 号墳石室出土の土師器の年代を考える材料としたい。



第 224 図　中原 4 号墳土師器出土状況図

分類

坏A　浅い体部をもち、口縁部を短く外反させるもの。（木ノ内　埦B類）

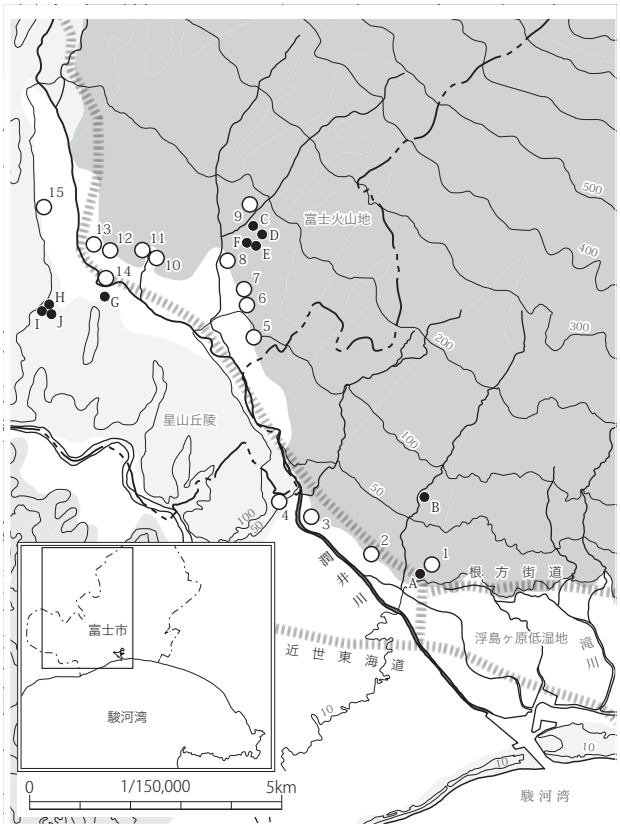
坏B　「駿豆型坏」（池谷 1999）とされるもので、底部外面に木葉痕をもち、平底もしくは、やや上げ底の底部からやや直線的に広がるもの。口縁部が内湾するものと、内湾しないものに細分される。（木ノ内　坏A類）

坏C　底部は丸底で内湾しながら口縁部にいたる。（木ノ内　坏B類）

坏D　比較的広い平底の底部をもち、やや内湾しながらたちあがるものの器高が低い。胎土が粗く、明るい橙色を呈することが多い。（木ノ内　坏D類）

坏E　須恵器坏蓋模倣の坏で、口縁部が上方に立ち上がるもの。

坏F　坏E同様、須恵器坏蓋模倣の坏で、口縁部がS字状に屈曲するもの。



A. 伊勢塚古墳　B. 中原4号墳　C. 大室古墳　D. 神祖山ノ神古墳　E. 神祖2号墳
F. 神祖3号墳　G. 滝戸1号墳　H. 別所1号墳　I. 別所稲荷塚古墳　J. 別所蛇塚古墳
1. 東平遺跡　2. 中桁・中ノ坪遺跡　3. 沢東A遺跡　4. 高徳坊遺跡　5. 権現遺跡
6. 石敷遺跡　7. 上石敷遺跡　8. 木ノ行寺遺跡　9. 峯石遺跡　10. 大宮城跡
11. 浅間大社遺跡　12. 貴船町遺跡　13. 東田遺跡　14. 泉遺跡　15. 牛ヶ沢遺跡

第225図　潤井川流域の遺跡

坏A　浅い体部をもち、口縁部が短く外反する坏Aは、潤井川流域に須恵器が認められる様になるTK208型式期から見られる。沢東A遺跡第1次調査地点SB27では、須恵器廻や、後述する坏Bの「駿豆型坏」と共伴している。木ノ内（2001）は、この形態を甲斐系のものではないかと想定している。確かに石神・笠原（1999）によれば、TK73・216段階からこの器種がみとめられ、徐々に口縁部の外反が不明瞭になり、TK23・47型式期段階までは継続すると考えられている。しかし、口縁端部のみを外反させる埦は広く東日本にみられる技法・形態であり、その影響を甲斐に限定する事は出来ない。むしろ東北地方南部などの影響を考慮しなければならない器種である。いずれにせよ坏Aは坏B（「駿豆型坏」）などが多くみられるようになる以前から存在し、その後、継続的にみられる器種とはならない。

坏B　池谷（1999）のいう「駿豆型坏」である。ここで、その定義について整理しておく。

・木葉痕の残る小さな平底から体部が内湾して立ち上がり半球状を呈す。
・外面調整は横方向のヘラミガキ、底部付近は板ナデ。内面は放射状のヘラミガキ。
・胎土は比較的きめが粗く、白色粒子（カワゴ平パミスか？）を多く含む。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）。

池谷によれば、TK216型式期段階以降にみとめられ、形態的には大きく変化せず、MT15型式期段階前後でみえなくなるとの事である。

潤井川流域における坏Bは、前述のTK208型式段階の沢東A遺跡第1次調査地点SB27においてみられ、その後、TK10型式期に位置づけられる中桁・中ノ坪遺跡第1地区第41号住居跡までみとめられる。その出土量からみればMT15型式期を最後に減少し、TK10型式期においてみえなくなると言う事が出来る。

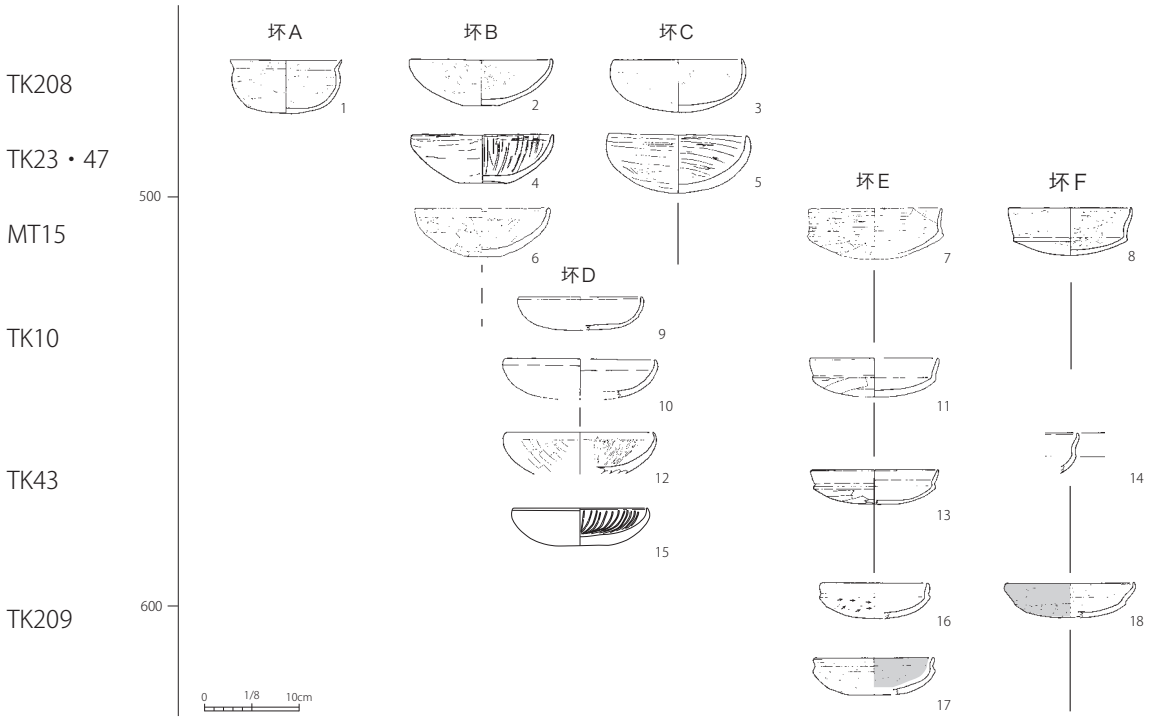
坏C　底部が丸底で内湾しながら口縁部に至る器種である。木ノ内が「丸底内彎坏」としたものである。また池谷は坏Aとし、駿豆型坏と同じTK208型式期にみとめられ、MT15型式期もしくはもう少し残存すると考えた。沢東A遺跡SB27では坏A・Bとともに坏Cも共伴する事から、TK208型式期にはみられる様である。おそらく、坏Bなどよりも以前から存在した器種と考えられる。その後、丸底から平底に変化することで坏Cとしては駿豆型坏同様MT15型式期前後でみえなくなる。

坏Ｄ　比較的広い平底の底部をもち、器高が低く立ち上がるものである。それまで丸底であった坏Ｃや同じく放射状ミガキをもつ坏Ｂが消滅し、坏Ｄが出現するが、坏Ｂ・Ｃ両者の影響下に坏Ｄが出現したと理解できるかについては検討も必要になる。胎土が粗く明るい橙色を呈するのが特徴で、TK10 型式期の中桁・中ノ坪遺跡第１地区 SB41 や、TK43 型式期の同遺跡第２地区１号住居などにおいて認められる。しかし、TK209 型式期になると坏のバラエティが豊富になる一方で、この器種は一般的にみられなくなる。

坏Ｅ　須恵器坏蓋模倣の坏で、口縁部が上方に立ち上がるものをいう。木ノ内氏の坏 C1 類､C2 類に該当する。

確実に TK23・47 型式期までさかのぼる例はなく、MT15 型式期に位置付けられる沢東Ａ遺跡第４次 SB50 や、同遺跡第３次 SB3 にみられるようになる。当初、器壁が薄く、調整も丁寧で、須恵器の忠実な模倣から始まったが、時間を経るにしたがって、厚みを増し調整もあらくなる。TK10 型式期段階において、すでにミガキを省略し、ケズリのみの調整となる。TK209 型式期になり坏Ｆが多くなり、出土数が減少するものの、一定量残る。

坏Ｆ　坏Ｅ同様、須恵器坏蓋模倣の坏で、口縁部がＳ字状に屈曲するものをいう。木ノ内氏の坏 C3 類・坏 C4 類をいう。MT15 型式期に位置づけられる沢東Ａ遺跡第１次調査 SB21 にみられる。TK23・47 型式期にさかのぼる可能性のある資料として伊勢塚古墳出土の資料があるが（富士市教委 2012)、確定的ではない。むしろ一般的に多くみられる様になるのは、TK209 型式以降である。この段階の坏Ｆは外面赤彩や内面を黒色処理したものが多くみられ、TK209 型式期～飛鳥Ⅱ・Ⅲを通じて坏のなかで中心的な器形として存在する。

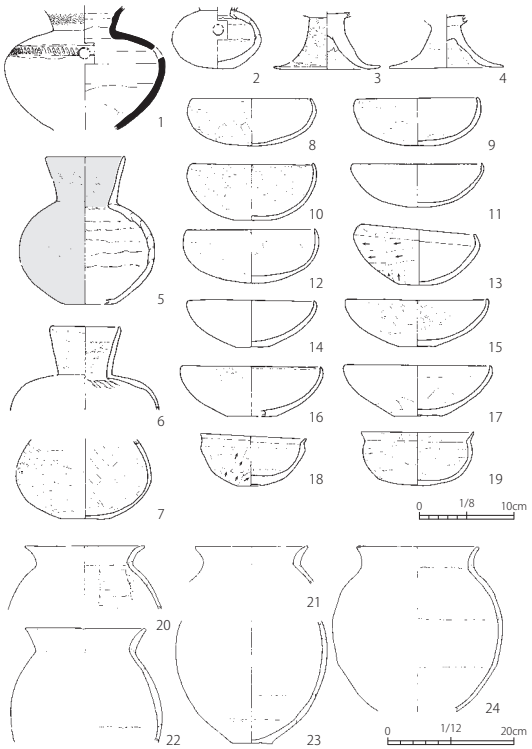


1～3　：沢東Ａ遺跡１次 SB27
4・5　：沢東Ａ遺跡３次 SB12
6・7　：沢東Ａ遺跡４次 SB50
8　：沢東Ａ遺跡１次 SB21
9～11　：中桁・中ノ坪遺跡１地区 SB41
12・14　：沢東Ａ遺跡１次 SB22
13　：中桁・中ノ坪遺跡２地区１号住居
15　：中原第４号墳
16～18　：沢東Ａ遺跡１次 SB13

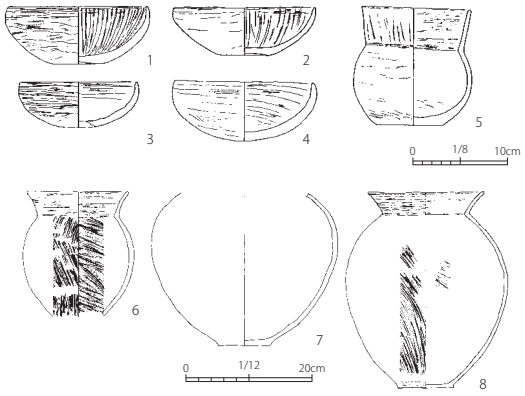
第 226 図　潤井川流域における坏の変遷

TK208 ～ TK23・47

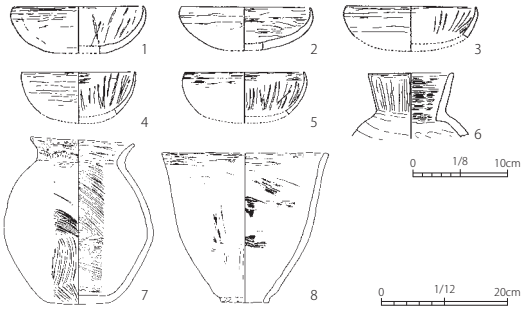
沢東Ａ遺跡　第１次調査地点　SB27



沢東Ａ遺跡　第３次調査地点　第 12 住居址

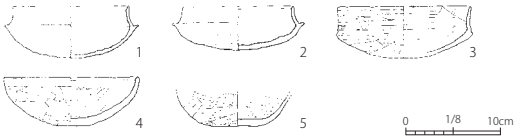


沢東Ａ遺跡　第３次調査地点　第 17 住居址

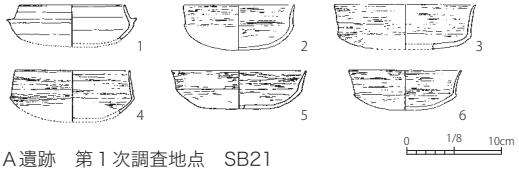


MT15

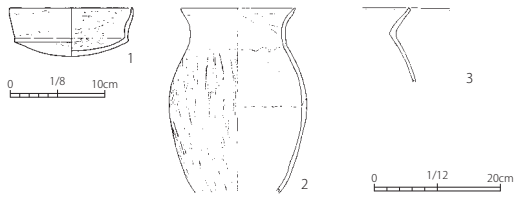
沢東Ａ遺跡　第４次調査地点　第 50 号住居跡



沢東Ａ遺跡　第３次調査地点　第３住居址

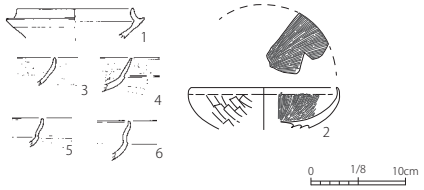


沢東Ａ遺跡　第１次調査地点　SB21

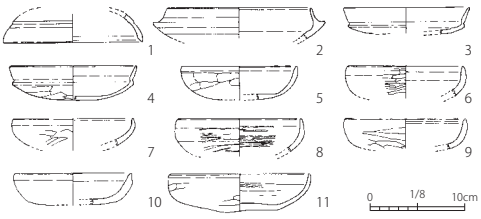


TK43

中桁・中ノ坪遺跡　第１地区　SB22

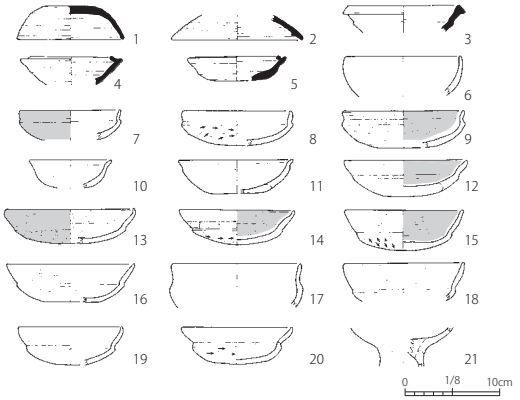


中桁・中ノ坪遺跡　第２地区　第１号住居跡



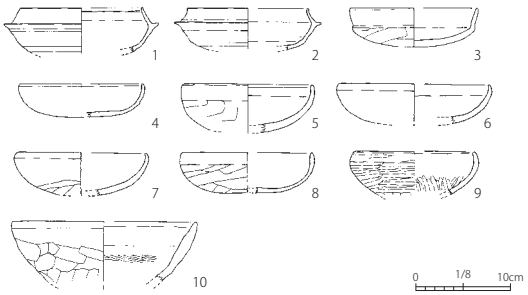
TK209 ～

沢東Ａ遺跡　第１次調査地点　SB13



TK10

中桁・中ノ坪遺跡　第１地区　第 41 号住居跡



第 227 図　潤井川流域の土器様相

3　位置付け

4号墳石室から出土した唯一の土師器である坏は、前述の分類にしたがうと胎土の粗さや特徴、形態的特徴から坏Dとなる。内面の放射状のヘラミガキや底部外面の木葉痕は坏Bとした「駿豆型坏」の特徴のなごりと考えられるが、底部の大きさや、その異常なまでの底部の厚み、低い器形は、坏Cとした「丸底内彎坏」の影響であろう。

前述の通り、この坏DはTK10型式期・TK43型式期においてみられるものの、TK209型式期には認められないか、認められても一般的ではない。類例を同じ潤井川流域でみるのであれば、TK43型式期に位置づけられる沢東A遺跡第1次調査SB22があげられる。この遺構からは本地域においてあまり広がらない須恵器坏身模倣の土師器坏が出土しており、坏Dと坏Fが共伴している。この坏Dは底部外面が欠けているものの、形態や胎土､内面調整にいたるまで4号墳出土品と酷似しており、同時期と位置付けられる。

周溝から出土した坏（1）は前述の須恵器坏身模倣の土師器坏であり、本地域における主要な器種組成とはならない。器壁も厚く、石室内から出土した坏の年代と大きな齟齬はないものと考えられる。一方、小型壺（2･3）は、集落からの出土例がなく年代的アプローチに限界がある。ただし、内側に向かって伸びる口縁部や頸部の段差の作り方、調整技法などの特徴は、TK209型式前後に位置づけられる沼津市中原遺跡4地区SB15に似ており、その前後の時期の土器と考えられる。

おわりに

石室内から出土した土師器坏は周辺の集落遺跡出土資料との比較検討から、6世紀後葉、TK43型式期と位置付けた。土師器1点のみからの位置付けには、多少、慎重にならざるを得ない部分もあり、もう1段階古い可能性も残るが、新しい段階（TK209型式期）に位置付ける根拠は現段階ではない。

参考文献

池谷 初恵　1999「駿河伊豆型平底坏について」『東国土器研究』第5号

石神 孝子・笠原 みゆき　1999「甲斐における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』第5号

木ノ内 義昭　2001「須恵器流入以降～律令時代の土師器の様相―主として律令時代富士郡衙推定域の出土遺物から―」『東平遺跡（第16地区（三日市廃寺跡)、第27地区発掘調査報告書)』富士市教育委員会

佐藤 祐樹　2014「潤井川流域における須恵器流入以降の土器様相」『沢東A遺跡　第1次』富士市教育委員会

富士市教育委員会 2012『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成11・12年度－』

山本 恵一　1995「静岡県下の6～7Cの土師器―駿河東部・伊豆北部の現状について―」『東国土器研究』第4号

第５章　総　括

本書で報告した伝法古墳群（中原第３～６号墳）の調査成果、とくに中原第４号墳の考察を通じて、古墳時代後期後半（6 世紀後葉）の東駿河における中小首長層の特質を明らかにした。埋葬施設の特徴、副葬品、執り行われた儀礼、さらに古墳築造の背景とその後の地域史の展開など、明らかとなった内容は多岐にわたるが、さいごにこれらを要約し、総括としたい。

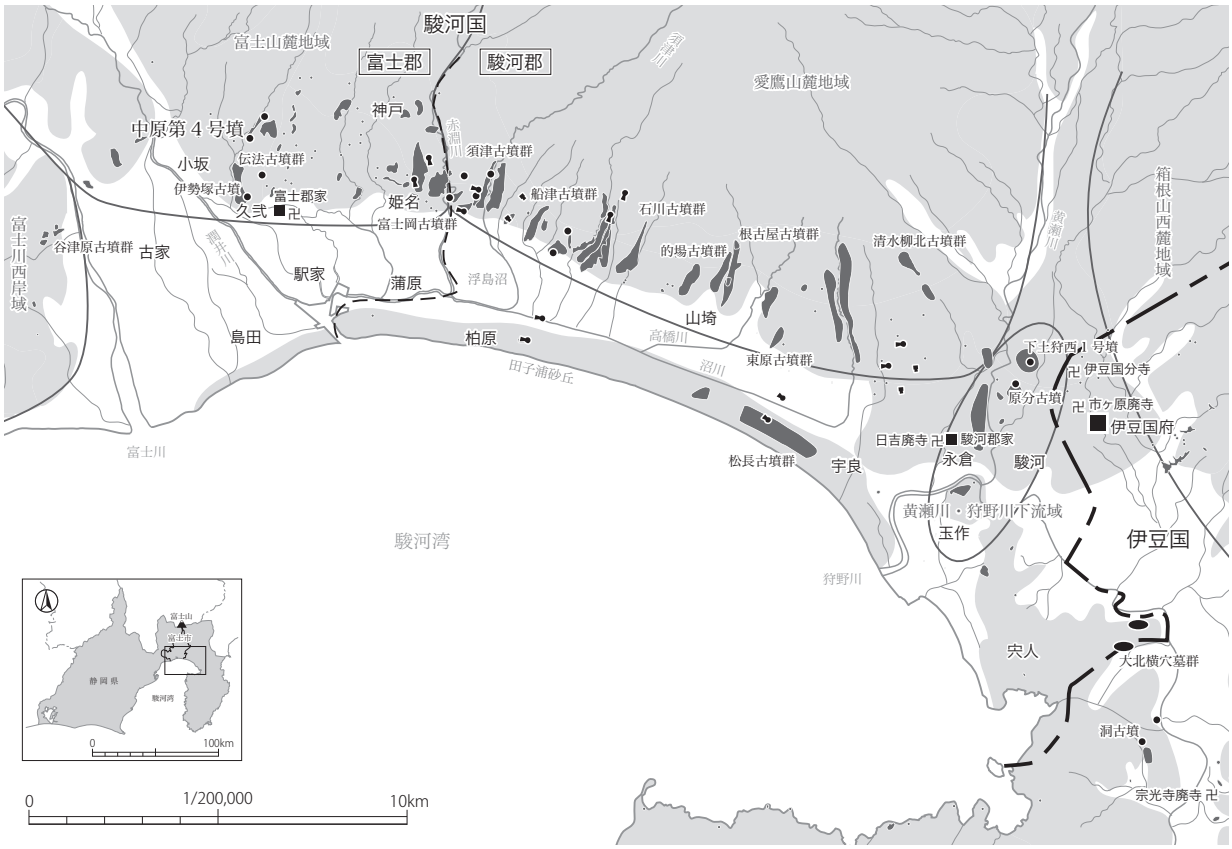
古墳の立地　中原第３～６号墳を含む伝法古墳群は静岡県富士市伝法の富士山南麓の緩斜地に立地する。中原第４号墳は駿河湾に注ぐ潤井川に合流する伝法沢の東側の標高 73m 付近に占地しており、駿河・甲斐を結ぶ交通の要衝に倭王権による東国経営の前線としての機能を持って築かれた可能性が高い（本書第４章第２節、藤村論考）。

また、6 世紀の宣化・欽明天皇以降に交通の重要ルートでもあるこの地に屯倉が設置されていたとすれば、潤井川流域の沢東 A 遺跡や中桁・中ノ坪遺跡がその候補としてあげられる（本書第４章第１節、佐藤論考）。

伝法古墳群が展開した地域は、後の令制下における駿河国富士郡の範囲に該当する『静岡県史』によると富士郡家を中心に西側に久弐郷、東側に姫名郷、南側に駅家郷が想定される。

東駿河における古墳の様相差は、富士山麓地域にあたる伝法古墳群、比奈古墳群と、愛鷹山麓地域にあたる須津古墳群、中里古墳群、船津古墳群、石川古墳群、的場古墳群、根古屋古墳群に区分することができ、それぞれがのちの駿河国富士郡、駿河国駿河郡の区部に属する。

さらに伝法古墳群が築かれた範囲には、令制下において富士郡家が形成された。その中枢施設は伊勢塚古墳の隣接地に配置されている。これは、駿河湾から直接海路でたどり着くことができることに加え、陸路でも東海道が通ることや甲斐への分岐点であることなど交通の要衝であることに起因する。富士郡家形成の下地は、集落や古墳群の展開にみるように古墳時代中期後半以降に活発化する地域開発にあったと評価することができよう。



第 228 図　東駿河における古墳の様相と古代郷里

古墳の規模と構造　中原第３号墳は、東西で10.76m、南北10.67m（周溝を含む。以下、同様）、石室全長4.57mを測る横穴式石室墳（円墳）である。

中原第４号墳は、東西14.47m、南北13.77m、石室全長5.52mを測る横穴式石室墳(円墳)である。中原第5・6号墳を含め、いずれの石室も無袖で東駿河に多く認められる框石を用いた段構造を有する。中原第４号墳は富士山南麓における最初期の横穴式石室と評価でき、新たな埋葬形態導入のきっかけを作ったと評価できる。

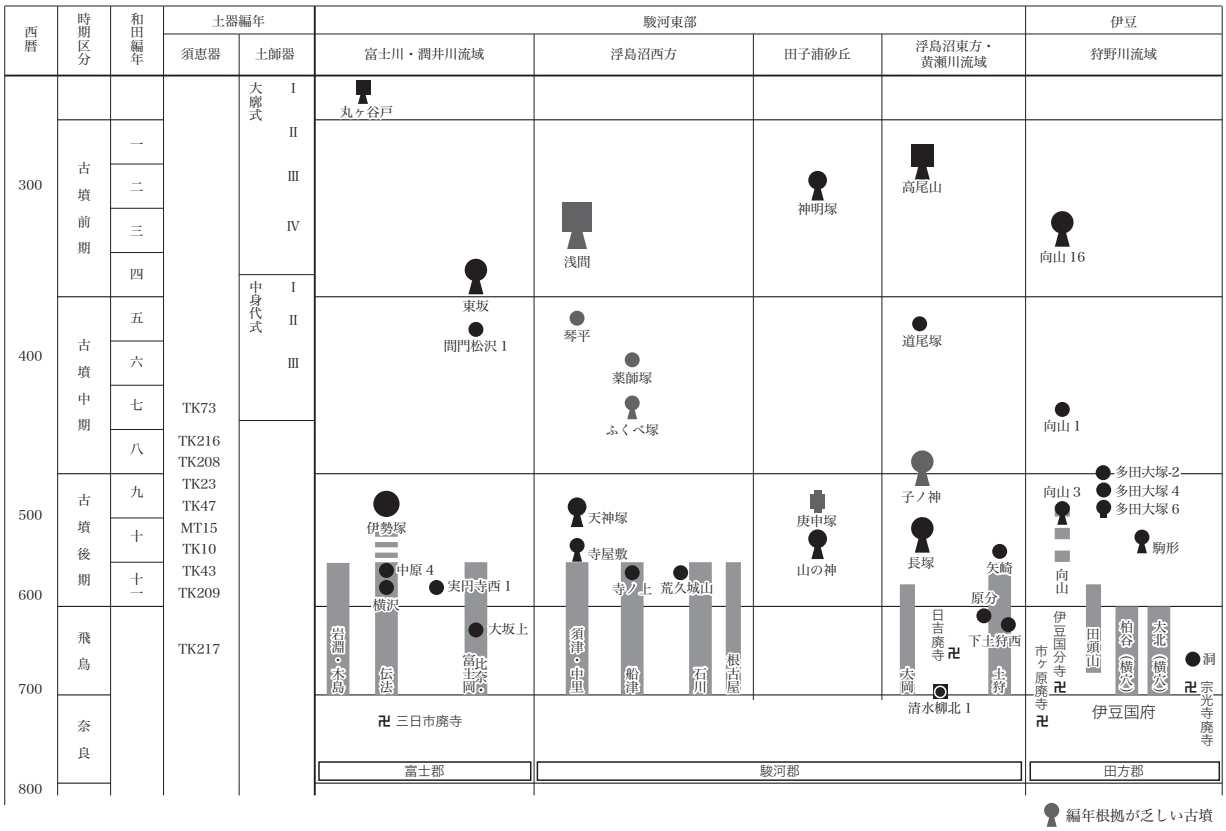
副葬品の特徴　中原第４号墳は未盗掘と考えられる横穴式石室墳で、最低３回の埋葬が認められる。副葬品の多くは初葬に伴うと考えられるものが多い。

副葬品には玉類、刀剣類、鉄鏃、砥石、鍬鋤先、斧、鉇、鑿、鉄鉗、鑷子、針、轡、鐙吊金具、須恵器、土師器などがある。鉄鏃は尖根、平根を合わせると最低でも131本が出土しており、駿河・伊豆では、１基あたりの最多出土量である。さらに中原第４号墳を特徴づけるのが10種類38点以上を数える生産用具である。特に東海地方で唯一出土した鉄鉗やこれらの豊富な生産用具からは中原第４号墳の被葬者の出自や職掌、当時の地域様相を読み取ることができる。

古墳の築造時期　中原第４号墳では埋葬状況や副葬品の時期から３回の埋葬があったと想定している（本書第４章第３節、田村論考）。初葬に伴うと考えられる銀象嵌大刀や轡、須恵器などは須恵器編年におけるTK43型式期に併行し、古墳様式編年では和田編年（和田1987）における十一期、集成編年（広瀬1991）における10期に相当する。暦年代では、おおよそ６世紀後葉に相当させることができる。

中原４号墳の被葬者像　副葬品として注目されるのが前述のとおり、豊富な生産用具である。そこからは広く農耕、織物など手工業生産に関わる被葬者の職掌が想定される。ほかにも鉄鉗の存在は鉄器の生産や加工に従事する技術者集団との密接な関係が想定され（本書第４章第８節、鈴木論考）、また、複数の生産地の須恵器が混在している様相からは、須恵器の生産流通へ強い関与を行う姿も想定される。（本書第４章第９節、和田論考）。

加えて、東駿河・伊豆における鉄鏃の最多副葬であることは、被葬者が武人的側面を強く有していたことに加えて、やはり鉄器の生産・流通に直接的に関与する立場であったことを改めて指摘することができる（本書第４章第７節、菊池論考）。



第229図　東駿河・伊豆における古墳の変遷

渡来系の埋葬施設である竪穴系横口式石室や中原第４号墳と同じ段構造を有する無袖石室が卓越する北部九州や愛媛県域（今治・松山地域）、奈良県域（葛城地域）においても生産用具が豊富に副葬されるなどの共通点もある（本書第４章第８節、鈴木論考）。玉類の分析からも西日本地域との共通性がみられる（本書第４章第５節、戸根論考）。さらに轡のみの複数埋納からは馬匹生産、乗馬技術に関連する被葬者も想定され、兵庫鎖立聞素環円環轡の分布が多く見られる点も愛媛県域と共通する（本書第４章第６節、大谷論考）。

ほぼ同時期の駿河における最高位の古墳としては静岡市賤機山古墳があり、その格差は明確である。賤機山古墳の馬具は金銅装であったことに対して中原第４号墳の馬具は鉄製のものに限られる。刀剣類も金銅装のものではなく、銀象嵌装もしくは鉄製であることなど階層差が明確にうかがえる。こうした地域内における序列が形成される背景には倭王権の統制力が働いていたことは想像に難くない。

以上をまとめると、中原第４号墳の副葬品は最高位の首長のものとは言えないものの、倭王権との結びつきを背景に、鉄器の生産や馬匹生産、食料生産など産業全体に関わるものであることが分かる。横穴式石室や生産用具からは西日本地域の渡来系集団との関係もうかがえる。

中原第４号墳の被葬者には、この地域で新たに配置された技術者集団の統括者としての性格をもちながら、主要な交通網を管理することでその流通体制の維持をも担当し、王権に奉仕した人物を想定しうる。

参考文献』

大谷 宏治　2010a「副葬品からみた無袖石室の位相―東海～関東を中心に―」土生田 純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣

大谷 宏治　2010b「古墳時代後期～終末期の古墳について」大谷編『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第 231 集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

鈴木 一有　2003「東海東部の横穴式石室にみる地域圏の形成」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会

鈴木 一有　2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣

鈴木 一有　2013「7 世紀における地域拠点の形成過程－東海地方を中心として－」『国立歴史民俗博物館研究報告』（新しい古代国家像のための基礎的研究）第 179 集

土生田 純之編　2010『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣

広瀬 和雄　1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成　中国・四国編』山川出版

藤村　翔　2014『富士山の下に灰を雨らす－富士の噴火と古墳時代後期の幕開け－』富士市立博物館第 53 回企画展

山中 敏史　1994「古代郷里比定地一覧」『静岡県史　通史編Ⅰ　原始・古代』

吉村 武彦編　2005『古代史の基礎知識』角川選書

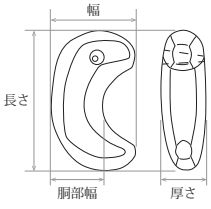
和田 晴吾　1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第 34 巻第 2 号

出土遺物観察表

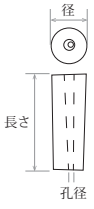
※　法量の（　）は残存値を、［　］は推定される復元値を示す。
　　残存率は図示中での残存率を示した。

※　玉類の法量計測部位は下図のとおりである。

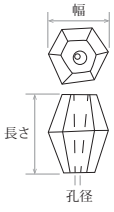
《勾玉》



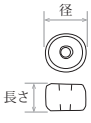
《管玉》



《切子玉》



《棗玉》
《臼玉》
《丸玉》
《小玉》



中原第３号墳　出土遺物観察表

・土器

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土場所	出土エリア	種別	器種	残存率	口径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	内面色調	外面色調
1	第 23 図	PL.8	P-10.11	周溝	－	須恵器	甕	90%	17.5	30.0	28.9	10BG5/1（青灰）	10Y5/1（灰）
2	第 23 図	PL.8	P-01.12	周溝	－	須恵器	横瓶	(40%)	－	36.0	(26.5)	5Y5/1（灰）	5Y5/1（灰）
3	第 23 図	PL.8	P-13	周溝	－	土師器	坏	90%	12.9	13.4	3.7	7.5YR7/4（にぶい橙）	10YR7/4（にぶい黄橙）
4	第 23 図	PL.8	P-13	周溝	－	土師器	坏	85%	13.0	13.7	3.1	2.5Y7/3（浅黄）	2.5Y7/3（浅黄）
5	第 23 図	PL.8	P-15	周溝	－	土師器	甕	(40%)	21.7	－	(16.3)	7.5YR6/6（橙）	7.5YR6/6（橙）
6	第 23 図	PL.8	P-11	周溝	－	土師器	坏	50%	13.9	－	5.3	5YR6/8（橙）	5YR6/8（橙）
108	第 46 図	PL.8	－	石室内	D	須恵器	提瓶	90%	7.0	18.1	23.4	10BG4/1（暗青灰）	5G4/1（暗緑灰）

・装身具

耳環

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	素材	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	備考
7	第 39 図	PL.9	F09	D	スズ	(3.2)	(1.9)	4.58	
8	第 39 図	PL.9	F29	D	スズ	(3.2)	(1.9)	4.83	

・武器

大刀・小刀

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	器種	部位	全長(cm)	刀身部（cm）		茎部（cm）			重量(g)	鍔部（cm）			
								長	幅	長	幅	茎尻		長軸	短軸	内孔長軸	内孔短軸
9	第 40 図	PL.9	F14	C	大刀	刀身～茎	74.5	64.0	3.0	10.5	1.7	一文字	574	7.5	(5.15)［5.3］	2.95	1.7
10	第 41 図	PL.9	F23	D	小刀	刀身～茎	37.0	27.9	2.7	9.1	2.0	一文字	298				

鉄鏃

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	形式（部位）	全長(cm)	鏃身部（cm）			頸部（cm）			茎部（cm）			重量(g)	備考
							長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚		
11	第 43 図	PL.10	F26	D	平根腸抉柳葉式	(5.0)	(4.8)	(2.2)	0.2	(0.5)	－	－	－	－	－	3.97	
12	第 43 図	PL.10	F30	D	平根腸抉柳葉式	(4.7)	(4.25)	(1.8)	0.15	(0.55)	0.6	0.2	－	－	－	4.48	
13	第 43 図	PL.10	F03	2 次床	平根三角形式	(6.4)	(3.6)［3.9］	(2.2)［2.4］	0.35	(2.8)	0.7	0.35	－	－	－	10.22	
14	第 43 図	PL.10	F08-01	D	平根三角形式	(5.6)	3.2	2.4	0.25	(2.4)	0.6	0.25	－	－	－	6.01	
15	第 43 図	PL.10	F13	D	平根三角形式	(7.1)	(4.2)［4.5］	2.9	0.2	(2.9)	0.5	0.35	－	－	－	10.01	
16	第 43 図	PL.10	F32-1	－	平根三角形式	(3.1)	3.0	2.0	0.25	(0.1)	－	－	－	－	－	4.00	
17	第 43 図	PL.10	F21-01	D	尖根柳葉式	(15.5)	1.9	0.85	0.15	10.6	0.45	0.25	(3.0)	0.4	0.2	4.37	
18	第 43 図	PL.10	F21-02	D	尖根柳葉式	(4.8)	(1.7)	0.8	0.2	(3.1)	0.5	0.25	－	－	－	1.35	
19	第 43 図	PL.10	F22-18	D	尖根柳葉式	(3.8)	(1.4)	0.85	0.15	(2.3)	0.45	0.15	－	－	－	1.21	
20	第 43 図	PL.10	F25-1	A	尖根長三角形式	(9.5)	3.4	1.4	0.25	4.5	0.75	0.25	(1.6)	0.5	0.25	10.18	
21	第 43 図	PL.10	F25-2	A	尖根長三角形式	(5.9)	(3.0)	(1.4)	(0.15)	(2.8)	(0.6)	(0.3)	－	－	－	3.38	
22	第 43 図	PL.10	F08-03	D	尖根長三角形式	(3.7)	3.0	(1.2)	0.15	(0.7)	0.5	0.2	－	－	－	1.78	
23	第 43 図	PL.10	F01-01	2 次床	尖根三角形式	(9.1)	2.8	1.7	0.2	(6.5)	0.45	0.2	－	－	－	5.01	
24	第 43 図	PL.10	F17-01	C	尖根三角形式	(8.1)	2.7	(1.3)［1.4］	0.15	(5.6)	0.45	0.2	－	－	－	3.36	
25	第 43 図	PL.10	F01-02	2 次床	尖根三角形式	(7.2)	2.6	1.4	0.15	(4.6)	0.5	0.15	－	－	－	2.78	
26	第 43 図	PL.10	F22-05	D	尖根三角形式	(9.0)	(1.4)	(0.95)	0.2	(7.6)	0.4	0.2	－	－	－	2.57	
27	第 43 図	PL.10	F08-02	D	尖根三角形式	(6.5)	2.1	1.0	0.2	(4.4)	0.4	0.2	－	－	－	2.56	
28	第 43 図	PL.10	F21-07	D	尖根三角形式	13.2	2.4	1.35	0.15	6.8	0.4	0.2	4.0	0.35	0.15	4.81	
29	第 43 図	PL.10	F22-01	D	尖根片刃箭式	18.5	2.1	0.75	0.2	10.3	0.4	0.25	6.0	0.2	0.2	6.04	
30	第 43 図	PL.10	F22-07	D	尖根片刃箭式	(14.4)	(1.1)	(0.65)	0.2	8.8	0.4	0.2	(4.6)	0.4	0.2	5.36	
31	第 43 図	PL.10	F22-04	D	尖根片刃箭式	(9.5)	1.7	0.7	0.2	(7.8)	0.4	0.25	－	－	－	2.74	
32	第 43 図	PL.10	F21-03	D	尖根片刃箭式	(9.6)	3.3	0.6	0.15	(6.4)	0.35	0.2	－	－	－	2.76	
33	第 43 図	PL.10	F22-02	D	尖根片刃箭式	18.5	(3.4)	0.8	0.25	9.5	0.35	0.25	5.5	0.3	0.2	8.21	
34	第 43 図	PL.10	F22-03	D	尖根片刃箭式	19.2	3.1	0.75	0.2	9.3	0.4	0.2	6.6	0.4	0.2	7.36	
35	第 43 図	PL.10	F16-05	C	尖根片刃箭式	(4.3)	2.0	0.7	0.2	(2.2)	0.5	0.25	－	－	－	2.03	
36	第 43 図	PL.10	F22-20	D	尖根片刃箭式	(2.6)	(2.6)	0.75	0.2	－	－	－	－	－	－	0.65	
37	第 43 図	PL.10	F22-21	D	尖根片刃箭式	(2.5)	(2.5)	0.8	0.2	－	－	－	－	－	－	0.83	
38	第 43 図	PL.10	F22-22	D	尖根片刃箭式	(2.3)	(2.3)	0.8	0.25	－	－	－	－	－	－	0.72	
39	第 43 図	PL.10	F16-06	C	尖根片刃箭式	(2.5)	(2.5)	0.7	0.2	－	－	－	－	－	－	0.57	
40	第 43 図	PL.10	F05-02	－	尖根片刃箭式	(2.2)	(2.2)	0.65	0.15	－	－	－	－	－	－	0.73	
41	第 43 図	PL.10	F05-05	－	尖根片刃箭式	(2.0)	(2.0)	0.7	0.15	－	－	－	－	－	－	0.84	
42	第 44 図	PL.12	F21-05	D	頸部～茎部	(8.2)	－	－	－	(3.5)	0.4	0.3	(4.7)	0.3	0.25	4.89	
43	第 44 図	PL.12	F32-2	－	頸部～茎部	(7.8)	－	－	－	(2.4)	(0.7)	(0.25)	(5.4)	0.7	0.3	5.43	

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	形式（部位）	全長	鏃身部（cm）			頸部（cm）			茎部（cm）			重量	備考
						(cm)	長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚	(g)	
44	第44図	PL.12	F16-02	C	頸部～茎部	(7.4)	－	－	－	(2.1)	0.35	0.25	(5.3)	0.35	0.25	3.05	
45	第44図	PL.12	F17-04	C	頸部～茎部	(5.4)	－	－	－	(1.5)	0.45	0.2	(4.9)	0.35	0.2	2.66	
46	第44図	PL.12	F22-10	D	頸部～茎部	(6.2)	－	－	－	(2.5)	0.5	0.3	(3.7)	0.3	0.25	2.69	糸捲き
47	第44図	PL.12	F33	－	頸部～茎部	(5.5)	－	－	－	(3.6)	0.5	0.3	(1.9)	0.35	0.3	2.63	
48	第44図	PL.12	F15-02	C	頸部～茎部	(8.2)	－	－	－	(7.7)	0.45	0.3	(0.5)	0.5	0.3	4.05	
49	第44図	PL.12	F17-06	C	頸部～茎部	(3.3)	－	－	－	(0.15)	－	－	(3.2)	0.3	0.3	1.34	
50	第44図	PL.12	F08-05	D	頸部～茎部	(3.2)	－	－	－	(1.6)	0.45	0.25	(1.6)	0.4	0.25	1.57	
51	第44図	PL.12	F18-01	C	頸部～茎部	(3.1)	－	－	－	(2.7)	0.5	0.3	(0.4)	0.5	0.3	1.43	
52	第44図	PL.12	F18-04	C	頸部～茎部	(4.3)	－	－	－	(3.0)	0.4	0.2	(1.4)	0.4	0.2	1.75	
53	第44図	PL.12	F04	－	頸部～茎部	(3.7)	－	－	－	(2.6)	0.4	0.25	(1.1)	0.3	0.2	1.53	
54	第44図	PL.12	F22-06	D	頸部～茎部	(15.4)	－	－	－	(9.4)	0.4	0.25	6.0	0.35	0.2	4.29	
55	第44図	PL.12	F21-06	D	頸部～茎部	(13.8)	－	－	－	(9.8)	0.4	0.2	(4.0)	0.25	0.2	4.34	
56	第44図	PL.12	F22-17	D	頸部～茎部	(12.5)	－	－	－	(7.0)	0.5	0.25	5.5	0.2	0.2	5.00	
57	第44図	PL.12	F22-08	D	頸部～茎部	(11.9)	－	－	－	(7.1)	0.4	0.3	(4.8)	0.5	0.25	4.32	
58	第44図	PL.12	F16-01	C	頸部～茎部	(10.9)	－	－	－	(5.4)	0.5	0.3	5.5	0.45	0.25	5.04	
59	第44図	PL.12	F22-09	D	頸部～茎部	(9.1)	－	－	－	(2.5)	0.45	0.3	6.6	0.4	0.25	3.05	
60	第44図	PL.12	F22-11	D	頸部～茎部	(7.0)	－	－	－	(2.3)	0.4	0.25	4.7	0.25	0.25	1.80	
61	第44図	PL.12	F18-03	C	頸部～茎部	(9.1)	－	－	－	(5.2)	0.55	0.3	(3.9)	0.4	0.25	4.14	
62	第44図	PL.12	F22-13	D	頸部～茎部	(4.7)	－	－	－		0.6	0.25	(3.7)	0.25	0.15	0.98	
63	第44図	PL.12	F05-07	－	頸部～茎部	(2.7)	－	－	－	(2.6)	0.5	0.3	(0.1)	－	－	1.02	
64	第44図	PL.12	F22-19	D	頸部～茎部	(5.5)	－	－	－	(4.3)	0.35	0.25	(1.1)	0.5	0.25	1.76	
65	第44図	PL.12	F21-04	D	頸部	(10.9)	－	－	－	(10.9)	0.5	0.25	－	－	－	3.79	
66	第44図	PL.12	F17-02	C	頸部	(8.0)	－	－	－	(8.0)	0.4	0.2	－	－	－	2.80	
67	第44図	PL.12	F22-12	D	頸部	(5.5)	－	－	－	(5.5)	0.4	0.3	－	－	－	1.56	
68	第44図	PL.12	F17-03	C	頸部	(5.5)	－	－	－	(5.5)	0.5	0.3	－	－	－	1.86	
69	第44図	PL.12	F17-05	C	頸部	(5.6)	－	－	－	(5.6)	0.4	0.2	－	－	－	1.59	
70	第44図	PL.12	F16-04	C	頸部	(4.5)	－	－	－	(4.5)	0.5	0.25	－	－	－	2.00	
71	第44図	PL.12	F22-14	D	頸部	(4.3)	－	－	－	(4.3)	0.4	0.2	－	－	－	0.81	
72	第44図	PL.12	F22-15	D	頸部	(4.3)	－	－	－	(4.3)	0.4	0.2	－	－	－	1.56	
73	第44図	PL.12	F31	－	頸部	(3.9)	－	－	－	(3.9)	0.45	0.25	－	－	－	2.01	
74	第44図	PL.12	F24	D	頸部	(3.9)	－	－	－	(3.9)	0.4	0.3	－	－	－	1.38	
75	第44図	PL.12	F21-09	D	頸部	(3.6)	－	－	－	(3.6)	0.45	0.3	－	－	－	1.22	
76	第44図	PL.12	F22-16	D	頸部	(3.8)	－	－	－	(3.8)	0.5	0.2	－	－	－	0.90	
77	第44図	PL.12	F17-07	C	茎部	(3.0)	－	－	－	－	－	－	(3.0)	0.3	0.2	0.78	
78	第44図	PL.12	F15-03	C	茎部	(2.8)	－	－	－	－	－	－	(2.8)	0.3	0.2	1.08	
79	第44図	PL.12	F15-01	C	頸部	(2.5)	－	－	－	(2.5)	0.35	0.2	－	－	－	0.88	
80	第44図	PL.12	F05-03	－	頸部	(1.2)	－	－	－	(1.2)	0.55	0.2	－	－	－	0.31	
81	第44図	PL.12	F01-03	2次床	茎部	(1.7)	－	－	－	－	－	－	(1.7)	0.15	0.15	0.50	
82	第44図	PL.12	F05-11	－	茎部	(1.5)	－	－	－	－	－	－	(1.5)	0.4	0.3	0.66	
83	第44図	PL.12	F08-06	D	頸部	(1.8)	－	－	－	(1.8)	0.55	0.55	－	－	－	1.19	
84	第44図	PL.12	F22-25	D	茎部	(2.1)	－	－	－	—	—	—	(2.1)	0.35	0.25	0.63	
85	第44図	PL.12	F22-23	D	頸部	(2.4)	－	－	－	(2.4)	0.5	0.2	－	－	－	0.52	
86	第44図	PL.12	F28	D	頸部	(2.3)	－	－	－	(2.3)	0.4	0.2	－	－	－	0.65	
87	第44図	PL.12	F05-01	－	頸部	(1.7)	－	－	－	(1.7)	0.45	0.2	－	－	－	0.43	
88	第44図	PL.12	F05-04	－	頸部	(2.1)	－	－	－	(2.1)	0.5	0.2	－	－	－	0.63	
89	第44図	PL.12	F05-06	－	茎部	(1.6)	－	－	－	－	－	－	(1.6)	0.3	0.25	0.41	
90	第44図	PL.12	F05-08	－	茎部	(1.7)	－	－	－	－	－	－	(1.7)	0.4	0.25	0.54	
91	第44図	PL.12	F18-02	C	茎部	(1.9)	－	－	－	－	－	－	(1.9)	0.45	0.3	0.60	
92	第44図	PL.12	F22-24	D	頸部	(1.9)	－	－	－	(1.9)	0.5	0.3	－	－	－	0.43	
93	第44図	PL.12	F21-10	D	茎部	(3.4)	－	－	－	－	－	－	(3.4)	0.4	0.25	0.65	
94	第44図	PL.12	F27	D	茎部	(3.4)	－	－	－	－	－	－	(3.4)	0.3	0.3	0.93	
95	第44図	PL.12	F22-26	D	茎部	(3.6)	－	－	－	－	－	－	(3.6)	0.3	0.25	0.94	
96	第44図	PL.12	F18-05	C	茎部	(3.3)	－	－	－	－	－	－	(3.3)	0.25	0.2	0.53	
97	第44図	PL.12	F06	A	茎部	(3.0)	－	－	－	－	－	－	(3.0)	0.35	0.25	0.75	
98	第44図	PL.12	F05-10	－	茎部	(3.85)	－	－	－	－	－	－	(3.85)	0.3	0.3	0.49	
99	第44図	PL.12	F05-12	－	茎部	(2.3)	－	－	－	－	－	－	(2.3)	0.2	0.2	0.33	
100	第44図	PL.12	F21-08	D	茎部	(1.9)	－	－	－	－	－	－	(1.9)	0.2	0.2	0.30	
101	第44図	PL.12	F15-06	C	茎部	(1.5)	－	－	－	－	－	－	(1.5)	0.2	0.2	0.17	
102	第44図	PL.12	F15-04	C	茎部	(2.1)	－	－	－	－	－	－	(2.1)	0.35	0.3	0.32	

・農工具

刀子

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	部位	全長	刀身部（cm）			茎部・身部（cm）			重量	備考
						(cm)	長	幅	厚	長	幅	厚	(g)	
103	第45図	PL.12	F10	－	茎	(4.8)	－	－	－	(4.8)	0.8	0.3	3.26	
104	第45図	PL.12	F11	E	刀身	(5.55) [5.7]	(5.55) [5.7]	－	0.3	－	－	－	2.55	
105	第45図	PL.12	F19	C	刀身～茎	8.1	4.4	1.1	0.3	3.7	0.7	0.3	7.22	
106	第45図	PL.12	F05-14	－	刀身～茎	(2.1)	(1.5)	(1.2)	0.3	(0.6)	(0.85)	0.3	1.31	
107	第45図	PL.12	F02	2次床	刀身～茎	(14.9)	(9.95)	1.5	0.3	(4.95)	1.0	0.3	21.51	

中原第４号墳　出土遺物観察表

・土器

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土場所	出土エリア	下端標高(m)	取上げ番号	種別器種	残存率	口径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	内面色調 外面色調	備考
1	第 50 図	PL.23	周溝	−	−	P120	土師器 坏	50%	9.6	10.4	3.8	5YR6/6（橙） 7.5YR6/6（橙）	
2	第 50 図	PL.23	周溝	−	−	P120	土師器 小型壺	50%	4.1	7.1	7.3	5YR6/8（橙） 5YR6/6（橙）	
3	第 50 図	PL.23	周溝	−	−	P120	土師器 小型壺	70%	6.2	−	9.2	5YR5/6（明赤褐） 10YR6/4（にぶい黄橙）	
627	第 121 図	PL.55	石室内	D+F	72.355 72.335 72.33 72.315 72.36	P22.69 76.80.67	須恵器 坏蓋	90%	14.3	−	4.5	2.5YR6/1（赤灰） 2.5Y6/2（灰赤）	
628	第 121 図	PL.55	石室内	E	72.40 72.47	P10.15	須恵器 坏蓋	100%	14	−	4.1	2.5GR6/6（橙） 2.5GY5/1（オリーブ灰）	
629	第 121 図	PL.55	石室内	E+F	72.355 72.40 72.375 72.36 72.35	P16.25.35 31.42.46 55,33,71	須恵器 坏蓋	95%	14.3	−	4.2	5Y6/1（灰） 7.5Y6/1（灰）	
630	第 121 図	PL.55	石室内	E+F	72.32 72.305 72.37 72.38	P28.47 49.61,59	須恵器 坏身	95%	12.7	15	3.8	5B5/1（青灰） 2.5GY5/1（オリーブ灰）	
631	第 121 図	PL.55	石室内	E+F	72.38 72.365 72.35 72.335 72.34 72.31	P62.27.42 72,44,86	須恵器 坏身	100%	12.8	15.3	3.9	5Y7/2（灰白） 5Y7/1（灰白）	
632	第 121 図	PL.55	石室内	E+F	72.35 72.365 72.32 72.33 72.355	P34.64.38 56.47.84.74 64.74.84	須恵器 坏身	80%	13.2	15.1	4.8	5Y6/1（灰） 5Y6/1（灰）	
633	第 121 図	PL.55	石室内	D+F	72.37 72.34 72.35 72.335 72.31	P18.68 73.79.86	須恵器 坏身	95%	12.5	15.4	4.1	5Y7/2（灰） 5Y7/2（灰白）	
634	第 121 図	PL.55	石室内	F	72.345	P32	須恵器 坏身	95%	12.7	15.1	3.9	7.5Y5/1（灰） 7.5Y5/1（灰）	
635	第 121 図	PL.55	石室内	E	72.47	P11	須恵器 坏身	98%	13	16	4.5	7.5Y6/1（灰） 7.5Y6/1（灰）	
636	第 121 図	PL.55	石室内	D	72.355	P19	須恵器 坏身	100%	12.2	14.6	4	N6/1（灰） N6/1（灰）	
637	第 121 図	PL.55	石室内	E	72.5	P14	須恵器 坏身	100%	12.4	14.4	3.9	5Y5/1（灰） 5Y5/1（灰）	
638	第 121 図	PL.55	石室内	E+F	72.43 72.31 72.335	P1.86.40	須恵器 坏身	100%	13.1	15.1	3.8	5Y6/1（灰） 5Y6/1（灰）	
639	第 121 図	PL.56	石室内	E	72.445	P12	須恵器 甕	95%	10.8	9.8	11.8	N6/1（灰） N4/1（灰）	
640	第 121 図	PL.56	石室内	E	72.39	P24.60	須恵器 甕	90%	13.2	8.8	14.5	5Y6/1（灰） 5Y6/1（灰）	
641	第 121 図	PL.56	石室内	A	72.39	P7	須恵器 甕	100%	13.6	9.1	15.2	5Y6/2（灰オリーブ） 2.5GY4/1（暗オリーブ灰）	
642	第 121 図	PL.56	石室内	E	72.395	P16	須恵器 甕	100%	12.4	9.1	15.8	N7/0（灰白） N7/0（灰白）	
643	第 121 図	PL.56	石室内	D	72.38 72.40	P2.4 石室内 7	須恵器 甕	100%	12.1	8.4	14.6	N3/0（暗灰） N3/0（暗灰）	
644	第 121 図	PL.56	石室内	E	72.34	P65	須恵器 甕	(100%)	−	9.9	-18.2	5Y7/2（灰白） N4/0（灰）	
645	第 121 図	PL.57	石室内	A	72.39	P70	須恵器 短頸壺	100%	9	13.4	12.4	5Y5/1（灰） 5Y5/1（灰）	内部に土製丸玉 657 ～ 661
646	第 121 図	PL.57	石室内	C	72.34	P9	須恵器 短頸壺	100%	10	14.6	13.1	5Y5/1（灰） 5Y5/1（灰）	
647	第 121 図	PL.57	石室内	D	72.35	P23	須恵器 短頸壺	95%	6.3	12	12.1	7.5Y6/1（灰） 7.5Y4/1（灰）	
648	第 121 図	PL.57	石室内	D+E+F	72.325 72.35 72.335 72.315 72.34 72.33	P20.21.30 52.68.78.54	須恵器 把手付碗	(100%)	9.3	10.3	9.75	7.5Y4/1（灰） 7.5Y4/1（灰）	

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土場所	出土エリア	下端標高(m)	取上げ番号	種別器種	残存率	口径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	内面色調 外面色調	備考
649	第121図	PL.57	石室内	A	72.39	P8	須恵器 提瓶	100%	9.8	22.4	27.1	7.5Y4/1（灰） 7.5Y4/1（灰）	
650	第122図	PL.57	石室内	E	72.39	P26	須恵器 提瓶	95%	6.8	15.8	21.3	5Y2/1（黒） 5Y2/1（黒）	
651	第122図	PL.58	石室内	E	72.33	P66	須恵器 提瓶	90%	7.5	14.9	18.7	5Y6/1（灰） 5Y6/1（灰）	
652	第122図	PL.58	石室内	E	72.36	P34	須恵器 提瓶	100%	5.3	12.6	16.9	5Y6/1（灰） 5Y6/1（灰）	
653	第122図	PL.58	石室内	E	72.45	P13	須恵器 提瓶	95%	8.5	17.4	20.3	5Y6/1（灰） 5Y6/1（灰）	
654	第122図	PL.58	石室内	E	72.32	P17	須恵器 横瓶	100%	11.8	34.8	28.2	7.5Y5/1（灰） 7.5Y5/1（灰）	
655	第122図	PL.58	石室内	D+F	72.37 72.55 72.44 72.40 72.36	P-6.3,5	須恵器 横瓶	80%	12.5	38.2	30.5	7.5Y5/1（灰） 7.5Y5/1（灰）	
656	第122図	PL.58	石室内	E+F	72.38 72.355 72.35 72.335 72.33 72.32 72.325	P-53.57.63 43.39.48 75.45.78.50	土師器 坏	95%	14.2	14.7	4.2	2.5YR6/8（橙） 10YR5/8（黄褐）	

・装身具

玉（勾玉）

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)	胴部幅(㎜)	製作技法	備考
4	第87図	PL.23	B北	T49	瑪瑙	32.40	19.90	10.60	8.09	11.50	片面穿孔	鉄分付着
5	第87図	PL.23	B北	T13	瑪瑙	32.70	18.30	9.90	7.39	11.60	片面穿孔	鉄分付着
6	第87図	PL.23	B北	T14	瑪瑙	30.80	17.70	9.80	6.19	9.70	片面穿孔	鉄分付着
7	第87図	PL.23	B北	T27	瑪瑙	30.60	17.90	8.00	5.45	10.30	片面穿孔	鉄分付着
8	第88図	PL.23	B北	T18	瑪瑙	30.50	17.50	9.50	6.17	10.30	片面穿孔	鉄分付着
9	第88図	PL.23	B北	T28	瑪瑙	29.40	17.50	9.80	6.21	11.10	片面穿孔	鉄分付着
10	第88図	PL.23	B北	T17	瑪瑙	30.70	17.80	8.00	4.73	8.80	片面穿孔	鉄分付着
11	第88図	PL.23	B北	T39	瑪瑙	27.40	16.60	8.90	5.00	10.80	片面穿孔	鉄分付着
12	第88図	PL.23	B北	T15	瑪瑙	26.40	15.90	8.50	4.44	10.10	片面穿孔	鉄分付着
13	第88図	PL.23	B北	T24	瑪瑙	26.20	16.50	8.90	4.84	11.00	片面穿孔	鉄分付着
14	第88図	PL.23	B北	T20	瑪瑙	26.40	16.50	8.50	4.80	10.00	片面穿孔	鉄分付着
15	第88図	PL.23	B南	T76	瑪瑙	16.30	11.90	6.70	1.60	7.50	片面穿孔	鉄分付着

玉（管玉）

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ(㎜)	径／幅（㎜）		重さ(g)	孔径（㎜）		製作技法	備考
							最小	最大		最小	最大		
16	第89図	PL.24	B北東	T03-001	碧玉	34.30	15.10	15.50	15.37	1.0	3.4	片面穿孔	鉄分付着
17	第89図	PL.24	B北東	T03-002	碧玉	29.20	11.80	11.90	6.73	1.1	2.6	片面穿孔	鉄分付着
18	第89図	PL.24	B北	T19	碧玉	24.90	10.50	10.80	5.48	0.9	2.2	片面穿孔	鉄分付着
19	第89図	PL.24	B北	T55	碧玉	23.50	9.60	9.90	4.22	1.0	2.1	片面穿孔	鉄分付着
20	第89図	PL.24	B南	T87	碧玉	23.60	8.30	8.40	3.04	0.9	2.6	片面穿孔	鉄分付着
21	第89図	PL.24	B南	T88	碧玉	22.40	8.60	8.80	3.29	1.6	1.7	両面穿孔	鉄分付着
22	第89図	PL.24	B南	T82	碧玉	22.00	7.70	7.90	2.47	1.0	2.3	片面穿孔	鉄分付着
23	第89図	PL.24	B南	T73-002	碧玉	21.70	8.80	9.00	3.15	1.1	2.9	片面穿孔	鉄分付着
24	第89図	PL.24	B南	T75	碧玉	21.90	8.30	8.30	2.40	1.0	2.3	片面穿孔	鉄分付着
25	第89図	PL.24	B南	T74	碧玉	20.90	7.70	7.90	2.27	0.9	2.6	片面穿孔	鉄分付着
26	第89図	PL.24	B南	T81	碧玉	22.20	7.10	7.30	2.10	0.8	2.3	片面穿孔	鉄分付着
27	第89図	PL.24	B南	T80	碧玉	20.00	7.70	7.80	2.28	1.0	2.1	片面穿孔	鉄分付着
28	第89図	PL.24	B南	T94	碧玉	20.30	8.00	8.00	2.32	0.7	2.8	片面穿孔	鉄分付着
29	第89図	PL.24	B南	T77	碧玉	19.60	8.30	8.30	2.51	0.9	2.6	片面穿孔	鉄分付着
30	第89図	PL.24	B南	T84	碧玉	19.10	7.50	7.60	1.98	0.9	2.8	片面穿孔	鉄分付着
31	第89図	PL.24	B南	T89	碧玉	19.40	7.40	7.50	1.90	—	2.2	片面穿孔	鉄分付着
32	第89図	PL.24	B南	T86	碧玉	18.80	8.00	8.10	2.19	1.1	2.3	片面穿孔	鉄分付着
33	第89図	PL.24	B南	T85	碧玉	17.60	7.35	7.35	1.76	1.4	1.7	片面穿孔	鉄分付着
34	第89図	PL.24	B南	T92	碧玉	17.30	6.70	6.80	1.42	1.0	2.4	片面穿孔	鉄分付着
35	第89図	PL.24	B南	T78	碧玉	19.50	6.20	6.30	1.21	1.2	1.6	片面穿孔	鉄分付着
36	第89図	PL.24	B南	T93	碧玉	18.10	5.80	6.00	1.03	1.4	1.5	両面穿孔	鉄分付着
37	第89図	PL.24	B南	T79	碧玉	18.80	5.70	5.80	0.97	1.1	1.9	片面穿孔	鉄分付着

玉（切子玉）

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ(㎜)	径／幅（㎜）		重さ(g)	孔径（㎜）		製作技法	備考
							最小	最大		最小	最大		
38	第 90 図	PL.24	B 北	T48	水晶	17.70	14.60	14.70	4.51	1.1	3.3	片面穿孔	鉄分付着
39	第 90 図	PL.24	B 北	T40	水晶	17.00	13.80	14.00	3.82	0.8	3.2	片面穿孔	鉄分付着
40	第 90 図	PL.24	B 北	T31	水晶	16.30	12.50	12.60	3.09	0.9	3.1	片面穿孔	鉄分付着
41	第 90 図	PL.24	B 北	T53	水晶	15.00	13.10	13.30	3.24	1.0	3.0	片面穿孔	鉄分付着
42	第 90 図	PL.24	B 北	T60	水晶	15.00	11.40	11.70	2.45	1.0	3.0	片面穿孔	鉄分付着
43	第 90 図	PL.24	B 北	T65	水晶	15.00	11.80	12.20	2.55	1.1	2.9	片面穿孔	鉄分付着
44	第 90 図	PL.24	B 北	T59	水晶	17.30	15.40	15.50	4.53	1.0	2.9	片面穿孔	鉄分付着
45	第 90 図	PL.24	B 北	T38	水晶	16.50	12.70	12.70	3.28	1.4	3.5	片面穿孔	鉄分付着
46	第 90 図	PL.24	B 北	T41	水晶	16.90	13.20	13.40	3.45	1.1	3.4	片面穿孔	鉄分付着
47	第 90 図	PL.24	B 北	T42	水晶	17.60	12.70	13.20	3.44	1.1	3.0	片面穿孔	鉄分付着
48	第 90 図	PL.24	B 北	T45	水晶	17.10	12.60	12.70	3.26	1.3	3.1	片面穿孔	鉄分付着
49	第 90 図	PL.24	B 北	T58	水晶	17.40	13.20	13.30	3.57	1.1	2.6	片面穿孔	鉄分付着
50	第 90 図	PL.24	B 北	T50	水晶	15.80	14.10	14.30	3.81	1.1	3.0	片面穿孔	鉄分付着
51	第 90 図	PL.24	B 北	T44	水晶	15.20	13.10	13.40	3.08	1.2	2.9	片面穿孔	鉄分付着
52	第 90 図	PL.24	B 北	T05	水晶	14.50	13.40	13.40	3.20	0.8	2.7	片面穿孔	鉄分付着
53	第 90 図	PL.24	B 北	T32	水晶	15.00	12.90	13.00	3.03	1.4	3.3	片面穿孔	鉄分付着
54	第 90 図	PL.24	B 北	T43	水晶	14.10	12.90	13.00	2.85	1.0	3.0	片面穿孔	鉄分付着
55	第 90 図	PL.24	B 北	T51	水晶	14.50	12.60	12.80	2.75	1.3	2.8	片面穿孔	鉄分付着
56	第 90 図	PL.24	B 北	T52	水晶	16.20	11.40	11.40	2.53	1.1	3.2	片面穿孔	鉄分付着
57	第 90 図	PL.24	B 北	T56	水晶	15.40	11.60	11.90	2.52	0.8	3.5	片面穿孔	鉄分付着
58	第 90 図	PL.24	B 北	T57	水晶	15.50	11.90	12.10	2.59	1.2	2.8	片面穿孔	鉄分付着
59	第 90 図	PL.24	B 北	T63	水晶	14.10	12.50	12.60	2.54	1.9	3.3	片面穿孔	鉄分付着
60	第 90 図	PL.24	B 北	T61	水晶	13.30	12.50	12.50	2.38	1.0	2.9	片面穿孔	鉄分付着
61	第 90 図	PL.24	B 南	T90	水晶	11.90	10.30	10.60	1.51	1.2	3.1	片面穿孔	鉄分付着

玉（棗玉）

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ(㎜)	径／幅（㎜）		重さ(g)	製作技法	備考
							最小	最大			
62	第 90 図	PL.24	B 南	T04-133	琥珀	12.05	7.00	7.00	0.24		
63	第 90 図	PL.24	B 北	T21	琥珀	12.70	8.20	10.60	0.77		
64	第 90 図	PL.24	B 北	T54	琥珀	16.20	11.60	12.40	1.31		
65	第 90 図	PL.24	A	T01-002	土製	15.00	7.40	7.70	0.88		
66	第 90 図	PL.24	A	T01-001	土製	15.90	7.70	8.30	1.06		
67	第 90 図	PL.24	B 南	T83	翡翠	8.70	7.70	7.90	0.91		

玉（臼玉）

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ(㎜)	径／幅（㎜）		重さ(g)	製作技法	備考
							最小	最大			
68	第 90 図	PL.24	B 南	T04-132	碧玉？	3.75	8.15	8.30	0.40		
69	第 90 図	PL.24	B 南	T04-126	滑石	2.75	6.00	6.00	0.16	両面穿孔	
70	第 90 図	PL.24	B 南	T04-127	滑石	4.45	5.80	6.00	0.25	両面穿孔	
71	第 90 図	PL.24	B 南	T04-128	滑石	2.85	5.90	6.00	0.16	両面穿孔	
72	第 90 図	PL.24	B 南	T04-129	滑石	3.60	5.80	5.80	0.18	両面穿孔	
73	第 90 図	PL.24	B 南	T04-130	滑石	2.90	5.70	5.90	0.17	両面穿孔	
74	第 90 図	PL.24	B 南	T04-131	滑石	3.00	6.00	6.10	0.18	両面穿孔	
75	第 90 図	PL.24	B 南	T91	滑石	4.00	5.60	5.90	0.21		

玉（丸玉）

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ(㎜)	径／幅（㎜）			重さ(g)	備考
							最小	最大	平均		
76	第 91 図	—	A	T01-003	土製	5.65	6.30	6.60	6.45	0.26	
77	第 91 図	—	A	T01-004	土製	5.45	5.90	6.25	6.08	0.23	
78	第 91 図	—	A	T01-005	土製	6.00	6.35	6.65	6.50	0.30	
79	第 91 図	—	A	T01-006	土製	7.00	7.75	8.30	8.03	0.50	
80	第 91 図	—	A	T01-007	土製	6.05	6.45	6.45	6.45	0.28	
81	第 91 図	—	A	T01-008	土製	6.90	6.90	7.10	7.00	0.39	
82	第 91 図	—	A	T01-009	土製	6.10	6.80	6.95	6.88	0.33	
83	第 91 図	—	A	T01-010	土製	8.20	8.25	8.90	8.58	0.63	
84	第 91 図	—	A	T01-011	土製	7.05	8.00	8.70	8.35	0.52	
85	第 91 図	—	A	T01-012	土製	8.20	8.60	8.80	8.70	0.65	
86	第 91 図	—	A	T01-013	土製	7.20	8.40	9.50	8.95	0.62	
87	第 91 図	—	A	T01-014	土製	7.60	8.50	8.95	8.73	0.63	
88	第 91 図	—	A	T01-015	土製	7.50	8.40	8.60	8.50	0.59	
89	第 91 図	—	A	T01-016	土製	7.70	8.10	8.30	8.20	0.56	
90	第 91 図	—	A	T01-017	土製	7.70	8.15	8.45	8.30	0.56	
91	第 91 図	—	A	T01-018	土製	7.35	7.65	7.90	7.78	0.45	
92	第 91 図	—	A	T01-019	土製	7.20	8.20	8.60	8.40	0.54	

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ(㎜)	径／幅（㎜）			重さ(g)	備考
							最小	最大	平均		
93	第91図	—	A	T01-020	土製	6.80	8.15	8.30	8.23	0.52	
94	第91図	—	A	T01-021	土製	7.55	8.10	8.50	8.30	0.51	
95	第91図	—	A	T01-022	土製	7.10	8.70	8.85	8.78	0.60	
96	第91図	—	A	T01-023	土製	7.00	7.60	8.20	7.90	0.42	
97	第91図	—	A	T01-024	土製	7.60	7.85	8.20	8.03	0.50	
98	第91図	—	A	T01-025	土製	7.15	8.00	8.30	8.15	0.54	
99	第91図	—	A	T01-026	土製	7.00	8.20	8.45	8.33	0.50	
100	第91図	—	A	T01-027	土製	7.00	8.00	8.20	8.10	0.50	
101	第91図	—	A	T01-028	土製	7.05	8.00	8.30	8.15	0.51	
102	第91図	—	A	T01-029	土製	7.35	8.35	8.80	8.58	0.56	
103	第91図	—	A	T01-030	土製	7.35	7.70	8.10	7.90	0.50	
104	第91図	—	A	T01-031	土製	7.50	8.20	8.50	8.35	0.56	
105	第91図	—	A	T01-032	土製	7.00	8.10	8.20	8.15	0.46	
106	第91図	—	A	T01-033	土製	7.15	8.00	8.60	8.30	0.48	
107	第91図	—	A	T01-034	土製	6.70	8.10	8.20	8.15	0.48	
108	第91図	—	A	T01-035	土製	7.30	8.00	8.35	8.18	0.52	
109	第91図	—	A	T01-036	土製	7.35	7.95	8.10	8.03	0.48	
110	第91図	—	A	T01-037	土製	6.40	7.50	7.80	7.65	0.41	
111	第91図	—	A	T01-038	土製	6.45	7.00	7.15	7.08	0.43	
112	第91図	—	A	T01-039	土製	7.00	7.10	7.40	7.25	0.37	
113	第91図	—	A	T01-040	土製	6.65	6.95	7.20	7.08	0.38	
114	第91図	—	A	T01-041	土製	6.60	7.00	7.20	7.10	0.39	
115	第91図	—	A	T01-042	土製	7.30	6.90	6.95	6.93	0.40	
116	第91図	—	A	T01-043	土製	7.00	7.40	7.65	7.53	0.42	
117	第91図	—	A	T01-044	土製	6.30	7.10	7.10	7.10	0.37	
118	第91図	—	A	T01-045	土製	6.60	6.65	6.85	6.75	0.34	
119	第91図	—	A	T01-046	土製	6.40	7.15	7.45	7.30	0.39	
120	第91図	—	A	T01-047	土製	6.20	6.90	7.00	6.95	0.35	
121	第91図	—	A	T01-048	土製	6.45	6.75	6.90	6.83	0.33	
122	第91図	—	A	T01-049	土製	7.15	6.75	7.00	6.88	0.39	
123	第91図	—	A	T01-050	土製	7.10	7.20	7.35	7.28	0.42	
124	第91図	—	A	T01-051	土製	6.25	6.90	7.10	7.00	0.35	
125	第91図	—	A	T01-052	土製	6.65	6.35	6.80	6.58	0.31	
126	第91図	—	A	T01-053	土製	5.85	7.10	7.10	7.10	0.33	
127	第91図	—	A	T01-054	土製	6.60	6.70	6.90	6.80	0.33	
128	第91図	—	A	T01-055	土製	6.65	6.40	6.75	6.58	0.34	
129	第91図	—	A	T01-056	土製	6.10	7.10	7.20	7.15	0.33	
130	第91図	—	A	T01-057	土製	6.75	6.70	6.90	6.80	0.34	
131	第91図	—	A	T01-058	土製	6.40	6.25	6.40	6.33	0.29	
132	第91図	—	A	T01-059	土製	6.25	7.10	7.20	7.15	0.36	
133	第91図	—	A	T01-060	土製	6.60	6.10	6.25	6.18	0.29	
134	第91図	—	A	T01-061	土製	6.50	6.80	7.10	6.95	0.35	
135	第91図	—	A	T01-062	土製	6.55	6.80	7.20	7.00	0.33	
136	第91図	—	A	T01-063	土製	6.35	6.65	6.90	6.78	0.31	
137	第91図	—	A	T01-064	土製	6.30	7.10	7.10	7.10	0.31	
138	第91図	—	A	T01-065	土製	6.20	6.80	6.90	6.85	0.33	
139	第91図	—	A	T01-066	土製	5.90	6.50	6.60	6.55	0.27	
140	第91図	—	A	T01-067	土製	6.25	6.50	6.90	6.70	0.32	
141	第91図	—	A	T01-068	土製	6.15	6.45	6.45	6.45	0.29	
142	第91図	—	A	T01-069	土製	6.20	6.65	6.75	6.70	0.33	
143	第91図	—	A	T01-070	土製	5.75	6.80	6.95	6.88	0.29	
144	第91図	—	A	T01-071	土製	6.40	6.40	6.50	6.45	0.30	
145	第91図	—	A	T01-072	土製	5.95	6.30	6.45	6.38	0.28	
146	第91図	—	A	T01-073	土製	5.85	6.60	6.80	6.70	0.28	
147	第91図	—	A	T01-074	土製	6.05	6.55	6.70	6.63	0.29	
148	第91図	—	A	T01-075	土製	6.60	6.45	6.60	6.53	0.32	
149	第91図	—	A	T01-076	土製	5.80	6.45	6.60	6.53	0.29	
150	第91図	—	A	T01-077	土製	6.35	6.85	6.90	6.88	0.32	
151	第91図	—	A	T01-078	土製	5.70	6.30	6.50	6.40	0.27	
152	第91図	—	A	T01-079	土製	6.10	6.50	6.90	6.70	0.30	
153	第91図	—	A	T01-080	土製	5.90	6.60	6.70	6.65	0.29	
154	第91図	—	A	T01-081	土製	6.50	6.20	6.45	6.33	0.27	
155	第91図	—	A	T01-082	土製	5.90	6.35	6.45	6.40	0.25	
156	第91図	—	A	T01-083	土製	6.35	6.40	6.60	6.50	0.30	
157	第91図	—	A	T01-084	土製	5.90	6.55	6.70	6.63	0.28	
158	第91図	—	A	T01-085	土製	5.30	6.40	6.70	6.55	0.25	
159	第91図	—	A	T01-086	土製	5.70	5.90	6.10	6.00	0.23	
160	第91図	—	A	T01-087	土製	6.20	6.30	6.35	6.33	0.27	
161	第91図	—	A	T01-088	土製	5.70	6.00	6.30	6.15	0.23	
162	第91図	—	A	T01-089	土製	6.00	6.10	6.15	6.13	0.26	
163	第91図	—	A	T01-090	土製	5.85	6.20	6.30	6.25	0.26	
164	第91図	—	A	T01-091	土製	5.70	6.40	6.60	6.50	0.26	
165	第91図	—	A	T01-092	土製	5.10	5.50	5.60	5.55	0.17	

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ(㎜)	径／幅（㎜）			重さ(g)	備考
							最小	最大	平均		
166	第 91 図	—	A	T01-093	土製	5.80	6.20	6.30	6.25	0.25	
167	第 91 図	—	A	T01-094	土製	5.55	6.00	6.40	6.20	0.22	
168	第 91 図	—	A	T01-095	土製	5.65	6.25	6.45	6.35	0.26	
169	第 91 図	—	A	T01-096	土製	5.40	5.70	5.80	5.75	0.20	
170	第 91 図	—	A	T01-097	土製	5.75	6.40	6.50	6.45	0.27	
171	第 91 図	—	A	T01-098	土製	5.80	6.20	6.50	6.35	0.27	
172	第 91 図	—	A	T01-099	土製	6.00	6.20	6.30	6.25	0.26	
173	第 91 図	—	A	T01-100	土製	5.60	6.60	6.90	6.75	0.25	
174	第 91 図	—	A	T01-106	土製	7.25	8.25	8.25	8.25	0.44	
175	第 91 図	—	A	T01-107	土製	6.45	7.60	7.80	7.70	0.38	
176	第 91 図	—	A	T01-108	土製	6.00	6.75	7.00	6.88	0.29	
177	第 91 図	—	A	T01-109	土製	6.40	6.40	6.65	6.53	0.31	
178	第 91 図	—	A	T01-110	土製	6.00	6.75	6.75	6.75	0.27	一部欠損
179	第 91 図	—	A	T01-111	土製	5.60	6.50	6.65	6.58	0.26	
180	第 91 図	—	A	T01-112	土製	5.65	6.30	6.40	6.35	0.24	
181	第 91 図	—	A	T01-113	土製	5.50	5.70	5.70	5.70	0.18	
182	第 91 図	—	A	T01-114-1	土製	—	—	—	—	0.15	小片一括
183	第 91 図	—	A	T01-114-2	土製	7.30	—	—	—	0.20	小片一括
184	第 91 図	—	A	T01-114-3	土製	6.80	—	—	—	0.12	小片一括
185	第 91 図	—	A	T01-114-4	土製	7.50	—	—	—	0.13	小片一括
657	第 123 図	PL.30	A	須恵器 645 内 -1	土製	6.90	7.20	7.50	7.35	0.38	
658	第 123 図	PL.30	A	須恵器 645 内 -2	土製	7.15	7.20	7.10	7.15	0.37	
659	第 123 図	PL.30	A	須恵器 645 内 -3	土製	6.75	6.85	6.95	6.90	0.32	
660	第 123 図	PL.30	A	須恵器 645 内 -4	土製	6.05	6.85	7.05	6.95	0.27	
661	第 123 図	PL.30	A	須恵器 645 内 -5	土製	5.50	6.50	6.55	6.53	0.22	小片一括

玉（小玉）

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ(㎜)	径／幅（㎜）			重さ(g)	製作技法	材質		着色材色調	備考
							最小	最大	平均			大別	細別		
186	第 92 図	PL.25	B 南	T04-121	ガラス	4.10	3.30	4.80	4.05	0.12	引き伸ばし	ソーダ	SII	錫酸鉛 黄色不透明	
187	第 92 図	PL.25	B 南	T04-122	ガラス	2.35	3.30	3.70	3.50	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	錫酸鉛 黄色不透明	
188	第 92 図	PL.25	B 南	T04-123	ガラス	3.60	4.00	4.35	4.18	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SII	錫酸鉛 黄色不透明	
189	第 92 図	PL.25	B 南	T04-124	ガラス	3.00	3.20	3.90	3.55	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	錫酸鉛 黄色不透明	
190	第 92 図	PL.25	B 南	T04-125	ガラス	2.10	4.40	4.75	4.58	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	錫酸鉛 黄色不透明	
191	第 92 図	PL.25	B 南	T04-001	ガラス	1.95	3.20	3.30	3.25	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
192	第 92 図	PL.25	B 南	T04-002	ガラス	3.00	3.15	3.30	3.23	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
193	第 92 図	PL.25	B 南	T04-003	ガラス	2.60	3.00	3.20	3.10	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
194	第 92 図	PL.25	B 南	T04-004	ガラス	2.00	2.90	2.90	2.90	0.02	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋錫酸鉛 黄緑色半透明	
195	第 92 図	PL.25	B 南	T04-005	ガラス	1.90	2.70	2.90	2.80	0.02	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
196	第 92 図	PL.25	B 南	T04-006	ガラス	4.90	2.75	2.75	2.75	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
197	第 92 図	PL.25	B 南	T04-007	ガラス	2.45	4.65	4.90	4.78	0.08	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
198	第 92 図	PL.25	B 南	T04-008	ガラス	2.30	3.55	3.55	3.55	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
199	第 92 図	PL.25	B 南	T04-009	ガラス	1.85	3.40	3.55	3.48	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
200	第 92 図	PL.25	B 南	T04-010	ガラス	2.70	3.80	4.10	3.95	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
201	第 92 図	PL.25	B 南	T04-011	ガラス	1.45	3.15	3.20	3.18	0.02	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
202	第 92 図	PL.25	B 南	T04-012	ガラス	2.80	3.45	3.70	3.58	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
203	第 92 図	PL.25	B 南	T04-013	ガラス	1.90	3.70	3.80	3.75	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
204	第 92 図	PL.25	B 南	T04-014	ガラス	2.10	2.70	2.90	2.80	0.02	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
205	第 92 図	PL.25	B 南	T04-015	ガラス	1.55	3.00	3.40	3.20	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
206	第 92 図	PL.25	B 南	T04-016	ガラス	4.70	4.65	5.60	5.13	0.16	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	ややいびつ
207	第 92 図	PL.25	B 南	T04-017	ガラス	1.90	3.80	4.40	4.10	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ（㎜）	径／幅（㎜）			重さ（g）	製作技法	材質		着色材 色調	備考
							最小	最大	平均			大別	細別		
208	第92図	PL.25	B南	T04-018	ガラス	2.00	3.10	3.10	3.10	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
209	第92図	PL.25	B南	T04-019	ガラス	1.35	3.00	3.00	3.00	0.02	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
210	第92図	PL.25	B南	T04-020	ガラス	3.20	3.85	4.10	3.98	0.08	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青緑色透明	
211	第92図	PL.25	B南	T04-021	ガラス	2.10	3.50	3.70	3.60	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
212	第92図	PL.25	B南	T04-022	ガラス	2.35	3.90	4.20	4.05	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
213	第92図	PL.25	B南	T04-023	ガラス	2.20	4.10	4.25	4.18	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
214	第92図	PL.25	B南	T04-024	ガラス	1.90	3.60	3.70	3.65	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋錫酸鉛 黄緑色半透明	
215	第92図	PL.25	B南	T04-025	ガラス	3.45	3.40	4.00	3.70	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
216	第92図	PL.25	B南	T04-026	ガラス	1.90	3.20	3.20	3.20	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	やや不透明
217	第92図	PL.25	B南	T04-027	ガラス	2.00	4.20	4.40	4.30	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
218	第92図	PL.25	B南	T04-028	ガラス	4.80	3.30	3.90	3.60	0.09	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
219	第92図	PL.25	B南	T04-029	ガラス	1.85	2.90	2.90	2.90	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
220	第92図	PL.25	B南	T04-030	ガラス	1.75	3.00	3.50	3.25	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
221	第92図	PL.25	B南	T04-031	ガラス	2.40	4.15	4.20	4.18	0.06	鋳型			紺色	
222	第92図	PL.26	B南	T04-032	ガラス	2.00	3.20	3.40	3.30	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
223	第92図	PL.26	B南	T04-033	ガラス	2.70	3.85	3.85	3.85	0.06	鋳型			紺色	
224	第92図	PL.26	B南	T04-034	ガラス	3.40	4.45	4.70	4.58	0.10	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト 紺色透明	
225	第92図	PL.26	B南	T04-035	ガラス	3.00	3.15	3.30	3.23	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
226	第92図	PL.26	B南	T04-036	ガラス	2.50	3.70	4.00	3.85	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
227	第92図	PL.26	B南	T04-037	ガラス	3.70	5.10	5.20	5.15	0.15	鋳型			紺色	表面孔内荒れ
228	第92図	PL.26	B南	T04-038	ガラス	2.00	3.60	3.70	3.65	0.03	鋳型			紺色	
229	第92図	PL.26	B南	T04-039	ガラス	3.60	4.30	4.80	4.55	0.10	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
230	第92図	PL.26	B南	T04-040	ガラス	2.50	3.00	3.35	3.18	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
231	第92図	PL.26	B南	T04-041	ガラス	2.00	3.70	3.70	3.70	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
232	第92図	PL.26	B南	T04-042	ガラス	1.90	3.10	3.45	3.28	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
233	第92図	PL.26	B南	T04-043	ガラス	2.70	4.70	4.80	4.75	0.09	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
234	第92図	PL.26	B南	T04-044	ガラス	2.40	3.35	3.40	3.38	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
235	第92図	PL.26	B南	T04-045	ガラス	3.80	4.30	4.50	4.40	0.11	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト 紺色透明	
236	第92図	PL.26	B南	T04-046	ガラス	2.55	4.45	4.85	4.65	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
237	第92図	PL.26	B南	T04-047	ガラス	3.15	4.30	4.70	4.50	0.09	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
238	第92図	PL.26	B南	T04-048	ガラス	2.50	3.20	3.60	3.40	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
239	第92図	PL.26	B南	T04-049	ガラス	1.90	3.30	3.45	3.38	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
240	第92図	PL.26	B南	T04-050	ガラス	2.90	4.35	4.35	4.35	0.08	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
241	第92図	PL.26	B南	T04-051	ガラス	2.80	3.75	3.80	3.78	0.05	鋳型			紺色	
242	第92図	PL.26	B南	T04-052	ガラス	3.45	3.75	3.90	3.83	0.08	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
243	第92図	PL.26	B南	T04-053	ガラス	3.00	4.00	4.30	4.15	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
244	第92図	PL.26	B南	T04-054	ガラス	2.05	3.60	4.50	4.05	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
245	第92図	PL.26	B南	T04-055	ガラス	3.00	4.75	5.00	4.88	0.09	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ (㎜)	径／幅（㎜）			重さ (g)	製作技法	材質		着色材 色調	備考
							最小	最大	平均			大別	細別		
246	第92図	PL.26	B南	T04-056	ガラス	2.00	2.90	2.90	2.90	0.02	鋳型			紺色	
247	第92図	PL.26	B南	T04-057	ガラス	2.15	3.60	3.85	3.73	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
248	第92図	PL.26	B南	T04-058	ガラス	2.50	4.10	4.20	4.15	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
249	第92図	PL.26	B南	T04-059	ガラス	2.90	3.60	3.70	3.65	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
250	第92図	PL.26	B南	T04-060	ガラス	3.50	4.45	4.60	4.53	0.08	鋳型			紺色？	表面孔内荒れ
251	第92図	PL.26	B南	T04-061	ガラス	2.50	4.05	4.15	4.10	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
252	第92図	PL.26	B南	T04-062	ガラス	2.00	3.60	3.90	3.75	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
253	第92図	PL.26	B南	T04-063	ガラス	2.30	3.40	3.50	3.45	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
254	第92図	PL.26	B南	T04-064	ガラス	2.15	3.70	3.80	3.75	0.04	鋳型			紺色	
255	第92図	PL.26	B南	T04-065	ガラス	2.70	3.80	4.30	4.05	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
256	第92図	PL.26	B南	T04-066	ガラス	1.70	3.25	3.25	3.25	0.01	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
257	第92図	PL.26	B南	T04-067	ガラス	3.60	3.20	3.30	3.25	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
258	第92図	PL.26	B南	T04-068	ガラス	2.45	3.60	3.80	3.70	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
259	第92図	PL.26	B南	T04-069	ガラス	1.85	3.15	3.45	3.30	0.02	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
260	第92図	PL.26	B南	T04-070	ガラス	3.05	4.75	4.90	4.83	0.10	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト 紺色透明	
261	第92図	PL.26	B南	T04-071	ガラス	1.80	3.30	3.30	3.30	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
262	第92図	PL.27	B南	T04-072	ガラス	3.45	2.90	3.00	2.95	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
263	第92図	PL.27	B南	T04-073	ガラス	3.30	5.00	5.20	5.10	0.11	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト 紺色透明	
264	第92図	PL.27	B南	T04-074	ガラス	2.00	3.70	4.05	3.88	0.04	引き伸ばし	ソーダ	判断保留	コバルト 紺色透明	
265	第92図	PL.27	B南	T04-075	ガラス	2.30	3.90	4.15	4.03	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
266	第92図	PL.27	B南	T04-076	ガラス	2.20	3.60	3.80	3.70	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
267	第92図	PL.27	B南	T04-077	ガラス	2.10	3.20	3.60	3.40	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
268	第92図	PL.27	B南	T04-078	ガラス	3.50	3.50	4.50	4.00	0.08	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
269	第92図	PL.27	B南	T04-079	ガラス	2.30	3.30	3.50	3.40	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
270	第92図	PL.27	B南	T04-080	ガラス	1.80	3.00	3.15	3.08	0.02	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
271	第92図	PL.27	B南	T04-081	ガラス	2.50	3.30	3.55	3.43	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
272	第92図	PL.27	B南	T04-082	ガラス	3.20	4.90	5.00	4.95	0.12	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
273	第92図	PL.27	B南	T04-083	ガラス	2.50	3.55	3.55	3.55	0.04	鋳型			紺色	
274	第92図	PL.27	B南	T04-084	ガラス	2.50	3.50	3.70	3.60	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
275	第92図	PL.27	B南	T04-085	ガラス	1.60	3.35	3.40	3.38	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
276	第92図	PL.27	B南	T04-086	ガラス	3.50	5.20	5.45	5.33	0.13	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
277	第92図	PL.27	B南	T04-087	ガラス	2.10	3.50	3.50	3.50	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
278	第92図	PL.27	B南	T04-088	ガラス	1.65	3.30	3.30	3.30	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
279	第92図	PL.27	B南	T04-089	ガラス	2.40	3.00	3.00	3.00	0.03	鋳型			紺色？	
280	第92図	PL.27	B南	T04-090	ガラス	2.75	3.50	3.80	3.65	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
281	第92図	PL.27	B南	T04-091	ガラス	2.50	3.80	3.80	3.80	0.03	鋳型			紺色	
282	第92図	PL.27	B南	T04-092	ガラス	2.25	3.30	3.40	3.35	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
283	第92図	PL.27	B南	T04-093	ガラス	2.10	3.00	3.00	3.00	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ（㎜）	径／幅（㎜）			重さ（g）	製作技法	材質		着色材 色調	備考
							最小	最大	平均			大別	細別		
284	第92図	PL.27	B南	T04-094	ガラス	2.40	3.70	3.70	3.70	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
285	第92図	PL.27	B南	T04-095	ガラス	3.20	5.00	5.50	5.25	0.11	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
286	第92図	PL.27	B南	T04-096	ガラス	2.30	3.60	4.00	3.80	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
287	第92図	PL.27	B南	T04-097	ガラス	1.80	3.40	3.70	3.55	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
288	第92図	PL.27	B南	T04-098	ガラス	2.70	4.50	4.65	4.58	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
289	第92図	PL.27	B南	T04-099	ガラス	2.70	3.50	3.90	3.70	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
290	第92図	PL.27	B南	T04-100	ガラス	2.35	3.90	4.00	3.95	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
291	第92図	PL.27	B南	T04-101	ガラス	2.20	3.80	3.80	3.80	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
292	第92図	PL.27	B南	T04-102	ガラス	2.20	3.70	3.90	3.80	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
293	第92図	PL.27	B南	T04-103	ガラス	2.75	4.25	4.45	4.35	0.08	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
294	第92図	PL.27	B南	T04-104	ガラス	2.30	3.30	3.30	3.30	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
295	第92図	PL.27	B南	T04-105	ガラス	2.25	3.90	3.90	3.90	0.05	鋳型			紺色	
296	第92図	PL.27	B南	T04-106	ガラス	2.10	4.10	4.10	4.10	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	一部欠損
297	第92図	PL.27	B南	T04-107	ガラス	2.70	3.55	4.00	3.78	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
298	第92図	PL.28	B南	T04-108	ガラス	2.20	3.35	3.50	3.43	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
299	第92図	PL.28	B南	T04-109	ガラス	2.30	3.20	3.60	3.40	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
300	第92図	PL.28	B南	T04-110	ガラス	2.50	4.95	5.00	4.98	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色	
301	第92図	PL.28	B南	T04-111	ガラス	3.00	3.90	4.05	3.98	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
302	第92図	PL.28	B南	T04-112	ガラス	2.90	3.80	4.40	4.10	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
303	第92図	PL.28	B南	T04-113	ガラス	2.40	3.20	3.45	3.33	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
304	第92図	PL.28	B南	T04-114	ガラス	2.65	4.35	4.35	4.35	0.05	鋳型			紺色	
305	第92図	PL.28	B南	T04-115	ガラス	2.70	4.30	4.40	4.35	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SII	鉄 黒	
306	第92図	PL.28	B南	T04-116	ガラス	3.30	3.90	4.00	3.95	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
307	第92図	PL.28	B南	T04-117	ガラス	1.70	3.50	3.60	3.55	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
308	第92図	PL.28	B南	T04-118	ガラス	2.90	3.70	4.25	3.98	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
309	第92図	PL.28	B南	T04-119	ガラス	2.35	3.65	3.80	3.73	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
310	第92図	PL.28	B南	T04-120	ガラス	2.00	3.40	3.55	3.48	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
311	第92図	PL.28	B南	T04-134	ガラス	2.00	3.10	3.60	3.35	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
312	第92図	－	B南	T04-135	ガラス	2.00	3.05	3.70	3.38	0.03	引き伸ばし	ソーダ		濃青色透明（暗）	
313	第92図	PL.28	B南	T04-136	ガラス	2.20	3.75	4.00	3.88	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
314	第92図	PL.28	B南	T04-137	ガラス	2.80	3.50	4.15	3.83	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
315	第92図	PL.28	B南	T04-138	ガラス	2.80	3.15	3.20	3.18	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
316	第92図	PL.28	B南	T04-139	ガラス	2.80	3.40	3.75	3.58	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
317	第92図	PL.28	B南	T04-140	ガラス	2.10	3.85	4.20	4.03	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
318	第92図	PL.28	B南	T04-141	ガラス	3.00	3.40	3.75	3.58	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
319	第92図	PL.28	B南	T04-142	ガラス	2.50	3.20	3.30	3.25	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
320	第92図	PL.28	B南	T04-143	ガラス	2.75	3.80	4.20	4.00	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
321	第92図	PL.28	B南	T04-144	ガラス	2.00	3.05	3.25	3.15	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ (㎜)	径／幅（㎜）			重さ (g)	製作技法	材質		着色材 色調	備考
							最小	最大	平均			大別	細別		
322	第92図	PL.28	B南	T04-145	ガラス	2.05	3.50	3.55	3.53	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
323	第92図	PL.28	B南	T04-146	ガラス	1.80	3.60	3.80	3.70	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
324	第92図	PL.28	B南	T04-147	ガラス	2.20	3.35	3.45	3.40	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
325	第92図	PL.28	B南	T04-148	ガラス	2.25	3.20	3.50	3.35	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
326	第92図	PL.28	B南	T04-149	ガラス	1.90	3.15	3.70	3.43	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
327	第92図	PL.28	B南	T04-150	ガラス	1.10	2.95	3.10	3.03	0.02	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
328	第92図	PL.28	B南	T04-151	ガラス	1.10	2.55	2.60	2.58	0.02	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
329	第92図	PL.28	B南	T04-152	ガラス	1.45	2.40	2.55	2.48	0.02	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
330	第92図	PL.28	B南	T04-153	ガラス	2.80	4.25	4.45	4.35	0.08	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
331	第92図	PL.28	B南	T04-154	ガラス	2.65	3.85	4.05	3.95	0.08	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
332	第92図	PL.28	B南	T04-155	ガラス	2.00	3.95	4.10	4.03	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
333	第92図	PL.28	B南	T04-156	ガラス	2.00	4.10	4.10	4.10	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明	
334	第92図	PL.28	B南	T04-157	ガラス	2.40	2.60	2.70	2.65	0.03	鋳型			紺色	
335	第92図	PL.28	B南	T04-158	ガラス	1.80	2.80	2.85	2.83	0.02	鋳型			紺色	
336	第92図	PL.28	B南	T04-159	ガラス	2.15	2.70	2.85	2.78	0.03	鋳型			紺色	
337	第92図	PL.28	B南	T04-160	ガラス	1.80	2.95	2.90	2.93	0.02	鋳型			紺色	
338	第92図	PL.28	B南	T04-161	ガラス	1.90	3.45	3.60	3.53	0.03	鋳型			紺色	
339	第92図	PL.29	B南	T04-162	ガラス	1.75	3.50	3.60	3.55	0.03	鋳型			紺色	
340	第92図	PL.29	B南	T04-163	ガラス	2.00	3.20	3.25	3.23	0.03	鋳型			紺色	
341	第92図	PL.29	B南	T04-164	ガラス	1.95	3.70	3.75	3.73	0.04	鋳型			紺色	
342	第92図	PL.29	B南	T04-165	ガラス	2.40	3.25	3.30	3.28	0.04	鋳型			紺色	
343	第92図	PL.29	B南	T04-166	ガラス	2.40	3.80	3.80	3.80	0.05	鋳型			紺色	
344	第92図	PL.29	B南	T04-167	ガラス	1.50	3.25	3.30	3.28	0.02	鋳型			紺色	
345	第92図	PL.29	B南	T04-168	ガラス	1.80	3.45	3.60	3.53	0.04	鋳型			紺色	
346	第92図	PL.29	B南	T04-169	ガラス	2.10	3.45	3.50	3.48	0.04	鋳型			紺色	
347	第92図	PL.29	B南	T04-170	ガラス	2.00	3.45	3.50	3.48	0.04	鋳型			紺色	
348	第92図	PL.29	B南	T04-171	ガラス	2.20	3.50	3.70	3.60	0.04	鋳型			紺色	
349	第92図	PL.29	B南	T04-172	ガラス	1.85	3.40	3.45	3.43	0.03	鋳型			紺色	
350	第92図	PL.29	B南	T04-173	ガラス	2.45	3.60	3.60	3.60	0.04	鋳型			紺色	
351	第92図	PL.29	B南	T04-174	ガラス	1.90	3.60	3.65	3.63	0.03	鋳型			紺色	
352	第92図	PL.29	B南	T04-175	ガラス	2.00	3.60	3.65	3.63	0.03	鋳型			紺色	
353	第92図	PL.29	B南	T04-176	ガラス	1.60	3.45	3.50	3.48	0.03	鋳型			紺色	
354	第92図	PL.29	B南	T04-177	ガラス	1.95	3.50	3.80	3.65	0.03	鋳型			紺色	
355	第92図	PL.29	B南	T04-178	ガラス	1.50	3.60	3.60	3.60	0.03	鋳型			紺色	
356	第92図	PL.29	B南	T04-179	ガラス	1.60	3.50	3.55	3.53	0.03	鋳型			紺色	
357	第92図	PL.29	B南	T04-180	ガラス	1.60	2.90	2.90	2.90	0.02	鋳型			紺色	
358	第92図	PL.29	B南	T04-181-1	ガラス	1.85	3.00	3.75	3.38	0.02	引き伸ばし	ソーダ		濃青色透明（暗）	
359	第92図	PL.29	B南	T04-181-2	ガラス	2.30	3.15	3.20	3.18	0.02	鋳型			紺色	

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ（㎜）	径／幅（㎜）			重さ（g）	製作技法	材質		着色材 色調	備考
							最小	最大	平均			大別	細別		
360	第92図	PL.29	B南	T04-181-3	ガラス	1.35	2.85	3.00	2.93	0.02	鋳型			紺色	
361	第92図	PL.29	B南	T04-181-4	ガラス	1.05	2.50	2.60	2.55	0.01	鋳型			紺色	
362	第92図	PL.29	B南	T04-181-5	ガラス	2.80	2.90	3.60	3.25	0.03	引き伸ばし	ソーダ		濃青色透明（暗）	
363	第92図	PL.29	B南	T04-181-6	ガラス	1.90	3.10	3.70	3.40	0.04	引き伸ばし	ソーダ		濃青色透明	
364	第92図	PL.29	B南	T04-182	ガラス	2.30	4.05	4.10	4.08	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
365	第92図	PL.29	B南	T04-183	ガラス	2.30	3.45	3.60	3.53	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
366	第92図	PL.29	B南	T04-184	ガラス	2.85	3.05	3.15	3.10	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
367	第92図	PL.29	B南	T04-186	ガラス	2.30	4.50	4.60	4.55	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
368	第92図	PL.29	B南	T04-187	ガラス	2.45	3.25	4.25	3.75	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
369	第92図	PL.29	B南	T04-188	ガラス	2.15	3.95	4.10	4.03	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
370	第92図	PL.29	B南	T04-189	ガラス	1.50	3.25	3.60	3.43	0.02	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
371	第92図	PL.29	B南	T04-190	ガラス	2.00	3.80	4.10	3.95	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
372	第92図	PL.29	B南	T04-191	ガラス	1.80	3.15	3.55	3.35	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
373	第92図	PL.29	B南	T04-192	ガラス	2.80	4.40	4.60	4.50	0.08	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
374	第92図	PL.29	B南	T04-193	ガラス	1.80	3.50	3.50	3.50	0.03	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
375	第92図	PL.29	B南	T04-194	ガラス	2.20	3.45	3.50	3.48	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
376	第92図	PL.29	B南	T04-195	ガラス	1.95	3.50	3.60	3.55	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明	
377	第92図	PL.29	B南	T04-196	ガラス	2.25	3.40	3.70	3.55	0.05	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	細片多数
378	第92図	PL.29	B南	T04-197	ガラス	2.00	3.20	3.45	3.33	0.04	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
379	第92図	PL.29	B南	T04-198	ガラス	2.60	3.85	4.10	3.98	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
380	第92図	－	B南	T04-199	ガラス	2.50	3.50	3.85	3.68	0.05	引き伸ばし	ソーダ		濃青色透明（暗）	
381	第92図	PL.29	B南	T04-200	ガラス	1.90	4.10	4.30	4.20	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
382	第92図	PL.30	B南	T04-201	ガラス	2.20	3.60	3.75	3.68	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
383	第92図	PL.30	B南	T04-202	ガラス	2.25	3.75	4.00	3.88	0.06	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
384	第92図	PL.30	B南	T04-203	ガラス	1.60	4.10	4.20	4.15	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
385	第92図	PL.30	B南	T04-204	ガラス	2.30	3.25	4.00	3.63	0.07	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅＋マンガン 濃青色透明（暗）	
386	第92図	PL.30	B南	T73-001	ガラス	1.50	2.70	2.70	2.70	0.02	引き伸ばし	ソーダ	SII	銅 淡青色透明	
387	第93図	PL.30	B北	T06	ガラス	6.30	7.20	8.35	7.78	0.57	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明（大）	
388	第93図	PL.30	B北	T07	ガラス	4.40	7.00	7.25	7.13	0.31	引き伸ばし	ソーダ	SIV	コバルト 紺色透明（大）	
389	第93図	PL.30	B北	T08	ガラス	4.70	7.10	7.35	7.23	0.33	引き伸ばし	ソーダ	判断保留	コバルト 紺色透明（大）	
390	第93図	PL.30	B北	T09	ガラス	5.60	7.00	7.70	7.35	0.38	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト 紺色透明（大）	
391	第93図	PL.30	B北	T10	ガラス	4.85	6.80	7.25	7.03	0.35	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明（大）	
392	第93図	PL.30	B北	T11	ガラス	6.95	6.55	6.90	6.73	0.46	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明（大）	
393	第93図	PL.30	B北	T12	ガラス	6.75	7.00	7.10	7.05	0.49	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明（大）	
394	第93図	PL.30	B北	T16	ガラス	6.15	7.50	7.80	7.65	0.40	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明（大）	
395	第93図	PL.30	B北	T22	ガラス	5.70	7.20	7.80	7.50	0.46	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明（大）	
396	第93図	PL.30	B北	T23	ガラス	5.25	8.10	8.45	8.28	0.51	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明（大）	
397	第93図	PL.30	B北	T25	ガラス	5.20	6.00	6.30	6.15	0.29	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト 紺色透明（大）	

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	素材	長さ(㎜)	径／幅（㎜）			重さ(g)	製作技法	材質		着色材 色調	備考
							最小	最大	平均			大別	細別		
398	第 93 図	PL.30	B 北	T26	ガラス	5.50	6.60	6.80	6.70	0.38	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト紺色透明（大）	
399	第 93 図	PL.30	B 北	T29	ガラス	6.30	7.10	8.25	7.68	0.56	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト紺色透明（大）	
400	第 93 図	PL.30	B 北	T30	ガラス	5.35	8.40	8.80	8.60	0.54	引き伸ばし	ソーダ	判断保留	コバルト紺色透明（大）	
401	第 93 図	PL.30	B 北	T33	ガラス	7.00	6.80	6.90	6.85	0.49	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト紺色透明（大）	
402	第 93 図	PL.30	B 北	T34	ガラス	5.70	6.70	7.00	6.85	0.40	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト紺色透明（大）	
403	第 93 図	PL.30	B 北	T35	ガラス	5.10	7.60	8.00	7.80	0.41	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト紺色透明（大）	
404	第 93 図	PL.30	B 北	T36	ガラス	5.00	6.70	7.35	7.03	0.35	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト紺色透明（大）	
405	第 93 図	PL.30	B 北	T37	ガラス	5.10	6.90	7.30	7.10	0.36	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト紺色透明（大）	
406	第 93 図	PL.30	B 北	T46	ガラス	5.15	6.80	7.30	7.05	0.39	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト紺色透明（大）	
407	第 93 図	PL.30	B 北	T47	ガラス	5.55	7.40	7.80	7.60	0.44	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト紺色透明（大）	
408	第 93 図	PL.30	B 北	T62	ガラス	5.45	6.40	6.80	6.60	0.32	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト紺色透明（大）	
409	第 93 図	PL.30	B 北	T64	ガラス	5.10	7.10	7.65	7.38	0.38	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト紺色透明（大）	
410	第 93 図	PL.30	B 北	T67	ガラス	5.30	6.25	8.00	7.13	0.33	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト紺色透明（大）	
411	第 93 図	PL.30	B 北	T68	ガラス	5.60	5.95	6.80	6.38	0.32	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト紺色透明（大）	
412	第 93 図	PL.30	B 北	T69	ガラス	3.75	6.70	6.90	6.80	0.24	引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト紺色透明（大）	
413	第 93 図	PL.30	B 北	T70	ガラス	3.60	6.00	6.80	6.40	0.20	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト紺色透明（大）	
414	第 93 図	PL.30	B 北	T71	ガラス	8.20	8.50	8.60	8.55	0.90	引き伸ばし	ソーダ	判断保留	コバルト紺色透明（大）	
415	第 93 図	PL.30	B 南	T72	ガラス	7.00	9.40	10.40	9.90	0.70	不明（切断後成形？）	ソーダ	SIV	コバルト紺色透明（大）	
416	第 93 図	PL.30	B 北	T96-001	ガラス	6.05	6.60	7.00	6.80	0.32	引き伸ばし	カリ	PI	コバルト紺色透明（大）	
417	第 93 図	PL.30	B 北	T96-002	ガラス	6.00	7.05	7.60	7.33	0.34	引き伸ばし？	ソーダ	SII	銅＋マンガン濃青色透明	

・武器

大刀・剣

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	器種	全長(cm)	刀身部(cm)		茎部（cm）			鍔部（cm）				重量（g）			備考
							長	幅	長	幅	茎尻	長軸	短軸	内孔長軸	内孔短軸	全体	鍔	縄	
418	第 94 図	PL.31・32	F21-001	B	大刀	85.9	73	4.9	12.1	2.1		7.5	6.15	[3.9]	[2.8]	1180			
419	第 94 図	PL.31・32	F75-015	C	大刀	74.6	62.3	2.5	12.3	1.5	一文字	5.9	5.35	3.05	2.7	450	23.42	4.19	
421	第 95 図	PL.31・33	F54	C	剣	(46.3)	34.4	3.4	9.6	1.7	一文字	6.7	5.95	[3.4]	2.7	446			

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	器種	全長(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
420	第 95 図	PL.32	F10	B	不明	(5.0)	2.9	7.73	

鉄鏃

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	形式（部位）	全長(cm)	鏃身部（cm）			頸部（cm）			茎部（cm）			重量(g)	備考
							長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚		
422	第 96 図	PL.33	B	F08	平根腸抉柳葉式	(6.2)	5.8	3.3	0.2		0.95	0.15	—	—	—	13.10	
423	第 96 図	PL.33	F	F36	平根腸抉柳葉式	(12.5)	7.8	3.8	0.2	2.8	0.8	0.3	(4.2)	0.35	0.3	17.28	
424	第 96 図	PL.33	F	F65	平根腸抉柳葉式	(9.7)	5.6	2.6	0.15	3.0	0.65	0.3	(2.2)	0.4	0.3	10.42	
425	第 96 図	PL.33	B	F86	平根腸抉柳葉式	(5.4)	5.4	2.9	0.15	(0.9)	0.7	0.2	—	—	—	9.87	
426	第 96 図	PL.33	F	F01-05	平根腸抉柳葉式	(21.0)	5.7	3.2	0.2	12.8	0.6	0.25	(3.9)	0.25	0.25	20.86	
427	第 97 図	PL.34	F	F41-01	平根長三角形式	10.9	5.0	2.4	0.2	1.9	0.7	0.3	4.0	0.3	0.2	11.82	
428	第 97 図	PL.34	A	F23-02	平根長三角形式	12.2	4.0	1.35	0.3	4.1	0.6	0.25	4.1	0.3	0.3	11.47	
429	第 97 図	PL.34	A	F26-01	平根長三角形式	(9.8)	3.5	1.8	0.2	3.0	0.7	0.3	(2.3)	0.35	0.3	11.37	
430	第 97 図	PL.34	A	F23-04	平根長三角形式	9.9	3.9	1.9	0.2	2.4	0.75	0.3	3.6	0.25	0.25	12.53	
431	第 97 図	PL.34	E	F62	平根長三角形式	(7.5)	(4.8)	2.65	0.2	2.2	0.85	0.25	(0.6)	0.6	0.25	14.5	
432	第 97 図	PL.34	A	F59-02	平根長三角形式	(7.2)	3.3	2.1	0.15	3.2	0.8	0.2	(1.05)	0.5	0.3	8.06	
433	第 97 図	PL.34	F	F33	平根長三角形式	(12.6)	5.7	2.5	0.2	3.0	0.75	0.3	(4.6)	0.4	0.3	19.34	

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	形式（部位）	全長	鏃身部（cm）			頸部（cm）			茎部（cm）			重量	備考
						(cm)	長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚	(g)	
434	第 97 図	PL.34	F	F37	平根長三角形式	(9.0)	(5.0)	2.05	0.15	2.3	0.85	0.25	(2.1)	0.45	0.25	9.45	
435	第 97 図	PL.34	A	F68	平根長三角形式	10.4	3.8	1.4	0.1	2.3	0.75	0.25	4.4	0.3	0.25	11.15	
436	第 97 図	PL.34	F	F03-02	平根長三角形式	(6.6)	4.0	1.6	0.15	1.8	0.5	0.3	(0.9)	0.3	0.3	7.17	
437	第 97 図	PL.34	E	F22	平根長三角形式	(11.8)	5.3	2.5	0.2	2.3	0.7	0.3	(4.7)	0.4	0.25	13.93	
438	第 97 図	PL.34	E	F47	平根長三角形式	(12.7)	5.4	2.9	0.2	3.2	0.7	0.3	(4.3)	0.25	0.25	17.44	
439	第 97 図	PL.34	A	F23-01	平根長三角形式	14.4	5.3	1.2	0.2	3.6	0.5	0.4	5.5	0.4	0.3	12.68	
440	第 97 図	PL.34	A	F26-02	平根長三角形式	(8.0)	(2.0)	1.4	0.2	3.0	0.6	0.25	(2.9)	0.4	0.2	7.06	
441	第 97 図	PL.34	B	F91	平根長三角形式	(4.5)	(4.1)	2.6	0.2	(0.3)	0.35	0.2	—	—	—	9.71	
442	第 97 図	PL.34	B	F09-01	平根長三角形式	(5.8)	5.1	2.5	0.1	(0.8)	0.7	0.3	—	—	—	8.03	
443	第 97 図	PL.34	F	F34	平根長三角形式	(4.9)	4.6	2.9	0.2	(1.4)	0.6	0.25	—	—	—	13.06	
444	第 97 図	PL.34	F	F04	平根長三角形式	(4.1)	4.3	1.75	0.2	(1.2)	0.6	0.3	—	—	—	9.16	
445	第 97 図	PL.34	F	F30	平根長三角形式	(6.0)	6.0	2.9	0.2	(0.4)	0.75	0.35	—	—	—	12.54	
446	第 97 図	PL.34	F	F03-01	平根腸抉長三角形式	(4.3)	(4.3)	2.1	0.2	(0.5)	0.7	0.3	—	—	—	6.14	
447	第 98 図	PL.36	F	F42	平根五角形式	(9.0)	4.8	(2.9)	0.15	2.2	0.7	0.25	(2.1)	0.5	0.3	11.55	
448	第 98 図	PL.36	F	F31	平根五角形式	(9.3)	4.7	2.6	0.2	1.9	0.7	0.25	2.5	0.4	0.25	11.63	
449	第 98 図	PL.36	E	F06	平根撫関三角形式	11.0	3.0	2.85	0.2	2.9	1.0	0.25	5.0	0.25	0.25	12.21	
450	第 98 図	PL.36	A	F23-03	平根撫関三角形式	(5.8)	4.2	1.8	0.2	2.1	0.55	0.25	0.8	0.4	0.25	6.13	
451	第 98 図	PL.36	A	F67-18	平根撫関三角形式	(9.0)	5.5	1.6	2.0	2.2	0.85	0.3	(1.4)	0.5	0.3	9.89	
452	第 98 図	PL.36	A	F67-02	平根圭頭式	(9.6)	8.8	2.2	(0.85)	0.6	0.3	—	—	—	—	18.56	
453	第 98 図	PL.36	F	F77	平根圭頭式	(10.5)	1.0	2.5	0.2	7.8	0.5	0.3	(1.8)	0.5	0.25	17.49	
454	第 98 図	PL.36	A	F67-01	平根圭頭式	(9.2)	5.3	3.3	0.2	1.0	0.75	0.3	(2.8)	0.4	0.25	19.76	
455	第 98 図	PL.36	A	F67-22	平根方頭式	9.3	3.4	(1.4) [1.8]	0.2	2.4	0.75	0.3	3.5	0.3	0.3	9.29	
456	第 98 図	PL.36	F	F05	（鏃身部）	(3.3)	(3.3)	(2.1)	0.15	—	—	—	—	—	—	4.64	
457	第 98 図	PL.36	F	F35-01	（鏃身部）	(3.8)	(1.85)	0.15	—	—	—	—	—	—	—	4.60	
458	第 98 図	PL.36	A	F70-14	（鏃身部）	(1.4)	(1.4)		0.15	—	—	—	—	—	—	0.80	
459	第 99 図	PL.36	F	F02	尖根柳葉式	17.3	3.2	1.0	0.2	8.5	0.65	0.3	5.5	0.35	0.3	13.23	
460	第 99 図	PL.36	F	F41-02	尖根柳葉式	(14.2)	3.0	1.0	0.15	(5.8)	0.5	0.3	(4.5)	0.3	0.2	10.11	
461	第 99 図	PL.36	F	F28	尖根柳葉式	17.3	3.6	1.2	0.15	8.3	0.55	0.3	5.3	0.3	0.2	13.99	
462	第 99 図	PL.36	E	F48	尖根柳葉式	(14.7)	2.7	0.9	0.2	9.2	0.45	0.25	(2.8)	0.35	0.25	10.72	
463	第 99 図	PL.36	C	F75-04	尖根柳葉式	(15.5)	2.2	1.0	0.2	11.0	0.5	0.3	(2.3)	0.35	0.3	12.51	
464	第 99 図	PL.36	C	F76-01	尖根柳葉式	(5.2)	3.6	1.1	0.2	(3.6)	0.45	0.30	—	—	—	3.43	
465	第 99 図	PL.36	A	F70-19	尖根柳葉式	(2.0)	(2.0)	0.9	0.2	—	—	—	—	—	—	1.61	
466	第 99 図	PL.38	A	F59-01	尖根片刃箭式	(15.9)	(3.1)	0.85	0.2	7.4	0.5	0.3	(5.6)	0.3	0.3	10.53	
467	第 99 図	PL.38	A	F70-07	尖根片刃箭式	(4.8)	3.1	0.75	0.25	(1.7)	0.55	0.3	—	—	—	3.54	
468	第 99 図	PL.38	A	F70-21	尖根片刃箭式	(4.0)	(2.9)	0.65	0.25	(1.1)	(0.6)	0.25	—	—	—	2.73	
469	第 99 図	PL.38	A	F70-24	尖根片刃箭式	(5.0)	3.3	0.7	0.25	(1.7)	0.5	0.3	—	—	—	4.15	
470	第 99 図	PL.38	A	F70-08	尖根片刃箭式	(4.1)	(3.0)	0.8	0.2	(1.1)	0.6	0.3	—	—	—	3.99	
471	第 99 図	PL.38	A	F70-32	尖根片刃箭式	(2.1)	(1.4)	0.7	0.2	(0.7)	0.5	0.25	—	—	—	1.45	
472	第 99 図	PL.38	A	F70-33	尖根片刃箭式	(2.6)	(1.6)	0.6	0.2		0.5	0.2	—	—	—	1.38	
473	第 99 図	PL.38	A	F70-42	尖根片刃箭式	(2.1)	(1.4)	0.75	0.2	(0.6)	0.6	0.25	—	—	—	1.22	
474	第 99 図	PL.38	A	F70-20	尖根片刃箭式	(3.2)	(3.2)	0.7	0.2	—	—	—	—	—	—	2.49	
475	第 99 図	PL.38	A	F70-22	尖根片刃箭式	(3.0)	(3.0)	0.7	0.2	—	—	—	—	—	—	2.72	
476	第 99 図	PL.38	A	F70-23	尖根片刃箭式	(3.1)	(3.1)	0.7	0.2	—	—	—	—	—	—	2.47	
477	第 99 図	PL.38	A	F70-30	尖根片刃箭式	(3.2)	(3.2)	0.8	0.25	—	—	—	—	—	—	3.30	
478	第 99 図	PL.38	A	F70-25	尖根片刃箭式	(2.6)	(2.6)	0.9	0.25	—	—	—	—	—	—	2.57	
479	第 99 図	PL.38	A	F70-28	尖根片刃箭式	(1.7)	(1.7)	0.8	0.2	—	—	—	—	—	—	0.71	
480	第 100 図	PL.38	A	F67-15	尖根鏨箭式	25.3	2.2	1.0	0.2	16.8	0.6	0.3	6.3	0.25	0.25	23.08	
481	第 100 図	PL.38	F	F40	尖根鏨箭式	(10.2)	2.15	1.0	0.2	(9.3)	0.5	0.3	—	—	—	11.11	
482	第 100 図	PL.38	E	F45	尖根鏨箭式	(9.0)	1.8	0.9	0.15	(7.3)	0.6	0.35	—	—	—	8.60	
483	第 100 図	PL.38	C	F76-02	尖根鏨箭式	(3.7)	2.3	1.05	0.2	(1.2)	0.6	0.25	—	—	—	2.80	
484	第 100 図	PL.38	A	F67-14	尖根鏨箭式	(17.3)	2.3	(1.6) [1.7]	0.15	14.4	0.7	0.3	(0.7)	0.45	0.3	16.05	
485	第 100 図	PL.38	C	F75-03	尖根鏨箭式	(19.6)	2.4	1.2	0.2	(17.3)	0.4	0.3	—	—	—	15.69	
486	第 100 図	PL.38	C	F75-10	尖根鏨箭式	(8.4)	0.7	0.95	0.15	(7.7)	0.4	0.3	—	—	—	7.13	
487	第 100 図	PL.38	C	F75-05	尖根鏨箭式	(15.9)	(0.6)	0.85	0.2	15.3	0.4	0.25	—	—	—	14.19	
488	第 100 図	PL.38	C	F75-07	尖根鏨箭式	(14.7)	0.7	0.8	0.2	(14.2)	0.5	0.3	—	—	—	11.38	
489	第 100 図	PL.38	封鎖部	F89-01	尖根鏨箭式	(3.0)	0.45	0.8	0.2	(2.5)	0.6	0.3	—	—	—	3.76	
490	第 100 図	PL.38	F	F38-01	尖根鏨箭式	(5.1)	0.5	0.9	0.2	(4.6)	0.5	0.2	—	—	—	4.07	
491	第 100 図	PL.40	A	F67-27	（頸部～茎部）	(3.7)	—	—	—	(2.2)	0.6	0.4	(1.5)	0.4	0.25	3.06	
492	第 100 図	PL.40	A	F70-06	（頸部～茎部）	(8.5)	—	—	—	(3.4)	0.65	0.3	5.0	0.45	0.3	7.59	
493	第 100 図	PL.40	B	F16	（頸部～茎部）	(7.0)	—	—	—	(2.7)	0.6	0.3	(4.3)	0.4	0.3	4.35	
494	第 100 図	PL.40	F	F35-02	（頸部～茎部）	(6.2)	—	—	—	(2.0)	0.75	0.3	4.2	0.3	0.25	3.76	
495	第 100 図	PL.40	C	F75-06	（頸部～茎部）	(12.8)	—	—	—	(8.1)	0.5	0.3	(5.7)	0.3	0.2	10.12	
496	第 100 図	PL.40	F	F32	（頸部～茎部）	(10.0)	—	—	—	(5.2)	0.5	0.3	4.8	0.35	0.25	6.42	
497	第 100 図	PL.40	A	F70-15	（頸部～茎部）	(8.8)	—	—	—	(4.1)	0.55	0.35	4.7	0.2	0.2	9.18	2本
498	第 100 図	PL.40	A	F70-16	（頸部～茎部）	(8.3)	—	—	—	(3.3)	0.6	0.3	5.0	0.5	0.3	6.78	
499	第 100 図	PL.40	A	F23-05	（頸部～茎部）	(8.7)	—	—	—	(4.9)	0.6	0.3	(3.8)	0.3	0.2	5.88	
500	第 100 図	PL.40	A	F70-17	（頸部～茎部）	(6.8)	—	—	—	(2.8)	0.6	0.4	(4.0)	0.45	0.4	5.08	
501	第 100 図	PL.40	F	F83	（頸部～茎部）	(2.4)	—	—	—		0.65	0.35	(1.3)	0.5	0.3	1.39	
502	第 100 図	PL.40	A	F70-18	（頸部～茎部）	(3.8)	—	—	—	(1.4)	0.6	0.3	(2.4)	0.35	0.3	3.02	
503	第 100 図	PL.40	F	F39	（頸部～茎部）	(4.8)	—	—	—	(2.8)	0.7	0.4	(2.0)	0.35	0.35	5.03	
504	第 100 図	PL.40	A	F70-26	（頸部～茎部）	(4.6)	—	—	—		0.5	0.4	(3.6)	0.3	0.25	2.87	

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	形式（部位）	全長	鏃身部（cm）			頸部（cm）			茎部（cm）			重量	備考
						(cm)	長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚	(g)	
505	第101図	PL.40	A	F67-03	(頸部～茎部)	(4.3)	(0.55)	(1.3)	0.45	(3.85)	0.7	0.45	—	—	—	5.37	
506	第101図	PL.40	A	F26-03	(頸部)	(6.5)	—	—	—	(6.5)	0.55	0.2	—	—	—	5.06	
507	第101図	PL.40	C	F75-08	(頸部)	(14.5)	—	—	—	(14.5)	0.6	0.3	—	—	—	14.11	
508	第101図	PL.40	C	F75-11	(頸部)	(14.1)	—	—	—	(14.1)	0.4	0.4	—	—	—	13.72	
509	第101図	PL.40	C	F75-09	(頸部)	(9.7)	—	—	—	(9.7)	0.7	0.4	—	—	—	9.12	
510	第101図	PL.40	A	F15-02	(頸部)	(8.3)	—	—	—	(8.3)	0.55	0.3	—	—	—	6.36	
511	第101図	PL.40	E	F85-01	(頸部)	(8.1)	—	—	—	(8.1)	0.55	0.2	—	—	—	4.62	鉈の可能性
512	第101図	PL.40	E	F85-02	(頸部)	(5.6)	—	—	—	(5.6)	0.6	0.15	—	—	—	2.97	鉈の可能性
513	第101図	PL.40	C	F75-17	(頸部)	(2.6)	—	—	—	(2.6)	0.45	0.3	—	—	—	2.07	
514	第101図	PL.40	F	F29-01	(頸部)	(2.7)	—	—	—	(2.7)	0.6	0.35	—	—	—	2.11	
515	第101図	PL.40	封鎖部	F89-02	(頸部)	(1.9)	—	—	—	(1.9)	0.55	0.25	—	—	—	1.16	
516	第101図	PL.40	A	F67-28	(頸部)	(2.4)	—	—	—	(2.4)	0.55	0.3	—	—	—	1.13	
517	第101図	PL.40	C	F75-19	(頸部)	(1.9)	—	—	—	(1.9)	0.4	0.3	—	—	—	0.96	
518	第101図	PL.40	C	F75-22	(茎部)	(3.8)	—	—	—	—	—	—	(3.8)	0.3	0.25	0.91	
519	第101図	PL.40	C	F75-21	(茎部)	(3.9)	—	—	—	—	—	—	(3.9)	0.4	0.3	1.30	
520	第101図	PL.40	C	F75-16	(茎部)	(3.3)	—	—	—	—	—	—	(3.3)	0.4	0.25	1.11	
521	第101図	PL.40	A	F67-29	(茎部)	(4.6)	—	—	—	—	—	—	(4.6)	0.5	0.15	1.68	
522	第101図	PL.40	F	F29-02	(茎部)	(4.5)	—	—	—	—	—	—	(4.5)	0.4	0.3	1.28	
523	第101図	PL.40	F	F66	(茎部)	(4.3)	—	—	—	—	—	—	(4.3)	0.4	0.3	1.74	
524	第101図	PL.40	A	F70-09	(茎部)	(3.6)	—	—	—	—	—	—	(3.6)	0.4	0.4	1.19	
525	第101図	PL.40	A	F70-12	(茎部)	(3.1)	—	—	—	—	—	—	(3.1)	0.3	0.25	0.91	
526	第101図	PL.40	A	F70-27	(茎部)	(4.0)	—	—	—	—	—	—	(4.0)	0.45	0.35	1.41	
527	第101図	PL.40	A	F70-29	(茎部)	(4.2)	—	—	—	—	—	—	(4.2)	0.45	0.3	1.33	
528	第101図	PL.40	A	F70-41	(茎部)	(3.2)	—	—	—	—	—	—	(3.2)	0.4	0.3	0.89	
529	第101図	PL.40	A	F70-51	(茎部)	(2.5)	—	—	—	—	—	—	(2.5)	0.4	0.3	0.75	
530	第101図	PL.40	封鎖部	F90	(茎部)	(4.1)	—	—	—	—	—	—	(4.1)	0.45	0.35	2.19	
531	第101図	PL.40	A	F67-24	(茎部)	(7.2)	—	—	—	—	—	—	(7.2)	0.45	0.4	9.01	
532	第101図	PL.40	A	F70-50	(茎部)	(2.7)	—	—	—	—	—	—	(2.7)	0.4	0.3	0.95	
533	第101図	PL.40	A	F70-54	(茎部)	(1.9)	—	—	—	—	—	—	(1.9)	0.3	0.25	0.32	
534	第101図	PL.40	A	F55-02	(茎部)	(1.7)	—	—	—	—	—	—	(1.7)	0.25	0.2	0.25	
535	第101図	PL.40	A	F70-11	(茎部)	(3.4)	—	—	—	—	—	—	(3.4)	0.3	0.3	0.67	
536	第101図	PL.40	A	F70-31	(茎部)	(3.2)	—	—	—	—	—	—	(3.2)	0.35	0.3	0.87	
537	第101図	PL.40	A	F70-40	(茎部)	(2.0)	—	—	—	—	—	—	(2.0)	0.3	0.25	0.26	
538	第101図	PL.40	A	F70-52	(茎部)	(1.4)	—	—	—	—	—	—	(1.4)	0.3	0.3	0.29	
539	第101図	PL.40	A	F70-53	(茎部)	(1.7)	—	—	—	—	—	—	(1.7)	0.3	0.3	0.35	
540	第101図	PL.40	A	F70-55	(茎部)	(1.9)	—	—	—	—	—	—	(1.9)	0.25	0.25	0.38	
541	第101図	PL.40	A	F70-56	(茎部)	(1.9)	—	—	—	—	—	—	(1.9)	0.35	0.3	0.28	
542	第101図	PL.40	A	F70-57	(茎部)	(1.4)	—	—	—	—	—	—	(1.4)	0.35	0.25	0.29	
543	第101図	PL.40	E	F87	(茎部)	(2.6)	—	—	—	—	—	—	(2.6)	0.4	0.25	0.81	
544	第101図	PL.40	A	F70-58	(茎部)	(1.4)	—	—	—	—	—	—	(1.4)	0.3	0.25	0.19	
545	第101図	PL.40	A	F70-48	(茎部)	(2.5)	—	—	—	—	—	—	(2.5)	0.45	0.4	1.05	
546	第101図	PL.40	A	F70-13	(茎部)	(4.1)	—	—	—	—	—	—	(4.1)	0.4	0.3	1.65	
547	第101図	PL.40	A	F70-35	(茎部)	(3.5)	—	—	—	—	—	—	(3.5)	0.35	0.2	1.25	
548	第101図	PL.40	C	F75-18	(茎部)	(3.0)	—	—	—	—	—	—	(3.0)	0.35	0.25	1.18	
549	第101図	PL.40	C	F75-20	(茎部)	(3.1)	—	—	—	—	—	—	(3.1)	0.45	0.3	1.69	
550	第101図	PL.40	E	F19-02	(茎部)	(3.0)	—	—	—	—	—	—	(3.0)	0.4	0.4	1.63	
551	第101図	PL.40	E	F19-03	(茎部)	(4.0)	—	—	—	—	—	—	(4.0)	0.45	0.3	1.77	
552	第101図	PL.40	F	F38-02	(茎部)	(2.2)	—	—	—	—	—	—	(2.2)	0.4	0.3	1.03	
553	第101図	PL.40	A	F70-10	(茎部)	(3.4)	—	—	—	—	—	—	(3.4)	0.45	0.4	1.48	
554	第101図	PL.40	E	F19-01	(茎部)	(6.2)	—	—	—	—	—	—	(6.2)	0.45	0.35	3.20	
555	第101図	PL.40	D	F56	(茎部)	(5.0)	—	—	—	—	—	—	(5.0)	0.3	0.3	2.27	
556	第101図	PL.40	A	F59-03	(茎部)	(5.3)	—	—	—	—	—	—	(5.3)	0.4	0.3	2.92	
557	第101図	PL.40	D	F63,F51	(茎部)	(4.3)	—	—	—	—	—	—	(4.3)	0.4	0.4	2.45	
558	第101図	PL.40	C	F75-13	(茎部)	(5.9)	—	—	—	—	—	—	(5.9)	0.45	0.35	4.55	
559	第101図	PL.40	A	F70-34	(茎部)	(2.1)	—	—	—	—	—	—	(2.1)	0.55	0.3	0.94	
560	第101図	PL.40	A	F70-36	(茎部)	(2.5)	—	—	—	—	—	—	(2.5)	0.3	0.2	0.74	
561	第101図	PL.40	A	F70-37	(茎部)	(2.0)	—	—	—	—	—	—	(2.0)	0.35	0.2	0.50	
562	第101図	PL.40	A	F70-45	(茎部)	(1.9)	—	—	—	—	—	—	(1.9)	0.3	0.3	0.68	
563	第101図	PL.40	A	F70-46	(茎部)	(2.3)	—	—	—	—	—	—	(2.3)	0.3	0.25	0.43	
564	第101図	PL.40	A	F70-38	(茎部)	(1.2)	—	—	—	—	—	—	(1.2)	0.35	0.3	0.36	
565	第101図	PL.40	A	F70-44	(茎部)	(2.1)	—	—	—	—	—	—	(2.1)	0.4	0.3	0.64	
566	第101図	PL.40	A	F70-47	(茎部)	(2.5)	—	—	—	—	—	—	(2.5)	0.35	0.3	0.50	
567	第101図	PL.40	A	F70-49	(茎部)	(1.9)	—	—	—	—	—	—	(1.9)	0.35	0.3	0.31	

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号		形式・部位（本数）	重量(g)	備考
568	第102図	PL.41	A	F70-03	鉄鏃束	平根長三角形式（8）、尖根片刃箭式（13）、尖根鑿箭式（2）、頸部～茎部（14＋）	531.10	
569	第102図	PL.42・43	A	F70-01	鉄鏃束	尖根片刃箭式（3）、頸部～茎部（6）	99.21	
570	第103図	PL.42・43	A	F70-02	鉄鏃束	尖根片刃箭式（4）、頸部～茎部（4）	96.12	
571	第103図	PL.43	A	F70-05	鉄鏃束	平根五角形式（1）、頸部～茎部（4）	32.92	
572	第103図	PL.43	A	F70-04	鉄鏃束	頸部～茎部（3）	25.58	

・農工具

砥石

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	長(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
573	第 104 図	PL.49	D	T66	9.9	2.3	38.80	凝灰岩
574	第 104 図	PL.49	A	T95	9.4	1.95	37.10	凝灰岩

鎌

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	長(cm)	幅(cm)	刀部最大幅(cm)	重量(g)	備考
575	第 104 図	PL.46	A	F67-25	(5.9) (3.55)	2.9 3.0	— —	30.99	2 個体
576	第 104 図	PL.46	A	F67-07	(2.5)	2.7	—	6.94	
577	第 104 図	PL.46	B	F07	(6.8)	2.0	—	15.31	

鍬鋤先

報告書番号	挿図番号	図版番号	出土エリア	取上げ番号	長(cm)	幅(cm)	刀部最大幅(cm)	重量(g)	備考
578	第 105 図	PL.44	D	F52	15.3	15.3	5.4	192.13	
579	第 105 図	PL.44	F	F27	15.1	17.8	4.3	163.41	
580	第 106 図	PL.44	F	F20	15.2	15.0	5.1	170.02	
581	第 106 図	PL.44	D	F53	12.35	13.8	4.6	145.99	

刀子

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	部位	全長(cm)	刀（身）部（cm）			茎部・身部（cm）			重量(g)	備考
							長	幅	厚	長	幅	厚		
582	第 107 図	PL.46	F18	B	刀身〜茎	21.0	13.8	1.85	0.35	7.2	1.0	0.3	52.43	
583	第 107 図	PL.46	F73	B	刀身〜茎	(15.0)	(9.7)	(1.9)	0.2	(5.3)	1.1	0.2	31.62	
584	第 107 図	PL.46	F50	D	刀身〜茎	15.1	9.8	1.7	0.3	5.3	1.0	0.3	29.60	
585	第 107 図	PL.46	F14	A	刀身〜茎	(13.6)	(7.55)	1.45	0.25	[5.25]	0.9	0.3	24.18	
586	第 107 図	PL.46	F75-02	C	刀身〜茎	14.7	10.0	1.3	0.3	4.6	0.7	0.3	20.59	
587	第 107 図	PL.46	F67-19	A	刀身〜茎	(12.5)	12.2	1.7	0.35	(2.0)	0.85	0.25	22.12	
588	第 107 図	PL.46	F49	D	刀身〜茎	13.2	7.6	1.8	0.2	5.6	1.0	0.2	28.09	
589	第 107 図	PL.46	F11-02	B	茎	(3.4)	—	—	—	(3.3)	0.8	0.25	4.53	
590	第 107 図	PL.46	F-13	B	刀身〜茎	8.2	4.4	1.3	0.2	3.8	0.8	0.2	12.27	
591	第 107 図	PL.46	F67-13	A	茎	(3.8)	—	—	—	(3.8)	0.8	0.2	2.60	
592	第 107 図	PL.46	F46	E	刀身〜茎	5.3	3.2	1.0	0.3	2.1	0.9	0.3	5.81	
593	第 107 図	PL.46	F67-04	A	茎	5.8	—	—	—	5.8	0.8	0.2	3.36	
594	第 107 図	PL.46	F11-01	B	刀身〜茎	(7.3)	6.5	1.55	0.3	0.8	1.0	0.3	10.63	
595	第 107 図	PL.46	F71	B	茎	(3.9)	—	—	—	(3.9)	0.8	0.25	3.58	

鉄斧

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	全長(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
596	第 108 図	PL.48	F25-02	E	9.0	3.2	102.85	
597	第 108 図	PL.48	F84	A	9.3	3.55	98.55	
598	第 108 図	PL.48	F25-01	E	13.45	6.2	428.75	

鉈

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	全長(cm)	刀（身）部（cm）			茎部・身部（cm）			重量(g)	備考
						長	幅	厚	長	幅	厚		
599	第 109 図	PL.48	F67-20	A	14.2	6.4	1.3	0.3	7.8	0.6	0.35	20.11	
600	第 109 図	PL.48	F67-16	A	(5.2)	(5.2)	1.2	0.4	—	—	—	8.50	
601	第 109 図	PL.48	F60	A	12.5	4.8	1.4	0.3	7.7	0.8	0.3	16.46	
602	第 109 図	PL.48	F67-17	A	11.1	3.6	1.45	0.4	7.4	0.85	0.3	18.02	
603	第 109 図	PL.48	F24	A	(8.3)	4.5	1.2	0.15	1.9/（1.9）	0.7/0.4	0.3/0.3	7.95	

鑿

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	全長(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
604	第 109 図	PL.48	F67-12	A	[21.85]	1.2	98.36	

・鍛冶具・生産用具等

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	器種	部位	全長(cm)	幅(cm)	針孔径(cm)	重量(g)	備考
605	第112図	PL.49	F67-11	A	鉄鉗		19.3	−	−	35.60	
606	第112図	PL.49	F67-23	A	鑷子		(9.9)	−	−	14.54	
607	第112図	PL.49	F67-21	A	針	針孔〜針身	17.0	0.4	0.2〜0.35	14.04	針束12本残存（推定17本）
608	第112図	PL.49	F74	B	針	針孔〜針身	14.1	0.35	0.2〜0.4	10.67	

・馬具

轡

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	銜（cm）				鏡板（cm）			立聞（cm）		引手（cm）		重量(g)	備考
					全長	長	啣金外法直径	外法直径	全高	環幅	環高	高	幅	円環直径	引手壺直径		
609	第113図	PL.50	F57	D	15.5	左8.4 右8.45	左2.2 右2.2	左2.4 右2.05	左7.1 右7.5	左7.8 右8.3	左 − 右 −	左4.1 右4.35	左3.4 右3.25	左2.3 右2.35	左2.1 右2.3	310.09	
610	第114図	PL.51	F55-01	A	20.1	左10.8 右10.4	左2.8 右2.5	左3.3 右3.3	左8.9 右8.4	左7.9 右7.7	左6.9 右6.7	左2.0 右1.75	左2.4 右2.3	左2.55 右2.6	左2.5 右2.6	306.06	
611	第114図	PL.52	F64-01	E	15.45	左8.0 右8.5	左2.0 右2.15	左2.7 右2.7	左7.05 右7.4	左7.0 右 −	左5.6 右5.9	左1.4 右1.5	左3.2 右3.4	左2.2 右1.8	左2.4 右2.5	208.70	

鐙吊金具

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	全長(cm)	鋲具（cm）				兵庫鎖（cm）			吊金具（cm）				重量(g)	備考
						長	基部幅	尻幅	最小幅	全長	長	幅	全長	幅	鋲数	擬似鋲数		
612	第115・119図	PL.53	F61 F17	A	［42.5］	10.0	2.9	5.9	2.9	18.2	①7.0 ②7.1 ③7.1	①3.4 ②3.15 ③3.2	17.8	1.85	(3)	(46)	458.32	
613	第118・119図	PL.53	F58 F69	A	(43.1) ［43.4］	10.6	3.1	5.75	3.1	(18.1) ［18.4］	①(6.75) ②7.0 ③7.0	①3.0 ②3.1 ③3.05	(17.0) ［17.3］	2.0	4	(50)	374.63	

※①②③は図面上から

帯飾金具・鋲留金具・雲珠？

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	器種	長さ(cm)	幅(cm)	鋲頭径(cm)	鋲頭高(cm)	鋲（孔）数	重量(g)	備考
614	第120図	PL.54	F79	E	帯飾金具	4.6	3.2	0.8	0.6	4	20.05	
615	第120図	PL.54	F81	E	帯飾金具	4.5	3.3	0.8	0.6	4	18.90	
616	第120図	PL.54	F17-02	A	帯飾金具	3.0	3.0	−	−	(4)	11.40	
617	第120図	PL.54	F44	E	帯飾金具	2.35	2.5	0.65	0.25	3	6.75	
618	第120図	PL.54	F72	E	帯飾金具	2.1	2.3	0.7	0.2	2	5.26	
619	第120図	PL.54	F80	E	帯飾金具	2.0	2.3	0.65	0.2	2	4.32	
620	第120図	PL.54	F64-02	E	鋲留金具	4.05	2.3	0.7	0.5	3	12.22	
621	第120図	PL.54	F64-03	E	鋲留金具	(2.9)	2.2	0.8	0.6	(1)［3］	6.32	
622	第120図	PL.54	F67-30	A	雲珠？	(1.4)	1.5	0.5	0.15		1.44	

鉸具

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	出土エリア	長さ(cm)	基部幅(cm)	尻幅(cm)	最小幅(cm)	重量(g)	備考
623	第120図	PL.54	F67-06	A	6.5	3.5	3.9	3.2	14.16	
624	第120図	PL.54	F67-05	A	6.05	(2.9)［3.5］	［3.8］	［3.2］	8.57	
625	第120図	PL.54	F82	D	(3.9)	2.5	［2.9］	2.2	3.36	
626	第120図	PL.54	F43	E	4.9	2.5	［2.9］	2.2	4.30	

中原第５号墳　出土遺物観察表

・農工具

刀子

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	部位	全長(cm)	刀部（cm）			茎部（cm）			重量(g)	備考
						長	幅	厚	長	幅	厚		
1	第 131 図	PL.59	F01	刀身～茎	(12.2)	9.2	1.1	0.3	(3.0)	0.7	－	7.02	

・武器

鉄鏃

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	形式（部位）	全長(cm)	鏃身部（cm）			頸部（cm）			茎部（cm）			重量(g)	備考
						長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚		
2	第 131 図	PL.59	F02	茎部	(5.6)	－	－	－	－	－	－	(5.6)	0.3	0.3	1.94	

・土器

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	層位	種別	器種	残存率	口径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	内面色調	外面色調	備考
3	第 131 図	PL.59	R-2	不明	須恵器	坏蓋	(25%)	［14.6］	－	－	2.5 Y 6/1（黄灰）	2.5Y6/1（黄灰）	
4	第 131 図	PL.59	P-1	石室内	須恵器	壺	(30%)	－	［11.0］	－	2.5 Y 7/1（灰白）	2.5Y6/1（灰白）	
5	第 131 図	PL.59	P-1	石室内	土師器	坏	(25%)	－	－	－	7.5YR6/1（褐灰）	7.5YR6/1（褐灰）	

中原第６号墳　出土遺物観察表

・土器

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	層位	種別	器種	残存率	口径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	内面色調	外面色調	備考
1	第136図	PL.62	R-3	石室外	須恵器	甕	(30%)	[29.8]	－	(19.9)	2.5Y6/2（灰黄）	2.5Y6/2（灰黄）	5・6号墳接合
2	第136図	PL.62	R-2,P-10	石室外	須恵器	甕	(40%)	－	－	(5.6)	2.5Y6/2（灰黄）	2.5Y6/2（灰黄）	
3	第136図	PL.62	P-11	石室外	須恵器	底部	(60%)	－	－	(4.2)	2.5Y6/1（黄灰）	2.5Y6/1（黄灰）	
86	第145図	PL.62	P-2.4.3.6.8,R-2	石室内	須恵器	壺	(40%)	[16.7]	－	(6.8)	2.5Y7/1（灰白）	2.5Y7/2（黄灰）	

・武器

大刀

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	部位	全長（cm）	刀身部		茎部			重量（g）	備考
						長（cm）	幅（cm）	長（cm）	幅（cm）	茎尻		
4	第141図	PL.61	F15	刀身片	(5.8)	(5.8)	(2.2)	－	－	－	27.68	
5	第141図	PL.61	F01	鏃	長軸3.3　短軸2.3		－	－	－	－	13.91	

鉄鏃

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	形式（部位）	全長(cm)	鏃身部（cm）			頸部（cm）			茎部（cm）			重量(g)	備考
						長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚		
6	第142図	PL.61	F13-01	尖根柳葉式	(12.5)	2.0	1.25	0.2	9.5	0.5	0.35		0.5	0.35	6.51	
7	第142図	PL.61	F16	尖根片刃箭式	(4.0)	(1.4)	0.8	0.15	(2.6)	0.7	0.2	－	－	－	2.13	
8	第142図	PL.61	F43	尖根三角形式	(9.1)	2.5	(1.3)［1.4］	0.15	6.2	0.55	0.3	(0.4)	0.5	0.45	7.32	
9	第142図	PL.61	F27	尖根三角形式	(3.0)	(2.3)	(1.6)	0.2	(0.7)	0.55	0.3	－	－	－	2.53	
10	第142図	PL.61	F40-01	鏃身～頸部	(2.9)	(0.4)	－	－	(2.5)	0.4	0.25	－	－	－	0.85	
11	第142図	PL.61	F14-01	尖根五角形式	(10.4)	1.9	(1.5)	0.1	(8.5)	0.45	0.35	－	－	－	4.66	
12	第142図	PL.61	F17	尖根鑿箭式	(5.9)	0.5	1.1	0.15	(4.8)	0.45	0.3	－	－	－	2.54	
13	第142図	PL.61	F26	尖根鑿箭式	(3.0)	0.4	(0.7)	0.15	(2.6)	0.45	0.35	－	－	－	1.25	
14	第142図	PL.61	F60	尖根鑿箭式	(2.7)	(0.3)	0.65	0.15	(2.4)	0.4	0.25	－	－	－	0.76	
15	第142図	PL.61	F69-02	頸部～茎部	(7.1)	－	－	－	(5.2)	0.55	0.4	(1.9)	0.45	0.4	5.09	
16	第142図	PL.61	F11	頸部～茎部	(7.1)	－	－	－	(6.2)	0.5	0.4	(0.9)	0.3	0.4	4.05	
17	第142図	PL.61	F59	頸部	(6.7)	－	－	－	(6.4)	0.4	0.3	－	－	－	3.48	
18	第142図	PL.61	F32-02	頸部～茎部	(6.3)	－	－	－	(5.0)	0.5	0.3	1.3	0.45	0.35	4.20	
19	第142図	PL.61	F63	頸部～茎部	(5.7)	－	－	－	(3.4)	0.45	0.35	(2.3)	0.4	0.35	3.18	
20	第142図	PL.61	F70-02	頸部～茎部	(5.2)	－	－	－	(1.5)	0.5	0.35	(3.7)	0.35	0.3	3.07	
21	第142図	PL.61	F62	頸部～茎部	(4.5)	－	－	－	(2.5)	0.5	0.3	(2.0)	0.4	0.3	2.28	
22	第142図	PL.61	F68-04	頸部～茎部	(3.9)	－	－	－	(1.9)	0.55	0.35	(2.0)	0.4	0.3	3.05	
23	第142図	PL.61	F61	頸部～茎部	(3.3)	－	－	－	(0.4)	0.55	0.4	(2.9)	0.45	0.4	1.89	
24	第142図	PL.61	F22-01	頸部～茎部	(3.4)	－	－	－	(1.5)	0.5	0.3	(1.9)	0.4	0.3	2.12	
25	第142図	PL.61	F23	頸部～茎部	(3.6)	－	－	－	(2.6)	0.5	0.3		0.4	0.3	1.58	
26	第142図	PL.61	F35	頸部～茎部	(2.8)	－	－	－	(2.2)	0.4	0.3	(0.6)	0.4	0.3	0.95	
27	第142図	PL.61	F51	頸部～茎部)	(3.0)	－	－	－	(0.7)	0.5	0.4	(2.3)	0.4	0.35	1.15	
28	第142図	PL.61	F07	頸部～茎部	(3.2)	－	－	－	(1.4)	0.45	0.4	(1.8)	0.35	0.3	2.28	
29	第142図	PL.61	F68-12	頸部～茎部	(3.0)	－	－	－	(1.3)	0.5	0.35	(1.7)	0.35	0.25	1.10	
30	第142図	PL.61	F14-02	頸部～茎部	(2.2)	－	－	－	(1.5)	0.45	0.4	(0.7)	0.35	0.3	1.01	
31	第142図	PL.61	F37	頸部	(6.6)	－	－	－	(6.6)	0.4	0.3	－	－	－	2.16	
32	第142図	PL.61	F19	頸部	(5.1)	－	－	－	(5.1)	0.45	0.3	－	－	－	2.10	
33	第142図	PL.61	F30	頸部	(4.7)	－	－	－	(4.7)	0.4	0.3	－	－	－	1.86	
34	第142図	PL.61	F28	頸部	(5.1)	－	－	－	(5.1)	0.4	0.35	－	－	－	2.22	
35	第142図	PL.61	F03-01	茎部	(4.2)	－	－	－	－	－	－	(4.2)	0.35	0.3	2.07	
36	第142図	PL.61	F70-01	頸部	(4.1)	－	－	－	(4.1)	0.45	0.35	－	－	－	2.51	
37	第142図	PL.61	F68-05	頸部	(4.2)	－	－	－	(4.2)	0.45	0.3	－	－	－	1.33	
38	第142図	PL.61	F05-01	茎部	(3.7)	－	－	－	－	－	－	(3.7)	0.45	0.4	1.72	
39	第142図	PL.61	F68-02	頸部	(3.3)	－	－	－	(3.3)	0.5	0.35	－	－	－	1.80	
40	第142図	PL.61	F20	頸部	(3.2)	－	－	－	(3.2)	0.4	0.35	－	－	－	1.48	
41	第142図	PL.61	F69-01	頸部	(3.1)	－	－	－	(3.1)	0.4	0.35	－	－	－	1.25	
42	第142図	PL.61	F68-03	頸部	(3.1)	－	－	－	(3.1)	0.45	0.3	－	－	－	1.10	
43	第142図	PL.61	F68-06	茎部	(2.8)	－	－	－	－	－	－	(2.8)	0.4	0.25	1.28	
44	第142図	PL.61	F39-02	茎部	(3.3)	－	－	－	－	－	－	(3.3)	0.4	0.25	0.87	
45	第142図	PL.61	F68-11	茎部	(3.2)	－	－	－	－	－	－	(3.2)	0.45	0.4	1.19	
46	第142図	PL.61	F54	茎部	(2.9)	－	－	－	－	－	－	(2.9)	0.35	0.3	0.84	
47	第142図	PL.61	F12	茎部	(2.8)	－	－	－	－	－	－	(2.8)	0.4	0.35	1.40	
48	第142図	PL.61	F32-01	茎部	(2.5)	－	－	－	－	－	－	(2.5)	0.3	0.3	0.76	
49	第142図	PL.61	F53	頸部	(2.4)	－	－	－	(2.4)	0.35	0.35	－	－	－	1.06	
50	第142図	PL.61	F25	頸部	(2.5)	－	－	－	(2.5)	0.45	0.4	－	－	－	1.35	
51	第142図	PL.61	F18-01	茎部	(2.4)	－	－	－	—	—	—	(2.4)	0.4	0.3	1.49	
52	第142図	PL.61	F29-01	頸部	(2.0)	－	－	－	(2.0)	0.4	0.35	－	－	－	0.98	
53	第142図	PL.61	F66-01	茎部	(2.1)	－	－	－	－	－	－	(2.1)	0.4	0.3	0.74	

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	形式（部位）	全長(cm)	鏃身部（cm）			頸部（cm）			茎部（cm）			重量(g)	備考
						長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚		
54	第142図	PL.61	F31	茎部	(2.0)	−	−	−	−	−	−	(2.0)	0.4	0.3	0.55	
55	第142図	PL.61	F64	茎部	(1.8)	−	−	−	−	−	−	(1.8)	0.4	0.4	0.86	
56	第142図	PL.61	F68-10	頸部	(1.7)	−	−	−	(1.7)	0.45	0.3	−	−	−	0.61	
57	第142図	PL.61	F68-09	茎部	(1.6)	−	−	−	−	−	−	(1.6)	0.4	0.3	0.66	
58	第142図	PL.61	F22-02	茎部	(1.4)	−	−	−	−	−	−	(1.4)	0.3	0.3	0.53	
59	第142図	PL.61	F49	茎部	(1.3)	−	−	−	−	−	−	(1.3)	0.3	0.3	0.40	
60	第142図	PL.61	F47	頸部	(1.5)	−	−	−	(1.5)	0.6	0.35	−	−	−	0.61	
61	第142図	PL.61	F18-02	頸部	(1.6)	−	−	−	(1.6)	0.45	0.35	−	−	−	0.98	
62	第142図	PL.61	F02	頸部	(2.1)	−	−	−	(2.1)	0.45	0.25	−	−	−	0.92	
63	第142図	PL.61	F68-07	頸部	(1.9)	−	−	−	(1.9)	0.7	0.5	−	−	−	0.95	
64	第142図	PL.61	F03-03	頸部	(1.8)	−	−	−	(1.8)	0.6	0.5	−	−	−	1.17	
65	第142図	PL.61	F06	頸部	(1.4)	−	−	−	(1.4)	0.4	0.15	−	−	−	0.66	
66	第142図	PL.61	F69-03	茎部	(2.0)	−	−	−	−	−	−	(2.0)	0.35	0.35	0.91	
67	第142図	PL.61	F13-02	茎部	(2.1)	−	−	−	−	−	−	(2.1)	0.25	0.25	0.82	
68	第142図	PL.61	F67	茎部	(1.7)	−	−	−	−	−	−	(1.7)	0.25	0.25	0.58	
69	第142図	PL.61	F65	茎部	(1.6)	−	−	−	−	−	−	(1.6)	0.3	0.3	0.53	
70	第142図	PL.61	F72	茎部	(3.9)	−	−	−	−	−	−	(3.9)	0.3	0.3	1.56	
71	第142図	PL.61	F05-02	茎部	(2.5)	−	−	−	−	−	−	(2.5)	0.35	0.3	0.70	
72	第142図	PL.61	F24	茎部	(2.5)	−	−	−	−	−	−	(2.5)	0.3	0.25	0.83	
73	第142図	PL.61	F29-02	茎部	(2.5)	−	−	−	−	−	−	(2.5)	0.35	0.3	0.87	
74	第142図	PL.61	F03-02	茎部	(1.8)	−	−	−	−	−	−	(1.8)	0.25	0.25	0.48	
75	第142図	PL.61	F56	茎部	(1.4)	−	−	−	−	−	−	(1.4)	0.25	0.2	0.24	
76	第142図	PL.61	F39-03	茎部	(1.7)	−	−	−	−	−	−	(1.7)	0.25	0.25	0.36	

・農工具

刀子

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	部位	全長(cm)	刀（身）部（cm）			茎部・身部（cm）			重量(g)	備考
						長	幅	厚	長	幅	厚		
77	第143図	PL.62	F68-01	茎	(3.1)	−	−	−	(3.1)	0.9	0.3	1.87	
78	第143図	PL.62	F39-01	茎	(3.1)	−	−	−	(3.1)	0.8	0.2	1.17	
79	第143図	PL.62	F21	刀身	(2.1)	(2.1)	(1.2)	0.3	−	−	−	1.42	
80	第143図	PL.62	F69-04	茎	(3.0)	−	−	−	(3.0)	0.9	0.3	1.96	
81	第143図	PL.62	F68-08	茎	(2.8)	−	−	−	(2.8)	1.2	0.3	2.80	
82	第143図	PL.62	F70-06	刀身	(2.3)	(2.3)	(1.05)	(0.05)	−	−	−	0.98	

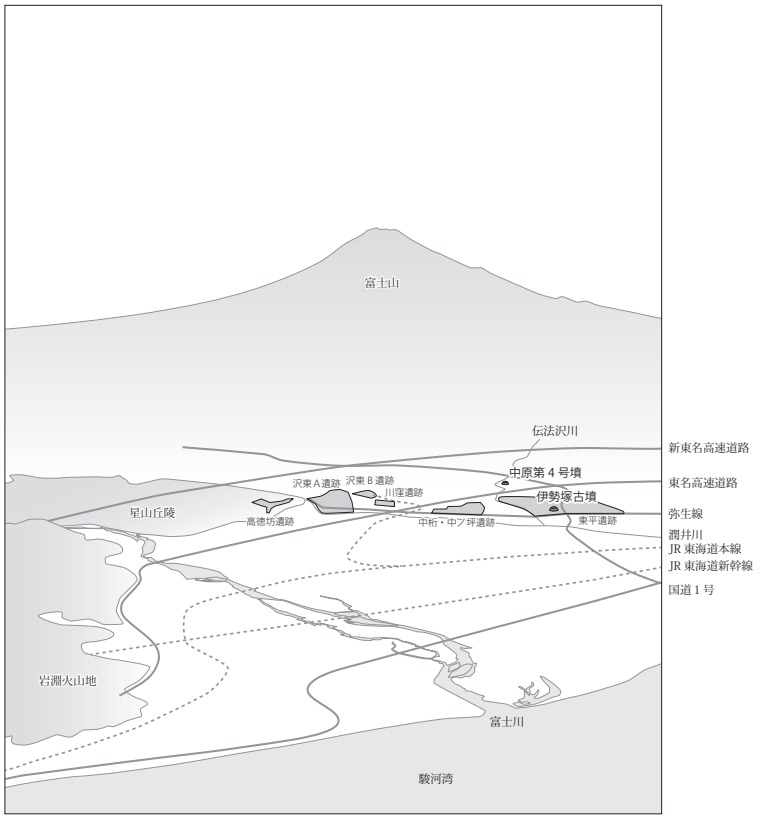
・馬具

帯飾金具・鉸具

報告書番号	挿図番号	図版番号	取上げ番号	部位	長さ(cm)	幅(cm)	基部幅(cm)	尻幅(cm)	最小幅(cm)	重量(g)	備考
83	第144図	PL.62	F10	帯飾金具	(3.65)	3.1	−	−	−	5.80	
84	第144図	PL.62	F09	帯飾金具	(2.8)	(2.6)	−	−	−	2.41	
85	第144図	PL.62	F08	鉸具	9.0	−	2.0	4.8	2.0	49.21	

写 真 図 版

PLATE



扉写真

左上　中原第４号墳遺物出土状況
（奥壁側から開口部をのぞむ）

中原第４号墳は未盗掘の横穴式石室と考えられ、豊富な副葬品が出土している。遺物出土状況や人骨の検出状況から合計３回の埋葬があったと考えられているが、床面は区別できない。

石室は玄室床面が横口部床面よりも一段低くなる「段構造」を呈する。

右下　駿河湾上空から望む伝法 中原古墳群

伝法古墳群に含まれる中原第４号墳は富士山南麓の緩斜面上に立地している。古墳群は５世紀末頃の伊勢塚古墳を盟主墳として造墓活動が開始され、一部では８世紀まで継続する。

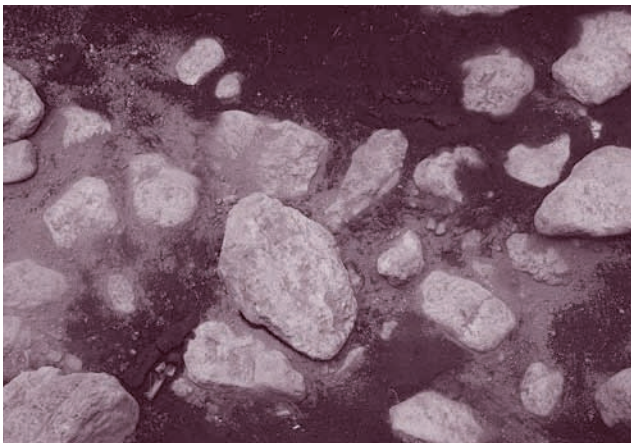
潤井川沿いでは伊勢塚古墳の築造と合わせるように沢東Ａ遺跡を始めとした集落活動が活発化し、奈良時代には東平遺跡には富士郡家が形成される。

1．石室第２次床面全景（南から）

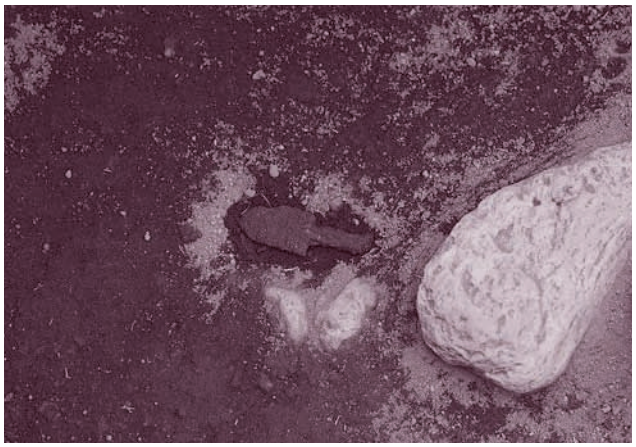
PL.2　中原第３号墳　調査

1．調査地全景（調査前、北から）

2．検出状況（北から）



3．第２次床面鉄製品（23・25・81・107）出土状況



4．第２次床面鉄製品（13）出土状況

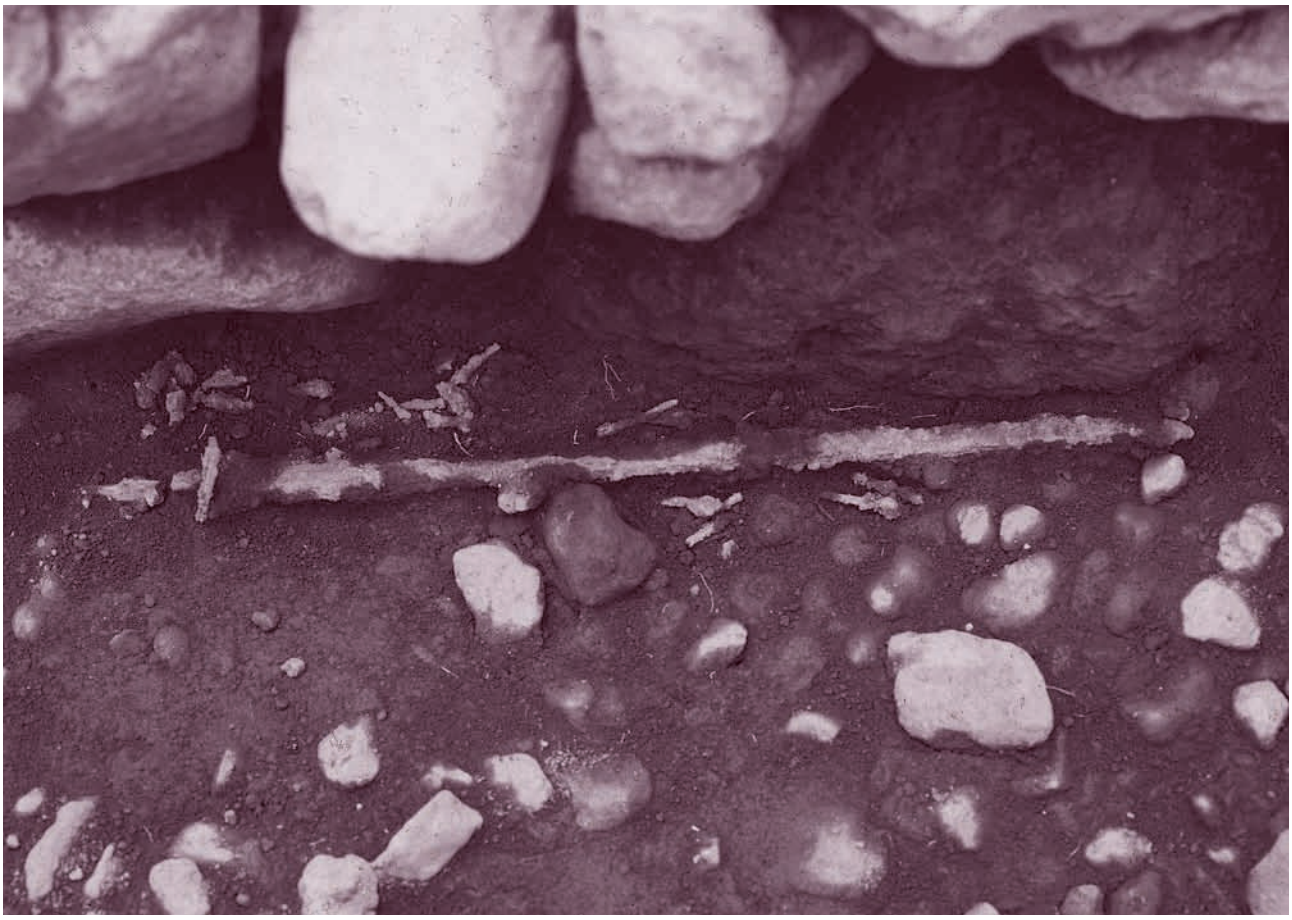
5．周溝・石室検出状況（南から）

1．石室封鎖部（北から）

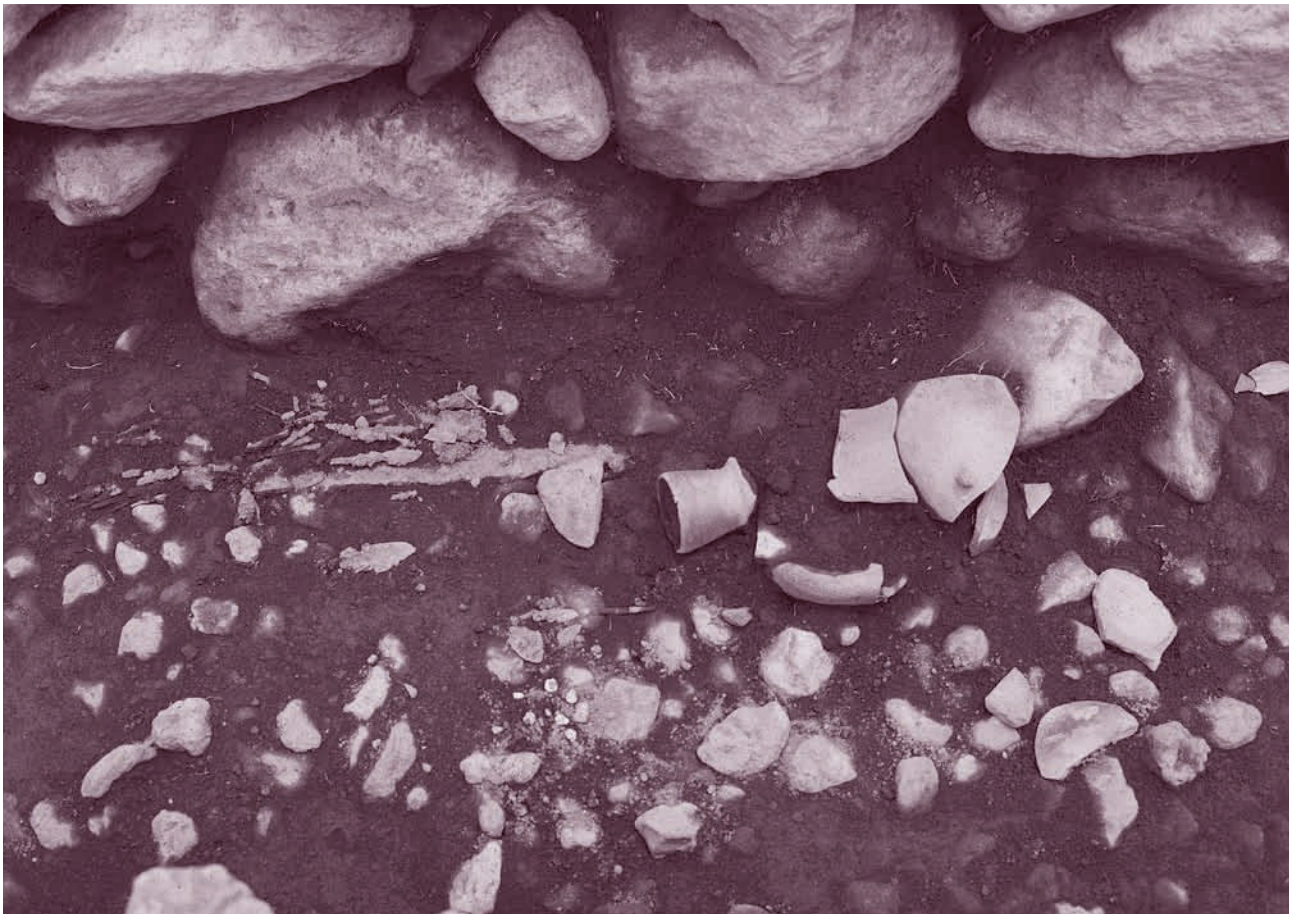
2．石室封鎖部

PL.4　中原第３号墳　調査

1．第１次床面（南から）



1．第１次床面中央右側壁寄り（C エリア）大刀（9）他遺物出土状況



2．第１次床面中央左側壁寄り（D エリア）小刀（10）、提瓶（108）他遺物出土状況

PL.6　中原第３号墳　調査

1．石室左（東）側壁（南から）

2．石室右（西）側壁（南から）

1．基底石

2．奥壁（南西から）

3．前壁（北から）

4．周溝と墓坑（南から）

PL.8　中原第３号墳　遺物

3

4

1

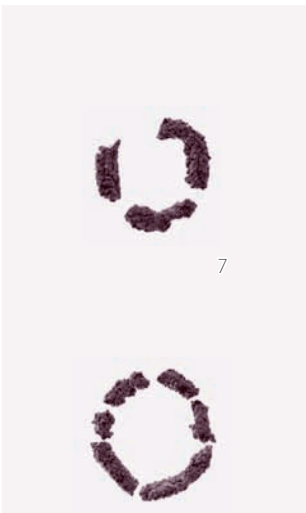
5

6

2

108

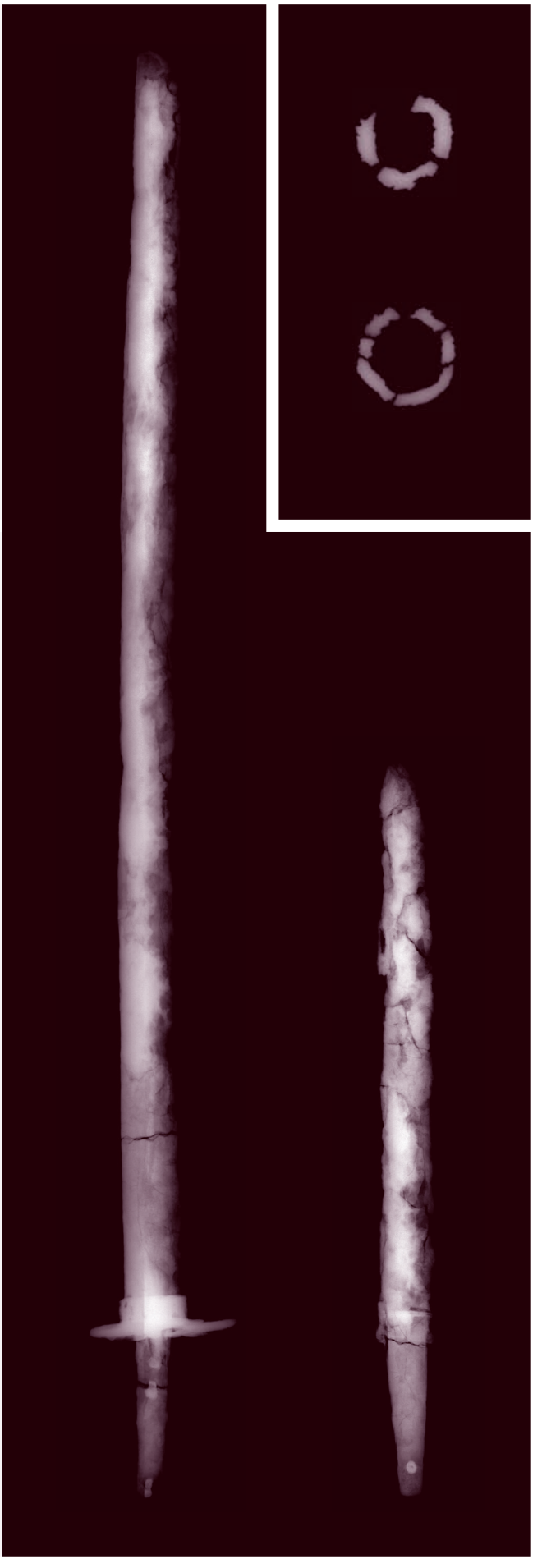
9



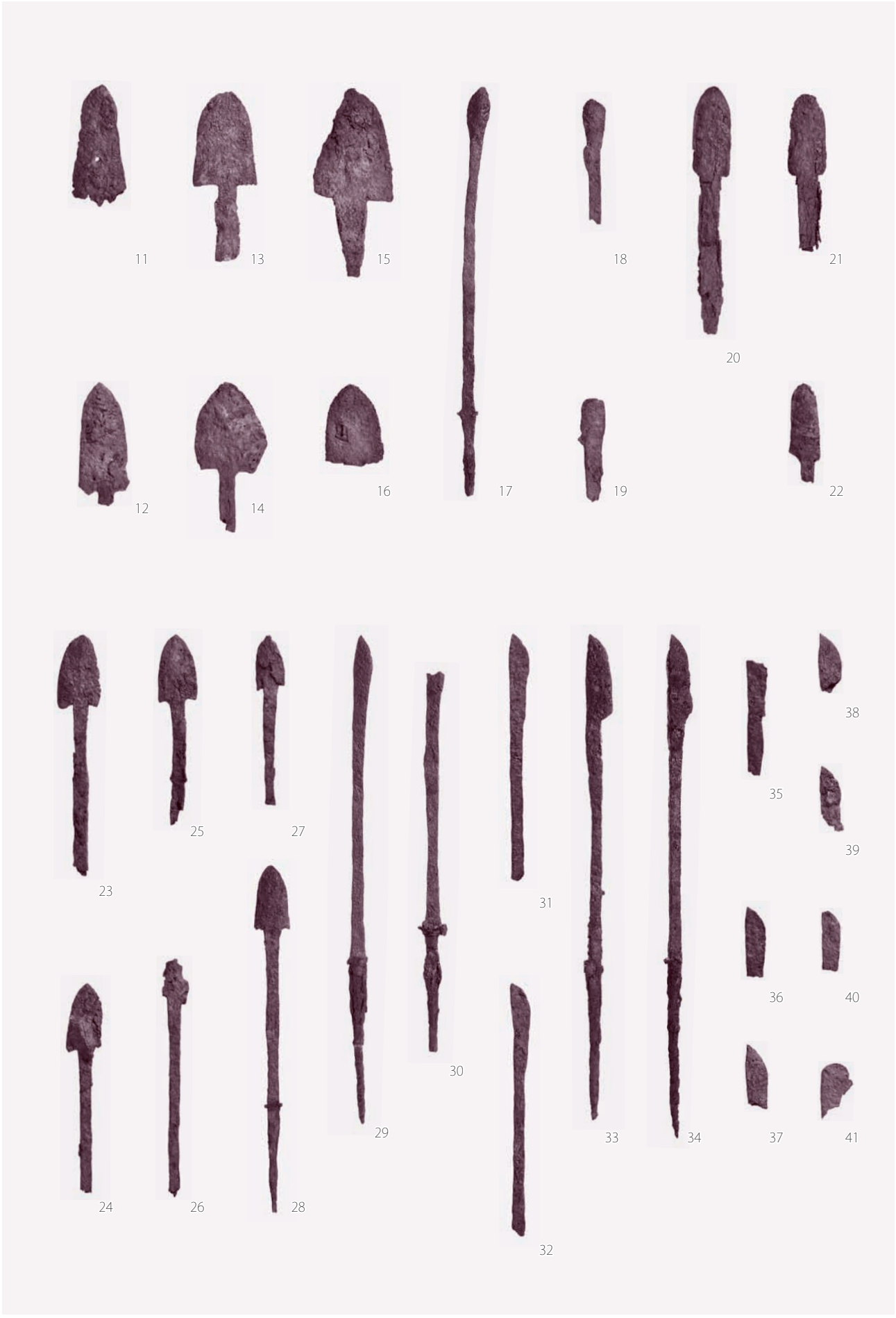
7

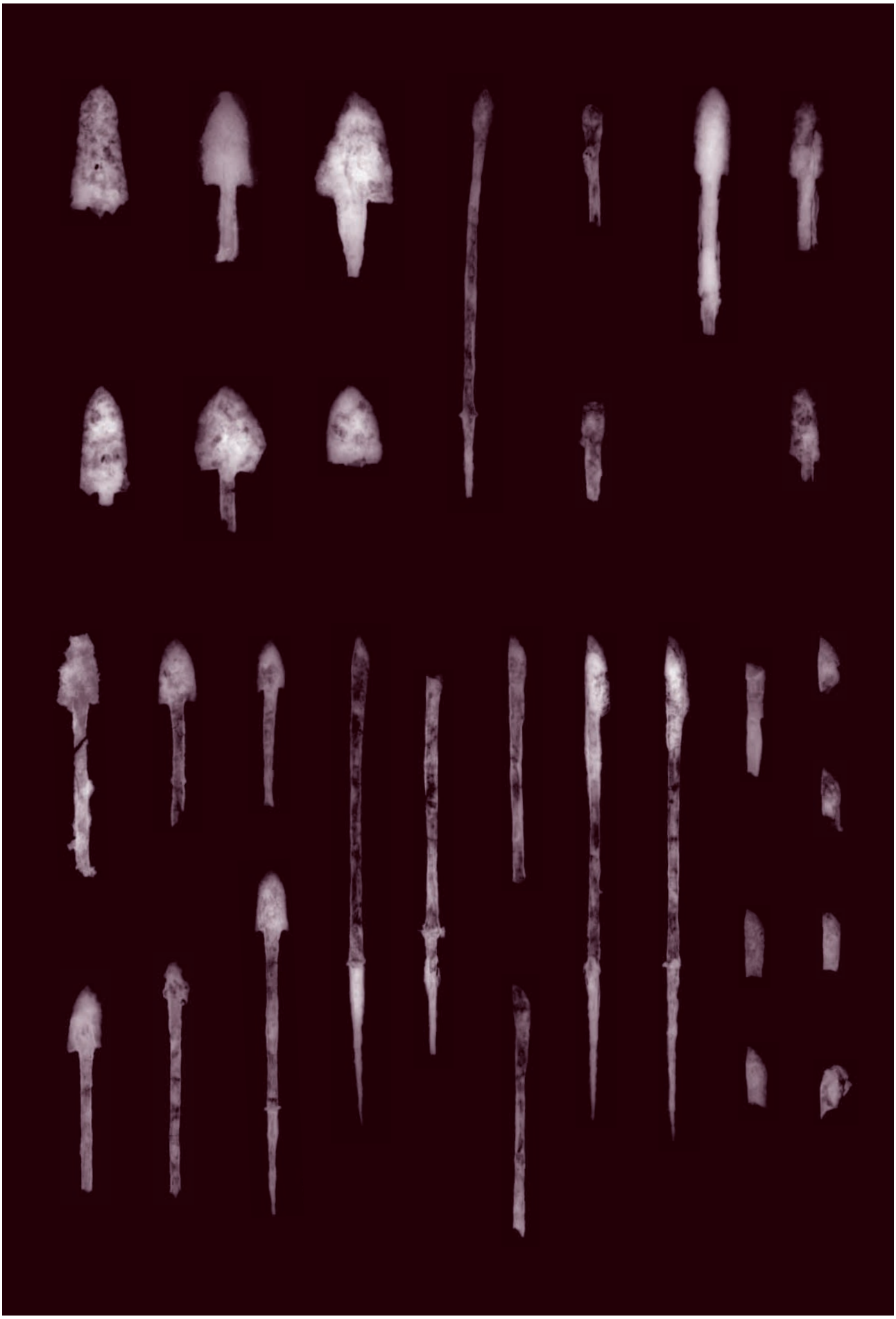
8

10

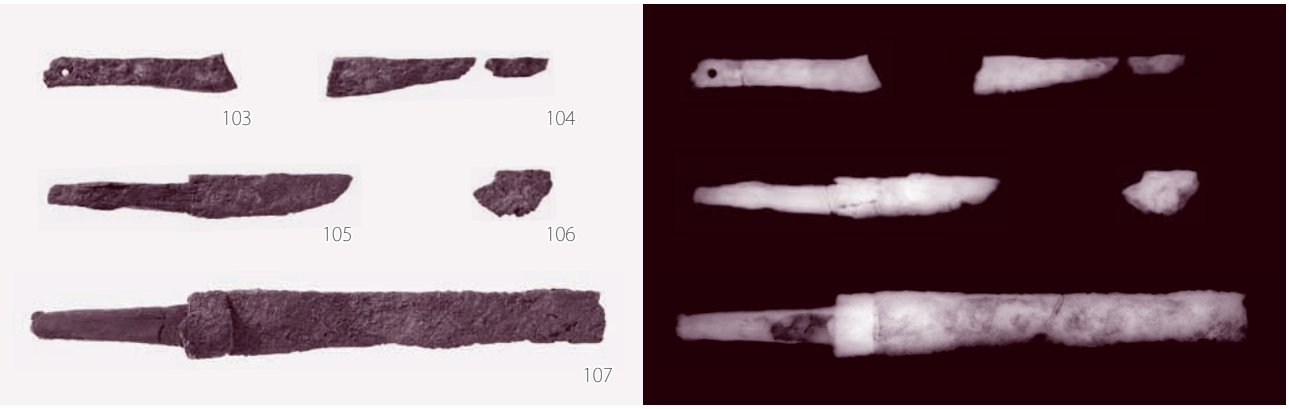


PL.10 中原第３号墳　遺物



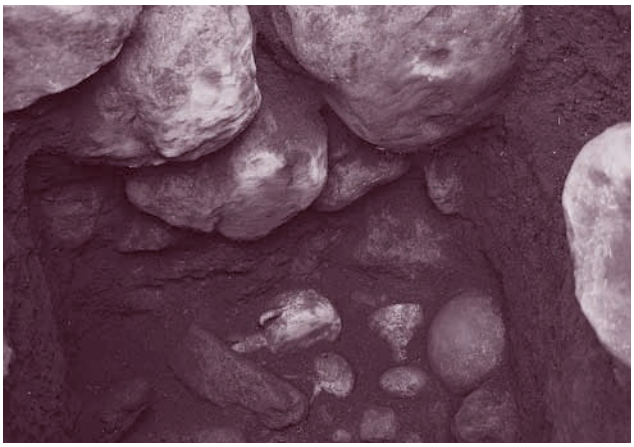


PL.12 中原第３号墳　遺物



1．確認調査の様子（5Tr、東から）

2．石室検出状況（5Tr、東から）



3．確認調査　須恵器出土状況

4．本調査風景（北から）

5．周溝・石室検出状況（南から）

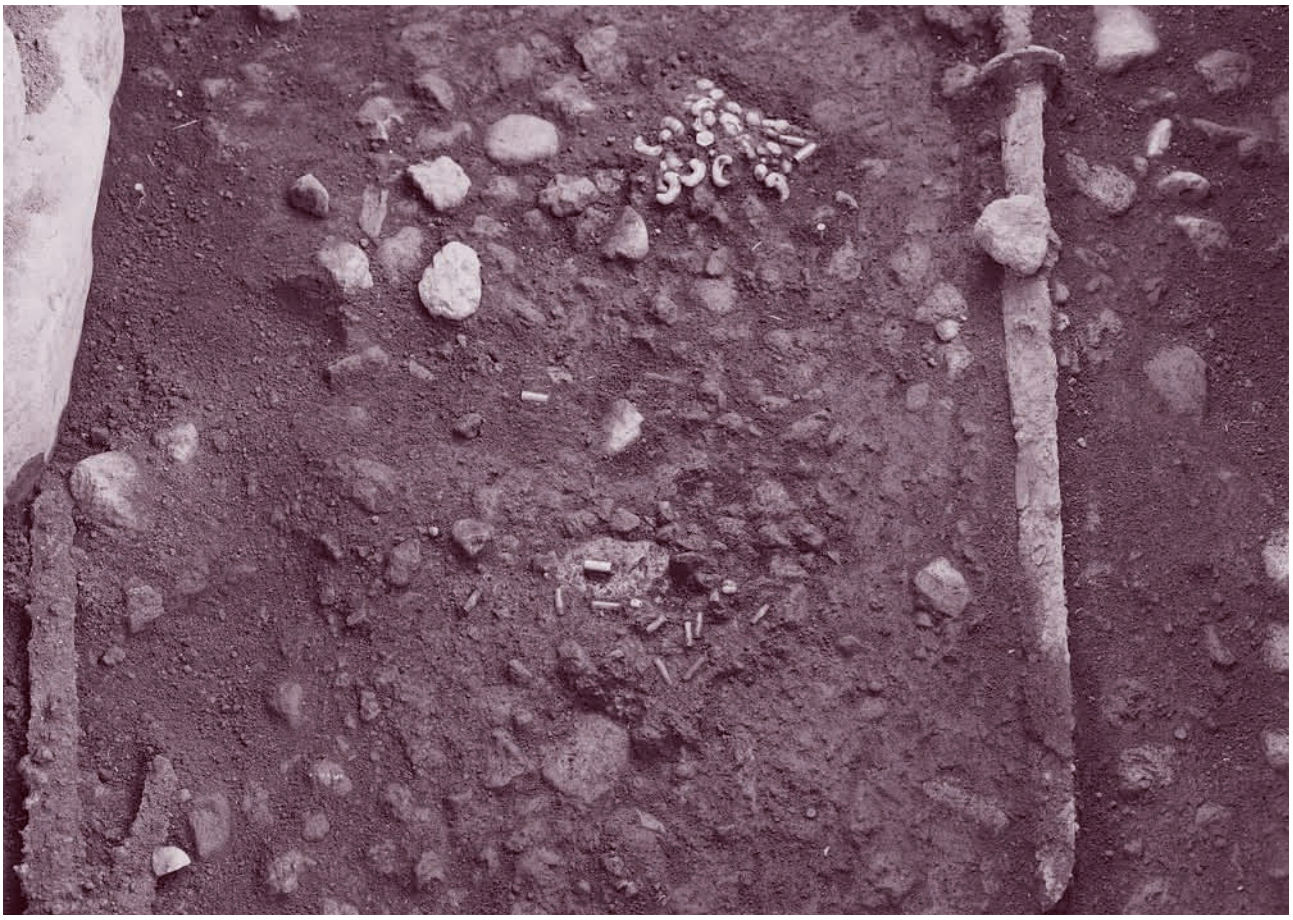
PL.14　中原第４号墳　調査

1．石室床面遺物出土状況（南から）

1．石室床面中央から奥壁側（A・B・C エリア）遺物出土状況（南から）

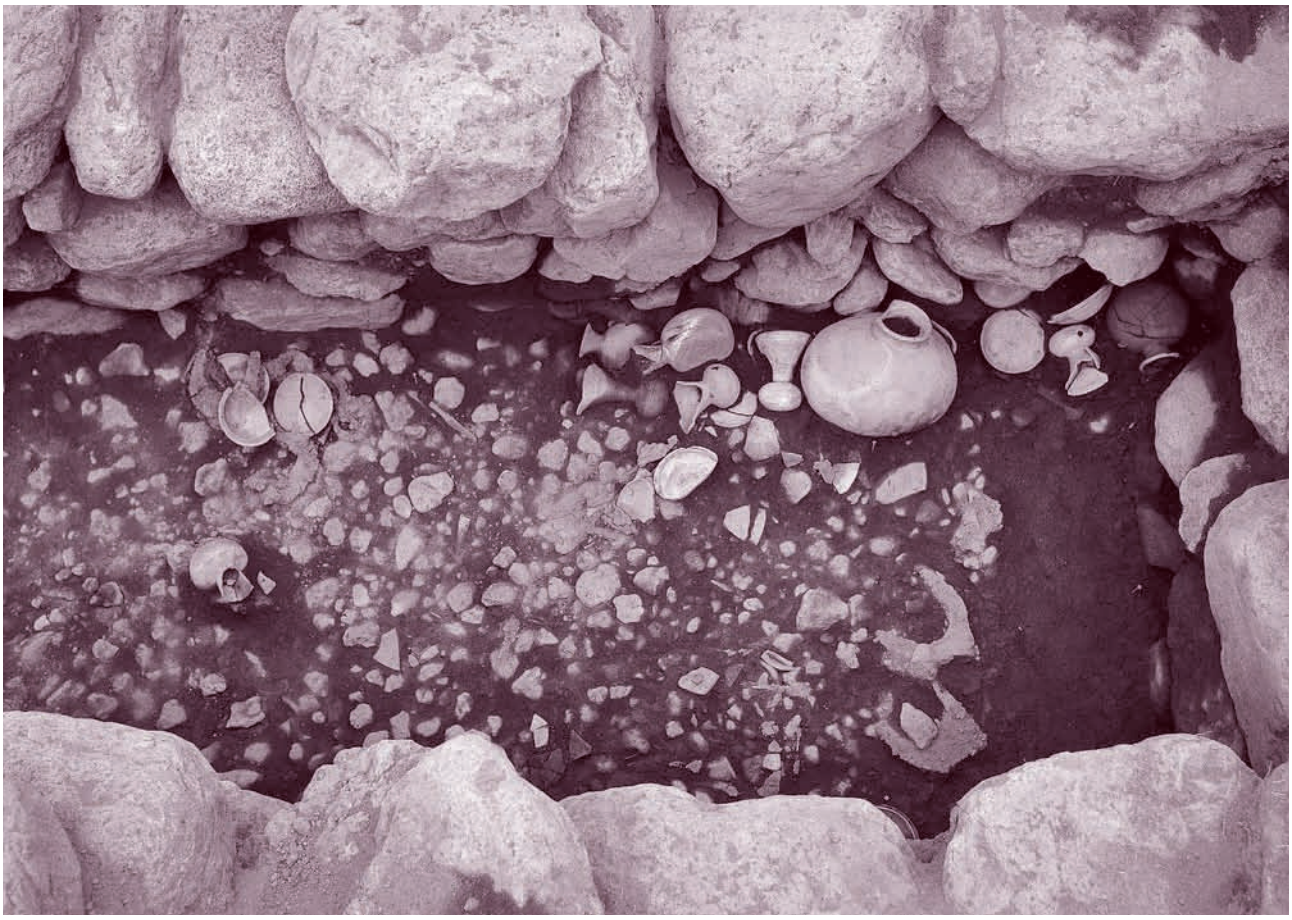
2．石室床面奥壁前（A エリア）遺物出土状況（南から）

PL.16 中原第４号墳　調査



1．石室床面中央やや奥壁寄り（B エリア）大刀（418）、玉類出土状況（南から）

2．石室床面中央右側壁寄り（C エリア）大刀（419）、剣（421）他遺物出土状況（東から）



1．石室床面中央より開口部側（D・E・F エリア）遺物出土状況（須恵器横瓶 655 除去後）

2．石室床面中央やや開口部寄り（D エリア）遺物出土状況（西から）

PL.18 中原第４号墳　調査

1．石室床面開口部左側壁寄り（E エリア）遺物出土状況（西から）

2．石室床面開口部右側壁寄り（F エリア）須恵器横瓶（655）出土状況

1．床面全景（遺物取り上げ後、南から）

PL.20 中原第４号墳　調査

1．石室右（西）側壁（南から）

2．石室左（東）側壁（南から）

1．石室封鎖部（上から）

2．石室封鎖部（石室内から）

3．石室全景（床石・封鎖石除去後、南から）

4．前壁（3 段、石室内から）

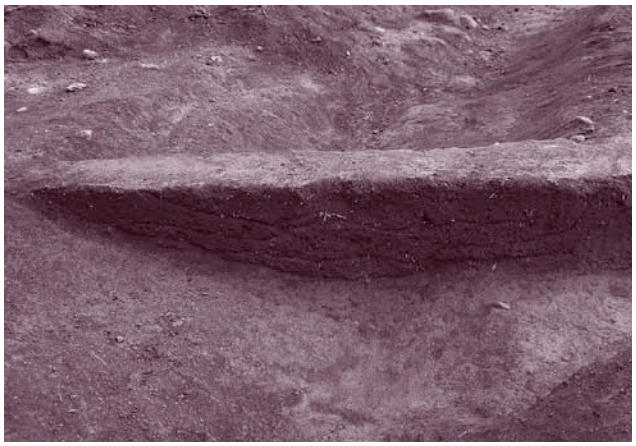
5．前壁（2 段、上から）

6．前壁（1 段、上から）

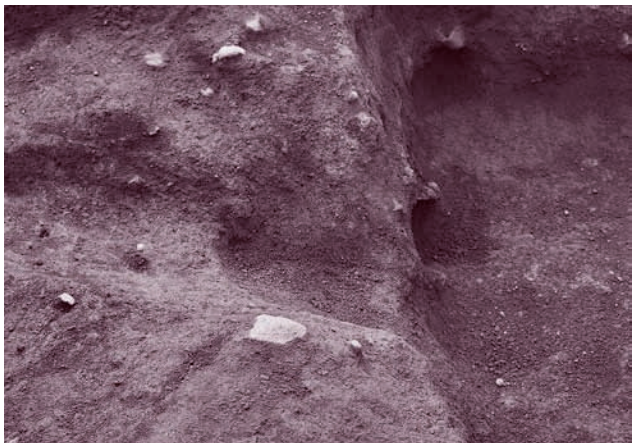
7．奥壁（南から）

PL.22 中原第４号墳　調査

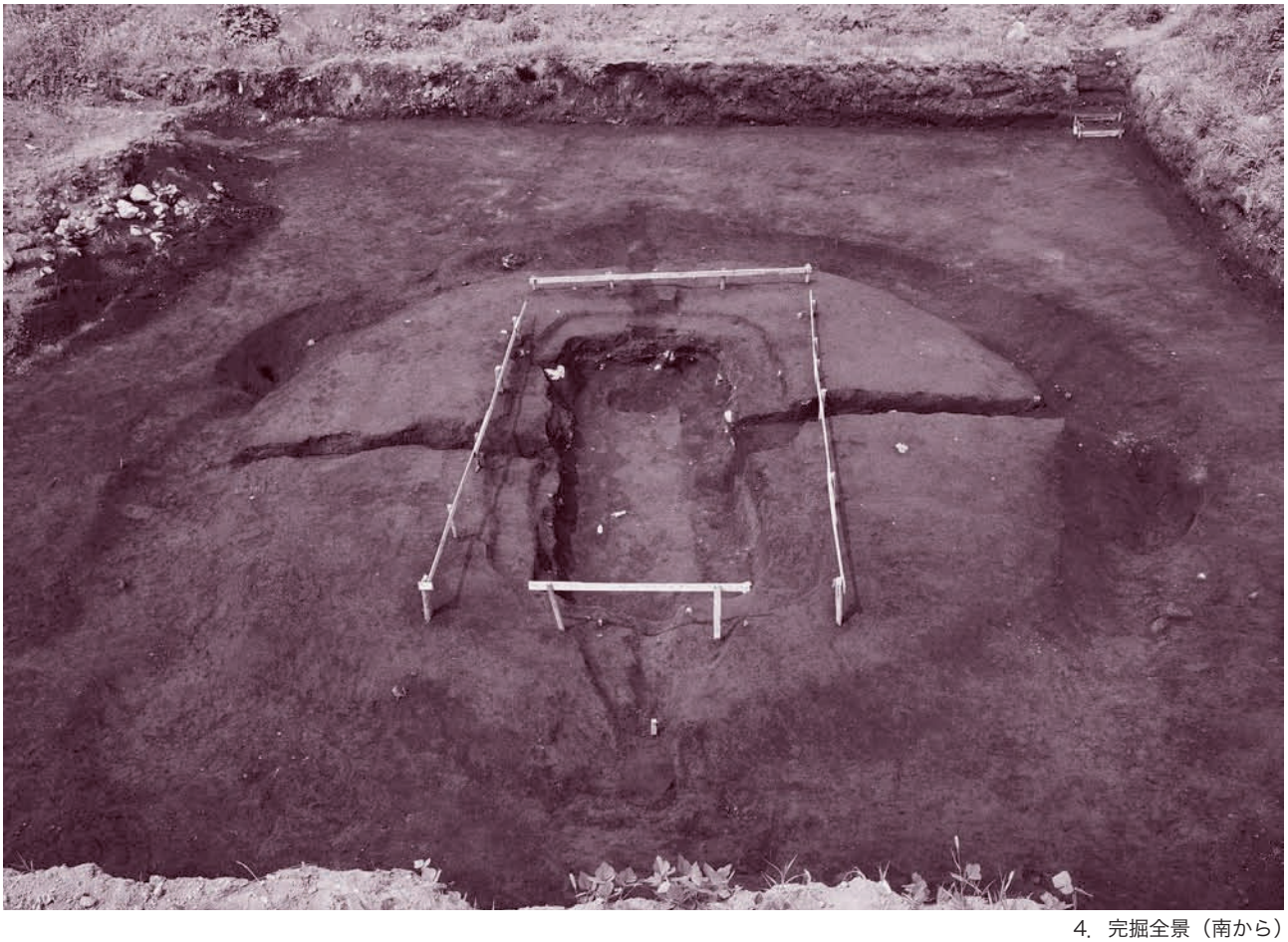
1．基底石（南から）



2．周溝東側土層 D － D’（北から）



3．石室開口部部分掘り方（東から）



4．完掘全景（南から）

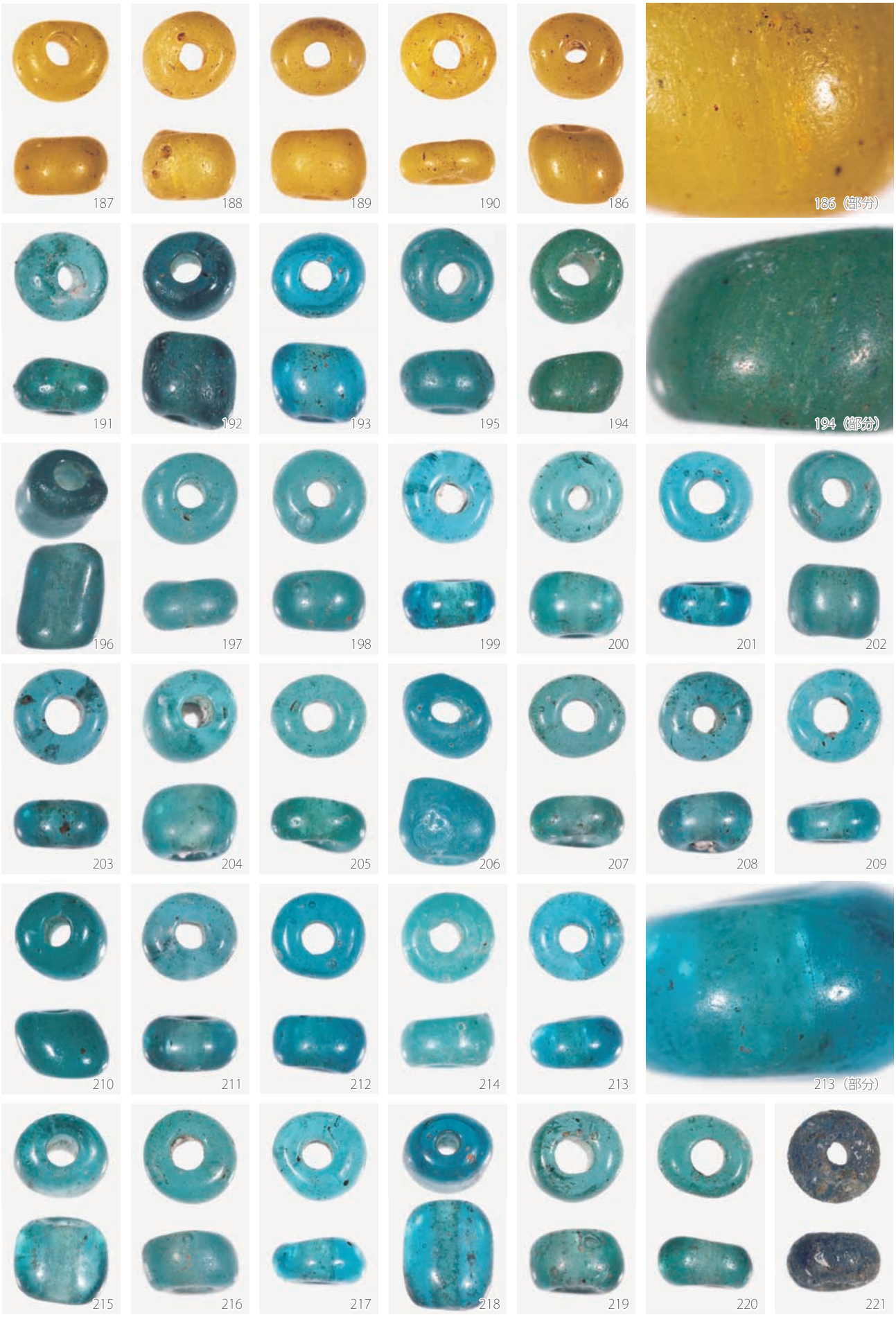
1

2

3

4
5
9
6
10
12
7
11
15
14
13
8

PL.24 中原第４号墳　遺物


187
188
189
190
186
186（部分）
191
192
193
195
194
194（部分）
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
214
213
213（部分）
215
216
217
218
219
220
221

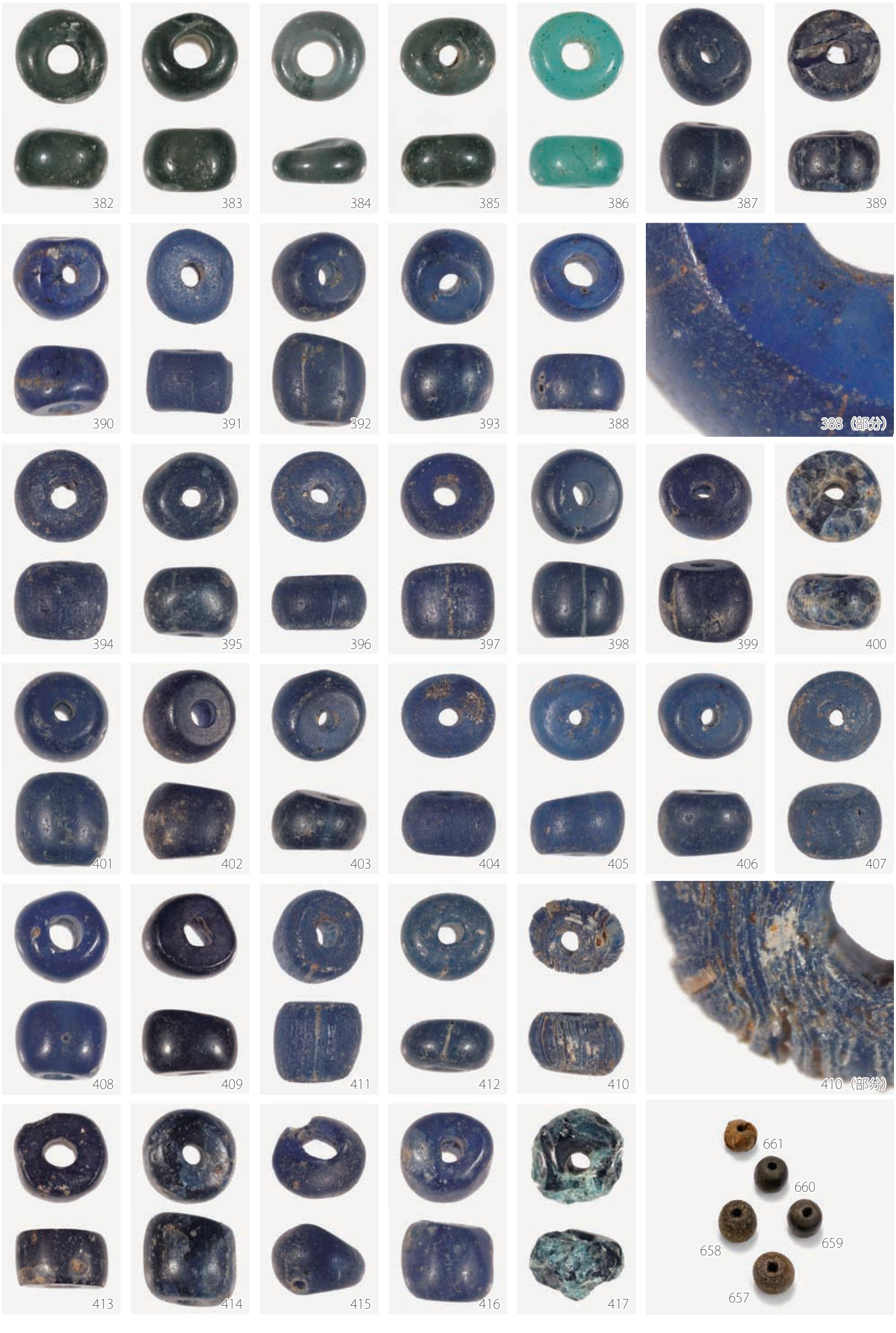
PL.26 中原第４号墳　遺物

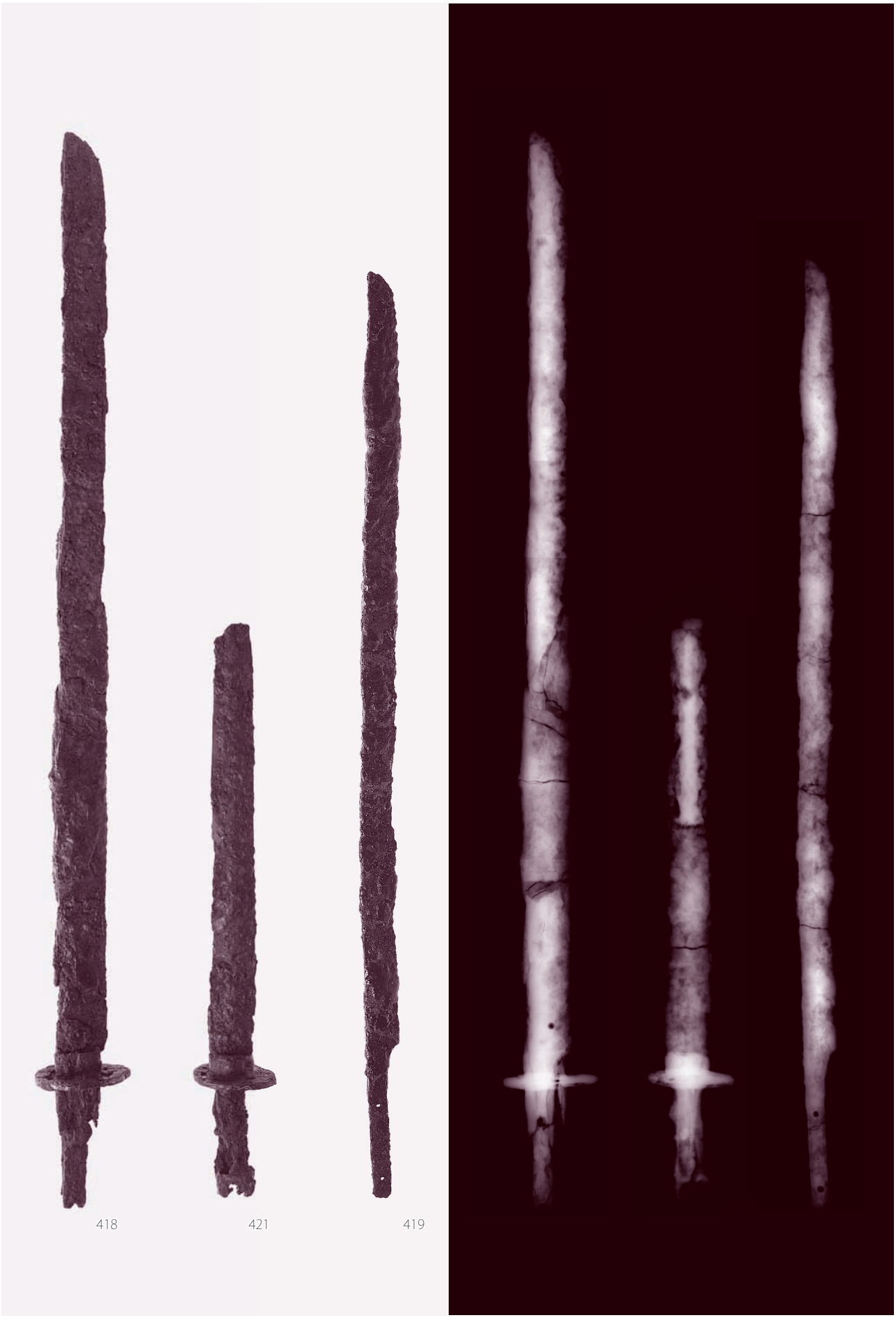
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
284
285
286
288
283
283（部分）
289
290
291
292
287
287（部分）
293
294
296
297
295
295（部分）

PL.28 中原第４号墳　遺物

339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
381

PL.30 中原第４号墳　遺物





418　421　419

PL.32　中原第４号墳　遺物

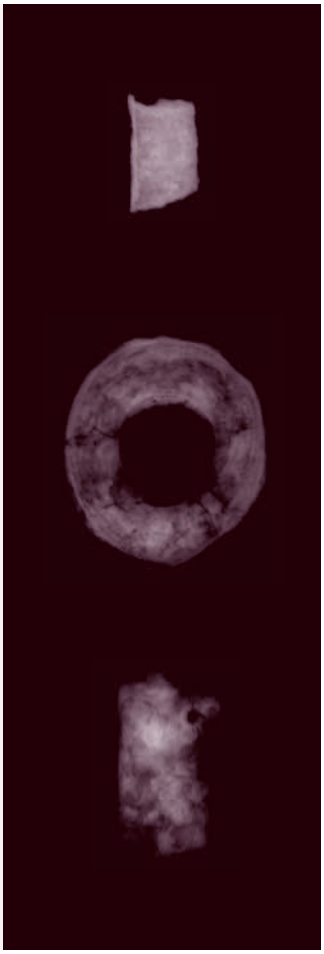
418（部分）

418（部分）

419（鏃）

419（鍔）

420



421（部分）

422

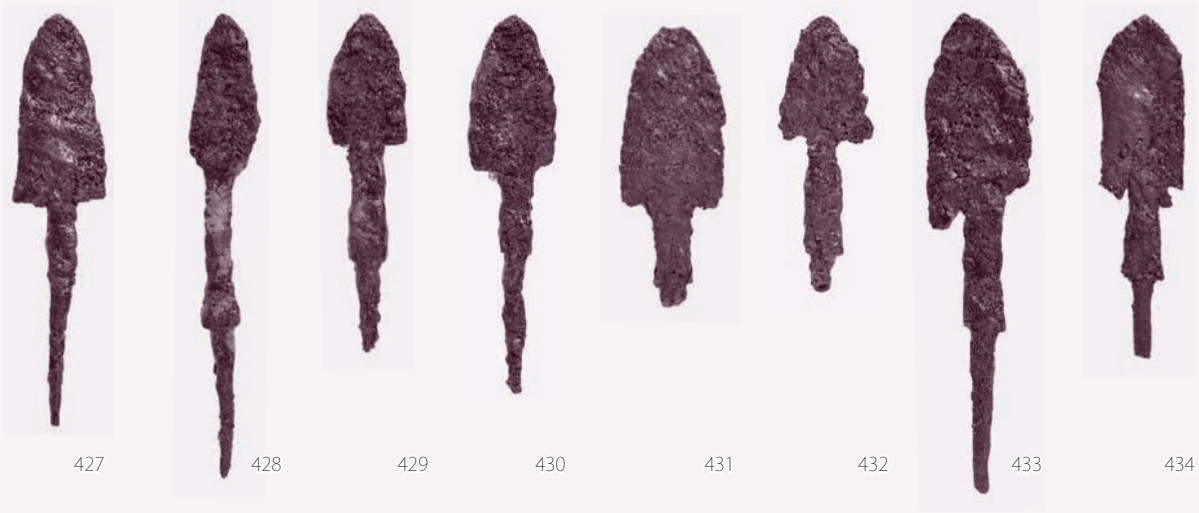
423

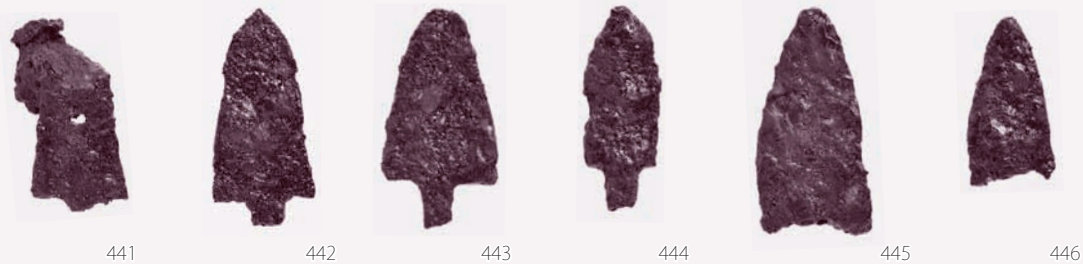
424

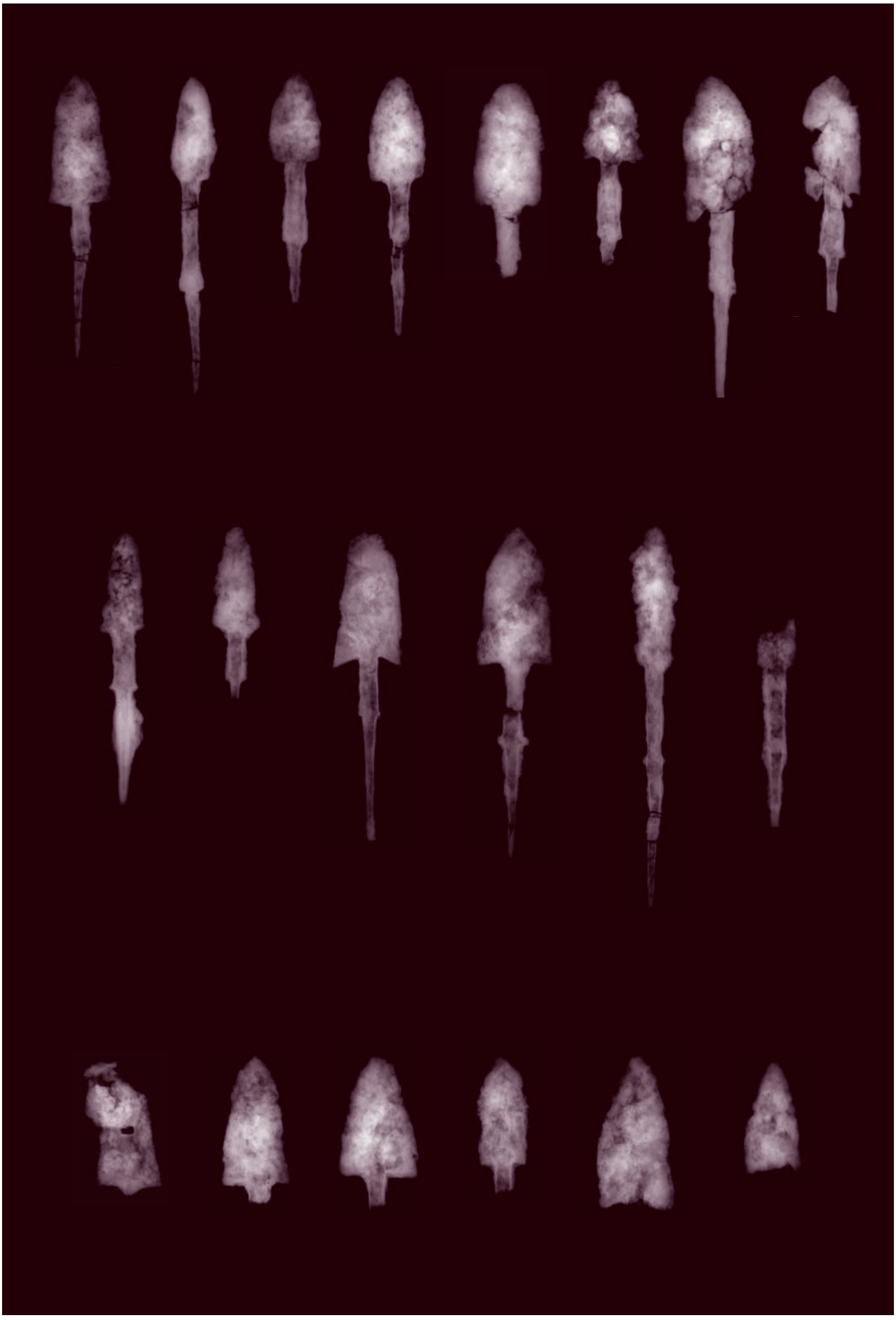
425

426

PL.34 中原第４号墳　遺物







PL.36 中原第４号墳　遺物

447

448

449

450

451

452

453

454

455

456

457

458

459

460

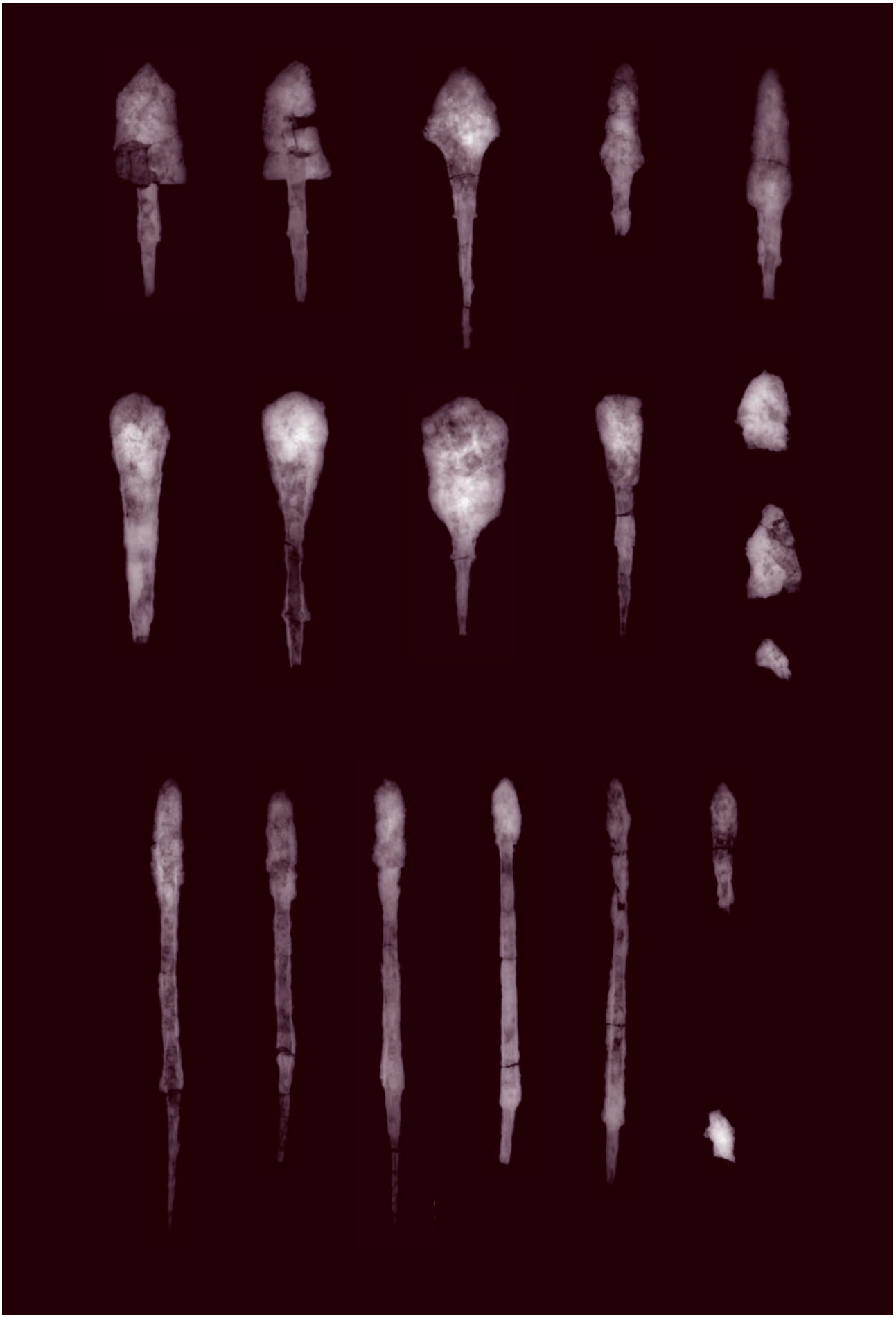
461

462

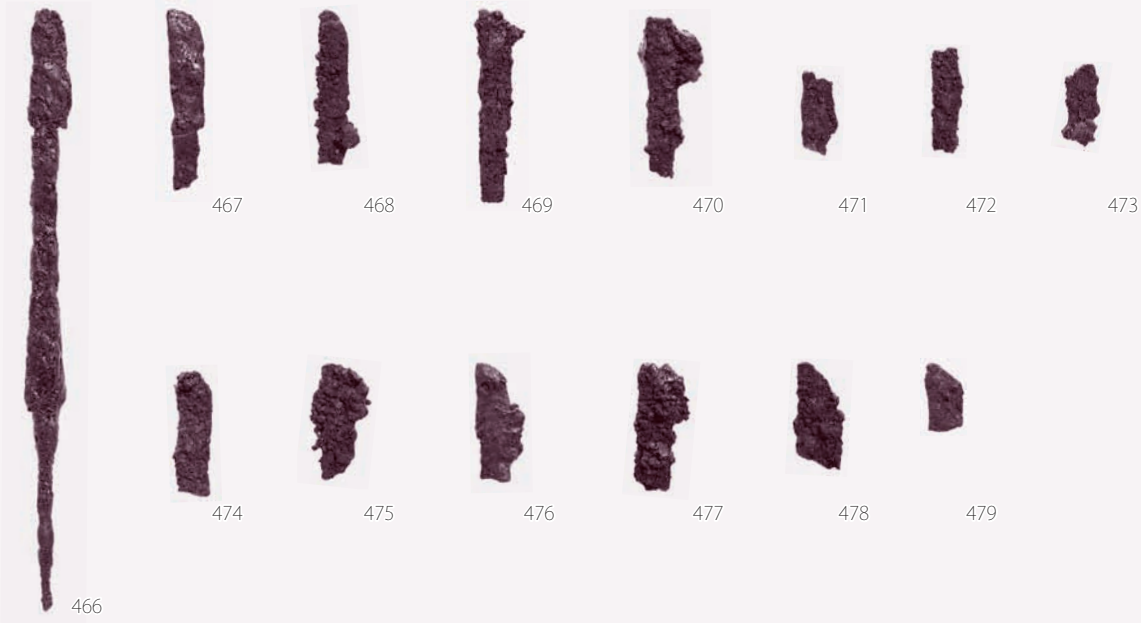
463

464

465



PL.38 中原第４号墳　遺物



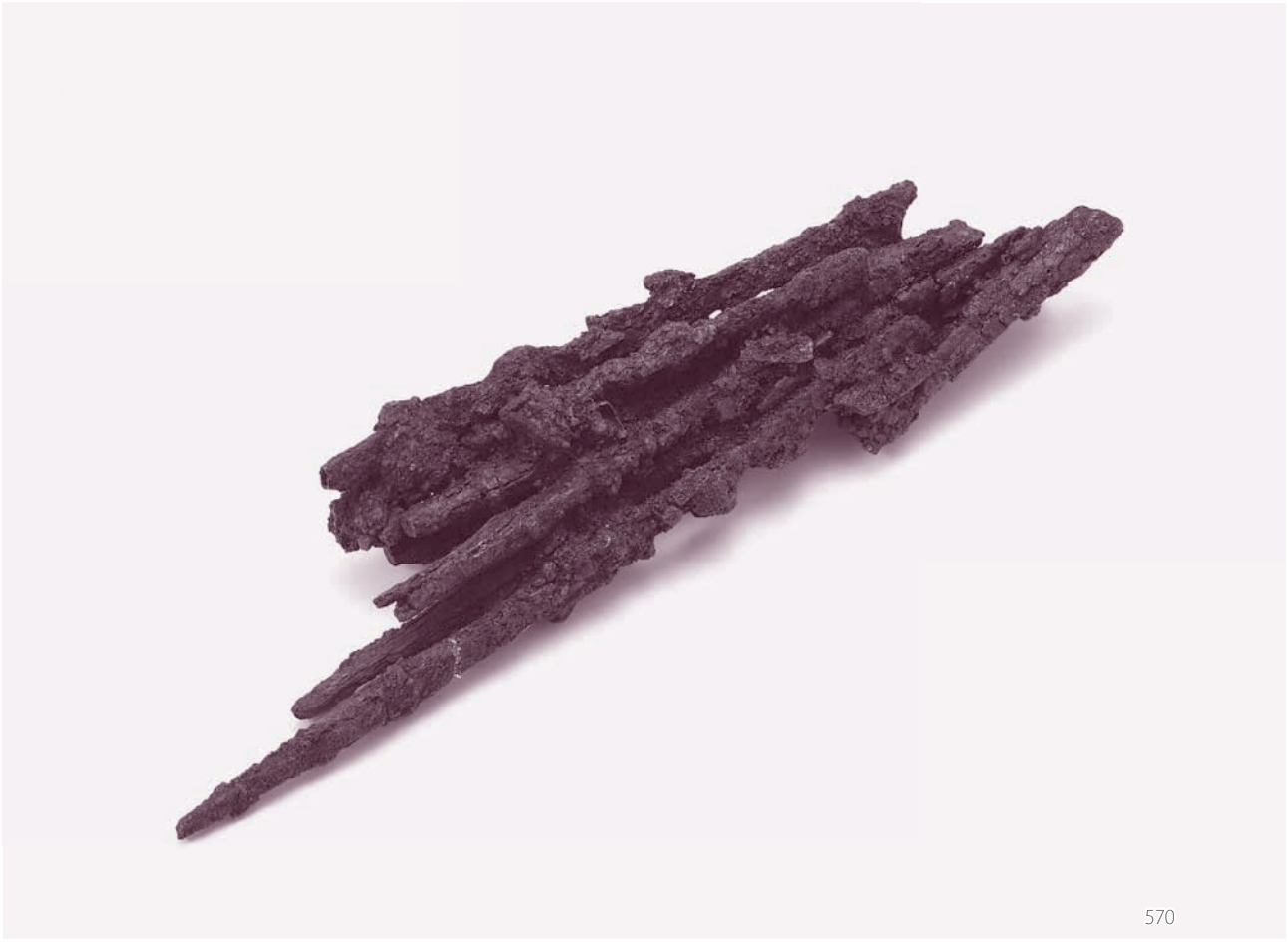
PL.40 中原第４号墳　遺物

568

568

PL.42 中原第４号墳　遺物

569



570

569

570

571　572

PL.44 中原第４号墳　遺物

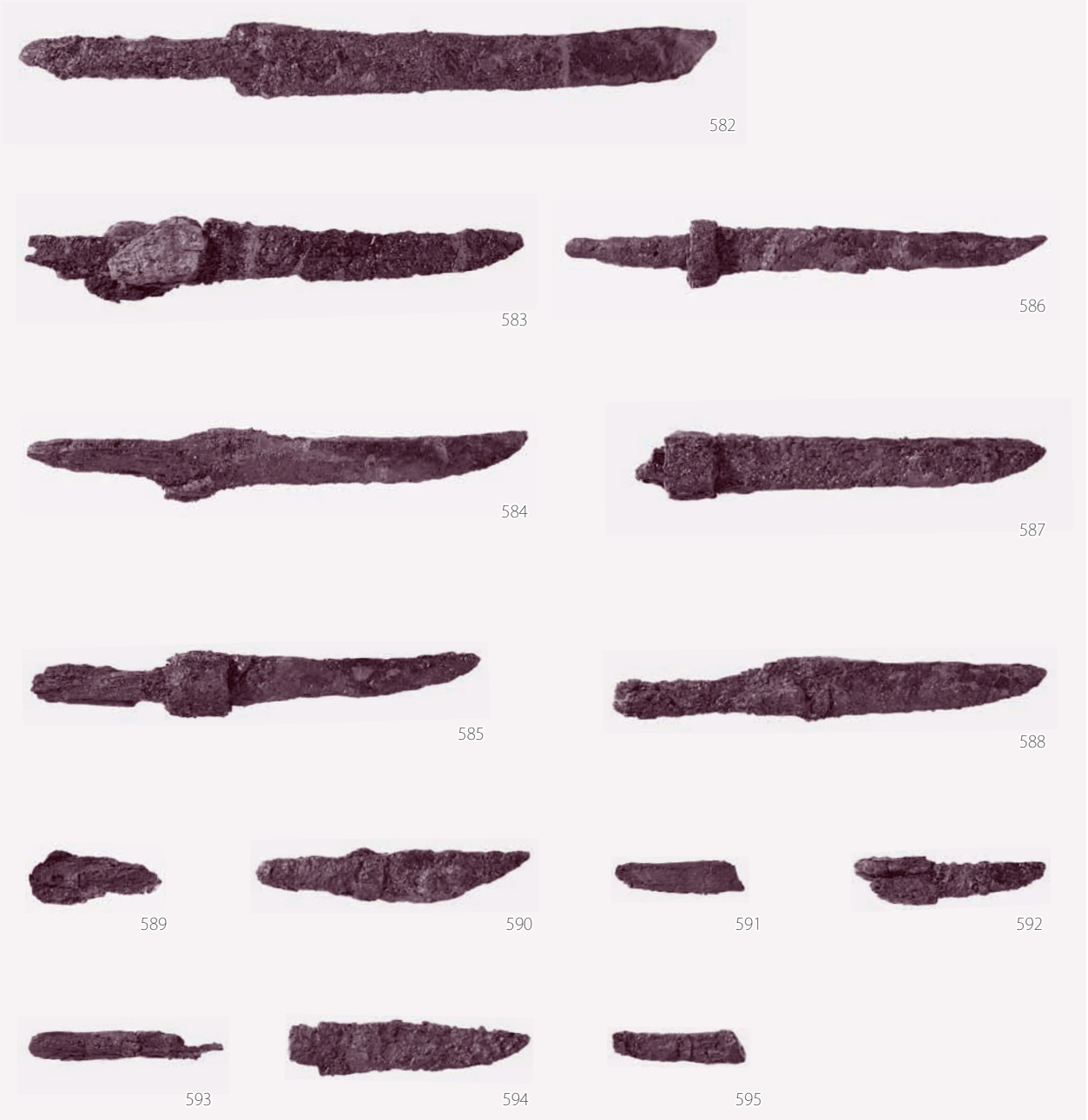
578

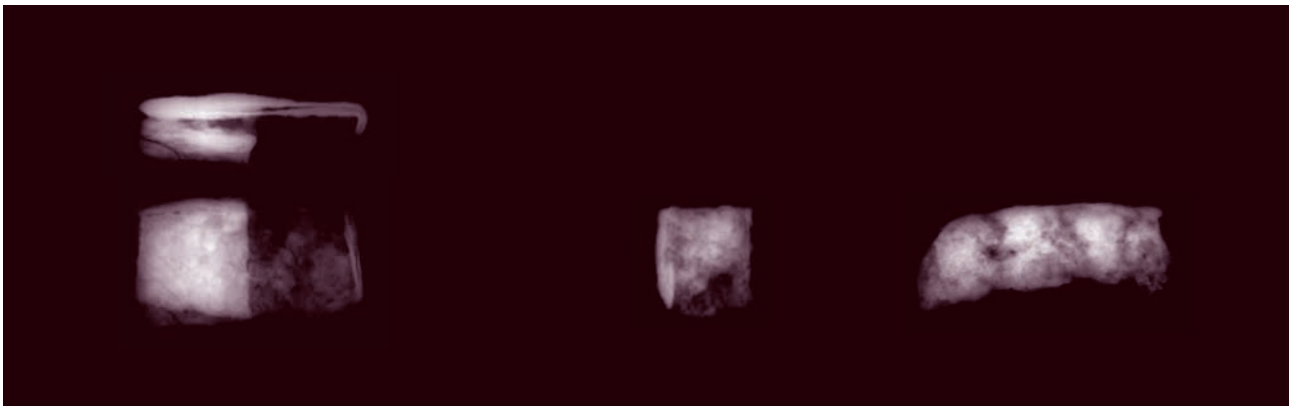
580

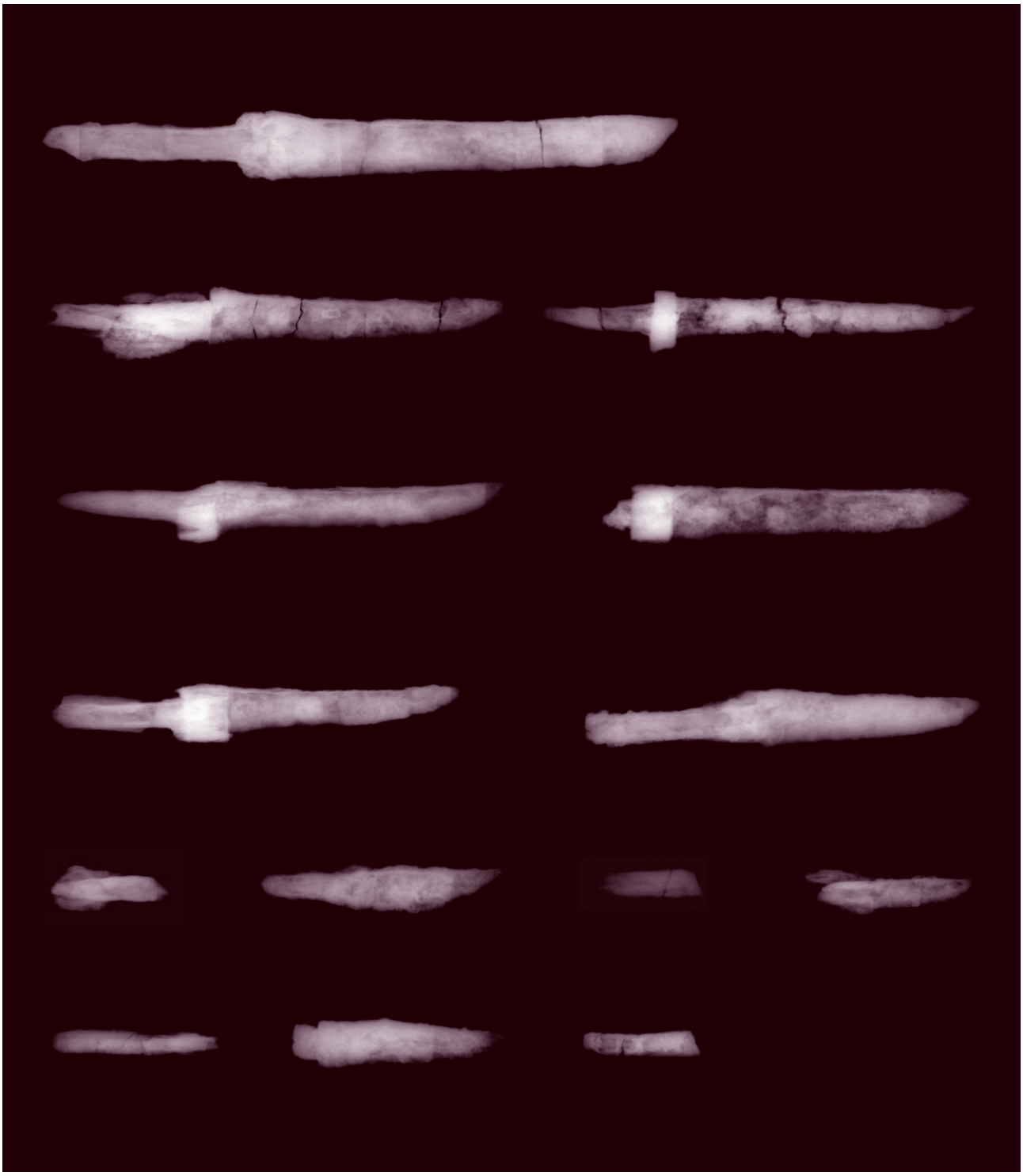
579

581

PL.46 中原第４号墳　遺物







PL.48 中原第４号墳　遺物

596

597

598

599

601

602

600

603

604

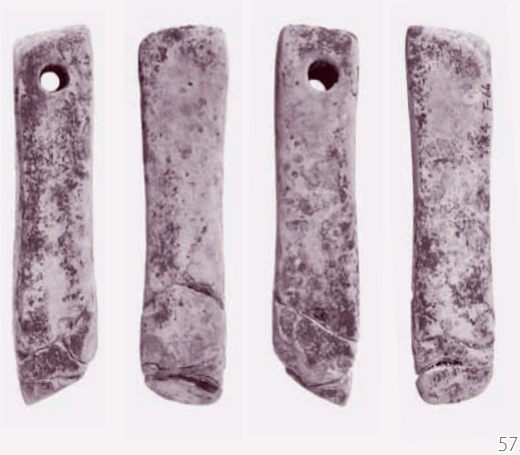
605

606

607

608

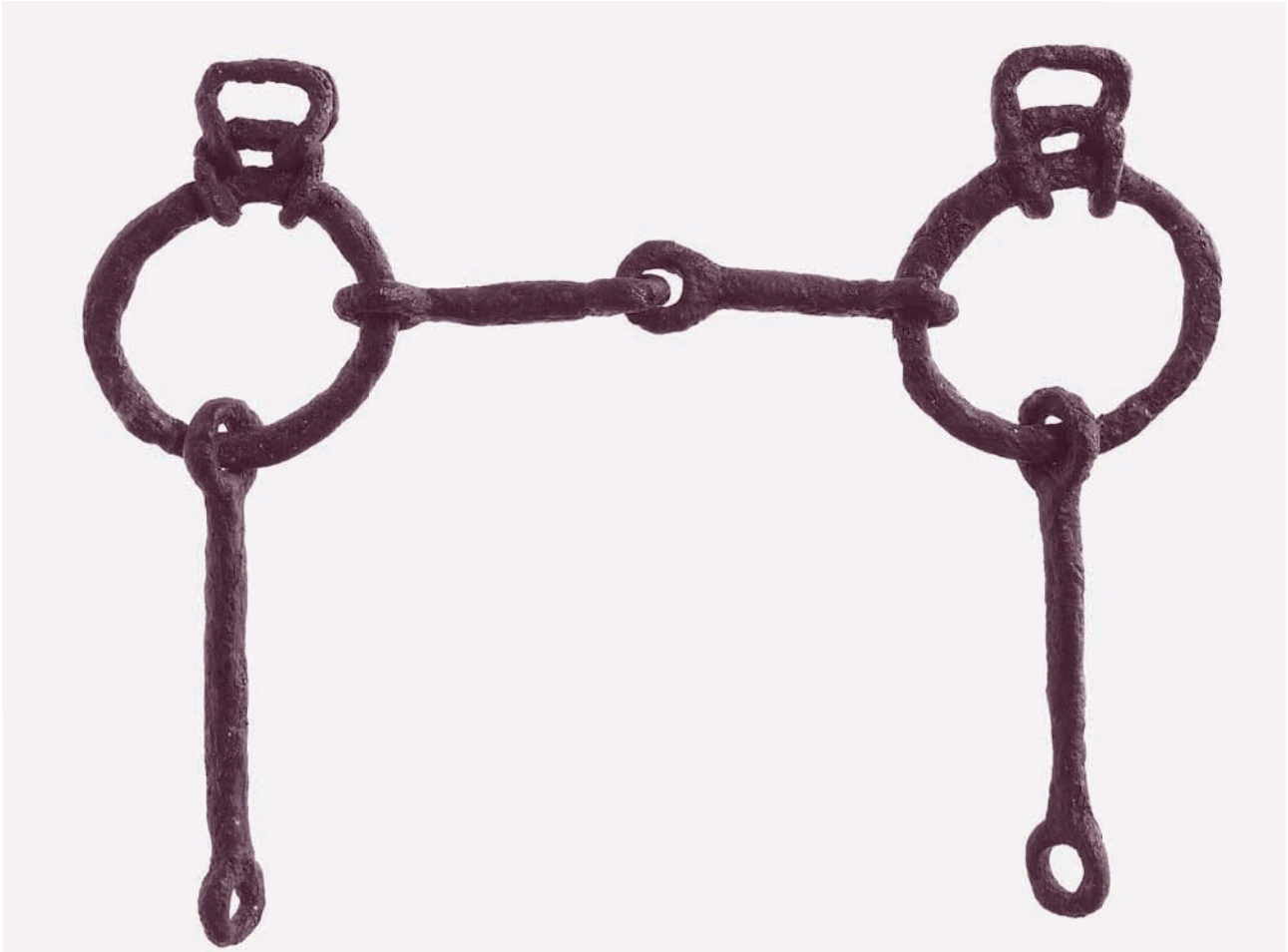
607（部分）



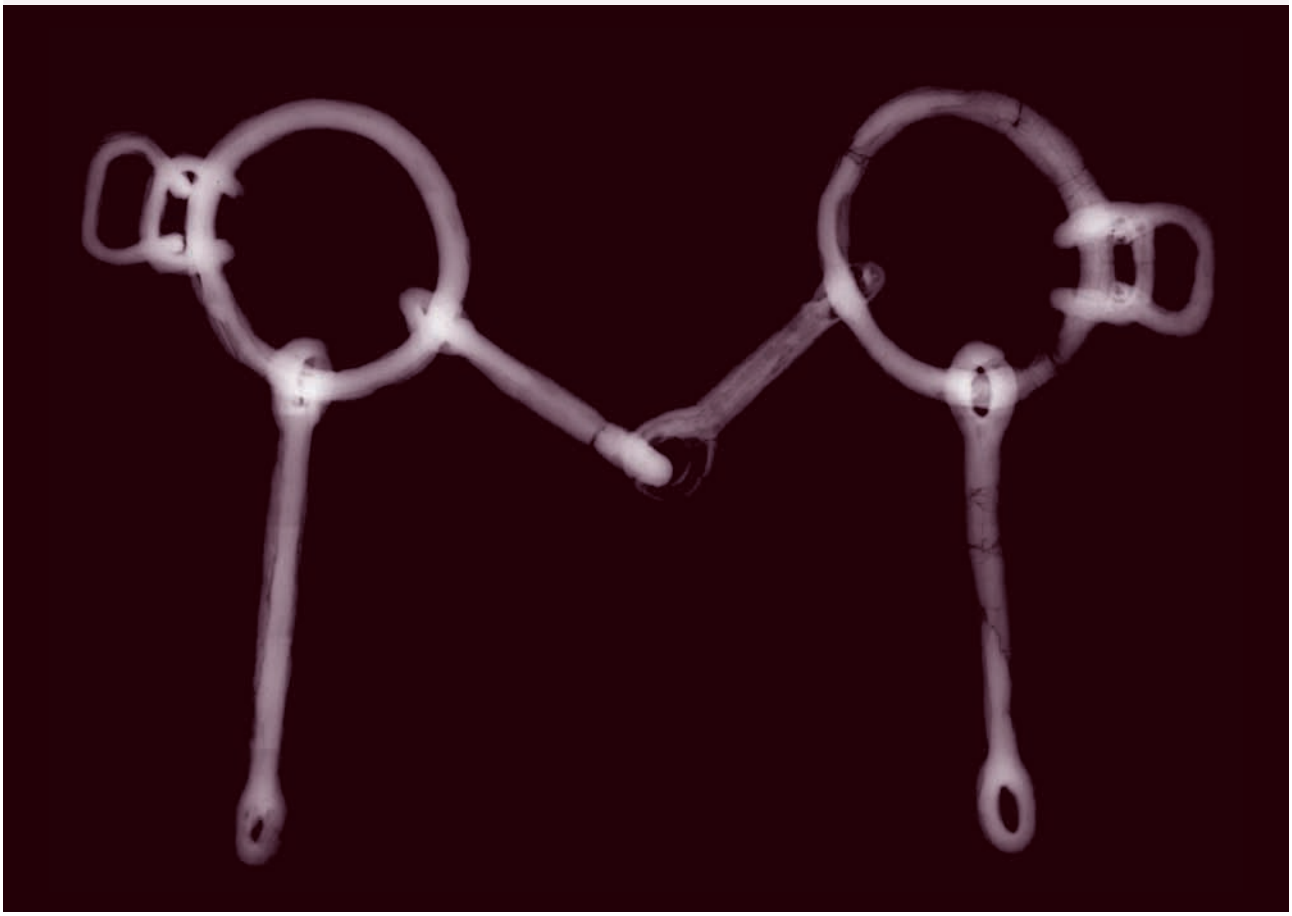
573

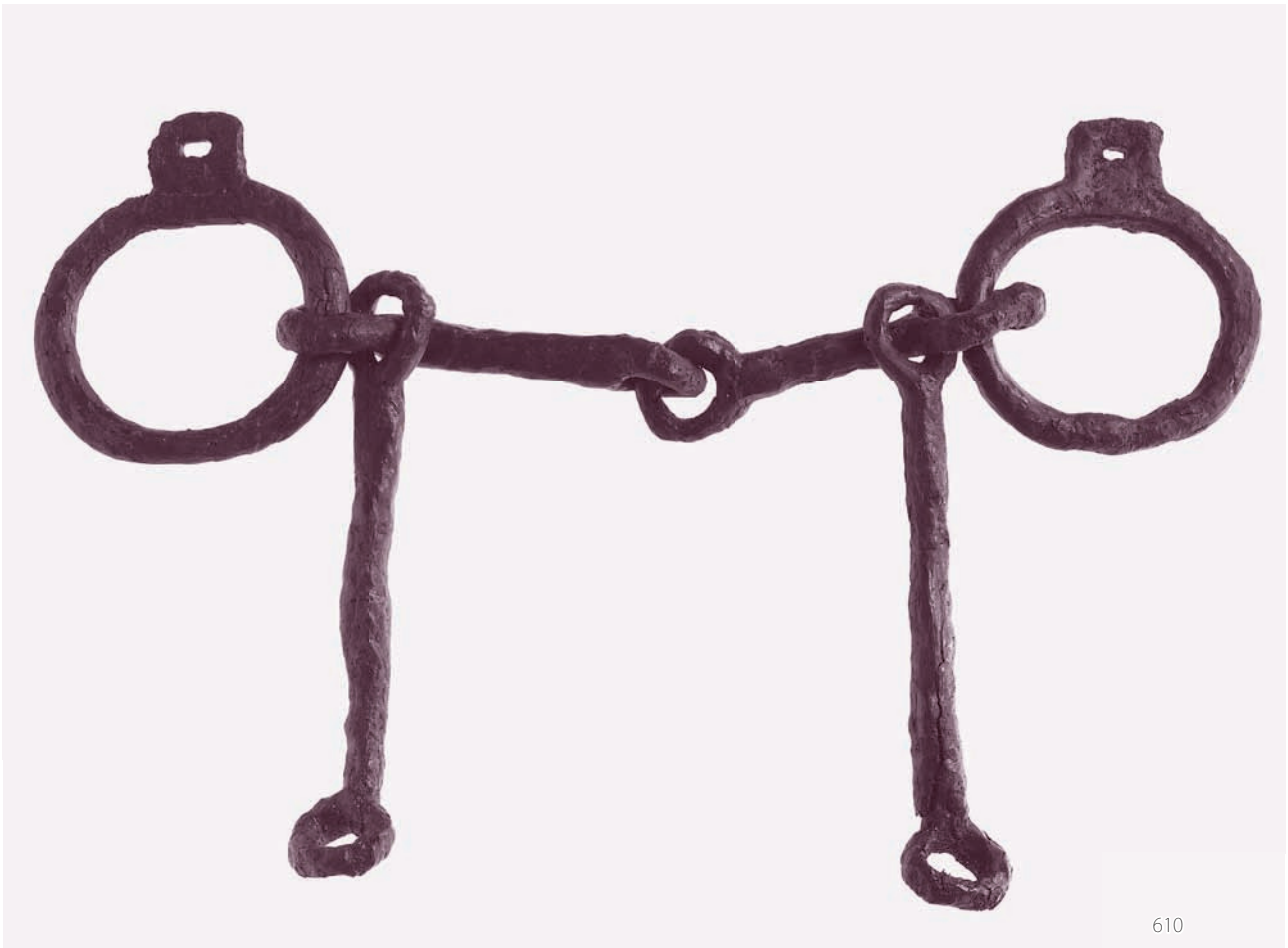
574

PL.50 中原第４号墳　遺物

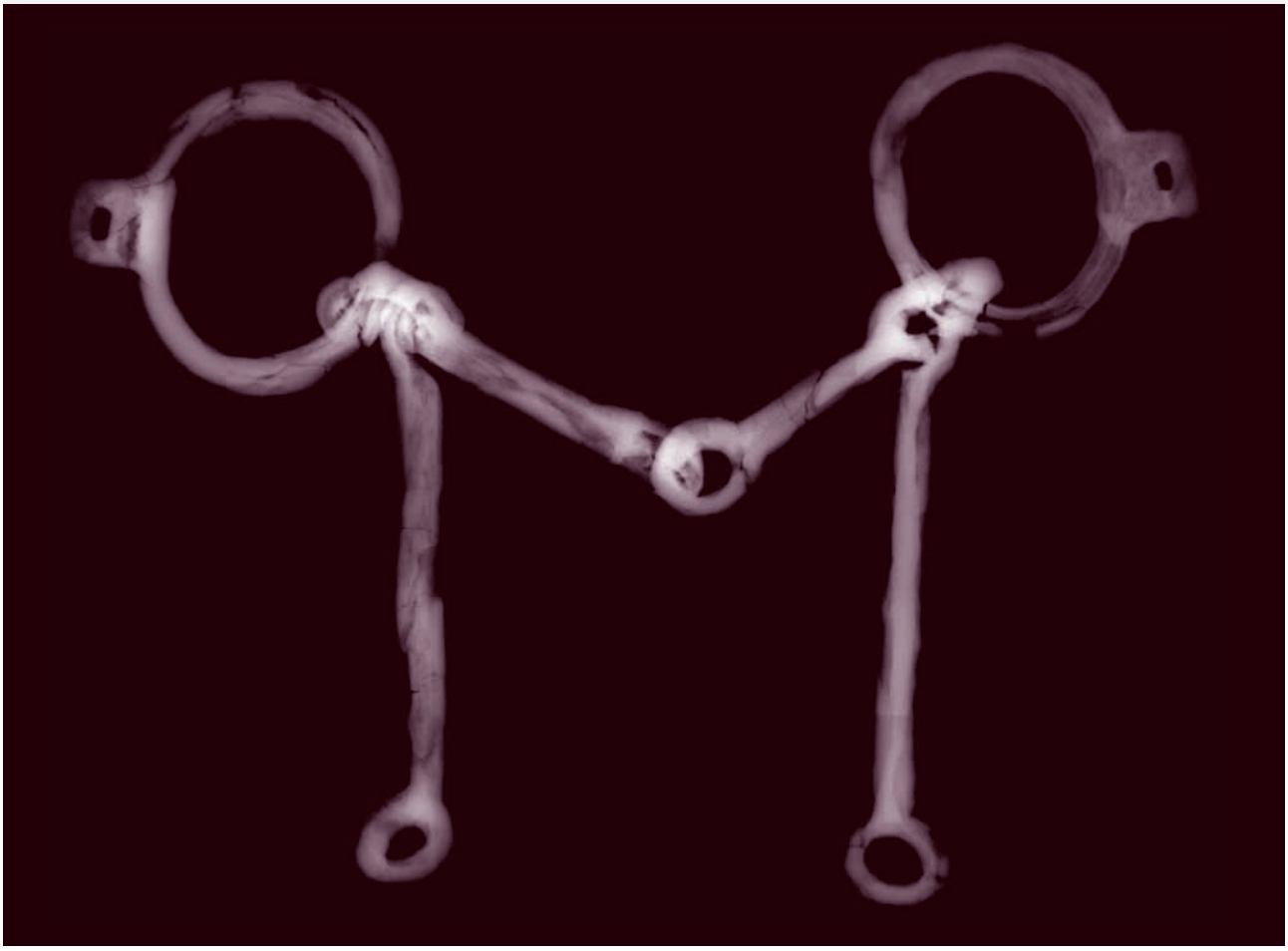


609

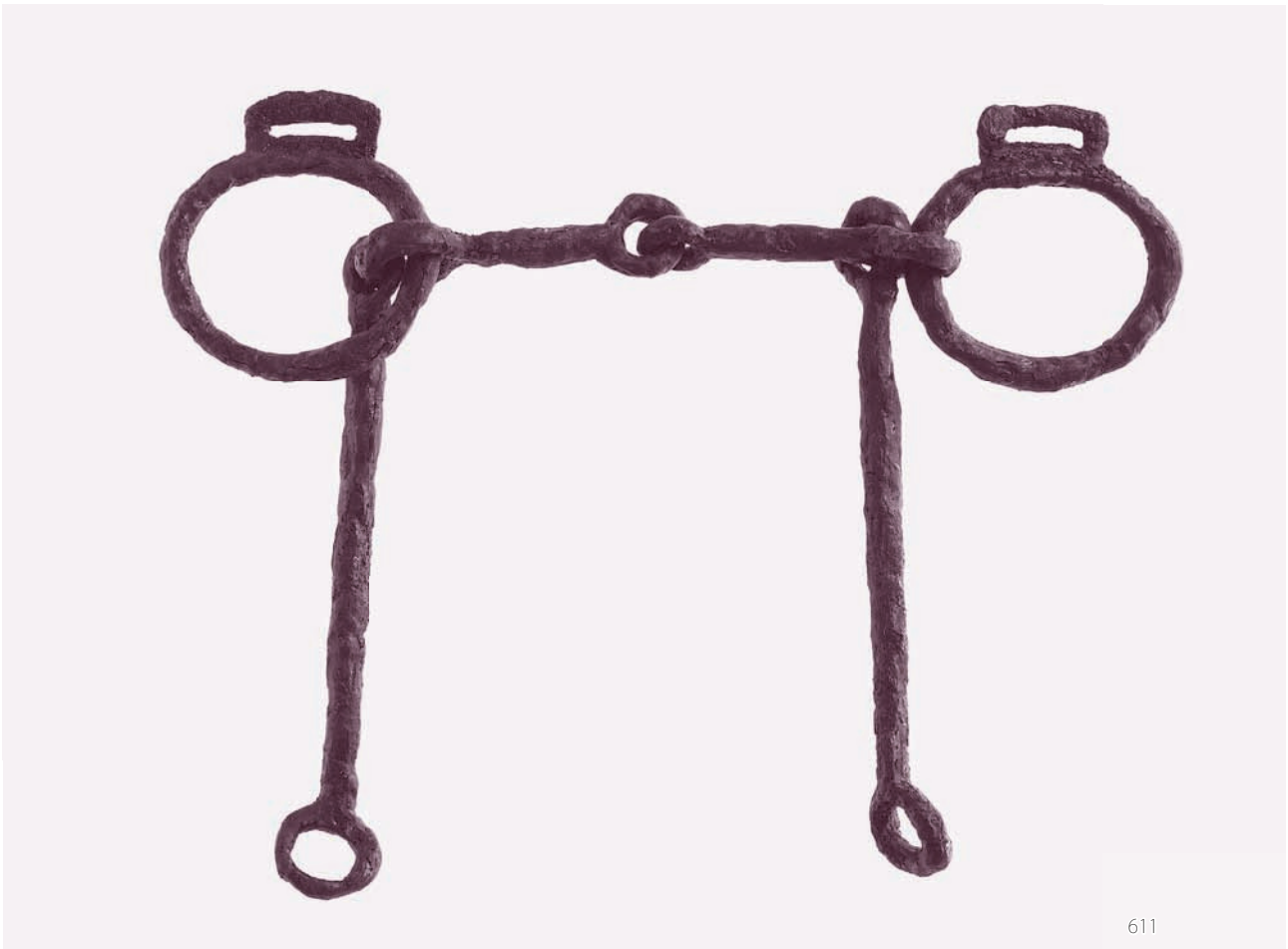




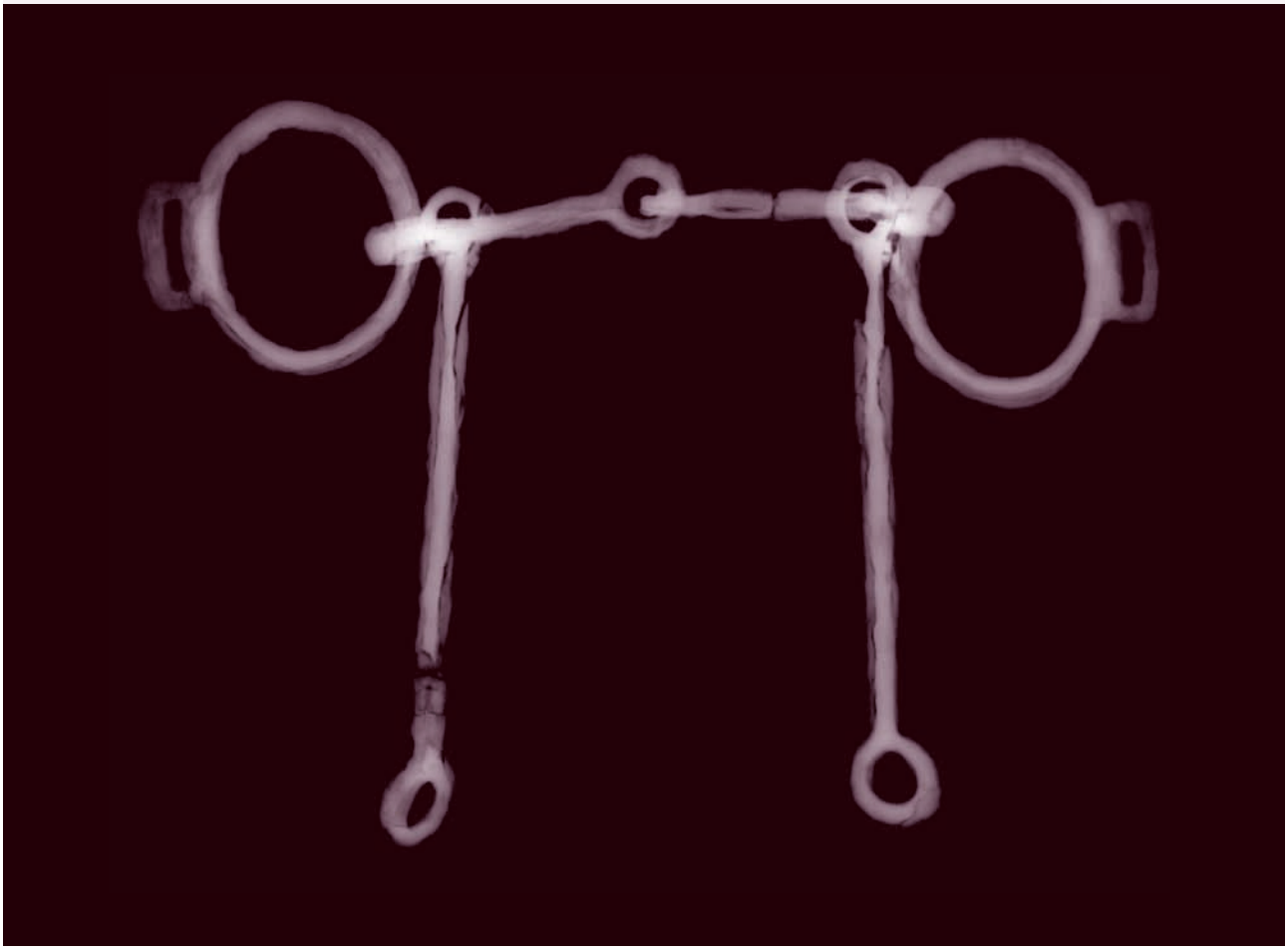
610



PL.52 中原第４号墳　遺物



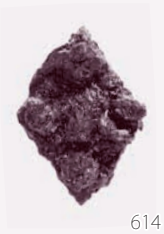
611



612

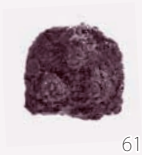
613

PL.54 中原第４号墳　遺物

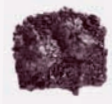

614

615

616


617

618


619

620

621

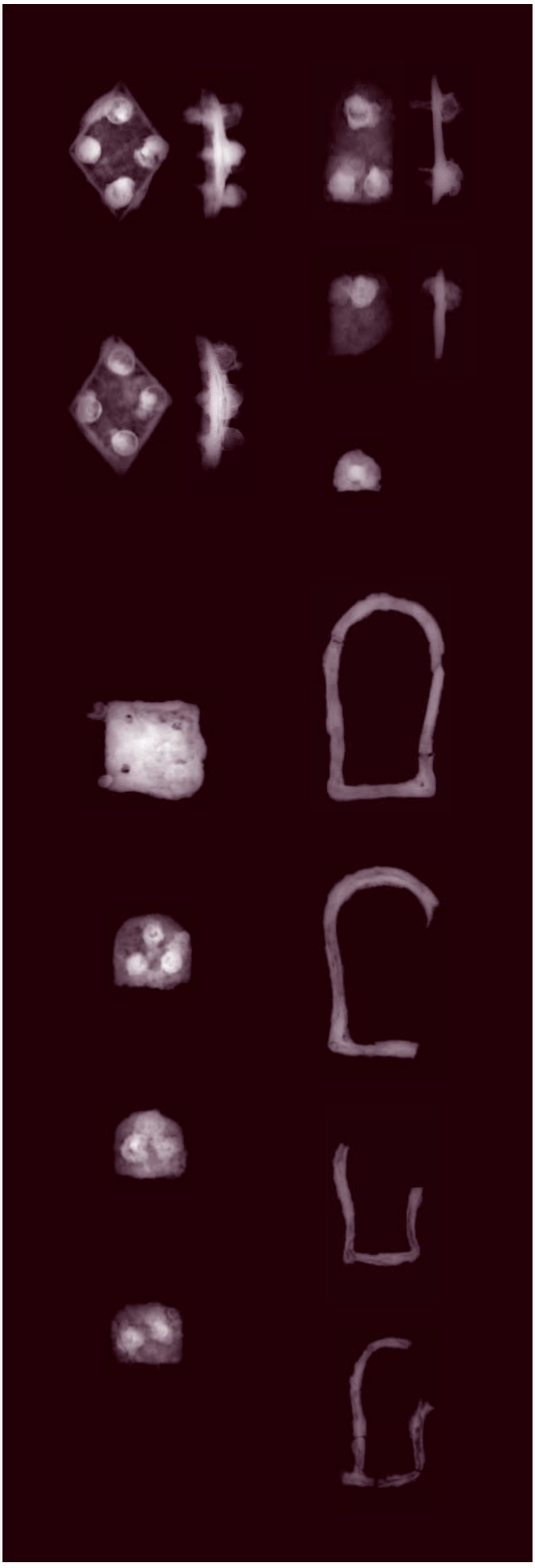
622

623

624

625

626



627

628

629

630

631

632

633

634

635

636

637

638

PL.56 中原第４号墳　遺物

639

640

641

642

643

644

645

646

647

648

649

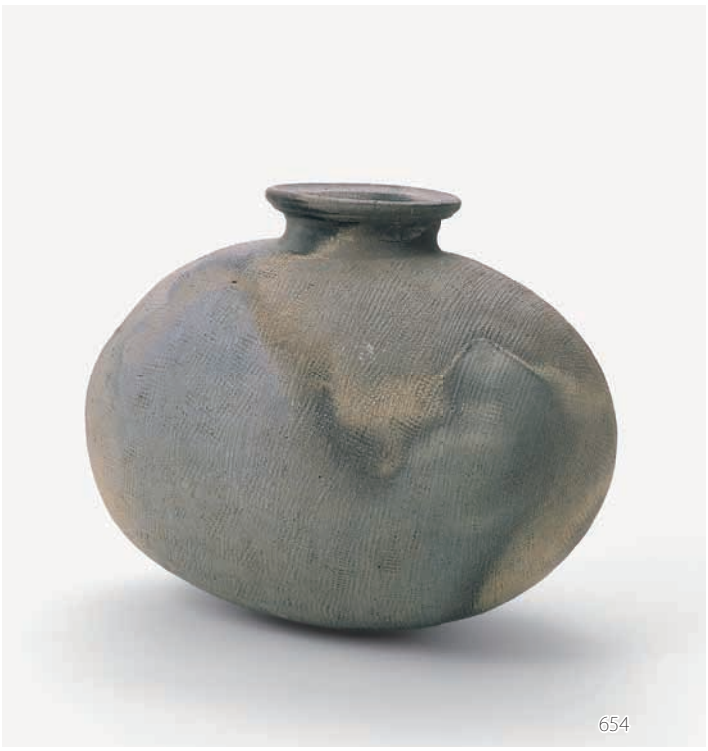
650

PL.58 中原第４号墳　遺物

652

651

653


654

655

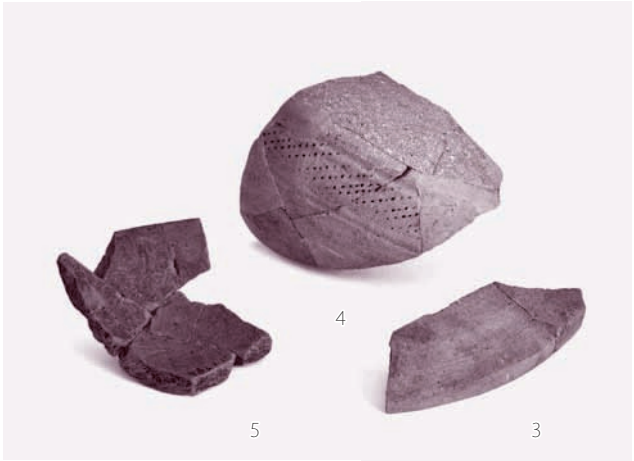
656

1．検出状況（南から）

4．周溝・墓坑完掘状況（南から）

2．石室第２次床面全景（南から）

3．石室第３次床面全景（南から）

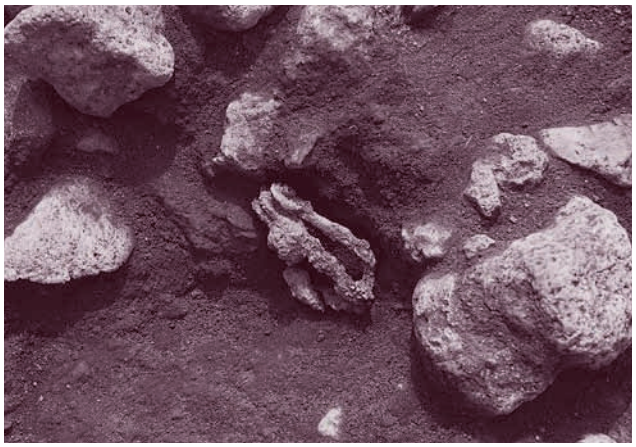


PL.60 中原第６号墳　調査

1．検出状況遠景（西から）

2．検出状況（南から）

3．石室残存状況（南から）

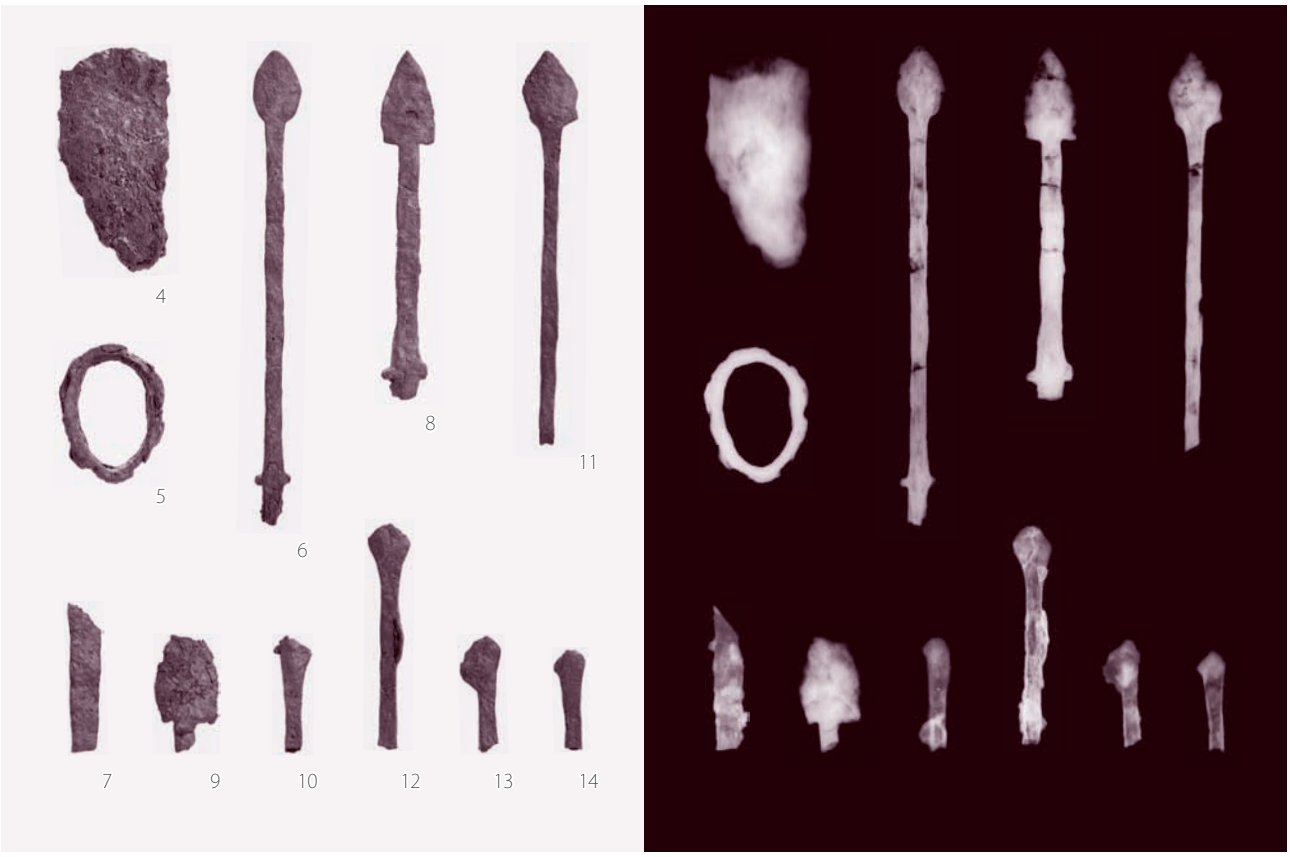


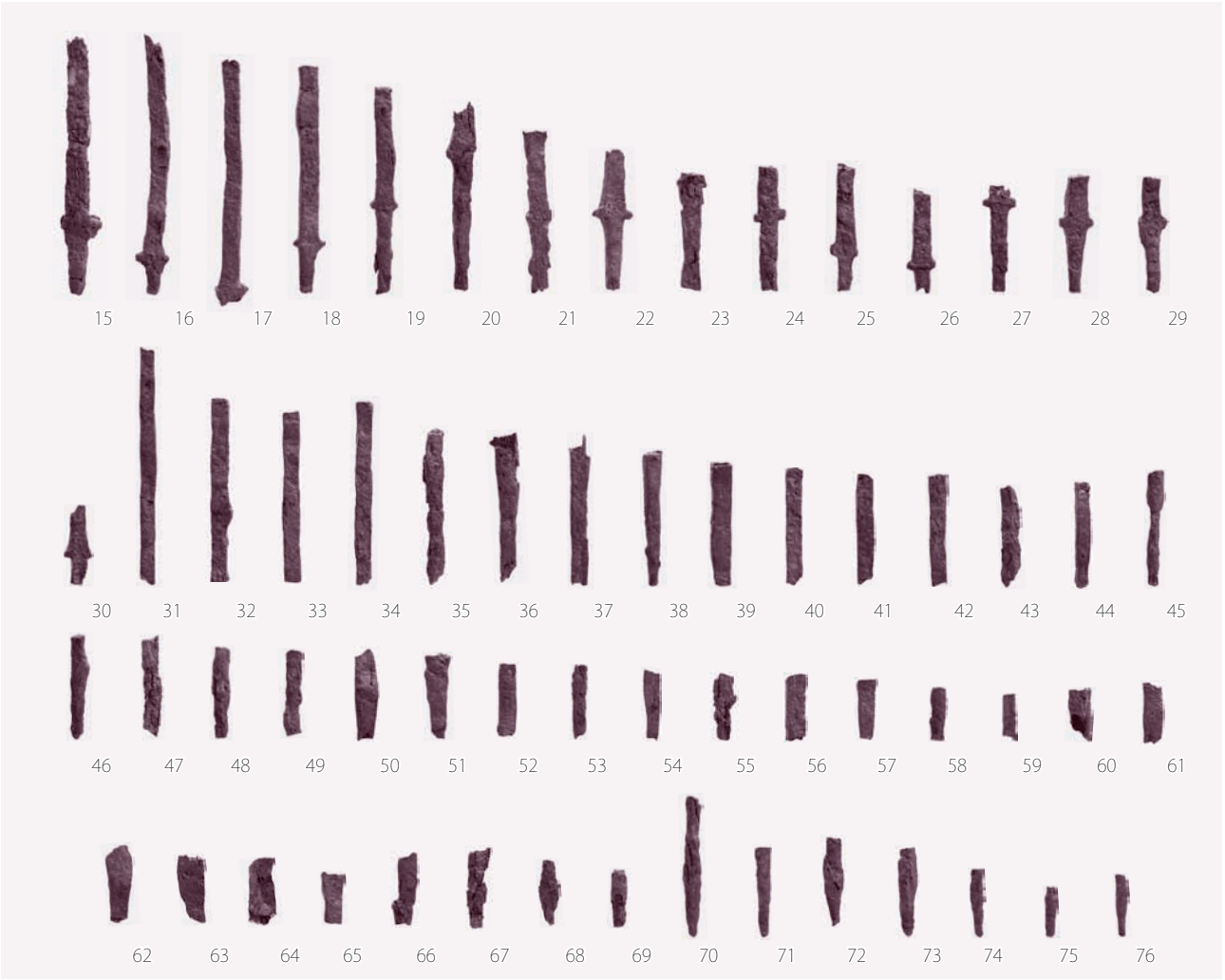
4．石室床面馬具（85）出土状況

5．周溝・墓坑完掘状況（南から）

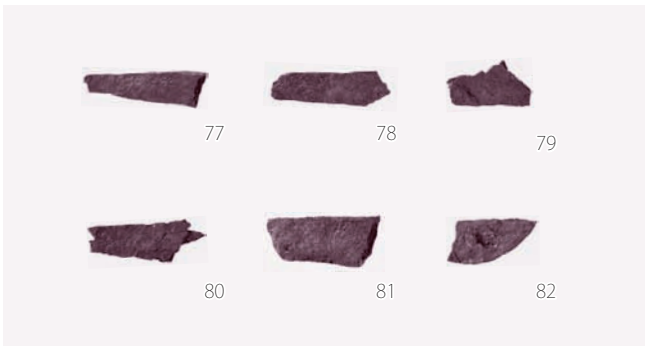
6．墓坑（南から）

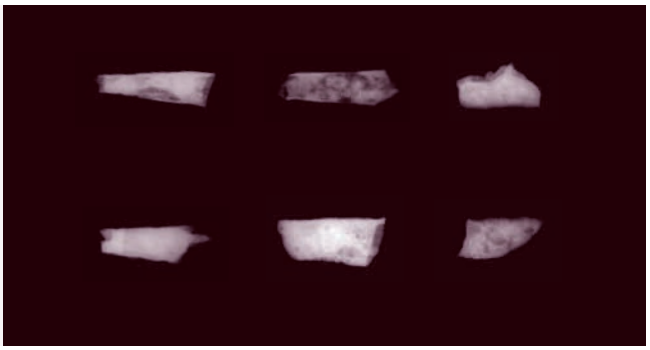
7．中原第５・６号墳　完掘全景（南から）

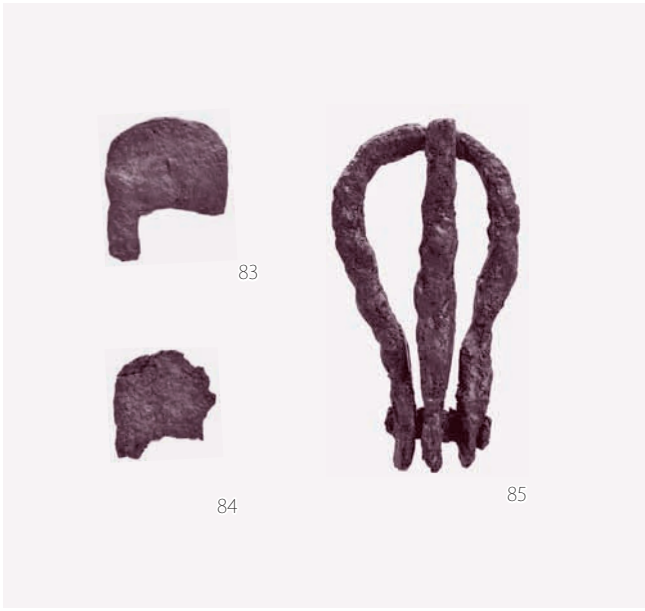

4
5
6
8
11
7
9
10
12
13
14

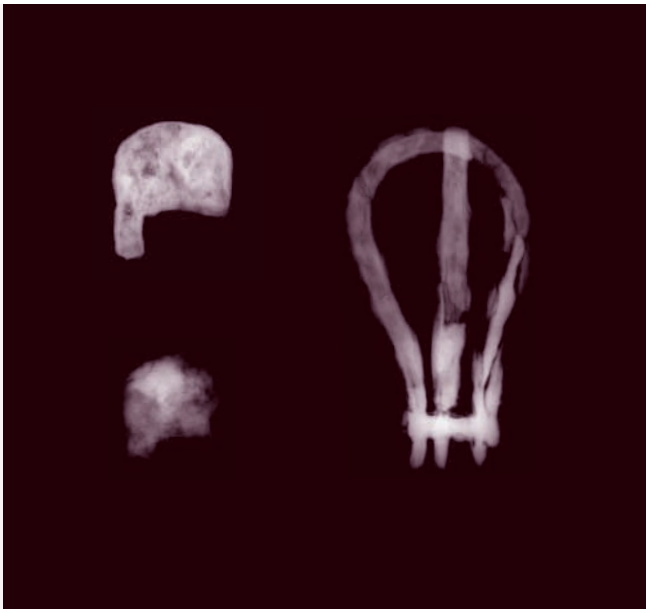

15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29
30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45
46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61
62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76

PL.62 中原第６号墳　遺物









報告書抄録

ふりがな	でんぼう なかはらこふんぐん
書名	伝法 中原古墳群
副書名	
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 59 集
編著者名	佐藤 祐樹（編著） 大谷 宏治・菊池 吉修・鈴木 一有・田村 朋美・田村 隆太郎・戸根 比呂子・藤村　翔・若林 美希・和田 達也（著）
編集機関	富士市教育委員会　（担当課：文化振興課）
所在地	〒 417-8601　静岡県富士市永田町 1 丁目 100 番地　　TEL　0545-55-2875
発行年月日	平成 28 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 古墳番号	北緯 東経	地区名	調査期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
なかはらだいさんごうふん 中原第 3 号墳	しずおかけん 静岡県 ふじし 富士市 でんぼう 伝法	22210	601	35°10′59.84068″ 138°40′16.86326″	土手内・中原 1 古墳群	19920414 ～ 19920428	1565	確認調査
なかはらだいよんごうふん 中原第 4 号墳			603	35°11′00.65505″ 138°40′17.55880″	第 3 地区	19920525 ～ 19920731	958.814	本発掘調査
なかはらだいごごうふん 中原第 5 号墳			604	35°11′05.27204″ 138°40′34.38887″	土手内・中原 2 古墳群	19930525 ～ 19930610	2000	確認調査
なかはらだいろくごうふん 中原第 6 号墳			605	35°11′06.47335″ 138°40′34.16663″	第 7 地区	19940516 ～ 19940712	1202.490	本発掘調査

所収遺跡名	遺跡番号	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
土手内・中原 1 古墳群	146	古墳群	古墳時代	古墳　4 基	3 号墳：耳環 2、武器（大刀 1・小刀 1・鉄鏃 31 以上）、農工具（刀子 4 以上）、須恵器（提瓶 1） 4 号墳：玉（勾玉 12・管玉 22・切子玉 24・棗玉 6・臼玉 8・丸玉 115・小玉 232）、武器（大刀 2・剣 1・鉄鏃 131 以上）、農工具（砥石 2・鎌 3 以上・鍬鋤先 4・刀子 10 以上・斧 3・鉇 5・鑿 1）、鍛冶具・生産用具等（鉄鉗 1・鑷子 1・針 14）、馬具（轡 3・鐙吊金具 2・帯飾金具 6・鋲留金具 2・雲珠？ 1・鉸具 4）、須恵器（坏蓋 3・坏身 9・廻 6・短頸壺 3・把手付碗 1・提瓶 5・横瓶 2）、土師器（坏 1） 5 号墳：武器（鉄鏃 1）、農工具（刀子 1）、須恵器（壺 1・坏蓋 1）、土師器（坏 1） 6 号墳：武器（大刀身片・鏃・鉄鏃 11 以上）、農工具（刀子 2 以上）、馬具（帯飾金具 2・鉸具 1）、須恵器（壺 1）	
土手内・中原 2 古墳群	147					

要　約

本書では、中原第 3 ～ 6 号墳の発掘調査の成果を報告する。

中原第 4 号墳の含まれる伝法古墳群は、南に駿河湾を臨む富士山南麓の緩斜面にひろがる古墳時代中期末頃から 8 世紀にかけての古墳群である。

古墳は横穴式石室を埋葬主体とする 6 世紀後半から 7 世紀にかけての築造と考えられ、鉄製品を含む副葬品が数多く出土した。

特に中原第 4 号墳は、合計 3 回の埋葬があったと考えられ、さらに未盗掘の石室であり、豊富な副葬品が出土した。そのなかで注目されるのが、東海地方で唯一の出土である鉄鉗（鍛冶具）や鍬鋤先や鑿、針などの生産用具の存在である。

被葬者は、鉄器生産や馬匹生産、食料生産など産業全体にかかわる技術者集団の統括者として、王権に奉仕した人物が想定される。

富士市埋蔵文化財調査報告　第 59 集

伝法 中原古墳群

発行年月日　平成 28 年 3 月 31 日

編集・発行　富士市教育委員会
〒 417-8601　静岡県富士市永田町一丁目 100 番地
TEL 0545-55-2875　FAX 0545-53-0789
E-mail:si-bunka@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本　文光堂印刷株式会社
〒 410-0871　静岡県沼津市西間門 68 番地の 1

（富士市行政資料登録番号　27-59）